柳田國男先生監修

菅江真澄集 第六

秋田叢書
別集

菅江眞澄翁遺墨（其十一）

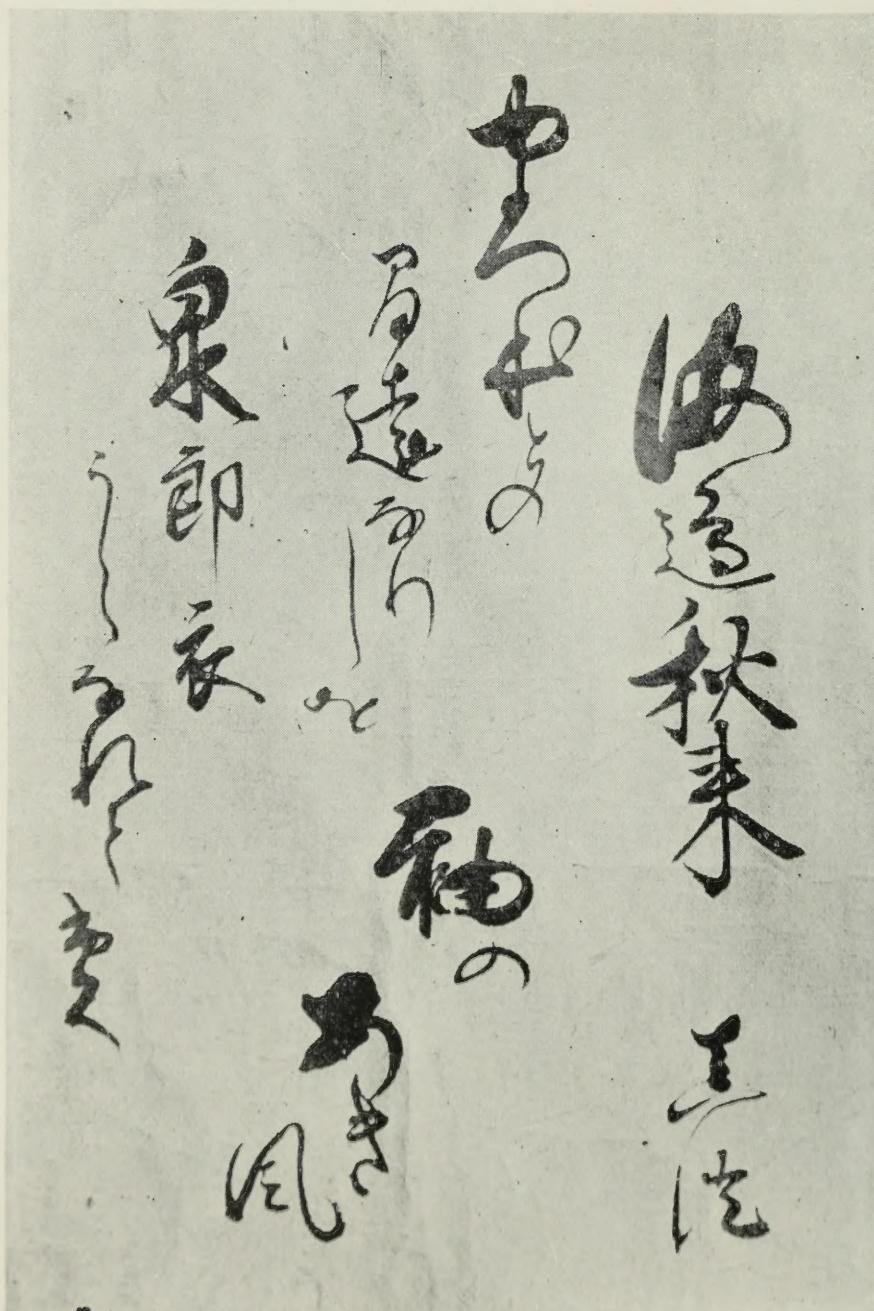
雄勝郡明治村大澤　上法經雄氏藏

庭残雪

庭草のいつかもへなむ消えやらて春の日をふる雪の寒けさ

眞　澄

菅江眞澄翁遺墨（其十二）

海邊秋來　まつほとの間遠なりしを泉郎衣うらなれてふく袖のあき風　眞澄

仙北郡六郷町　熊谷幸子氏藏

鳥屋長秋氏宛の眞澄翁書簡

北秋田郡大館町
栗盛教育圖書館所藏

うち絶ていと〳〵久しう音信も聞へ奉らす、なめけなるつみゆるしたらばりてよ。時しとてあさよひことに冴へわたりさふらへと、たれ〳〵もつゆ事ならさかやぎおはし侍らむかし。おのれもつゝみなら、こゝかしこはせめぐり、何くれと見聞さふらひしなかに、新城ノ荘獅子コの舞、布晒しなといへる處あり。そのさま、西行上人、望月の御牧の駒は寒からし布引山をきたとおもへば、とよめるがごとに、望月の牧の北にあたりてある布曳山のごとく、千反(ちむら)の布を引わたしたるがごとし。そか上へなる原をうそ市野といふ。そのよしは旭長者(ゆたか)とて世になきとみうどの跡あり、そこに朝草刈らむとて五六人りつれ來るに、棟高う豊饒なる家あまた軒をつらねて廣き里あり。市たちて男女群れ集り、なにくれとあきなひひさぐを見つゝ、いかなる里にやと見つゝありくに、霧なゝどの消行やうに人の聲のみ仄に耳に殘りて、みなかいけちてうせぬ。殘りしものら馬𠮟刈りをへ馬におふせて引出るに、いまだ草もからで彳むをいかにととへば、しか〳〵のよしをこたふ。さるときよりうそ市の市(名ヵ)あり、をりとしてさる事ありと山賤のかたれり。〇墨染櫻、大櫻の事もめづらしき事也、是は武藤氏の貴酬に記し遣し候。又高倉觀音にわらひ尉ノ面(おもかた)、はなびこの面、また貴徳ノ面のうら書に、「奉造立龍山寺舞樂面也德治二丁未三月日」と、めりごめし布の上に朱漆にて記したり。〇三代實錄十卷貞觀六年ノ條に在る以出羽國觀音寺預之定額一とありし其跡とおぼしくて、觀音寺といふ森に中興再建と見へて貞和三年ノ雕石三碑あり、そは妹川羽立にて濱飯塚とならびたり。妹川にて田ノ名は觀音寺といひ飯塚にては觀音地といふ。そこに在り〔し〕觀音を飯束山に祭る也。〇瑜伽寺は湯鹿股(ゆかまた)にやあらむか。また同書に在る秋田城下ノ賊地方口は合ノ口にて今の大口ならむ。姊刀は妹河の誤(あやまり)にや。今戸、古へは妹戸と云ひし、妹刀にや。また方上は分上ノ誤にて今の脇神ならむかし。〇大河ノ驛ノ東に大川の天神とて、出戸ノ北野に續て名高き天神杜あり。その傍に地藏堂あり、その堂に小野小町ノ土煉ノ古物ノ像あり。高サ二寸四五分、右の手に袋を持右の膝を立たり。左の膝を曲て左の手をつけたり。此像は天明三年の春、地藏堂主五十ノ目の市に佛に備ふ物買ひ出たりしとき、恩荷の浦人ものひさぎてあたへを乞ふ。堂主の僧侶是を見て孔(あし)方二筋をいたしてこれをもとむ。そのよしは、むかし小野に在りしもの小野にすみわびて、ゆかりあれば恩荷〔に〕うつりてとしへたりしか、恩荷も家ほろび、せむすべなうこれひとつ上祖より持來りしものから、寶は身のさちなりとてうりて旅に出しとなむ。近きころは、身やまふをねきことして人々しりきとなむ。いつも月の朔には、ことに緣日とて人まゐりけるとぞ。〇またおもひ出しまゝしるし侍る。南部ノ在にてあたらしき袷といふ事を新袷といふは、衣といふことまことに古語也。出羽の在にて物懸る竿をみんじよといふ、御衣架(みぞかけ)ならむ。前九年、後三年、都人入みちたれば、みやひこともものこりけるものか。めでたくあなかしこ〳〵。

別書と爲候得者乍恐菅園主へ宣御傳へ、此亂書も備貴覽度候。頓首

菅江眞澄

十一月廿八日

千穗ノ屋

長秋主

秋田叢書別集 菅江眞澄集第六 目次

口繪

菅江眞澄翁遺墨(其十一)
菅江眞澄翁遺墨(其十二)
鳥屋長秋氏宛の眞澄翁書翰

解題

本集に收載した菅江眞澄翁の著錄は左の十二種の紀行文である。其の本文は例に依りて翁の自筆原本より採錄し、又自筆原本を見ることの不可能なるものに限りて已むを得ず寫本より採錄した。また書中の寫生圖も同樣である。要之、出來る丈け忠實に翁の意圖を再現し、出來る丈け如實に其の面影を傳へやうと努力したことは既刊のものと同樣である。特に祕藏の原本を開放せられたる佐竹侯爵家、栗盛敎育團並に佐藤蔀氏、及び寫本を收藏せられる秋田圖書館並に中道等氏等に對して、會員各位と共に深厚の謝意を表する。

本集に收めた各紀行錄の遊歷年代は、寛政五年翁の年四十になるときから、寛政十一二年に至る前後七八年間に亘るものである。思想正に圓熟し、而も諸般の研究に彌が上にも新たなる感激を覺え、其の努力に脂の乘りきつたときであるから、各篇大に精采の漲つて居ることが看取される。但し此の間、特に本集に收錄したものは現在の青森縣地の紀行文で、中には記錄の缺けて傳はらざるもの、或は記錄したものゝ散迭したものもあるやと疑はるゝものもありて、舊南部領及び津輕領の間を來往した翁の全貌を窺知するには稍遺憾がないでもないが、然し一面からは翁の體力知力の全盛時代のことゝて、其の

記錄が大に尊重せらるべき價値を有するもの丶少くないこと、隨つて是等の遺著が今に傳へて益々光彩を發するものも決して尠くないことは當然である。故に其の地域に於てのみならず、其の蒐集其の觀察及び其の研究等は、鄕地に移しても等しく敎へられる點が少くない事を痛感する。此の點、秋田縣地の同好者からも等しく讃仰を捧げなければならぬ。

左に順を追ふて掲記すると、

舊南部領に屬するもの

まきのあさつゆ	東京市	佐竹侯爵家
をふちのまき		同
奧乃手風俗		同
淤遇濃冬隱	北秋田郡大館町	栗盛敎育團

舊津輕領に屬するもの

『津可呂の奧』（寫本）	東京市	中道等氏
『外濱奇勝』	青森市	佐藤部氏
雪乃母呂太奇		佐竹侯爵家
都介路迺遠地		同

邇辭貴迺波末　同
追柯呂能通度　同
作良かり赤葉かり　同
栖家の山（寫本）　秋田市　秋田圖書館

以上

まきのあさつゆ　一巻

前巻に收めた「於久能宇良〳〵」に續くもので、同寛政五年の秋七月から九月まで、下北郡田名部の町を根據として大畑、易國間、大間、奥戸等を來往して曾遊の邑里を訪ひ、各地に會つた歌友と盛んに唱和して居る。而して此の間の遊歴途上に於て大畑のねぶた流し、盂蘭盆會、田名部の祭典等は興味を以て描き、其他珍らしい見聞や土俗の採集に餘念がない。

をふちのまき　一巻

前篇に續て同年の冬三箇月の日記である。十一月下旬の雪の中を、久しく滯留した田名部を辭して太平洋岸に出で、小河原沼の邊の牧馬地方を過ぎて南下し、尾駮の牧を經て壺邑、石碑邑に至らんとし

たが、途中大風雪に逢ひてひどい難澁をなし、止むを得ず再び田名部に引返して大晦日までの記事である。從來此の地方邊僻の民衆生活、檜皮を碎いて燈芯とし、かすべの脂を燈油とする樣な生活は如何なる書物にも記錄されてない丈けに、此の一卷は、現在及び將來に深大な興味を投ずるものである。

奥乃手風俗　一卷

寬政六年の正月から三月末までの日記で、多くは田名部に在りて土地の行事風習等を丹念に漁り、得意の文と多くの彩畫とを以てこれを記錄したもので、民俗學の硏究者には多大の資料を提供するものである。因に此の一卷は、昭和五年二月眞澄遊覽記刊行會から柳田先生の校訂本と共に覆刻出版されて居る。

淤遇濃冬隱　一卷

此の一卷は寬政六年十月から十二月まで、田名部に滯在した冬の日記である。此の間眞澄翁は一旦同地を出發しやうとしたが友人等に留められて田名部滯在を決意し、相變らず附近を遊行して自然界の推移を眺め、又民間の行事等を細大となく記錄して居る。

翁の自序に寬政七年とあるも、これは明かに寬政六年の誤りである。それは、寬政八年の正月は淺蟲

にありて新年を迎へて居ることや、又本書に閏十一月とあるが、閏十一月は寛政六年であること等に依つて知られるのである。

『津可呂の奧』（寫本）　一卷

これは中道等氏が翁の自筆原本より筆寫せる寫本に據つたものである。元來四篇の日記を集めて一冊となしたもので題名はないが、中に「津可呂の奧」と題する一篇があるので、其の題名を以て今假りに此の一卷の名としたとのことである。四篇は次の如くである。

（一）　多分寛政七年であらう。三月廿二日に愈々舊南部領を去り馬門、狩場澤の關を經て津輕領に入り、小湊、淺蟲の間の村々を巡つて花を見たもの。

（二）　これも多分同年であらう十月十五日に青森を立つて、十一年ぶりに弘前、黑石地方に舊友を訪ね、又水木村にて毛內一家の人々及び齋藤規房等と知り、和歌の贈答應酬を繰返しつゝ、到る處に風流の交を訂し、十一月末に青森に還つたまでの日記である。

（三）　寛政八年元日を淺蟲溫泉に於て迎へて正月の行事を描き、同十三日から小湊に行つて小正月前後の風俗行事を書いて居る。

（四）　二月初め小湊を立つて弘前方面を遊歷し、又岩木山に登り其の麓の村々を巡りて春色を愛で

た日記である。

按ずるに翁の遺著に「小田の山もと」と題する一卷があるが、今其の所在は不明である。而して、同書には小田の黄金山考及び薄金の兜の事を記すとある（月出羽道仙北郡第十七卷）事を思へば、本書の原名が若しや「小田の山もと」ではないかと考へられる。記して後考を俟つ。

『外濱奇勝』　一卷

本書の原本は現在青森市佐藤耕氏の所藏であるが、佐藤氏の手に入るまでは相當の紆餘を經たものらしく、前後に所藏主と思はるゝ印章や加筆などによりて想像される。

本書も三種の紀行文を合綴したもので、標題は後人の附けたものらしい。

（一）寛政八年六月初めに弘前を出發して北津輕に遊んだ紀行で、往きは十三湖の東岸を經て龍飛崎の突端を巡りて小泊に出で、歸路は湖西の屛風山下を過て七月六日鰺ケ澤に著いた。其間阿倍氏の遺蹟を探り將門の傳說を語り、又十三の風光を細叙して居る。

（二）同年七月十六日深浦の湊を出て大間越に出で、卽ち十二年前に通つた海岸を逆に歩いて居る。綿密な風景圖が多く添へてある。

（三）此の紀行は寛政十年のものと考へられる。三月半過ぎに小湊を出て弘前に至り、五月半ば又

弘前を出で岩木山に入りて藥獵り暮らし、尾太鑛山の廢址を見て山上の杣小屋に山子と共に寢ね、又一昨年の冬見た暗門の瀧を眺めなどして深浦に下り、七月初め此處を出て赤石の宿に達して末が切れて居る。

雪乃母呂太奇　一卷

寬政八年の十一月廿三日深浦町を立つて岩木山の麓を巡り、十一月一日、同山奧に在る暗門の瀧を雪中に見た紀行である。雪中に此の瀑布を見ることは現時でさへ容易でない難路であるのに、此の冒險的な風流探檢には全く驚くの外ない。其の目的は冬の深山の風景を繪にするためであつたらうと謂はれて居る。下山して深浦に歸つたのは十一月十日である。

都介路迺遠地　一卷

寬政九年正月元日から五月初めまで深浦に滯在して、此の地の珍奇な正月や節句の行事を記し俗習を書いた。深浦を出てから岩木山の麓を巡りて弘前に至り、又藤崎に至りて高星丸の遺跡、唐絲姬の遺蹟を探り、水木村に至りては「あな久し」と毛內家に雅懷を述べ、六月朔日、夕顏關村の今氏に來て病に臥し筆を擱いて居る。

邇辭貴迺波末　一巻

自序の如く、數篇の小紀行文を順序もなく合綴したものである。（一）は藤崎、弘前邊の正月風景を叙し（二）は二月五所河原、（三）は「都介路迺遠地」に續いて、寛政九年六月十七日より藩命を帶びた醫師たちと同行して藥獵りに出足し、（四）阿遮羅山の邊を分け（五）は遠く蟹田、平舘邊を分けて採藥に從事した。（六）は（一）（二）と共に年次が不明であるが、八月半ば弘前を出て九月半迄鰺ケ澤に滯留し、詞友と交遊すると共に花山院忠長、狩笠、古燕等の事蹟を偲んで居る。

追柯呂能通度　一巻

二篇の日記と隨筆風の二小篇とを一册にしたものである。第一の日記は、正月元日から同廿日まで小湊近くの童子村に滯在して、入念にその土地の正月行事風習を記錄して居るもので、これに添へた十數葉の密畫と共に、土俗學上最も價値あるものゝ一つであらう。第二の日記は八月中、黑石よりしゝが澤のしゝ頭石を見物した記である。此の二篇の日記は恐らくは寛政十年のもので「外濱奇勝」第三篇の採藥紀行は此の兩篇の間に入るべきものゝ樣に思はれる。

隨筆風の第一は南部津輕地方の鰐漁を描き、第二は黑石附近出土の陶器に就いて考へて居る。

作良かり赤葉かり　一巻

「さくらかり」は津輕に名ある櫻の繪十葉を添へ、「もみぢかり」は、八月半ばから弘前、藤崎、黑石邊を來往して秋色を愛で、最後に紅葉の名所々々を數へ上げて居る。而して、色々の楓の葉摺りを添へたなどは如何にも眞澄翁らしい趣向である。

栖家の山（寫本）　一巻

此の寫本は現在秋田圖書館所藏のものであるが可成り亂暴な寫本である。然し自筆原本も不明であり又他の寫本も未だ發見されて居ないので、今は已むを得ず、此の寫本に幾分かの還元的改訂を加へて本集に收錄した次第である。尙挿畫も全部該寫本を撮影し製版したものであるが、其の說明文は又本文と同樣の亂暴さを以て筆寫されたものであるので、これにも所謂還元的改訂を施して繪の一隅に活字組となし、重複させておいた。讀者幸に諒せられたい。

本書には記年がないから明かでないが多分寬政十一年か二年であらう、四月半ばから五月二十日までの遊覽日記である。先づ靑森附近の春色を賞しつゝ史蹟を探り土俗を探覽し、更に南下して浪岡、水木等を經て黑石に著いて擱筆して居る。此道程は、眞澄翁が幾度となく往復して居るにも拘らず、一々

のものが新たな興味と歎賞とを以て描かれて居るのは全く敬服の外ない。

昭和八年八月　　　　　　編輯同人

まきのあさつゆ 秋

南部一
共七冊
南部

寛政五のとし秋のはしめより末まて、みちのおく北の海へたにあるおほはたさと、又いこんくまのうらつたひて、おほまのうまき、おくの戸のうまきのうまひくを見、言葉はかなう、みるにたらさるこゝろもて、まきのあさ露とはつけたり。

寛政五年下北半島田名部にて

昆布を産す

書月朔の日。此ころふりつゝきたる雨も、あしたのまをやみて、空は猶くもりかちに風たちぬれは、

秋來ぬと涼しくふけと誰宿もまた身にしらぬ袖の初風。

近き日こゝのあかたをたゝはやとおもへは、去年よりも、ものかたらひむつひたる人々に別も告てんと、おほはたのさとにいきてんとほりして、路のほとちかけれは、とくもいてたゝす、うまの貝吹ころものして、野原のみちに花咲たり。

露にけさほころひぬらし藤袴きにける秋の色を見よとて。

關根野を過れは、はまみちあるに、ゑひすめ刈るいとなみに、さゝやかのかりやを磯邊にひし／＼とたてならひたるは、松前に見たる紫苔、椶津倍におなし。けふは海あれにあれて、かるてふわさこそあらね、波に根こしてうちあくる海帶を浪かい分て拾ひ、馬うしに附てもてはこふは、みちもさりあへす曳たり。

一大畑に至る

霧深し

すむあまのやすく心もひろめ草治れる世の波にまかせて。
そのところになれは、田中なにかしかもとにやとつきぬ。
二日。きのふのことに小雨ふれり。寶國寺にとふらひて深阿上人とともにまとゐして、

雨中薄

ほしあへす月をもやとせむさし野の尾花か袖にかゝる村雨。

尋虫聲

こゝにわけかしこにとへと秋もまた淺茅の虫の聲そまれなる。
小夜ふかく、あるやよりかへる小橋の邊に、ほたるの集くを、
あき風に光も薄く吹れこし雨の螢のぬれてとふなり。
三日。寶國寺にあそひて夕つかた、雨ははれなから、ふかく霧こめて、砌の萩の、なかはほころひたるに虫のあはれに鳴を聞て、蟻光山てふやまの名を折句うたにして、めのまへのけしきをありのまゝによみてと人のいへれは、
きりのうちにかくろふ萩のうすくこきさかりや愛るむしのこゑ〳〵。
四日。あした日てりて晝より小雨ふりぬ。萩風といふことを、
こと草はふくとも見へす秋風のやとり定る庭の萩原。

小田のほとりに澤瀉の花あへかに見へしかは、たゝすみて、

　咲にけりした葉はうきてゐさら井になかるゝ水の面高の花。

五日。あしたくもりて、ひるつかた小雨そほふりてやかてはれぬ。夕くれて、けふりふかき宿の門にむしろしきて、衣擣つ女あり。このふん月、はしめて見たる月のおかしきかけに、殘る暑さもけたれて行〳〵なかめたり。

　蚊やり火のけふりいふせくたち出て月見かてらや衣うつらん。

六日。空はれて、暑さ、つちの中よりもいや増りて、いな、ひえのほ出て、やはしき世にはあらしかしと、つとふ人よろこひぬ。田上初鳫。

　めつらしなけふやきそむる初鳫の田面のほなみよると鳴聲。

いまたくれはてぬに、わらはは、むさかなゝさか、あるは丈斗の棹のうれにいろ繪かいたる、けたなる火ともしに七夕祭としるして、そか上に小笹薄なとさしつかね手ことにさゝけ持て、「ねぶたもなかれよ、豆の葉もとゞまれ、苧がら〳〵。」とはやし、つゝみ、笛に聲とよむ斗ありくは、いてはの國秋田の山賤のわらはは、麻苧のからをおのれ〳〵かとしの數に折て、藤豆といふ、野にはふ、かつらに卷ゆひにゆひて、この夜一夜枕としてふし、あくる七日のあした、河にうちなかすよりこそおこりていへと、おなし國なから久保田の里なとには、唯燈た

かくさゝけありけと、さるをこなひもせさりけり。飽田郡にては、ねふりなかしといへと、こゝにては、ねぶたなかしといふめる。はた、ねふたにやあらんか、ねむたさかけるにやと人のあらかひ語るに、「をがら〳〵と、はやしもて行を廬のすたれこしに見つゝ、ねむたさいふことをかくして、

あすは又まれの一夜にふたりねむたなはたつめやうれしかるらん。

七日。朝とく雨のふれれは、

雨にけふぬれ渡るとも銀浪こよひは袖をほし合のそら。

夕霧ふかけれは、なかめわひて、

秋風に天の河きり吹はれよ逢瀬まよはん妻むかひ舟。

こよひも、火ともしたかやかにふりかさして童のゝしりありけと、過し夜よりは、ひのかけおとりたり。此灯火のかけ、寺々のたか燈籠の松杉のうれにかゝやき、軒毎には、なぬか盆とて灯をかけたるに、螢の光、夕月のおかしさとめてて小夜中まてありて、戯れうたに「ねふたなかし、てふことを、

あなねふたなかしと秋の一夜をもおもはて星や祭るなるらん。

人々、こよひの歌よまん、銀河いつこをなかるゝや、いまは空かいけちくもりたれと、こゝろ

朝霧ふかく

あてにあふきて夜半も過ん頃、

　棚機のあまの河なみうつつとも夢ともわかてこよひあけなん。

八日。とみなることとて、人のことつてしておこせたれは、田名部にかへらんと馬にていてたつ。路は、朝霧いとくらきまて四方をへたてて、うなの邊ともさたかならねと、浪の音聞へたり。

　まかせすはそこともしらしのるこまの行もおほつか波のうき霧。

さと吹はま風にいさなはれて餘波なうはれて、行するゑも遠く見やられたり。野小路といふ濱ひさしに、いわしとるなやのあるほとりの、草むらのなかに捨たる槌のありたりけるを、

　秋もはや夜さむのころも擣つつちをいさなき海士やわすれおきけん。

成章、清茂に邂逅す

鵜澤といふはまみちに、すんさあまたつれたる人の馬にてとく來るは、たそそと思ふに、近よれは成章、清茂のふたりのぬしなり。こはいかになと、かたらひぬ。清茂は、於呂之夜阿の人來るにたつさはりて松前の島わたりして、きのふけふかへりきけるほともあらて、又鈕のみなと邊に、おほやけのことにつきて行けるとて、此ふたりのぬしたちのおもむけるとなん。さりけれは、とみにむちしてわかるゝにのそみて、なりあきらへ「行かふ駒中の別を」といひやり、きよもちには、「月日へて逢見しほともなみ遠く」といひ捨て、玉くしけふた

麥をはせに、、

田名部歸著

山の神のしどき山の神のはしこ

午後に毒流る小川

ゝひあはんことをねんして、はる〳〵とへたたりぬ。關根てふ村をくれは、はせに小麥ゆひあけてほしたるかたはらに、梢おしたはめ、蝦夷のしまをりの衣かけたるか、風にしふかれてひるかへりたり。

たなはたにかしつる海士のぬれ衣ひるまに風の返す也けり。

九日。この田なへも、あさ夕霧いつもたちぬれと、山の神のしごき、山の神のはしこ多けれは、はたつものもよくみのりなんと人のいへり。いな葉、粟葉の、雪のことくものかゝるをしときといひ、松前にきつねむすひといひ、佐渡の島にうさきむすひといふものの粟の葉にあるを、山の神のはしとも、はしこともいひて、とよとしのさとしとか。

十日。あした雨ふり、ひるはれたり。霧にこめられたる夕顔の咲かゝりたる籬根、ほのかに見やらるゝを、

わきて此いろもへたてす咲にけり霧のまかきを夕かほの花。

ひるつかた、赤阪埜に草花見にとて川島、中嶋なと行、坂にのほらんとほりして左の草の中をほそくなかるゝを、ひるよりは毒あり、な呑そと、むかしよりいひつたふたるとなん。

午の貝ふきもなかさはわすれ水音はきくとも人なむすひそ。

阿加左可といふ名を、

高野山むすはぬ水の外に又阿迦さかまきてみなはなかるゝ。

野分吹きて

野分はしたなう吹て、眞萩、葛はなひとつにみたれあひて、ちるへうふしなひきたり。

眞葛はふ萩のにしきのうら見せていくむらかけて野分ふく也。

また大畑に

十一日。大畠に行に、きのふのこと風吹けるに、百舌鳥の聲うちしきるかたは桃山といふ。

秋風につはさふかれてもすの鳴梢さひしき山のかけ路。

柳ふたもと、みもと、さしたるか、茂りあひたるあり。

みちのへの井くゐの柳うらかれていまはちるかに秋風そふく。

盆市

けふの市路に、たま祭のもうけの具それ〳〵にかひて、何くれともてはこふに、うし、うまの行かひ、みちもさりあへす引たり。

十二日。風いや寒く、わたあつき衣かさねきて、なりはひをうらふ。

萩のした葉も

風吹は露そこほるゝみやきのゝ萩のした葉もうつる斗に。

月はうき世の

山ふかくおもひ入ても思ひ出て月はうき世の外に見るかは。

精靈祭り

十三日。あしたの空かい曇りて、寒さ、きのふのことし。市中は、けふのためしに人さはに

入たちわたれは、かまひすしく、出ましらはんもにつかはしからねは、野山の秋も見てんと、みなとへの河ふねさゝせて行に、風たち波いや高し。

　みなと河こきそわつらふ渡舟しほと水との浪たかくして。

そことなうわけ行に、野原の花ことにおもしろく見る〳〵うかれありけは、つりや、はまやかたゝ過て、つかはらのうへに棚を作り上たるに、かれゐけやうのものもち行、水さゝけたる女、ちゝ母やしたふ、わか子やおもふ、はら〳〵とないてふしにふしたるは、こよひのたま祭にこそ。

　袖ぬれん手向のあかよ折そへし水かけ草の露になみたに。

栗の粉清水

水澤、かんかけの阪をくたりておかしき瀧のあるを、栗の粉清水とてきよけれは、むすひあくるとて袖いたくぬらしたり。

　岩つたふ瀧のしらいと風にくりのこるあつさも袖におほへす。

大澤の龜麿氏

かくて大澤になれは、相しれる龜麿は海士のまねして庵も海へにのそみて山かけにたてて、此十とせあまりも住つなとかねて聞へし處になれは、しはふきて入は、あるしは机にひちつきて、くゑんしものかたりの、あかしの巻のなかはひらいて、ひたふるに見いりたるを、あはと見るあはちしま山のなかめを、そこと尻屋の磯山にかへて、のこるくまなき月やおかしか

らんと音なへは、こはめつらしと、なにくれいひはてて、

　海山を軒はに近く月花のみるめよしとてすみやならへる。

あるし、とりあへすふてをとりて、

　海近き軒端の山の花もなみすむかひあらぬ月のわひしさ。

こよひはこゝに在てなとかたらひて、くれ行ころ海は猶あれと、舟あまたのりいつるは、栬烏賊とて鰑つりのありくといへは、

　しほもみちいかにあれ行なみの上をやすけに渡る海士のつり舟。

紅葉いか、てふことを折句うたにして、

　ももふねのみるめあやうくちさとまていかにこくらんからき汐せを。

十四日。またあけぬより人のおきいつるけはひして、けいし、ほのかにうつ音の聞へて、せみ聲にすんしけるはあるしにや。これや此あたりは海士のならひとて、過しゆふへたま祭るへきを、あかつきほうかいとて夜ふかうおき出て、ものさゝけたいまつるなりけり。雨はいたくふりいてて、ひねもすやます。夕くれ行ころ、

　あれはてし海士の苫家の旅枕かたしく袖に露やおくらん。

となん、あるしのよめるに返し。

露ふかくかたしく袖ゝ雨にさへこよひはほさん人のなさけに。

十五日。きのふのことに雨ふり、浪はいやたかくうち、渚の巖のこるましう海のあれたるに、

たへてけふこく舟もなみいやたかくもゝへにへたつ沖そしられぬ。

十六日。此のころの雨もけさははれて、蝦夷のちしままて露のくまなく見やられて、こゝろのとけく、

沖つ風吹さそふまゝに雨雲の餘波もなみの末晴るそら。

けふはおほはたにいなんと、龜丸とともに、かんかけのさかをよちて四方のおもしろく見やり、鷲の巣といふ山の谷をへたてて近く見る〳〵ゆくに、たへなる文字もありとこそ聞けなとすして、

ひなこもるわしのすみかの尾上には妙なる鳥のあとやみすらん。

夕くれ行より、わらはおとりてふことすとて、まち〳〵につゝみうちてよそひたちぬれは、ゆくりなう村雨したり。あな、ものうの雨や、きのふまて鳴物とゝめよとのおほやけのおほせことをまもりて、けふになりぬれは、こはいかに、はつか斗三日四日のたのしみを、一日のなくさみもあらてと、めのわらはは、あけまきは、なりはひのことにひきかへて、をのれ〳〵

大澤を立つ

空を恨む踊子等

か、けさうしけることなとにとりませていたくなけくに、夜ふけ人さたまるころ月あかくてれれは、つち〱につゝみのこゑ、人さよむ聲したるに戯れうたをつくる。

つゝみうち手うちちまたにうたひまふ聲すみ渡る月のよふかさ。

こはし

十七日。たなへにかへり、あけなん日に、かんわさあるにまうてんと、ひるよりいてたつ。行〱見れは、そはまの沙のうへにわかき男女やすらひて、よんへのおとりのたのしさ、けふの、はたこはさ（こうしたるを、こはしといふ也）うしひき、こんふさるわさの、あなくるしさといふを、

磯の浪よるはたのしさうたひても潮のひるまやからき海士の子。

田名部の大明神社

十八日。あくるより、けふの試樂のよそひして、しめひきわたし、浦々村々より奉るひともしにかさり、みまへきよらに、もゝとりの机やうのものに奉りたるは、うつのみやをうつし祭りて、栜本のみたまをあかめ奉ることはしられたれと、たゝ正一位大明神とのみいたゝきまつるは、ひめたるためしにや。ほうしなとは、水の月かけを此寳倉にこめて、そのみかたしろありきなといふめれと、けふに祭りするも救世ほさちなれはといへと、誰見奉りし人さらになけれは、すへなし。みまへを月のきよくてらすに、高角の松さすし奉りて、

おもふこさみそなひ給へ神籬をうつす木のまの月のくまなく。

祭見る人々

十九日。祭見んとて、めかりかつきのめ、老たるわかき、山賤のめの出たしるふり、あかき、

御輿を拜す

納めの盆踊

たのこひのこときものにかしらをつゝみ、あるは、黒きにこたへのかふりし、うらの、あけむらさきなるゑりをそとに折かへし、めのみいたし、又薄衣にまへたれして、はきあらはに聲たかう人よはひ、おのかいはまほしきことを、はた、ひめたる人、わらはへなることを露もつゝみなうかたらひ、ゆくりなうあひたる人にむかひては、久しと、なかやかにかたるに、さきおふ聲に人はらはせて、いつくしうねり過れは、それ〳〵のかたしろつくりのせて、またらまく引たる車よつとゝろかし、笛つゝみにはやしもて、みこし出ませりける。ひねもすとよみ行に、こゝろさしのふかきやのあるしは、つちにしほまき、いはひへにみきつきて、みまへに高さゝけ出て、みこしをいたゝき、ぬかつけてけり。かくて、まち〳〵めくりおましまして暮ぬれは、れいのともしひ軒ことにかけて、こゝかしこに車とゝむれは、いまた、あつさとともに盆躍ものこれりとてつゝみうち、男は女によそひたち女は男のふりまねて、ひころ躍て、けふをかきりとやおもふ、とり〳〵に聲うちあけ、あるはたはれ、又聲とよむまで「そろふた〳〵稲の出穗より猶そろた」とうたふを、おされ〳〵、躍は、ことしのあそひなるにと、老たる女のさしのそきいへは、

八束穗にそろふやからん植おきて秋をたのみとうたふ里の子。

二十日。ふみまねひせるやのとなりに、あさかほの咲なるを朝な〳〵見て、

まなひする窓に植見よ咲ほとの露おこたらぬ朝かほの花。

廿一日。常念寺に行しかは、中將姫、如法尼となりてのち、薙髮のかみすちを集てぬひ給ふあみた佛のみかたしろに、海よりひろひしかなつゝみは、いほとせのむかしよりふる館にこもりたる、菊池なにかしか遠つおやより持つたへたるを、この寺にをさめたり。惠心のゑかき給しあみたふちは、たれか此寺にをさめしとて、しみはらはせて、あるしの上人、はこにひめられたり。

廿二日。過し日、きくち成章よりきたるふみに、その行すりのわかれに、「曳かふ駒の中のわかれを。」といひしむくひとて、「おもひやれとゝめん袖も露けくて」又、「たなはたのあまの河なみうつゝとも夢ともわかてこよひ明なん。」といふ歌を、きのふ下向たるとて八日の日贈りたりしかは、此返しとはあらてとて、

あはれとふ人のこと葉にたなはたのいとゝ身にしむ天の河かせ。

おなしぬし、いつ〳〵のころはかへり來て、ともにまとゐせんとおもひしかと、あし分ふねの、ことのほかにこきめくらしてと、ふみに聞へて、

契にし日數もいつかたつか弓ゐるもかへるもまかせぬそうき。

とありける。返しかいて、たよりもかなと思ふに、此ぬし、よへ歸きと聞てとゝめたるうた。

大畑にて
涌館の館址
深山權現
金山小目名過ぎて

待わひてあたに日數もたつか弓おしてはる〳〵おもひこそやれ。

廿三日。おほはたに行はまちに、かもめ、鵆、ともに交りあさりぬ。

しら浪のよるへになれて浦ちとりむれるかもめにましりてそとふ。

廿五日。きのふけふ、あへてことなることなけん。

廿六日。冠岩てふおもしろきところあるをと、村林なにかしかかねていへれは、いてとて、みたりよたりいさなひて、見にとてまかる路に見やれは、むかし、たれならんこもりし涌館とて、木々ふかう河むかひの岨をさしていへは、

露時雨やかてちゝわくたてぬきの糸に紅葉の錦をるらし。

おなしう川をへたてて深山權現のおましませる山は、としふれる杉生ひたてり。けにやあらん、大同二年のむかし鑄たる神鏡を、ふかくひめて神とは祭奉るとなん。をちかたなから

ぬさとれは猶かしこさのますかゝみそこそみやまの神のみつ垣。

河わたりて山路をしはし行は、かな山といふところの家は七八ありといふか、廣瀨の河半過れは木々のあはひに見へたり。麻苧苅もて、こなたにおひくるあけまきあれは、

しるへせよあさかるかたの淀もかなやま河水のはやき渡に。

かくて其ところもへぬれは、小目名てふ山里あり。家居きよけに、山賤等か栖家ともおもほ

へす。はつ秋のわざには、手ごとにあさ苧かりもて絲引て、こころせくかけほしたり。

　　山里の秋はあさをのいとなみにいとまはあらし長きよるひる。

館の腰といふところはる〳〵と見へたり。むかしは人のすみたるとか。

　　今もまたその跡やありていにしへの通ひちいつこ行て見なまし。

羽色山の材木

河へたを行て、羽色山に入る麓より、ふりたる木々枝をましへて、いやくらき木の下に祠あり。いにしへ此山の宮木を伐いたして、五万五千両のあたへにかへしといふ。そのふき人、浪速のたれとかやか正徳のころ建たるは、此みやしろに三のたからをつくりをさめて、おほやますみをあかめ奉るとなん。

　　いやたかく人やあふかん生ひしける槇の葉色のやまの神籬。

川上の冠岩

はや瀬に梁うちて鮎とるしたつかたをわたりて、三ツの山河たきりなかるゝをへて山河にさかのほれは、いとたかく、越のうしろ國加久田のいはや見たらんにひとしく、壁のやうに立るに木々生ひたてり。このいはのおかしきとめてて、みたりよたり岸邊の岩にまとゐして、ひわりこひらき酒のみて、くし作り、おかしき句ともいひ出しつるほとに、日は石のかけとともにかたふけは、いさかへらんといふに、かたはらの石にかいつく。

　　山かけに李やはある手もふれす岩の冠もかたふけにけり。

大澤に

緣結び石

廿七日。あしたより雨をやみなうふりぬ。

廿八日。龜丸をとふらはんとて、此里の人々とともに、里のしりなるふねにのりてつきぬ。のり鞍の池といふあり。この由阪のうへに涌館のありしといへは、人のかまへとはしられたり。

むかし誰こやのりくらの池水をかひけんこまのあとそふりゆく。

野原のくさことにおもしろく分て、なにかしのうはそく、木村たれ、ゐさわの郡水澤のうまやにすめりし武田氏喜か子何かしなとゆく〳〵、えんむすひの石とて、願ひある人小石いたく投上たるを見やりて、

けそう石なひくすかたや女郎花　といへは、

鷲の巢にさるやさかるゝ霧のなか　たけた

わしの聲さそふやはけしあきのかせ　うはそく

和之は何鬼神もすまんみねのきり　きむら

坂くたりて龜丸かやになれは、戶さし捨て人ありけにゐなし。あるしは磯につり沖にめかりて、あまのまねひをせりけれは、いつこにと、萩の茂りたるかたそはの路にたゝすみて、

風あらてなひくにしるし萩か枝の露なき方や人の分けん。

やをら汐にぬれたる衣なから、あなめつらしや人々のとて、こと葉数なくて、はや筆とゐわさにわらくつぬきやり、くるるとなく夜は更たるに雨いたくふりたれと、たれも〳〵、このことにのみこゝろ入て音もおほへす。はるゝやとにさしいつれは、軒のした草露ふかう風に吹なひき、袖かつぬれたりけれは、

秋風の拂ふとすれとふり過し雨の蓬のかきの露けさ。

隣なきやは、いとしつかに、かもめ鳴やとおもへは山からすの聲して、夜は明ぬらんか。

葉月の朔。夜とゝもにまとゐして、ひましらむにおとろきて板戸ひらけは、うなのうへのしら〳〵と朝ひらけ行を見やりて、

遠近に沖行ふねのほの〳〵と見ゆるとまやの明方の空。

この舟ともの見つゝあれは雨も晴ぬれは、とくあしたの飯ものして、みな大畑のみなと邊にいにき。われはけふもやすらひありて、ひるねの枕とれは、夕くれちかくさめたり。

二日。けふのはれまに伊胡無久万にいきて、中居のやをとふらはんとて飯丸かやをたちて、ほとなう木野陪といふ磯やかたを過て、むろち多かるみちの露分こほして、

露ふかく行袖ぬれぬ旅衣きのふやすきし雨のなこりに。

赤河といふをわたるに、きのふけふ身まかりたるつかの上に水むすひ上たるを、

なき人に手向のあかかはかなくもなかるゝ水のあはれ世のなか。

下風呂泊り

下風呂にいたれは、おほはたなる幾久知なにかしありて、けふはこゝにとてかたらひくれたり。沖より、おに火のやうに、波のうへの光あるはいかにとゝへは、鹽光とも、しほたまともいふといらふ。

　軒近く磯邊の浪のよる光玉とみつるはしほにそありける。

鮑潜ぎ腰釣り

三日。空くもりたり。此里の海士鮑のかつきするに、おのれ〳〵か、ふとしに、つり糸付て小鯛つる。これを腰つりとて、上手へたのならひありなと、とひ入てあはひかつき、いきもつきあへす、つりたる魚ともをとりぬ。此「あはひかつき、こしつりてふことを、沓冠うたにつくる。

　あさせなきはるけきみそこひもあらしかつきもあけつつりの世わたり。

雨いたくふり出つれは、たつこともえせて湯あみしてける。こしのしら山の邊、あるは、むさしの國ほりかねの井の邊なと、あまたる人にましりかたらふに、夕ちかうなれは晴て、月の爪にてりて又かくろへり。

　秋風に雲吹はらへ玉くしけふたゝひ三日の月やあふかん。

異國間に至りて

四日。いこくまの磯館に行とて桑畑の村を過て、杉の尻といふ山かけに家ひとつあるか高

かやのなかに埋れて、やね斗見へたり。

　生ひしける野原の薄風ふけは軒端ほのかに見ゆる一家。

異國間の浦に至て中井の家をとへは、あなめつらし、契しことに、玉くしけ、ふたゝひのたいめしつるなと、あるしの業陳の云。

　かねこともたかはて人の九曲なる路ふみ分てくるそ嬉しき。

と、かい聞へける。その、なこりの筆なから返し。

　こゝろさしあるかた皿のつゝらおりさかしきみちをくるもいとはし。

蝦名イコンクマ

五日。夕月のてれる、かけくらき、せんさいの草むらことに虫のこゝら鳴に、むかし此浦にゑそ人すみたりし頃は、いこむくまといひしといふものかたりありけれは、その名を何ことの上におきて、

　いさ行てこの夕月にむし聞むくるゝよりなくまくすかやはら。

六日。あるし、なりのふ、萩と露草とを花かめにさせりけるに、

　夕月のかけも宿れと草の名の露もこほさて手折萩かえ。

雨風頻りて

七日。あくるより野分はしたなう吹て、砌の萩とも、こほるゝはかりうちしほれたりけるにこゝろうくて、

みやきのゝ萩のにしきやほころひん野分吹しく庭の一むら。

夜邊に雨ふりてけるに、あはらなるやの軒近く海士のめともの砧うつか、よこさめを、そむき〳〵しけるを火のかけに見やられて、

　雨にこよひそむけても又あま衣擣袖ぬれてあすはほすらん。

八日。あしたより雨ふり、夜半は猶うちしきりぬるに虫のなけは、

・秋萩に雨のふる枝やみたるらん心さためぬむしのこゑ〳〵。

又壁に蛩のありて、夜もすから枕かみに鳴たり。

　かへのうちにふみやひめたるふてつ虫かくとしつけの枕にそきく。

九日。宵うち過るころ、この砌に集く虫のこゑ〳〵いかにあはれとか聞侍らん、さらぬたにものうきよな〳〵をと、やのあるし、なりのふのかいて見せられける。

　小夜すから虫の音さそふ秋風に旅寢の枕猶やうからん。

とありける返し。

　むしの音にさそふ旅ねのうきこともなくさめてきく人の言の葉。

十日。田鍋なりける成章のもとより、

　しら露のおきゐにかけてしのけたゝうき旅衣日はかさぬとも。

かくなんありける返し。

白露のおきゐるにぬれて旅衣あたに日数はかさねこそすれ。

又過しころ、其ぬしをとふらふとて、とみなるたよりにいひやる、

初雁のとふよりはやきたよりかな。

といふに、そか和句ありけるは、

ちゝのあはれを萩のうはかせ。

村雨ふり過る音に枕をそはたてて、木末、草むらの、さよ嵐にうちそよくを聞すてかたう、

秋風のよそにさそひて萩の葉に晴ても殘るむらさめの聲。

十一日。あさとく草かりて、やのしりなる小坂より馬曳あまたおりく。

露なからぬれて秣にかりぬらん尾花葛花眞萩高かや。

十二日。ひる、むら雨すれと、月はいとよけれは見に出ありく。女瀧川のかみの木立くらきはやせに、火のかけ見へて人の聲したるは何し居るにやと近う行は、童の集て、河原にほしたる麻からをまつとして、これを夜とぼしすとて、よるよる、あゆ、石ふしをとる、その火にこそありけれ。

かけとめてさはしる鮎の行かたにみをさかのほるせゝのともしひ。

澄む月

十三日。しらいはといふあたりまて岸つたひに川上にゆけは、高すなこの上に鹿の跡つけたるを、今や行たらんなと見つゝいふに、

　さをしかの浪のよる〳〵妻こひて通ひなれにしあとをこそ見れ。

十四日。ひる爪に日てりて夕邊の空くらく、月は、つゆ見ゆへうもあらねはおもひわひて、

　雲の中にかけやかたふくはるるまを待宵更る月のつれなさ。

十五日。あしたより雨ふり風をやみなう、夕くれて猶、はやちのやうに風とくふき、あめいやふりにふりてけれは、ほゐなくなかめて、

　心あてに月やいつことおもひやる望のこよひのあめ風の空。

　おりにありて月のこよひの雨と風人の心のいかにはるへき。

名におふ空もむなしく、はれまたに見なくに鷄は鳴たり。

十六日。山の端引はなれさしのほるに、ちりはかりこゝろにかゝる雲もなう、てりそふ月の山くちそしられたる。やま川の水にかけのなかるゝさま、なへてならす。十五夜はこよひかとまとふ。

　わすれては月のこよひと水かゝみ波にいさよふ影はうつせと。

十七日。海の邊に出て月のいつるをまつに、くもりなく浪の上にみち〳〵たる、しほせの光

ことに見やりて、

おくの海外かはま風吹からに雲たに波のたちまちの月。

十八日。あくるより雨ふるに、こよひの月見んことこそかたからめと、軒はのやまにかゝりたる雲のふかきを、ひとりなかめてあるに、ちかさなりのやに衣うつ音たへす聞へて、

あま衣うちやわふらん八重雲の空にゐまちの月はいかにと。

ゆくりもなう山かせ吹來て雨はゆふへに晴たれは、月きよくさし出ておかしとやおもふ、女とも居ならひて砧うつあり。

軒近く衣擣也乙女子かならひゐまちの月も見はやと。

十九日。夜こもりの月露くもりなう、いそやまのこすゑのなかよりさし出たるおかしさ。

風ふけは葉分にもれてくれ竹のふしまち月の影の夜ふかさ。

二十日。更行空を、初雁の遠方や行らんこゑ〳〵の仄に、いつこならんめつらしく、猶聞はやとまつに月は出たり。

かそふれはけふの日數もはつかりの月待渡る聲をこそきけ。

廿三日。けふしまて二三日もらしぬ。雁のあまた行をあふきて、たか玉つさをと、すして、

初雁に心そたくふ行空をふる里人や見てしのふらん。

廿四日。ひるの空かきくれて鳴神とゞろきわたり、しはしのほとに雨ふりしきりて遠方やはるゝ、蝦夷の島やまをかけわたして、海の上に虹の引たり。

　　おくの海ちさとの末も名残なく村雨渡る虹のかけはし。

廿五日。夕近う雨ふり、はやち吹て空はれたり。

　　あり明の月もやとさて萩か枝の露吹こほす庭のあさかせ。

雁と田鶴と

三十日。雁のひとつら行に、田鶴のあまたおなし雲路をたとるか、鳫はとく過て、鶴はこさかたの空にいにき。

　　あふけたゝかしこき御世は行雁に道をゆつるのむれ渡る空。

なかつきの朔のあした。空うちくもり、ひるつかた雨ひとむら過るをりしも、雁のころ〱に行か、いとあはれなれは、

　　村雨につはさや重き高からすぬれこそ渡れ鳫のひとつら。

はせに乾す

二日。蕎麥かりもて、こゝにいふ、はせてふものにとりかけて、やまくろの畠にほしたりけるか、木々のあはひより見やられて、

　　時もはや色つく木々のはせゆひてすゝめむれ行そはのかけみち。

三日。よはり行虫の聲ほのかに聞へて、いとものおもふ夕なから、板戸もさゝてなかめた

田面の鳴子

にゐしい茸ける老女

九月の鶯

り。

袖の露おくともしらし此くれのうきをはよそに三日の月かけ。

四日。近き田面にやあらん、鳴子をひきもたゆます、さと、風にいさなはれては聞へけることをり／＼なれは、

小山田に小鳥やむれん吹過る風になるこの聲もをやまぬ。

ある庵の佛に老たる女のぬかつきてけるに、老法師の、とより入來てうちものかたらふかたはらに、脛纏茸を、さるとて、したみこの中に、さはにもりたるを法師、しはしと（かはやをいふ）にいきつるまに、たかもて來るならん。女、たれても、けるこそよけれ。にゐしい（新をいふ）うちに、せいいつはい（多をいふ）にてまゐれとてさりぬ。法師ひとりこちて、いつも葉月の頃萩のした葉のきはむとき、はゝきたけは生ふるものとて、あかたなにすえて、かねうちたりける。此こと葉こもを、たはれうたの折句とせり。

はつき來てはきの下葉のきはむとき家つとにけるそうれしき。

五日。あさ日うら／＼と春のこゝちおほゆるに、けにやあらん、軒はの山に鶯の鳴たるはいかに、ひか耳かときけは、いよゝ鳴ぬ。秋もかゝるためしやはある。

風さそふ山路の菊を梅か香にまかへてやなく谷のうくひす。

石川忠房氏等を迎ふ

神無月くる春やまつよきためしきく咲やとのうくひすの聲。

みちはらひきよめ、すなうちまいてけるは、去年の冬かんな月の九日、ひんかしのゑみしの國禰毛呂といふ崎に於呂志夜の人四十あまりして、うしのかはふねこき來て、天明のころ風にはなたれたる、いせの國白子の浦人みたりを、こたひ送りきけりとて、この年の水無月廿日、ふく山のみなと入して、ふん月の朔の日、越呂詩也をさしてかへりいにき。此ことにたつさはりて、公の仰をうけて石川忠房のうし、村上義禮のうし、すんさあまたして、むさしの國へかへり給ふとて、ふん月の廿八日、みうまやの浦に渡りおはし、津刈のうら〳〵をへて、此なんふ、此北の郡もなこりなう海邊山里を見めくり、おくのうら〳〵に旅衣日數をかさね給ひて、けふなん、このいこんくまにつき給ふとて、そのもふけして、あやしのあさり、あひき、いをつり、しほ木こりつむ翁かやとも、間せはきとまやかたも、とふの菅こも淸らかにしき、まとをにあめる、あしのすたれを軒ことにかけて、すくろ（刈あしをいふ）のすたれ、まと、かきねにさけてまつほとなう、大間の浦にひるの中宿して申斗に入給へは、浦人ら、あしを空にいそきわりきて、御酒奉らはや、みさかなにはさたおかこそなけれ、あはひ、かせてふものは此磯こゝにあれはとて、海士人らか家々にすゝめ、すゝき、たなこ、かつほは、まさなことによけんとて、しゝと、ものせり。あはれ君、民をなつるのおほん心さすかに淺からぬあまり、かゝ

蝦夷の末をいたはる

石川氏左井の歌

る臣(ひと)たちもその光をうつして、ふりいさかろらかに、こさそきてよまひ渡給へはさて、見聞く人々、あなかしこの御惠となみたおとして、一夜の宿奉らんこと、玉くしけ、ふたゝひあるかはとよろこひあへり。ある人のいふ、九艘泊といふ浦に、佐野といふ、ゑその末の子身まかりて、みとせになる。そかめ初子とて、よく家をもり、老たるをおもふ女あるに、ふたりの君より錢一つらたはひて、「日のもとのはてとはいへとまことある心のみちにかはりなけれは、（人の心のみちはかはらして、）となん忠房のうしなかめて、あはれかり給ひしとつたへ聞へわたれは、

なさけある君の惠の露ふかくおくのうら人袖やぬらさん。

又、ここと浦につきて神籬にまうてて、「左井みなとといふことをかしらにおきて、いつくさのうたを手向給ふたるといへるは、

さても世のちりにくもらぬ神心あまねくてらせ秋のよの月。
いはしみつこゝにうつして淺からぬ神のみかけを賴む里の子。
みなと江ににこらぬかけをうつしてや行かふふねをまもる神垣。
なみ風もしつかなる世をいのるとそ神もちかひやかけししめ繩。
ときしありて此みつ垣を拜むそよぬさとりあへぬ旅路なからも。

おなしう義禮の君。

さなからにかしこき國のならひそとこゝにやはたのみや居うつして。

或る姦通女

六日。ことなう、夜邊のとのたち立給ひしそかしと、よろこひをとなへありくにましりて、二十あまりの女、かしらをたのこひにつゝみ、はきにとゝかぬ、きたなけなる衣きたるか、つゝましけに行を見て、あの女は、いてはの國の男にいさなはれ來て、おほまのうまきやらんにて、こと男して見あらはされて、かのいてはの男、此女をきりころしてんとすれと、身のまち人なれは、たちかたなもなう、人にかりしかと、人きるかたなとてかす人もゆめなけれは、海にはめてんと、いそへたにつれ行、女の長きかみを手にからまきて、ひこしろひ行を人の見て、にくき女なから、命なとりそと人あまたしていへは、浪の中にふせて、石と石とに、かみをひたうちに打きりはなち、衣なともはきとられ、二布ひとつになりて命は助ぬ。朔の日のことゝいふに戲うた。

としはたちみそか男もきのふすきつゐたち別れ二日三日四日。

稗は鹿に害さる

七日。古野といふところをさして、雁のあまた鳴來るを見やりて雨もふれれは、

なきて行雁のなみたの雨をけふふる野の梢色付やせん。

八日。田つらの稗かりもて、またふりを、まとりとてうち叩く女とも、かのしゝのよる〳〵くらひて、いつも〳〵からのみとることよ、おなうたてのしゝなくは。」といふを聞て、「まと

りと「ひえとのふたつを、

　やまとりの尾上たちわひ夜とともに雄鹿つまこひえこそねられね。

九日。たかきにのほらんのためしといひて、けふをはつのせくといへるは、三九日のはしめなれはしかいふ。朝とく菊折るを見て、

　けふといへとまた咲やらぬ菊か枝を露の盛にをらは折てん。

十日。飯形の御前に貝吹、つゝみうつうはそく、やかて御湯を奉る。御籬の紅葉、ぬさと迷ふはかり一もと染たるを、

　時雨ふるしるしを三の社とてそむる栬のあけの玉かき。

この夜月のおもしろきに、いと近う鹿の聞へたりしかは、

　月かけに鹿も樂しとおくふかく出て太山をよそに鳴らし。

十三日。この二三日はしるさす。けふは名におふ空なから、おしたより村雨をり〳〵しきりて、ものうしとおもひのほかに、心にかゝる雲も吹はれておかしけれは、「なか月十三夜の月てふことを一くさのかしらにおきて、十くさあまり三くさのうたを、このみちのおくの近きあたりの、名ところをあつめてなかめたり。

那　なみ越る光もよるとわかぬまて月すむ秋もすゑのまつ山。

苛　かくはかりうちもねられすおきのゐてみやこ島人月やめつらん。
都　つらかりし雲はさそひて晴渡る月に吹なりそとかはまかせ。
枳　きしなみのよるともしらて舟人の月にうかれてうたふやすかた。
迺　のたの名の川せの玉と見る月の光くもらぬ水の心も。
志　しのふ山忍ひて通ふ小雄鹿のあとさへ見ゆる長月の月。
烏　うき秋のうきもわすれてむかひみんあたゝら眞弓月にひかれて。
左　さをなくるいとまなの身もこよひとて月や見るらんけふの里の子。
武　むれて身をはらひやせまし月かけの霜とおく野の牧のあら駒。
夜　やきかねのこかねの花も秋夜の月にはしろくみちのくの山。
能　のき近くみふにねなまししきたへの枕に月のとふの菅こも。
津　月めてゝこさをはふかし夜とともにちさとくもらぬ夷の遠しま。
幾　きくか枝の花とも見へて浪にゆふ間籬か島の長月のかけ。

「なか月の十三夜といふことを、冠と沓とにおきて、
しら菊のうつろふを見きさえたかつむかふは月かやへに咲はな。

宵うち過るころ、ゆくりなう鹿の近やまに鳴たるを、磯邊にや河邊にやなといひて、夜毎に

鳴しかと、わきてこよひは、こゝろありけにやおもふと人のいふにおかしく、「后の今夜鳴鹿、といへることを、もさするにおきて五くさのなかめせり。

野も山もくまなき月のかけめてて鳴や雄鹿の聲のいくたひ。

ちかき嶺遠き尾上を棹鹿の月に鳴音のたくひあらしな。

のかれすむみやまならねと月にかく鹿を浦なみよる〳〵そきく。

こゝに聞へかしこに鳴て長月の月には鹿の方もさためし。

よゝしとて月にうかるゝ棹鹿の友よふ聲は嶺か尾上か。

あるし業陳、「なか月の月を好む、てふことを沓冠にして、

なみやたつ河風寒きつれなさを君しいとへよ后の月見む。

かくなんありける。返しとはあらねと、

なかめしつかゝる樂しき月影を君とは幾夜のきにあふかむ。

十四日。あした、風いやたちてくもりぬ。おほまの浦におましまし給ふ百々いなりといふかんやしろ、天妃の祠の邊に建るに、こたひ、みくらゐ給りしよしを聞て、この春のころほひまうて奉りしことあれは、かの神垣に、けふなんよんて奉るうた。

飯形山うつは末葉の末までもさかふしるしの杉やさかへん。

東傳庵跡

十五日。この日桑畑の浦のかんわさにまうてんとて、いこんくまをたつに、あるしもともに、かとの澤、けたの澤を過るに古寺のあとあり。いこんくまの榮へしむかしは、こゝに浦人、夷人も栖家したるを、あなたにうつしたる跡、東傳庵のあと也といふ。蛇走（しやはしり）といふ磯をゆけは、日陰山みちにかゝりて空うちくもり、ゆくりなうふり出たり。

見るかうちに秋のひかけの山のはに曇れはやかて過るむら雨。

杉の尻といふ、や、ひとつある海へたの山より落來る瀧、やま風に吹やられて、しろき糸を、紅葉の枝ことに引かけたらんかことし。

是も又時雨に染て梔葉にうつろひかゝるたきのしらいと。

桑畑の八幡祭り

かくてその處になれは、十日の日、いなりの祠にみゆ奉りたるうばそく、いのりかひふき、すゞふりて、はんにや經よむ。此ほくらのうちには、のほきりのことに、はの、うちあはれたるつるきたち、ふたふり、やふれたるかなつゝみに、三郎五郎といふ名しるしたるを納めたり。つちよりやほりいたしけん、そのものかたりまち〳〵にいふ。此社をつねにもり奉る人も、かん司のうはそくもあらねと、耕し、木こりのみちなれは、たれとなうはらひきよめ奉るは、かゝる五六あるやの、あまにこそあなりけれとかたるを聞つゝ、くははたやはたのみやといふことを沓冠におきて、

月の赤きは

かしけ

桑畑を立つ

くる人はわか手にあしたはらふ身のたのみは深みやまかけのみや。

日もくれぬれは、こゝに宿りしてけり。出るより月の色、山の紅葉よりも朱に、なかそら高くのほりても猶赤きは、過し十三日の辰斗、南の方八重霧のこめたらんやうに山のいたゝきも見へす、たくふへうもあらぬ香の、やまおろしに吹れ來るは、いつこの山の、やけ山のけふりならん、きのふのことに空をふたけは、月は、かくそ、ぬるてのもみちたるやうに色の見ゆるを、船人なとは、こは、かしけてふものとひたにいへと、山賤らは、ひたふるに心もおちゐす、こゝろなきも、かゝる月なれはこそあふきたれ。

染渡す月の桂の梲葉のくまなき色や四方に見ゆらん。

鹿の鳴やとおほへて夢はさめたり。又もきかまくおもへと、浦なみの高くひゝきてかまひすしく、

磯の波うつゝか夢かわきやらて一夜見やまの小雄鹿の聲。

十六日。業陳、けふはまことの別なめりとて、

きのふまて月にまとゐし人にけふ別ては又いつか逢見ん。

となんありける返し。

圓居せし月のためしに旅衣又めくり來て友に見なまし。

やをら、なりのふに別て、やをいつるに、あるし、かゝるいふせきすみかのいとひもさふらはすは、いつも、通りあらは宿りしてといふに、

おなしくははた月のころ棹鹿の鳴音聞にし宿にとひこん。

處々の名魚

釜の前、ふた川、おほゆるみ、こゆるみ、くろさき、つぶた、さくま、さいとう、やけ山、なかばま、しをりさきなと過るに、あないの童沖邊の釣舟を見て、いこくまのそい、杉の尻の鯛、いちのなかれのすゝき、くははたのはくとく、ゆるみのたなご、黑崎のあぶらこ、つぶたのびりくそ、さくまのなめとなと、沖なる魚の名所かそふを聞て、

鱸つり鯛つる翁見つゝ行ん染る紅葉の木々のいろくす。

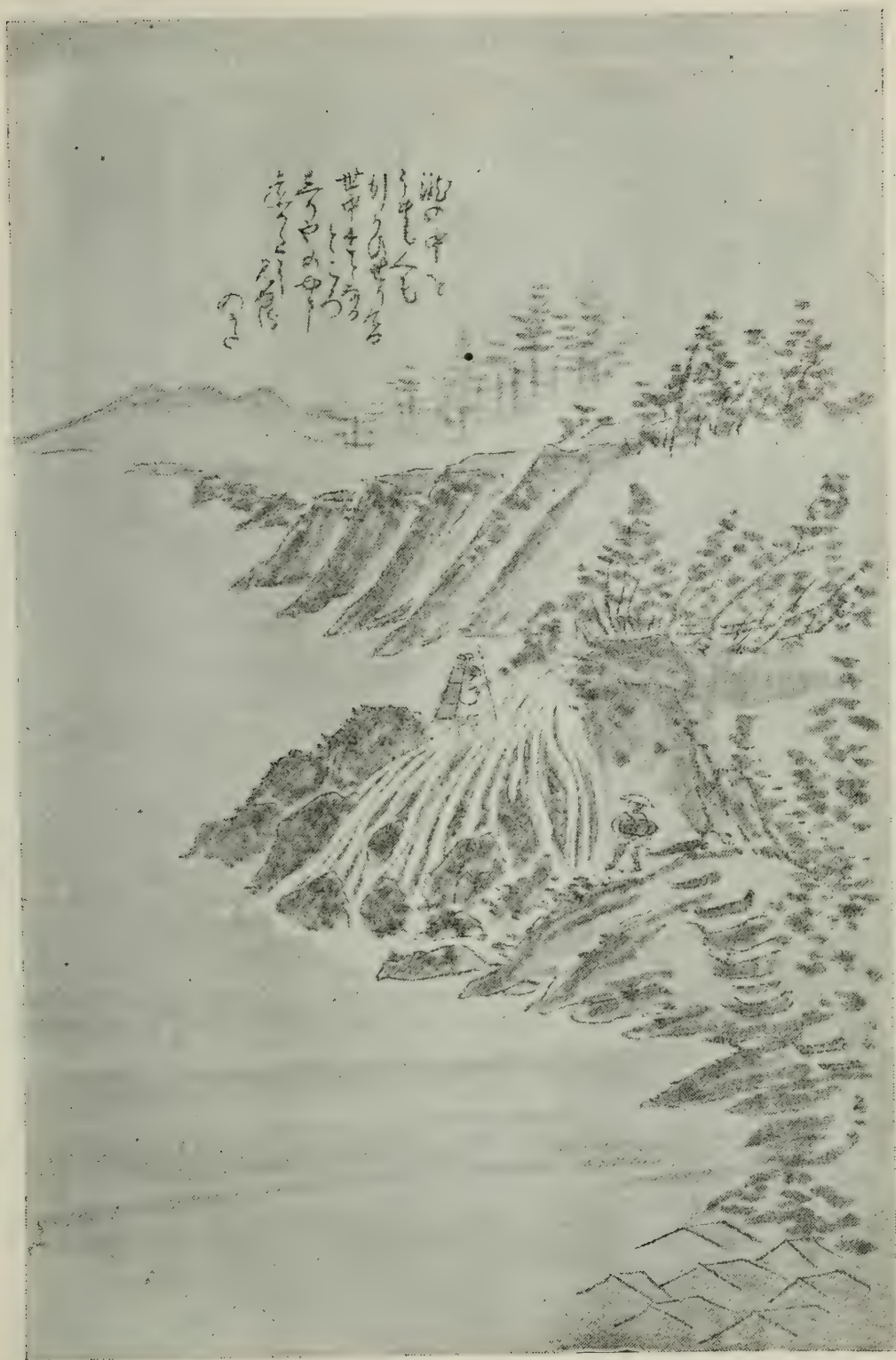
細く曲たるみちゆくに、あかはきまきの緖のとけて、かたはらの萩の、した枝斗咲殘りたるに引かけたるを、しりなる人の、あなこゝろなと見とかめたるを、

つとに折る花はちるとも種しあらはいさはきまきてこん秋も見む。

下風呂にて

かくて下風呂のいて湯のやかたに、ひるつかたつきて、しりたるあるしのもとになか宿すれは、風のこゝちにかしらやめは、この夜はこゝにをりぬ。夕くれて、月はきのふよりもあけにてりて、よとともにくらし。

栃の實の數珠

十七日。猶おなし宿に在て、湯ふねのうへなる自遊庵のとなり湯潤かたてたる庵に入は、栃

の實をつなきて大なるすゝとして佛の前にかけて、なもあみた佛をとなへ奉るを見つゝ、

後の世をたすけ給へとちたひとなへもゝたひ拜むぬかのこゑ〳〵。

十八日。新湯とて山かけにあるを見にいたりて、夕日かけ紅葉におちておかしとおもふに、鹿の鳴しことあり、いまや鳴なん、しはし休らひてと人のいへは、

小雄鹿の鳴音やいつら吹さそふ風も身にしむゆふくれのそら。

この夜あま人ら集ひ來て、こよひは月のいと淸ら也、此ころのくもり、いかなることにかあらん。過し十二日の日、沖につりしありくに海のいとくらく、蜘の糸舟はたにかゝると見しうちに、いくすちも風にふかれ〳〵行たり。いかかととへは、見し人あまたとこたへき。いかなれるものにかあらん。

十九日。けふは、なかのせくなりとて、酒すゝめんとあるしものせり。此日、黒森かたけのかんわさあるに人のむれてまうつれは、おなしうわれものほりてんとこゝをたちて、例の瀧のなかみちになれは風いや吹にふいて、行人の衣ぬれたり。

おり立てむすはぬ水も行かひの袂にかゝる瀧のしらいと。

赤河をへて、木の陪の村中に幡おしたて、ゆく路のかたはらに、けんへとて、はくやうするなかをはる〳〵とのほれは、雨のけしきはかりふるやとおもふに、あられたはしり、神なり、ひ

霰烈し

かりまなこにさへきり、みなとくたりはてんとおそりまよひて、ふしまろひたり。時のまにあられふり來て、ちしほの紅葉のこりなう、みなちりうせなんと見つゝのほれは、いよゝあられふり、はきさし入て雪のことく細き通ひちを埋みはてて、さらにまうてのほる人もなく、ふりあふきて、

森の名のくろ雲きほひあられふりみねにとゝろきなる神の聲。

中山の觀音堂

中山の此堂に觀世音をすへて、これより女の登らんことをとゝめたり。猶、おく山のおましにまうてんとのほるに、やをら晴たりしかは、遠近のしけ山いやかさなりて、としふる眞木の生ひたてるは、ひともと伐ても空かきくもりて、あやしのしるしあれは、かく、ちとせふる中に紅葉染わたしたるに夕日てりて、うら／＼のこりなう見やられたるおかしさ、たくふかたなし。

日照權現の由來

この神は、なかむかしの頃、すきやうさ、下風呂の礒やかたにふしたる夜、あか川の礒の山おくに、しちようこんけんといふ神おましませりとのみさがあれは、分のほり歸りて大畑に至りて、其あたりもるうはそく三光院のあさりにとへは、こたへに、露しりさふらはぬことにこそ侍れ。にちようの文字日陽にやあらん、日曜にや侍らん。むかしにや、さるためしなけれは、かしこきみさかのことく、此時ゆ日陽の神とあかめしを、このころは日照權現と申奉るは、あまてらす大神と大日如來を石にてすへ奉れは、しかいふにや。ぬかつき奉

る梁の札には、延寶のむかし、大はた大安寺にすゝめりし一東禪師とかやか、閉の郡宮古島邊のくろ森か嶽をこゝにうつしたまへは、山を、もゝとせこなた、しか、なつけたり。むかしは赤川山とのみいひき。さるゆへ、赤川の水上の瀧の中の不動尊を奥の院といへり。山賤なと、まれにこゝに分れは瀧にとひ入て、此いはやを拜み奉るといふ。みね、谷、のこりなう染なしたるをしはしとて見つゝ居れは、御前のうはそくまて貝吹とよみくたりはつれは、すへなう一枝折て休らふに、けふの祭りしをへたる具ともとりもちたる男等、はやいきね、又雨霰ふりこんといさなふにまかせて、

折とるもまた初しほの薄栬ふらは時雨にます色や見ん。

やかてくたりえて、大澤のひとつ庵にとふらひ、あるし龜麿とかたらひてふしたる夜半に、鶴の聲〳〵浪にうちまきれて行を、

いねかてにいそやは夢も浪枕よる鳴く鶴の聲をこそきけ。

二十日。きのふのことに、ひふりてけるに、雁の一行、なみちはる〳〵と行か、爪に見けちたるはいつこにと、

誰かかたをさしてあられの玉つさをかりのつはさにかけて行らん。

廿一日。けふはおのとりなりとて、野に在るとあるあら駒をこゝらの人かりめくり、牧中に

作たる追込てふ、さゝやかのらちのうちに、おく野の駒殘なくおひこめて、さいとりといふ大綱をくひにひきかけてとりえては、盛岡のいなきに引とて、近きむら〳〵より二百あまりの人行に、はまみちもさりあへす、夜邊よりあしたにむれ行ぬ。千千里の磯見にいきてんとなきたるまに見やり、「ちゝりはまてふことを、

海士のこく舟とも見へてもみちちりはま風さそふ浦の山かけ。

こは頼義の君の御足かた、硯のかた、此いはやごは、尻屋の崎なる鬼（蝦夷人こもりたるを、しか、おにとはいふ也）を征矢して射たまひしところにこそなと人のいへり。春見しよりは、うなのけしきことかはりて、きし邊の浪なこやかならす、山にひゝき、谷にこたふ音すさまし。うへ、冬をまつ千鳥のあさるこゑ〳〵、こゝかしこに聞へたり。

冬近みはま風あれて鳴ちどり聲もちゝりの浦つたひして。

廿二日。風いやふきにふけは、こよひはかりはとてとゝめられて、いねたる夜半に、まかちとる音にやと聞は鶴の行にこそ。

よるのつるなれもわすれす子を思ふ親ます國のいとゝ戀しき。

此なかめにひとりなみたおちて、やゝいねつくやとおもへは、ふるさとにかへると見ておとろきてさめたり。

おもひやる袖に時雨はふる里のはゝその梢ちゝのもみち葉。

廿三日。この一庵をいてたつにのそみて、あるし龜麿、かゝる翁の身は、なこりおしみても猶つきせしなとありて、

玉くしけふたゝひとひてみちのくのけふの細布立別るとも。

とそよみける返し。

又いつと契れさこゝろ細布のたち別行けふそものうき。

栗の子淸水

夏のころ、むすひたゝすみし淸水のもとも、すさましく過る。これやむかし、薰陸香はりいたしたるほとりよりわき出る瀧なれは、くんろく水といふへけれと、人ことにみないひたかへて、もはらくりのこ水といへり。

磯山のあらしにつれておちくりのこするやいつこつとにひろはん。

ひろははや太山のおくをおちくりのこの水さそひ流來ぬらし。

馬、牧を戀ひて

おほま、おこつへの牧より六十あまりも野とりの馬曳出て、村々にたちかはりて、こゝらの人の田名陪のあかたまてひき〳〵行か、あら駒の力なれは、はゝたうま、ふたとせのわか駒にもみな大つなを附て、なゝたり、やたりも此つな手にすかりて、はまちをひくに、こしかたやおもふならん、引かへされて、しさり〳〵駒にひきやられて、つなたゆると見るに、赤石山

大畑に歸る
かくちわらし
米あられ

の山みちにとりはなちたれは、すみし、うまきのかたをさしてはせめくるは、けに、こさはりにこそと。

　つまをおもひ子にひかれてやすむ方に心おくのゝ牧のあら駒。

二牧橋てふ山かけに、ほのかに鹿の聲せしやうにおほへて、

　そことなくつまこひ迷ひ小雄鹿やいつれの山のかひよとそなく。

みなとへの川岸の紅葉、いとよく染しと見つゝ舟にのりて、

　めつらしな綱引ふねのくりかへしみきはの紅葉時雨ふる空。

ほとなう晴て、おほはたに來て田中の家につく。

廿四日。うし曳あけまき、あやまちて、折かけかきのやふれより、かくち（閘地）とて、人のやのしりにうしを入たるを、やのあるし、とに出て、このわらし（童をわらしといへり）かきねくゐていけとて高こゑにのゝしりぬ。このこと、「小山田のいな葉をこむるくゐ垣の人うらめしき夕くれの空、といふうたのこゝろにかなひて、かれらかこゝろありて、わさとせしやうにおかし。

廿五日。ある寺にいたれは、これめせとて、米丸雪てふものをおしきに盛てさしいたして、聲さむけに、やかてみほとけに、あかふるすゞの聲したるにおもひつゝけたり。

　よしの山ねこしや分てあしたよりらんさんめくるれいのこゑ〳〵。

栗ばせ

又青く黄なる硯のふたに、梨子、栗、榛をいたして、この名ともみなかくして、いまひとくさといへれは、

くりかへししくれてあをきいろもなしはしはみねより染出にけり。

此あたりのそのふのかけに、はてをゆひてそかくへかりけりといふものを、ふせやのやうにつくれは、雨露にもぬれす、鳥もあさらす、いとよけん。栗かくるを、あははせといふ。此かたはらに、ものゑんしかほにわかき女のたてるを、いさなふ人の見て、このあはばせといふこともありて、あなる女のふりも歌につくりてといへは、

飛鳥川なかれて末もあははせをふちとたのまん君とわか中。

と、女にかはりてなかめたるをといへは、しりなる人手をうちてわらふ。

廿六日。いこんくまの浦なる業陳のやよりかへさのころ、やけ山といふ麓にて、竹葉茈胡といふくすり根こしておくりしかは、

植しおかは宿には根さへこの草の花咲よりも人をここそまて。

となん、文にこめておくられたる返し。

うふるよりことの葉の花のまつ咲て根さへこの草茂るをや見ん。

又岩菊てふものゝ、野山のみちに咲みちたるをひきやりてけれは、この草を、庭のくれ芝て

まきのあさつゆ

ふものある邊にうへたるとて、ふたゝひなりのぶのいはく、

ちよこめて岩てふ菊をくれ芝にうへてこん秋君に見せはや。　とあるにも返し。

秋もはや一日二日とくれしはにうへなは菊をこん秋も見ん。

君か宿にうへなはちよもうこきなき岩てふ菊の秋やとはなん。

廿七日。時雨ふりて、あしたいとさむかりけれは、

寒さ増りて

十月またてしくるゝみちのくのそとか濱風いや寒くして。

廿八日。山もさちかくながめやりて、

艶葉のこそめ口なしこきませて山は錦のいろ〳〵に見ゆ。

廿九日。夜半はかりいたく冴へて、あしたの霜ふれるは、雪にやあらんと、菊の花そのにおきまとはせる色の、身にしむはかりおかしうすして、

おき出て砌の霜にふることのためしをきくの花そまとへる。

三十日。秋のなこりさすかにおしまれて、ちりのこりたる紅葉見てんと、こゝかしこのやま〳〵遠う近う見つゝ行に、何の木ならん山田のくろに生ひたてるか、いとよく、もみちたるに、からすの三四ふみしたき居たるを、ねたく見やりたゝすみて、

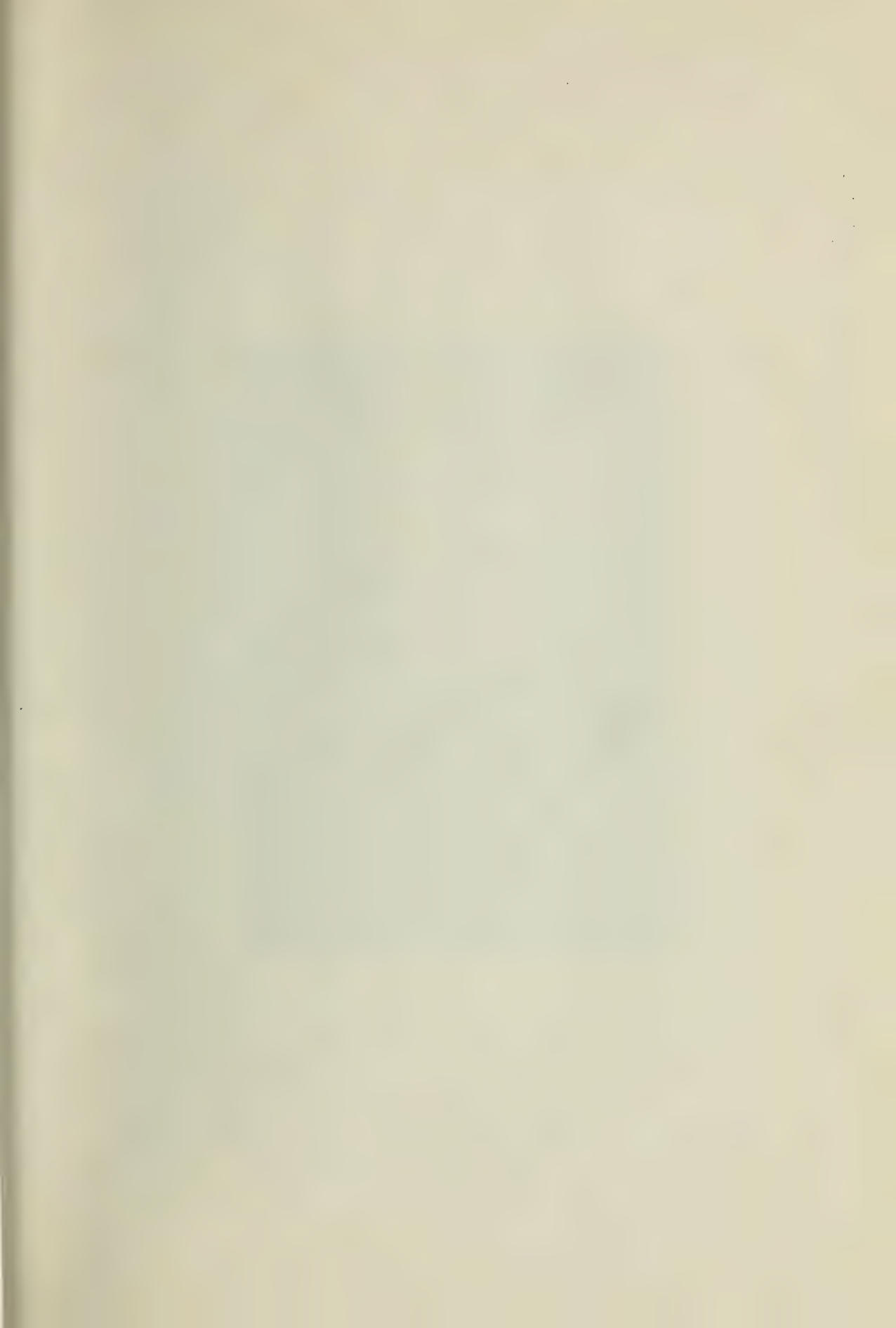
散殘る紅葉

ちらすなよ紅葉のにしきあすも見んつれなくたちし秋のかたみに。

をふちのまき　冬

南部
南部

寛政五年の冬かんな月、みちのおく、北の海邊なる大はたをたち、田名部のあかたをさけて尾駮のまきを經て、壺邑、石碑邑をわけんさて至れとも雪ふかく、をふちのうまきは遠かたにのみ見やりて、ふたゝひ杙𡉏夫に歸來て、此ころしくれ行まて、くにふり、あかたののりを記し、名は鵜布智廼万枳とせり。

寛政五年下北半島大畑にて

かんな月一日。はま風あらく、磯山の梢なこりなう、よろつの木の葉吹ちらし、空うちしくるめりと見るかうちにふり出たり。

冬はけふ木々の艳葉ふく風に時雨いろある遠近のやま。

ときの間に、空のけしきも山のけしきも、きのふにかはりて、そていと寒く、あられこきませて木葉ふれは、

あすよりは初雪またん又たくひあられを冬のしるへとはして。

二日。やのしりなる杜の庚申の堂あるに、相しりたる人さはに居て、はいかいのつらね歌して夜は更にふけ行ころ、われにも、おなしさまにあそひてと人のいへと、えやは其みちたとらんと、おほつかなくも、

衛聞てねぬ夜まつらん神のむろ。

三日の夕くれつかた鶴の鳴行をあふき見れは、月ほそう空かきくれて、さと、ふりすくる音

すさまし。

月もいま雲のいつこに聲はして時雨を渡るたつのむら鳥。

珠阿上人と別る

四日。蟻光山の夜半のまとゐに、むさしの國のすきやう者珠あみた佛の云、近き日松前の島わたりせまくおもへは、この夜あけなはこと浦にうつりて、ふな人なとにも此ことものしてんなと聞へたり。われも日あらす、みやこしまへ、沖の井手も見まほしく、野田の千鳥もきかまくほりして、去年よりかたらひなれし此大畠の浦、田鍋（いま田名部といへり）のあかたをたゝはやとおもふ心あれは、珠あみた佛に、此ことしの春、おほまのうら輪にてはしめてまみへし日より、花にさそひ郭公にいさなはれ、月のむしろに更るをおしみて、おなし草枕にふしなつさひたる友の別れ、しかすかに、つらさ、いはんかたなきをりしも、山かせに時雨くれは猶おもひまさりて、

あすは又このもかのもにむら時雨ふり別行袖や沾らさん。

となかめたるを珠阿上人返し。

袖の時雨ふりわかるとも河水になかれて末のあふせをそまつ。

五日。珠阿上人、けふなん下風呂の浦まてといひて、誦心うはそくのやをたち行とて人つてに、「凩に袖吹分る旅路かな、といふ句贈られたれは、「梔の落葉人のことの葉、と和句せ

り。

光り物飛ぶ

六日。この夜戌のくたち斗、望の空よりもあかく、おほきさ、くゐまりのことき ひかりもの、又ひかさのことく見し人もありて、きたよりにしをさしてとふ。その音、なる神のことし、世にいふ天狗てふ星のおち行しにやあらん。沖にいさりするあまなとは梶をたへてにけかへりしと、さはきたち、みなとに出て、あとのみあふきぬ。

七日。夜半より冴へて、あられ、雪をあさむく斗いたくふり、

初雪降る

八日。あくるあした、まことの雪めつらしく、みちうつむまてつもりたり。

　めつらしな秋に時雨てみちのくはきのふのあられけふの初雪。

九日。あしたより時雨して、ゆふへ、てるやとおもふ月のしたつかた雲一むら行に、はた、ふりなから、月はいと清く冴へたり。

　月の前にしくるゝ雲を吹さそふかた山おろしこゝろありけに。

十日。蟻光山のみてらのまとゐに、「夜時雨。

　うちもねす袖こそぬらせ小夜しくれ夢さへかゝる草の枕に。

「行路霰といふことを、

　花とちり玉とこほれて行かひの袖にあられのふるのなかみち。

めつた町
心光寺音柳

十二日佛參

「橋邊霞。

とたへなくふれるあられの白玉のをたへの橋に風わたるなり。

十一日。此里のめつた町（天註――メツタ町てふ名は、むかし目出度町といひしとなれと、此名松前の島にもあれは蝦夷なとの詞にや。さらにその文字もなけれは、此おほはたにも今は南町とそいひける。）といふ、やゝはつれに、石橋かけたる月照山心光寺とて、なもあみたふちとなふみてらに、三野の國おほかきよりすめる音柳といふ老上人、みつわくみたる身にあつ〳〵と紙衣きて、ねんすを耳にかけて、火桶のもとに、かうひねりしておはしけるにまみへて、うちものかたらふほとに雨ふり出たりしかは、

こゝに今袖もぬらさて雨しのくみのゝ中山きたる（分し（マヽ））かひとて。

この上人、たゝねんふちをむねと、かたらふひま〳〵にも、ひたすらとなへ給へは、月照心光といふことよりおもひつゝけたり。

后の世のやみやてらさん月おもふ心の光さそなしられて。

十二日。なもあみたのをこなひ、ほくゑ經のをこなひにまうつるこゝらの人、空には、ねところに行からすおほくむれたり。

夕風につはさふかれてむらからすねくらもとむる聲さむけ也。

十三日。例のなかてらにて、「夜木枯を、

夜とともに霜をやはらふ木々はみなちりてさそはぬ庭のこからし。

十四日。雪のいたくふるに、とに出ありけは、いや高き垣根の松に松蒐のきあさる。

秋もかく聞や野はらも近きやの雪のふるえの松むしの聲。

十五日。蟻光山にいたりて、なもあみたといふことを折句うたに、

なかき世をもらさぬちかひあなたふとみち引たまへとたのむ人々。

十六日。ある夜のまとゐに北村傳七といふもの、過しころ、久尙志理のゑみしら、あらぬすちにいかりのゝしりたるその島をはしめ、禰毛呂にわたりて、七十人あまりの人を毒氣の箭ほこしてころしたるに、われのみは、ゑみし、としころめくまれたるむくひおもふにや、いのちまたくせよとて、舟してはる〳〵と送りたり。又としは、いそちに近きまて、しくまにも三たひかけられて、身はいくはくもやふられ谷そこに夜をあかし、ふねに在ては梶折れ、ふねくだけて、やふれたるさゝやかの板にのりて、しほにいさなはれて三四日海にたゝよひ、いろくすにあし手くはれて、からきいのちたすかれは、世中、これにたくふおそろしきめはあらしかし。これや、神ほとけのたすけ給ふならんとてさりぬ。此人にかはりて、

のかれこし蝦夷の海山あさからぬ神の惠そ身にしられぬる。

夜邊いつこに在て、たれとなうかたらひて、「折とりてかさしやすらんみちのくの○○○

道に薄氷

○花のしら河のせき。」と、なかめたると見て夢おさろきぬ。このわすれたりしところを、

　折とりてかさしやすらんみちのくの盛よ花のしら河の關。

とおもへと、させるふしもあらしかし。

十七日。あしたよりいて立はやとよそひすれは、時のまに雨頻りて、（うまさくりのみち行ことあたはし、わきて寒さもしのきかたかるへしとて、情あること葉して）（以上括弧内の句は、原本、朱にて抹消しあるもの。──編者）あるしのとゝめけれは、

　旅衣たゝは袂もぬれなましこよひもおなし（雨の（マヽ））宿にしきねん。

此夜なか寺のつとひに、句ありてと、ひたふるに人のいへは、

　圓居して時雨をよそに聞夜かな。

十八日。きのふまて冴へてしみ殘たる雪の、よへの雨にふりけたれて、とけみちたるちまたのぬかりなとに、うす氷ところ〳〵にゐて軒端ことにたるひかけわたしたるは、ことにいや寒く見やり埋火のもとに在て、

　ふりくれし軒の糸水よるのまにむすふつらゝのとけぬ寒けさ。

此夜うまのはなむけして、たかへなとのまさなことに、とりの子もちひといふものにとりそへて、いけた包幸。

さけすかぬ人はうさきのたくひにてもち待かねて消へんとやすゐ。

といへるを聞てこたへに、おなしうたはれて、

さけすける人はしらしなあなうまやうさきのもちにきゆゐおもひを。

十九日。あしたより雨ふれは、けふのはれまもあらはとためらふに、いけだ包幸てふ人の、

けふははやたちわかる日となりにけり時雨よしばしふらすともあらん。

となんありける返し。

はるゝともぬれてゆかましこその葉の情の時雨かゝるたもとは。

高喜の翁。

なからへて又もとはなん老の身のかしらの雪のとしつもるとも。

かへし。

又や逢んちとせをかけて松か枝を友にかしらの雪つもるとも。

みなとや邦政。

旅衣たち別れ行あしたよりかはらて來ます日をやまたなん。

かへし。

たひ衣袖のあさしもいかはかりおくゆかしくもたちかへりこん。

蟻光山寶國寺にすみ給ふける深阿みた佛。

神無月時雨て越へん旅衣なみたちかへせすゑの松やま。

といふなかめして給ひける返し。

末の松山路しくれてたひ衣こへなて波のたちかへりこん。

むらはやし、おにのたくみと名に聞へたる時明。

大空の雪をつはさに行雁の聲をふたゝひこゝに聞なん。

返し。

雲井路をかへるつはさゝ春は又衣かりかね立歸りこん。

かくてこゝを出たゝはやとおもふに、雨又ふりいつれは家のぬし、こよひひと夜はかりはといひ捨て、とに出行けれは、なこりの言葉たにあらぬふしをいひて、そかめのせちにとゝめて、あるしのかへりくまてとまちて暮たり。

大畑を立つ

二十日。けふも日よからねは、えいてたゝす。人々とかたらふ。

廿一日。田中のやをうまにて出たつ。野畔のはままもさけて正津川近う、右の山かけに外山てふ山里のほのかに、はさまよりしくれて見へたり。

冬來てはいや寒からんすむ人のたか袖山のかひにしくれて。

法呂權現

田名部にて

ちゑからちゑから

椛山に、うしあまた曳捨たるに、「冬來てははむものもなき牛の子のやせ行里の頃のさひしさ。」と、慈鎮和尙の詠めたまひしふることをおもひ出て、

かれ殘る芝生も雪のふりしかはやまのかひなくうしや曳らん。

女館の坂みちに、法呂權現といふさゝやかのほくらあり。此神ところ〳〵にあかめ奉は、ある人の云、これなん秀衡のうしのみたまをあかめ奉る、あら人神にてわたり給へと、もはらしれる人もなしと。

引わたす杜のしめ繩くちなから梢さひしくかゝるみやしろ。

田名部のけふの市路に馬のり入て、新相か旅館につきたり。

廿三日。きのふ、けふ、時雨いたくふりてくれたり。成章のやをきのふとひしかと、たかひて、あはさなるを恨て贈ける文のおくに、

ふる雨もいとはすもとへあひともに通ふ心をみの笠にして。

となんありける歌の返し。

ふる雨もいとはてとはん人をけふみの笠やとりしてかたらなん。

廿四日。うなひのあつまりて、「ちゑから〳〵」と聲〳〵によはふに鴉のあまた來れは、よね、おこしこめなけて、はましむ。

うなひ子かよはふになれてむらからすむれて梢をよそに鳴也。

秋あぢ

廿五日。ある人のいふ、七日の日海あれて、秋味（鮏の鹽引をしかいへり）つみたるこゝらの舟、はなたれしつみしとかたり傳ふる。

廿七日。山本世献の家に在て雨のつれ〳〵に、楚泊てふ、めしゐひとのよめる。

おもふとち雪まちくらす冬日に雨のふるこそつれなかりけれ。

といふを聞て、おなしうおもひつゝけたり。

まちわひて圓居に雪と見る雲のいかにつれなく雨となるらん。

松前にて漁船遭難

廿八日。松前よりふみ來りけるは、西なる蝦夷のくにスツ。ツといふ島こきさけて、ふたもゝちのふね浪にいさなはれ風にはなたれて、あるはべんけいてふ島なかに船のみとゝまり、あるはちりのやうにくたかれ、人は三百あまりもうせたり、とかいたり。そのふなぬしも、のりつるあまたの人も、みな此あたりより行たるとて、そのめこのゆかりの男女、聲とよむまて、家こそりよゝとなきぬ。

椎の實といふ筆

廿九日。大はたの里より、ふみおこせたりけるにそへて邦政の、椎の實といふ毫を贈ける。此かへりことにくはへてやる。

ふるさとのつとにひろはん椎の實の筆の情もふかき言の葉。

又おなし里なりける伊之といふ人。

　ふみまよひ又歸りこん君か行みちふりかくせしら河の關。

となんよんて贈りけるに返し。

　せきなくも越そわつらふしら河の雪にたくふもふかき情に。

深阿みた佛の、ふたゝひかい聞へ給ふうた。

　又もこんかた見とみまし言の葉をかきもとゝめよ壺の碑。

このことのかへし。

　とひむつひなれし名殘の言の葉は書つくされぬ壺のいしふみ。

いけた包幸の、ふみにまきそへて、

　しなのなるふせやに生ふるそれならてありとはきけと逢よしのなき。

と、よみたるを見つゝ返し。

　かたらひて逢と見しまもなか〳〵に夢の伏屋のよな〳〵そうき。

かんな月のしくるゝ空のならひも、雪ませにあられふりくれて、けふなん霜ふるといふ月の名も、あさもよひ、きのふよりつゝくみゆきにふりけたれて、行かひのみちもやゝふみわけて、はれ行此あさひらけ、沖行ふねのほから〳〵とおかしけれは、近きあたりのけしきなつ

かしく、見まほしく、きつねのかはころもきて、名におふ十府のこもやうにあみたる、はきまきして、またふりのつえに、みつわさす老のまねひして、たなべのあかたを西に、はつかはかりゆきて万人堂の杉むらを左に、いにしへのかんなや、にごろし、うそり川の名ある、今いふかなや、ひごろなどいふめるあたりを分んと至る。三本松とて立る邊にたゝすみて、釜臥の山の麓にあふき、足埼のいと長く、つかろの沖邊まてさし出たるは、ゑもいはんかたなうおかしく舟の居れは、

浪速かたそれにはあらぬ崎の名の蘆にさはらぬあまのつりふね。

しはしのほとに見けつはかり、いはきの山は、うなのうへに遠う、見へみ見へすみ見やられて、

つかろちやそれといはきの雪と浪いつらをいつらわきて見なまし。

いやふりし、たかねの雪をふりあふきて、たはれうたひとつ。

釜臥に足崎あれはかなへとも三もとの松の立るすかたは。

二日。この夜半うち過るをりしも、雨いたくふり出に鶴の聲して、

子をおもふなみたの雨のはるゝまも鳴てやたつの羽ぬらすらん。

三日。あしたよりふりたる雨もをやみて、夕日かけろふ一村雲を吹さそふ風、たもとに冴へ

岩木山遠望

地震あり

名残を惜む

田鍋の人々別離の贈答

たり。

　雨はるゝかた山林いや寒くたゝよふ雲やゆきけなるらん。

十三日。この十日はかゝり風おこり、こゝちよからねはしるさす。ふしかちにをるに、申ひとつならんか、なへ大にふりて、家を捨て雪のなかに、ものもふまて、みな、とにかけり出るは、去年の冬にひとしかりき。

十四日。村木たれといふかやに、竹の画のさうしの前にすへたりける、鉢の木の五葉の朶の灯にてらされて、おなしやうにうつりたるを、

　枝かはす松と竹との相生やちよにちとせの色そあらそふ。

となかめて、こよひの、ほきことのあるしにやる。

十八日。近き日、こゝをいてたゝはやとかねておもひをれは、心のあはたゝしく、なにくれと、めにとまることともおほかりつとも、かれと語りこれとかたらひつれは、心のいとまもあらさめれは、かいもらしかちにくれ行、山のはの木するあらはに、いとおかしう月のさしのほりたりけるを、

　袖ぬれてあはれかつそふ又や見んかた山きしの月と雪とに。

十九日。こゝの人々、わかれのつらき心やりにとて、それ〳〵にをくりける。中嶋杜美右門

公世てふぬし。

雨雪霏々日　相憐遠送君　行裝翻去後　離恨與誰分

前路無由眺　經過全隔雲　爲今欲賦別　情極不成文。

といふ、からうた作てをくりけるに、むくひせはやと、分と文とのふたつの文字をものして、

雪にきるみのしろ衣たち分れ行〳〵見なん人のたまつさ。

このぬし、ふたゝひ、くにふりして、

たちわかれ又のあふせを玉川の岸邊の波のかけて契らん。

となんよみける返し。

わかれても又の逢瀬はみちのくの野田の玉川なみのよりこん。

齡香山德玄寺の新發意寂秀、みくさのくしつくりて給ふに三くさの和歌をもてこたふ。

西山白雪共銜杯　興盡南天已欲囘　如使笛聲在雲外

向來偏待鳳皇臺。

このしるんの囘と臺とを、

雲見つゝむかふ盞いくめくりめくりてとはん君かうてなに。

三徑蓬蒿幾送迎　交遊如水是平生　從今欲問相思意

千里江山共月明。

又いつかみつのみちしはふみしたき君とあふかん月のくまなさ。

となんありけるに、

別離盃酒一登樓　山外漫々萬里流　東海半天蓮嶽雪

羨君今日到三州。

はた、この流と州とをとりて、

雲水の身はふしのねのゆきなかれめくりても又とはん此くに。

やまもと世献のいはく、

又こゝに逢てふことはかた糸のよるへはいつと契おけとも。

といふなる返し。

又いつと契しおけは逢ことは何かたいとのかけてとはなん。

菊池敎政のくしに、

之子幾年凌海濤　則今歸路吳山勞　由來詩賦故人癖

鄕國定敎價高。(マヽ)

濤てふもしもて返し。

あさからぬ人の言の葉いつまてもかけてわすれしおくの浦なみ。

くすし吉田懐貞のいへらく、

けふこゝをおして行ともたちかへれあたゝら眞弓春はふたゝひ。

かへし。

みちのくのあたゝら眞弓春は又君にひかれてたちかへりこん。

きくち満茂の云。

逢までとかけてたのまん八橋や水行蜘手思ひ渡て。

となんありけるに、

別ては戀渡らなん八橋や水行蛛手ふかき情を。

又此ぬしのよめる。

又いつかこきも寄なんつなて縄かけてたのまんわかの友舟。

このかへし。

こゝに又かけてむやひのつな手縄さしてよりこんわかの友ふね。

きくち成章、かさねてきませといふことを、歌、ひとくさのかしらにひともしをおいて、七首のなかめ贈られける。

かきりあれはよし歸るとも春はくる雁にたくへよきたとおもはん。
さらぬたに餘波そおしき玉くしけ二とせむすふ露の情は。
ねにたててわれやなかかなん郭公雲井のよそに聞むとおもへは。
手にふれておもひな捨そいそ菜つむ海士の形見のしるへ斗を。
きみゆかは蜘手にかけて八橋の川瀬の月をおもひ渡らん。
まとゐせし夜半の契のけちやらて猶かき起す埋火のもと。
せめてわかなくさめにせん年ふとも絶す三河の水くきの跡。
となんありける。おなしさまに、かへしものし侍らんとて、
雁かへる方はそことも春毎にしらぬ行衞を北とし〔の〕はん。
さして行袖はなみたの玉くしけ二とせなれし君にわかれて。
ねては夢にさめてはうつゝ時鳥聞し夜頃の友やしのはん。
手を折て年へすとはん磯菜つむ形見斗をしるへとはして。
きてもとへ君かわたらはやつ橋の蛛手に月の宿るをや見ん。
又こゝにまとひやせまし埋火のもとの心をいかゝわすれん。
せき遠くよししら河はへたつとも吹通ふ風の音信やせむ。

なかしまきんつく。

不須三疊陽關曲　横笛贈來恨別促　君若試當明月吹

可懷離室屢剪燭。

といふ、くしを作て笛をなん贈ける。そのかへりごとに、くはへてやる。

笛竹のよる〳〵月にしのはなんそむけかたりしやとのともしひ。

河島荷方の、

去年雪裏始逢君　今歳別君雪又紛　行見芙蓉峰上色

應思此日泣離群。

雪にとひ別て雪のふしのねを見つゝしのふの山はわすれし。

かゝるしゐんの、わきて情ふかうつくり聞へけるに、いとゞ餘波もいやまさりて、このこたへ、れいのふりに、

まことや、こそのかんな月はかりにこのやとに行とふらひて、おもへは、ふたとせあまり、こゝらの人々になつさひたり。

二十日。雨のふりて、いとゞものうく空のみうち見たるを、これや世にいふやらじとて、雨は七日ひをふりなんと、やの女翁のほゝゑみていへるに、

かきりある雨は七日に晴るとも宿の別の袖はかはかし。

人のいさなふにゆけは、あるやとの、やのうへのまひろき處にありて、うまのはなむけにとて、さけ、さかなとりくして、あるしめけるわさに日もはやくれなん頃、猶きそひて、かれこれおもふかきり集りて、いかにおかしくあらんとも、かゝる太雪のなかを野行やま行わけゆくとならは、ふみたる道もなみ、しらぬ山路にまよひ身もうしなひてん。此年の日數もいますこしやあらん、たひ衣おもひたちとまりて、あらたまのとしたちてんをまちてなと、ねもころに聞へけれは、いらふることもなく、

ふる雪の情もふかき友かきの圓居もあかぬ宿の夕くれ。

廿五日。けふも空よからしとて、これにかこちかましう、おもふとち、うちものかたらひ、

旅ころもたちこそわふれおもふことかたるにいとゝ心ひかれて。

廿六日。此夜あけなは、とくも出たゝんと、ひたふるにおもひさためつれは、老たるわかき、まめ〳〵しき心に別おしみつゝ、こはかなし、ふたゝひ此世のたいめこそあらめなといへるに、いとゝ、去年の冬より馴むつひぬる縣の、なこりいふへうもあらす。

廿七日。かとでせり。横濱てふうらつたひて野邊地のみなとに行へけれと、あれこそまされなつくものかは、となかめある尾駮の牧も見まほしく、雪のふるあとをたとらんさそのす

盆花平

舘八幡の社

青平の熊野社

ちを分て、朝夕見やりたる赤阪の岡邊にかゝれは、夏のころぬさたいまつりし、やふねとようけひめのとりゐ雪の岨にたてり。

山の名のまはにの色を雪の下にうつまてそれと三の神籬。

石神をへて、ぼんばなたひといふ野あり。こゝに、ふん月の頃たまゝつるにそなふ粟花（をみなへしをしかいへり）の多けれは、かくいふとなん。きちかう、水かけ艸にましり、女郎花の、野もせにさけは、これを盆花とこそいふめれ。

手折にし秋の花野の露は霜と日數ふりつむ雪の下草。

妙見の石のほくらは雪のしたに埋て、鷄栖のみ、すさましう雪の中にたてり。田屋の村を左に山路に入る。この林の中に石のたてるに、おほひ作たるをおたてかみといひ、舘八幡と申神おましませり。むかしは谷地中に坐し給ふを、なかころ、まさしの夢のみさかありてこゝにうつし奉る。そのはしめは大同の頃祭しといふ札あり。むかしいふ青森、今いふ青平に着たり。春見し熊野のかんみやしろにまうてんと、あないに雪ふみならさせて、ちさせふる大杉の根はおのつから御阪つくるを、ふんてのほる。うへ、大銅のはしめ祠ひ奉りしかと其札くちて、文明十八年にあらため作るとあり。うちには、みた、やくし、くわんせおんをひめたり。

天魔神

ひろ前にふるしら雪は太熊のゝ浦のはまゆふいくへ（もゝ（マヽ））なるらし。

又天魔神といふ祠に、をはしかたにたくふ石をあまたならへたり。寶永のころをさめたる札に、左藤次郎とかいたる名とも、いまし世の人のとも見へす。よこなかれ、子持なかれといふ山坂を行に、雪いたくふり來けり。とくなかるゝ山河の（きしへ）氷に雪のかゝりたる（うす〳〵とつもりたるに）を、鳥のふみたるあと、ひたにあれは、

水の面に數かく鳥のあとそ見る氷のうへに雪のふれれは。

沙子股に泊る

沙子股になりて、春一夜宿りたる、河のへのあやしの翁かやをとへは、男は、すげのむしろをり、女は布うちおる音たへす。くるれは、をとこは繩なひ、女はあさをの糸うみ居ならびて、女をきな、われにとふ。おやたちはいまたありや、おやあらは、はや、その國にいきね。われも子あまたもたり、近き山に入て杣山子のわさして世を渡るを、寒き日はいかゝなと、朝夕見まほしうおもへは、そこの親も、さそや侍らんなといふに、こは、くしのをしへにもそむきて、けうならす。ほしいまゝに身をほふらかしたることをくひて、この女のいさめにはちらひて、いらへせんすべなう。

父母はなきかとそとふ世にまさは遠くあそはぬをしへおもへと。

廿八日。館にます、やはたのおほん神にぬかつき、圓流寺の上人をとふらひかたらふに、雪

波音は東か西か

雪の山路を

いやふれは、いかゞとためらふに、やの翁入來て、けふ立ば、身は、しみ氷りなん。こよひも、たき火にあたり菅蓙しきねて、明なは、とくものしてよ。はた、行さきのみちはいさよからじ、駒にこゝろして山阪ふみ越よなど、ねもころにいへは、

するまでのなさけをかけてこの宿にまことありけるたひぞ嬉しき。

夜ふけ人さたまるころ波の音仄に聞へたるを、枕かみにふしたる翁の耳とくも、なるは、ひんかしの海か、西の海のなみ音か。ひんかしは晴れ、西の波音聞へては大雪やふらん、風やたゝんといひて、しはふきに、なもあみたとなへませてけり。

あすは又風にたゝはや旅衣ゆきやはらはん袖や冴へなん。

廿九日。あさ日、雪の太山にかきろふ頃、やを出て、小たふけ、大峠、前たふけなといふ、さかしき山みちの雪ふみしたきゆくみたにのそこに、けふり一すちたつは炭やくにやと見れは、むらたてる眞木の中に手代(たしろ)河てふ村のあるにこそ。

山ふかく誰かすみかまと見る斗けふりも細くあさけたくらし。

やま〳〵のみねより尾より、しろき糸引はへたらんやうに雪のみち見へたるは、鹿の行かよひたるとなん。

雪もまた淺き山路をふみ分る鹿のかよひちふりもうつます。

左京沼荒沼

東濱に出づ

道標を立つ

大井邊一泊

夷語ならん

むかし、その人やおちたりけん、左京沼とて大なる水海あるに荒沼ならひあひたるを、めおのやうにいひなせり。ほとなう、あら沼の塘をめくり濱路になりて、行ほとなう小田野澤になりぬ。こゝをゆく海へたのみちは、いとひろう、西はやま〳〵引つらなりて、ひんかしは、はかりもなき海原に岸近う。あらなみ寄せかへる磯に、なゝさかはかりのはしらに、よこ木を入て十文字したるを立たるは、山かせとくはまちに吹來て、ふゝきに、かたをうしなふ人のためにせりけるとなん。いはゆる、しるしのさほにこそあなれと、ふりかへり見つゝ遠さかれは、

遠方にそれとしるしの棹もまたさしてうつまぬ雪あさくして。

ときのまに、はやち吹來て、近きいそ山も見やられす。小井邊（こゐへ）の渡に猶行末かきくれて、

行なやみたゝすむ駒もふすはかりふゝき波風冴るはまみち。

めに近き磯家のほのかに見ゆとおもへは、見けつはかり烟いやたてるところをさして、やとつけといふかたは大井邊のはまやかた也。

すゑくらくしほやくけふり磯のなみたつをしるへに宿やとはまし。

あられ、いさこをみたすかことくふりて行かた遠く、ふゝき、みのをうかつやうはけしけれは、此苦やにとまる。大藺の莚をるをわさにすれは、おほゐべともいふにこそあらめとほゝ

檜皮の燈心に乾鮭の油

白糠の浦

ゑめは、あるし猶笑ふ。此名、夷のいひしにや、むかし此あたりに、もはら住たりけん。こゝの隣の浦を白糠といふも、しか、それらかいひたるならん。いまもオヰへ、シラヌカ、夷のしまにありける名也。むしろうつ翁、くれ行は、檜の皮くたいて燈心にかへ、かすべ、するめのあふら火ともしてけれは、めは、布をるうみそひき、又、おほゐのさむしろをりぬ。

三十日。あさひらけ行ころ出たてご、山さかのみちゆきやられねはとて牛にうちのり、左に海、右にたかやまの雪を見つゝたどる〳〵、

　やま〳〵の雪のなかめにのるうしの遲き歩もとき思ひして。

白糠に至る。やは、濱のたかきしにたてならひ、せんさいめきたる離のあるをさしのそけは、梅のふせ木にやあらん雪に埋しを見つゝためらふに、牛曳、見たまへ、此雪は、こん春のやよひならては消もし侍らぬといふに、

　春かけて雪にうつまは梅花人しらぬかのしたににほはん。

ちいさき岩山に、冬かれの梢しけうたてるに、さゝやかの鳥居、岩のさし出たるにたてりけるは、ほんたのおほん神也。このたかいはの末より、いくはくのたるひかゝりたるは、玉のみはしらともいひてんか。

　あら磯にみかける玉のみや柱ふとしき立るなみのしらゆふ。

次左衞門ころばし

岩石おとしの險

小出に灰を用意す

牛の澤

あけなるいはむらに、ちいさきほくらをつくりのせ、ちいさき鷄栖を立て赤岩明神と齋ひまつる、ゆへやあらん。もの見埼、屛風岩なと見つゝ過て次左衞門ころはしといふ、その人の、むかし落たりけるとそ。そこをなかはに至れは柴のかけはしをわたし、あめに雲ふむこゝちして、岐岨路の外に、世にかゝるへしとはおもひかけきや。行あやうさ、渚よりは高さいくそはくそや、はる〳〵と見くたす大岩の末にふり埋む槇の梢は、雪の下草なとのやうに、下枝には浪のうちかくるすかた風情ことなれと、見やるに、めもからく、足もうく斗、やをらこゝを過れは又坂ありけり。その名を岩石(かんせき)おとしといふ。つねに水あふれなかるゝにやあらん、すいさうをはり渡したらんかことく、行ことのゆめあたはねは、牛追、山かつらも來集り、にのをときはなち、腰なる菅の小出てふ物の中より灰とり出て、氷の阪にまきちらし〳〵くたりかてら、手ことに、とびくちてふものして氷うちやふりて、きたを、ところ〳〵につけて足のたよりとして、ふたゝひさかをのほりえて、あまたのうしをおひおろすありさま、これをしたより見あくれは、あやうさ、たとふへきにものなう、おそろしく寒し。こゝらの牛も、いか斗からきおもひやしけん、冴へわたる空に玉なすあせして、やゝくたりはてぬ。おほあなといふところあり。むかし、野かひのうし此いはやとに入て、はる〳〵といき〳〵てよこはまの邊にはひ出しとて、今そこをなん、うしの澤といふとそ、あけまきらかかたる。

香、素麵瀧
ほつとあけ
彌次郎穴
夷やしき
泊の浦にて

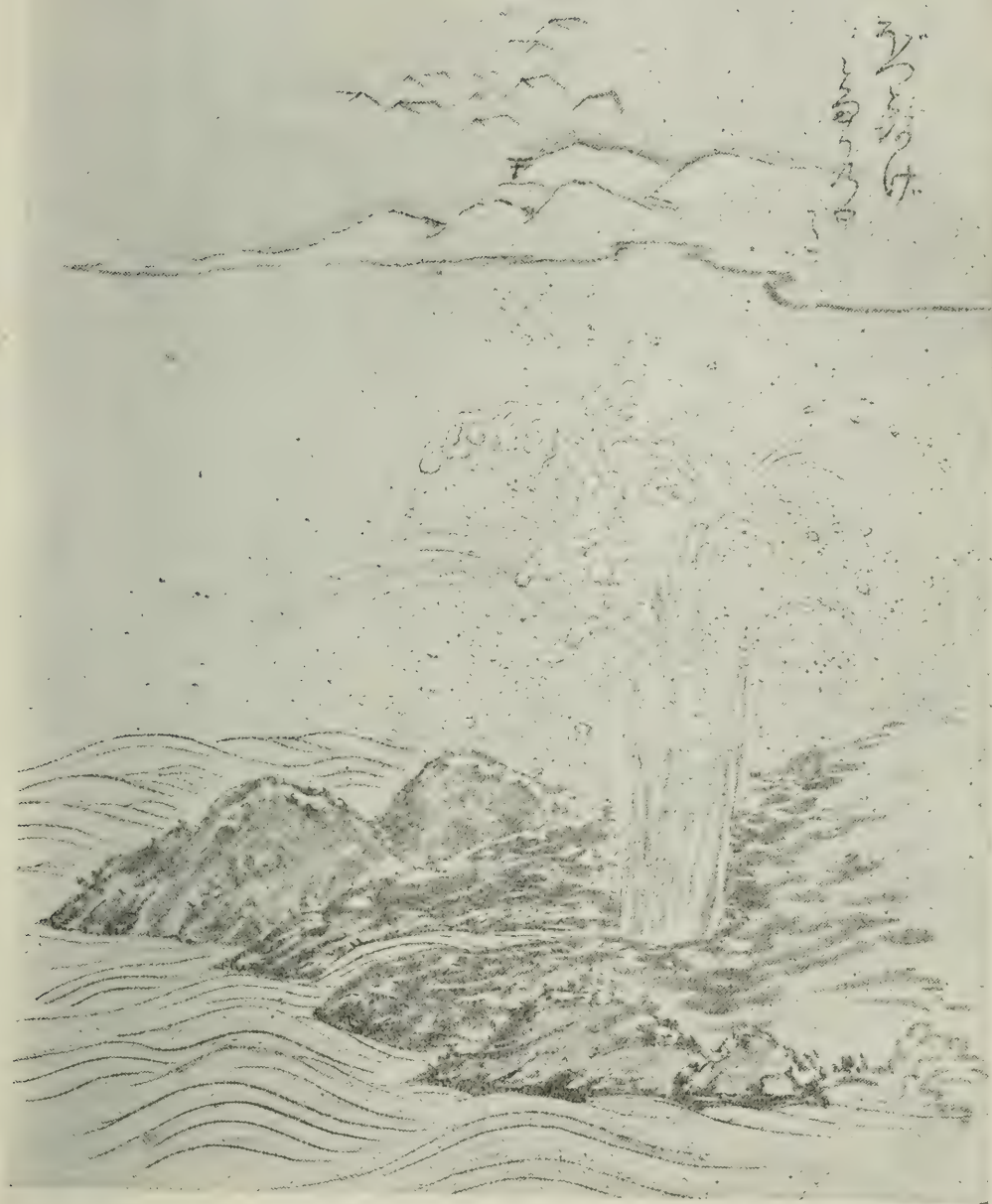
又うしのいはほもありとか。行みちの左右せまりて、みしろきもならさる處を香といふ。素なはかけたるかと見ゆる瀧あり、すなはち、そうめんか瀧と名になかしたり。しらすなのはまといふを行は、あしもとよりゆくりなう、みひろよひろも、さつと浪のたかくうちあくる。こはいかにと見おとろきて、しはしたゝすめは、のりつるうしおひ來て、人のきあつまるにとへは、これなん、ぼつとあけとて、波のよりこぬまにうちこゆる磯邊にて侍る。いさ、引しそきたるひまに、とく越へてといふ。此いそへのふし岩に、長やかによこたはる穴ありて、なみのうちいるゝが、かう／＼と神のひゝきたるやうに鳴り、水はちきの水あくるかことく、鯨のしほふきより、うしほはきとはすかことく、おかしうかへり見れは、ちとり鳴たり。

　花とちり雪とくたけて又たくひあら磯浪に衞なく也。

瀧あり、彌次郎穴といふ洞あり。中山といふ雪の岡のへに、べんさいてんの鳥井ありけるもとに、あけまきにましりて、たちやすらひて居れは、泊といふ浦のやかたにほとやちかゝらん、やのしけく見へたり。

　たとりこし雪の中山わけ來れはこよひ泊のやとそちかつく。

このあたりは蝦夷人のすみしふるあとといふは、うべならん、夷やしきといふところあり。

泊の浦につけは、空かきくれて雪のふりきぬへう見へたりしかは、いまた日たかう、この浦

のをさ、種市といふあるしのもとに宿かりぬ。しはす朔のあした、嵓邊のやうに高きところをのほりて、東海山大乘寺といふ、なもあみた佛となふ寺のあるし、晳擧上人にまみへたり。この寺の門の前は谷越へに橋かけ渡して、そこに水清く行なやむさまこと也。

みほさけのあかくむ袖や冴へぬらんなかはは氷る冬の谷水。

此谷水のほとりに御所大神宮といふさゝやかのほくらあり。人にとへは、いにしへ、なにと申奉るならん、名をは、えしり侍らす、みやのひとところ、いかなるおかしにやさすらへ來給ておましましき。そのみやの御館を、人ことに御所のみやとそなへ奉る。みやかくれ給ひしかは、そこにつかして、みやの御なきからををさめて、めのと小藤太といふもの花折、あか奉りて、なきたまをまつりてとしふるに、此浦のやは、のこりもなう大濤にうちこほたれん、人もあまた、いのちうしなはん、はやしそけと、まさしき夢のさとしありてけれは、みさかのごとく、此たか岡ににけのぼりてその日をまつに、たかはす、つなみより來てけれは、浦人おそりたふとみて御塚を神といはひ、社をたてて御所のみやと祭りたりしを、われをはしめ、ものしらぬ、かゝるあま、やまかつらが、御所大神宮と、おやしうもあかめまつりたいまつれり。おほん神の、靈驗掲焉のみなることそ多かりける。その木村小藤太かすゑは、今も神に

貴寶山の月山神社

つかへ奉る。その家に、つるぎたち、さひながら殘りたるを、遠つおやのもたる、たからとたふとめり。こゝにある坂のほりて行といふ。貴寶山とて、老部の高倉の尾よりつらなれる山に、いてはのくになる月山の神をうつしまつる。そのはしめは、いせのくにの、あのゝつより來るふな人、おほんしめしのありとて、三十いま二といふとし、すけして廣貞といふか、寛文のころわけのほりしをはしめに、今も水無月二十日に祭りすとなん。あふき見れと、そのいたゝきもつゆあらはれす、雪けの雲ふかうかゝるやと見るかうちに、雨とふりかはりてけれは、えいてたゝすかへる。

石地藏を屋根に

小阪よりは下なるやねに、石の地藏をすへたるはいかにと見れは、むかし、石の工かつくりあやまちたるを、そきたを風の吹やらぬ料に、又みほとけのみかたしろなれは、何となう、やのうへにすへおきたるを、すきやう者なとは、たうときことにおもひ、なむやのむねのちそうそんと、かねうち、たなこゝろを合となん。

ひつたて皮

二日。あさとくものしてたゝはやとのそむに、きのふの空にをされと雪あられふれは、人のぬきおける皮ころもをかりきて、ひつたて皮とて、大なる熊のあら皮にひもつけたるを、かたよりかけたれは、末はあまりて、むかはきのことく、のりたる馬のかしらまてかゝりて、はき、つゆさむからず。

吹雪烈しく

うつかことく、雪あられ、ませふり來るをさそふ磯山おろし、はけしうふきむかふを、しのき〳〵行は、うまも人も、しろたへに雪にさへ邇り、吹もをやまぬ風に

出戸邑

尾駮牧傳說

目いさゝかも見ることあたはす、野原の雪、磯邊のあら浪のなかを、おのかしりたるみちを
こそたとらめと、瀧の神籬、そうせんの社の前をへて馬門といふところを過れは、ふる河と
いふも雪に見へねは、

けふいくか雪のふる河埋れてたつとも波のいや氷るらん。

北川、南川といふ河のあはひより、矢萩かたけといふ見ゆるは、これも廣貞法師かひらきし
といふ。片道、石川、たな澤なと、いのちしぬへうおもひして、ふゞきに行末もしられねば、
はつか二里斗を行なやみて出戸(てど)といふ邑につきしかは、やはなへて、くゞの繩なひ、ささめ
の莚をるをわさにして、ゐならひたり。こゝに宿て、小夜中に風猶はけしう、とは、蘆のすた
れして雪垣めくらしたれと、ひまあらけれは雪のふき入て、いもねられす。

竹の名のさゝめさむしろしきたへの枕につもる夜半の白雪。

四日。けふも雪ふりにふりてふゝきはけしう、はま風のこゑ、浪の音よりもたかくひゞき河
へわたれは、えいてたゝす、火の邊にのみ在て、あるしとかたる。此、でとのはまよりは未申
にやあらん、戌亥にやあらん、たかまぎといふありといへるは高牧にや侍らん。山の尾のや
うにして、ほとりに水なかれ木立ふかう、をのづからのあら垣をつくりてけるそか中の原な
れは、いにしへそこに牧ありて、尾かみまだらに生ひみたれたる駒の產れしをなん、みかと

今は有度野

大馬出でし

七鞍の塚

出戸を出て

に奉りて、もはら尾駮の駒といひ、うまきを、尾ふちのみまきとなへわたり、高綱の騎し生唼は七戸よりといへは、これも此あたりよりいてしといふ。此高牧の木立、あれうすらきてけれは、牧の駒とも、とにむれ出て、おのかいかましき方にうつりて、尾駮（をぶち）と、室の窪村とのあはひの相の野といふに求食行て牧となり、こゝもたよりよからねは、野邊地に近き有度（ありこ）になりてけるを、今は倉内（くらうち）の野良に放ちて牧となれと、名は有度野に在りとそかたる。いつも冬來れはとりて其邊の村々にやしなひたて、やよひの末や、雪もけちはてて、わか草靑くもへ出るを見て放となん。いつの頃ならん、出戸より、いとあさましきまて大に、つねのうま四五かたけして牧の駒ともをひし〳〵とくひ、人をも追めくる馬の出てけれは、村の名もでととよひ、その馬の見あらためはかりし處を高架と名つけ、かたちのたいらかなりしとて、そこなる沼を平沼とよひ、馬の背いと長く七の鞍おくによかりけれは、其おき見しところをくらうちと呼ふとそ。此うまは、ゐころして埋みおきたりける、其つかを七くらといふといへり。なかむかしのころ、やんことなき君の仰とて、なゝくらのつかのしたにかくしたるうまの、まことに大なりしか、そのしら骨ひとつとりこと、のたまひしまゝ御使をいさなひて、つかほりこほちて、背のほねにやありつらんめくり二尺にあまりけるを持歸り給ふとなん。

五日。朝ひらき行ころ、出戸邑をうしろにいてくとて、

又たくひ嵐もたへてしつかなるあさてとほその雪の明方。

老部川過ぐ

けふは、うしにのりて、みちも行こと、とからす、雪をたさる〳〵も、水なしといふ小川のへたになりぬ。

夏はかれ冬は氷のとちはてて水なし河の名になかるらし。

尾駮村近く

老部川といふあり。こゝにも、過來りつる浦の名のあるはいかにといへは、をひへの山のつるねよりおちなかるゝ水なれは、しかいへると。ゆく〳〵高牧は、掛棧(かくはし)、地獄澤なとそいふめる、むかつをのこなた、烏帽子山といふが、まそのすかたして、そかひより見ゆ。その高砂のしたつかたに岡のことく、雪もふかからぬかたに、かれふの色のほのかにあらはれたる。それなん尾斑のまきのふる跡と、ゆひして人のさしをしへたり。いて、そこに分てんといへは、雪ふかうして、なか〳〵ふみわくべうもあらしかしとて、さらに人もすゝまて、よしいきたりとも、おかしきふしもつゆ侍らし。はた、みちのみふみあやまち、あらぬかたにたとりて、あら山中の雪の中に命やしなん。こん春を待て、ふたゝひ見にこそ來れなといひもて、尾駮(をぶち)の村近くおふ。うへ、尾駮のうまきは、みちの奥にはあらじ、又其名もあらば、うたかふかたはあらしなと、むかしよりもいひまよひ聞へたり。かの山いと近う、雪のおもしろうふれは、牛の上に見やり、

かれ殘るあしの花毛の色と見ん山のをふちの牧のしら雪。

尾駮沼

いと大なる湖あり。此水上は、細きなかれの落來て淀と成ぬ。この水海の、とはあら海なれば、あさな夕、しほのみちくなるをり〳〵は、もろ〳〵のいを波にいさなはれていり、冬の半よりは、鯡のあまた入くるをとらんとて、水の中に、山田もる鹿火家のやうなるちいさきやを、はたち斗もつねに作ならへてけるに、雪のふりかゝりたるはおかしき風情也。

馬手家

此小家の名を馬手（まて）といひて、夜もすから蛛あみといふものに中網といふを張て、それに細き網をひき網のからとひとつにとり、馬手家の前ことにさしおろして、こゝらのいをのあみに入て中網にあたるを、引たる網にはかゝりて、さと引あくるとなん。こと處にて左右（まて）といふは、魚とらんと標滲のやうに杭あまたをさしたるをいへと、こゝの海士は、水海の中の小家をのみいへり。いせの海のあまの馬手かたいとまなみ、となかめ給ひしこゝろとは、いかにやあらん、海士のはかせに、とはまほし。をりしも、氷ゐさるかたを小舟さして、この、まてやのめくりをこきありくもおかしく、うしをとゞめさせて、

　舟しはしまてことゝはんいとまなみすむはいせおの海士ならねとも。

尾駮村

蛭子の年越

をぶつむらにつきて、水海のへたにある木村たれとかいふか宿とふ。こよひは、ゑみしの御神、とし越給ふの夕なれはとて、まさなことの氷頭の鱠に、いはしかいませ、あさらけき鯡の

ひれなから盛て、扇をぬさにとりをはり、此頃の雪に、みなと口くはりて潮の入こねは、いを
とるわさもせてなとうちいひて、にしのいをものして、夕のいひいたせり。
六日。ようへよりけふも雨ふれは朝いして、雪の中の雨は春ならぬ春雨めけと、時しならね
はものうくて、

けふは又ぬれてたゝましたひ衣きのふは雪にはらひしものを。

浦長木村氏

やの翁、まとにかしらさし出して、けふは雨猶ふらん、又雨ましり雪のふりくへし、ふきや、
し侍らん。いふせくも、いま一夜とゝまりてと、老のなさけ〳〵しういへは、翁ととももにさ
しくみて、ほた火のもとに在れは、翁ひけおしなてて云、わかとし、はや、むそちに老たり。
やは、遠つおやよりいくはくの年をうけつき、慶安のむかしより浦の長となりぬ。吾かおほ
おほちは力世にこへて、くにのかみにめされて、すもをさとまてなりて力ある血すちなか
ら、あかもたる子も、うまこも、さばへ、かへるか力もあらてとなけき、又、此村の名をぶつ

馬駮牧物語

と人はいへと、むかし、尾のふち髮なる駒生れて、これをみやこにひかせ給ひて、をふちのま
きといひき。今も其處高牧とてあり。人くひたるその馬は、うちとゝめて、そこになゝくら
といふうまつかもありつなと、なにくれと、わかうへにとりませてかたる。翁か、おくなき
心も嬉しくて、

田名部に引返す

鳥の海とも

野かひせし尾ふちの駒のものかたり老の心のなつくうれしさ。

まことや後撰集に、「おとこのはしめ、いかにおもへるさまにかありけん。女のけしきもこゝろとけぬを見て、あやしくおもはぬさまなることをいひ侍りけれは、「みちのくのをふちのこまも野かふにはあれこそまされなつくものかは。」となかめありて、ゆかしき名ところを、此十とせあまりこゝろにかけ来て、いま尋ね見ることのうれしく、

としふともおもひしまゝにみちのくの其名をふちの牧のあら駒。

七日。室の窪をへて有度野を行て、野邊地の湊に行みちありといへと、雪深くつもりて、わけをよふへうもあらぬよしを人のいへは、もとこしおなしみちを、れいのこと牛にて、田名部のあかたをさしてかへらんと潟の邊を出てく。此水海のすかたは、羽うつ鳥の翅にたかふかたなく似たれは、鳥の海といへると夜邊の翁か物語にしたるは、うへとはおもへれと、きしべは、氷のゐにゐたるか上に雪のつもれは、まほにも見やられす。こなたのきしより斧やうのものふりもて出行は、何わさするにやと見るに、氷うちやぶり、小舟つきおろしのり出、ほね斗なるあしろやつくろふとて、かやつけたる纜を氷のうへに引のくらしぬ。氷ゐさるかたには白鳥あまた、鴨、をし鳥もうききましりたり。

なれも友にむれてそあさる鳥の海翅かくれに浪やたつらん。

出戸を過ぐ

瀧明神前の氷道

又、しら鳥の聲たかう鳴しきるをかへり見がちに、

雪のうちにあさるすかたもしら鳥のそれと汀の聲のみはして。

出戸の濱近う、此村になれは休らひて、こと牛にのりておひ出て、むかふかたはいとくらく、雪は雲の吹ちるかことくふり來て行末のそこと見へねと、老たる牛は、うまにならひてやあらんよく路しれは、まかせつゝ行は、雪にふりうつまれて眼のみくろき牛追のしたかふも猶さむけに、たどる〳〵浪の聲うち冴る沖邊に、銜むれ鳴たり。又磯つたふ聲もせりけれは、

沖くらき波と雪とにゆくかたをいそへのちとり立まとふらし。

やをら晴行と見やる。高石とやらんのほとりを鷲のひとつ飛行か、羽風尙さへ行音して、又ふり出るに、

とひ來るもつはさはけしき山かせにふゝきをさそふ雪のしらわし。

瀧の明神のまへ近う牛おふか、みかきなせる鏡見たらんかことに、ゐたる、ひのうへを、はる〳〵とうちわたるに、うしのひつめもたゝす行なやみ、ふしかちに、おきもあからねは、股さき、牛もほろひなんと、うし追のなくに、のることもえせてたゝすめは、こは、いかゝして牛の命もたすけてんとねんしわひて、

ひきかへすためしもあれはのらて行うしをみそなへ瀧の神垣。此瀧の神（マヽ）

泊の浦にて

海すゞめ

舟にて立つ

夷風の車櫂

と、あまたゝひとなへていのり奉れは、けにや、うけ給ふにやあらん、からくして、ひのおもをうし引出て、あなうれしと、われもいきかへりたるおもひして、冬の空にあせのこふ。此行さきはいとやすく、うちものかたらひて、ことなう泊の浦につきたり。

八日。けふも雪ふれは、えいてたゝすあるに、童あまた集てひこしろふは、なにそと見れは、海すゝめとて、かたち味村の大さにて、はね黒く、はらしろきをとりてあらかふ也けり。この鳥、海のうへにいくらもむれありけは、見つゝ折句になかめたり。

うち寄るみつしほ波にすみなれてすさきの鳥のめおあさるなり。

九日。きのふのことに海もそらもあるれは、あるしとゝめぬ。

十日。ようへより、ひねもす雨のをやみもやらてふり、ひるつかた雪となれは、えしもいてたゝて、

浦の名の泊もとめぬ玉くしけふた夜もみよも雪のふれれは。

十一日。おなしう種市かやにかたりくれたり。

十二日。けふこゝをいてたゝはやといへと、巖石おとしてふ磯山の坂、氷八重にゐて雪は消ふりかくして、あま、山かつすらも、えこそ行かよはねといふめれは、やのしりより、小舟に車かひさゝせて、ゑみしか手ふりに、ふたりのふなこと も、しりうたけしてかいやり〳〵行。

海の面のとかに、おかしき岩は、人の作りたるやうにところ〲さし出てあるに、眞木、櫟、枝さしかはし生ひ立るを雪のふり埋たるは、枝末〲しらきぬにつゝみなせるかことく、たとへつへうかたもあらすおもしろきに、岩のはさまよりなかるゝ瀧はいと細く、なかはは氷り、あるは雪のくたけおつるやと、

ふり埋む雪より雪をこほすかと見へて巖にかゝる瀧なみ。

しほ風あらきかたは、雪ふかれてつもりもあへす。山おろしの、ささふき来るにさそはれて岸の浪たかうあかるに、吹こほしちりかゝりたるを見る〱、になうおもしろかりけれは、舟の中なる人々もこゝろありけに、めもはなたぬは、さもこそあらめと、

風ふけは木々のはたれのちる雪をいつれか浪の花と見わかん。

鮑鮹鱒の漁

しほせに、あはひ、たこ、つきめくる舟のこゝらあるか中に、とぶやうに行は鱒のあひきすといふを聞て、此ことを句の上におきて、そのさまをなかめたり。

まかちとりすさきをめくりあさなきのひかたを海士のきはふよひ聲。

治左衞門ころばし、折戸、巖石なといふ處のあやうさもあふき見れは、おもしろきところと、海士さへそいふめる。ほとなう白糠の磯につきて、やかたに休らひ、うまにて砂鉢川なとわ

老部に泊る

たるに、此ほとの雪に馬も行なやめは、いまた日たかう老部に宿つけり。やの窓より見れは

磯邊に男女むれたてるは、なに見るそとおもへは、松前の島にては、しかべといふ沖の大鳥を、こゝにてはをはりといふ。この鳥にとられたるたかへの、波にたゝよひありくをとりてんと、ちいさきふねにてこきありくを見んとせし也けり。

海士のかるみるめあやうく見ゆるかな鳥の汐瀬のからきおもひは。

夕くれ行ころ、にごれるみきに、しとき奉り、おのれらも、ますの鱠していはひ、あまなから山の神祭るわさ家ことにして、けふは柴一枝たにとる人もあらて、つゝしみ居りなといへれは、

しほ木こり海につゝる身やまつるらん山祇の神わたつみの神。

あさまくらに鳴く衛のこゑにめさめて、「夜を寒みつはさに霜やおくの海の河原の千鳥更てなくなり、といふ歌のふと思ひ出れは、袖かつぬれて、

なれもさそ翅に霜やおくの海の浦風寒く衛なくらし。

十三日。あさとくやを出て、晴たる海へたを馬にてとく過れは、ひかたに千鳥の多く求食か人の行さきにたちて、みなかた足して磯邊の沙の上を、ふみのやうにあとつけ〱虫をくひもて行は、あしひとつあるやうに、あへかにおかしく、

ふみつけしちさとりのあとをそれとえもよみとくひまも浪の打けつ。

小田野澤

よき五調よ

砂子股

青平を過ぐ

あらなみの、さとうちよれはよき、うちよれはしそきて、さらにたちもあからぬを見る〳〵、

　をさまれる世のしつけさをかけておもふ波にさはかぬ鴴見るにも。

山路にほとちかき小田野澤を過て、八重に氷ゐたる、めぬま、おぬまを左に、ひろ野のやうなる澤邊とおほしき深雪のなかを、あしとくかいわくるやとおもへは、つゝらおりのさかしきをふみとめ〳〵て、まとひもはてぬは、よきこの五調そといへは、つねにはせありく山路なれはと、馬追の、しりにたちていらへせりけるを聞て、

　やまふかみしるてふ駒にまかせすはいつこをふみて雪の中路。

さはかり近き山路なから雪にたとりくれて、すなこまたの村に入て、しりたるかたに泊る。

十四日。夜邊より風おこりてたゆけなれは、ひるより出たつに猶こゝろくるしく、青平の村長かもとに、ほたさしくへて寒さわするゝはかりありて、おなしう馬にて野原をくれは田家てふ村はかきたへて、けふりのみいくむすひして、ゆふけたくにやあらん。

　宿近く行ともしらしふり埋む雪のしたやの煙たゝすは。

釜臥かたけより、はる〳〵と吹來る風に雪あられをさはして、小笠、たもともうがつやうに、身寒さにえたへす。うまもいなゝきやすらひかちに、雪いとふかきかた岨みちに、

　のる駒もさそな衣を重ねても身に冴へ通るふゝき山かせ。

田名部歸著
暮の用意に
此處に春を迎へん

田名部ちかく日はくら〳〵になりぬ。

十五日。十府のすかこもやうのものに、なにくれさとりくしてもてありくは、としのくれようゐ也。これを垸飯ものといふは、そのまかなひにやしけん。盛岡のおほんいなきは此十三日の日、れいやうに、こゝの縣の君より奉れり。吾妻鏡のためしにや。

十八日。このひとひ、ふつか、うらふれにや風おこりて、けふやゝ起出るに里人とふらひ來て、かく冴へわたる冬の空に、いかてか、しらぬ旅路に出て、大雪にこゝろやましくたとらんよりは、去年よりなりむつひたる此縣にとしこへて、きさらき、やよひのころ雪けちたらんをまち、浦山のかすまん空に、こゝろのとやかにたちてこそ、旅行みちのおかしさやそひ侍らん。心おちゐてまし。はた、しつかに、いとやすけなるところあり、いさ、ことやとにといへれは、こは何ことも旅のならはしとて、まかせることもまかせさるに、かく情もふかきものかとなみた落て、とみ、かふみ、したかひて、菊池道幸といふあき人のまこひさしの、ひろはあかけなる窓近く、埋火ありけるもとに此夜うつり居て、清茂なとゝふらひきける圍居に社頭雪といふことを、

埋みても雪に宮居はいちしるくきねかつゝみよふる鈴のこゑ。

おなし旅なから住なれぬけにや、いねかてに、ふる郷をおもふ。

ものおもへは夢もむすはし草枕旅よりたひになれし身なから。

身しろき枕かみの灯をかゝけ、おき出てふみ見んとのそめは、松前の島よりけさ來けるとて、菅子、陸子か、をさなゝ手ならひにかいたる歌ともあり。又鄧美かもとよりさて、したうつに、ふみかいそへて送りけるを見つゝ、

松前よりの音信

玉つさにまつことなしとこのあしたうつ白浪のよるそうれしき。

十九日。こよひの集ひに名所の雪と戀とを。いくたの　雪。

ふり埋む雪にはみちも浪速なるいくたひ人やふみまよふらん。

いくた　戀。

おしからぬ命も戀にかれやらていかに生田の杜のした草。

はつせやま　雪。

初瀬山雪に尾上もこもりくや埋ぬかねの聲幽なる。

はつせやま　戀。

はつせ山祈るたもとの時雨てもつれなき色を嶺の椎しは。

二十日。けふも雪いやふりて、市人たちわつらふ。

關路雪。

都出てひなの長路にふり積る雪も日數もしら河の關。

驛路雪。

たひ人の雪に朝たつほともなみ歸るに末の深さをそしる。

雪未深。

雪はまた淺茅のかれ葉すゑ見へてふりもかくさぬ野邊のひとすち。

寄雪戀。

しら雪のつもる恨はいつの世の春を待てかとけんとすらん。

廿三日。火たきやに、大なる鱈をかけて烟にすゝけたるは、あへだらといひて、年越へん料のまさなことゝ、又この夜すゝとりして、あはせともせり。この夜邊のまとゐに、　橋上雪。

谷河の氷る淺瀬は埋れて小橋をよそにゆきのかち人。

廿六日。けふはとしの市とて、なにくれかふ人いとしげうたちぬ。こよひ、ちとりのうたよみてんとて、　嶋千鳥。

風寒きしほせの波のよる〱は遠島わたり衞鳴なり。

浦のちとり。

たへすたゝ妻とふちとり行かへりあはぬ夜とこのうらみてそなく。

潟のちとり。

すむ鶴になれもならひてわかの浦の浪のよるへにちとり鳴也。

廿七日。この夜のまとゐに、　すみかま。

益等雄かあしたはつま木こり積て夕はそれと嶺の炭かま。

すみかまの業に朝夕妻木こるをの〻里人いとまやはある。

遠炭竈。

一むすひまたふたむすひみね遠くなひくけふりも細き炭かま。

月もいまをちの高嶺にすみかまのけふりにくらき影や見すらん。

廿八日。とふらひ來ける人々と友に、　海邊歳暮といへることを、

春もはやちかの浦なみ立かへる年をふた〻ひと〻めてもかな。

いさりする海士のたくなはくり返すためしも浪にくる〻一とせ。

廿九日。小なれは、ことしもけふにくれなんとす。むかし戴叔倫といふ人、わかことに旅にいてて、こよひはかり石頭となんいへるうまやにやとりて、うきこ〻ろやりにやありけん、旅館誰相問、寒燈獨可親、一年將盡夜、萬里未歸人、寥落悲前事、支離笑此身、愁顏與衰鬢、明日又逢春。」といふ、くしを作れりけるをおもひいてて、あまたたひすしかへして、

としをおしみ春やまつらんこゝさへくからもやまともおなしこゝろに。

あけなは、あら玉のとしのはしめなから、この國のふりとて、しはす小なれは、わたくし大といふことをして、むつきの朔のよを除夜にさたむれは、いまたとしはくれはてぬこゝちすれと、こよひをかきるならひに猶おしまれたり。」

奥乃手風俗

南部
南部

寛政六年甲寅正月より、みちのおく田名部のあかたふりをしるし、やよひのころおほはたに至り、烏刺山にのほりたるまてをかいのせたれは、奥の手ぶりと名附ぬ。

陸奥田名部にて

私大の由來

元日を大晦日として

さいとり樺

道の奥の吉多郡、尾駮のみまきに近き、釜ふしかたけの麓なる枆寧府の縣に、珠匣あけてふたとせの春をむかへ、明玉のとしは三とせをへて、ことし寛政六といふ朝蒼吉木兄のとし、五日の風うそふきおこす寅のはる、むつきの朔にあたれるけふを去年にかぞへ入てけるためしは、くにのかみの遠つみおやとか、奈麻余美の甲斐の國より此みちの奥磐手の郡安太多良山のほとりに、軍いたして、たたかひに餝摩のかちぬとて、その稲城に、とし越給ひなん料になにくれのまかなひありけれと、それのとしの斯播須の日數、はつかあまり九日ありて、餘波なうとしの暮なんとすれは、まさなこともとゝのはて、しゝさゝも、うれへあへれは、けふのことく、むつきの一日を、こその、みそかとなしておほんはきことありたりけるより、今の世かけて、うら／＼やま／＼里までももはら此まねひして、たかき賤しきなそへなう、いまた年はくれはてぬおもひに、とは、あき人の行かひしけう。弓絃葉さゝねと小松にしめ曳はへて、くれ行門々に福取椛（さいとりかば）とて、かんばのついまつを串にさし雪のうへに立ならへたるひ

かりに、軒はの雪ゟけちゆくかと見やられ、やかのくまにはおほ臼ふせて、ひろめのゆふとりかけたる、とし縄引めくらし、あるは、みたまにいひたいまつるころ、われも、つゆはかりあはせとゝのへ、さゝけ、ぬかつきて、

奉る椎のはつかの手酬草あはれみたまを旅にまつらん。

なにこともみな此里のふりにならひて、行としをけふのこよひにおしみて、

月も日もえこそとゝめね暮て行としのをふちの駒のあしなみ。

二日は元日
宮詣り
若水汲み

けふは、こよみの二日なから、日のはしめ、月のはしめ、としの始ともいふためしなれは、うしのくたちよりおき出て厤の上下にともしひとりて、こゝらの人々うちむれて、みやしろのかきり、をかみありくにたちましりて、わか水くまんと老たるわかき男女、河つらにきそふもおかしくて、

こまかへるすかたをたれと水かゝみわかみつむすふ春にうつりて。

朝開きゆく空のけしき、ことさらのとやかに、

あまの戸の明る二日を國ふりの春のはしめといはふ里の子。

又、ことなれるためしもめつらしき春なれは、

國の風ふきもつたへて玉くしけあくる二日をみつのはしめと。

挂文かしこき御世の惠の、いたらぬくまやはある。かゝるひなのさかひまて至れる春の長閑さは、おほんいつくしみのなみ八洲のほかまて流るためしを、あふきみ、ふしみ、かしこけれは、

をさめますためしを四方にみちのくのあたゝら眞弓春やたつらん。

宵うち過るころほひ、雨そゝきの雫はのかに音したるは、長閑さに、雪のけぬるにこそあらめとおもひのほかに、雨のふりぬれは、

したとくる雪よりつたふ玉水の音かと聞は夜半の春雨。

三日。けふを二日にいはふ。夜邊より、さらにをやみもやらぬ雨の、いとさしめやかにふる。朝戸おしあけて、

春雨の軒のいと水たへすたゝよるはすからにふり明しぬる。

路に泥を見る

さらぬたに、れいのとしよりはふかからぬ雪の、雨にけたれて、たへす人の行かひせりけるすちは、こひちなとふみ出て、かゝらは、野邊の草木もめくみなんと、ひとりこたれて、

わかくさのしたにやもへんしら雪の心とけたる今朝の春さめ。

節分の豆撒

四日。けふは三日なり。せちふなれは、いりまめに、ゐひすめきさみ入れ、松の葉こき入て、まめはやすこと葉は去年の日記にあれは、かいもらしぬ。とふ灰うらち、やをらけちはつる

頃人のとひ來しまとゐに、　山早春といふことを、

　春たちてけふみかの原また寒く薄き霞の衣かせ山。

五日。けふの四日に、こよみの春たては、戯れうた作る。

　手を折てことしの日數かそふれはひふみよいつか花や咲らん。

飾松に雪

六日。けふは五日なり。やの、はしらのうへなるところに枝たかき松を立て、そかもとには鱈のをさ、鮭のおほにへ、つみ重ねてけるに、たかまとより雪のいたくふり入て、いをの上にもつもりぬれは、うちたはれたるふりに、

　よる波の色にたくへて雪のいをひれふり渡る俤とみゆ。

七日。けふは六日なれは、わかなのためしもよそに友垣の圓居に、　早春霞といふことを、

　袖冴へて霞の衣きのふ今日春といふきの山は雪ふる。

早春鶯を、

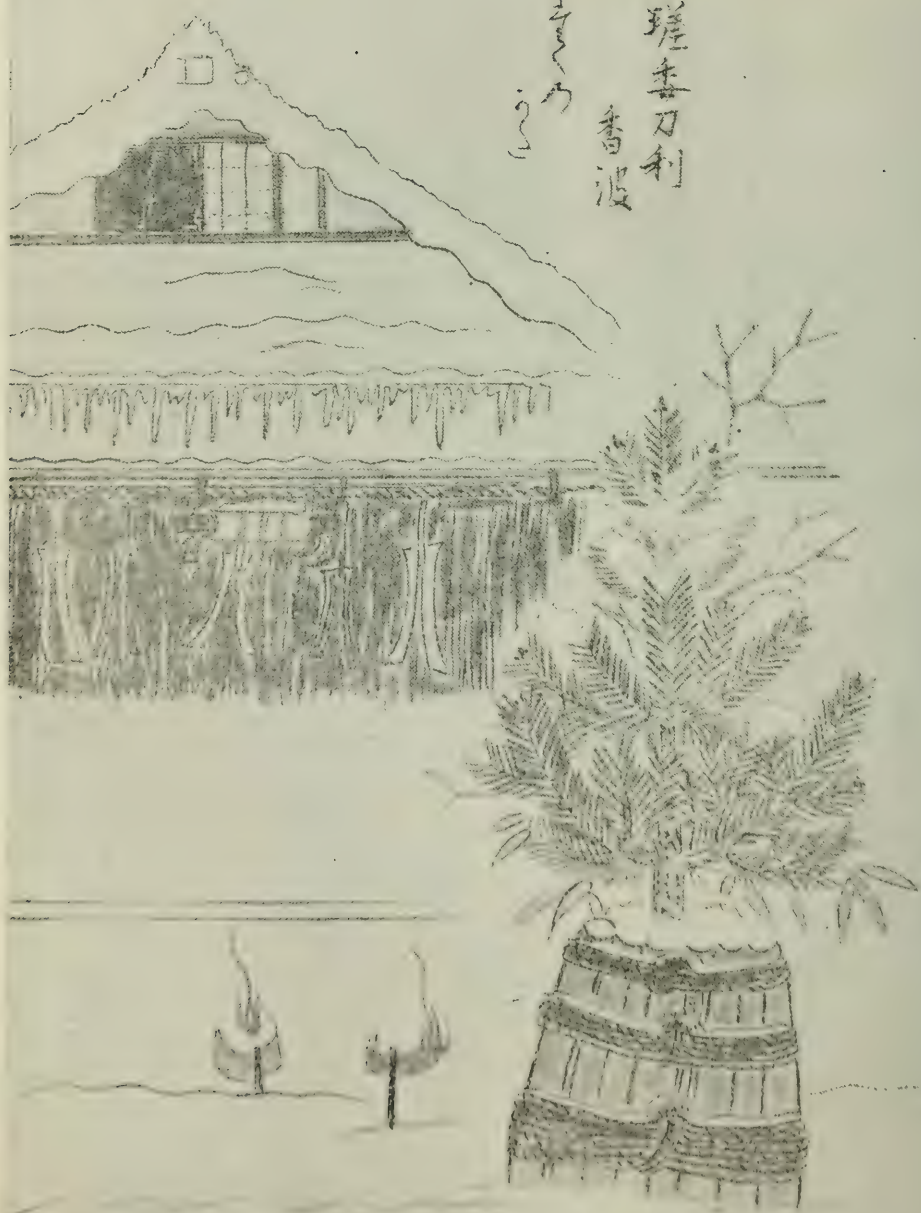
　梅はまた咲ぬ梢にやゝ春の來居聲のみ匂ふ鶯。

七草の粥

八日。けふにくふめる七くさの粥も、しほつけのたかなを、せりなとにつみませてけれと、わかめかり入てなめる里もありとか。

　つむ草のそれにはあらて和布かる春の浦人おなし例に。

瑳吾刀利 香波

まくのうつし

澤若菜。
ふる雪も淺澤の邊にとけ初て水もわかなの色やうつさん。
雪中若菜。
しるへあらは分ても見ましいつこをか雪はふりつむ野邊のわか菜を。
九日。けふは八日也。菊池成章のもとに、若菜のうたやあらん、いかになさとひやりしかは、そのいらへはあらて、つとめてかい聞へたり。
時ならすかたらふ夢よほとときすねなからつめる若菜なりけり。
と、いひおこせけるにこたへて、
郭公夢にねのひの松ならて君はよとのにわかなつむらし。
又このぬし、ことし五十になりてけるなとかねて聞へて、
老の浪よるもおもはて海士の子かいそなの若菜つむもはつかし。
とありける返し。
老のなみよるともあらて摘はやすいそなはちよのわかなゝらまし。
けふはとりの日也とて、酉といふ文字を、みきはかりの紙にかいて、門の戸にさかさまにおしたり。こは鷄のかたに、いさくひきてけるためしにひとし。こよひおほ雪ふりて、

菊池成章五十歳

初酉の日に

軒下を通ふ

十日。けふの九日のあした、行かひたへてさらにみちもなう、猶軒の下のみ、ひたにありきぬ。夕くれて清茂、公世なと至れるに、集ひてなかめたり。

湖餘寒。

やゝ春の日を重ねてもむねあはぬ寒さやいかに毛布の里人。

氷始解。

來る春の光うつせとかゝみ山雪けにくもる鳰の海つら。

はる風の吹こそ渡れあつ氷岸邊はとけぬやま河のみつ。

窓前梅。

おこたらぬまなひおもへと雪の色にやかて咲つく窓の梅かえ。

初町立つ暦の日に還る

十一日。大畑のみなとべは舶たまの祝ひ、此里はけふの初町（市を町といふ）をもとゝして、賤しきものゝやは、みな、けさより暦の日にたゝしうつれと、貴き館は、こんはつかの、めだしよりといふめり。大なる水木の枝、いと長き柳のしなひを、山なせる雪にさしてうるおさこ、わか友ならん、になうかたらひ酒のませ、ゑひなきしつゝわかれ行ふり、ことにおかしけれは、たはれに、

青柳の糸にみつ木を折そへてこれもわかれにむすふものとて。

鹽針餡買ふ

人ごとに、さゝやかなるかれゐげもてありくは、鹽、針、餡、かゝる三品かふためしなれは、みなしけり。近き浦囘より來けるものら、いさ歸なん、日もくれんといへは、月の夜也、何いそかすもあらん。いな空うちくもりぬ、雨やふりこん、雪にやあらんといふを聞て、けふのためしに、かのうりける「しほ、あめ、はりを詠ぬ。

あめもよの空とないひそしほくもり出つとも月のさはりあらしな。

埋火の元に

十二日。過つる夜邊、あすは夜さり、かならすとひ來てと、きくち清茂にかたらひて、更るまて音信もあらさりけるは、契のたかひけるにやとおもふに、けふなんつとめて、ふみ來けるを見れは、黒羽玉の夜邊は、たまくしけふたゝひ、とほそ叩つれと、こたへさらにあらさなれは、人はいつこにと、とにたゝすみて、

三河なる二見の道を行かへりまよふこゝろをおもひやれ人。

とそ、かい聞へたる。こはいかに、奥ふかう埋火のもとに、夜くたち行まて炭さしそへ待わひてけるに、間遠にし在て、えしらさりけることとくゐて此返しせり。

おもひやれふた見の道のひとすちに待しかひなくあはぬつらさを。

このゆふへ、人々とともになかめたり。　春窻。

月やまつ梅の匂や吹いるるおろさぬ窓に通ふ夕かせ。

獅子舞來る

新樂家の祓ひ

春床。

咲花のちるとし見しはおもひねの夢の夜床に春風ぞふく。

春戀。

すみれつみ花をかことにいひよれど人の情の色ぞつれなき。

けふは子日なりければ、

ねのひする小松は雪に埋れて霞そなひくちよのためしに。

十三日。目名といふ近き村のうはそくら、三とせに一たひの例なる獅子まひてふわさして、高やかなるしらにきてに熊野の御札さして、笛つゝみにはやし門々に入ありくは、松前の島なるみやつこらか、とし〳〵舞にひとし。又其島の、三年神樂のあるふりにおなし。「ありやりやのこじからしゝかまいつた。」「しゝかまふたり。」とうたひ、又うちたはれては、「おさんごよれ〳〵せんげをまもる。」こは、そのむかし新谷(あらや)千軒とて、赤坂の嶺のひろ野に、とみ榮へたる里のありたりける。其あらやの小路よりとうたふへけれど、いひあやまちしとなん。せんけは千軒にや、さんごは參宮米(うちまきを此あたりにてはおさんぐといひ、仙臺のほとりにてははなよね、或おはなゐといふ)なり。和詞山なにかしの、にゐむろつくれるにむれ入て、まづ、うばそくひとり、太刀のつかに念珠かけて扇をかさし、ずゝおしすり、つるきたちぬきもて、ほうしにきほひまふ。獅子頭冠りては、ひ

さこを口にふくみ、水をはるさてうちこぼし、はた、さうし、はしら、くひもて、くま〳〵のこりなう。「このやのしはうのますか、み、いのれは神もいはひさゝまる。「綾を曳へ錦をしいて、こざこふませよ。」かくうたひ〳〵て、やのうへのすまゐにものほりぬ。麻苧一つかはかりくひたるときにうたひけるは、「青柳の糸をはかけてよりかけて、よりかけたるはあをやきの糸。」さ、こゐ〳〵さはに、はやしけるもめつらしくて、

いくちさせ長きためしを青柳のいさくりかへしうたふたのしさ。

かくてあるしけるに、みな、ゐひてさりぬ。此日 鶯出谷。

うくひすも心やさけぬ谷水の波の初花うち出てなく。

谷鶯。

もへ出る谷のかけ草はつかにも音にたてて鳴春の鶯。

水邊柳。

河風にふかれてなひく青柳の糸もよるせの波のしからみ。

隣家梅。

中籬を越へてこそめの色ふかくみきりに匂ふ梅の一枝。

十四日。きのふ、うすつけるもちひを、水木の朶ごとに粟穂、まゆ玉つけたるも、又柳の糸に

つらぬけ〻も、やのためしにやよりてん。うつはりのうへに、やつかにみのりたるあはふあれは、夏引の手曳の糸のこ〻りゐる、にゐ桑まゆの柳の糸なかう、ひし〳〵と貫かけたるに、

さをひめの春のかさしの玉縵つらぬきかくる青柳のいと。

夕附行ころ、ちいさきおしきやうのものに、翁箏雄の春田うつさまをかたしろにつくりて、すき、くは持たせて、これを童の手にとりもちて門々にむれ入り、「春のはしめにかせきごりまゐりた。」と呼ふに、とちの方からととふ。あきの方からといらふは、去年見しにふりことならす。近き里にて此かせきとりは、もゝふ、ゐさは、いわゐ、とよめのこほり〳〵に在にひとしう、あけまきら、みのうちき、こしに鳴子かけてつえつき、さはにむれありきけれは、それらか友におひて雌なるか雄かととふに、おとりとこたふれは闘鶏のふるまひをなしけるにおちて、めとりとのいらへすれは、さあらは、たまごをわたすへしとて、ひたにもらひたるもちひなと、みなとられけることなん。さりけれは、拝雞（かせきとり）にや、又業人（かせぎご）にや。鹿踊（かせきをとり）といひける人もあれと、いかなるためしにや。夜くたち、亥子の比にもなりぬれは、いをのひれ、あるは、いをの皮にてもあれ、もちとともに、これをやいぐしのやうなるものにさしはさみて、戸さしあるとあるかたに、さしありきぬ。これをなん、やらくさとそいひける。わか父母の

かせきどり

やらくさ

天神祭り
雛祭り
ゐぶりすり

國にて、せちふの夜、かとのとのはしらに、豆のからにいはしの頭をやきさし、ひゝらきさならへてさせるとき、「柊もさふらふ、やいかゝしもさふらふ、なが〳〵にまし〳〵てやらくさ。」と、はやすに似たる。又、斯波郡なとのやらくろずりには、いさゝかことかはれと、いつら、ふるきためしにこそ。

さすくしもなけなはならんたかむらのふしてゐたちのおにもいてこし。

十五日。男童はけふをはしめに、菅大臣の、みかたしろを家のくまにまつり、女童は、ひゐなまつりをそせりけるふりは、松前にかつ〳〵にたり。ひるつかた、うへにゆかたびらをきて紅のすそたかくからげ、はきまきにわらうつふんで、田植のむれりめの聲をそろへて、「えもとさえもがほうたんだ、一ほん植れは千本になる、かいとのわせのたねとかや。」ほい〳〵。」と、鳴子うちならしてさりぬ。こは去年見しにことならねと、早苗とるにも、此うた、もはらうたへは、かゝることをや「風流のはしめやおくの田植唄。」と、はせをの翁の、うへもいひけり。

秋は猶八束にみのれをとめらかこのめ春田を唄ふ例に。

此夜「月前梅」といふことを、

折とらは花も朧の色や見ん月の夜かけにかすむ梅か枝。

梅か香もつゝむにあまるこよひかな霞の袖の月と花とは。

十六日。けふは白粥なめるためし也。わけて此日は、田うへめ多くむれありき、家々に入みちたり。この夕圓居して「關路鶯。

都人霞とともにたちぬらんまたしら河の關のうくひす。

逢阪や行も歸るもめつらしとこゝろさむらん鶯の聲。

山家鶯。

隱れすむ太山のいほにおとろかぬよしうくひすは人くともなけ。

やま里も正木のかつら來る春の惠にもれぬ鶯の聲。

山殘雪。

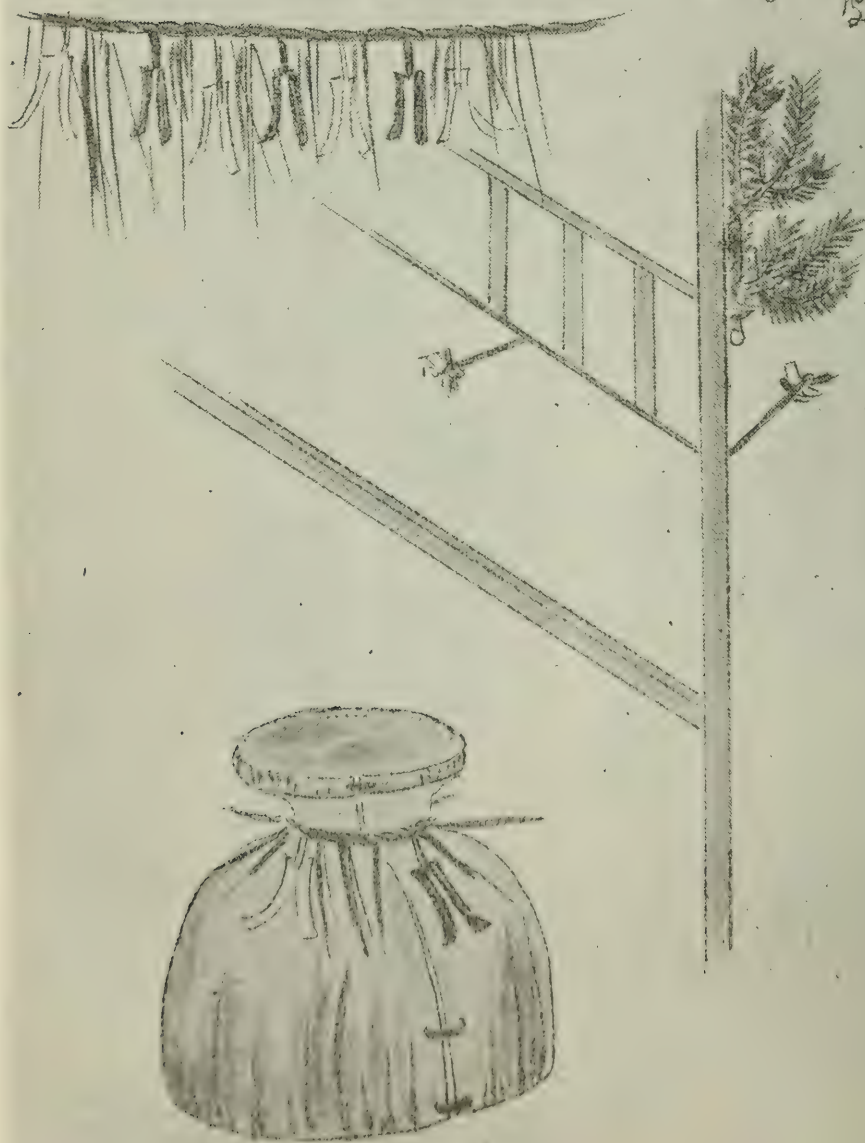
ふしなひく竹のはやまに世は春の色とも見へす殘るしら雪。

余所めには花と霞めと春もまた至らぬ山やのこる白雪。

十七日。七の句題をよめる。「山もかすみて。

榮行御世の春とやなひくらんこかね花咲やまも霞て。

鳴うくひすの。

花と見て折られぬ雪の梅か枝に鳴鶯の聲さむけ也。

かきねのやなき。
　山賤かした枝たはめて結そふる籬根の柳春風そふく。
花のたよりに。
　春雨のふるそ嬉しきあすは又ぬれて紐とく花のたよりに。
ちりつむ花の。
　風ふかは袖にちりつむ花の雪はらはてつゝめしかの山こへ。
春のなかめは。
　こきませて柳櫻のいろ〳〵を都はこのめ春のなかめに。
とまらぬ春の。
　とゝむれとゝまらぬ春の色見せて行衞も夏に近き川水。
十八日。ひねもす雨ふる。此夜夏の詠を「咲るうの花。
　かけまよふ月の桂の河なみのよるともわかてさける卯の花。
このさみたれに。
　さしなれて往來もやすの川長も此五月雨や渡りわふらん。
河邊涼しき。

夏はいつはらひ盡して御祓する川邊涼しき夕風そふく。

旅出に年魚

此夜、菊池政高のやかて旅に行てん料に、かねてよき日とりてかりに首途せりとて、和詞山・叙容のやまて、あまつゝみ、小笠、はきまきなといたしてあるしける。その花かめに、なにくれの木ありけるに柳をこゝろありけにさしませ、まさなことのなかに年魚のありけるは、いにしへ紀貫之のうし、都佐の國の任はてて、みやこ邊にかへり給ふあら玉のとしのはしめに、かくなん、ほし鮎をたうひ給ひしこともありけるを、いまおもひあはして、此あゆてふことを、もと末のかしらにおいて、わかれのまねひしてなかめたり。

あをやきの糸引むすひ行たひのゆくほともなくくりかへせ來三。

めたしの祝

二十日。けふは、めたしのためし、あかたのまつりこち給ふ君のもとにありとか。やことにまゆたまのもちとりをさめ、あはほ、ひえほかりとりて、人にも、みたまにもそなふ。かみさまの人は、けふをせに暦の日にうつりてけり。山里めけるやに、雪けちて、としふる梅の木あれは、

山のはの木々ははつかにめたしても垣ねの梅の花もにほはす。

廿一日。「歸路烟霞晩といふことを。

柴人の歸る家路の夕けふりかすみそなひく遠の一村。

廿二日。たゝん月のはしめ、わかやま叙容のもとより不盡のかたかきけるをかりて、けふなんその家にかへしつかはすとて、ふみのおくにいひやる。

人もさそ樂しかるらん時しらぬ布士を神世のすかたとは見て。

この夜、きよしけ、なりあきらとひける。まとゐして秋の句題七くさをよめる。「あへるたなはた。

ひとゝせを思ひ渡て銀浪こよひを淀にあへるたなはた。

あかつきつゆに。

宮城野の曉露にふしぬれて起出る袖や萩か花すり。

機をるむしの。

もゝ艸の花の錦をくれはさゝりあやにはたをゝ虫のころ〳〵。

みやこの月を。

玉簾のひまもるかけやいかならんわきて都の月のくまなさ。

月はうき世の。

のかれすむ太山の奥の庵の戸を月はうき世の外としらすや。

秋のかた見を。

くれて行秋の形見をみちしはの露さへ頓て霜とおくらし。

廿三日。この三日はかり冴へかへり、埋火のもとのみさらてありけるに、中島公世のもとより、此ほとはいかに、はた、日ころかり見つる日記けふなん返しやり侍る。又、そかあとのまき〳〵かしたうへなと、せうそこにいひて、おくに、

みかきなす人のこと葉の玉くしけふたゝひ末の猶見まくほし。

と、ありけるうたのかへし。

恥かしな人の言葉の光もて藻くすを玉とかけてめつるは。

廿四日。わかやま叙容のやに菅大臣をまつり奉るとて、うはそく、すゝふりて、きねかふりに、ふとのりと唱ふれは、あるし、鉢の木の紅梅のもとにぬさとりて、はらひよみつきけるかたはらに在て、

うちはらふ幣の追風吹さそひ手向の梅の匂ふ此宿。

廿五日。あしたより雪ふり夜は猶さむく、川のへの宿なれは、冴へもことさらなとかたらふに、鳥の聲せりけり。

なれもさそつはさの雪や拂らん河風寒くふくろうのなく。

廿六日。成章のやより、こよさ人來りしかと、頭やみていたらす。

山本棹鶴三十回忌

廿七日。けふもこゝちよからねは、ことはもらしぬ。

廿八日。夜半よりふりもをやまの雪、あけて見れは、ふたさか、みさかにやふりけん。きへあへぬに猶そひて、いやたかう、軒のたけはかりふりみちてけるを見つゝ居るに、山本保列とふらひ來て云、あか父（棹鶴てふ、はいかいの連歌に其名聞へたる人也）身まかりて三十のとし月をなんふれと、垂乳篤のおやのかふこのいとわすれかたう、つねすらおもふに、わきてけふはその日なれは、しかるへからん言葉の手向もせはやとおもへとも、はへあるひとことも、いてこねはすへなし。わか父も、人にひめて歌なんよみしことあれと、まほにはあらしかしなと、きやうのこゝろふかき翁なれは、そのぬしにかはりて、

　在し世にめてこし宿の梅のはなその香や苔の下にしのはん。

こゝちよからねは、成章のやをとふらはて、けふなんさへと、たかひて、あはてそかへる夕くれつかた。

　ふみ分て雪のとほそを叩けともあはてそ君か行衛しられぬ。

廿九日。けふ、近きわたりにたひ衣いてたちぬる。日ころ待つるにつれなくて、よへのありつる歌の返しとて　成章。

　來ぬにまつつらさくらへよ雪のよの逢ぬ思ひのみちをたとりて。

きよしけのやをとふらひて、とくかへりつるを、又かたらふことのありとて、そこをもとめ、こゝにやと尋ねわひて、小夜すからまちて、ちよを過さんこゝちに、

風ふけは人は音せてうち叩く柳の糸のよるのつれなさ。

といふうたを、此日ふみに聞へたりける返し。

おもひやれ柳の糸のかく斗ひきたかへたるよるのつらさを。

市立つ

三十日。あさ日うら〳〵とてれり。こん一日の料とて、けふに市たちてけり。こよひの集ひに冬の句題三くさを、「木葉なかるゝ。

風にちり木葉なかるゝ山河の水の心も冬にうつりて。

雪をたもとに。

ゆく〳〵も花とやめてんふり初る雪を袂につゝむたひ人。

春のとなりの。

花さかん春の隣の近けれと越るはおしきとしの中垣。

二月の年取
厄年の祝ひ

きさらきの朔。むつきのやうにとしとりとて、おとこ女、やくのとしのうきをはや過してん料に、けふに越るきのふを、ふたゝひ、しはすのおもひにその身のいはひして、一とせは、きのふのみそかにはつることく、なにことも、せちみのふりに、わか水もむすふやも有とか。

雪の山路を

二日。あしたのま雪ふりて、やをら晴行頃、かねてことかたらひつる檜原の雪も見なん、杣形も見なん、又、ねりその綱に雪車して杣木曳くたすも見てんと、あるしをはしめ、たれ〳〵もいさなへは出たち、栗山村より山路を分る。雪ここにふかし。

雪ふかし秋はおちくりやまかけにひろひし路やいつこなるらん。

なにの神のおましにや、林ありけるに小鳥むれあさり、囀る聲毎におもしろくて、

つれなくも友にさそはて鶯の聲にさきたつ春のもゝ鳥。

雪はけしきはかりふれと、きへかてに、たか袖もましろし。

白妙の山わけ衣二月の空冴へかへり雪そいやふる。

恐山に登る

宇曾利山に行へきみちをふみもとめ出て、大枸栗てふ嶺邊にのほりて、北のうなはらをのそめは、ちりはかりの雲もなう、涌山のたけ、なにくれの埼もよく見やられて、

降つもる雪のたかねは浪遠く霞にけらし夷の嶋やま。

ゆき〳〵て、檜原の茂り合たるみちも下枝は雪ふり埋れて、いとさむく、たゝすみて、

巻向の山麓はいかに雪ふかく春のひはらの奥そかすまぬ。

あいさにやあらん、たかへにやあらん、はまちをさしてうちむれ行か、乳鳥と見ゆるまてちいさく見やり、

澳津島なれもつはさや冴へぬらんうそり山かけ雪ふかくして。

去年わけたる笹長峯てふさゝふも、いつさか、むさかの雪のしたにふみならされて、そことしもしられねは、

生ひしける篠のなかみち埋れて雪のうへのみ分るかち人。

菩提寺到著

夕日かたふくころ菩提寺につきぬれは、あまたあるいほりともかいうつもれ、岩間〳〵にもへわたるけふりも、雪にふりけたれたるやと見ゆるに、鐘うつこゑの聞へたり。

ふりつみし雪には寺もしらなくにうつまぬかねの聲のたふとさ。

三日。とのくらきより、鈴ふる聲、みす經の聲さへわたるにましりて、鼯鼠の鳴も耳かましく、世中のほかの靜さに、

すましてしこゝろの月をなれも又めてて落來るむさゝひのこゑ。

湖上の氷を渡る

とくものしてと、さいたつあないのいへは、明行ころ、潟へたの林崎のふもとより、雪の下にありともしらぬ水海の上を渡らんと、橇ふんて大雪ふみならしゆけは、さらに氷ゐたるおもひもあらねと、去年の夏小舟にさほさし、筏のりくたし、見わたしの一里はかりならんを、野原なとのやうに、ふみならし行かひをしたり。さりけれと、あやうさやはかりけん、とところ〳〵に、すちたかはぬしるしとて高やかの枝のさしたるは、あやまちて、ことかたにふみ

山子

雪帽子 かんじき

家戸

木を引出す

入は、湯のふち〳〵と涌かへるふちあれは也。されはこそ雪の中にけふたちなひき、さはかりあつき氷もたへてゐさるかたに、湯の氣たちのほゐ。おそろしと見る〳〵半に至れは、山子（杣人をいふなり）とも、むかふ岸邊よりこなたさまに來けり。

しほならぬ海の氷のあやうさもいさしら雪を分るかち人。

となかめて近つけは、笠とり、雪ぼうしぬいて雪の上にぬかさしあてて、かく聞つれは待わひて、いかゝと、むかへきつるなとうちいひて、それらは、ごしかんじき、きりかんじきなとおもひ〳〵にふんて、とくきませとて、さきたちて山かけに入ぬ。やをら岸邊になりて山に入て、おほつくしの山かけにおほひなる家戸（けと）（かりに作る家をいふ）かけて、かたはらに鳥居の笠木雪のなかにあらはれたるは、おほやますみの神をそ祭り奉る。杣人ら、おほがひ、こかひの木を夏より秋かけて伐り、いつき、むき、なゝき、やき、ひとたけ、ふたたけの檜の、枝うちけたなるを曳いてんと、雪もて、つつらのみち作り打むれり。山かせ、さと過て、ひはらの雪ふきおとすに、行末もさやかに見へす。

風渡る雪は梢に殘りなく晴てふゝきにくもる太山路。

尾より嶺、みねより谷を行みちありて日のうらにてれは、四十唐め、てらつゝきなと小鳥あさりたるもおもしろくて、

四乳、鶍の雪車にて

かまばの煙

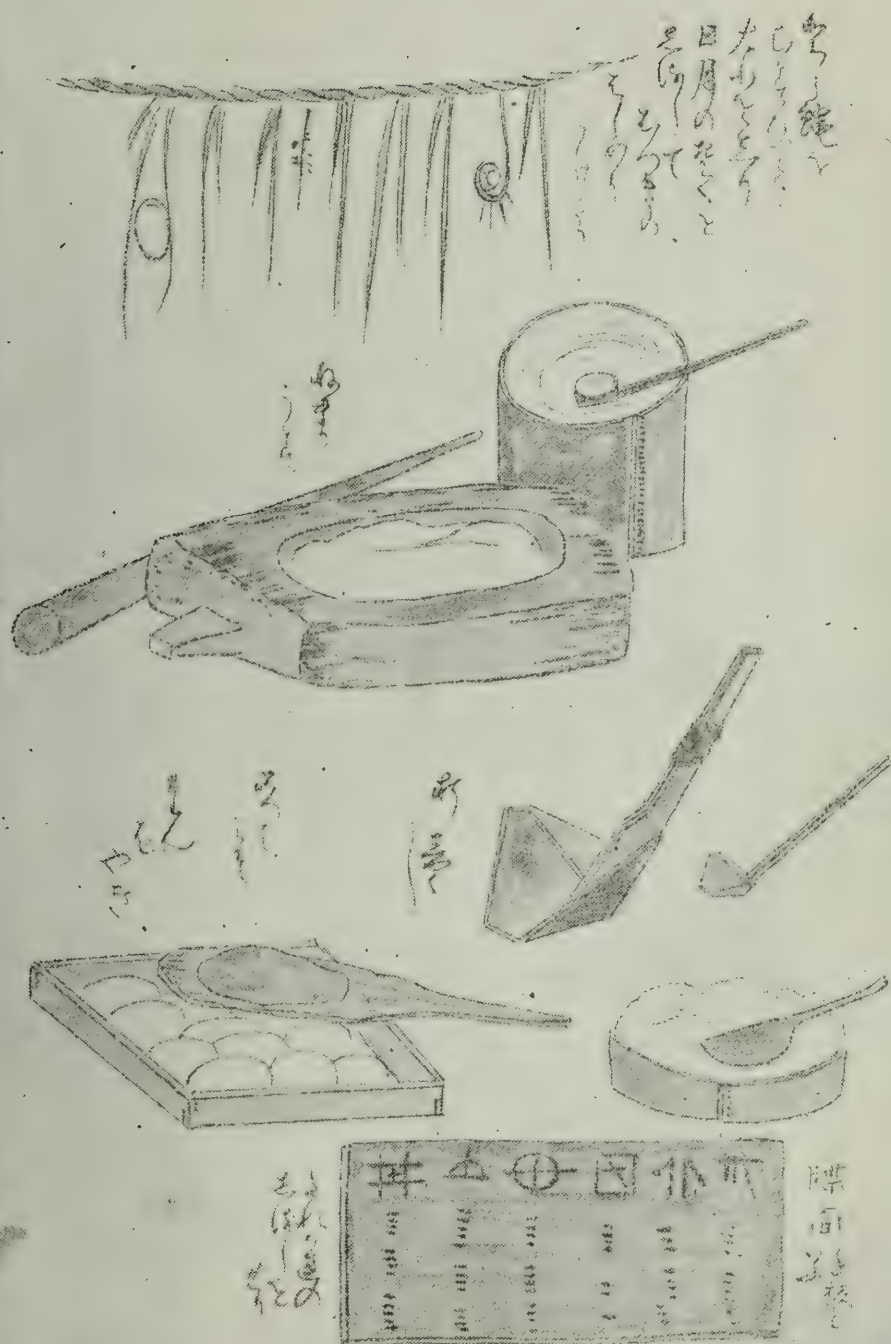
わぱ

こつぱ味噌

鶯はすむやすますや谷の戸をたゝく小鳥の聲にこたへぬ。

大なる湖あれと雪見わくへうもあらねと、雪けぬれは、しら鳥、鴨なとむれりけるとなん、あないのかたりぬ。小つくし山の家戸にしはしやすらひて、みや木引いつるを見れは、四乳(よつぢ)、鶍とて名ある艝に、うしの皮のはやをつけて、みや木六十あまりつみのせて、よね、七十のたはらつみたるおもさを、益雄ひとりか力して引くたし行、よつち、こゝらきそひつゝ飛やうにくたるを、とからぬ料にとて、前たつ、みちつくりか、檜の枝をりしき〳〵くたし、あふき見れは、そひへ立るいはねより雪をとばして、はやぶさてふ雪船にあまたつみ上ておとしたるを、たかゆくや、はやふさわけの、と、うちたはれ、此雪車のとさは、鳥なとのおとすに似たれは、うへ、はやふさの名はあるにこそあらめと、しはし雪のたか岡に見たゝすみて、

たかねより麓のみちに飛くたる艝のはやふさ鳥ならねとも。

雪のなかにけふりひとすちたちのほるは、この、そりひくものの、一曳ひきてはものたうひ、二引ひきては、くとて、そのもふけして、おほなべに湯をかへらかし、ひわりこのやうなるものを、わぱとて、これひとつに、ゆつけくふめるかために、かまばとて、よつちみち、はやぶさみちも、みなそれ〳〵にありける也。此火の邊には壁なとぬりたらんやうに、みそを、いたく、まきの、そぎたのあつげなるに、ひたぬりにぬりあぶり、これを、こつぱみそとて、あまた

二升近くの飯を食ふ
杣小屋一夜
折杓子
しが漏り

が、はしさしのべてものなめぬ。かく、むくつけけに、よね、ふた桝ちかう、ひとりか、ひと日のうちにくふは、世中にたくふかたなき、ちからくらへせりけるわさなれは、さもこそあるらめ。この山をおりのほりてゆけは、與一郎家戸さて、山あひに日くれ風吹は、

　ちるは花つもるは月のかけさかつ太山の木々に春風そふく。

雪のしたに在る杣小家に入て爐のもとにまとゐして、こよひはこゝにねなんさ、やまをさにいへば、うちゑみて、安きこととて、あら男、のゝの山衣きたるが、いひかしぎてうして、うくひすやうのいひがひしてもり、柾のをりしやくしてふものに、汁もりわけちたり。此折しやくしは、そま、山かつらがもたる具ともおもほへす、清らかにうつくし、山おしきにのせてさし出したり。雨の、ふりくにやとおもへは、やねは木の皮とりつかねて、ふきたれは、火のいきつよう雪のしたとけて、氷もりすとて、ひま〳〵くゝるにやあらん。やのくま〳〵は、いとふとき柱のことき氷、いくもともたちて、かく斗冴へ行山中なから、人すめは、よきむろとおほへたり。更れは、かれらかぬきおける麻きぬなととり集め、木の皮の、みのをたゝみ枕にとりおほひ、ふしたれと、いとひもなう野火のことく火をたきたてて、寒つる、よはともおほへす。ひましらめは、

　ふりつもる雪より明て出る日の光はをそき槇のあら山。

枏子木を鈴に代へて皿むすび

四日。朝とく神にもの奉るに、ほうし木打もあやし。此山にて、十二月の十二日に山の神祭るとて、なにくれのものを、木の皮、あるはわらもて、皿むすひといふものして、それに盛て、そなふとなん。山子らふたり、きつとて、木をくりたるにのそみ、飯とり入て細き杵してうすつき、もちとして火のうちにうちくべ、たんぽやきとて、ひるのかてにとてくれたり。ゆく〳〵あふきて、いや高きを、だいしやくといふ山見ゆ。路の右、もゝ、すもゝの林あり。むかしは、やもありつらん、梅も咲つるか、いまは一もと二もともや殘たらんと、とゝまり〳〵かたるを聞て、

たんぽやき

歸途に就く

梅はいつ盛なるらんしら雪のつもるか上に春風のふく。

山本に、やの、ふたつあるを中新田といひ、木のあはひ〳〵に雪の埋たるを長下（ながした）といふとなん。そりひきすてて、林の中に女の聲にうた唄ふに、斧うつ音も聞ゆるは春木伐といへは、

春木伐り

花さかんかた枝は殘せ又も來て太山のこのめはる木きるとも。

釜ふしかたけを左に、禁を分て尾越のみちをくれは、沖のかたに舟のあまたひきつらなりて居るは、海扇を網もてとるといふか、けしきことなり。

春風の追手もあるを帆立貝あまの引手にまかせてそよる。

城ヶ澤に出づ

いにし夏宿りし、城ヶ澤（たなふの菊池うちか遠つおやすみたるとなん）のはまやかたに出てしはし休らひ、うそり川わた

るとて、

　鳥の名の宇曾利河風また寒く吹渡るらし氷ゐにけり。

宇田、河森のいそやかたを過るに、女の聲にうた唄ふを近つきて見れは、あさり貝ほりとる也。

　しほもやゝひかたのあさりひろふ也海士のをとめこ袖もぬらさて。

安ッ渡、大平ラのうら〳〵をへて、あしさきのおかしさ、三本松の森ふかく雪のうつみたるも見すてかたく、

　殘りつる雪はみなから遠方に花とみもとの松そかすめる。

五日。この夜の集ひに、例の句題をよめらんとて、われも「見ぬひと戀ふる。

　傍にたつそあやしき夢にたにいまた見ぬ人戀ふる物から。

あらは逢夜の。

　契おきし人の情の露はかりあらは逢夜の袖やほさなん。

いたつらふしを。

　吹さそふ風になひかはなよ竹のいたつらふしの世にしられなん。

いひはなたて。

人もしれなおもふ思ひをそれさえもいひははなたぬ心つらさを。

なきてわかれし。

おもひ出て袖こそぬらせくたかけの鳴て別し夜半のなこりを。

七日。きのふはかゝす。雨のふるにやといへは、雪解の軒たれさ人のいらへしたるに、

長閑しなしたより雪のとく〳〵と雨の音きく軒の玉水。

九日。きのふはもらしぬ。夕つかたはるゝかに見へて、河つらの宿をとふらひて、しはしかたらひて、

河のへの霞むと見れは行水も夕くれふかく春雨そふる。

十日。鳥の聲にうちおとろきぬ。その夢は、さかみの國にてやありし。ところは、いつこともしらて、つらねうたのやうに、

郭公いつ山越へて鳴ぬらん往來もしけき森の下みち。

となかめしを、うちわすれじと、もゝたひすんして、あしたかいつけたり。松前よりふみ來けるを見れは、去年のやよひの六日つかはししふみの、かへりことのありけり。いかゝして、しか、ことし、むつきのはつかあまり六日斗、あやしくもつきしとて、たいめのこゝちにとく〳〵と見れは、文子の御方の御せうそこに、春のなかめさもをあまたかいのせ給て、おくに、

まだ、さへ渡る埋火のもとにおはして、おろかにも、あかなかめ捨たる歌ありけるを見給ひしとて、

友衛あとをちしまに殘しおきて今はいつこの浦つたふらん。

となん聞へさせ給ふを見る〳〵、

こと浦に友なしちどりねをそなくつけしちしまの跡をしたひて。

かくなん返しして、ふたゝひのたよりに奉らんかし。又、しもくに季豐のぬしのふみあり。そか中に、

飛鳥に身をなさはやと行雁にたくふ心をおもひやれ人。

こは、その島をさして雁の鳴渡るを見やりて、去年よんてつかはしたりけるを、こたひのふみにその返しとて　季豐。

とふ鳥にたくふ心をおもひやる雁のつはさの浪にしほれて。

このぬしは、わきて、はらからなとのここに、その島に在つるころ、あさ夕にさひむつひ給しことなと、つねにわすられぬに書聞へ給ふ。

おもふかたの風になひきてたつとしれえそか窟の煙ならねと。

といふ歌の、身にしみかへりて返しせり。

心あひの風ふきときぬそれとえそいはやのけふりむすふおもひを。

又あやこの御方をはしめ、季豊のぬしたち、去年、をとこしより、芝山参議前宰相殿御らんせさせ給ひたるおほん點の歌とて、あまた見せ給ふを見をはりて季豊のぬしへ、

言の葉の猶ふきなひく色や見ん柳櫻の風のすかたに。

文子の君の御もとより見せたまふけるなかめの、

さほひめの霞の衣うら〳〵と春來て見ゆる今朝のやまのは。

といふ立春の歌ありけるをすして、此おほん方のみもとへ、

ことの葉も花と霞のうちひさす都の手ふり君かうつして。

とかいて、島渡のふねのたよりあらはと、ふみに卷そへたり。

故郷を憶ふ

十一日。雁のあまた鳴て北の空に歸るを見て、このころや、あか父母のくにより來つらんなと、しきりにふる郷の戀しう。

ふるさとをふみてかへさの雁しはしやすらへ跡を玉つさと見ん。

初午の日

十二日。けふは、はつうまなから飯形のかんわさもあらねは、雪に埋れたる鳥居を遠方に見やりて、けふ、はつうまのしるしとてとすし、ぬさとりて、

神垣に雪のしらゆふとりしてていなりの杉のもとつ葉も見す。

十三日。人々とひ來てけるに「歸雁のうたを、

雲の浪たちなへたてそかへる雁遠さかり行侪も見ん。

海邊歸雁といふことを、

こきつれてかへさの友と行雁のつはさにましる海士のつり舟。

十四日。例の句題ものしてと人のいへは、雜の歌五首作りて、みそしのなかめけふにをはりぬ。「谷の埋木。

人ことになかめし花の春もあるをくちては幾世谷の埋木。

あしわけをふね。

なにはかたみつ汐たかくふしなひき蘆分小舟こくもさはらし。

重るやまは。

たひ衣いくへかさなる山はけてこよひいつこの里にしきねん。

はかなき世をも。

のかれすむ太山のおくの春と秋はかなき世をも樂しとそ見る。

八百万代を。

神もさそやを万代をまもるらし君と臣との道なをくして。

涅槃會前夜

あけなは、さかふちのよもつに入給ひし日なれは、近きほとりの村々里々の男女、圓通寺のみてらに入みちて、夜とともに、なもさかむに佛となへ、あるは、なもあみたふちをとなへ大すゝをくり、又酒のむ男女、うた唄ふもあやしけれと、

水の月ふかき惠に渡すらしうたふも舞も法のふな長。

十五日。いかに此ころは、露いとまあらて、とひも侍らさめるさて、

なつかしな霞の衣春もはや二月なかのいつか逢見ん。

と、せうそこのおくに成章の聞へける。返し。

まちわひぬ霞の衣君と友にきさらき中のいつか花見ん。

手まるうち

例のこと、寺のをこなひあるに、女の童は板しきにむれて、手まるうちといふことさしてうたふ。此「てまるうち」てふことを句ことの下におきて、

夢に父母に會ふ

窓晴て遠の山やま朝日てる軒はに近うなひむれたち。

十六日。みやこのいつらともおほへす、淸らなるとのつくりにわか父母おましまして、旅衣たちかへりつる夕とおほへて、いましは、ひなの長路にとし月をへて、こうしたるおもひもなう、たゝ月花のあはれにのみうかれ、それをたのしきことにありき、しほ風、日かけに、おもてのくろみたるのみに、たひやつれたるけもなう、と、うち笑ひたまひつるとおもへは、と

りの聲に夢やふれ、鴉のもろこゑ、軒はのすゝめの聲のみ殘りぬ。

なれもさそしたふやすゝめむらからすこは父となきこは母となく。

月のおもしろきに人々とふらひ來て、からすの鳴ありくをなかめてなとありけれは、

樂しさやうかるゝ月の友からすむれるつはさも霞む春夜。

軒に猫のねう〳〵と鳴つゝありくを、これにもといへれは、

くれ竹にふしとさためす野良猫のすかた斗は虎に似たれと。

猶、をやみもなう聲うちしきりてけるを、

行かへりつまこふ猫のふみしたき軒のしのふのねにたててなく。

月ふくるころまてありて、かへりなんとて　成章。

月かけのかたふくはおし長き日になさはや春の夜半のまとゐを。

とそありけるを、しはしとゝめて返し。

春夜の月あり花の言の葉も匂ふ圓居の更行はおし。

十七日。例の人集ひてけるに「夜梅を、

一枝はやみにも折らん梅のはな香を尋てそよるの木の本。

寄梅戀。

去年還る

おもひつゝとしを古枝の梅花折て心の色たにも見す。

十八日。夜邊より冴へて大雪ふり、ふゝきはけしう。去年の、ふたゝひ來るなと、その行かひ、かたらひ過る。けにやありけん。

十九日。おほ雪ふたさか斗ふりて、このころあらはれたる、ひきゝかきねなとは、なひきはてて、世中はみな眞白に、老たるたけ〳〵のすかた、夜の間に、こところをうつしたらんかと、

うちけふる釜ふし山ときのふ見し霞やけふの雪けなるらん。

二十日。雁の遠う近う、さはに鳴つれて行を見やりて、「歸雁似字といふことを、

遠近にこすみうす墨書ませて文字のすかたに雁かへる也。

たかしかみ

廿一日。大橋の邊を行は、水札こゝら鳴てうちあかるを、童、たかしかみのと、ふりあふき、ゆひさしたり。鳧を、たかしかみといふことにおもひつゝけたり。

なかれ行河音たかしかみつせの岸邊の山や雪の消ぬらん。

酒屋に杉の葉束ねて

廿三日。せはのゝ衣に、かんしきおひたる男、杉つかねさしたる門にたちて友よはふに、この友ならん、こと人と、みそかにものかたるを、はや來るへし、一つきをのむへし。そのはかものに、なかゝはりそと、やに入ぬ。此ふりや、「かしこしと物いふよりはさけのみて醉哭

吉田氏松前へ

するそ踊りてあるへし。」といふ、うたのこゝろにもかなひつへし。此ものら、ちいさき王徐魚うちふりもて、雪のうへに十もしふんて、鳥のやうにうた唄ひていにき。

夜光玉ともかへぬ心からゑひを樂しとうたふなるらし。

廿七日。この三日はかり、れいのもらしぬ。此里のくすし吉田晴といふ人、蝦夷のふりも見てんと、けふなん島渡すと聞へけれは、ふなみちなから、うまのはなむけして、うたかいをくる。

旅衣とくたちかへれあたらしといひけん山の花見つるとも。

陸奥名所十首

廿八日。あさかすみといふことを、一首のかしら一字おきて、みちのおくの名所の歌五くさをつくる。

阿　あふくまの岸邊の氷とく〳〵と河瀬のなみも春やたつらん。

瑳　咲頃はいつといはての山のはに春かけてまた殘るしらゆき。

柯　雁かへる聲としきけはまかちとり船は霞のおくの海つら。

素　すむ虫の秋の聲まてしのはれて萌るこはきをみやきのゝはら。

徽　みちのくの山のかひある御代に咲こかねの花の霞む明ほの。

廿九日。おなしう、梅の花てふことを、

武　むらきへの雪をすかたに栗狛の山も霞のひま行と見ん。
米　めもはるに今やもゆらんしら菅の眞野のかやはらいちしるくして。
能　野田に生ふるわかなやいかに老ぬらん雪消にふかき玉川の水。
波　春風の吹もとゝめすいつこより匂ふ衣の關のむめか香。
奈　なれもさそあねはの松の春風にさそはれて鳴鶯のこゑ。

馬の角

屋戸のあるし、菊池道幸か遠つおやの、もののふたりしいにしへより、持つたふるたからとてくさ〳〵殘たる中に、其かたち、かえの實に似て、大さも、まそのことなる物二あるを、馬の角とて見せたりけるに、

安良胡馬の角組む葦に嘶ふ也千世をふるえの末葉茂らん。

霙ふる

やよひ朔の日。つとめて雨ふり、ひる、はるるやと見れは霙となりていと寒けれは、

また冴るほともしられて春雨のあめをみそれとふりかはる空。

夜邊の圓居に「山家鶯。

消殘る雪にまかひて花はいつ太山の庵のうくひすの聲。

莫告藻といふことを春のこゝろに、

櫻咲いそにかりほす莫謂の花さへ匂ふ春の山かせ。

二日。盛崗にすめる大巻秀詮の六十の賀とて、

盛岡大巻氏

くろ髪のちよもかはらし春の日にあたたら山の松を友とて。

三日。やよひみかてふことを句ことのかみにおいて、

やへひとへよろつ代かけてひのもとにみなりてなひくからもゝの花。

七潮の雨

ひるつかた、寺の行ひはつるころ、こし雨ふりくるにぬれしと、ゆかたひらをかつき、あなよからぬ雨よ、なゝしほやふりなんとかたらひ行は、けふの雨ふれは、七日の日数、しほのみちひ、れいにたかふことあるをいとふは、海士の子等か女子にこそあらめ。

あまのこかぬれてつむらん磯に生ふるなゝしほやふる雨のものうさ。

万人堂万人牒

四日。万人堂の万人牒といふものを見れは、よろつの人の名あるか中に、かけゆさへもん。かくの四郎。おほかもん。大なこん。さいとう五郎。まひやうへ。あいらしこ。よてこ。めつらしこ。こでこ。せんさい。夷。朔日子。正月子。三月こ。ねゝこ。ますこ。みつけ。にがこ。長命子。ひめこ。ふつ子。めご子。ちじやうこ。こはあやしの、おとこ、女の名ともなりけりと見るに、ころは寛文のはしめ、しかすかに、もゝとせのむかしの春もしのはれて、

咲ころのすかたはいかにもゝの花むかしの春をおもひこそやれ。

近日出發

五日。ようへより空冴へてあした見れは、雪のけしき斗ふりて、

　またうすき霞の衣袖さへてきさらき二月雪のふれれは。

十日。此ほとは、れいのもらしたり。空さへて、ゆくりもなう雪のいたくふり來て、倘ものうくて、

　花はいつ櫻の梢梅の枝傍にたつこのめはるゆき。

十四日(マヽ)。成章に、ちか〳〵の日わかれなんとものかたらひたる夜に、このぬしか夢に、「今よりはたゝしのはなんおくの海のみるめもなみち人をへたてて。」と見しと、こよひのもの語に聞へしかは、

　夢ならはさめてたのまんおくの海の浪のうつゝに立別なん。

十二日(マヽ)。雨いたくふりぬるしつけさに、夜半のまとゐして「春のくま。

　月の輪のかけちをほろに嶺禁霞を分る春のあらくま。

はるの猪。

　いかりゐのあたにふみ行わか草も秋はかるもと身にたのむらし。

はるのうし。

　ほと近くたねやまくらん春の田を行かひならす牛のいとなき。

大畑に行く

鶯の初音

櫻雉子
黃金雌鳥

はるの馬。

咲いろをいたふ心もあら駒の野邊の菫に求食つれなさ。

十五日。大畑の浦に行はやと、あさもよひ、きのふの大雪、けさの八重霜のひかけにとけ合、日頃の雨に、うまうしの行かひしけう、みちぬかりて、馬も人も行ことあたはしとて、大利てふ山中のひろ野にかゝりてゆくとて、山のかけみちに鶯の鳴たるはおかし。こや、此とし聞つもはしめなれは、いましはと馬をとゝめさせて、

雪消る山のかけ草もへ初て聞もはつかの鶯のこゑ。

早欠といふ處は、沼澤なとのやうに春の水くま〳〵にみち〳〵たる岸邊に、鶯のさへつる。

長閑しな氷なかれて行水にこゝろ解たる鶯の聲。

鶯のおもしろく鳴か、みちのほとりまて梢にうつり出て、かれふのうへに、うちはふきいてありく。

雪もやゝ消て朝おく霜のうへに跡つけて鳴春のうくひす。

ゆきふかう殘たる、そかひのかたを行に、雉子のそこともなく鳴たるを聞て、春の雉子をさくらきしといひ、雌を、こかねめんとりといふと人のかたりぬ。行ほとなう又鳴出たるを、

雪の山花のちるかにほろ〳〵と櫻きゝすの聲をこそきけ。

ふたゝひたはれことに、

　花の名のこかねめとりをみちのくの山のかひある春の長閑さ。

びつゞけ濱

びつつけといふ濱に出てけり。こゝも、そのかみは蝦夷人のすみてヒツ。ツケといふ處、大畑に近つく、のつころてふはまもノ。ツコルとて、ゐみしらかいひし名也けりとか。

大畑にて蝦夷の戸出づ

十六日。みなとへにいたりぬ。此あたりはみな、まなこもてつきあけて、はまひさしのことし。それに家とも多くたてならへたるか、去年の高浪にうちくつされて、こゝらの戸出たりしは、みな、ふしたるまゝに埋しは、夷のまかりたるならん。蝦夷は死(ライ)したる人をは、いねたるふりに、むしろに卷て塚(セトンバ)にこめぬ。さりければ、こゝに住しといふこそ、うへならめと。海越に遠うたちのほるは、涌山のけふりたかうなひき、雲かあらぬかと雪の眞白に殘たるはトトホツケ、あるはオサ。ツベなといふめるあたりの、見わたしもいとちかう。

　消のこる雪は花かと又たくひ波間に霞む夷の遠嶋。

農神祭り

けふは農神の祭とて、うちとのかんかきにまうてゝかへり來る人の云、神は去年のしはすのけふ斗いに給ひて、けふにかへり來給ふなれは、はや耕はしめなん。

十八日。人麿のおほん神に歌奉らんと人のいへは、

　神もけふあはれみそなへみちのくの國の手ふりのことをつくさは。

また恐山に

銅金の古狐

山の展望

十九日。黒森の春の祭とて、人さはにむれ行ぬ。

山のくろもりのしたみちふみしたきけふ神事に人や行らん。

廿一日。あさひうら／＼とてりて田鶴のあまた行たり。

うち霞み長閑き春のひなまてもむれてみつるの空に鳴なり。

廿三日。松前より土田直躬、この大畑のふる郷にわたり來て鵜刺山の湯あみしけるさ聞て、とふらひしてんと古道河といふをわたり、杉のしたみちを過る。

こや杉もいく世ふるみち河の邊に霞なかるゝ春の長閑さ。

田中の觀音といふ堂の前も過て、へつい長ねをくれは銅金といふ山みちあり。此山中に、とうきんのちやがらこ、しんさんのはちきりといふ、人まとはせるに、めいよのふるきつねありて、夕近うなりては人通らしなと、しりにたちたる人のかたる。馬のうへよりかへり見れは、湊をはしめ尻矢の埼、近くは佐渡か平（たひ）につゝきたるやま／＼、羽色の神山なと霞のうちにほの見やられたるに、「水鳥の鴨の羽色の春山の於保束なくも所念かも。」此歌は笠女郎のなかめて、大伴の家持のみもとに贈られて、そをこゝによみしとはあらねと、よくおひつと心つからおもひて、すしつゝ其嶽を見れは、雪いとしろく木々のあはひ／＼に見へて、吹むかふ風いや寒く、見やれは昧村ならん、とひく。

なれも行つはさや冴へん水鳥の鴨の羽色の山のしら雪。

外山村蕨の産

ゆく〳〵左の木の間に、やかたの見へたるは外山の村也けり。こや春秋ともいはす、蕨の根のみほりはみ、あるは市にうりて世を渡るといふ。それらならん、女二八山ふかく行ぬ。

はつ蕨をりにあひたる未通女子かむれ行眞袖山かせそふく。

小高森、大高杜てふ處を過て、村木澤、井戸桁、上小河山、谷地山ちかうけふりの一むすひたるは炭やくといふ。

剱山を登る

あは雪の消ぬ太山の炭かまに麓の里の寒さをそしる。

過來しみちもせに、大なる檜のきり株のみ殘りたるは、そのかみ、友すれして焼うせたるなと、青山のから山となりしいにしへを、檜の葉折しき、まとゐして語る。かくて、みさか斗の雪ふみてやをら劔山にのほれは、かひにうくひすの鳴たり。

なれもさそ花とまよひてこまつるき山の太雪に鶯のなく。

この小坂より湖うち見たらんは、たくへんかたなうおもしろけれは、しはし見やりたゝすみて、

眞鳥すむうそり山かけみるめなき海もみるめのふかく霞て。

温泉に著く

かくて湯桁の邊のやにとふらひてけれは、　直躬。

さし月をぬれにし袖のなみた川とゝめてけふの逢瀬うれしき。

と、かいてける返し。

とし月も人を見ぬめのなみた河袖こそほさめけふの逢せに。

廿四日。みつ、よつすめる山雅の聲におとろかされて、湯あみてんとおき出るけはひにいさなはれて、とに出て湖のきしへを、ひとりせうようして、水氣にほやかにのほるを見つゝ、

しほやかぬ海邊の浪もたちなひく水のけふりの霞む明ほの。

廿五日。また、とはくらきに、鸎のこのもかのもにさへつるを聞て、相やとりの人めさめて、夜や明ぬらん、鸎の谷々に鳴ぬ、おき出てきけと、あか子ならんにいへは、いまた夜なかならんとて、いきたなういふは、あさゐせられてといへる、なかめのこゝろにもかなひてんかし。

又、ふしたるやまうとの、鸎は一谷にひとつのみすみて、こと谷にうつらすといへるに、

出る湯のわくる谷の戸あけぬらんあと枕なるうくひすの聲。

松前より渡來し人のいへるは、函館にすめりし高龍寺のせし、過つる五日に遷化し給ひぬ。今は、きのをたへなん頃毫をとりて、「五十四年、石上紅蓮、今日消盡、偏宗空然、となん辭世の偈ありけるを、たゝう紙にかいつけてけるを、相見つる人なれは、しかすかになみたおちて、

鸎の習性

函館高龍寺和尙の死

かけきつる衣の玉はきへてしもみかく心に殘すことの葉。

廿六日。野邊地のみなとへにすむ埜阪なにかし、田鍋のあかたなる熊谷何かしか、けふなん麓にくたるを送りてのかへさ、三途河の橋はしらにかいつくる。

消やらぬ雪を花としみつせ河あやうき橋も空に渡て。

くれ行ころ、大盡、小筑紫山を見やり、

長き日もなかめ盡しの山ふたつみねは霞にこもる夕くれ。

廿七日。はにたの日記のなかに蘗日のなかめ、水中火といふなかめありけるを見て、避鬼畔

たはなせはそれとこたふる弓張の月のゐるさの山彦の聲。

水中火といふなることを、

春雨に沾れて山路は水葉さし木のめけふりて霞む大空。

廿八日。花染てふ山かけの湯けたに鶯の聲おもしろう鳴を、いかにおかしくや侍らんかと、情ありけに、たゝうとのいへは、

紅のふり出てなく鶯や春は末つむ花そめのゆに。

松前への返信

廿九日。あけなはこゝをたゝんとて、松前より來りつるふみとものかへりことかく。北川時房か、むまこなる菅子、陸子は、あかゝみとせのむかし、あさか山の禁の露はかり、手ならふ

道しるへせしとて、さすかになさけ〳〵しう、ふみの、とたへもなうまきそへてけり。

すか女

逢事は波路へたてて水くきのあとのみ忍ふ明くれの空。

となんありける返し。

おもひやるなみちを遠く水くきのふかき情をいま社はみれ。

陸子、今は八重子と名かへつ。そか手して、

わすらるゝひまこそなけれおもひやり心やるへき空もさためす。

かくなんかいてける返し。

遠方の空になかめてわれも又わすれやはするおなし心に。

又、ときふさの翁の手にて、

空の海雲のなみちはへたつとも心はかよへ水くきのあと。

とそありける返し。

水くきの跡やかよはん空の海雲の浪路はよしへたつとも。

於遇濃冬隱

寛政七年かんな月のはしめ石持のかん籬にぬさとり、あるは小赤河の流見にいたり、歸來て此縣をいてたゝはやさほりしたるを、太雪日ことにふりて、寒さ、れいよりもいや增る冬の空にたひころもおもひたちなは、雪にふふかれ、しらぬ野山のみちにかひくれまとひなん。梓弓おして春をまちてと、山田のひたにととめける人々のこゝろさしは、とにつもる雪よりもふかけれは、しかすかにえいてもたゝてとしこへ、むつきもはつるころとさため、田名部の郷に在てせし日記を奥の冬こもりといふ。

田名部より石持へ

母衣埼明神

子持石

かんな月一日。石持てふ山里に祭る石神にまうてんとていつ。谷（やち）なかのみち、日頃の雨にぬかり行かたしとて、目名村より鹿橋をへて、そかひを行みちあり。こきもうすきも、なさけふかう染づる色のおかしうわけ入れは、里近き松山にかん籬あり、母衣埼明神と唱へ奉る。（天註——ちかきほとりの村に母衣部といふところあり、そのあたりの埼の名を保呂閉、あるはほろといふにや。保呂は夷詞にてはいはやの名なり、此こと、蝦夷かいはやといふ日記に委しうのせたり。）この村は、大利といへるはまやかたのひんかしに在る伊奈崎より、むかしこゝにうつりて、其ころに、その邊より神をもうつし奉りしとなん。このひろまへになかめて奉る。

　すむ民を猶やまもらん秋ことにみのる田面の保呂埼の神。

畑中誰れとかやか屋のしりなる、刈あけしあはふのなかに、子牛のふせるかことき岩あり。その岩のつらより小石生みいつるは、栗原郡七の社のひとつに、彦八井耳命をまつり奉るといふ、遠流志別石神と名つけし石におなし。このいしなこ、ひとつふたつ、つとにひろひて、

女共集りて

島おんど

産いつるさゝれも岩と榮行末まもりませ石持の神。

あるいほそくの、いかにそや、いはれなき神にさへぬさとりいたゝきまつるはといへるに、「ちはやふる神のみさかに麻まつりいはふ命はおもちゝかため。」てふ歌のごとといらへつれは、うちゑみて去き。見るかうちに四方八方の空くらく、一とをり雨ふり過れは、あるしのとうめ、とまりねとて宿かしたり。

時雨ふる太山の里のかり枕こよひしきねん袖も沾るかに。

くるれは、松の火、たてあかしのやうにかゝやかし、女、此秋は、いねかるとて、はさめあひかねしなといひて麻衣うつに、くらけれは、男、手斧とりて、小女房てふ株のやうなるものに松のせてうちわり、そへあかしぬ。

をとめ子かいとなきわさに冬もけふ碪うつ也秋にをくれて。

とに、歌うたふ聲してわかき女あまた、かたにつつれ衣かけ、あるは、手ことに座頭皮子とて篠もてあめるこをかゝへきて、おのれ／＼か前におき、つつれ、布かたひらを、ふとき糸してあつ／＼とさし、うみそし、へそつくるとて、こゝかしこにまとゐし、おのかいはまほしきことをいひ、はた、細ころに蚊の集くやうに、「いかな夜も日も君まつはかり、君にまたるゝ身をほしや。」とうたふにかはりて、（**天註**――此歌は松前の島おんどとて、うかれめなとうたふを、其島わたりする舟人なとのもはらうたふを聞ならひて、此あたりのうら／＼山里

男來交りて

男女寢屋に泊る

おぢ起きよ

まてもつねにうたふこととか。）

おもへとも人の心は麻糸のなかきよる〱ひかれてそまつ。

たそならん、そのけそう人にかはりて此歌の返しも作りぬ。

　たへすくる心をいかにかくはかりなと淺原とおもひよるらん。

やかて男ともの、まつの火さゝけて多くむれ入きて、此女とともにおなしむしろにをりて、わらくつつくり、あすは、かやからんといひて繩なひ、稗酒に鯷いはしよけんとてとりくひ、小夜すからかたらひ榾の火もけちかゝれは、われをは、まひろきやの放出のかたにふさしむ。この宿は寢屋とて、契なき女ともいねて、はて〱は、いもとせのむつひをなんせりけるも、又いたつらふしもありける、ところのならはしとなむ。世にいふ雑混寢にや似たらんかし。

二日。樑のとり聲たかうおとろかすに、「あにな、おちな、おきよおきよ。」（天註――弟をさして、なへて、おちとはいひならはせり。妹もこれにひとし。）と起すふり、「庭鳥はかけろと鳴ぬ也、おきよ〱、わか門によのつま人もこそ見れ。」といふ、ふるきうたひもののこゝろによくこそ似つれと、夢さめて間遠に聞つつおかしう思ふ折しも、雨のはら〱と音したるに、かれらかうへもおしはかられて、

　村鐘（マヽ）禮けさしも門にふることの沾れて別れん夜や明ぬとて。

雨のをやめは、ひたけてこゝを出たつ。岨つたふ路に、鹿のあといと多くふみつけたり。

ふゆあさみ鹿のかよひちあとしるく落葉埋まぬ森の下みち。

やちをゆけとて水草ふみしたき、澤水のなかをのみわけくるに、三稜、澤潟の多かるなかに、

行水にみくりおもたかうらかれて時雨に濁る冬の山澤。

目茱の山里近う、はや、身の色しろうかはりたる兎の求食居を、

冬來ぬとうの毛も白く山かけにいとゝ雪まつ身そ寒けなる。

このころの時雨に、のこりなう紅葉ぬるやま〳〵のいろ、小松、檜原の梢に、めくらぶどう、くろぶどう、さなつらぶどうなと、みな、をのか葉ならぬからにしきの色を盡し、わきて左奈都良の赤葉のめつらしくて、

紅もふかく太山のさなかつらくり返しふる鐘禮(マヽ)をそしる。

くら〳〵に歸へる。みちのへの山、田屋の山里のあたりにかゝらん鹿の二聲になけは、

山賤かそしろの田家に引板かけて今やひくらん竿鹿の聲。

三日。おほはたの直躬、梅のかたに、ものかいてと、ふみにいひおこしけれは、いなみかたく、

神無月名におふ春を水くきの情もふかき鳥梅のうつしゑ。

宿を出て

兎毛變りて

山の葡萄

友主を知る

四日。越の海敦賀の浦にすむ友主といふ人來けるに、小夜すからまとゐして、

猶かたれきゝこそあかね棹牡鹿のつのかの海の深かき心を。

このぬし返し。

見るめなきあまの小舟よさをしかの角鹿の海はなのりそはかり。

庚申する

六日。庚申すとて夜とともにかたらふに、鹿の聲したるはいつこにやあらん。

つまこふるならひはすれとこよひとて鹿もねぬ夜を鳴あかすらし。

槌を流す

七日。男の、橋の上より砧の槌を河に投入たるは、家のうちにて一とせに人ふたり身まかれは、かならす、みたり死へうことのあるといふをとゝむるましなひ也とか。

八日。ある人の、山家落葉といふことをよめといへれは、

山里はおち葉誘ふと吹風に時雨ぬ夜半もしくれをそきく。

防火の呪
夜篩の呪

十一日。さ、ねなんといふころ、火はやすめなんさかい埋みて、はき清むる女、篩のうれを、さと火にさしあつるほとに、鼬の、とにて、ひたなきに鳴しかは、升に水入て、門にこれをすて、又、水はしきのうへにますの水うちなかしぬるは、火ふせのましなひ也。はゝきあふるも、小夜なかに、はくましきをいみてなり。

十二日。霜いといたうふりて、殘なうちりはてたる梢ともを見おとろくに、風さと外山にお

譜蒲陶

小蒲陶

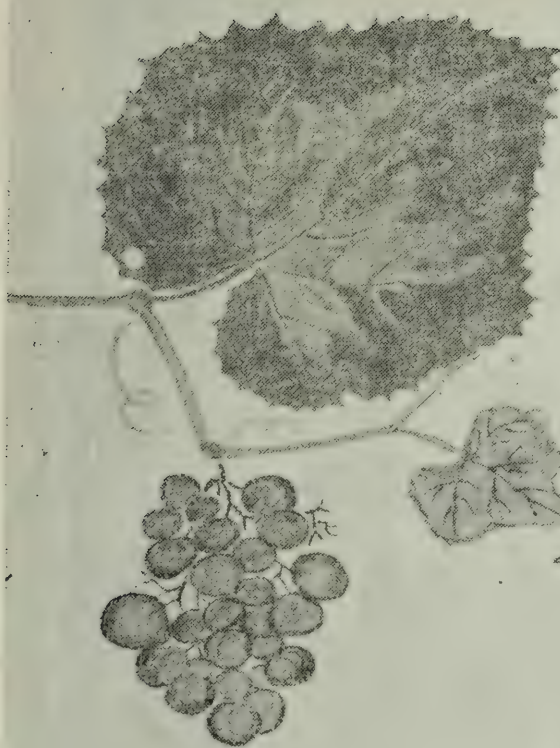
十月の初雪

乾𣗳の薬
組盛
かいとうじ

俗謠一ツ

こる聲したり。

　　杣葉は誘ひ盡して松にふき檜原に通ふ嶺の風。

十九日。夜邊より冴へて、あさ戸おし明れは雪いやふりにふりぬ。こは道奥のならひとて、かんな月のはつ雪も見んことといとめつらしくて、

　　莓むしろ紅葉の錦しきかへてふまゝくもおし庭のはつゆき。

　　みちのくの奥のならひと神無月きのふの時雨けさの初雪。

二十日。としことのためしに西宮の御神を家ことに祭りて、ひかしはのしとき、組盛てふものは、ところのならはし也けり。人みなゑひしれて、はや、かいとうじといふを聞て（天註——紫在とゝ

（むるをかいとうしといふ、皆同事にや、又皆同治といふにやあらん。この海邊のならはしの詞なり。）

　　かくはかりいくひさうたひとる酒にうかれてしらししもきゆる夜も。

廿三日。雪のいとおほくふりたるに、あか國をおもひやりて、

　　旅人の輴にのるまて初太雪ふる鄕の空や今時雨るらん。

廿六日。夢に庚申すと見て、

　　おもふさちこよひねぬ夜を祭るその手向なるらし庭の白雪。

廿七日。けにやあらん大雪ふりぬ。ひるつかたより霙となりて、をやみもやらぬに、酒つく

るやに、から臼の音して、「向山のくぞの葉、何をまねくくぞの葉、吹あけて吹おろし、それをまねくくぞの葉。」と、あまたの男の聲にうたふを、

冬かれの山をみそれのくそかつらくり返しふる遠近の空。

赤河の瀧見に

霜ふり月十日はかり、赤河てふ浦やかたによき瀧のありけるよしをかねて聞しかと、ことなるふしもあらしと、ふたとせ三とせわけも見さりつるを、この頃きくち成章の來て、この瀧見侍りしは世にたくへんかたもおもほへすといへるを聞て、しきりに見まくほりして、けふなん行てんと巳の時はかり田名府をたちて、ノ。ツコルよりみなとべをへて水澤かんかけにくれて、たとる〱池田龜丸か庵をとひ、戯て、

水渟る池田にすめる龜麻呂の六かくし居る宿や此宿。

赤河の瀧

十一日。赤河村にいたり、あないをたのみて八幡阪、けたの阪、傳八さか、尻くべ阪といふところを越て、小赤川のみなかみ、黑森山のしりにかう〱と音しておちくるを、水を渉て、さかしき岨によちのほりふりあふけは、いくそはくならん高きいはほの洞に、すいさうのすだれをかけたらむかことくおちて、不動石のかしらにかゝる水は雲霧とちり淵とよとみ、又大瀧となりておち、しら布をかけたらんかことくに落瀧つ。するは岩と岩とにせまりて、偏提、線の水なとこほすかことくに落流たり。黑森山のかけよりもおち來る、さゝやかのたき

鯣を産す

ながう

大畑の奇松

浪もひとつにひびきあひたり。ゆんて、めてには冬枯の梢しげう、した草は此ころの雪に埋れたり。

ふりつもる高嶺のみゆきくたすかと見へて巖にかゝる瀧なみ。

いさと、おなしみちを來るに、近きあたりに杣やたつらん、木を伐る音の聞へたり。

おく山に杣や眞木さく避能妻手うつ斧の音ほと近くして。

かくて日はしたになれは、赤河に歸り來て宿かれはくれたり。やは、ところせきまて、するめをのほしたるを結ひとつのへ、椽にもかけならへたるか、眼は星なとのことく、火の光にきらめきて更たり。

十二日。みなとに來りて、くすし今井常通の宿を訪へは、わかれたる角額の朋主ありて、あなひさとて語らひ暮たり。

十三日。人々のいさなひて大畑に出つ。菊池常親か奈加宇てふやのしりに大松あり。(天註――こゝの人、なへて借やかたをながうといふは、長屋をながうやと言たみていひ、やをはぶいて、なからうとやいふらん。このたくひ鮲(うぞい)をユゲといひ、大鮲をオホカビてふ名あるのたくひなり。)此松の、葉月はかり、野分あらかりしころたふれふして日數ふるまゝに、ながうのものとも、此たをれ木われにたうひて、たき木にくたしてんといへは、まかせたりけり。けふや伐らん、おすはかならすと人々をたのみ其まふけしてけれは、たて花すく人は、この枝、かの枝は、なくたし

そ、なさけふかし、我にかならず賜れなといひて暮ぬ。夜のまに、此松、もとよりなをく生ひ立ぬ。明れは斧うつ人も來てふりあふき、こはいかに、此もとにおましますは飯成の神のおしみ給ふ木にやと、いよゝたふとみし其松も見てんと、まつ菊池かもとにいたれは、あるし、もの見せ侍らんとて、いと大なる函の中より、いつさかあまりいつきはかりの、なりは榲桲の實のごとき瓱に、刻彩のふたつの文字あるをかゝへ出て、これ見たまへ、むかし尻屋の岬に船つなきたりしとき碇にかゝりてとり來しかと、近きころまて蛎のひし〳〵とつきたりしを、みなくたきとりしなとかたりける。あやしの瓶なりけり。

菊池氏藏古瓶

しつかなる磯邊に拾ふ玉たれのをかめも御代の光見すらん。

このおほはたに日數ありて、

大畑滯在

十八日。なほみのやに更るまて圓居して、いさねなんとて　友ぬし。

旅衣冴るしきねはせはくとも我にもかせよ十府の菅こも。

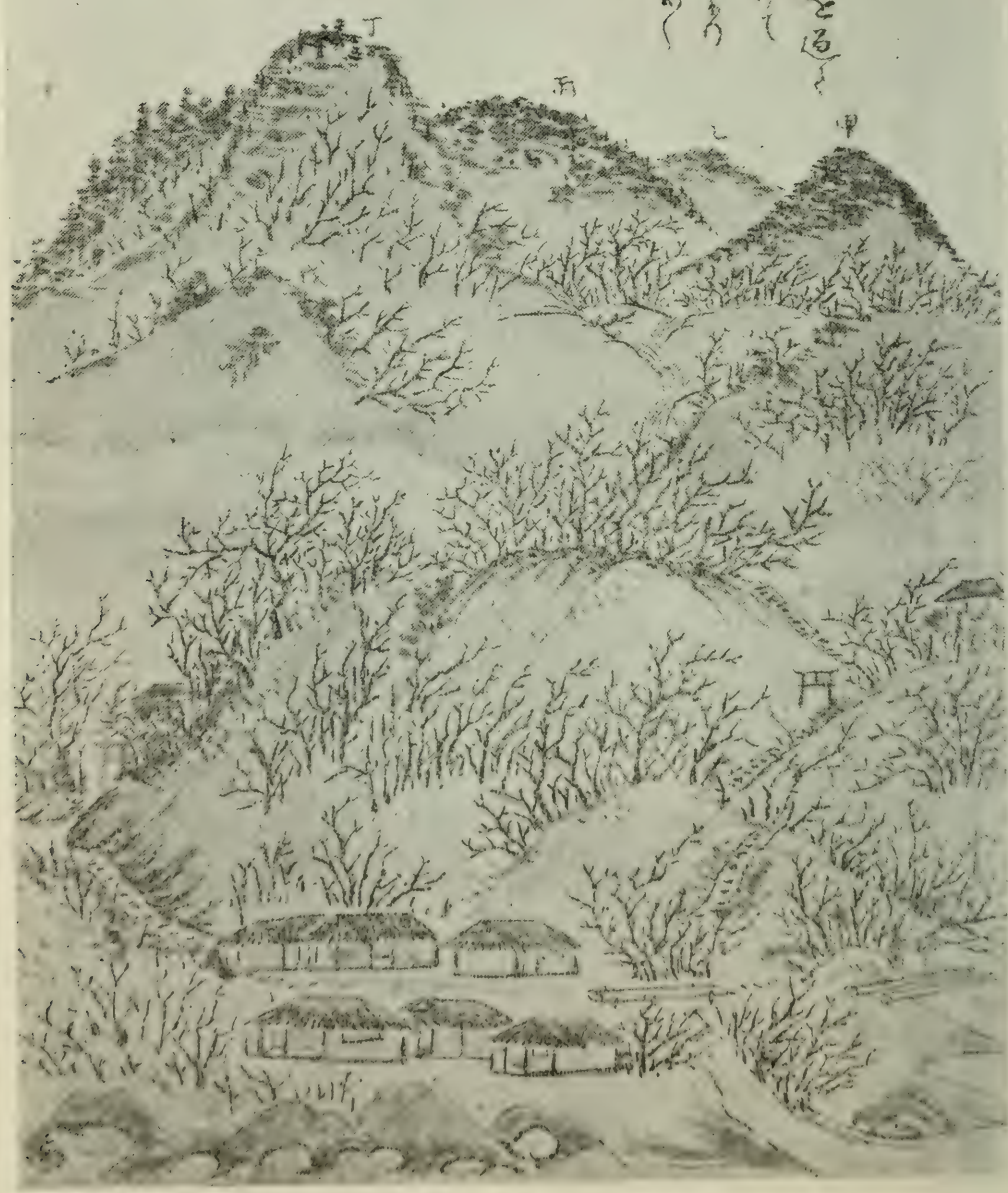
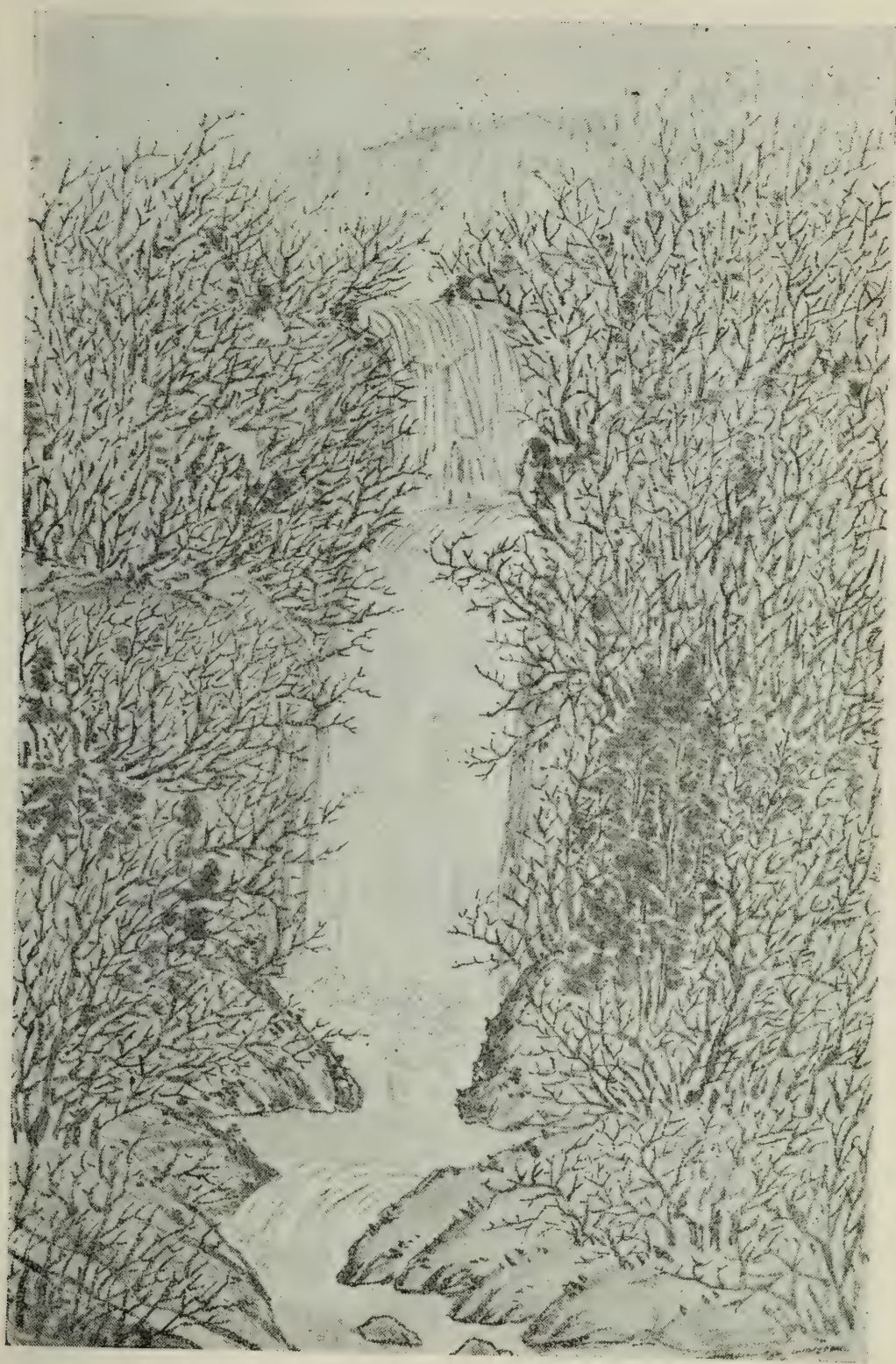
といひて枕とれるに返し、

ふる雪のつもるおもひやかたらなん十府の菅こもともにしきねて。

又逢事はいかゝ、いま一日〳〵とてけふもくれたり。

大畑を別る

十九日。けふこゝをいてたゝはやといふに、すへなしとて　直躬。

甲松倉山
乙朝日面山
丙左藤筒手山
丁黒杜山
戊前黒森山

別行人はいつことしら雪につけにしあとをひとりしのはん。

となかめてける返し。

めくりあひて逢事はいつしら雪のふり別行身を思ひやれ。

つぬかのともぬし筆をとりて、

われもそのあとやたどらん太雪ふる奥の細道よし埋むとも。

とありける歌の返し。

おもひやれ別てはいつみゆきふるおくのほそみち心ほそさを。

いまゐつねみちのいはく、

なれてかくかたらふことのなかりせはけふの別に袖はぬらさし。

とありける返し。

別行袖のなみたもかつ氷りとけぬ思ひをおもひやれ人。

かくてひるになりて出くれは、この頃のあめ雪に路は沼田のやうにぬかり、うし馬の行かひしけうふみうかちて、とくもゆかれねは、關根村に至てくれたり。こは、いかかせんとまとへは、なさけ深き翁、是もていきねとて、くゞ草のたへまつをくれたり。これなんたよりにたとれど、夜風さと吹來て身に冴へ通りゆきなやむほとに、ふかきぬかりにおち入て、つい

まつもけちはてて、ぬかゝりにふみいらぬ料にとて立たゝくゐせをちからに、からくしてはいあかりて、いかんかたもおもほへすたゝすみて、

松の火は嵐にけちてそことたに行衞もしらぬみちたと〳〵し。

たひ人の笠しろう风に見へたるは、たそそ、おなし道にまよひくる人にやあらん。ともにいかまく、火もこひ、くぐのまつもともしてんと、

かたらひて友にやみちやたとらなん行方くらくくる人はたそ。

近つきてかたらへは、直躬かおや也。あなうれしともうれしといふを聞あさみあきれて、こや、いつれか狐ならんとこゝろまとひ、いさとて、村をさ與左衞門といふかやに入て、こひちにぬれたる衣ほし、寒さわすれていねたり。

二十日。田名府に歸れは、菊池清茂のもとよりふみにしかいひて、おくに、

闇にさへうしとそおもふ夜もすから人は分こし路のぬかりを。

となんかいたりける返し。

おもひやれそこともしらぬうは玉のやみのぬかりちふみまよふ身を。

廿二日。あかせし日記を見てけふなん返しけるとて、そのふみことに歌かいそへて贈ける。

成章。

關根村一泊

田名部にて

成章、我遊覽記に題す

伊寧の中路てふ書に、

たゞさもいなの中路なか〳〵にふみ見しほどはいかにわけなん。

とありける返し。

はつかしないなのなかみちなか〳〵にたどりしあとを人もふみ見て。

吾かこゝろ。

姨捨の月のあはれもおもひやるわか心てふふみにしられて。

このかへし。

いかにわかこゝろをよはん更級や姨捨山の月のあはれは。

牧のなつくさ。

いにしへの尾駮の駒もさぞなかくふてさへささむ牧の夏草。

とぞありける返し。

名にたてる牧の夏草かき分る毫のすさひのあとをはつかし。

けふの狹布。

見めくりしその名處の言の葉はつゝむにあまるけふの狹布。

とありける返し。

閏十一月

言の葉のむねさへいとゝあひかたきけふのせは布せはきこゝろは。

千引のいし。

ことの葉のさかゆくかたをかき分し千曳の石よ壺のいしふみ。

となんありけるに返し。

あらましを言葉にかきもつくされぬ千引のいしよ壺のいしふみ。

うるふ霜月十一日の夜の月、いとあかきに、

手折られぬ花と砌にむかふらしあはれ夜ふかき月と雪とを。

となかめて、あくるあした成章のもとへつかはし侍るに、このうたの返しあり。

花ならは訪れんものを手折られぬ雪を砌の月もうらめし。

十二日。おほはたの木村來て、こよひはおなし宿になにくれとかたらんなとありて、たゝう紙のはしに、

鉢の木の惠をこゝに火藏かな。

とかいて見せけるに、あるし、とにたかひてあらされは、やのあるしにかはりて此和句をつくる。

雪の一夜をうすき小衾。

又も田名部に年越さん

二三日ありて津刈路に赴けるとて、つとめて、

　嗚呼雪くついよ〳〵おもき名殘かな。

木村かいへりけるを聞て和句せり。

　留る手冴る門のあさかせ。

十五日。今井常通のかたりけるロシキヤの言葉を聞て、うちたはれて、

モノウカノ(多)、スネヤカ(雪)、テレポ(木)、ウヱツウヱ(朶)、ツウヱト(花)、ウヱシヤウ(見)、セホウウヱツカ(人)。

このこゝろをわきていはは、

　けふいくかふりもをやまぬ白雪を梢の花と人や見るらん。

二十日。此里をせちにいてたゝんといふを、ことしは、れいよりも寒さいたく身におほへ、雪は、なゝさか、やさかと日にそひてつもり、高きやの軒をもふりかくしたれは、わきて野山の行かひおほつかなう心にも思ひ人もいひ、ことしは年のうちに春たては雪もはやけなん、むつきものし侍れなと熊谷、和歌山なと、ねるころにいへれは、しらぬさとにいきて雪にふりこめられ、寒さに身凍へ病にふさは、いかかはせんと行すゑをはかり、はた、人のまめなりけるこゝろさしにつきて、又ことしもこゝにとしは越へなんと、菊池重右衛門といふあき人のやをしそきいてて、わかやま叙容のや葛覃舍といふにうつりたり。

十年ぶりのシガ渡り

十二月朔日。雪はいよ〻ふりて、市中の大河は氷はりふたき、そりにものつみてひきわたし渉るすさましさといへは、十とせあまり氷わたりせさるに、ことしは寒さに雪もいたくふれは、か〻ることもありきなと人のいへり。

五日蛭子祭

五日は蛭子のみまへにものをくうして、やことに祭り、

八日醫者禮

八日は、くすしやに、くすりなめたるやま人のかたを一間にあかめ、やまういやしたる一とせのいさをしをあらはし、ほこりかにまちえて、こかねしろかね、せにの山もさらにゆるき出たるかことにいたくつみなし、さけさかなにあへたり。

九日大黒祭

九日。おほなむちをまつりたいまつるとて、ふたまたの大根のいとおほいなるに、豆のあはせを、よそあまりやくさにさとのへたるとも、やのぬしか、おしまめ、手まめのわさふたくさ入れされは、うちてのこつちも、みてにむなしう、ねかひ、うけひたまはさりけるのおほんかんちかひのありとは、たはふれたるすちなから、よくもまめなるおしへにかなふ。

十二日山神

十二日。大山祇の神を祭る。杣山賤を山子とよふか來あつまり、ひととせのやまこもりしむくひに、鳥總たて、いやしまつり奉りしを、猶けふは其わさせる家のをさは、それ〳〵にあるししたり。

年内に節分

十四日。けふはせちふ也。そのこと精しく去年の日記にしたれはいはす。小夜うち過る頃

中嶋公世。

憐彼遠遊客　旅愁幾度寛　被勞鄕國夢　可起歸歟嘆

明日春將立　莫遮年茲闌　興風忽滿袂　一夜忍邪寒。

といふ、くしなんかいおくりけるにむくふ。

あすは又春やたゝましふる鄕を思ふおもひを行て語らん。

又おなしぬしの、

とひ來なはうれしさいかに板ひさしさすかものうき雪の下庵。

とありける返し。

けふやとはんおすといふまにいた庇さすか日數もゆきつもる宿。

十五日。きくち成章のもとにて、「歳中立春を、

春のたつしるへそ波も年の内に霞初ぬる夷の遠しま。

と、あるしそなかめけるに、おなしことを、

としはまたふりつむ雪も高砂のをのへのかねて春は來にけり。

ふたゝひおなしこゝろを、

年ゞ春の二木をみきと雪なからかたえは霞む武隈の松。

としの中にけふの狭布あひかたき春の重てきぬる也けり。

　年浪のうちも越へなて末の松山路はこのめ春風そふく。

目藥を制して贈る

十九日。成章のこのころは、めのやまうおこりて冬隱せりければ、かくては、こん春の光見んことこそかたからめなと聞へたりけるに、わかものしたるくすりいさゝか贈り侍りしかは、そのしるしありきなと文にいひて、おくに、

　月花のなかめもかたくおもひきや又來ん春に逢んものとは。

といふ歌をなんかいのせけるに返し。

　月花の色や見るらんいさはやも木のめ春風吹をまちえて。

暮の市

廿六日。けふは、くれの市とて、うしうま引かひ、かまひすし。

　月も日も暮行駒のあしなみや年の市人いそきたつらん。

わたくし大

廿八日。ことしも此月の小なれは、わたくし大のためしに、むつきの朔をかそへいるれは、けふにかきをはりぬ。大橋の上より見れは、氷なかははけちたる河瀨に鴛鴦□(蠹蝕)鳴たるに、

(原本蠹蝕)□□□□□おしの毛衣なれも又身に重ねてや春をまつらん。

『津可呂の奥』

南部より津輕領に入る馬門の關

朝炊の煙見ず

雷電社參詣

やよひ廿二日。津苅の嶋山、椿埼とておかしきところのありとかねて聞しかば、今や咲ぬらんとて見に出たつ。知加川を渉り、馬門の關に、れいのせき手出して、やをら越ゆ。湯澤川（山おくの出湯よりなかれく）さかひ川（南部、つかろのさかひ也）を渡りて狩場澤せき屋にいたる。みな、むかし通りける道なれど、見奉らざる菅大神の祠とて、さゝやかなる、めをのはじめの石、雷斧石、雷槌石なと云ふ、ことなる石ともををさめたり。保連左斯といふはや川ありけるを丸木橋にさしわたる。

あら波のよるきしこほれさしながらにごらで花のかけやうつさん。

口廣村を經て清水（しづ）河村に入る。（天註——ある船長の云、いつこにてまれ、家一二ある處にても、夜明なん頃ほひは、あさひたく煙のやれに立上り、横雲と一つに棚引渡るを、此清水川に於ては、さるわさなし。いかなる故にかあらんと、再ひこと船人に問へば、沖邊に泊もとめたれど、折々それと其村の煙つゆ見しこと侍らじとなん。△口廣の浦やかたより清水川むら見たるかたあり。）濱子と云ふ處を來れば、沼館と云ふて家ふたつある邊よりは雷電の林いと近し。むかし、いざなふ人の道いそぎ、こゝろあはたゞしう、えまうで奉らざれば、いで、こたび迚鷄居に入る。木深き森のしたみちを二町ばかりくれば、鹽たて河とて、しほみつれば御手洗川いとふかう、其の渡一

里あまりとやあらん、遠う水を隔て見やる宮ところ也。近き頃まで橋わたいたるを、氷に橋ばしらくたけて、けたもはつか斗見えて、うなの浪もうちよるばかり、青海原まちかうわたらんことのかたければ、こなたの川岸に手あらひぬかつきて、

　　みつしほの浪のしらゆふあさな夕かけていく世になり神の宮。

むかふ海邊に淺所と云ふ村あれど、舟よはふとも、きいとゞくへうもあらずと、あないの云ふを聞つゝ、

　　この河の渡も浪のいとふかし世にあさとこと名のみなかれて。

ことかたよりまふつるみちありと云へば、こゝを出來て神明の祠にぬさ奉りて小湊に來て、ことのよしを問はんと、かの神籬につかうまつる雷電山日光院と云ふけんざのもとにとふらひてとへば、けんざのいへらく、ころは大同二年とか田村丸の建給ひて、加茂を移しまつり奉るとのみきいつたへ侍る。そのかみ記したるふみとも、火のわさわひにあひてうせたり。近き天明のはしめならんか、松前の嶋なる君、夏木立ふかう茂りあひたる宮居をはるはると見奉り、ぬさとり給ふの時、「玉垣やあけもみどりもしらなみのあらふて淸き神のひろ前」となんながめたまひしとかたりぬ。（天註——△雷電祠地の圖あり。）かくて此里のとひまろ、宮嶋たれとかやかもとにとまる。此里の近きあたりを見ばやと出あるく。むかし行かひのすちに上

小湊にて

潮立川

家頭をうつ

槻、中槻、下槻とて、としふる槻の、みもとありしかど、上槻のうつほには大いなるをろちすみてけるが、いそとせのむかし、かんとけの火にやかれ、中槻も近きとし野火にかれ、下槻のみひともと今殘る。そのあたりに昔在りつるを錦木の里といひたるよしを、里のとしたかきものらの語るは、毛布の郡とはいかにやあらん。昔こゝを通りし頃、せのあさみたれど、そのいにしへは、みちのおくのならはしに、いづこにてまれ、けさうしける女あればたてたるにや。

錦木の其名も朽ず今の世にいひこそ立れ古き例を。

吾妻山東福禪寺（天註——むかし吾妻か嶽の麓よりこゝにうつしたる寺といふか故に、山の名もしかり。）といふ寺の砌に、風吹渡る青柳櫻のしなひ、ことにおもしろければ、

柳さくら都の錦うつしてもいかに吾妻の名におへる寺。

清風山淨林寺とて、なもあみたふちとなふ寺に、鶯のおかしう木傳ひてなけば、

春風に翅ふかれて青柳のきよきはやしにあそぶ鶯。

廿三日。あさとく、あないをさきにたて、こみちに入りて福嶋村を左に見て潮立川の水上を橋より渉るに、むらあり、福館と呼ふ。河べたの角ぐむあしのなかに、なかやかの木のうれにわら、菅、あるは又笹などをつかねいひてさしたり。これを家頭うつとて、このとし、わが

遠近山々

やねふかんとおもふ折しも、むつきのはしめに是を立てゝ我刈らんしるしとて、そのぬしがたてたりとなん。このあたりより遠近を見やりたるは、いはんかたなうおかし。比岐乃己志か嶽のそひえたる三角かたけの、不二の俤に霞み、鹿子まだらに雪のけち殘たるは、吾妻がだけ西に遠う、こなたよりは外山にかくろひて、まほにも見やられざる。山口てふ名聞えて黒き山あり（天註――山口村に大槻一本あり、すなはち槻の明神とあかめまつる。此木のほとりより藤澤村にかゝり、三もとの槻のもとをすきて昔行しとなん。）、われ若かりけるほどは、田うゝる時はつゝみ打聲のもはら聞えたれど、近き頃は、たれ聞しと云人もゆめなけんなど、あない語りつゝ平川といふ村を過れば、としふる林に入る、れいのふるみちにこそ。ふたゝび雷電のほくらにぬさとりたいまつる。（天註――△圖あり。）

いさきよきかもの河浪うつしてもふかき惠みのかゝるかしこさ。

さゝやかのみなとべにこゝをさしてや小湊の名あらん出れば、あさとこ村になりて休らはんといへども、つれなき人の屋ならん、戸させる門に音信れて、

貝釜の料に

柴の戸をさして問來る人もなしとまた朝床にあさゐする宿。

間木の濱とて、やのはつかばかりあるにけふり立は、帆立貝、あかざら貝などをやいて、しら灰となし、しほがま、ねり作る料とてわざにせり。瀧といふ村に水もかすかに落あり。

おちたきつあるかなきかに岩つたふ寄る汝せの音にまぎれて。

鐙崎の坂

ヘツケナヰ

穴澤の一本椿

鐙崎の阪をなからばかりくだれば、むかふ磯邊に、たかうなの如く、しらいはの立てり、名を立石といふは世にことなる姿せり。（天註――立石の高さ、五丈あまりにや過ぬらんかし。）下つかたにいはやあり、うちまひろくして、かたゐなど行くるれば、此いはむろに泊すと云ふ。そとさしのぞけば、うち、はのぐらきに、はら白きけたものふしぬ。こは、あら熊にやと、あないも、たましゐを飛してにげしぞき、身に汗あへり。やをら、ヘツケナヰ（天註――ヘツケナヰ此名蝦夷の辭也。）といふ鹽やくあら磯に出づ、しほやに休らふ。鹽木を牛につけて嶺より追れいの掛樋に、はねつるべしてながし入る。しほやに休らふ。

（鹽木を牛につけて嶺より追）くだすに、花の一ふさかゝりたるは、

鹽木こるおのゝひゝきにちる花をうしともしらではこふ海士の子。

かくて穴澤と云ふ岨に椿のひともと咲たり。（天註――△圖あり。）こはむかし、こと浦の人、椿を崎よりぬすみこゝまて來て、海のとみにあれ雨風のするは、下草をひらひてもたゝりをなんしたまふ神の、惜み給ふその實は、いづこにや植んとおぢおそれて、ここに捨たるが生ひ茂り、枝葉さへ友やしたはん、そなたにのみふしなひきたり。かゝるためしのあれば、一枝をだに折人もあらじかしと、道行人の見つゝ通る。

しら波の　ても歸すはま椿かけて八千世の春を咲まし。

白砂村よりしらす越えの坂なかにたちて、大澤てふ山のあはひより、椿崎ほのかにいろどり

田澤に出づ

渡るが、遠う見やられておかし。鎧崎をくれば田澤のはまやかたになりて、雨のいやふりてけれぱ、浦のをさかもとに宿かる。

廿四日。夜邊よりの雨風に海もあるれば、おなし宿にあり。

蝦夷の遺跡

廿五日。きのふのごとに雨ふり、ひるの空の晴間に海べたにいで、はた山岸に行けば、古館のあとはそこゝと、おくえそのむかしジヤクチと云ふ蝦夷の柵（チヤシ）のあとは、山の田はたけの名とのこりぬ。ふかう入れば、野内畑とておかしげなる山里に櫻の咲たるは、いはんかたなうおかしう、折句歌をつくる。

　のき近きなかめよ櫻いま盛はるこそわきてたのしかるらめ。

椿崎の椿

廿六日。海もなぎ空もはれたれば、つとめて椿崎見にとて出ゆく。浦館（やかた）よりはみちしはし離れて岨よりくだれば、波うつ岸べよりけしき遠さかりたるいそ山に、としふる椿のひしひしと生ひ茂りたり。こは如月の頃雪やゝけぬる頃ゆ、やをら咲初てけると云ふ。今、やよひの末つ方花はなからばかりも咲つれど、紅ふかうふゝみたるは稀なるやうに、朝日の影にいとまはゆきまで、にほひの潮と共に滿々たり。年毎の卯月八日の頃ほひは、いつもまさかりとて、近きわたりの人々うちかたらひ、かちよりし、舟にてこゝに渡り花見すと云ふ。けふの空、のどかにうち霞みたる朝汻に、こゝらの椿咲たるは、巨瀬の春野のたま椿も、えこそを

よばねど、こなたかなた、ちりたる花どり吸遊ふ童を友にわけめぐりわけ入て、小川の流るゝへたに椿明神と云ふ祠あるにぬかつく。ころは文治のはじめやらん、此浦にかほよき女ありけるが、こと國の船人年々來て、此うら／＼の宮木伐てつみ行男と契り、末はいもせのかたらひせまくむつひたり。其舟人の歸りゆかん折に女の云、都人はつねに椿の油てふものもてぬりて、髪の色きよらにつや／＼とひかり、つら／＼椿の葉のごとにありとこそきけ。かゝる賤しき海士少女も、をくしどるいとま、露ぬりて、にやはしきものならば、來る年のつとに椿の實たうびてよ。絞りぬりてんと、餘波すべなうない別て、とし明れば此船長のこんやと、むつきより、しはすまでまつに、むなしう船の來ざりければ、又のとしも春より一とせを待つに、いかゞしたりけん二とせ斗船長のこぬを、この男は、こどめに心ひかれてやと、契のたかひしを深く恨て海に入て身まかれり。その女のなきから波に寄たるを、浦人ら、なく／＼横嶺といふ所に埋て、つかしるしに木を植てあとゝふらひけるをりしも、かの船をさ三とせを經てこゝにこぎつきて、さりかたき事にたつさはりて、二とせ三とせも沖のりせざりける。こたびは、きつる。かの女は事なしやと問ふ。浦人しか／＼とこたふるを聞て、ふなをさ、こはまことか、いかゞせんとてふしまろび、血の涙を流してなけどいふかひなう、せめて其塚にまうでんとてよこみねに行登りて、苺の上にぬかさしあてゝ、いける人にものいふ

やうに悔の八千たびものいひつゝ、其つゝみ來る、いくばくの椿の實どもを女のつかのめぐりにまきて、今は苔の下に朽ぬる黑髮の、いかに此油ぬるともつやゝかならんやはと、たゞなきにないて舟こきいにき。その椿殘りなう生ひ出て林となり、花ことにおもしろく咲たるを人折れば、きよげなる女あらはれて、花な折そと惜しみしかば、海士、山賤おそれをなして、女のなきたまを神にいはひけるとなん。其かん祠も今は横嶺より、かく、ごと所にうつしたりけり。咲たる林のうちにながめて、（天註――△椿崎の圖あり。）

影おつる磯山椿紅に染めて汐瀨の波の色こき。

大島　油子島

この崎を越えて寅にあたりて、うなの上に釜臥がたけの近う見え、尻矢の山は、仄にそことしられたり。久地(くち)の濱を過て少し磯はなれたるを大嶋といふ。油子の嶋とて見やるにおかしき處あり。しばしたゝずむに、みちにて見しあき人は山越のみちより來るを、あとより人のクサイ〳〵と呼ぶ。こは、しこ名にやとおもふに、まことの名なり。いづこの人と問へば狩場澤といらふ。その處のならひとて、ムヂナ、イナリ、マシ、ウサギなどいふ名も侍ると語るは、田名部のほとりにニガベンケイと云ふ名はいと多くたれも〳〵つけと、蛙(かへる)、釋迦などいふ名も聞しといへば、むぢなのはらからなるといふ、くさい、はとわらひて村になりぬ。

人名クサイ

稲生を過ぐ

稲生(いなを)とて田づらに人おりたち、屋は三ばかり見えたり。（天註――△稲生の里の圖あり。）

けふまきて秋はいなふの實のるらん小田の苗代水越てけり。

小稲生といふ山ごへに、あぶらこか崎を見渡したる離れ小嶋など、いはんかたなう、めとまる。浦々の風情ことなり。ゆき〳〵て浦田といへる處になりて、

海士の子は浦田に水やまかすらん蛙鳴なり春の山かげ。

此とまやにとなりて馬屋尻てふ浦やかたも並ひたり。又山越えあるにのぼりて浦田、馬屋尻、あなたは藻浦といふ處ぞ見えたるおかしさ、いはん方なし。かくて下りはてゝ此浦々のおもしろさに、一夜ねて曙見てんと宿かれど、ひとりに宿みだりにゆるすべきや、ところののりなればかさじといひて、かさゞりけるに、

浦の名の藻くずしきねんあまの子よつれなく今宵宿かさすとも。

なさけある翁宿かして夕飯に、ふくべら、しほで、くまあざみをにて、此海苔もけふつみしとてくれたる時、たはれうた。

はま風のふくへくのりもつみぬらんひるやしほでの水もあさみに。

此浦の觀世音とて、としふるもりのあるあたりより沖邊をはるかに見やる。二子島、土屋の嶋、あざむしの嶋などみな波のうへにうちこぞりて、たゆたふやうに、夕日のかけろふは猶おかし。（**天註**――△藻浦の磯山のひとつ石、四石、觀世音堂、近き嶋々遠き浦々の見やられたるかた、ひたんにのす。）

かんがけ

浅虫

笊石の浦

夷名シャルウシ

廿七日。くもりたるあした山路を分出て、板橋といふ山里をへて、しはしくれはおほみちに出づ。土屋の浦おかしき岡越えに、かんかけのあり。（天註——鍵懸にや神掛にや。此坂に至り木の枝の二股をなげかけて、わか、けさう人のこゝろいかにといふ占をしにける。此かきかけのやかた、道の奥、出羽に多し。）かくて、あさむしの見ゆるおかしさ、此里になりて、うま人安く通ふ。（天註——浅虫の温泉あり。鷹虫とて蛇にあざありしがすみしいはれをいひ、又湯ふねにて麻蒸したる物語をせりける。）山越のみちあり、海邊行有多宇末井の棧わたるみちあり。このみちさかしきところなれど、むかし見し處なれば猶ゆかしく、橋の上にて、

　あめに雲ふみて木曾路の橋ならでいそ波たかくかゝるあやうさ。

へびつかと云村をへて、ほとなう笊石の浦やかたになりぬ。箭倉崎とて、むかし不動明王をあがめたりしと云ふ。こゝにある石のすがたの、笑てふものに似たれば浦の名とし、其あたりにかさなれるいはほのしたつ方を、人のくゞり出るによけんとて、又の名を潜坂といふといへど、むかし夷人のすみてシャルウシといひし。其同じ名夷國に今聞えたり。（天註——東の蝦夷の國のかやべのほとりにときはといふあなたシュシュベツといふところ、こなたにザル石といふ聞えたり。是もシャルウシの夷語をあやまれり。）又久栗坂てふ處は此南の山奥に、いにしへの行かひのすぢとて今にありけり。こゝのおかしさに宿付たり。（天註——△圖あり。）

廿八日。野内川のみかさ増りてといへば、えも出立ずしてこの浦にながめてふしくれたり。

廿九日。雨ふれば、同じ宿に、うちくもりたる磯山のたゝずまひ、沖の島々見えみ見えずみ

霞みたるもおもしろくて、
　雨にけふくもるもつらし沖津波歸らぬはるのあすはたゝなん。
三十日。けふははやくれゆく春の光おしけくも、あさびらけの戸押明くれば海の上晴わたれり。この夕つかた、とに出て、
　暮て行春のなごりも波遠く霞みかすまぬ浦の嶋山。
めぐりみし岬のあらましを、つたなき筆の行にまかせて、おぼつかなみのよる〳〵宿に、かいうつしぬ。

十月十五日青森を立つ

立野、入内、雲谷の牧

比呂舍岐のいなきのほとりに、こゝら相しりたる人、かならずとひこと聞えしかば、いさとひてんとて、ひとり、かんな月のなかばかり時雨うちふるに、青杜のみなとべを立ちて野原をくれば、濱田と云ふ村なん、うなのへたよりつゞくやうにてちまちのあれば、村の名とやなりなんかし。遠近にさへづる雀の、さむげに群わたる。

刈あげし冬のはまだの村雀おちほにあさる聲冴るなり。

村はしの屋に、大なる櫻の木を袖籬にゆひそへたる門のあり。その下つ枝のはつかばかり、もみぢたる葉を、木枯のふき殘したりけるを、こゝろありげにおかしかりければ、

いかばかり春はさくらの一本のしぐれふる枝の色ぞことなる。

むかし見たるひともと、太文木のうつろなるが畠中にかれたつ。ゆんでは妙見ぼさちの林、神さびたる鳥居に入て大同の昔を偲ぶ。（天註――ぶち、ぼさちにも鶏栖たてゝ注連ひき、神のことにあがめ祭ること、もはら奥の習にこそ。）

冬枯て落葉に埋む神垣にいく世の杉の色ぞまかはぬ。

ひだむの谷川をへだてゝ耕田山の雪いや高うふり、あふぎ見やるだに行袖さゆる心地せり。その埜の原に瀧野澤、入内、雲谷といふ三のうまきありけるなかに、瀧野澤てふ處こそ、名にたかき館野の牧も宮城野の木の下見るにいかゝまさらん。あるは、みちのくの稲田の山は秋霧のたち野の駒も近つきぬらし。はた、秋田の山のとも聞えて、むかしは瀧野

荒川宗全寺の柳

を立野とも云しとぞいふめる人あり。秋田山も近きなりの國なれば、しか云ふ人のことはりも、うべ近からんか。琪府寧爲、母宇夜の二つの野らは、されはとられて馴行ものをと、俊成のよみ給ひし處にや。此牧近く荒川てふ名も聞えたり。（天註――夫木俊成　みちのくの荒野の牧の駒たにもとれはとられてなれ行ものを。南部に荒沼といふ大牧あり、それを、あらのうまきといはんも亦うべならんかし。）蕕役てふ村の小河渡れば、行連りてあら川のやかた也。荒河山宗全寺に、梢あらはにとしふる柳一本たてるを見つゝたゝずめば、あるじの僧さしのぞきて、きさらぎ、やよひは、すがた風情もことなり、其頃かならずとぶらひこと云ふ。

　春はとひとけて語らんわすれそよ柳の糸のかゝる情は。

牧馬の冬籠

馬いくらもひき出でゝ、みちもせにさりあへずゆくは、津輕坂と云ふうまきの駒にや。父馬をさいたて母駄馬もとり得て、近き村々のまをりにこめて、千草のまぐさにかひやしなひたてゝ、ふゆこもりさせて、雪消え若草のもえづるをまちて、その牧々の野原に、はなちかふためしなりとか。

　とりひきて駒はあら野の牧だにも枯て淋しき霜の下草。

猫の坂越ゆ

高田の村より雌狸(まみ)の坂にのぼりゆく〳〵夕日西にさしかげろひて、野火ははら〳〵と四方よりもえて、行末くらく煙たちむせぶにいぶせく、分こうし、日もくれなん、行末の野路また遠きに、いかゞすべきとためらふ。深き谷かげに、雪のふりかゝりたる家居まばらに見えた

小館村

酔人の俗謡

るは、聞つる入内村にや。そこに、としふる觀音のおましませりといへば、まうでまく、此村に下りて一夜の宿もからばやと、わらはべの馬追行をあないに、これがしりに立て九折の岨をくだりはつれば、山田の畔に細く行水を菊河となんいふと云へば、

河の名のきくの傍かつ見えてきしべの草に結ふ夕霜。

くれかゝる軒に音なひて宿とへば、こは思ひつる村にはあらで、小館といひ中野と云ふ村なりけり。しか云へど、行べきかたもくら〳〵になれば、すべなう村長が家に入て、ひと夜をといへば、ゆるしぬ。夜と共に雨そぼふるやうに音の聞えたるは、軒の太雪の、たえず柴たくあたたかさにやとけぬらんかしと、聞つゝふしぬ。

十六日。夜邊よりおやみなくふりつゝきたるならん、つとめて雨猶はれもやらねば、えいでたゝず。ひるより雪降れり。

十七日。きのふにいやまし雪吹して、けふもはたくれなん。

十八日。このいふせき屋に二三日、つれ〴〵と雨雪霙に空さえくらくふりこめられし夕くれつかた、ゑひなきするあら雄ら、みたり、よたり入來て、あるじは居たか。松前の蝦夷がさげたるきんちやくは、おもてへんこにうらまんこ、くちのかゞりはたろせんこ、と、うたひつれて、うたへ〳〵といひつゝ、ふしまろぶかしらより汗し流るゝを、やのたうめたち見て、さ

かゑひどは、さむげなることもあらじとほゝゑみて去りぬ。

おもふどちゑひのまぎれの一ふしや寒さはよそにしら雪のふる。

十九日。雪はれのひるつかたたちて、入内に行てんとてとに出れば、山賤らしき男三人が過るを、いつこへ行やと問へば、近き山里金濆、雄別内、あるは親鍋といふ。三人は三所の村より、さりがたきことにかゝづらひ行て今歸りて、又田山に行さふらふ。行なば、いざなはんといふ。その田山とはいつこにや。それも入内の事にて、村はさゝやかながら名は二つまでもてさふらふなど語りつれて、小河つたひて行けば、としふる木立しげきか中に、二三まで鳥居のならび立てるに入りてまうづ。爰にも、大同の頃建しいはれをなん語りぬ。左に小坂上れば小さきほくらありけるに、八十一隣比咩をあかめまつると云ふ。この祠のうちに、くちたる木のみかたしろあり。御前の落葉埋むばかり雪のはつかにふれゝば、よんでたいまつる。

ふく風にまかせてぬさと手祭らん御前に雪のしら山の神。

藥師ぶちの堂あり。銀杏の落葉ふみしたき阪くたらん左の傍に、慶長としるしたてる五輪塔、木のあはひにありき。苔ふかう、たぞといふことを知らず。やをら日も暮なんとするに雨さへふりて宿しなければ、河にそひふかく入りて、田山といふ、屋は七八ばかりあるが、そ

ここに年ふりあばれて軒傾くを、けつくれたてんとて、かべなどは、やりおとしたる家にとひより、わびて宿つきたれば、新しき板敷のところ〳〵板もとり放ちたる、放出の高床に莚一ひらしきて、布かた衣やうのものを一重ばかりひきかつぎたれば、寒さに露ふしもつかぬに、夜半過ぬらん頃より山風さと聲すさまじく、あれたる板のひま、やぶれたるかべのあはひより、あと枕に雪を吹入れたるつらさに、枕もたげて、

ねられずよひまもるふゞきさえ通りかた敷衣身に薄くして。

黄金山の夢

しばしはふしつと思ふ夢に、ひる見し銀杏の木葉ほろ〳〵と風に敷くは、こがねのふるやうにこそおもほゆれ。こゝは何處にて名は何とかいふらんと、誰に問ふとはあらでいへば、いらへする人のありたるやうにて、みちのくのこがねの山やこれならんといふ何あり。あなおもしろのといふ聲の、きと耳に殘りたるやうにて、ふとおどろけば、とりのかけろとなきて、

腹あぶり

いとゞ寒さは身に絶やらず。高床の上より下りて爐のもとに行けば、帶とき放ち、火たき、腹うちあぶるおぢ、こは寒さに、いも寢ずや起出てつらんと柴さしそふるに、やゝ氷る心地も解て眠のきざし、見はてし夢も再び見つぐ斗長閑なる心のまに〳〵、しか、うつゝに思ふ

小田の黄金山考

は、此みちのおくの百のかん社の中に、其名もいや高く聞え奉る黄金山の神は此森ならんを、中昔のころ、みやを堂とつくりかえ觀音やすへたらんかし。耕田と云ふ文字は小田の文

吹雪激し

字を、近き世にや、かいあらためたらんかし。さりければ、爰に今ふりあふぎ見る高嶺は、小田てふ山にこそあらめ。その麓なれば、このみづがきをこがね神社とやいはん。もとも金花山といふ嶋山をさして、もはら、こがね山、みちのく山と人のいへど、 鳥か嘴東のくにの道奥の小田なる山にこがねありとは、と聞え、又、陸奥山とはよみつべけれど、小田なる嶋ども、みちのく嶋てふ事もいにしへに聞えず。さらば耕田の嶽は小田なる山にて、めぐる山本の里、野原も小田郡にやたぐふならん。近き山里に金濱といふ處、田山の名あるにても知るべし。此あたりは皆、ちかき世に津輕のくぬちとなれば、くにうども、つばらにえ知らざりける所々のあるてふことは、ことわりにこそあらめ。くだらの敬福始めて黄金をほり得て、すべらぎに奉り、御代榮えたるふるあとを、はかなき夢の教ながら、いまこゝにそれと思ひ渡りぬ。われ、日本にありとある式内の御かんがき、みや所を拜みめぐらんとて、十とせ斗、このみちのおくにのみ、浦山といはずさすらへありきて、まさに、はからず、ゆくりなう此神社にまうで奉りし事の嬉しう涙おちて、手洗ひ、遠かたながらぬさとりて、

かしこしな夢の教をみちのくの小田のこかねの山や是なる。

二十日。つとめて雪のいやふれど、かき分て、かのみやしろに至りてぬかつく。麓の雪けち、稚草、木のめやゝもえづる頃は、殘る太雪をふみ分ちよぢ登り、このち、かのちの神井に浴す

王餘魚澤

強清水
浪岡槍鍛工
の跡

下王餘魚澤

七平山

る人も多しといへば、われもその頭登りて見ん、又こがねの社にもまうでんと心に契りて、雪いたくふるに、馬にて泉澤などいふ八重山を行に、ふゞき山風はげしく身うがつやうに吹て、からくして行かひのすぢにわけ出て、馬も人も太雪にふり埋み行なやみ、片戀の岡も、高陣場とて土饅頭、いはゆる、さはのかて石やうのものほる處も、いざしら雪に吹しぶかれて、王餘魚澤といふ里にひるつかた出て、行こともえせで、なか宿したるまゝ泊りぬ。

廿一日。あしたに晴れたれど、夜邊より降りてあとしあらねば、人の通はんを待つに、晝つかた、馬より、かちより分くるあとをしるべに行程に、又かきくれぬ。かんやしろのあたりをさして強清水といふ名あり。昔小和淸水桂林と云ふ、かなだくみありて、竹の葉のやうなる鎗をむねとうちぬ、それなん行岳鎗とてところ〳〵の家に殘りぬ。その跡もおかしき所といへど、雪と風とに吹やられて、からくして、下かれる澤とて三四あるやに入て、いのちいきたる思せり。はにふのあるじ、いかゝ、此雪にひとりいきて命やしなん、火にあたり休らひ、晴間もあらば出ゆき、ふりもくれなば一夜はいねてなど、情ふかういひて細なふほどに、日は暮れたり。

廿二日。あさひらけの空おかしく、細く流れたる水の、あがたのめぐり來る水上は何處にや、左に遠う片戀の岡は、しげ山のあはひより見えたり。軒はの山をさして七平といふ。

なゝひらかやい、やひらおもてにたつ神か、つかるはんしよとまふる神、とは、村と云ふ村にて、たれも〳〵うたふ草刈ぶしに名だゝる所と、たうめの語るも風情あり。五本松、御鐵漿平を過て浪岡の八幡の御前にぬさとるほど、行かふ末もわいだめなう、ふゞきすさまじければ、たゞずみ〳〵て行に女鹿澤と云ふ村中になりて、いやしきふりにふる雪と風とのはげしう、しばしとて屋に入れば、あるしは福士某と云ふせちようの人なり。この雪にいかてか行侍らん、晴るゝを待ちてといふまゝに暮たり。

廿三日。ありつるなさけを、いつむくひせんとて、朝日のほの〳〵とてれば出たつ。白銀、松枝といふ二の村左の遠方に見えたり。

遠方に雪の松えだ今朝はれてちよふる色やあらはれぬらん。

貢といふ處にいたる。みちは、よねおふ馬のいくばくか、雪ふみわくるにぎはしさにへだてられて、

ゆたかなるとしのみつぎをみちの邊に行かふ駒よつもる白雪。

くにうどのならひ迚、にごるべきこゝろをすみ、すむべきこゝろをばにごりぬ。こゝは水木村にこそあなれ。もと、むかしは溝城彈正のぬしとかやのしりたる所にて、溝城とぞいひつる。其ぬしの古塚のしるしありける。田づらに近う、毛内茂肅の栖家ありつるをとぶらはんと

齋藤規房氏

門のとに音なへば、名は聞つる人よ、入ねなど、つぶねにいはせて、

すみあるゝ草の庵はつらくともしばし旅寢の枕さだめよ。

ひとひ、ふつかはこゝにありてなど、むつび聞えたる情に心おちゐて、

霜結ぶ草の枕のつらかりしうさもわすれてこよひねなまし。

と返しするまに、あるじのめなりける司家子の、かい聞えたる。

冬枯の草の庵にたびねしてこよひは夢のとだへをやせん。

とぞありける返し。

野路山路草の枕もかれ〴〵にとたえし夢路こよひ見つがん。

おなし屋のぬしなりける茂幹。

馴てすむ身さへわびしき山里にやどる旅寢やさぞうかるらん。

かくなんよみけるにこたへて、

わけ佗しうさも忘れて情あるやとに此夜は解て旅寢ん。

齋藤規房といふ人なんおなじやにありて、やまとふみの、かんよの巻にふかき心ざしありて、とし頃无邪志にまねびありとも。かねて聞つる人よ、めぐりあはまくほりしたることとゝて、

きのふまで待にし人よ久方の天の浮橋かけて嬉しき。

といふ歌をなんかいつけてけるに、

相おもふ心や通ふ久方のあまのうき橋けふ渡り來ぬ。

と云ふ返しをせり。あるじのはらからなりける惟一の云、歌も、えせぬなどいひて、

邂逅にやとせせし庵は冬枯て人に見すへき言の葉もなし。

この返しとはあらざめれど、其人に贈る。

めづらしな霜の下草花ならん枯なで宿に匂ふことの葉。

おなしぬし再ひ、

秀雄のぬし、やまとふみにかいのせ聞えたる、いそのかみふるき所々はさら也、いまだ世に人しらぬくまも、おかしきふしと聞ては殘りなう見めくりけるに、こたびゆくりなうまみえかたらひて、

など書付て、おくに、

とふ鳥のあとをしるべに玉鉾のみちの奥まで尋來つらん。

かくぞありける返し。

こふ鳥のあとをしるべにふみまよひ來てみちのくに年は經にけり。

廿四日。この夜まとゐに　閨時雨。

小夜すから時雨音してそよさらに軒はゝ竹の閨のおきふし。

鷹狩。

たばなせば行衞も空にあら鷹の鳩さしまかふ峯の高けん。

暮山猿。

くれふかき山路の友やしたふらんおもひましらのこゑのさびしさ。

廿五日。更て寒さいや増りたる。埋火の炭さしそへて、例の友かきのまとゐに　遠炭竈。

すみがまのけぶりやをちの山いくへ濤のすかたに立もまかはで。

霰似玉。

吹かへす雲の衣の玉あられたまもちるかに風にみたれて。

名所野。

治まれる御代そかしこき武藏野や榮行末の果も知られす。

廿六日。雪のいたくふるに、いさ雪の歌はよみてんとて人々と共に　初雪。

花とまた砌の木々はふりもせてつもるもうすき今朝の初雪。

淺雪。

ふみわけて通ひやすけん雪いまだあさぢの枯葉ふりもうつまぬ。

松雪。

咲ころは花にましりし俤をふたゝひみねの松のしら雪。

雪似花。

花にまよふ面影そひて吹風のさそはぬ雲や嶺のしら雪。

田家雪。

ひきすてし鳴子の綱のなかき夜をふるや門田の今朝のしらゆき。

雪中鳥。

ちり埋む木の實を雪にかき分てあさる小鳥のこゑ寒げ也。

寄雪旅。

さしてまた何處かゆきのふるさとをへたつ月日の旅につもらん。

廿七日。夕くれてのまとゐに、　袖凍重夜。

旅衣しくれしまゝにかたしきて袖の氷ぞ夜を重ねぬる。

寒樹交松。

水木を立たんとて

ましりたつ木々はさそひて風のふき殘したる松の寒けし。

祈身戀。

なからへて命もあらは逢事もありやと神に身そ祈りける。

廿八日。この題さくりて、　寢覺時雨。

たひ衣沾ると見えしは夢路にてさむる枕に時雨をぞ聞。

洛のはつ雪。

めつらしな柳櫻の俤にふるをみやこの木々のはつ雪。

寄杣木戀。

賴みても寄らぬそま木にうきおもひ正木の綱手ひきもたゆまず。

廿九日。こゝを出たち、又日あらでこんといへば、しばしの別にとて、　茂肅

雪もけふ路わかぬまでつもれかし旅行人やたちかへりこん。

かくなんありける歌の返し。

しるべしてこの宿にとくかへりこん雪も日數も降りつまぬまに。

たとう紙にしるして、　司家女

ふる雪に道ふみ分て行人の拂ふたもとやいかにうからん。

となんありつるかへし。

たひ衣たち行袖にふる雪のふかき情けをえこそわすれね。　茂幹

おなしこゝろに、ふみてをとりて

しはしとて門の柳を折りむすふたもとに雪のかゝる別路。

とそありける歌の返し。

別れとて結ふ柳のいとゝ猶とけなておもき袖のしらゆき。　惟一

おなしう

かならすと又逢事は契りてもさすかにおしき今日の別路。

かくなんよみ聞えたる返し。

又いつと契りおきても別路はさすかに宿のたちうかりけり。　茂肅

ふたゝひとて

しら雪はよし積とも旅衣たちかへるべき道なうつみそ。

この歌の返し。

ふみ分てなにかいとはん旅衣たち歸るべき道の雪ふかくとも。　惟一

行末をおもひやるなとありて、

誰となくかはるあるしの宿とひて人はいつこに幾夜たひねん。

と、かいて贈りけるに、

いく夜しも替るあるしの宿とひて旅寢んうさを思ひやれ人。

かく返しをせり。

比天女

冬の夜のつもる太雪をかき分て旅行人や袖のさゆらん。

此返しをす。

雪さゆる野原に袖をかたしきて夢になれにし宿やしのばん。

規房

しはしとて別行身も僞のある世ときけば賴むものかは。

かへし。

又こんと契りしことのたかはずよしいつはりのある世なりとも。

ふたゝひ、のりふさのいへらく、

袖ひきておしむとすれと旅衣雪に立野のまきやいくらん。

とありける返し。

十一月朔日水木出發

家士共處々に民と雜居す

增館の伏見權現由來

人に今日雪のたもとのふり分れひとり立野の牧やたどらん。

はや、けふは日はしたになりぬ、つとめてものせよなどせちにいへれば、霜ふり月も名のみに、雪のいやふり月といやいはん朔の日、美都枳の館を出んとて、ゆきくつ、さゝみの、笠着つる折しとも、外までおくり出し　規房

とゝむへきかことなければ今はとて雪ふみ分て歸る旅人。

かくなん口すさひ聞えけるにこたへて、

なさけある人にひかれていとゞ又雪の中路ふみ別うき。

むかしまとひて相かたらひつる、多くの友どちのありつるを、そこをこゝと尋ねとへば、君につかへまつれる人々は、おぼろけの願ひならずうたへ申しゝかば、君めぐしと仰にやありつらんかし、そのしるよしあるところ〴〵、あるは、たよりよき處に蝍の子のちりたらんやうに、こゝの野良、かしこの山里におのがじゝ家作ぬれば、むかし、かたらひむつびたる間山祐眞も、竹簡鼻てふ村なる民にまじり住つと聞て、とぶらはゞやと、來りつる道にいさゝか歸りて、下十川といふ村より福嶋、馬場尻、小屋敷、飛内を出て二双子といふ村にいりて（天註登毘奈比といふ名蝦夷の辭にやあらん、松前の、ひんかしのいそやかたにもこの名聞えたり。耳會子、馬波志利もおなしきにや。）、增館といふ處に、としへたる木どもの生ひたてる、雪の、小高き處をゆんでに分る。これなんいつの頃ならん、射目人の、伏見の里よ

竹箇鼻の間山氏

高館の一夜

そりをうつ

よこざ

り飛來給ふたるとやらんごんげんを此下に埋て、しゝもりてふ名の聞えたり。その頃、この森の下道を行かふ人の馬やみふしたる、はた、をのれ馬より落つるのたゝりをなんしたまへば、祈し、こと方にいはひまつりて伏見權現とあがめて、雪にいや高き梢のしげう生ひたち、鷄栖は、なからばかり殘りたるが見えたり。こは、五百年の昔とやらんとのみはいらへ捨てゝ、つばらには知る人もなけん。陸奧のならはし迚、いづこの浦、山里にも、熊野のおほん神を祭るかんわざのみさきに、獅子頭をさゝげてものすれば、しゝがしらをばもはら權現とぞいひける。其しゝ頭埋み塚したる處を、權現塚、あるは獅子森といへり。かくて竹ケ鼻になれば、雪の中に柴垣ゆひ廻らしたるやに入れば、あるじのめなる律子、あな久しとあきれて、ともにことなきを喜び、祐眞は、むさしにさもらふよし語りて、一夜はこゝに迚母もたち出でゝとゞめたれど、再びとて夕暮の道雪ふみまよひ、近となりの里高館といふ所まで歸り來て、ちいさやかの家にとひ柴火にあたり、寒さわするゝ情けだにあるに、あるじめける男、かく雪にふりくれて、命やしなん、やどし參らせんは安し。さらばとて、何をかきせて、ふさせ侍らん。たうびけるものはもて侍れども、寒さには轉やうち侍らん（天註――寒さに、いねやらぬ事をソリウツとはいひつる。）、そのいとひもあらずばこそふしねさて、つさ、よこざを立しぞき、さ、こゝに居てあたれなどなさけ〳〵しう、こりためたる、なら柴の火をいと高うたき、おのれらも、はぎ押やりてあた

猫垣　菰屏風　二双子村の館山氏　生土祭

りぬ。

世のうさに身はならしばのならしてもならひもはてぬ心なりけり。

冴て行小夜中に菅の莚のあらけなるをしきて、猫垣てふものゝいとおもきを持來て、身のなからばかりにふとおきて、こも屛風となんいふものを、枕がみに引まはしふさせて、男女いふ、こや、いづこの人ならん。此奥のおほ雪にまよひありにありて、かゝる、かたゐの小屋のやうなる家にふりこめられてねきなどきゝて、嘸うからんと涙やおとしけん、あくびうちして、かゝる心ざしのまめなるはと父母のおもひに涙こぼれて、

ふる里にありつ思をすかむしろしき偲ひ寢の夢か現か。

二日。黒石の里にさして行かんと、直き道ながら、いまだ分通ひし人のあさだになく雪ふりければ、きのふたどりし里の方にむきて歸りて、この二双子村に入來て、童の手習にかいちらしたる紙どももて、明りさうじ、窓の戸などをはりふたぎたる屋の、雪に埋れたるがあり。さるべき人も住ならん、休らひ行ばやと軒近うさし入れど、水無月のてれる日のやうに雪見たる目のいと暗く、ためらへば内より、見し人ならん、いざ寄ねといふは、昨日道にてしばし語らひつれたる、館山養泊といふくすしなりけり。けふは雪ふりはへて雪風はげし、又も行迷ひなん。此日はさちに、月毎のためしに生土祭日なれば、人もさはに入らん、酒一つのみ

二日に死人なし

黑石まで

て語らひ、くれなば、いぶせくとも、このはにふに泊りて、こよひもまた雪車を二三張もうちてなご戲れて、鮭のおほにへ鱠をつくり、氷頭鱠ならん爐のもとにありてとゝのふるに、午のつゝみうつ頃、こゝらの人、雪くつおもげにふみきてうちつどひ、やをら、ゑひてかたらふを聞けば、いにしへより此村にすみと住む人、初の二日の日身まかれることゆめなけん。さりければ此日のさうじ、ものいみもなければ、村にありとある人みな出て、神にみき奉り、おのれらもかく醉ひぬ。朔の日、きのを今はたえうせなんといふおもきやまうぞありて、くすしも、此夜明るを待たで身まからんといふも、鷄のかけろと一聲いへば、はや、とりの鳴たれば日は二日にこそなりぬべけれ。さらば、こよひは身まからじと、心おちゐけるとなん。又世になき所のためしなりけり。いはひへするゑたる机の上に夕ちかく奉る。

かしこしとなみゐてけふも吳竹のふしみの神を祭る里の子。

五日。この頃の雪いやふりて路しあらねば、二三日館山か宿にありて、けふなんひるつ方より黑石に行かばやと、左に田中村をいてゝ、遠く、さばかりひろき雪の上に、馬人引もたえず行かふ一すぢあれば、わけまよふのわづらひもあらでゆく〳〵、夕飯やたくらん煙立むすぶを見る〳〵、そのところ野際といふめるむらに、きつきて、

冬こもる宿ののきはは埋れてけふりは雪のしたにこそたて。

來迎寺の松の由來

山形の法眼寺の鐘

みちはつか斗くれば、茱萸木(ぐみのき)といふやかたの軒つゝきて黑石の里なり。むかし見もらしたるところ〳〵あれば、其見殘しゝ處を、こたび雪に見んも猶こそ増らめと、ひとりごちて、高田惠民といふくすしに見えてむつびかたらひ、此もとにふしぬ。

七日。この里なる紫雲山來迎寺の庭の面に、花山院忠長卿殖させ給ふる松あり。きのふけふの太雪に猶見ごころやあらんとて到れば、注連引き閉たる門わきより入れば、枝葉よもやもにひろごり雪にふしたれたり。しかはあれど此松、ほふりするわざごとにさはり、わづらはしと、近き年、その枝うてよ、かしこの朶うちてとて、ある上人うたせければ、すかたもむかしにかはりぬ。めでたき松を、ましておそれもしらさるむげの僧とて、公のみけしきよからず、自らも方のむろにこめられ、一とせ斗門もとぢられしとなん。その松の枝こりたる頃は、あたらしき松を、いかにおのれが法師なればとて、わか弟子顔に松までも坊主にこそなしたれ。あの松きり坊主とて、童までもみなにくみ、いまも松見る毎にいひ出で、そしりあへり。もとも、昔見しとはことかはるやうなれど、又と世にたぐふへき木のあらんともおほえず。一木に雪のかゝりたる風情ことに、いにしへを思ふ。

君も嘸植てみきはにかく斗雪にふりにし世やしのびけん。

八日。奴流由の湯げたも見まく、中野山の雪やおもしろからん、いざ見にとて惠民のやを出

盧山禪師の功績

づ。里はつる山形といふ所に、寶嚴山法眼寺といへる黄檗のながれあり。享保の昔、此寺の洪鐘を盧山といふ貴きせし、むさしにて鑄させ、そのおほがねを浪速の津につみ送り、そこより此みちのくにに又船してはこぶに、飽田の海とならんに大波にあひて、船うち破れ空しくなりぬ。せし、あか年頃の願もむなしうなりぬとて、年あらで身まかり給ふ。此せし五十年のなきたままつらんつるとし、常陸の國鹿嶋の郡、上幡木村の下濱といふ處のあびきするに、莫名藻、にぎめ、はた何くれの小貝などのひし〳〵と附たる、あやしのものかゝりたり。こはいかなる物かと、生たる海藻、貝どもみな鉞してうちやれば、鐘なりけりとあきれて、こやいづこの鐘を、いつ海に落してとて集りてさぐり見れば、みちのく津輕黒石の寺何がしとかい付たればとて、公に申して船主重兵衛と云ふが、此くにの青杜のみなと入してけるは安永の末となん。盧山和尚の大とこ此時にこそ世にあらはれたりけれとて、聞ときく人、國うどはさらなり、遠き所の旅人、すぎやう者、此寺の鐘見にとて見つゝ、あやしきまでおとろきたふとみたりけるとか。其頃まで鳴らしたる洪鐘のありつるをば、おなし流のぬる湯の寺にかけて、海よりあがりしは、いかめしき樓を建て今もつりたるを見てんと、雪ふみ分てやゝ到りのぼり得て、其おほかねを見れば、

妙哉勝緣　華鯨端生　不爽舊約　緇石情盟　帆春針遠　墮碧輕臻　匪祝聖道　共護武寧　萬家村里　方界有性　淨根省闇　悉證圓通　禪

慮無罷　轉如是經　劫壞不斷　日久月長　當山二代臨濟正傳第三十六世嗣法沙門淨泰廬山武陽神田御鑄物師木村將監藤原安成　武江鑄調世武内彦重郎　當寺開山臨濟正傳三十五世上南下宗元頓大和尙　享保八歳次癸卯天四月佛生日　とぞ、そのめぐりにかいめくらしたる。海にはめたるものゝ浪と潮とに引かれ遠く行きて、こゝ浦にありたるは、さのみやはなきためしにもあらざりけれど、其願ひしせしの、いそとせのとぶらひせんとほりせし年にあひたるこそ、世に又たぐひのあらざめれ。このおほかねの朝な夕くれに鳴らす聲を、八重むす莓の下に聞て、嘸な、うれしともうれしとおもひ給へらんかし。

法の師の其名も高く此の寺の鐘と共にや世にひゝくらん。

牡丹平と花卷村

左に福民と云ふやかたを見て牡丹平といふなる村あり、昔こゝにその花や咲たりけん。雪はこぼすがごとくふりにふれるをちかたのくらく、ともゝにふりたわむ木々のおはひより、煙はつかに見へたる所を花卷てふ村といふを、たゞずみ見やるに、晴たる空は春とやいはん。

けふり立遠の一村まきの名の花とし霞む木々のしら雪。

昔は大杭村小杭村

來至ぬ。昔牡丹平を大杭村といひ、此花卷を小杭村といひて、その頃に孫次郎と云ものあるを、こは子をもくらひ孫をもくらひしや、子喰村の孫食といふなるは鬼ならんなど人にいひ

立てられて、世の人きゝのよからじとて、村の名を花卷といひかふといへど、その牧のめぐりにさしたる古杭の、そこにくち殘りし名にや。しかはあれど、この地馬かひし廣野とも見えざれば、ことかたより此名のみ、こゝに、かくよびたるにや。又、南部のうまやなどにもしか名の聞えたり。淺瀨石川の雪の中に流れたるを見やり小石坂(いしな)にのぼれば、豐岡、中村、築館、新路、ぬる湯のやかたになりぬ。屋は、みそばかりあるを河へたに立ならべ、湯ふねの底には石をひし〳〵と敷並べ、湯小屋あまた軒を重ねて冬ごもりせり。遠き昔のことにや、はぎを矢にはぢかれたる鶴の、澤水にのみ有て日を經て、いえたるにやあらん空に羽うち高う飛去りぬ。人々これを見きゝ出湯なりとは知りて、はじめは杣山賤らのみ浴して、身のやまひ愈ゆること速なりとて、やがて鶴はだちの湯とはいひ、又の名を鶴の湯とも云へり。羽立とは物のはじめをなんいひける。はた二もゝとせのむかしならん、花山院忠長の君浴し給ひし頃、世の人なべてぬる湯とはいひけり。湯のなからはひへ、なからはあたゝかなれば、いはゆる半冷半溫とやいはん。此夜は、古澤といふがやかたに宿もとめたりけるに、父母のます國にありて、雪のいとおもしろくふれるに、おもふとち、うちともかたらひたると見え明けたり。

八日(マヽ)。つとめて、雪は猶うつゝにぞふりける。

ぬる湯溫泉

古澤に泊る

此ねぬるゆめの枕に雪をよみふる里人とかたらひにけり。

九日。雪のいやふり風の聲はげしう吹けば、えいでたゝず、あるじとかたらひてけふも暮れんとせりければ、

いか斗うつみやはてんきのふけふふりくらしぬるゆきの下庵。

雪景色

十日。板留の湯も見ばや、中野の淺尾山も見ばやと屋をたちつる。あさひらけのけしき、いはんかたなうおもしろし。此やかたのはしなる、黄檗の僧侶のすめるかども眞白に、いはほの杉もとをゝに、一もと二もと松のたかうたてるに河岸の篠もなべてふりかくろひ、なからは氷りて谷水の行なやむすかたは、松欹半巖雪、竹覆一溪水といふ句詩のこゝろばへに露たがはざりければ、

そひへ立いはねの松よ竹ふかき谷の氷をうづむしら雪。

板留温泉

雪の山路をわけてその處にいきたれど、不動尊の堂のほとりへ分入らんも、雪ふかうみちもあらねば、すべなう以多登米につきぬ。湯は川べたに涌出でゝけるに、くだりて浴ぬ。かくて日もかたぶく頃歸らんとて、このかへさ蛾虫坂にたちて左に黑森、右にすもとり山など見て、

日數ふる雪は埋めていと深し山は淺尾の名にしおへども。

黑石

くれて黑石にかへりぬ。

十四日。黑石をたちて淺石川を渡り、村二つくれば尾上といふ里になりて、雪のいたくふり出で、休らふやの軒を家鷄二つあさるを、

なれもさぞ身やさえぬらんゆふつけの鳥の尾上をうつむ白雪。

猿賀の社

猿賀の社にまうでゝ、深砂大權現と忠長のかい給ふ額のこかね色の文字、あらたに、すりやくはへたりけん、かゞよふ光鳥居の雪に見えたり。

むかし君つけし千鳥の跡しるくそれとみゆきのふりも埋まで。

千德掃部の妻女物語

このあたりに近う田舍館と云ふ村あり、館のぬし千德掃部と聞えしは、今の南部の家に仕へたりしが、天正のたゝかひにうちほろびぬ。そのめは和德讃岐守の女なるが、わがせこのわかれ、しかすがに露わすれえず、やをら三とせもくれ行頃、津輕の君右京兆爲信、あが爲に打まけし、いくそばくのなきたまとぶらひまつりてんと、あまたの僧におほせのたまひて、万部のほくゐきやうをよませ給ふに、みどきやうもはじまりしかば千德のめ、みしゆ經を聞て、ふところを開きおもふ事をかいて奧に、　なきたまよあはれと思へそひねせし三年の夢のさめもやられぬ。　その月の其日にやかてともなひてゆきし心を知るや知らずや。　友なひてわれも行かましまてしばししでの山路の道しるべせよ。と、みくさの歌を、ひろ野に

藩校稽古館

かざりたる、あかたなの上にさゝげて、よゝとなく事久しと見るに、短きつるぎを胸にさして、ふしたるにこそありけれ。こは、世にたぐふかたなき、女のかんがみとも見よとて、よの頃の物語にして、いまし世までゝかたり傳ふるとか。雪いやふるにわけ難く、目沼とそいふなるやかたに行なやみて、

ふる雪にみちしうづまばこゝにねん冬のひぬまの暮やすき空。

くら／＼に和徳の市に入ぬ。この飯成のほくらのかたはらに、昔のあるじたりし讃岐守のふる塚も、雪に埋れて見やられず。たどる／＼、弘前の間丸前田といふやにやどつきたり。

十五日。とにいつれは、大なる堂を、そぎたもてふき、かやふきたるもましりて、いと清げなるあり。こは、くすしのふみをもはらに、やまとふみ、もんじやう、じちやうのはかせ、はた、その道々にをさたるをえらび集めてすませ、又、ふんわらはどもの居るやまでいま建すゑたる稽古館なり。頖宮、あるは左の席、右の席、あるは、みき、ひだんのやとり、ついひぢまでつくり出んとて、それ／＼のまうけをぞせりける。是なん、おほつかさ信明の君とかや、いとなみつくらんとての、おほんこゝろざしふかくおはしましゝかど、世の中のなりはひよからず、やはしかりければ、時あらばとおぼしさだめ給ふほどに、さちなう、寛政三年夏かくれ給ひしかば、今の世もたる君、むねとおもふ人々におほせて、もはらつくらせ給ふとて、たくみ

諏訪行宅を弔ふ

らが、のほきり、まかなの音のかまびすしう、墨縄のいとまなみ、中の貝ふく頃いとまえて、さゝやかの門よりこゝら出てむれかへる。諏訪なにがしのやども遠き村にうつりきときけば、人にとふに、行宅の翁の墳なん法輪山眞敎寺といふ寺にありといへる。そのつかはらを尋ねて、雪の中なる、文字もふりかくろへるに手向して、

ふりうつむ雪の下なる友垣にいまはへたつる言の葉ぞうき。

毛内氏を訪ふ

やがて毛内茂幹のさもらひところにとふらへば、こは入きけるよ、けふなん、あが父茂肅もきたらんかしなどありけるほどあらで、あのごとく、今こそと來いたり、音信れていへれ。

ふる雪を花と見なしておもふどち話るにあかぬ埋火の下。

と聞えたるとき返し。

白雪を花とし匂ふ言の葉にいとゝ春ある埋火のもと。

くれゆくまとゐに　千鳥といふことを、

なれもさそおもひこそやれ友衞波のよる／＼かたる樂しさ。

冬稀逢戀。

春ならぬこゝろもとけてあふくまの河瀨の浪や又氷るらん。

冬述懷。

言の葉の正しき道もしら雪のゐたにふりつむ身をいかにせん。

冬懷舊。

末ちとせ榮ふゝしるし松が枝の雪とふりにし世々をかぞへて。

十六日。　落葉混雨。

ちらぬまは梢をそむるむら時雨おち葉ふりそふあめの色こき。

月前初雪。

立出てゝ跡しつけねば月影とまよひやはせん庭のはつ雪。

寄忘草戀。

わすれ草忘れぬ露の情だにあらはとくれぬ身を思ひやれ。

ふたゝびとて人々まとゐしてければ　遣水氷。

おもひやれ世のことゝ草のしけゝればいとゝ逢見ぬなかの恨みを。(マヽ)

風前雪。

花と見て袖は拂はじ梢より風に雪ちるしかつ山越。

寄繪戀。

うき人の心を筆にうつし繪やいける姿もくちなしにして。

十七日。齋藤規勇、けふもとはんとおもひしかど、あしわけ舟のさはり多かる身をおもひやりてなど書て、

おもひやれ世のことぐさのしげければいとゝ相見ぬなかの恨を。

となん、そのおくにかきつけたりしかへし。

相見つるおもひもうれし言葉も世のこと艸のしげき中より。

やかて其宿にいきしかば、ねもころにありて

とひ來ぬる袖ひきとめて言の葉の花の色香を猶したはまし。　規勇

てふ事のありつるに、とりあへず、

冬こもる宿とも見えじとひよれば花とし匂ふ人の言の葉。

おなしむしろに龍澤山嶺松院の玄定法印ありて、

おもほえずしたひし君に逢ふことのうれしさあまる墨染の袖。

とよんでみせけるに返し。

うれしさよかけし衣のたまさかに逢見し君がみかく言のは。

のりとし、年頃よみたる歌どものありけるに、

白郎のかる藻くすなからもわかの浦にみかきし玉の光そへてよ。

齋藤規勇氏

嶺松院玄定

とて、よみ加へて出しければ、

玉ひろふわかの浦はによるべさへ及びもなみのもくすかり船。

かく返しかいつくるまに、あるし、ちいさき鉢の木の松をもち出て、これなんかんな月の頃、

いはきの麓に引て植ゑたり。ねがはくは、此いつ葉にもよそへてといへれば、

いくちよとさして岩木の山松の植て榮えん宿の行末。

こは、わきてとて、ぬかたれて返しける。　　　　　　　　　　のりとし

植しよりかはらぬ色をともなひてちよもあふがん松のことのは。

此夜、當座の歌ものしてとて　遠村雪。

眞柴たくけふりの末もしら雪のふり埋るゝ遠のやま里。

野雪といふことを、

わけわひし小鹿のあとを宮城野の木の下ふかき雪ぞしらるゝ。

更行頃、かゝるあやしのはにふに、いかでかやどし侍らんなとありて、さてよめる。

草ふかき雪の下いほとはれても人は枕になに結ふらん。

此うたの返しをす。

色かへぬ言の葉草を枕にてこよひは寢なん雪の下庵。

万世菊子のなかに、つまみてふ名、おこしこめのありけるをもて、これに探り得たる、千鳥といふ題のこゝろをなど人の云ふに、

をのかつま水尾こして行か浪遠く衛啼なり淀の川くま。

十八日。毛内のさもらひにありて　霞殘雪。

たひ衣たかしく袖も冴通り夢はあられのさめて見つがず。

年內早梅。

めつらしなくれもはてなで年と春とこもれる雪に匂ふ梅がえ。

寄林鳥戀。

人はなどつれなく嶺の林だに夕わすれず鳥はとひくを。

夕樵夫。

ひるはこりみねの正木をねりそもて夕は里にかへる柴人。

十九日。　寒草霜。

秋は見し尾花か袖のをもかけになひくも寒き霜の下草。

古寺鐘を、

入相の聲吹きまよひ夕かせにかねもとよらの寺の西なる。

楠美則德氏

科野の日記を貸す

二十日。雪のいたくふれゝば、

つかろぢのおく山越てをやみなく雪のふるさと思ひこそやれ。

廿一日。楠美則德のさもらひにあるじして、人々、ようしやうふいすましてけるに、あるじ、朗詠のほうしおかしうあそふに、寒き夜の更るもしらで、すびつのもとにて、

梅柳うたふも春よ笛竹のよるぞ樂しき埋火の下。

あるしの句　塵のなき斗馳走や雪の庭　禮鄕。此和句いかゝあらんか。　春待梅の軒にほゝゑむ　宜應（毛内茂肅）。　野鳥のあさる物なく里へ出て。

廿二日。雪もふりけつべう雨そぼふるに、津田（仙庵）なにがしと云ふくすしのやどに行かんと、人々にいざなはれて、れいのこさゝて　遠鄕時雨といふを、

をちかたに夕日かげろふ松一木見えて時雨るゝ山本の里。

廿三日。風いや吹きに吹いて外にいつへうもおもほえぬに、水木の館よりとて文もて來けるを見れば、わかかいなせる科野の日記とも、ひごろかりみて、いまは、みはてたる迚けふなんかへしけるにそへて、規房の歌あり。

しなの路をふみ見るたびのおもひしてかへすくもおらぬ一まき。

この返しをせり。

わけ迷ふすぢをしるへとみすゞかゝる科野のふみの跡もなつかし。　司家子

またもふみありけるおくに

浦山し君しわけなば雪の山木々に詞の花や咲らん。

とぞ聞えたるかへし。　司家子

ふたゝびよめる

雪の山わけきしかひよめづらしな人の言葉の花を社見れ。

うしとても又とひてまし山ざとにふりうつもるゝ雪の下庵。

かくぞなんありける返し。

歸るさは必らず雪の山里にとひてつもりしことかたらなん。

廿四日。さりがたきことを人のいひおこせれば、此ことにたづさはりて蒼杜に行とて、けふなん廣埼を出るに　茂幹。

歸り來てつとにも見せよ陸奥のそとか濱邊の玉し拾はゞ。

とぞありける返し。

外かはま玉しありとも拾ひえずつとさへなみのたち歸りこん。

おなしこゝろを、　しげとしのいへらく、

行人の旅の衣手こゝろあらばとく吹かへせそとか濱風。

とぞよめる返し。

いく日數なみかけ衣とくきなん外が濱風袖ふかすとも。

われも、こゝなん旅なればとて、

又もとへともに結ばん草枕おなしかりねのよしつらくとも。　　惟一

このうたの返し。

又もとひてともに結ばんくさ枕かりにもふかき情見ゆれば。

けふなんとて、いきて規勇のやをとへば、よんべ來つといひて規房のあるを、ともなひいなんとてかたらひつるに、水木までの道いと近し、今しはしとて、あるじの　のりさし。

ほどもなく又たちかへれそとかはま波間の玉藻かりにゆくとも。

かくなんよめるを、たちながら見て返し。

ほともなみ立かへりこん外がはまいそわの玉藻かりも及ばで。

友なひつれて出きて堅田、撫牛子、大久保をへて、津輕野の村に雪ふりいでたり。

消ぬかうへに又いくはくかきのふけふふりもつかるの野邊の白雪。

百田と云ふやかたのありければ、

冴わたる里のもゝ田のあつ氷いかにゐぬらんつもるしら雪。

むかし舟にわたいたる平賀川も、かち人のために、冬はかく橋かけわたせりとか。藤下の郷になりて（天註——古名不知左鷄、いま藤崎とぞいふなる。）唐縑姫のつかはらなんとふらひてんも、雪いとふかく、

　　藤崎

いにしへをおもふものからいとゝけふ雪のふるつか袖冴るなり。

　　矢澤の八幡社

堰神のみつ籬近う、堰八豐後か遠つおやのいさをしをおもふに、うべ神とは齋ひまつるにこそあらめと、なにくれのふること語らひつれて、葛野てふやかたも、ひろのゝありけるも、雪のをやみなうふる袖寒く、矢澤と云ふやかたの、八幡の神は路の傍にあり。此ひろ前の松の枝たれふしぬれば、葉末つちにさけしを、こゝかしこより鷄栖を、たかきみじかきをたてゝ、それに、雪ふりつもりたる枝をかけたる風情ことなり。此神籬のうちなる木々のみ、かくふしたるは、風のはやうふくところにやあらんかしとおもふに、かんがきのちかとなりの、やのしりなる木々どものあるは、ゆめ、ふしたる事もなけむ。こは、いはれあることか。

　　嫁を祝ふ

もの〻ふをまもるしるしか梓弓やさはに松のなひく姿は。

此村ののりとて、嫁の、馬にてもこしにても、こゝに入くをまちて、村中のみちに、むしろしきて嫁をひきおろしすへて、あるかぎりみな立出て、かほよければよしとてほめ、よからぬは、其つらしてなど、おとしのゝしる。かくてのち村のをさ、何の木にても常盤なる一枝を

折來て、行末かはらず、いもとせの中ちらで、さかゆけとて、そのめにとらせけることのあり
たりしが、今はたえて、さることもあらざりけるとかたるは、榊てふ村名も、さることゝろやあ
らんか。神籬の見えたるは、

折とらで梢ながらの手向せん神の榊の雪のしらゆふ。

かくて水木になりぬ。けふ、ひねもす、いさなひつれたるのりふさのうたは、聞もらしたれ
ばのせず。毛内の屋に入れば、はや日はくれたり。れいの事とて　松雪を、

埋るゝほとは其木もしら雪のちりしく枝は松風ぞ吹く。

網代雪といふことを、

莵道川や瀬々の波間はふり消えてあらはれ渡る雪のあじろ木。

廿五日。つとめて水木をたゝはやといふに、かならずきませ、待侍るなとありて、のりふさ。

とくかへれ歸ると契る言の葉のかはらぬ色を賴みてぞまつ。

かくぞよみてける返し。

とくもこんと契りて松の言の葉のかはらぬ色をしるべとはして。

とし頃おもひむすぼふれたるすぢ〳〵もとけて、何くれと、人のいざなひ、さいたちけるこ
とゞものかしこしと、かい聞えて、

鹽土のおちの惠みのつゆなみだかゝる情けのともに嬉しき。

餘波つきじ、ふたゝびと云ふとき

司家子

雪にかく埋もるゝ門も春は來て花の香殘せ旅の衣手。

かくぞなん有ける返し。

たち別れ雪ふるやとゝ春問はゞ花の言の葉つもるをや見ん。

女鹿澤

けふは日はしたになれば、近きあたりまでとていでたちて增館、河倉、十川などすぐる頃、雨のふりくやとおもふほどもあらで女鹿澤に來て、相しれるやに泊る。夜半に雨ふる。

雪のうちにふり來る雨が澤の邊に結ぶ氷のとける斗に。

草雪車にて

廿六日。山中のみち、ひとりやいかゞと人のいへば、草雪車（そり）とて、箱雪車てふものに形は似て、わらをめくりにつみ、かくみとして、これにのり、四人り、はやをとり、しりより二人がおし、浪岡のかんやしろもよそに杉澤、高屋敷、德才子、大釋迦、杉野澤といふところをゆく。

大釋迦

ひくそりのいとはやすぎの澤の雪岡邊の雪もあとにこそ見れ。

名だゝる津輕坂にかゝりて、毛なし平、坊主ころばしなど、はげしきつゞらも引くだすに、目をとぢて夢のやうに下り、戶門、白幡野、新城につけり。

ますらをか雪の山坂引くたすそりのはやをのはやも來にけり。

大濱の神主澤田氏

とておりぬ。こゝよりは馬にて岡町をへて、大濱のはまやかたにつきて、上の林にすむかみぬし澤田兼悉とふらひて、

廿七日。雪のいやふれば、けふばかりはとてさゝめぬれば出たゝず。

廿八日。いでたつになりて、けふも雪なればこゝにゐて、夜半ばかり、

旅衣かさねてもさへ寒き夜につま木折つく庵はうしとも。

とぞ、あるじのよめる返し。

たび衣かさねて問はんわすれずよつま木折たく人の情は。

青森著

廿九日。路いと近う、青森にひるつきたり。

寛政八年正月元日麻蒸温泉にて

道奥のくに津刈の郡なる安袁文理のみなとべに在りて、太雪いやふる年の、寒さをいとふの心ふかくほりして、露ばかりなる夜須美をかせに、麻蒸てふ、いで湯の館に冬ごもりして、としはきのふとくれ、けふは、あけなば寛政八年とやいはん。近き香燃に、としみしをこなふ角笞の貝ふく聲に夢おどろき、しめひき、小松たて、弓弦葉さして、あらたに湧つる春の湯げたにゆあびして、磯曲に行めぐり潮を結び、うちよるこかも、名のりそを、波のまに〳〵うち手向、たかすなごの上にぬかつきて、あまつ神、くにつかんだちを、おそりみかしこみゐやし奉れば、浪の上に茜さし出るひのえ大空は、霞たつてふとしのはじめ、梓弓春の武都幾のはじめ也。こや、八隅しゝわがおほ君の、あまねうおさめおはします、ふての下、そとのはまかせ長閑に吹そめて、沖ゆく舟のほの〳〵と、ひんかしの色にあらはれたるあをうなばらは、わたのみそこまて、朱玉のとしのけちめやあらんかし。

春はけさたつの都にひのもとの光や到る波のしつけさ。

若水汲む

若水くむとて、谷川の流れにさかのぼるあら雄あり。みつわさすとぢの、いでゆ、くみもてゆくは、身のたゆげなれば、近きにや結ぶらん、これをわか水とやなさん、若湯とやいはん。

こまかへるかけやうつさん老人もけふにわかゆの水を結びて。

出門天地春と云ふことを、

あさと出に向ふ初日の影匂ふ山てふ山や春のきぬらん。

わらはべのあまた濱邊にむれて、ことしはよいとしの、といふ歌を、もはらうたふ。澳の鷗、

こと鳥もこゑうちあはしたり。

長閑けしな外かはま風鳥すらも世は安潟とうたふ聲して。

湯ぶねのかたはらのやかのくまに、ちいさきいはひべにみわすへて、ひかしは葉にものたい

まつり、ふるさとのかたに向ひて、かこじものひとりありて、ひとつきのみきを、すゝめまゐ

らするとき、

父母の齡はちとせ万代といのりていはふけふのさかつき。

蝦夷の千島見えわたるあさびらきに、ふみてとりて、こゝろみにかきし。

おくの海ふかき惠をみよの春けさは長閑に向ふ遠しま。

二日。こぞより餘波なうけちたる田くろの雛ね、庭の枯生に、薄く、はだれのふりぬ。いに

し年は、れいよりも深からぬ雪の、まして此のやかたのあたりは、山際、河くまゝて、ゆの湧

出るほとりに解て、雪はいさゝかふりもつもらねど、軒端のやま、海ごしに見やらるゝをち

こちの山々、高きもみじかきも淡くこく、画にうつしゝやうなるは霞立やと、

埋もれて去年に見し尾の木々も今朝霞めは花と峯の白雪。

立ならぶ家々の軒だに見えわかぬまて、湯のけぶりいとふかし。
三日。朝戸おし明れば、そしろ田のいなくき眞白に八重霜きらくとふりて、見渡すにいや寒く、はま風に吹かれて、あきさならん、たかへにやあらん、羽音はげしう飛行ぬ。

なれもさぞ翅に霜や奥部ゆく鳥の羽音もまだ寒き春。

四日。海松と松藻てふものを折敷にのせて、たわやめの持來ていふ、これなんふるとしのすさひに摘たり、まさなごとにしてめせとてくれたるが、けふの子ノ日にしかあへるもうれし。

いそにおふるまつも子日のちよこめてけふの例にみるも樂しき。

五日。かつらこに赤皿といふ貝をひろひ入れて、礒の舟よりおりくる泉郎の、處女にこれもてとて持せ、われも乙女も沖見たり。

あま衣たちも離れじあなたのし春の浦こそあかさらめとて。

六日。あけなんまうけとて澤の邊に根芹つむ女、すそのいたく沾たりといふは、君が爲山田の澤に惠具つむと雪消の水にもの裾濡ぬ、となんいふうたのこゝろばへに似て、めづらしければ、

澤水のあさからざりし惠みある君の爲にとゐぐな摘らし。

はやすためしもありて、菜刀して、ちたびものし、

七日。けふの粥に、しほづけのあまな、からな、ひともじ、おほね、なにくれとつみいれ、羊蹄（しのひろ）の若芽をつみ入て七草にたれり。

　けふといへばふるさとしのびこの朝開ゐならびてかく入いはふらし。

八日。　草嫩侵砂短といふことを、

　春淺み野邊のまさごの色もやゝ見えみ見えずみ萌る若草。

九日。夜邊より冴えかへり、雪のいと深う、田づらの水にうすらひたるかたも見えて、あさひらけの戸おしもあけなでくれたり。

　いづる湯のわきて長閑き春ながらとは冴え返り淡雪のふる。

十日。人のさしのぞきていふ、去年のかたみはまたいたくありながら、又冬の來る也、きのふけふの寒さはいかゞなど、

　寒けしなまたしら雪のふるとしの形見に埋む山のかけ庵。

十一日。けふは、こやし引初るとて、まをりのしき草などとりつかね、輴につみて田の面にはこぶ。雪のふかき田、はたけに、こゝろあてに、おのがこもりとや引わたし、秋のたなつものもうるふおもひに、あきのかたをさして、いくらともなうつらなれり。

　あらおらがそりのはやをのはやかれとひくや早田のしるしなるらん。

十二日。雪のこぼすごとくいたくふりて、夕つかた、晴たる磯山を見ばやと、はまやかたの軒に行たゝずめば、朝にいやまさりて雪ふり出るに、

あまのはら空に流るゝ雪の波雲のなみ立つおくの浦山。

十三日。小湊に行て、神明のかんがき、いかづちのほくらにも、ぬさたいまつらばやと、うまにて、ふりつむ雪ふみわけ、かんかけ坂越ゆるに、冬かれたる級の木に、ぬさと雪のふりかゝるに、　ちはやふる神のみかさにぬさまつりいはふ命はおもちゝかため、と、ずして通る。よんべよりの雪深う氷りたるを、ふみしだき、

夜はさえんいやかたまれる雪の上を朝ふみならす駒のあし音。

土屋のいそやかたも、小家の門のしりくべなはゝ雪の上に引たり。小野てふ村もいと近ければ、

埋もるゝ雪のなかのゝ村やかたあるとけふりのたちつらねたる。

山口、藤澤などを過れば、山陰に、衣が澤といふがありと語らふにいやふく。

おほ空は霞の衣澤の雪けぬる上にも木のめ春風。

かくて小みなとになりぬ。

十四日。この夜、雷電の祠に夜ごもりはせりけり、その、いほそくらの法螺ふく聲いと高し。

しが渡り

田植ゑ豆蒔き

早乙女とタチド

神明の社にぬさとりその林に入れば、さばかり廣きみなとは、なから厚氷のゐたるに雪ふりかゝりたるうへを、氷渡(しが)すといひて、ふみしだき渡りぬ。大空の霞たるやうに月の朧なる長閑さ。

　のとけしなみまへは春になるかみのみたらし川はまた氷るとも。

十五日。紅調粥くひはつる頃、田うゝるとて、いな莖に豆からをつかねませて、雪を、田の町のやうにかいならしたるに植て、畔てふくろには、すぐろのかやさしめぐらしたるは、小田とやいはん、豆生とやいはん。やをら、よねますに濁れる酒のかす、よねのぬか、うすつきひしたる豆の皮、このはぐさを入てうたふ。「豆の皮ほか〳〵、錢も金もとんで來い、福の神もとんで來い。」ととなへ、やかのくまをまき〳〵てめくるは、和賀、稗貫の郡の村々は、かくとなへて後「ことし酒かわくやら、ふる酒の香がする、おなめもちのとのかな。」といふ、やらくろずりてふものにひとしかりき。かの田づらにありて、

　なひきふす秋の門田もかくばかり植てみのらんためしをぞ知る。

女のわらはの入來て、「春のはしめ、早乙女がまゐつた。」といふに、ちちゐ、錢とらせぬれば、陀羅胡(天註――多良胡てふものは挾袋、ドウランにやあらんかし。)てふものに入てさりぬ。男のわらはのむれ來ては、「春のはじめにたぢごかまゐつた。」(天註――タチドとは三人にて、苗くばり、排馬の口とるサセをもいひ、田打人にはあらじとならん。)とて、物もらひてい

鳥追ひ

新穂瀧に豊凶を占ふ

めだしの祝

ぬ。こは、こゝ浦のやかたなる、はか〳〵てふものに似たりけるとなん。（天註――波可波可といふは、南部田名部なるカセギトリとて、おしきに田うちのかたしろを作りのせ、其おしき持てありくに、ひと、おしきの底をちいさき木してうちあるく音のパカ〳〵といへば、しかいふとなん。）

十六日。庭鳥の鳴出る頃、笛、つゝみ、おしきの底うち叩、ほうしとし、荒雄等聲をそろへて、

「朝鳥はより、夕鳥はより、長者どのゝかくちは、鳥は一羽もゐないかぐぢだ、はより〳〵。」

（天註――園地（かくち）とは家のしりなる花園をいひ、あるは、そのならびもいふとなん。）と鳥追のためしをせりけるに、夢おどろきぬ。この日、弘前のいなきの近きほとりの岩木やまの南、日屋が澤といふ所に瀑あり。此水の、寒さに落かさなり氷りて、ひの塔をたてるがごとに、新穂つみあげたるに似たるとて、にゐほたきと云ふ。それを、おほんつかさの人つかはして、此氷の大なるか、さゝやかなるか見さしめ給ふは、ひいけのまつりにひとしく、ひのためしありけり。さりければ、新穂の瀧を豊年瀧、世のなか瀧ともいふと、くにうどのかたるを聞て、

　豊なるためしにぞ知る新穂瀧も八束なるらし年さむくして。

十八日。この二三日は、あへてことゞもなけん。ひとりすびつのもとにすこし、春あるおもひに　風光惟柳色と云ふことを、

　風渡る柳のいとゞ春の日のながきをそへん色見えにけり。

二十日。けふは、めたしのいはひ、こゝにも、しるべばかりありて、童部の賽を投て、たはれ

あそぶ。水木のやかたなりける、毛内茂肅のもとより文來けり。その奥に、

春はさくこんと契りし言の葉の花咲く頃を待ぞ詫ぬる。

又、司家子のもとよりとありて、

あら玉の春たつ日より朝な夕言葉の花の咲いろそまつ。

かくぞ聞えける返し。

めづらしないつらはたくひあら玉の春の光よ人の言のは。

廿一日。雨にけちたる軒のした雪のまだらなる中より、草のおそ〳〵と萌えたる、やの前をすぐるに、

垣のうちに（マヽ）爾許草にこやかにもえて春しる道のへの宿。

廿五日。雪のいたくふりぬ。こは、みちのつちふみたるを、ふたゝび埋みたりと云を聞ておきづれば、砌の五葉、かへの木も、そことしらずふりうづむ。雪を風にふきおとすなど、

花とさきはなとちりてもやかて又まほにかつ見ん木のめ春雪。

二月一日

杓子舞

津可呂の奥

きさらぎの朔のあしたにもなりぬれば、むつきのとしみにひとしく臼ふせ、若水も結びあげて、ちとせのかげやうつさん。ある人の屋に松かざり、しめひきはへたるは、としやくの人やあるらん。そのみきにや、たゞびゑひたらんかし、聲たかうのゝしりたる門あれば、なにいふならんとかたぶき聞ば、杓子舞てふ事をすとて、蒲のはきまきに、さくをりといふ、みじかき衣を着て、杓子ふりかざしたる男、「さくし打の道具には、いちぶのみに二分のみ、前かんなにしり鉋、ばんしよ箱にぶち入て、ひつからかつて、ひつせおつて。」など、杓子つくりがふりをつくして舞ふを、かたはらに並居て、ほうしとり〳〵にはやしたるふりことなり。かくて山の木どもの名を数へ〳〵てけるを、板戸のひまより見る〳〵夜は更たり。

三日。この夕かげ、ほのかに月のてれるが、軒のつらゝにかゝやきたり。

　月もまだかすまぬ空を三日の夜のたるひにうつる影冴る也。

五日。春雨のしき〳〵ふりてやがて雪となりて冴たりけるに、日のほのかにてりて、雪はほろ〳〵とふりぬ。

　木々の花と咲ちる園の沫雪のけぬるや是も根にかへるらん。

平内より麻蒸へ

八日。雪のたえ〴〵に殘たる中より、草の青々とやゝもえつるやと見やれば、又ふりかくろう。野原のちかく出て、

萌るともまだしら雪のふる草に新ぐさまじる色だにも見ず。

十二日。比良奈比をたちて、土屋のうらわなど夙に霞たるやうに、ゆく〳〵おもしろさに馬ひきとゞめさせて、

しら波のちへに來寄する磯つたひ浦山づたひわくるたのしさ。

海市見ゆ

ひるつかた麻蒸につきて、舟あればうちのり撈來れば、洋邊なる雙子の嶋のことなる姿は、れいの海市てふものにや。こは、沖ふく風によりて臼となり杵とくゑしてぞ見えけるに、けふなん、遠つ波まに臼すへたらんと見ゆるは、海市てふものにたぐふらんかし。

玉くしげふたご嶋山いざこぎねうすき霞は舟路迷はし。

舟のいととく行て前坂も過るに、花折山といふ、芝生の磯山のあるきし近うこぐ。

春毎のつとに花をりつくしけむたえて梢もなみのいそやま。

野内

野内につきて柿崎のやにあるに、雨ふりもをやまず、夜はいと晤きに、貴布禰のみやどころのかたをこゝろあてに見やり、「梅花匂ふはるべは鞍部山闇に越れどしるくぞありける。」と、おもひ出てとなふ。

青森
安潟町
油川
水木村

梅の花さかりの色とあは雪と見つゝくらぶの山のしらゆき。

十四日。青杜に至りて一夜とおもふに雪ふり、晴るやと思ふ空も霙かちに、山越やいかゞ、又雪やふらんとためらひて日數へたり。

十九日。濱路ゆかばやと、安潟町に出てゝ善知鳥の宮にまうで、手酬せばやとて、よんでたいまつるうた。

うちなひくたむけのぬさもふりはへてかう〳〵しくもみゆるみつ垣。

万町てふ處にいたる。雪ほろ〳〵と、風にいさなはれてふり來けり。道行人のいふ、昔こゝを古川ながれ、まことは村の名もしかりと。

今ぞ聞く冴えて春雪ふる河の流れて遠き昔語りを。

油川に來て澤田のやかたに日くれぬ。

二十日。あさとく、今はた殘る雪の上を、ふみならし行馬のせに見やる遠近のけしきおかしく、山路のほの霞みたる風情ことなれど、折々の往來に見し所なればもらしぬ。夕くれて水木に至り毛內の館になりぬ。

契りおきし時したがへす春風に旅の衣手袖ふかれ來ぬ。

とぞ茂肅のよめるに答へて、

親の情を思ふ

ありしその言葉の花の香をこめて木のめ春風袖吹れ來ぬ。

あるし、ふたゝひいへらく、

消殘る雪をしはし花と見て草の庵にたびねしてまし。

此歌の返しをせり。

きえ殘る雪はけつとも言の葉の花をしめてゝいく夜たひねん。

あるしの女なる　　司家子

花をそき山路のつとよはる〲とわけこし匂ふ人の言のは。

とありける返し。

春はまたいかに言葉のはな咲と尋ね來にけり山本の里。

まちわびしなどありて、

必ずとまつの言ノ葉いろかへで人は霞の衣きにけり。

かへし。

いろかへず松の言葉をしるべにて霞の衣わけて來にけり。

ふづくえの上よりおちゝりたるは、手ならひにかいすてたる、ふみどものあるが中に、「あが末の子ふんわらはとなりて、ものまねびやにやる。そが別になりて、とかいて、おくに、

「橋ばしらしるせし文を思ひ出て花のま袖のかざしをぞまつ。」とは、茂肅のうたなり。又ひとくさは女の手にて、「をるはたをたちし教を身につみておもひなよせそふるさとの空。」とありけるは、司家子のよめるなりけり。こは、わきてあはれもいと深う、惟一の、ものならひに弘前に行けるとしりぬ。たらちねのおやの子を、になうおもふをく、さもこそあるべけれとおもふにも、あが父母のいます國のいとゞ戀しう、なみだほろ〳〵と、

ちゝはゝのまちやわふらん小車のわもいとはやくめぐりあはまく。

廿一日。れいのことゝて當座せり。竹路鶯。

風わたる竹の下路ふしなれて通ふやなひく鶯の聲。

山家梅。

山里はしるべ斗の袖がきにありとこぼれて匂ふ梅が香。

春の山田。

朽殘る去年のやきしめそのまゝに在りて種まく春の小山田。

いとさくら。

春風に吹な亂しそ糸櫻花に寄りくる人のたえせぬ。

廿二日。れいの人々集ひて、雛欵冬(マヽ)。

道のへの宿のめくりにゆひそふる垣ねも八重の山吹のはな。

戀の雨といふことを、

めぐり合てしばし軒はの雨やどり晴れて身をしる雨もよの空。

たびのひる。

浦つたひ旅の中宿ちかつきぬ浪かけ衣袖のひるまに。

旅の夜。

治まれる世にあふみちの草枕あすの渡りもやすの河なみ。

廿三日。　月前梅。

大空の月はくもりも照りもせて朧に匂ふ梅の下風。

折梅。

この里は咲しと折て一枝の春や贈らん見ぬ人のため。

廿四日。　霞中鶯。

偲ふ山霞の奥に咲花のありとし匂ふ鶯のこゑ。

あが歌よみおくれしかば、のりふさ。

咲出る言葉の花もをそ櫻まつよ久しき思こそすれ。

となんかいて見せけることのおかしければ、返し。

さきいでんいろもなか〳〵をそ櫻かねて心の種し植ねば。

廿五日。比呂左枳にいなんとて百田といふ處を行に、

歸るさは折てかさゝん花もまた咲ぬもゝ田を打かへし見て。

弘前になりて茂幹のすゝめるさもらひに入ば、惟一のいはく、

梓弓はる來にけりないとはやも花の言の葉咲色を見ん。

かくなん聞えけるにこたふ。

とひよりて見るもめつらし梓弓春とて匂ふ人のことの葉。

廿六日。　春淺霜連夜。

春もまた淺澤水や氷るらん冴てよな〳〵霜のおく山。

廿七日。　鶯出谷といふことを、

白雪のふるすをよそに鶯の出て太谷の春ぞしらるゝ。

廿八日。夜邊より雨風をやみもあらぬつれ〴〵に、　雨中梅花。

鶯もぬいやわぶらん春雨に沾れてぞかざす梅の花笠。

湖雁歸。

弘前にて

須輪の海うつればやすくふじのねを越えてぞかへるあまつ雁金。

廿九日。よんべより太雪ふりぬ。こはいかに、こと國は今花のまさかりならんを、此奥のはなや、いつを春とて見まし。過し夜半ばかり花見し夢のものがたりして、

おもひねの夢にもわけてみよし野の花をうつゝにいつたどらまし。

春天象。

空の海霞の水尾に月の船こぎもはてなであくる明ぼの。

三十日。そことなう出ありきて、蓮光山大圓寺とて古儀の眞言をこなふ寺の杉むらに、五層の浮圖のありける下つかたは、ひろのゝやうに水もあらねど、鏡の池とて、いと深かりしかど、二十とせの昔よりあせて、いまは、水もかれはてたると人の語る。げにやあらん、そのかたちはなくて、はしも高くところ〴〵にかけ渡し、風情もあれば、花も盛ならん頃はわきてよかりしにやと、

おもひやる花の俤いろふかく池の鏡にうつし見し世を。

ゆくりなう雨のふりてければ、とばかりありて規勇のやをとぶらへば、まちわびしなどありて、菅の根のながき日をなにくれとかたりくれて、あるじ。

樂しさよこゝろ長閑にかたり合ふ雨のふるやの春のつれ〴〵。

駒越の渡

旗鉾村

はなぐり梅

とぞよめる返し。

　　とひよりて雨のふるやのいにしえも語り殘さぬはるの日ながさ。

やよひの朔。毛内茂幹の百澤にいきけるにたくえて、駒越のわたりとて岩木川のはやせを、象戲の小間のかたちしたる船を綱曳て渡したるにのりて、うちたはれてよめる。

　　ふねのなりも調度將棊のこまごしや手すきも見せず渡す川長。

小雨のふり來てほのかすみたる、遠かたに引捨たる馬どものいばへる聲を聞つゝ、野はらのみちに、

　　うちむれてあさる春駒こし雨にぬれて嘶く聲聞ゆ也。

熊嶋をへて、大なる塚ひとつ屋のしりにあり。いにしへ幡と戈とを、このふるづかにこめつきたる故に、今村名を旗鉾といふに來り、近き頃、いしならといふ木の枯たる物語をぞせりける。賀田、高屋は村境のけぢめも見えず。蓮住院といふけんざか園に、としへたる白梅のあり、これなん檗（はなぐり）の梅とて、實に穴あきてなりぬ。こは世にことなれる。うめのいろづく頃人のこへば、こと處に植ゑなんことをおしみて、おほろけにてはくるといはず、しひてせむれば、から人の、すもゝのたねぬきたるうへたるこゞに、たねぬきくれ、そのたねのみとうびてといへば、湯をかへらかして、其湯にふたと打入てぞくれたる。さりけれど人これをぬ

すみ殖て、こゝ處にもありきなどかたる。その梅のたちえ、みちの左に見えたり。

誰植ゑていく世になりぬ春雨の雨のふる枝の梅ぞこだかき。

いつめぐみて、いつ咲なんともおもほえねば、なびく柳のもとに立て、

青柳のいとはや匂へ梅のはなくりかへし猶寄て見なまし。

舊城の址

むかし此國の守住玉ふたるいなきのあとゝて、ついぢのやうに芝生のつきたるに、雪のむら消たり。はたつもりのいふ、馬をりのありしあたりは畑つもの今もいとよけんと。御臺老母橋を過れば山崎といふに社ありて、武南方彥命をうつしまつるほくらは、消殘る雪におきつきのかくろひ埋れ、ぬさの追風いや寒くぬかつくに、鶯のこゑのどかに、うちはふり木傳ふ。

やゝ春の思ひを諏訪の神籬はそこと太雪に鶯のなく。

新法師村

このあたりのみちにわかれて傘平山にいる（天註――傘平石、色黒々なる石の、たくみならでも、おのれと、うすくわりもて行こと、方解石のごとし。それをとりて小橋とし、石たゝみとせり。）、あるは雌谷の澤にわけ入、新穂の瀧、闇門の瀧など見に至るすぢあり。南に羽黒の神をまつる、山北には八幡山を見やり新法師といふ村あり。山きしにもちさ、しんほつしと云ふやかた、あるは遠き昔にや宮地といふ所あるは、何がしの宮そこにさすらへておましまして、世をうんじ玉ひしにや、すけし新發智となり給ふの名なれども、文字書たかへたり。ごだいさいふ所はその御臺のありたりともいへど、百澤寺いさなみ作らんとて、その頃坊ど

百澤村救聞寺

岩木山三峯

阿曾閇の森の傳説

もをかりにそこに造りて、それなる後に今の寺の邊にうつしたりけん、さりければ新坊地の名殘りたりけりともいへり。左に、松のみふかういや立るなかに、高岡のみやところありと云ふ。かくて坂下れば百澤の村なり、救聞持法を行ふ寺あり、虚空藏ぼさちをすゑて寺も救聞寺といふ。百澤寺に入て小法師のあないにまかせてめぐる。山門いや高う、十一面觀世音、五百の阿羅漢をすゑたり、こは寛永五年の頃ほひ、國の守信枚の君とかや造らせ玉ひて、山に女の登らんこともとゞめ給ふたりとなん。なべて、いらか立ならべたるさま、都にたとへてもいはゞ、地は山かげながら、凡大德寺に似たり。祝、さきたちて、下居の宮の玉だれちかう、みてくらとりてはらひ淸む。此ほくらは岩木三所大權現あがめ祭るは、岩木の嶽に三のみねあり、左に觀世音をあかめて寺あり、岩思山觀音院西方寺とて十腰內村にありし。右のねは藥師ぶちをあがめて、鳥海山景光院永平寺とて松代村にありし、なかには彌陀ぶちをあがめて岩木山光明院百澤寺といふ。これなん元尊法印のひらき玉ふ。この寺も十腰內にありつるを、今こゝにぞうつしたる。昔は十腰內に至り、此村より岩木根に登るをまほの路とせり。延曆十五年に、阪上田村麿ゐみしらをむけたひらげ玉ふの頃は、この山の名を阿曾閇の森とて、あやしのもの住みぬ。これをもうち給はんの軍いだして分登り給ひしかど、行衞もしらず、あとかいけちてうせぬ。のち多くの年月を經て、近つあふみの國篠原の守たり

鬼の後裔か

津輕君再興

し花輪なにがしのうし、此うてにむかひ、生ヶ浦にふねつき間山の城にこもり、これをうかゞふに、ある夜の夢の中に、この遊部の鬼にかたんさならば、万字のかたち、錫杖のかたをつくり、それを旗さしものゝしるしとして麓よりおびやかせ。鬼は、赤倉といふそがひの方にかくろふ。その名も万字、錫杖とて、しちもちからも、こよなうすくれたりけるさ、神のまさにつげ給ふことのうれしう、ひたせめにせめ登り、金鼓におびやかされて万字、錫杖しちうせ、心も空におののきいづるをとりことして、あるはうちたひらげ給ふに、万字、錫杖、今より後は人につゆのわざはひもおはせじ、ゆめ〳〵と、うけひをなんしたりける。〔天註――あるはいふ山城の國篠原の花野長忠の長男花若君、住吉明神の夢想にまかせて岩木山なる鬼をうち、大獄丸かやから阿根部といふ鬼、善知鳥前なるかけはしの邊のいはやにかくろひ住むをうちたまふとなん。〕その万字、錫杖らか末にやあらん大人(おほひと)と云ふ、今も岩城嶽の北赤倉のいはやに住みぬ、をりとして見る人あり。はたあやしの物語ながら、村の長太田藤左衛門が家に鬼の臍てふものを、そが遠つおやより持傳へ、屋には上窓なく、せちぶの豆もはやさず世々經たり。あるは鬼のゆかりありとか。いかゞして臍のみ殘したりけんと問に、問人願をはなちて笑ふ。其頃たてたらんかし、三ありし寺の景光院はあはれたえにき、觀音院は南部にうつりぬ。此百澤寺もあまたの僧坊も、天正十七年火かゝりてあともあらざりしかど、今の國の守の遠つおや右京大夫爲信君の、本堂下居の宮を再びおこし立て、いみじう清らをつくして作らせ給ふ。又寺に連りて　寶植坊

登山期

山中處々

遠近四周

西福坊　山本坊　福壽坊　南泉坊　圓林坊　東林坊　万福坊　德藏坊　法光坊　かくぞありける。（天註――弘前の東長町といふところに岩思山藥王院叡平寺といふあり、いにしへの永平寺の名をかりもて今藥師如來をすゑ奉りたり。）かみぬしは安倍常陸掾盛季なり。又いはき山のとやまのそのすかたは、小倉山見たらんに異ならず。それを守山とて、そこに守山明神といふ神おはしませり、その神につかへまつる、山田左衞門太郎伴定か末もあり。年毎の秋八月朔よりして望の日をかぎりに、くにうご殘りなう、いもゐしてのぼる。さりけれど、ものゝふたらんかぎりはのぼることをとゞめ給ふ國ののりとて、おかす人なけん。その頃は夜晝のとだえなう、こゝらの人の鼓笛に聲うちとよみ、五色のみてぐら手毎にとり持、さんげ〳〵のもろ聲、あめに聞え谷にこたふ斗、堂の南より林に入り野原過て、棧立(はしたて)と云ふ所を經て嫗石、惠美子石のあたりより女は行かじ。靏坂、法光坊なかせ、錫杖清水、御手洗湖（たねまき苗代とて此のうちに錢米を紙に捻り投て、なりはひを占ふ。」水なきみたにの深さ、はかりも知らずとなん）御倉風穴、こゝより左のみねをさして鳥の海、このあたりより右に幕が澤、左に外道おとし、劔ヶ峯、鳥の海山といひ、右に行ば胎内潜、二ノ坂、一ノ坂。山頂に登り得て、北に嵓鬼山、西に鰺ヶ澤かみなと、ひんがしにのぞめば、ふもとに弘前のいなきの、（マヽ）そとが濱浪遠う蝦夷が千鳥見やられ、御祠には、かねのみかたしろ三ならび、そが中にまじりて、石のみかたしろのあるは守山の神とか。赤倉のかたに神(たに)場(は)てふ處を見やり、いと靜なる夜には龍燈、天灯のさゝぐるを見、なべてそのはざま〳〵に

百澤寺一泊
峯の雪は六月に消ゆ

霜落松（あるは嶽松といふ）石南花ひしひしと生ひ渡りぬ。まうで登りたるかへさには、山のつとゝて禹餘糧、毛蓼、稻草、莓實、萬年草、嶽松、石楠花、大覆盆子。南の麓には枯木平の牧、湯段の出湯、馬の喰ふ塊、あるは花紋石（このは）、七ひろ石、根小屋とて蕨の根搗て粉もて奉る處あり。嶽の湯、黒森山、おやすてのもり、龍ヶ澤、硫黄平。北なる麓には鬼澤村の鬼神の祠とて、それに平（ママ）五尺あまりの鍬あり。こは、こゝに田作らんとて水こひいのりしとき、一夜のほどに山みつの逆に流れ出て、山田にもせき入ぬ。そのひきたるあまりの末は赤倉に落入て、行衞はいつことも知らざりけるとぞ。十腰內の觀音の林、大石大明神などの神祠あり。なべて、この岩木山のひんがしおもては百澤、高岡、尾は弘前にさし岩木川めぐり、西は鰺ヶ澤、赤石の村々、中村のやかた、赤石川とみねの濆り海に流れ、凡そめぐる麓三十五六里、村里は七十あまり。まことや、もゝの澤水瀧と落ち淵と淀み流れ出れば、うべ百澤の名やありけん。

あふぎ見る山はいはきの麓寺あかにむすばんもゝの澤水。

山かげにいたれば、朝誓法印入定のあとゝて塚せり。夕近ければ、百澤寺に一夜をとてかたらひ暮れぬ。高き軒はを埋みたる雪の、いまだにいささか消えもはてなで、寒さは、み冬よりもいやまさりぬといへば、聞たまへ、麓の雪は卯月にけち、ふたつかみつかの蕨を折り、みねは水無月に雪消して、うご、ふきのとうとるわざをし、さりければ梅も櫻も夏の初を時と

高照靈社

津輕信政侯

爲信侯と近衛龍山公

て咲出るなど、あるじの大とこの語り給ふ。

さえかへりもゝの澤水氷るらしそこといはきのみねは霞めど。

村はしより北なる小路をゆきて高照靈社に詣ぬ。そのとのはいと大に高う造りたるが、松杉のしげりたるあはひよりまづあらはれ見えて、祭司、宮守つかさのやかた、神馬のまをりなど雪の中に埋れたる中に、めぐみもやらぬ櫻の梢の立並びて、雪ふきこぼす柳の糸の煙りたるは、

白糸を染るとやみんゆきちりて柳のしなひ春風ぞふく。

かくてひろまへにぬかつきて、この君のいさをしを思ふ。（天註――高照靈社の世におましますり頃は、あそびの道に心をやりて、いみじうすき給ひて、れいならぬ折しも、めしつかふ人々をよせて、あそびせさせ給ふの折しも、むねいとふたかりぬ。今は、きの緒やたえなんとて、けのころもをぬきてはれきぬを着し、合歡鹽といふ曲を遊ひて、寶永七年かんな月十八日に、そのあそびのむしろに在りて身まかり給ふとなん。）

君こゝに宮居さだめて岡のへのたかきその名や世々に知るらん。

やをら高岡を出てゝ新法師の村のかた岨に、高館の城のあるじ、なにがしの塚の石ぶみは、かれふの草にふしまろびたり。（天註――高館の名は作坂の南の山のあなたに在り黑石のほとりにも、又ことところにもいとおほし。）つくり坂を下り道とく過て、賀田にいたりて再びふるしろの墟にのぼり、菫咲たるなど見休ふ。慶長の昔爲信の君こゝに住ませ給ふの頃、近衞龍山公さすらへ來給ひて、山かげの館ならんすませ給ふ

を爲信とぶらひ給ひてかくなん、「いとふまでなき身なれども世中のうきには山の奥を尋ねて。」と聞え給ふにとりあへず、「世のうさを忘れんとすむ山も又おくが奥へとおもふかくれ家。」と、龍山公のおほんかへしぞありけるとなん。はた、いなきのおほんくらに、ようしやうのありけるに古禰夜數の銘、こま笛には新柯亭の銘あるも、みな龍山公の御手にかい給ふ。龍山公めしかへされ給ふのとき、小野小町のもたる、十四絃の琴を都にゐたまひてけるを、その頃主上きこしめして、あなめでたと、かしこくも、かいならさせ給ふたるもありなど人の語る。こはいかに、むかしわれ、いではの國見めぐりおかちの郡に至りて、小野てふ處に小町の植殘したるゑびすくすりのそのあるを尋ね、小野のふるあと殘りなう見ありき、小野の家なるうばそくの屋に入て、なにくれと問ふに、なに一つ、いにしへをしのばんしるしも侍らねど、わか家に、とをつおやより持傳へたる小町姫の琴とて侍りしを、屋はやもめのみ住みたる世に、つかろより來たる、はいまのつかひをやどしてければ、この琴をひたに請ひけるにまかせて、こがねにかへたりしより、いまは、つかろの寶とはなりさふらひしと聞き傳へ侍ると語りしまゝ、そのことに日記にものして、やがて、つかろぢに入て弘前に至り、しか聞えしことのありつやと人ごとに問へど、われ知りきと答ふる人もゆめあらざりしかど、今、はからずも此物語を聞ことのめづらしければ、猶うちかへし／＼問つゝとひくれ

ば、はたその事のいはれこそしらね、青山の琵琶も此國にありと聞侍る。又こゝにあやしき事の物語あり。その事やいかに、聞給へよ申さん。三十とせの昔にやあらん、あるたんやが鞴ふくもとに、ふるき兜をもて火桶としてありつるを、進藤何がしが見てあやしみ、田村たれとやらんにいふ。こは世にことなる器ならん。田村これを聞て、それとくとて、たんやがもとよりしろにかへて、これを進藤に、鳥銃(ひや)してうち試みよとて打たれど、あたらざればば、是なん、ねらひのたがひたるにやあらん。いで、こたびはとて、思無邪てふ臺にかけてはぢきたるに、中らざれば、これをもゐあてざることのねたさとて、石の磐にのせて斧ふり上て、うちやぶらんと、からも碎けつべう打ば、露斗斧の刄のあと入て、磐はちりのやうにくだけたるを見おどろき、いかにぞや、さばかり火矢に名ある人の手にだに打得ず、をのゝ刄もたゝざるは、いかなる工のつくりて、昔、たが着たゝ兜ならん。いづこに、これや、えたらんと、たんやがもとにとへば、出羽の國何がしの土のうちよりほり起したるを、われ、かへりみをやりて、ふと、えたりと云ふは、昔金澤の戰ひに是弘の君よりたうびたる薄金の兜を、いしゆみにはぢかれてうしなひし、そのかぶとにもやと、むさしなる明珍かもとに見せよとて見せしかば、手あらひ口そゝぎて、こは、獅子王がやからの兜のそのひとつにして、もとも神のつくれるたふときうつはとて、百たび千たび、いやぬかづきて、うすがねの兜にたがふこと

雪猶激し

久渡寺詣で

のあらじかし。あたへなき寶とはこれにこそさ、かいそへたれ。それなん、あたらずの兜とて、ながく此國の寶とはなりぬと語りもて、こまこし川渡りて、茂幹に別れて規勇の屋に至る。

三日。よんべより雪いたくふりてければ、そのためしを、

　けふにあひて咲てふ桃もしら雪にありとみちよの色だにも見ず。

四日。けふなん護國山にのぼり久渡寺にまうでん、觀音さつたにぬかつき奉らまく、やまの大とこにもたいめせばやと、かねてより思ひたてど、夜邊よりゆくりなうふり出したる太雪の、つとめては、いやふりにふりまされば、いかゞとためらふを、あるじ規勇、こは、山路の雪猶こそおかしからめといざなへれば、出て里さくるほど、行べき末も見やられずかきくれてふれば、こや、春はなからも過行空を、さらぬだに花いとおそき奥のならはしを、まして此頃の雪に、わきて野山の冴えわたり、おくれはてなんことのねたさなと語らひて、

　此まゝにまよひもはてよ今朝の雪とても彌生の花しさかずば。

野原にかゝれば、さと風の吹來に、行なやみ佇みて規勇。

　野路行ば春はやよひの空ぞともいざしら雪をさそふ山風。

猶山おろしはげしうふゞき、ひまなう空うちくらみ、むかふ遠方は梅山てふいたゞきも麓の

小澤村

松もかきくれて、そこさわいだめなう。
　霞かとむかふとやまの春寒く雪げにくもる檜原松原。
となん、ふたゝび規勇のながめてけるを聞つゝ、おもひつゞけたり。
　遠方にみねの檜原の春の色もなか〳〵雪のふりくもる空。
小澤といふやかたの村長がやに入て、あな寒し、しばしとて休らふに、あるじ、さぞや侍らん
近くよりねとて、すびつに柴さしくべて火たかうたきぬ。
　ふり氷る袖のしら雪とく〳〵とましはたくやはわきて長閑き。
春のこゝちすとて、けぶりうちくゆらしつゝ規勇。
　立よれば折焚く柴のしばし猶寒さわするゝ春の山里。
梨の木堆といふ處に來て林の雪いとふかし。
　やがて咲花もかくみんやまなしの木々の梢につもるしら雪。
のりとしの歌はいかゞありつらん、忘れたればもらしぬ。雪はいよゝふかうふみしだき、ひ
とさかにまさらんなどかいわけて李堆といふを行ほど、山風はげしう、のりとしが笠のかり
手も吹放つべう見えしを戲て、
　實やはなるすもゝの下の道のべは菅の小笠をかたぶきにきて。

朝音上人

阪本のやかたも過て杉の下道より坂のぼりえて、堂の前に到れば法師、みとおしひらきていふ。此觀世音は、圓仁大師の作り給ふのみかたしろ也。寺はこの麓なりける小澤(平賀庄和德組)村の小館といふ處に、其の昔興福寺の圓智坊とて阿娑羅三千坊の一ッの坊なりしを、寬海上人の世にうつして護國山觀音院救度寺といひしを、信政(高照靈社をしかいへり)のたまはく、のりの榮えも久しかれとて、久渡とはかいなし玉ふ。觀世音の堂は棆山にありしを今こゝに移し、中山よりは白山のほくらを移し、熊野のほぐらは烏井長嶺より移し奉るなど、小さき藥師の堂にぬかたれながら、かの法師語りて、いざ給へ、國見堆に登らんとそのかたにのぞめど、雪のいと深ければ、ふたゝびとておりきて、み寺に入て、山のあるじ朝音上人に、去年も見えでおこたりしむくひをなどものかたらへば、ふみでをとりて、

まれにかく人も訪ひ來る山寺にさかねは花のもてなしもなし。

かくなんよんで聞え給ひたる返し。

山寺の花しおそくも咲匂ふ言葉の色や折てかざさん。

夜ふかう猶雪ふるに、やどに風すさまじうものゝおとやしたりけん、いねもつかで、のりとしひたに、

やま寺は春ともわかず聞ゆ也枕にさゆる雪折の聲。

となんあまたゝひ、くちつからにずんしけるに夢おどろけば、僧たちのおきいつるけはひし
て、あかやくみけん、うちならしの音ほのかに聞えて、

山寺の雪の夜深きおこなひにあかふる鈴の聲冴る也。　　大善院玄識

五日。まだ、とは暗きに、ともしびとつて大善院（金剛山最勝院光明寺の門にあり）のあるじ玄識法印、あかつき起
して、袖冴るとて出行てけり。こは、きさらぎなからより、いそまりの日をなん、こゝにまつ
る、しら山の神の堂あるにこもりて求聞持の法の行ひあるが、露の音なひも聞えざれば、

しづけしなひめたる法はぬかの聲あかふる鈴もとには聞えず。　　朝音

麓の人來て、うくひす聞しといふを聞て、さあらばその鶯おもひよりなんとて、

誰とはぬ太山がくれにすむ身さへ春は友なふ鶯の聲。　　玄識

山家鶯といふことを

春ながら人も訪ひ來ぬ山里はたゞ鶯の聲のみはして。　　規勇

月も日もしらぬみやまに庵しめてきけば春しる鶯のこゑ。　　秀雄

僞りのある世にちかき山里やとはぬ人くさうぐひすの鳴く。

六日。大雨あしたよりふりぬ。朝音法印、此頃國上寺の不動尊のあせし玉へれば、そのうらひして、ところ〳〵のみや、寺に、出汗のいのりとて、をこなひしげう。華水供などいとまなう、いま御前に至りがてら、われこさし、よそぢなり、ねかはくは是にものしてさいひつゝ人き。さりければ、

こさしより身にしる老のはつわかな齡を野邊にちよやつむらん。

ある人の、浦松といふことをよみてといへれば、

言の葉に及びも波のいかにしておもひよらなんわかの浦松。

七日。けふこゝを出るといへば、たさう紙にかいて、　孤遊　鶯よ又たちかへれ花の頃、といふ句もておくり給ふに和句、　こゝろひかるゝ梅の木の下。かくて再び寺のしりより觀音ぼさちの堂にまうで、いまだけち殘る雪ふみしだき、杉の下道より阪登れば國觀堆になりぬ。北は、そとが濱なるうら〳〵霞がくれに見やられて、西は、いはきの麓あらはに、雪をてれるひかげきら〳〵と、まばゆきまで霞たち、弘前のやかた、くま〴〵のこるべうもあらず、ひさめにみやり、

みちの國見るとみるてふところあれど此岡のべぞ又たぐひなき。

練兵場

弘前を立つ

水木村

小澤村の西に、みそまち斗のひろ野あり。こゝに、としころの春秋は、ものゝふにおふせて、練兵のまねびせさせ給ふところとなん。そのあたりのかすみ深う夕附るおかしう、岩木根のわきてことなる風情をたゞずみ〱見やりて、

たくえても何といはきの山なれやあさ夕ぐれにかはるすがたは。

といへば、のりとし、われいまだ作りえずなどかたらひて、桔梗長根の、したつかたのみちの左にみやる、石森てふところの松のみこゝろあてに、日は暮れて雲雀なく。

くれふかき空に雲雀のこゑす也おつる芝生の栖やまよふらん。

みちたどる〱、のりとしのいふ。

はる〱と雲よりおちて夕ひばりねくら尋る聲のひまなき。

八日。齋藤のやを立ち出るに、あるじ規勇。

あふことに別ぞおしき言の葉ははまのまさごと語りつきねば。

といひける返し。

わすれじな外の眞砂のかず〱にたぐふ情の人の言の葉。

みちより雨ふり道とく過るほど、水木のやかたになりて、

十日。當座せり。　梅薫枕。

折るると見えしは夢よ手枕の現にかよふ梅の下かぜ。

行路柳といふことを、

かち人のゆく河の邊の道せばみ袖にかたよる青柳の糸。

十五日の空晴たり。此頃雨がちにながめし心やりに、松嶋といふなる、觀世音をいはねのいたゝきにすゑて、世にたぐふかたなきおもしろきところあるにのぼり見てむ。われ見て、みち知れり、さいたゝんなど茂幹にいざなはれ、茂肅などかたらひつゝ十川より白銀の村に入らんほど、遠近の田面に、男女、山すそといふものをかふぶり、そがうへに、たのこひをはちまきに、うへざまに結び、こゝかしこにむれたち春田打たり。

時も今春のなはしろかねてよりたねやまかまく返すあら小田。　茂肅

ゆく〳〵、おなしすぢとて

丈夫が千町の面にたちむれて時やおそしと打かへす也。

とぞ茂肅のいへれば、雨の、ときふれりけるに

春雨のふるをいとはでますらをがうち返す田の水やまさらん。　茂幹

樽澤といふやかたを經て吉野田といふに來れは、雨いやふりぬ。

春雨のふりなば花のとく咲んぬるともよしのたのしかりけり。

松倉へ行かんと

山すそ被り

石澤の大梅木

雨の猶ふりければ、石澤といふやかたにつき、こゝに住む平左衛門といふがやの前に、ひろは、みそあまり、四方に枝たれ朶さしわたりたる大梅のありけるは、いと大なる紅梅と白梅と、ふたもとなるを一本に植ませたるが、今はとしふりて一もとになり、あは花の頃は、紅のこぞめの色の四方にかゞよふ光り、やをらちりなん頃ほひ、後れ咲づる白梅の、いまだ雪は殘るかと梢高く空に匂ひわたり、遠近に田うち、はた織る麻衣の袖にとゞめたり。實なり色づくをとりてうるには、馬、はたちばかりにおふせて市路にひくとか。此雨のはるゝ間に

　　春雨によしぬるゝとも香に匂ふ梅の木陰はたちもはなれじ。　茂肅

とありけり。はたよめる　茂幹

　　山里も春をしられて此頃はさかねど匂ふ梅の下かぜ。

となん、かさやどりして此宿にありて、猶見まくほしければ、とに出て、世にかゝる梅も亦あるものかと、ぬるもいとはず、とばかりありて、

　　しげりあひて世々をふる枝の梅たかみ四のとなりの軒おほふまで。

館の腰の山崎元貞氏

雨の猶ふりもをやまねば、松倉に登らんことかたく、此梅見てことやたりなん、さりければ此かへさ、館の越てふ處にいきて山崎元貞といふくすしをとぶらはんとて、夕顔堰常梅橋を

夕顔、柏木、榊

種蒔き近し

へてその處になりぬ。かくて元貞立卜といふのやになりぬ。こゝは昔古館といひて、たれやは住たりけん、子ノ日に植ふならん、砌に小松の多かりければ、

たのしさと手を折まちてのき近く小松のさかへしげるをや見ん。

時うつるまでかたらひて、あまつゝみして出たち、柏木堰をへて、はる〴〵井堰にそひて來ぬれば榊村にいたり、こはいかに、ぐゑんじ物語に聞つることの夕顔、かしは木、さかき、おかしき名ごころにこそあれなどかたらひつれて、水木に來けり。

廿一日。この五六日はかゝず。けふなん練兵のならはし、そなへのまねびありとて、茂幹の弘前に行けるを送り出て、童どものむれて土筆つみありくを見て、

霞つゝ野邊はたのしくなれもみつかへさやをしくわびるなるらし。

廿二日。溝城彈正のふるあとを見んとて、此やかたのほとりをしばし離れて、小田のくろみちわけつれば、

芝生にはしばしも居らで霞立つみそらはるかに雲雀啼なり。

とぞ茂肅のくちすさび聞え、

めもはるにあがる雲雀もいさゆふもひとつになびく空ぞ長閑き。

花もやがてほゝゑむべうかたの、この枝、かの枝にぞ見やるなど見ありくに、井堰のきしに

女子の名

あら雄らむれたち、水にひぢおきたるたねをとうだして、近き日やうゑなんまうけに、もやしてけるとか。其邊のやに鴈櫉（あるはいふ黄丁子）といふ、よひらの花のありけるを見んとたちよれば、此やども、めぐりの田井よりたねのたはらあまたをとりあげ、水そゝぎ、桃の木のもとに並べたるを見て折句。

たれこゝにねこして植しもゝの木のやとにぞしげるしづ枝なるらん。

廿三日。この頃弘前にありて規房えやみして、おもりかにふしけると聞て、おやごゝろいかならんと、規勇のもとへよんでやる。

太山邊の雲吹はらへ松のかせ梢に千代の色や見るらん。

廿四日。人の、いせものかたりをよむかたはらにて、梅のうたをよみてんとて、かうがへゐたるをみて、その木の下はたちてかへるを、とぞいふなる句を、

ゆく／＼も袖こそ匂へ梅の花その木のもとはたちてかへるを。

廿五日。をさなき、大人びたるも、女子あまたたはれたるは、メツケ、ヨテ、フメ、アクリ、エノコ（天註――メツケは見付にや、すたれたるを拾ふをメツケタといひ、末子をヨテといふ。フメは姫にや。アクリてふ名は、女子をあまたうめる女子に名つくれば、必男子の生めらんまじなひにて、しなのぢにも聞えたり。）など、ことやうの名どもの中に櫻子と云名の聞えたり。こはおかし、むかしも櫻子といふがありて、二人の男この女にけさうしければ、身をし分ねばと、二人の志のまめなるを見る

〳〵せんすべもなう、深き林に入て、櫻の木にくびれて身まかれり。この心をもてぞ、いにしへ人もよめる、「春さればかざしにせんと我思ひし櫻の花はちりにけるかな。」「妹か名にかけたる櫻はなさかばつねにや戀んいやとしのはに。」かゝる歌なども思ひ出て、いにしへに露似たれば、その女子の親にかはりて、

　こゝろあひの風は眞袖に通ふともちるな櫻子盛りをも見ん。

廿六日。あさては、かならずこゝをたゝんといふに、あるじをはじめ人々、すべなきことにこそあなれ、別れての友と見ん、此宿のふみかいてとせちに聞えしかば、

擧長亭の記

いにしへに地着のまつりごち給ふなん、世はばんせきの如くに、うごきなき國の風吹つたふたるとか。そのためしにならひて、くさきり耕す民にまじりすまゝくのこゝろばりして、山田のひたぶるにねがひをたて、かたいとのより〳〵は君にけいし奉れば、おほんけしきいとよく、しかすがにあはれと思し給ふのあまり、つかへまつらんにもたよりよからんくまはもと、おほん稲置の遠からず、近からぬあたり、むかし溝城彈正のすめりしふるあと、いまは云ふ水木てふやかたのひんがしの田つらに、天明五年春如月家づくりして、毛内茂肅、茂幹の

すめらんとて、いま住そめてけるをやまぐちとして、あるとある人とも、なべて、あがりたる世のふりにおしうつりて、國ののりも、しか、をこなはせ給ふとなん。この擧長亭といふやかたに在りて、むかふひんがしは、糠田の嶽のいと高うそびへたるをこそ、小田なる山とやいふらめ。離嶽、蛭貝がたけ、葭穀のだけ、小峠、ぬる湯山、永井澤、片戀の岡部、西は岩木のやまにふたがり、南に名あるは陰谷、檜山にひきつらなりて阿遮羅山、碇てふ闕山も、峯は百重の濤たちわたるすがたのそがひ〳〵に、遠うほのあらはれたるは岩手山、釜ふしがたけ、吾妻山ちかう、けざやかなるすぢは黒石、行岳のさと、みぎひだんにいきわかち、行かひせりけるは、それとかぞへつべうぞ見やらるれ。やをら垣根の雪けち、たねひぢ、たねまく小田のしめ縄くりかへしながき日を、雲雀は軒の芝生よりあがり、つまとふ雉子も霞の衣うらみなきながめを、みちのく山に横雲のひきながれたるに、殘の雪のひかり合たる明ぼのは、梅もさくらも時しおなじう、鳥のいろ音のおくれたる風情もことにおかしう。わか葉さしおほふ梢の日にそへてしげう、ほとゝぎすの百千返名のりたるに、なれもいくばくの田を佃ればかと、つゆの玉苗とり〳〵に涼しう、殖るたごの田歌うたふひとふしに、ゆひやとひもしるく、さみだれさへ、かきのゆふがほかゝるたのしさと、二の友がきのまとゐに、萩薄の露きら〳〵と月のいとおもしろき夜に、くれかへる、まきわらはのこゝろやりにふいすましたる

笛の聲、きぬはたの音もこゝかしこにあらはれてあけ、ちまち、やそしろ、うちそよぎて、稻葉の雲をふきわくる風のまに〳〵、見えみ見えずみたつ、おごろかしのすがたあらはに、野邊は千草の錦、はたをる虫のこゑに夜寒をつぐる頃も、鴈がねいとさむく、初鐘禮の、こくもうすくもそめわたす遠近の山のたをり、外山、たかさご、もり、はやしのあはひ〳〵に、あさなゆふへの、つゆ見もるゝかたもなう、おしねおさめなむころほひ、門田にむれたち馬ひきおほせ、はこぶいとなさ。穂波八束にしなひなびき、里とみ家さかえ、國にぎはゝしう、君のおほんめぐみ民のいさをしをおもふには、はつ雪見なんもいとめづらしう冬ごもりして、又あらたまのとしたちかへり、長閑なる春や至らんをまつことの、たのしさもたのし。

樂しさよ外にも見やらで窓の中に月雪花の詠あるやど。

末千年宿の榮も道奥やまの黄金のはなも見なまし。　有方

廿七日。あけなばこゝをたゝんといふに、弘前より文きけり。そか奥に、みたりの歌はありけり。

花鳥のあかぬなごりよ行春のおなじ道にや人のわくらん。

となんありける歌の返し。

いとゞ猶別ぞしたふ花鳥のあかぬ色香に立わかれては。

はた聞えたる、　規勇

いとゞ猶別ぞしたふ言の葉のみちをしるべのたのみなければ。

此返しをせり。

言の葉の道の情をしるべにて又もとひこんけふわかるとも。

おなし心をとて　惟一

へたつとも心はかゝりをしるべにて思ひぞおくるけふの別路。

おもひやれなりむつびぬる人にかくあはでわかるゝけふのつらさを。

とありけるふたくさの歌の返し。

あはでけふへだつ別れは遠近におもひやるさへ袖ぬれにけり。

旅衣きなれてむつふ人にかくあはでうらみのけふの別路。

廿八日。けふはこゝを出たつになれば、去年より、あさ夕かたらひなれたる餘波、やらんかたなうおもふ折しも、あるじより、にうまのはなむけしてよめる。　茂肅

別れては又あふことも片戀の岡へだち行人のつれなさ。

たちかへり又もことゝへ野路山路外か濱風波あらくとも。

たえすたゝおもひおこせよつかろ野の分行道はよし遠くとも。

かくなんありける三くさの歌の返し。

片戀の岡のかげ草ひき結びこよひは夢に人と語らん。

野路山路いとひも波の歸りこん外が濱風吹あるゝとも。

わすれじな遠ざかるとも津刈野にあまた旅ねし草の枕は。

おなじく筆をとりて　　茂幹

人はなど見捨も行かみちのくのおくの浦山花ざかりなる。

といふ歌よめるに返し。

さらぬだに別はうきを咲花に心殘しておくの浦山。

そのふみてのなごりしてかい聞えたる。　　司家子

花に染む匂ひもふかき旅衣なれて別のいとゞ物うき。

餘波なく人は行とも末遠きあふくま川やおもひわたらん。

此ふたくさの返し。

此宿の花になれたる旅衣わかれて袖の香にや偲ばん。

遠からずあふくま川やわたりこんけふの名殘の袖はぬるとも。

おなしむしろに在りて　　比天子

又もとへ霞の衣たちかへる人しときかばうらみあらじを。

とあるかへし。

わかるとも霞の衣又もきてうらめつらしくこゝに語らん。

黑石のあたりまでとて、やをらたちつるに、しげとし、しげもと、近きほとりに送りしてんとて野原のみちゆく。右のかたに常盤、稚松、榊など云ふやかたの見えたる。

もえ出るときはわか松榊葉もやがて青葉にさしまじるらし。

此日山々長閑に、四方のうら〳〵と霞みたるを見て、

今はつかろの春と成けり、と茂肅のいへりけるに、こと國の花はさかりや過ぬらん、とつけしかば、茂幹の、あすはいつこの花や見るらん、となんいへるにつけて、あかぬ春なれにしやとをけふたちて。

かくて德下といふ處の森の下みちにたちて、いでこし水木のやかたのいや遠ざかりたるを、

わかれうき名殘おもへはおそくとくけさ立し方をみる〳〵そゆく。

この神籬のかたはらなる、かなたくみか宿にしりうたげして、　茂肅

いかゝせん又逢春と契おけごしはしもおしき花の名殘は。

といひて、磯めくりなんその頃は、ふたゝび逢はん、かならず道にて、なたがへそ。今は別

德下村

なんといへる時返し。

しばしうき別となれど契おきて又も圓居に花や見なまし。

蒼杜のいそやかたにあらば、又もとひきてなといひて　　　茂幹

浦なみの立行袖を又や見ん外が濱かぜふきもかへさば。

といへりけるに返し。

行春の名殘もうさもかたらはんそとか濱風袖吹れきて。

つきぬなごりにこそとて人々に別れ、二ッ屋といふ所をさして、

ひとつふたつやとの軒はのあらはれて霞みかすまぬみちの遠かた。

新町といふやかたに、いと大なるやのほねばかりにあれて、所々はこぼちちりたるあとも見えて、くづれかゝりたるぬりごめのかたはらなるところに、昔おほえたる櫻のひともとほころびたてる。

盛りなる花しかたらばことゝはんこゝろあるじの植し昔を。

道行人、見たまへ、昔はさかごのゝとみうごたりしが、むげにほろびたる物語をしつゝ、堂の前てふ村も過て境松といふやかたに花咲たる門をさして、人はいづこの花にこゝろしにけむといへるに、しはふきをせり。

さく花の香をとめてこん人もうしとまたて門さしつらく住らし。

黒石に出づ
古面の祟り

黒石になりて、こぞやどりし高田惠民のやどをとへど、たがひたり。ある人云ふ、こぞのふん月のころ、徳兵衞町といふに居る小山とかいへる、らうそくつくりが子が、みけにや、うつゝなきことのみをこそみだれていふを、うからやから、こはいかにと、いやおどろき、あが家に、遠つみおやの世よりもち傳へたる五百年をへたる、あやしの面あり。このとがめにやあらんとこゝろづき、ことしきさらぎ、はつ午の日に、いなりのかんやしろにをさめたりしかば、みだれたるこゝろも、いつとなうすゞしうなりたりしとなん。こは、その面は、いにしへ坂上田村麿、ゐみしらをおひやり給ふたる十二面を、妙見の堂にをさめて法樂ありし。その面今はわづかに殘るときけば、もし、さるおもてにやあらん、見まほしう、神ぬしがもとへとぶらへば、やにあらざることのすべなければ、此かへさ、圓覺寺にすめる融光上人をとはんとて門ちかく行けば、出くる人のいふ。あるじの上人は、こと處にいきて今はあらじとぞ。空しく歸らんと、杉村の風おちて吹たはむも、うけく。

とひよれど人はあらしの櫻花ちりなん色をよそに見なして。

伏見權現にもうでんとて、野際といふやかたを經て田中てふところもすぐるに、

蛙なく野際のあせのひとつ路來れば田中にもゆる苗代。

二雙子村

二雙子の村になりて、そのみやしろにまうでゝ、くすし館山がもとにとぶらへば、このあるじも、みやこに行きてけるよし聞えたれば、ことやどにとひ、やどつきたり。

女鹿澤まで

廿九日。田のなかの、みちもあらざるかたのあせ傳ひに、沖萢といふところの田のなかに九千坊が塚とて、大なる柳の一もと立つを見て、田うちら、をしへたるをしるべに、赤茶といふやかたにいで（天註——赤茶は丹蛇のすみたる故にしかいふといへり、れいの、すむべきを濁り、にごるをすむ、ところの詞くせ也。ある翁の云、赤澤といふべけれど、おくのことばにて、赤ジヤはといふよりあやまれりとこそ。）、女鹿澤の大路に來るほど雨のいたうふりつれば、やがて咲べう梅のありける門に笠やどりしたるまゝ、やどつきたり。

　此宿にものうきあめかさはふれどいとはじいまだ花はさかずて。

けふなん春のくれ行けど、さむさに、花のまだ咲ぬことのねたきこゝろやりに、

　行春をおしみなれたるこゝろ迚また花咲ぬ里ぞ物うき。

花の木どものあまたありといへども、さきやらで、その梢ともわいだめなく。

　ねにかへる思こそすれまた咲かぬ花につれなく春のくるれば。

浪岡の里

卯月朔の日。こゝを出るに、しめひきわたいたるかたに、はつ梅のひとつふたつ咲きたり。

　神籬にうつきのいみをさしそへてけふ手酬らし花のしらゆふ。

きのふの雨もなごりなう晴れて、四方の山々おかしう、みどりに涼しげに、うべ夏のけぢめ

にこそ。浪岡の里になりて、去年雪にふりこめられてやすらひたるやどの、平野何がしと云ふがもとに、ありし情を入ていへば、けふも空のよからず、又雨やふらん、とまれとこそとゞめれ。

二日。水木の近ければ、行人のあるに、ふみつかはしたるかへりごとに、わかれし夜はやどとひわびて、いつこに泊りつらんなどありて、そのおくに　しけもとの、

　おもひやる旅はものうきならはしに草の枕も結びわびしを。

かく聞えたる歌の返し。

　結びわびて露ぞこぼるゝ行くらしやども夏野の草の枕を。

その奥には、ふたくさの歌ありける。　しけとし

　うれしさよまつまもあらで思はずも初ほとゝぎすけふぞ鳴なる。

とぞありつるかへし。

　霍公鳥初音より猶めづらしきけふおとづるゝ人の言の葉。

ゆくりなくたより聞しことの、とかいて　しけ子

　吹さそふ風のたよりにいとゝ猶袖にわか葉の露そこほるゝ。

となんよめるに返し。

ふく風のたより夏野を行袖にわか葉の露のかゝる嬉しさ。

けふは日はしたなり、明てものせよとかたらひくれたり。

三日。金光上人のふるあと見んとて、あるじ平野にいざなはれ、中野のやかたになりて西光菴といふあり。此いほなん、浪岡埼よりうつしたる、遍照山西光寺のふるあとゝおしへぬ。いにしへ北畠顕家の君の遠つみおやにや、浪岡の御所とて、あやしのとのづくりして栄え給ひしいにしへ、金光坊上人すぎやうしありき給ふに、蓬田のいそとかやいふ所の小川の流に、あみたほとけの、みかたしろをえたまひて、あなかしこと墨のたもとにつゝみ、五本松といふあたりを行給ふを（以下缺）

『外濱奇勝』

六月一日
弘前にて

雪賣る子

美奈都企の朔なり。夜邊より此比呂舍吉に來りて、相しりける中井なにかしの屋に在りて、つとめて、けふなん氷室のためしにこそ、雪なせるこほりもち飯に、畠樹のみたけなる、まことのひもとりそへて、たうひてと出したりけれ。

涼しさよ夏といはきのみね近くむかふ氷室の風通ふらし。

雪うる子等、姿ことに、わがせにも馬のせにも、いとひやゝかにおひもて、余所め涼しかるへきやうに見やれど、重荷にや、あせあへるのみそ水無月のしるし也ける。をやみなき雨もひるよりはれて、いはき山のいたゝき、やのうへに、つとあらはれたり。こはおかしなど、屋戸のあるしとかたらふまに、ひは、みなとけぬれど、此もち斗、つゆ、けちもやらぬことゝて、やをらくひけちて、はと、うちわらひて、あるし　　白駒。

恥かしやおとこ世帶の氷餅。

とこそいふめれば、

近江櫻山の櫻

樋口淳美氏の「外が濱」

扇たたんて話るさしくみ。

このやのあるし白駒は、近つあはうみのくに蒲生のこほりに生れて、名たゝる、「あふみなる檜物の里のさくら花それや小春のしるしなるらん。」といふ、ふるきためしにして、蕪漬てふかほりものをものし、はた「鴉ならて佐久良の山の作樂花なみに花咲きしのしからみ。」となん聞へたる櫻の、その山にもともと多かりしかと、盛なる比は此花見んとて、人あまた、畑つものふみしたき、むれ來るをうれへて、はたもりらか斧をくたして、伐のこしたる一もとをも公にめされてけるころ、その實のこほれたるをひろひ、あか遠つおやの實植してけるか家のしりなるそのに生て、年ことの春その花八重に、こと木の花よりもことにひしくと咲て、おもしろき櫻にてなと話りけるに、

世々にさきし人の言葉の花にこそちらて櫻の見まくほしけれ。

四日。むさしくにより來けるくすし、樋口淳美てふ人のとひ來けるに、きのふまみへてかたらひくれしか、このぬし、むさしのつとに、みちゆきふりをかいてける、その楚刀介波万てふ日記をかり見て、なから斗もよみもてゆくころ、そのふみ返したうひてよと、つふねの來りけるに、まだも見まほしけれど、

言の葉の玉をみきりにひろはなん又吹寄よ外か濱風。

西湖の繪に對して

五日。雨のいたくふるけふのつれ〳〵、いかゞ侍らんと、やのちかとなりなりける遠藤直規のもとより、これ見てとて、芙蓉かかいたるふみてののりにまねひて、外濱貞彦といふ人のうつしたる、西湖のつくり画のひとまきなり。あなおかし、これなん東坡居士の、水光瀲灩晴更好、山色朦朧雨亦奇といふくしをやおもひ出られけん、策彦せしのこゝろやりに、雨奇晴好の句をそらんしえてと、たへなるしゐんを作りて、夕くれのたと〳〵しきに、そのみつうみをさくりもてよみけんも、かかるやまのすかた水のたゝすまひの、さん〳〵きさまならんと、まきかへし見る〳〵ゆくほと、をやみなき雨も夕附てはれ行に、

諸越も見まくこゝろをうつし繪にはるゝもよしや雨のふること。

初蟬

六日。こはそもをそかりけるよ、軒はの山に、けふなん蟬のはしめて鳴つるはといふとき、風のさと吹しかは、

軒近くふきをやむまは松風の聲なく蟬の宿そ涼しき。

皐長館にて

七日。水木村に到りて、皐長館の圓居にありて例のこと、

水鷄

さらぬたにいとはやしらむねやの戸を叩く鷄や夜を殘すらん。

夕立

あつさをは余所にへたててふりしきる庭の間垣を夕立の空。

憑戀

末まてと頼むこゝろをたのみにてまたうき人と思ひさためす。

厭戀

吹風の誘ひもやらていとはるる身をうき雲の消やはてなん。

水郷

人はみなまたふしみ山夜をこめて夢はあら田の雞かねの聲。

瑞籬

言の葉のみちの榮へもひろ前にいのれは守る神のみつかき。

刀左の水海の見まほしく、いて、そこにいかまほしとかたらひて（天註――等散は十三ンの湖をいふ。十あまり三の川なんいりく。さりけれはその名を十三（とさ）といふにこそ。）

十一日。午の貝ふくころ擧長館を出たつに、あるし　茂肅

浦山にあかて照にも冴るにも。とそありけるに、

夏と冬とのうさおもひやれ。

又も、くま／＼めくりてけるかとて、　司家子

しきしまの道のおくまてふみわけて玉しひろはぬ處やはある。

かくなん聞へたる歌の返し。

　年月をふみこそ迷へしきしまのみちの奥とてはてしなけれは。

とに出て、あつさたへかたくたたすみ、遠さかる屋形をかへり見て、

　餘波おれそおとに水木のかけふかく出こし宿や涼しかるらん。

水鷄といふ村に入て、くらき森のしたみちをわくる。

　生ひしけるかけいやくらき草の戸はひるも鴞の里即らし。

富柳、福館（天註——福館はもと柵の名なり、そのしからみのあと樽澤村のにしにあり。）、畑中などいふ村を過るに、水ふかからぬ沼やうのほとりに、かつみ、いや生ひしけるを、女の童あまた、これからんとてうち群れり。刈てなににするぞと見れば、加都岐久左の白味をくひぬとぞ、とへはいらへたる。雨なんふりこんとて、ぬぎ捨たる、みじかき麻の衣につゝみ去りぬ。

　花かつみかつおりたちて刈る子らの包も淺き麻のさころも。

樽澤に來到るほと、白雨きほひふりすさむに、あしとく、ある神ぬしか屋に入て笠やどりしたる軒近う、山澤の水とよみ流たり。

　露雫木々のしたたるさはのへの水いやふかく雨にまさなん。

山崎氏奇遇

夕顔堰の金恒徳氏

此あまはれにとて好野田、石澤になりて、春見し梅も、いまたいろつくけちめもなう、垣根はした折るはかりに、雪をあさむく卯の花のやゝさかりなるに、ふとむぎ刈るはたけあり。こや、みな月の空に、うの花の雪を見、麥秋を見んことの、あやしきまてめつらしかりき。かくて高埜村に日もさしかたふけは、やと、もとむるかたもやとおもふ折しも、馬にて過るくすしあり。たそそと近つけば、春見へたる、館腰のやかたなりける山崎顯貞といふにこそあなれ。あな久しとかたらひつれて夕顔堰のやかたになれは、こよひはこゝに宿りねとて、あるしは金恒德といふぬしのやに入り、月のまとゐになにくれかたらひ、更て入にしころ、くら〳〵の路を顯貞はいにき。

十二日。風のこゝちせりけるに、あるし、けふはかりはとゝめけるにまかせて、此日もおなしもとにくれたり。

涼しさよ垣の夕顔せき入れしいさらゐの水音も聞へて。

十三日。かせ、いとおもきこゝちにおほゆれは、えいてたゝす。くすりなめて、けふも、おなしあるしの情あさからす。

十四日。三四日こゝに在りて、あす、あさてに出立んといへは、あるし。

言の葉の露も涼しきかたらひにあかていく夜か人をとゝめん。

とそよめる。こたへを、

あかていく夜ぬるも涼しくかたらひぬ人のこと葉の露の情に。

十七日。このころそこなひつる、こゝちもやよければ、けふなん、このゆふがほせきをたちいでんといふとき、恒徳の云、七里長濱なん行めぐりなば、見ると見るてふおかしきところ〳〵に、おかしきなかめやそへ侍らんと、さてよめる。

長濱をふみてまさこのかず〳〵にこと葉の玉や人のひろはん。

かくなんありけり。この返し。

言の葉にえやはをよひもなかはまをふみて眞砂に行つかれなむ。

ふたゝひ、あるしつねのりのいへらく、行なん深浦の沖邊、いそ山など、あはれいやまさりてやあらんとて、

こゝろさし世にふか浦の舟出せは人やひろはん沖の珠かね。

といふ歌のこころは、此あたりにて、もはら、ゆくりなうさちなることあれば、それをこはれ幸ひにあふともいひ、又不可宇良の沖にて、たまがね拾ひたるほどのさひはひなるよなど、たぐへていふことのありける。その諺を、かくそいひたりける。なかむかしの頃、そこの濱邊に泊りもとめたる大船のいかり縄にかゝりて、はからすも珊瑚のたまのえを根こしえた

五林平

原子村

神山を過ぎ

るためしあれは、たれも〳〵いふとなん聞て、此歌の返し。

　浦の名のふかきなさけの言の葉や沖の珠かね得たるおもひに。

あるしの次郎仲本か聞へたる　聲名既配極、成徳勢通天、幽室星辰鎖、詞章日月縣、老重龜鶴壽、去世彩霞仙、曾駭徒北地、五雲空裏纏といふことの聞へしかは、韻末のもしを、ひとくさのすゑにおきて、

　をよひなき奥の浦山あたなみのあたによせてを行めくりなん。

とかいやり、五林平に來けり、誰れの五倫塔ならん畠中にあれは村の名とはせりける。七段坂のさかなかに、小高き所のこなたへ見ゆるを梵字山とをしゆ、そのかみの寺あとゝなん。そなたに松嵢山の見やられて、持籠澤、羽木澤、原子といふ村になりぬ。このめてに、七段阪越へて青森に通ふのみちあり。はた、原子平内兵衛のふる柵とて、ちいさき庵のあたりとそかたる。長老長峯といふなん見へたり、そこもむかしの寺あとにて、その寺いま秋田路にうつしたるとか。杉羽立といふ村あとを過て、長橋とて、むかしはかけけん、今は名のみに、池水のよこたへて見へ渡る。かくてゆく〳〵おもふことを、神山といふところに來て、村はしにある井杭の柳にかいつくる。（天註――神山右京之介の古柵のあととて里なかに在り。）

　草たかみ野越へはらこへわけ來れはそのかみやまの麓也けり。

夕たちやしてんとく／＼といふとき、みちのめて近く、いとくらく眞山權現をまつる堂のありける。その森の、日のかけたに露もらぬまて生ひしけりたる、笠杜といふあり。

白雨のふらはふらなんふりもこはこの笠もりやさしてたのまん。

笠杜と長者森山とのあはひより、若山といふ村も山もはつかに見へて、雲かつ埋ぬ。松の木村をへて、原中に金山(かねやま)となんいふ村の、家七八斗ある處になかやとして平(ひらひ) 町村をへて、ほともあらて飯詰の里にさし入る。右のかた岨の木の中に七面の堂あり、禁に、ほくゑきやうよむ聲の、こかくれに聞へたるは庵にや寺にや。こなたに飯成のほくらやあらん、茂る岡邊の木くさの末に、朱なる鳥居そ見へたる。飯塚といふかあなるところは、みな、いにしへの柵のあとなりけるよし。ひかへ／＼て馬追ふ子の語らひを聞つつ、岩崎を余所に中柏木村にかかり萩野阪を越る。

うへ、名たゝる處ならん、はつかはかゝり咲初たる萩の多かりければ、

秋もやゝ近つきぬらし岡の邊のはきのさかりの見まくほしさよ。

山きはの雲ふきいさなはれゆく、鹿瀬てふ村を見やりて、

夕立の雲ふきさそひ山かせのよそになりても袖の涼しさ。

小田河をわたる。小田川邑、己來(きらいち)市、埜崎邑、こはみな、おなし軒つらなりたるとなん。喜良市につきたり。村近う鹿子山といふあり、そこに楊梅のことくこかねの光したる石あり、人

かのこ石

金木の里

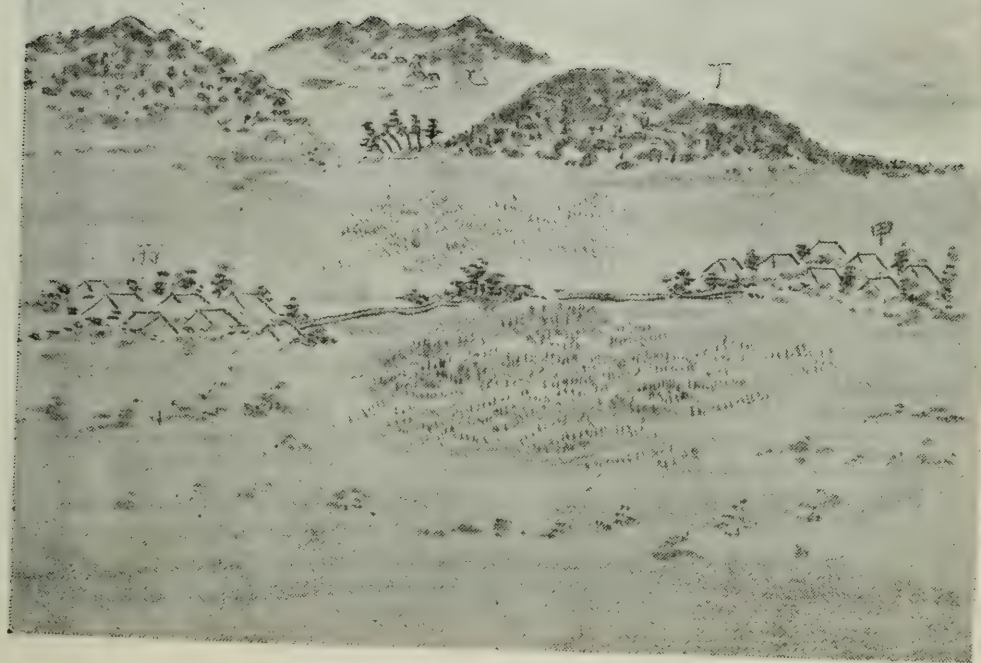
の採しを見れは蜜栗子といふものにや。（天註――蜜栗子生川廣江浙金坑中狀如蛇黄而有刺上有金線纏之色紫褐亦無名異之類也。）此山に、むかし吉良以知といへる蝦夷人のすみて、みねも尾も、加能古てふ、こよなうめてたき石の大なるかありしを、をのれもて島渡していにき。かれか住たる山をきらいちとしかいひて、大倉か嶽と蚊子山とのあはひに高からすして猶あり。その蚊子石のありたりし頃は、この山河も瀬ひろく、鮭鱒なとのほりこしかとも、その石さり去てのちは、いろくすもさらによりこす。鹿の子石なんうちくたいて、松前の島やまのところ〳〵に投すててき。さりけれはその島に、さけ、ますのいま多けんゆへなと、をさなき物語を人ことにせり。はた、加能古は草の名也けり、かのこ石もまれ〳〵に、いまもひろふことありきなと。かくて岡田なにかしといふ、むらをさかもとに宿かる。

十八日。歸來地をいてて野崎をさくるに、鹿兒山を見つゝ、

　ふしのねの雪にたくへて涼しさよ山はかのこの名にしおふれは。

河にそひくれは熊野の林を見遠さかるほと、吉良市川、蚊の子川ひとつになかるゝ水を橋より渡て、金木の里にかついたりて、こゝにうつしまつる八幡のみやところは、ゆへありと聞てぬさ奉れは、大藏の松とて、をかみとのゝ軒おほひてたてり。そのよしをとへは、むかしこの國の守とやらんのおほんはらからの君、おほくらと聞へ給ふか、みつから植給ふたると

飯詰山のかた
甲 いなりの祠
乙 七面堂

甲　神山村
丙　松の木むら
丁　笠杜
乙　つゝ山むら
戊　長者森

いらふ。ぬかつきはてて、

　涼しさよあまつかな木のもと末をきりてみそきや近付ぬらむ。

とはかりありて休らへまほしく、ほふり子佐々木何かしといふか屋戸に入て、しはしといへは、あるし、きよけなる皿にこゝろふとゐりいたし、湯つけなといたしけるに、時うつるまてありてあつさわするゝこころ、ねもころにありつる情の、いやしてたち別れ、野原のみちはる〳〵とわけくる右のかたに、木のふかからす生ひ茂りておちくぼかなる處に、しゝのたき湯といふあり。そのもとは、大なるうつほ木にあら熊のすみける、此熊の手を火矢にはちかれて、かゝる泉に手をひちひちして、日あらすいゆるにや、いきほひもたけうふるまひたりけるとなん。かかるよしを聞ときく人は、みなくみ見て、ひやゝかなれは、ふねの湯あひとのゝごとにつくりて、いまも疥癬(かさ)、あるはたゞれ目、きり疵のいゆるこそのすみやかなりとて、身にやまうなき人までもゆあひすれは、われもけふの暑さ避まく、ひねもす浴して、日のかたふくころ河倉村に到り、觀音林といふ杜に入ぬ。彌陀、藥師、觀世音のみかたしろを、山賤や斧もて造りたりけん、これを神のやうにぬさとり、しめ曳たるは、佛をなへて神と祭る、みちのおくのならはしこそ。こや、しかすかに、あか日のもとの光ならめ。みまへに何の木ならん、もみちたる。

河倉の三箇田氏
鹽鱸に蓴菜

鍋流し河

源常森

秋は猶こゝにみよとかわくらはに染て紅葉の色にいつらん。

此村をさ三箇田といふかもとに、やとしもとめたり。

十九日。しほつけの鱸に、きのふ田井のほとりに採たるとて、蓴菜のあはせしていたしぬ。かく、みな月のつちのちに、わきてものしけるなと。

われもさはぬなはすゝきにふる里をおもひし人をおもひこそやれ。

あしたよりあつさにえたへで、ひた、ゆあひして、かはくらに來て暮たり。

二十日。つとめて、きのふの暑さにやいやまさなん、日いよゝてりて、身にいたつきやゐ侍らんなと、しゐてとゝめぬれは、けふも、かの野良なる湯舟に浴して夕附行ころ、河倉に歸いなんと鍋流し河に來かかるほと、萩、藤袴、女郎花なとの、秋待かほにほころひ初るけしきいとと涼しく、右の細路に行となくさし入は、しりより來る男さきにたちて、まだもこそいきね、見すべきところのあり。しはし行ていつこといへば、たゝ、あしこあしこと手さしして、その處も過て又あしこ〳〵とて、はる〳〵遠う入て目釋迦の澤なといふもへて、田のなかに源常森とて、岡邊のことき大塚のひとつあり。是なん、浪岡のひとゝらのいふることに、つゆ似たる物話をし、はた、ある人の下摺女、つみありてうたれたるをこゝに埋み、つかしたれは、としとしつちもいと高うごもち、木も茂り合たるいにしへを語りて、下女盛といふ

近くの澤々

河倉を出て

大蛇物語

らんことにこそあなれなど。神とや齋ひたりけん、ほくらもありたりけるやらん、朽たる扉、折たる鳥居の柱などの、くち殘りて土の中に埋れたり。又このほかに見るへき處もやあらんかとといへば、こたへて、むかしは涌たりけんあぶらの澤といふ澤あり、野原の澤、かねの澤、やけげど、さびつの澤、惣右衛門澤、をのりの澤などいふ處のひしくとつついたり。行さふらふかなと、さもあらぬことを、われならて、かゝる山のくまはゝ、外にしるべう人こそあらめかほに語り歸りき。

廿一日。朝草刈るあら雄らか馬ひきつれ、うたひこちて家路近う歸り來るころ、あつさいかならんと思ひやりて村をいづ。

　あさ露に沾れしたもとやかはくらん秣かるおよけふのあつさは。

あるし、近きあたりまてとて送り出つ。大澤内（ない）のやかたを路の左に見なして、水海のこさなる大池の溏を通る。いにし春の頃、此水のほとりにて牛の聲してほゆるものあれは、聞ときく人あやしみて通らさりしか、けにやありけん、近き日のことになん、大なるおろちの、しけりたる柳にのほりわたかまりふして、それか、いひきしたり。見る人は、身の毛、さといよたち、すゞろさむく、にげ歸りてはゑやみし、あるは、わらはやみせしものありきと人のかたるを聞て、その柳のもとにたたすみ、此大なる柳原なから、さるもののさまたけもあらて、こゝ

十三の砂山

稲蟲を除く

中里に泊る

ろおちゐて、風さへことに涼しとて、三ケ田に別れなんといふとき、西ひんかしのあはひに遠う見やる、みしかき、まはにの山は、いつこの、名は何とかいふとこふ。しりよりあら馬にむちして、とく走せ過るもの、「十三(とさ)のすな山米ならよかろ、のぼる大船人(ベンザイシュ)にやたゝつませよ。」と、かれか、しはがれこゑに歌うたふに、それとはしりぬ。みかだに別れて波知満武邑、深江田(ふこうた)村をくるほと、としふる林に入て、やはたのおほん神のみまへを行すちなり。過こし村名は、この八幡をさしていふにこそあらめ、さりけれはゆへもあらん。木々もとしふりたてれは、そのもるかみぬしにとへと、こたへせされはすへなう。このもりちやかて見さくるほと、田つらのみちをゆけば、しはくてふむし、田毎のいなぐきについたるをさくとて、はゝきにあふらぬりてこれを田の面にうちながし、あるは網なとひくやうに、長縄のもと末をふたりかとり、あをうなはらを行やうに、稲葉の波にうちかけてひきありくを見る〳〵到る。羽立といふ村よりゆんてのかたに五倫といふやかたあり、そこは寺のあともしられて、たか五倫塔ならんありて、むかし榮へたるもの語ありとそ。小池の堤をゆけば中里とて、いさゝかにきはゝしきところありける。

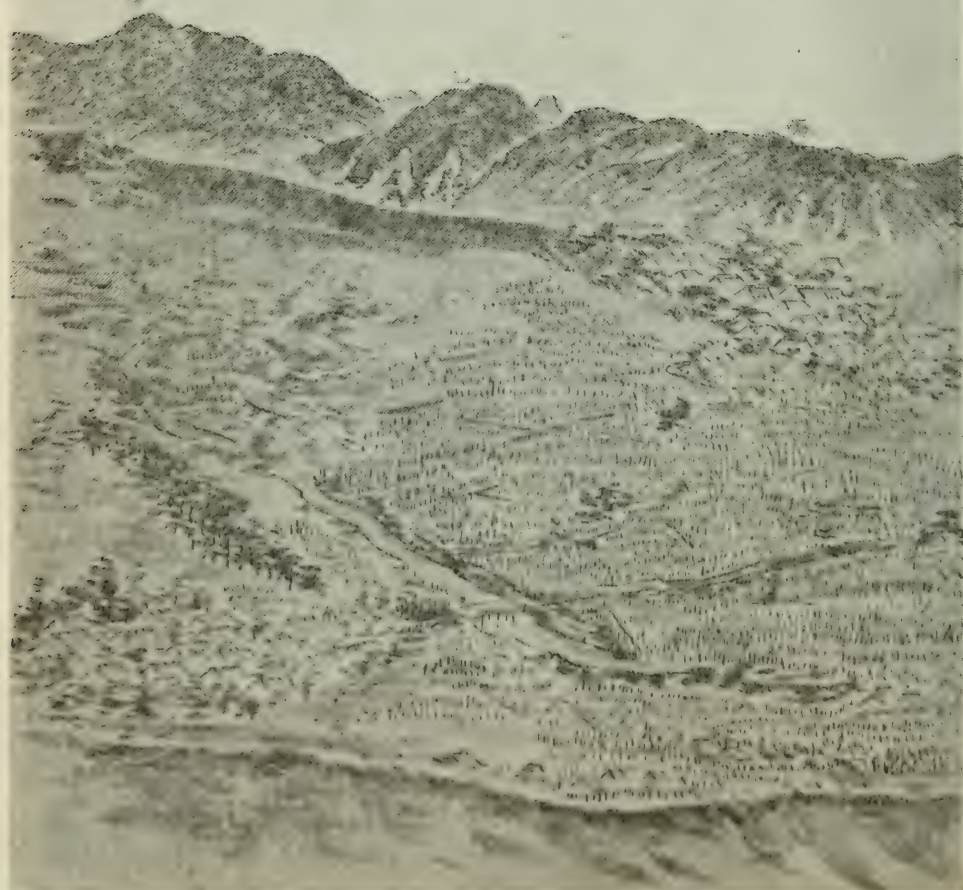
　　てらす日のかけは軒端にかくろへとなかなかさとのあつさをぞしる。

人のふみあつらへしかは加藤なにかしとかたらひ、米家莊太郎といふあき人の屋戸に入て

喜良市村
金木村
大倉嶽

観音林
源常杜
鍋流川

戰の眞似をして法樂す

薄市村

かたらひて、あつさ露斗わすれたるさへあるに、けふは暑さのわきてたへかたし、此夜あけなば、とくものしてなと情ありけに聞へしかは、休らひてくれて、ふしねといひけるとき、

　行なやみ野邊の中里こよひねてあすはいつこに草枕せん。

廿二日。あしたのま出たつ。このなか里のはしに岩井川とて、ちいさき河の、きよくなかるゝほとりにある一家の軒近うよりて、

　夏そともえこそいは井の河のへにすみける宿の涼しかるらめ。

袴腰山を見遠さかりて尾別邑にたてる観世音の御堂の前を過るほと、霍公鳥のこゝに鳴、かしこに聞へて、おのかさつきの空かとたどる斗。おなし高根といふ村を上中下と行ほど、大日如來を山のうへにすへたる。此堂のしたに、よさか斗の木の、ひろほこのやうなるものあまたあり。是なん田植はつるころほひ、村の稚雄(わかぜ)ら集りて、たたかひのまねして法樂し奉りたりしを、こゝになんをさめおきたりとか。登差の湖や見やらるゝとうかゝへと、木々のいやふかうしけりて見やりわふるをりしも、子規いよゝ鳴たり。

　時鳥なれもあつさやいとふらん名のる高ねを木かくれてけり。

くたりて森のしたみちにいれば、やはたのかんみやしろあり。こゝより、臼井地といふ村中の田の澤川を橋よりわたりて、そはたつたか山のすゑに、観世音をおかめまつる。梺のほれ

昆布懸の林

相内の三輪氏

春品寺跡

ば刀舍の水海、このもかのもの木の中より見やりていと涼し。過來し中里に薄市山弘法寺といふ寺のありたりしは、この于須以知よりやうつしけん、寺のあとゝおほしき處あり。はる〳〵と行、はやしを昆布懸の林といふ。いにしへこの邊まて刈えて、木々にかけてほしたるいはれあり。なかめかけたる林とて、行みちのなか〳〵しさもやゝ過て今泉といふ村に來れは、山路ゆくみちあり、潟つらを行みちあり。この、かたはたを涼しくつたふに、水のうへ遠う、岩木山を、したゞみのなりに見やりて、七比良山の麓もすきて、中山なとも來はてて赤坂をくたる。南のかたに大野とてひろ野あり、そこに、誰ならんすみつといふふる柵のあとあり。神明の林にぬさとり橋わたれは相内（あいうち）の里につきて、三輪なにかしといふ、酒うるかもとに宿からんとてうち戯れて、

さかとののしるしそこれも杉立る門を三輪とし尋ね來にけり。

廿三日。あないをたのみ太田山なと右に見て、阿倍のやからのふる館のあとありと聞て、見にいなん。はた、そこをむかし春品寺といひて、いま觀音の堂あれは、いて登りてんとて、人の屋のしりよりしてゆくに庵あり。延文なと、ふるき石のそとはたてり。鳥居に入りては、常陸沼とて池のあれと、ゆへをたにしらぬあないさいたち、をのかこしなる鎌して高草なきはらひて、遠からす、湯の澤とて湯のわきつるところ見へたり。その澤奥に、山王坊とて寺

弘智法印の遺蹟

白太鼓か沼

五月鳥子

はるひない

のあともありき。そこに、世に名聞へたる弘智法印すみ給ひて、くうつきてのち、越のうしろ國野積といふ磯山にをこなひて、たうひたりける木の實、草の實をたにたちて、庵の柱に、「墨繪にかきし松風の音。」といふ一くさの言のはを殘して、岩阪といふところにて、をはりをとり給ふたるか、海雲山西性寺に、いけるかことく、いまもそのから猶在り。あはれ此里にや生れ給ひたりけん、はた山王坊にやまねひし給ひたらんか。かの澤のそこに、としふる石碑ともまろひ埋れたりしを近き世に、此里のところ〴〵にもてはこひ建しなさかたり、左禰宇知沼てふ、又の名を白太鼓か沼とも雄沼ともいひて、湖水のことく大なるかあり。その白體子か身を投たるより名におへり。その女の、みめことからのよかりつるさ聞傳へて、田屋の弘誓といふ男、世になき人をけそうししたひて、われもさ、身をしつめたらましかはとて身まかりし沼のいはれは、秋田路に在る、田澤の潟とおなしうかたるを聞つゝわけ行に、時鳥のこゑたかうなけば、あない、六月も五月鳥子かさかぶはと、ふりあふきていふ。こは、杜鵑を五月鳥といふことの、四手の田長に通ひおかしけれは、かれかいふ辭について、六月も五月鳥子かさかふなり　四手の田長や田草ひくらん、とつけたるはいかにといへは、あない、かたはらいたけに口のうちにてすし返して、わらふこと限なし。かくて春陽澤になりて、木々のくらき中に入て、苺よりほそくつたふを蛼の瀧とて、手あらひ、口そゝきてとしめ

す。（天註――波留比南以はもと蝦夷人言語にして、后人春品寺といふ寺を建てハルシナジといふ。此ほろびてける寺あと猶あり。）

夏の日のかけももりこぬ木々ふかくしける太山の瀧の涼しさ。

あないもともに手にうけて、あな涼しとむすふ。

苔つたふ岩間の清水手にうけてまたこぬ秋の袖にしらるゝ。

安倍館の跡

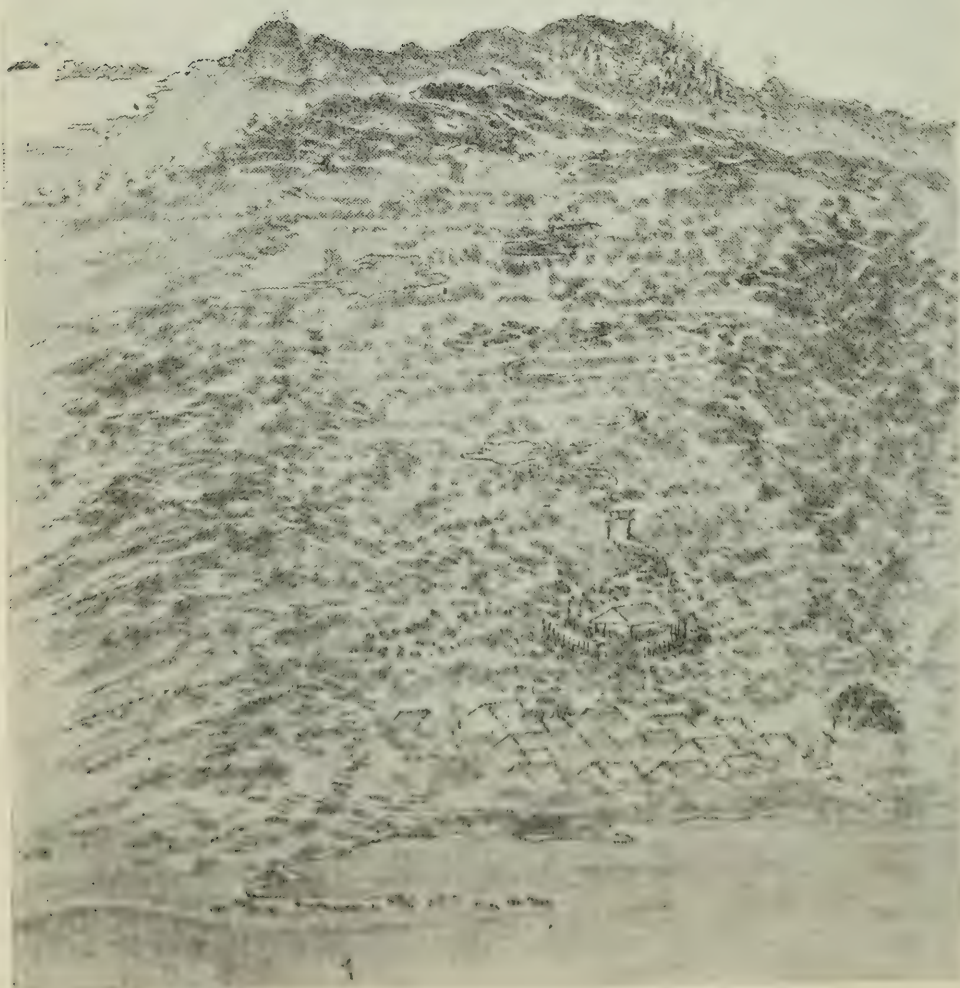
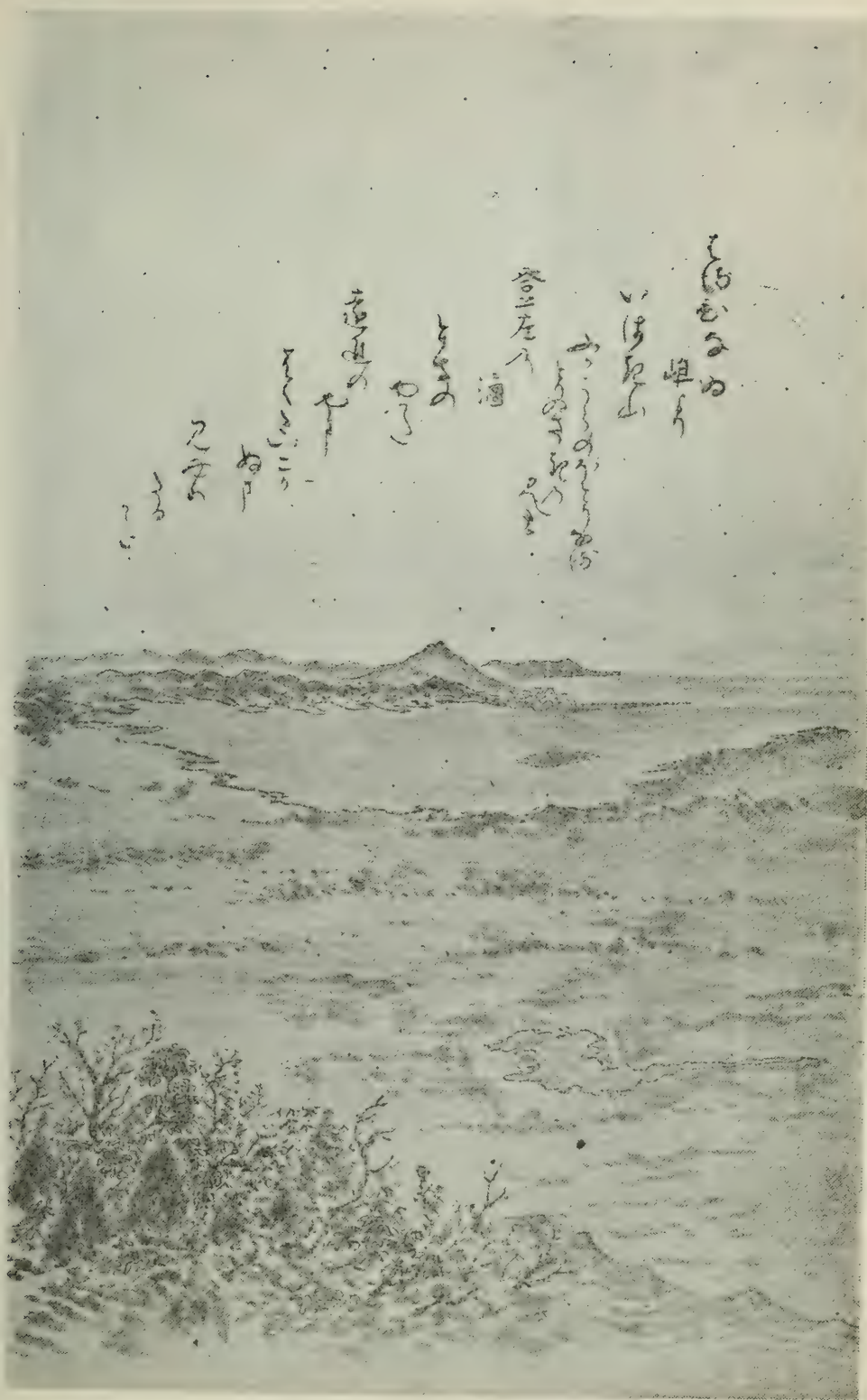
やをら、圓通大士のみまへに至る。此山おくに入て、ふる城のありしあと見んといへと（天註――この波流比南以の山奥に安倍館といふあり、安日の末、安東のかまへたりしむかしのあとにてやあらんかし。）、夏は草木の枝さしおほひて、さはかりふかき谷にふたかれば、たゝ此谷かげの草の中に在と、こゝろあてに見て、こなたによちて高草なきやり、木々のなかより、岩木山のなから斗、ひきなかれたる南の雲のうちよりあらはれ、ひんかしは太倉か嵩、襟腰山、西に遠う深浦のこなたなる雞栖碕、近きは母夜、或は藥師なかね、刀舍のやかたは貝なとをふせたらんかことく、湖は藍うち流したるやうなれは、うへ里の名ともよひつらんかしと、あないに戯れていへばわらふ。そゝ此相内や、そのいにしへ安倍比羅夫、ゑみしらのおこりたるをうたんとてむかひ給ふるに、いくさのいさおしもさらにあらさなるとき、安東といふもの比羅夫にまみへ奉りていふ。あか遠つおやは長髄彦のせうと、濱安東浦を知る所とせし安日か、遠き末のうまこなり。あふきねかはくは、とをつおやの罪なん今ゆるしたうばりたらば、わかいのちを君にさゝげて、蝦夷らをうちて平む。比羅夫か

山上の展望

安倍氏由來

神明の祠

「十三往來」

處々地名に殘る

海岸に出て

くさ帝に奏し奉り、安東を先として つひにゑみしにうちかち、そのいさおしをめでて安倍氏をあたへ、かれにゆかりのよしみして比羅夫都に歸り給へは、安東の家を安倍と名のり、はた上祖の安日とちいひ傳ふ。はるかに時世もおしへたたりて、又、ゑみしらかいくさをいたしたるに、安東の末の子致東といへるかこれをうちたひらけぬ。その功いくはくならんと將軍になし給ふ。一條院の御宇に蝦夷又襲ひ來るに、致東か末國東、島わたりして松前にいたり、かみみちのおく、しもみちよりあまたの軍いたして戰ひかちて、魁首四人を虜として歸り來ぬ。國東の子頻良、その子安東太郎賴良といふ名を賴時とあらためて、われと安倍將軍のなのりして、みちのおく、いてはの、ふたくにのつかさとなりて、男八人女二人、十ところの子をもちてけり。遠きいにしへ此あたりに、その世には家居おほく榮へたりけん、わら心のもてあそぶ十三往來といふ册子に、近き世まて、都にたくふはかり里とみて、にきはゝしかりしよしをかいたり。安東も此あたりに住て、そのやからもいと多く安倍氏のたくひひろけれは、此あたりをさして、安日氏とやもはらいひつらんを、今の世に相內とや人のいふらんかし。松前の島に、上國、下國といふ名の西磯東磯に在るは、上道、下道にやあらんか。南部路に安東といへる港あり（天註——南部田名部の邊、大平、安東といふ入江の港あり、今は安渡と文字かいかふると見へたり。）、頻良の子安東やすめりけん、安東太郎堯勢やすみかしたりけんと、ひとりおもひて麓にくたり、たかくさのなかを左におし

權現崎
小泊の港
附近の名處

わけて、空川（から）の澤てふほとりよりあなひにわかれて、行すちは、おこり火なとふむこゝちに、日に焼たる砂子の中に、はきさし入るつらさに、とく過かてに、しほかまのあたりにかげもとめ、うしほに足をひたし、權現岬、蝦夷の沖邊の大島、小嶋、笏島なとの、かもめの波にゆられありくかと、行にしたがひて、ところもかはりては遠う近う見やられたり。此浦の名をとへは磯松といらふれと、まつこそあらね。

大嶋や小島見るめのいと涼し磯松風の吹となけれと。

さし出たる尾山を權現碕といひ、あるは權現か鼻といふ。（天註――小泊の邊下前といふところより權現崎は一里はかりさし出たり、此崎を尾山といひ又御山といひ、はた、こんけんがはなともいひて神あり、飛龍こんげんといふ。此さきにあやしのけものすみぬ。ある人の、猿猴といふたくひならんといへり。）岩山の形の獅子頭によく似たれば、獅子頭をさしてこんけんといへる、みちのくふりについて、うはそくらや、そこやまつりたりけん、飛龍權現といふ神の祠をたつといへり。中嶋、母夜山のふもとをめくりて脇本のやかたをへて、藥師なかねの禁をへて（天註――藥師長峯といふ禁にやくしの小舍、崎にさし出てあれはしかいふ。）、海邊しはし行てくづれ山をくだり、めおと石をよちて、津輕阪（天註――津輕坂、青盛より弘前へ行の山坂をおなし名によべり。）をおりのほりして小泊のみなとにかつ到ぬ。こゝを、紀のくにの、那智の大泊村にたくへてける小泊といふもの話そありける。

廿四日。いまた、とはくらきよりものして、この浦に在る七ツ瀧といふなん見に行とていつ

れば、かぎりもなきあをうなはらの沖行ふねの、ほから／＼と、いそやまのそかひよりさしいつる日かけに、蝦夷の千島のにほひわたりて、いとちかくそ見わたさるゝ。磯輪つたひ七ッ石碕、六澤ノ岬、靑石ノ崎、屋形石なと、しほかまふたつ過て、くろき岩の高からず、ひきからず、それに麻苧なとのみたれかゝりたらんかことく、なゝきだに落瀧つ、あらきしほせに流れいづ。

夏引の手ひきの糸の七はかりかけてを落る瀧の涼しさ。

水の音はげしからず、さら／＼とおつるおもしろさ。行かひこゝにしげうもあらねど、鹽木つけはこぶ牛ひきめぐり、三厩越るすぎやう者、初苅のゑひすめおひもて行あき人など、まれ／＼にかよひ、漁のわざすなる人々も行ぬ。

岩つたふなゝつ瀧浪いその波眞袖涼しく通ふ浦人。

片輕石といふ處を過て、山路遠くわけては左爾宇志ごへといふ、こは宇天都のこなたに出るみちも近く見てかへる。（天註――左耳宇志、宇天通は夷辭也、今世算用師とかき烏鐵とかく。）このあたり船にて、うてつめぐれば、千支穴、胡鷰（つばめ）岬（さき）、珊瑚の洋なと見ところのありといへど（天註――燕碕にはあまとりすめり、海人丸つばくらといへり。珊瑚の沖、海のいとふかくして珊瑚樹生ふるよし、しほとる翁のいへり。）、舟しあらねば行すへなう、おなしいそわめぐり來て、暑さにあゆみかうじて、ひるつかた、けさ出し宿につきぬ。けにやあらん行かひの路四里にたれりとか。日さな

餓死者法要

下䄫に泊る

かのあつさに休らひて、夕つけていてたてとて宿のあるしのいへと、やをら出たつに春洞庵といへる禪林あり、西願寺といふ一向あり、無緣山海滿寺といふ淨土あり。海靜山正行寺といふほくゑきやうよむ寺にて、十とせあまり三とせのころほひ、世中やはしかりしとし飢死たるものらか、なきたまさふらふ法の行ひすとて、うなのわに鯨も聞おどろくばかり、いそ近く銅鑼うちならしありくを聞て、浦人みなまうてぬ。此港をいさゝか離れて、水の間といふところより、海邊を左にいと深く澤にわき入るものあり。いつこに行やとゝへば、下䄫(したまへ)といふなる、かくれ里のあるに行さふらふといらふるに、われも見なんとかれかゆくしりについて行ば、いそ山たかく木茂りて、赤倉か嶽といふをおびてくたる九折にたゝすみて、谷ぞこにのぞめば、あら海につらなりて畑木々の間に見へ、家居もところ〳〵にあらはれける。遠きいはきね、近き刀舍(とさ)のみなとべなど見やりたるおかしさに、さばかりありてくたり、赤倉の麓に、ふかき水のはかりもしらぬ大池をなかにへたてて、はたちはかりの家を、岨谷ともいはすたてかさねて、夏のかふこやしなふとて桑折りありき、いさなく粟畑つくり柴とりて、磯につるわさなん、童よりしならひたり。

　汧につりあれに木こらん山のした前に海あり海士の家とて。

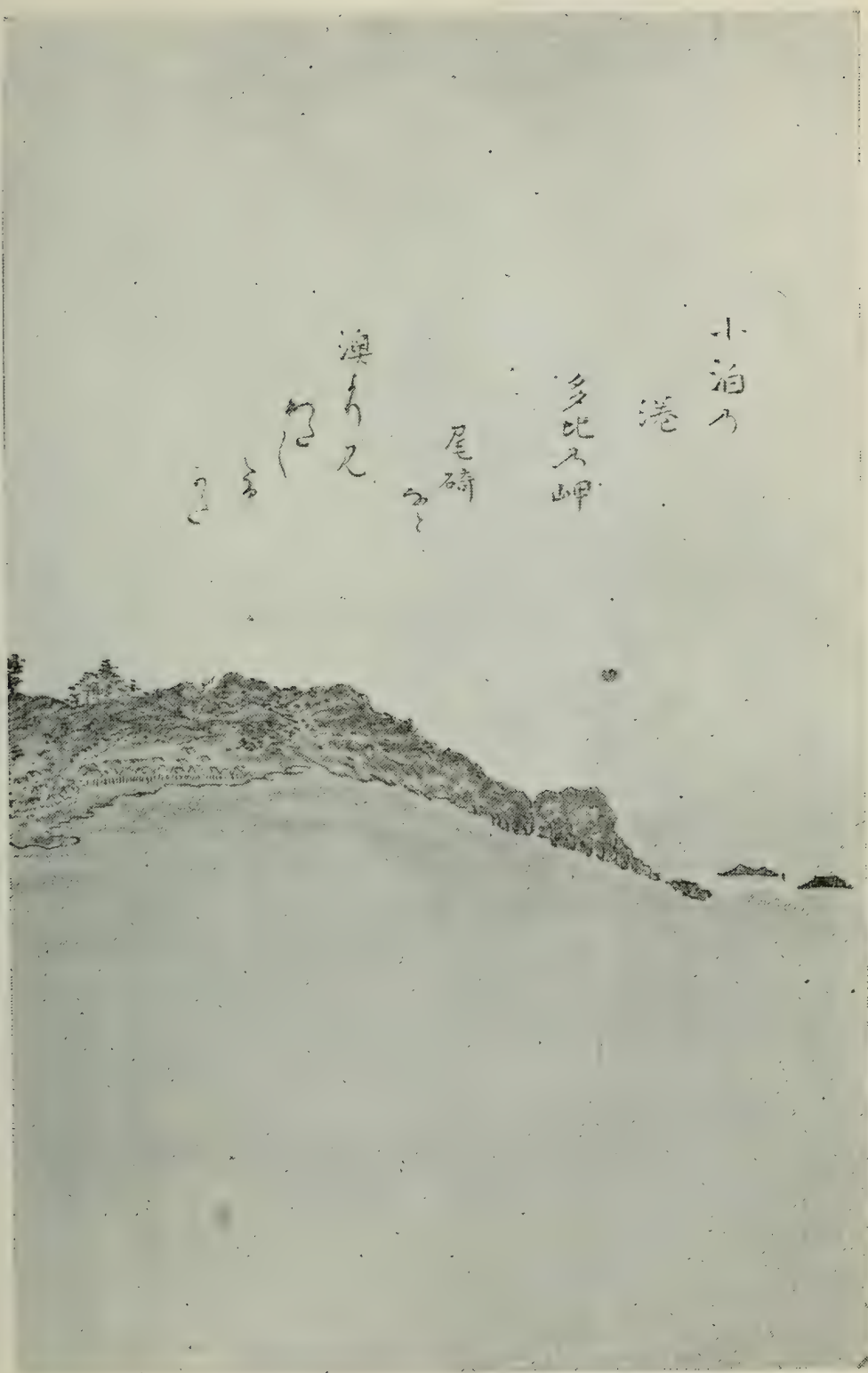
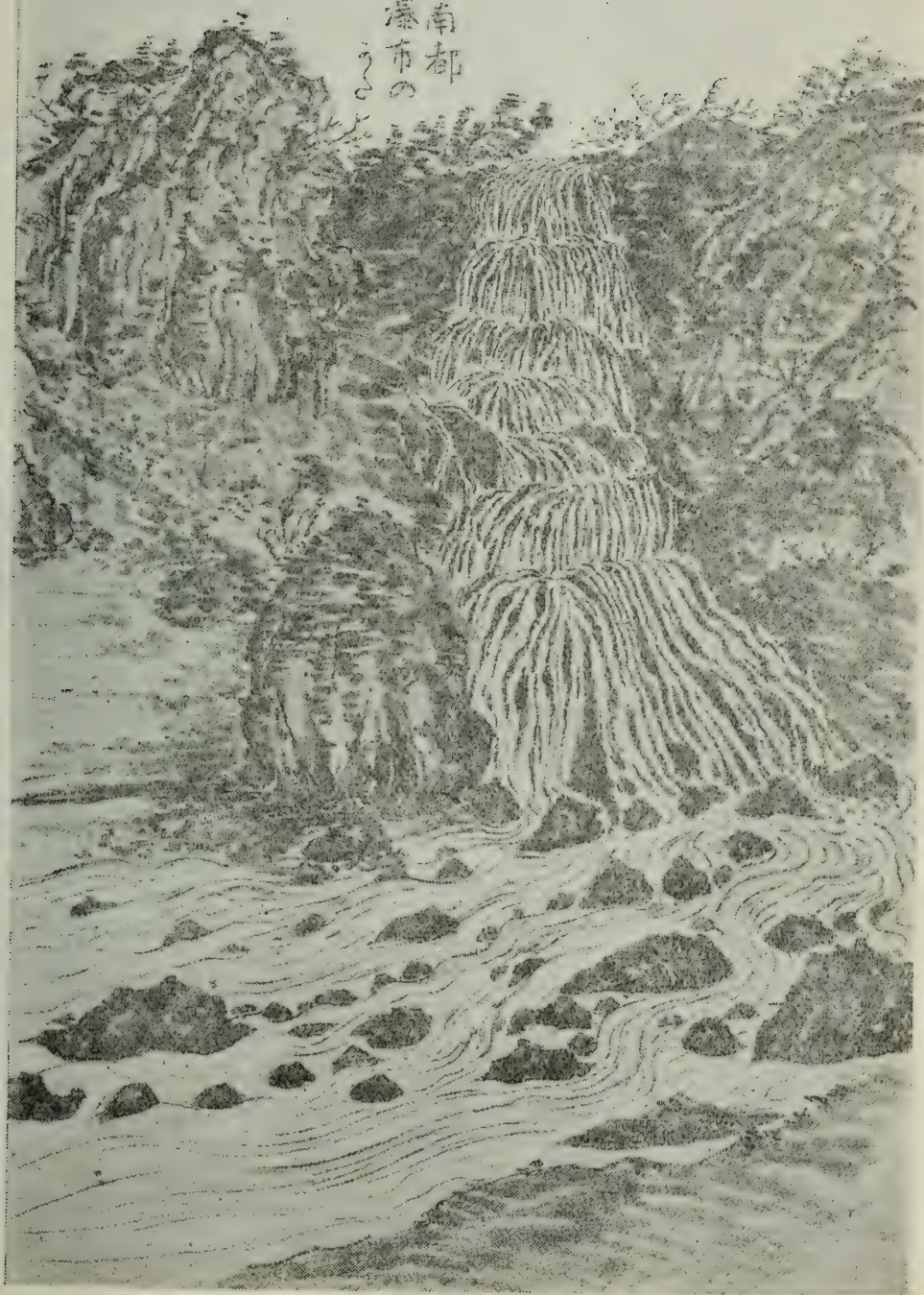
けふは日はしたなり、ことに海のけしきも見まほしく宿もからはやといへは、一夜はかりは

小泊乃湊
多比乃岬
尾崎

外濱奇勝

那南都瀑布のうつし

岩々島々

車かぢ

とて、泉郎のをさならんゆるしぬ。粟ましりのいひに水麻のしほつけしてすゝめければ、

あきならてあはれそみつる夕まくれ海士の釣舟沖の遠島。

廿五日。きのふのかうしにや、あつきはまちのつかれにや、こゝちそこなひたればいてたゝす。磯邊ちかく出見れは、小舟のともつなさいて法師石、多都万知、須加志岩、太天以波、北嶋、袁具都禮、粉濱、樋乃口、海狗穴、中崎、鵜乃嶋、赤岩、經ヶ島、登志也宇乃波万、宇波志万、阿差宇奈爲、於保万、美豆能滿といふ崎ともをへて小泊に行とて、車緘かいたてて榜去ぬ。見やる立侯とは、泙にはつりしてんとてまつ此巖に立て、風はいつこよりかふきくらんと四方やもを見やり、又魚のよりくを見き。はた、出こし吾男のおそきなど、海士のめの、波にぬれたちてまつ名にやとおもふをりしも、舟のこゝら、さふやうにこのいそをさしてこきくるに

礒に生ふるわかめやおもふ涯の浪たちまちこゝに歸る釣舟。

布都知徹（天註――法師ならん坊主岩といふべきを、ボウヅめといふよりよこなまりてブッチべといふ名ありと。）、志良委波なと弓手に、めてには赤倉の大峡の半斗に麻まき、粟、稗つくり、梨の木山、ふなはし山のあたりに、女ともの、たかやしうたふこゑ〳〵高やまの梢にひゞきたるは、蟬の喧かさ、きいあやしむはかり鍋鍬されり。

乙女等かむれて山はた空蟬の聲かおらぬかうたふ一ふし。

廿六日。あさくもりのけふのあつさよ、夕立やしてん、みち中に行ぬれんよりは明日なんい

ていきねと、あるし、けふもとゞめぬ。

下荏を出て
早乙女花

廿七日。山をおりのぼり濱にいでて、下荏を遠さく。かくて、見し脇本、礒松を過てはまべ行ほど、波流比奈委よりわけいでたりし空河平といひ、早乙女多比といふひろ野の水海のへたにあるに、そのさをとめてふ花の眞盛なるは、紫のむしろを一里はかりもしきたらんやうに、日かけまはゆくたゝすみ見やり（天註――早乙女花は燕子花のたぐひ、はなさらふといふものに似たり、五月のころもはらさけば、さをとめといひ、あるは早乙女花ともいふ。三河の國池鯉鮒のうまやのほとり野池といふに、四月のころいと多く咲花也。）、羽黒崎も過て、もゝひろ斗、みつあひによれる綱引はへたる舟に、馬も人もをり重りて、あやうげにくりわたさるゝなかめいとよけれど、見るこゝちもなう、十三の港のやかたに人來て、能登屋といふ問丸に泊もとむ。

十三の港

廿八日。この宿の庭の梢に、木の鴉をつくりすへたる。

あな樂し朝夕めでていく世々の末もはからす宿にすむらん。

十三を立つ

廿九日。宿を出て濱明神にぬさとりて、七里長濱の路やいなんとおもへど、暑さに休らへる家たにあらぬとき〻、はた、たかすなこのみちもたゆけなれは、六箇村つゝきといふ、やかた〳〵もいと多き路もありと、人のいふをしるべに十三の浦を左に見て、二ッ森も過て砂山の邊に休らひあし原をわくれは、みちのへにあけの鳥居のたてるを入れは、左に池見ゆ。此涯をのぼりて、伊豆の神をうつしたる祠ある、そのならひに建る石むろのかたはらに、「伊豆權

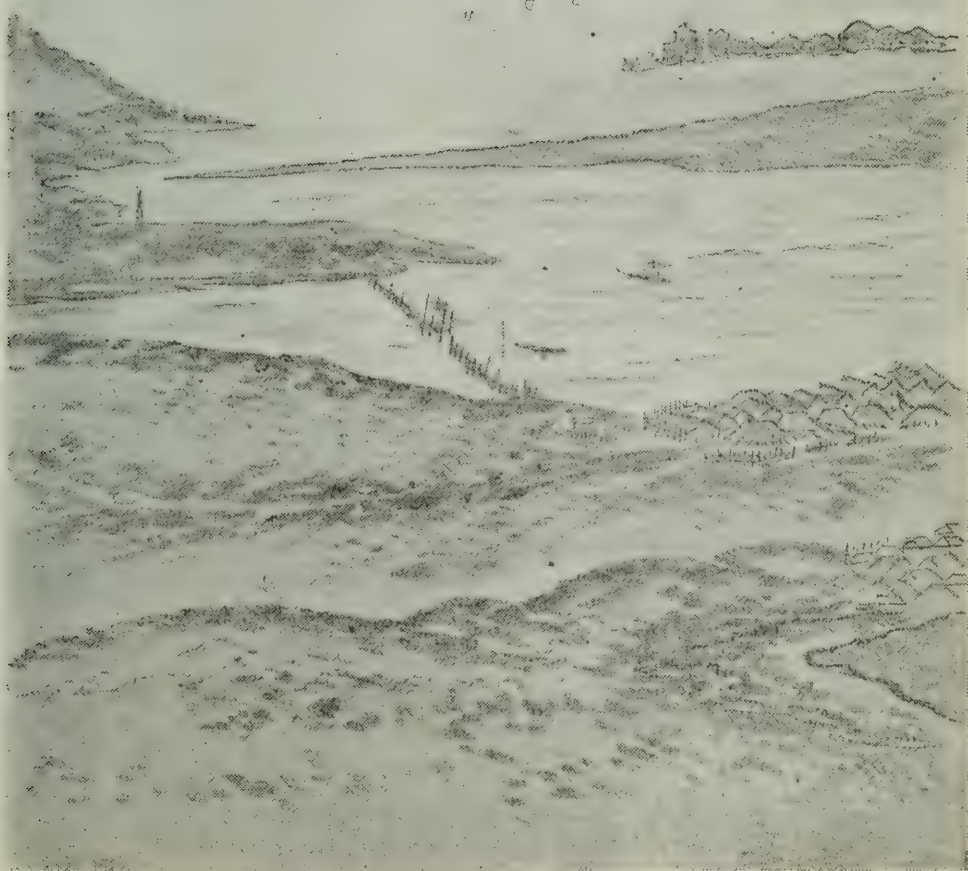
伊豆權現堂

虫おくり

千貫崎俗說

正子の城址

袴潟の由來

逆堰の創設

現堂地南北五間東西三間、御手洗池東西七十間南北五十間、境内山東西百間南北九十間、社司工藤式部」とそかいたりける。阪をくたるに、みたらし河とて、いさらゐなかれたり。

けふここに御祓やすらんそこゐなくみたらし川の水淸くして。

田のくろのゐせきのほとり水口のあたりには、虫をくりしたるもろ〳〵の虫のかたしろを、わらもていと大につくり、にぬりて木の枝につけて立るを、見る人の虫さへ腹のうちにおとろきぬべし。富萢(やち)邑に至れり。

みそきしてこよひはらふとみやちかき小河の水の涼しかりけり。

高き岡に飯形の社あり。山路めける砂原をゆく左に、松のむらたてる處を千貫崎といひて、そのかみは家居あまたいらかをならへてありたる頃、かほよき女を、都より千貫の錢にかへて、こゝにすへたりしなと、行つるゝ人の語るを聞つゝ至る。路の右に大池あり。柵のあととて小高きところあり、いにしへ、正子とのといふか此城にすみ給ふたる。そのうはなりにや、をんなめにや、その千貫女、あかつける袴あらはんとて、此水むかしはひろかりけるにのそみてあらはひそしけるに、いかゝしたりけん、その襠のおきべに流出たるをとらんと、身もなかれて空しくしつみきとなん。さるゆへ袴潟ともいひ、水のかたちの襠に似たれば、しかなん名のおへるともいふとそ。田草ひく女の、手あらひ休ひて猶かたりていふ、あか四代

さきのおほちなるもの、今は、ふたもゝとせの昔にや過なん、弘前より來て、坂本八郎兵衞とて、よろつこよなうかしこき人なるか、こゝの古寺、古城の邊に、田佃り家居せばよけんといふを人聞て、水はいつこよりか引もてこん。坂本、この袴潟より逆におとすへしといふを人聞あさみて、おこなることか、世に、さかさまに水ひきおとすためしやはあると、をとかひをはなちて笑ふ。われ水引えすは、此はかまかたに身をしつめんとちかひて引たりける水の、今もさかさせきとて水なかれ、人集りて田作り、村となり、まさごとなんいひそめしかと、近き世となりては、車力の村とおなしう名のるなといひて、ふと田におりぬ。あつさはいよゝむねやくがごと、火をおひたらんこゝちして行に、めくらめはすへなう、村はしの、かのふる城のあとなる家に水こひ休らひて、日かけかたふくころ心地よけなれは、麻生の邊を水のなかるゝにのそみて、

　行水に麻のたち枝のかけおちてなひくやけふのみそきなるなん。

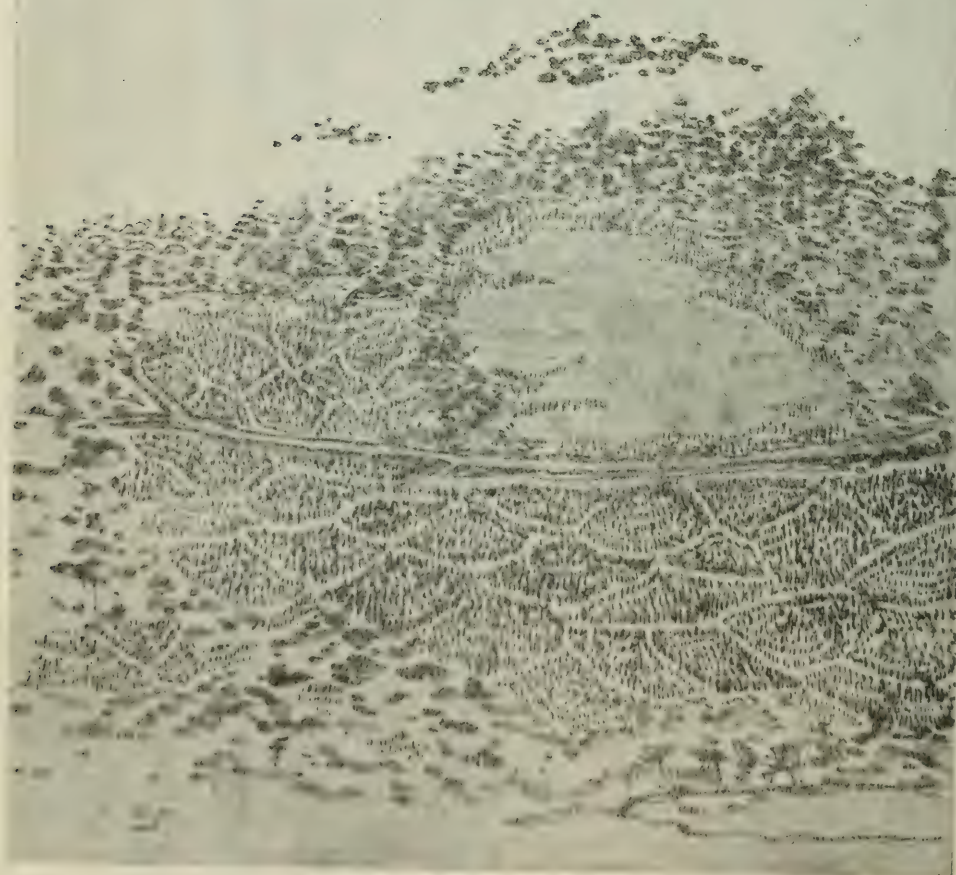
布美通吉の朔日。正子といふやかたに在て、つとめて、空のうちくもりていと涼しう風ふけは、（**天註**——此よべより泊し宿は、いにしへは將門の館あとにして、こゝに家たててすめる。あるしをはしめ、やからみなこゝろたけし、ちかとなり、さもあらしかし。」と、ところの人のいへり。）

　露けしな夜のまさころもかたしきておき出る袖に秋もしられて。

こゝちいまたすゝしからねは、あるしのとゝむるにまかせて、ひねもす肘を曲てくるれば、

十三の湖

正子邑

大繭の莚
かまげそ
三筋苧
おきれ〳〵
ふつこ
いらんこ
かいぐさ

夏苅の大繭の莚をあら板のうへにしけば、ふすに蚤のすたく怖れこそあらね蚊の多さには、ふる里の空もかゝらんと偲び出られて、袖かつぬらす夕くれ、蚊遣たいたる爐のもとに女のみ集て、釜上麻（かまげそ）（天註――かまげそといふは、いま竈よりむし上たるにゐそ、かまあけそなり。）といふものを手ごとにとりて、うらわかき庶（なご）女（め）のいふ、いとはやこれうみて、又七日前にひと目籠をうみ、七日からは三筋苧（みすぢそ）をうんで、老（おし）人（より）の母に、布をりてきせ申さんと、きやうなる子のもの話するを、それか母ならん老たる聲に、わかいのち、二とせ三とせも、なからへまくおもふとやいふらんかし、遠うおほろけに聞へたれば、（天註――みちのおくのならひとて、老たるおやある女は一日に苧三割を、ふん月七日より來ん七月の七日まで、一とせをこたらすうみて布かたひらををりたくはへ、親の身まかりける衣とし、そのおやなからへれは、つねの衣とし、又三筋苧いくたひもうめると、めてたきためし也。）

麻いとのなかくも老のこまかへり親おもふ子の行末も見ん。

と、この女おきなにかはりてよみつれは、はや、みなふしぬ。

二日。「夜は明たり、おきれ〳〵、ふつこ、いらんこよ。かいぐさかりにいけ〳〵。」（天註――おきれはおき出よ。ふつこ、いらん子、みな女のはらはへの名也。かいくさ、にごやかなる秣をいふ。）と唄ふにおきいてて、女子二三人腰に鎌とりさして、門よりうたひゆく。軒のした草、つゆきら〳〵と見へて、

今朝はとて庭のささこの露ふみておき別行袖ぬれにけり。

こゝを出遠さかるみちの邊に、大なる鷄居のたてるに、いと大なるわらのふみものあまたと

牛潟

平將門傳說

ととの莚

りかけたるは、二王尊のおましにやと坂のほりてまうつれば、大山止津見神の社也。こは何のねかひにて、柚山賤の手向にしたるならん。村あり、車力といふ、鮫代といふ池あり、小澤といふ池あり、はた、牛潟とて湖のごとく大なる池あり。この邊に延長、承平のいにしへ、將門や、よべ泊りしところの館にこもりおはしたりしとき、車の牛の、ふさ、ものにおちて、此水におとり入りてうせたりしと、もはら、ところの人のいひ傳ふるはまことにや。そのころより牛がたの名も聞へたりとか。見たまへ、この海のごとく大なるなど語り友なふは、あいたより、すぎやうしありく法師となん。牛潟村に入る。

たれもさぞ旅はものうしかたらひていさなくさまん行つるゝ友。

村長がやに休らふま、あるじ猶かたりて云、よべ宿したる正子とは將門をいひあやまれる傳へならん、平將門の出城の跡、そこなり。潟にしつみし牛は、將門つねにめて給ひたる、いちもつの牛と聞侍る、さりければ車力といふ名もゆへあらんか。この西なる山をも馬の神と申て、騎鞍(のりくら)といふ處のそこに在り。かの君はこのみてあら駒をのり給ふか、この馬ふし死たるむくろをかくして、いま神といはふにや、そのうまのしづくら埋し處ならんかと。家の前にかりほしたるは、松前の島に多かる室茅(むろち)といふ草をこゝにては登刀となんいへり、これもて手業に莚をそをりける。此ととかりしとて男二人、ぬれたる布衣を垣ねにかけてほしけり。

田光の沼

館岡もと瓶か岡

もくだを出す

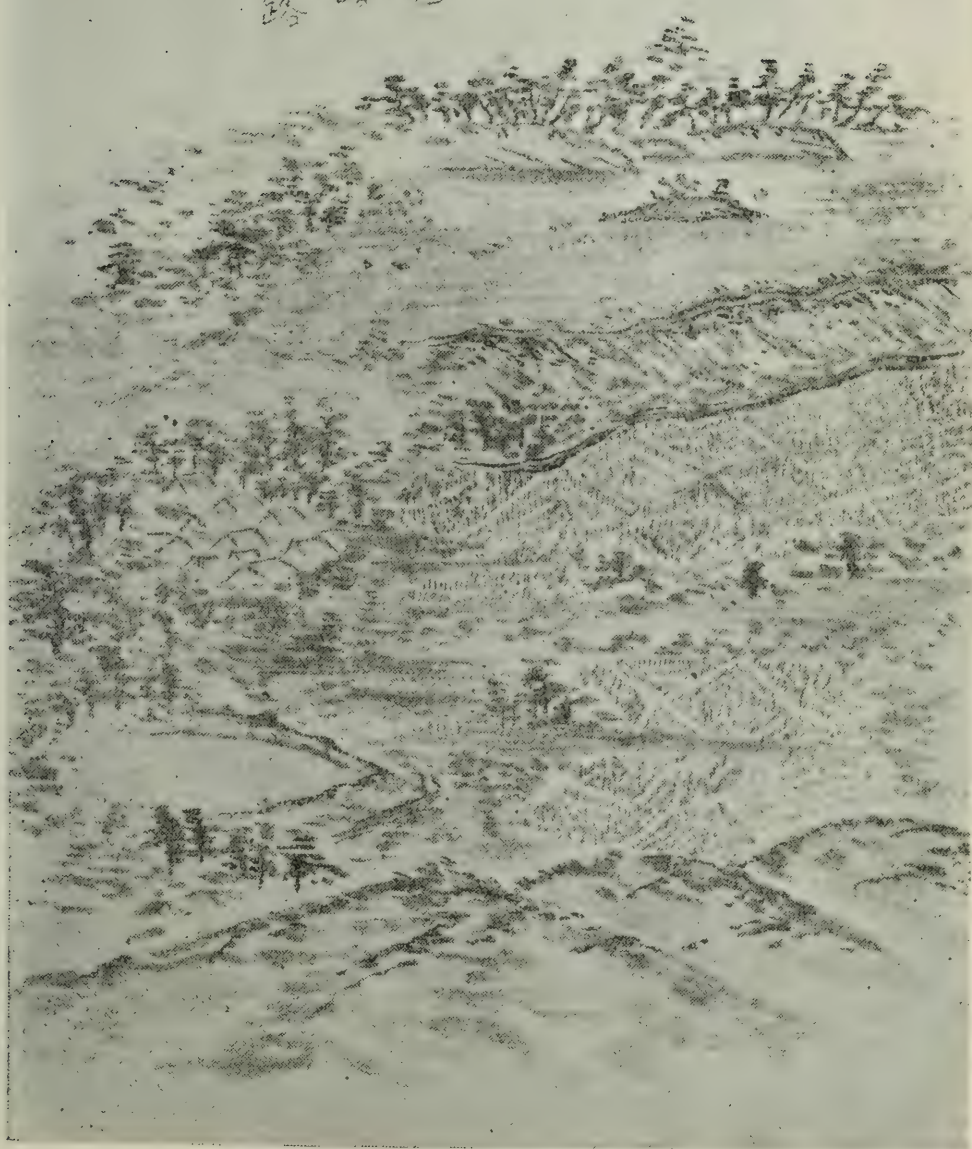
露ふかき秋野のむろち莿にきとあさの袂やいとゞぬるらん。

かくと、ものかたり聞しまによみて窣堰をへて、平瀧村もすくれは坂本、畔屋といふ二村を、筒木坂と、いまひとつの大村となりしをいでゆく艮の方に田光の沼（天註——田光、あるは達飛、あるは龍飛と云て、おなし名鳥、鐵のなだにも聞へたり、蝦夷の辭ならん。）とて、山田川出世川なかれ入る湖あり、この水十三の水海におつるとなん。

館岡見んとて、みちふたつある右なる小高き野添ひの細路よりゆけば、めてに松たてるくさむらを堂の前といふ。（天註——むかし神のみやしろのありしと。此あたりのならひにて社にても祠にても堂ともはらへり。）此あたりの土をほれば瓶子、小甕、小壺、天の手抉、祝瓶やうの、いにしへの陶のかたしたるうつはのほりいづる。されは瓶か岡の名はふりたれど、近き世のことにや、此山に城つくり、やぐらたてたまはなんの、こゝろねかひし給ふのをりしも聞へたれは、今館岡といふ。この村なかに來つつ宿つきたり。

三日。やの翁ほとけにぬかつき、はと、あくひうちして、けふりをたゝふきにふいて、缶の形したる小瓶に、つはきぬ。此器や、かの岡邊よりほり來りけん。みつわくむ女、山茶てふものをひたに煎て、あいだふりに茶鍋に茶籠さし入て、かしら茶は汲とりて、へいじにうつし、天目に布しいて掌にすへて、ふゝき茶筅に鹽つけてたて、茂久陀まいれとて朝茶すゝめぬ。こは山に生る鳥の足に似たる草を、もくだといひ山茶ともいひて、蒸しいりて煎し、あるは、つねの茶にませても、せんじのむならひ也。けふやすらひて夕されば、山より畑より歸りく

牛潟

堂の跡
上路
下路

盆踊を待つ

口琵琶

さなぶり團子に窓塞ぐ

大泊町

る女、いひくひくれて蚊遣たくころ、大鼓とう〳〵うちならすはいつこならんと見れは、蚊を薜くとて、高き木の枝にあなゝゐをゆひあけてのほり、わかき男ら、つゝみ、笛にはやしけるに、口琵琶といふものを吹あはせてあそふに、をとめらは盆躍のならはすにや、わか門にひとりたちて、そのまねひをし、あるは、みたり、よたり小聲にうたひさゝめいてわらふ。軒の梢をもり來る三日月の光に、猶此ふりあらはに見へしかは、

をとめ子か樂しさや嘸増るらん月も夜毎にあはれそふれは。

うちとよむ、笛つゝみの聲の耳にたちて、いもねられぬ枕がみに、鼠鳴さはき猫の追めくるに、なにならんおとしたるをさくりもとめ、蚊遣火の光にさしあてて見れは、田殖の休らひのころなん、さなふりだんご（天註——苗植をはれは左奈布利とていねて休らふのためしなり。）といふものをして、かやぐきにさし窓ふたぐとて、家の口のあることにさしたる。その、さなふりのちちなりけりとて、屋の翁か、枕をそばたててわらふことかきりなし。（天註——窓ふたくもちをさせるは正月にひとし。）

四日。こゝちよけに凉しけれは、館岡をいてたちくる。村はしに大なる池あり、此池の西にあたりて、城造りてんとほりしたるあとありとか。家六七斗ある大泊町といふ處に來る。いて、そのいなきさためたらましかは、大泊なにかしといふか、町の筋つくりたてたるはこれなん。鷹槌といふ村に入る。鷹の木に鳴たり。

木造の工藤氏

ねふた流し

島田氏藥園

森田の藥師堂

里の名のこもつちころにあらたかの鳴やいつこの梢なるらん。

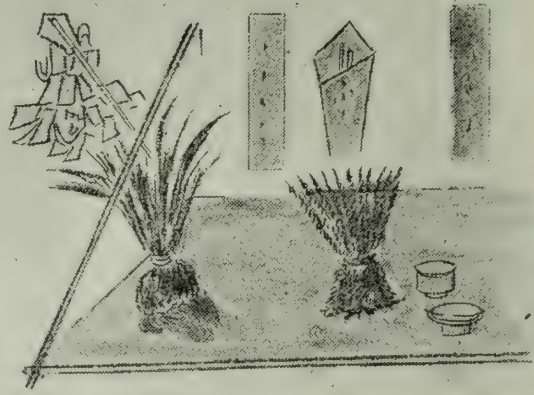
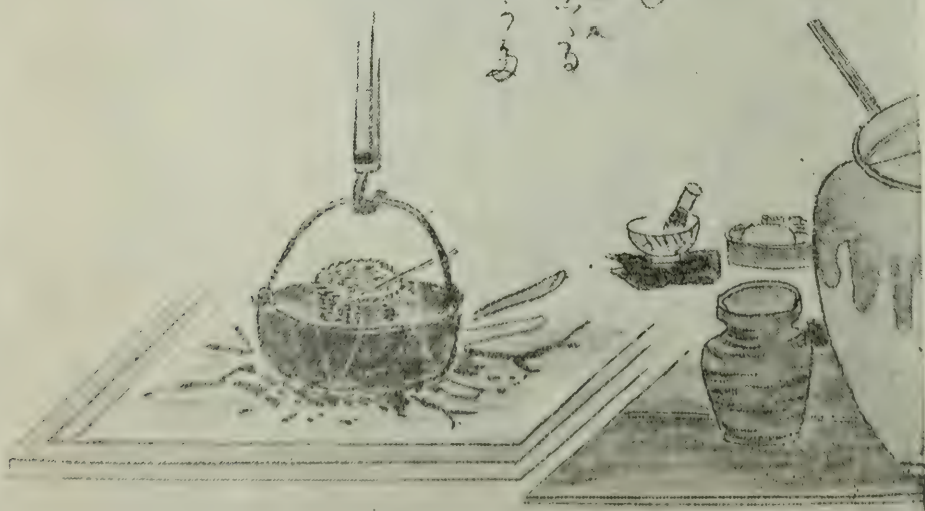
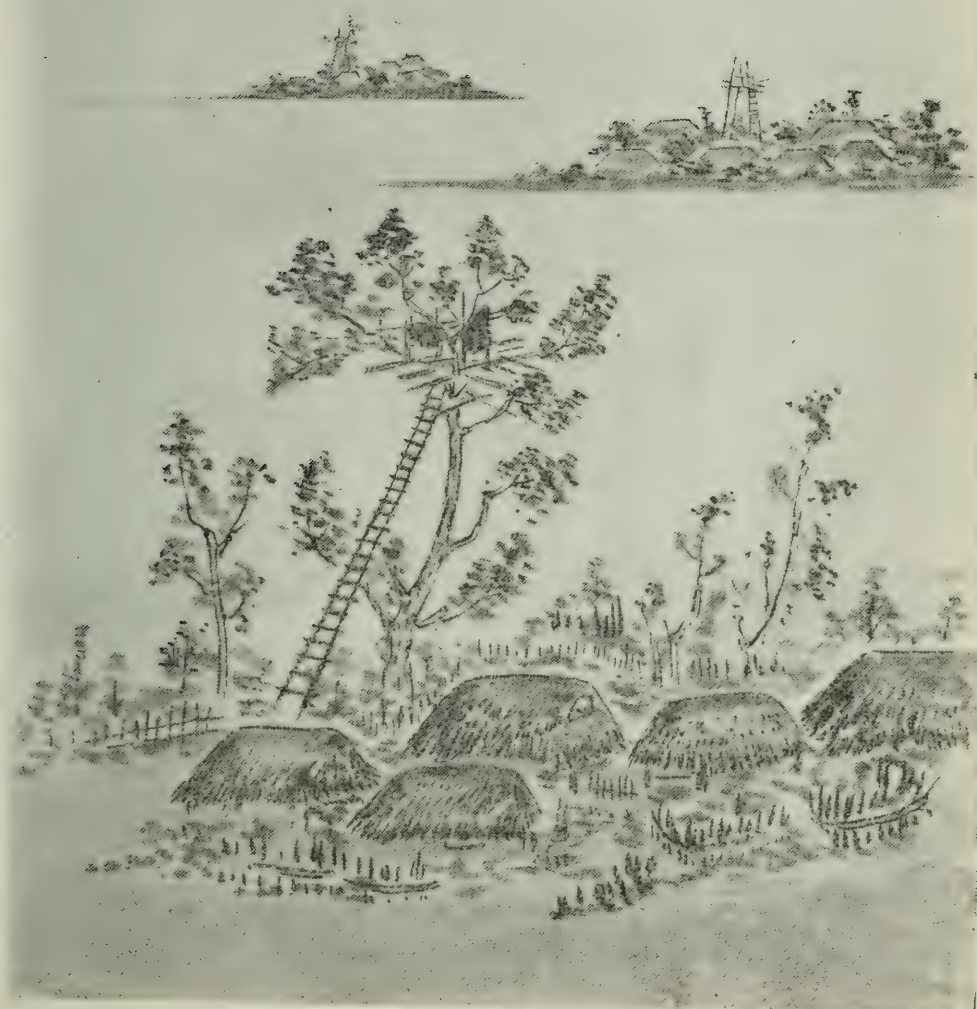
磐城峯を右にちかく見て林といふやかたをへて、吉水といへる村のあれは、水も清からん、あつさ避まくこひよれは、こゝなん水はよからす、きはめてぬるく濁たるとて、汲も出さるに、

ぬるしとてよしみつこゝにむすはすも袖に涼しき軒のした風。

ゆんてに村あまた遠からす見へて、長田村をへて木作に到る。このやかたにまつる、やはたのみやところにまうてて、相知れるかみぬし工藤定當かやとにさふらひかたらひ暮れは、笛つゝみにはやしとよめけは、わらはべ、をのれ〳〵か手ことに、燈の器をおもひ〳〵作りもてゝりかゝやかし、ふりかさし、みちもさりあへす、よひより更るまて人のむれありくは、れいの、ねふたなかしなめり。

五日。けふ斗はとて、あるしとかたらひてくるれは、わらは、大丈夫うちましり、ねふたもなかれよと、はやしありくかまひすしさ。

六日。この宿をたちてんといへは、とみなることにて、あかおやなんこと里にいきたり、ふたたひ來ませなと定憲送り出て、この町のこのみち、あなたになと、いひわかれたり。下相埜、中離、中田をいきて、山崎といふ村（天註——いまは山田といふめる、山崎は古名にこそ。）なる、くすし島田か庭に石たて嶋つくり藥殖て、間ひろく涼しけにすめるに見休らひて、森田の村さかひに石をならべて坂

蟲送り風景

造りたるに、はる〳〵と藥師ぶちの堂ありけるにのほる。むかし探題なにかしといふ人、大なる石をおひもて來てほとけとあかめたるか、はしめにこそあらめとかたる。のほりえて、むらたつ木々のあはひより遠近のなかめやよけれは、たちめくる。堂のうしろさまに鳥居あり、こゝより十腰内の觀音ほさちへまうつるみちあれは、しか立るとそいへる。坂くたりて船岡、床前、大館に到るほと、むしおくりすとて、人のかたしろ、むしのかたしろをあまた作りもち、いろ〳〵の紙幡を風にふかせ、つゝみ、笛、かね、寶螺吹、ねりさわき戯れ舞ひて田

御扉の濱
鰺ヶ澤
鮫堂の縁起

つら〳〵をめくり、はて〳〵は、つるき太刀してきりはらふのわさもありけるとなん。大なる野良をはる〳〵と過て、浮田河をわたり御扉の濱に來けり。此いはやとのこときあまそきの上に、むかし、いつき島ひめの神をまつりたり。波風にふれて、此いはやとの鳴ことあり、それをお戸びらのなるといひて、海なん、かならすあるとそいへる。上埜、坂本、舞戸、かくて鰺ヶ澤の里ちかつきて、古川の橋にたちて見やるゆんてに、かんかきあり。正八幡の額は、坂上田村丸のかいたまひしよしいひ傳ふれは、ゆへあるみやしろにこそあらめ。阿字箇澤のみなとへに到りて、田中町、七ッ石町とのあはひに醒殿川といふなかれたり。そのゆへをとへは、こゝに大なる鮫なんよさり寄たり。ある人の夢に、その鮫、なくひそ、漁の翁源五郎か海に入て、いま魚とはなりたりとて、やかてちいさき殿つくりて神とまつる。さりけれは、さめ堂とも申侍るといらふ。こよひは、神明のかんわさとてにきはゝしう、尚、ねふたのさゝめきはやしありけるやらん、いまたくれぬより、そのようゐそせりける。杉浦といふやとに泊る。

七日。つとめてやとをいつる。

　ふる里の夢をはかなみさめとのにこよひ誰かねてこゝに見るらん。

椿崎、深浦より大間越迄　※同

七月十六日深浦の竹越里圭氏

聖德太子作の聖像

斐陀工の藥師堂

海榴崎や見なん、おかしき秋のうら山のところ／＼も見まほしけれは、つとめてこのいそやかたを出なんと、かねてものししかと、よんべ、ゆくりなう風あらくたちて、木々の梢は徐波なう吹折れ、家ともふきたふれぬへう風のさはきに、夜ひと夜いもねす、おさゐしつれは、けふはとゞまりて、あくるふん月の十日あまり六日、岡邊なる竹越といふ岡丸里圭のもとを出て濼邊に至り、そかゆかりなりける小濱なにかしの屋にしはしかたらひて、行末のあないなと、ねもころにかつ聞へて、草枕かりねん宿もまよはしとてこゝをいづ。この磯邊の澗口の觀世音にまうてて人にとへは、かゝる堂のうちにをさめたるは、廐戸の皇子の、みてつから作らせ給ふたるを、坂上大宿禰田村麻呂の、ゐみしらかおこりたるを、むけたひらけ給ひしころ、この吹浦に置たまふとなん。小阪の右なるちいさき堂こそ、斐陀の工等か建て、智證せしのつくり給し藥師ふちなんこゝにおましませりと、いらへそせりけるにしりき。

　巖の浪うつ墨繩のなかき世をかけてたくみか名さへくちせぬ。

となんよみつといへは、此浦のとしたかき翁、すしかへし／＼て、こは、つはらにきいしらしとはおもへれど、泉郞かこゝろにも、おもしろきやうにつゆおほへぬれば、あはれわかはく

は、行なん末のくまわ、浦々の名とも殘なうつくりなして、世にすむもすゑみしかき、あかはまつとにたうはりかしてよと、ぬかの波も磯によりそへていふに、いなみかたく、このこと契りわかれて、見やる崎の名を入前、あるはいふ木綿舞、亦はいふ蹂前、いつれやいつれならん。

わたつ海の神のみさきやこれならん浪のしらゆふまへにかくるは。

岡崎山の麓過ぐ

岡埼山の麓行、尾越のそかひのみちにかゝりて、わけわふる草の露いと多ければ、（天註――岡崎山の古名は蜂森山とか、いま波知毛利の名出羽路にあり、此ところよりうつしたると見へたり。）

行袖も露おかさきの山こへて沾れにしまゝに月やとさまし。

田に垣を繞らす

大間といふうらやかたにすむ海士の軒近う、あげた、くぼたを佃り、はなちかふこころのうま、山のしゝ、さるも入こぬ料にや、田のあせことに、垣ねをひし／＼とゆひめくらしたり。

七重八重おほませ小ませゆひませて田つらのほなみ鹿もよりこし。

小柴の生ひしけりたる片岨に、新山權現とてほくらあるにぬさとりたいまつり、小坂おり行ほともなう横磯といふ村に出たり。海吹わたる秋風やつよかりけん、波のいと高うたつ。

磯の名のよこたふ波のよるほとや澳のこしまの見へかくれなる。

暴風のあと

このころあらかりし風に、このいそのはにふ、ところ／＼に吹やられ、あるはふし、あるはや

濱はこべ多し

艫作崎
黄金崎

椿崎の椿

ねのほねばかりなるを葺わふるにいとなう、はたつものは、みなしぶかれて、粟、ひえのたねもむなしけれど、浦山かげの田の實は、さのみやは、さはることもあるべうなどかたりつれて、浦人とともに小福浦てふやかたに到て、このもかのもの、小田のふしこそなびけ、うへ、つゆもふきいさなはれさることのたのしさど、たゝすみて人のかくいへれば、

めくみあれや露もさわらず作る田にはやち秋風いつこふくらん。

この海へたに濱蘩蔞といふ草のいと多くて、青きあつたゝみなどしいたるやうに、小石、たかすなごもさらにふまでふみしたき、岡にのほり坂をくたりて、月屋さいふ村そありける。

苫家形あまのすみかの窓の中にたくひも波の都吉夜見るらん。

艫作（へなし）の碕とて澳よりこれを見れは、つとさし出たれど、そのところに來て見れは、さもあらしかし。みちは蜑のたく繩の形して、みたにのそこまてめくり〳〵てくたり、たかくさをわけのほれは、こかねざきといふところのありけり。はた、田の中に黄金崎善右衛門とかいふ人の塚しるしの石、苔むしてたてり。屋のならひたるに入りて休らひ、沖行船を浪遠う見けちて、

行ふねのこゝをへなしてすくめくり波のいつこか泊なるらん。

かくて、椿崎とも海榴山ともいふいそ山のこゝにありけり。あら磯の波は、高いはの末の苔

のたもとまてかかりて、見下すたに、あやうきこゝちそせりける。ちいさき鳥居に入れば都都玖黎明神とて、澳玉命をそあかめまつり奉る。いにしへこゝに、ことさへくからくにより船のはなたれ來りて、やりたるそのふねの艫を造りなして、こきいにき。そのころは海榴いと多く、岩のはさまことに生て、さかりなるころは、朝な夕日のまはゆきまて波にてり、みちくる潮も紅にそめしかと、近き世のことにやありけん、いてはの國恩荷の島山よりこゝらの鹿の海渉來て、はみもの乏しき冬のころほひより春かけて、雪のなかにくひあさりもて餘波なう見へしかと、近きとしとなりては、實ばへ、ひこばへのみそ多かる。しかはあれとも、ふりたる梢もところ〳〵にましりたてり。

いそ山に春は咲てふたま椿かかるやなみの光なるらん。

むかふ近つ磯を寺嶋といふは、うへや、その磯邊の岩の家の形したれは、浦人のおふせたらん名にや。野路をたとる〳〵くれは村あり。屋にとひよりて、あなあつ、しはしとてかたらふ、庭も籬根も菅刈ほしたる。窓はいふせきやうなれと、浦風のよく吹入てけり。こゝを澤邊とそいふなる。

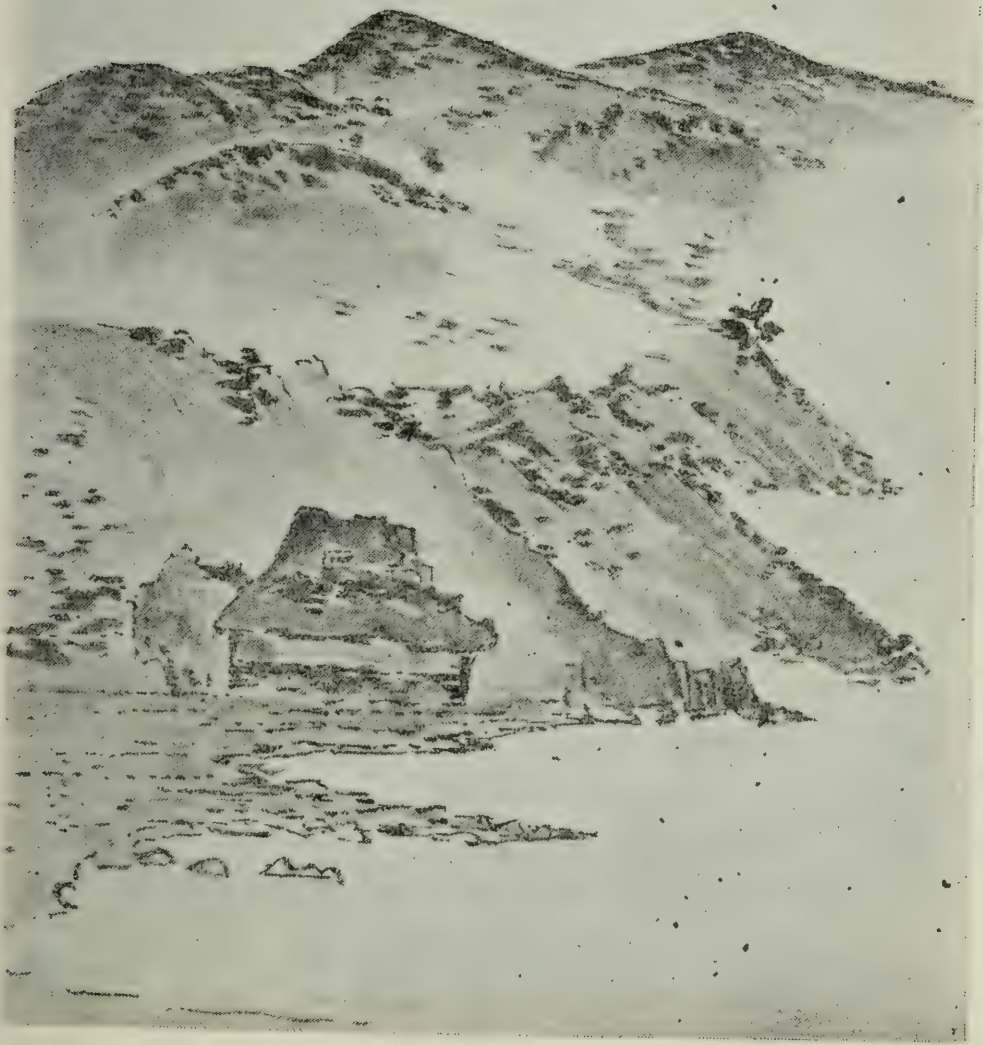
露ふかき澤邊の眞菅かりねせはまくら涼しく月やとさまし。

猶野原を來て、眞藤の原といふ坂にたちて見やりたる風情、ことにおもしろし。

岸の鹿島
沖の鹿島

岩崎にて

手檮藻

濱菜(もと)

春も亦盛に越へんまふちはらかかるなかめをほたしとはして。

貝竈のさかをくたれは、砂間のやかたの海へた近う、辨財天の祠を、拜みとのゝうちにつくりこめて松の群立るいは島を、へたの鹿島(かじま)といひ、近つ洋邊なるちいさき巖を沖の加島といふ。南に遠く恩荷(おが)のしま山、あるは寒風山なと、濤のことく黛のやうにこそ見やらるる。

おきへこく泉郎よおかしとなかめすなまかちたゆみて船やなかさん。

みちのくのかしまとよみたる歌なん聞へたれと、えもこゝにはおはさらめとも、たくふ斗おかし。丸山といふほとりは、ふる柵のあとのみそありける。そこに近き、廣澤より出る清きなかれを橋より渡て、岩崎のいそやかたにかかりぬ。(天註――岩崎、もとの名はいはたて、いまは岩柝の名出羽の國に在り。)ここにすむ泉郎のならはしとて、手檮藻といふものを春の海に刈ほして、よね、粟、麥に雜へ、つねの糧としつれは、いにし卯辰のやわしかりつる世すら、うれへなけんと語る。天都地母といふは多都毛、莫名藻に似て、いさゝかことなり。名のりそを此浦にてはもはら濱菜といひ、あるは毛登てふ名そありける。海士のをさ菊池なにかしのもとに宿つく。秣にやあらん、きちかう、女倍子なと刈ませて、軒とひとしくつみあけたるを見つゝ、岩崎の泊して、といふことを沓冠にして、

いま時とわけこし野やまさかりなりきちかうをみなへしのきにかりもて。

夕くれて、をとめ、ますらお、わらはへも、あらおらもつとひ出て、踊せり〳〵こゝにむれ、かしこに群れり。

そことたに寄るへも浪の海士の子かいそふみならしうたふこゑ〳〵。

月のおもしろうてれるに、汝のひる見過し月屋のさきは、その名さへおかしう偲のはれて、いつこならむと浦波と友にうち出て、

おもひやるたくひもくまも浪遠く秋の月家の夜るのあはれを。

かくて更たり。

十七日。雨のふりくへう、あしたのそらのけしきよそためらふほとに、海のあれ出て風ふきしきり、雨さへふりいてぬれは、えいてたゝす。くれて、人々の来集るにましりて、庚申そしたりける。

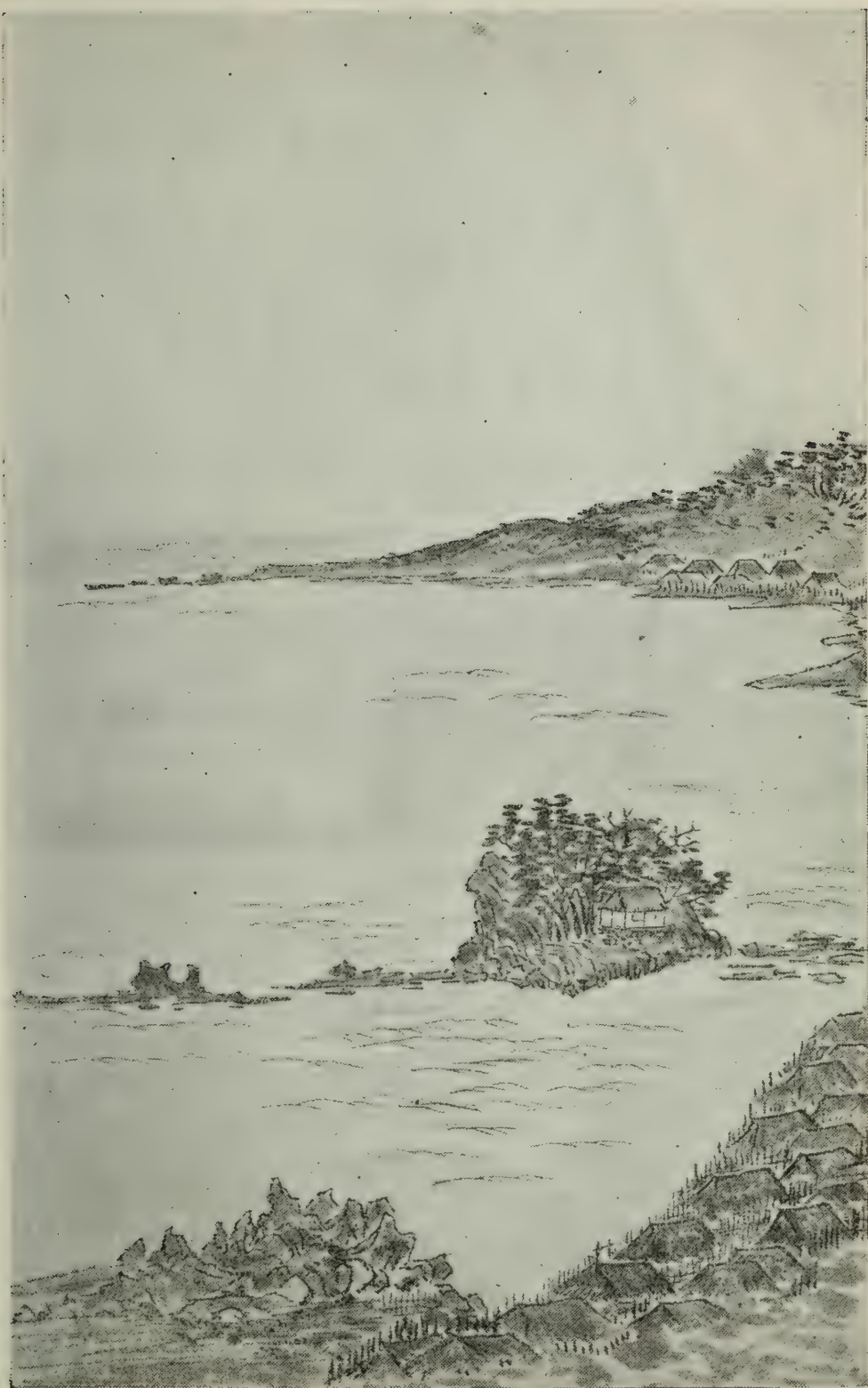
圓居して聞あかさましなれもかくねぬ夜をこゝらなくむしのこゑ。

十八日。あさゐして、日はしたになりつとてあまのとめつれは、けふもこの磯に、月まつはかり暮にくれたり。

十九日。けさはくもりたれと、ひるはれんとていづ。津鼻のやゝ越れは、濱中といふやかたなり。

帆立澤

近くの溫泉

子持石

浪の夜る月のあはれやいかならんこのはまなかにすむ蜑やしる。

佐々那比川とて小川なかれたり。こゝをいさゝか左に行ば牛田の觀音といふあり。むかし春田うつおの鍬にほりいたしたれば、そこに堂つくりて、今も人あかめたふとめり。猶さかのほれば帆立澤とて、大なる保太氏のかたある石のいつれば、しかとなふ。はた、もろ〳〵の木のくゐしたる石あり、いて湯あり。猶ふかくわけ入ば、根瀨てふ山おくに左々南比の溫湯あり。そのひんかしのおく深く、むかしましらの浴したりとて、いま猿乃湯てふ名そなかれたる、その處あれは人わけいりぬ。久田の村にきいたるほと、雨やふりこん、遠き島山、ちかきいそ山もかきくもる。

雨もよひさたかにそれと見へわかてやまてふやまにかゝるむら雲。

森山ちかく雨のあしとくふりいてて、おもしろき島山のありけるなかめもあらて、すへなうさゝやかの木のもとに笠やとりして休らふに、いよゝふりいやまさりて、

しはしとて憑む木かけに雨はもりやまてたもとの沽てゆかまし。

根瀧川をわたるとて、

行水のいととふかけん雨そうきそれさへねたき名さへなかれて。

おもしろきいそへの山をおりのほり、めくり〳〵て平澤川をわたれは、田の中に子持石とて

松神村

多門天王と神明宮

神殿の破損を嘆く

石ともの立り。乳の乏しき女こゝにいのれは、そのしるしをうとそいへる。大濁川とて、おかしきさはべにわけ入り、はた、行人つかとていと高きを見つゝ、かくて松神村に到る。雨猶ふりくれは、いましはとてあまやとりせりける。いよゝふれは、いかゝとためらふほと神なりひゝきて、

笠宿りこゝにしはしとはれままつかみなりしきり雨のをやます。

ふりくれたれは、すへなう、此大屋たれとかやいふかもとに泊りぬ。

二十日。けふも雨猶ふり、雷ひゝきいやふれは、えいてたたす。

廿一日。つとめて晴たるに宿をいづる。この頃の雨に、いそ山の木々もいそちちかく老て、高岩とておもしろきいはほに、なにくれの木の生立る。田のほとり山の岸に、鳥井のふたところに見へたり、なに神のおましにやとあせつたひたとれば、左に多門天王をあかめし堂あり。ちかきほと、すりをくはへて、おほひの、かやふきのやもあらたなる。右に、いさゝか離れて神明のほくらあり。やねふり、かやくちやぶれて、みてくらの串のみ立るに、胡桃の、おくふかくおち入てけるにうち砕かれて、千度のみはらひくしの筐の、雨露にぬれたり。いかにかく、なかこのをしへをのみあかめならへばとて、かんみやしろの、かくはかりあはれたるをよそに、あはれ神ぬしやあらむ、ちぎ、かたそきはあらすとも、折たく眞柴もておほひた

石門斜日到林丘

由都流来恵
坊主石
頸切岩

らましかはと、なみたはら〱とおちて、

　ぬさとちる木々の木葉の手酬のみあれにあれたるこのみやところ。

小岑川わたり大峯川渡り、白神か嶽をあふけと雲いとふかく、そこともえしらさりけれは、

　濱つたひ小岑大嶺雲ふかくいさしらかみの嶽そ見やらぬ。

黒崎のやかたのあたりよりは、うなのうへに、遠近の島やまの見へたるは、「小黒さき沖の小島」ともいはまほし。山かたつきて行みちに、わさ田、おしねの穂なみ磯ちかくうち、撫子、藤袴の咲ましりたる、なさけあさからす。

　小田のくろさきしちくさのいろことに露もおくてやわさほなるらん。

狗戻しのはまなと、たかすなごふみしたきてくれは、ほとなう大間越に到る。津梅川の橋かつ渡て、ひるつかた、菊池なにかしのもとにつきぬ。このせき山の神とてまつる稲荷の祠にまうてて、佛埼のこなたより見わたす海のなかめ、いはんかたなし。こはおかしとて折句。

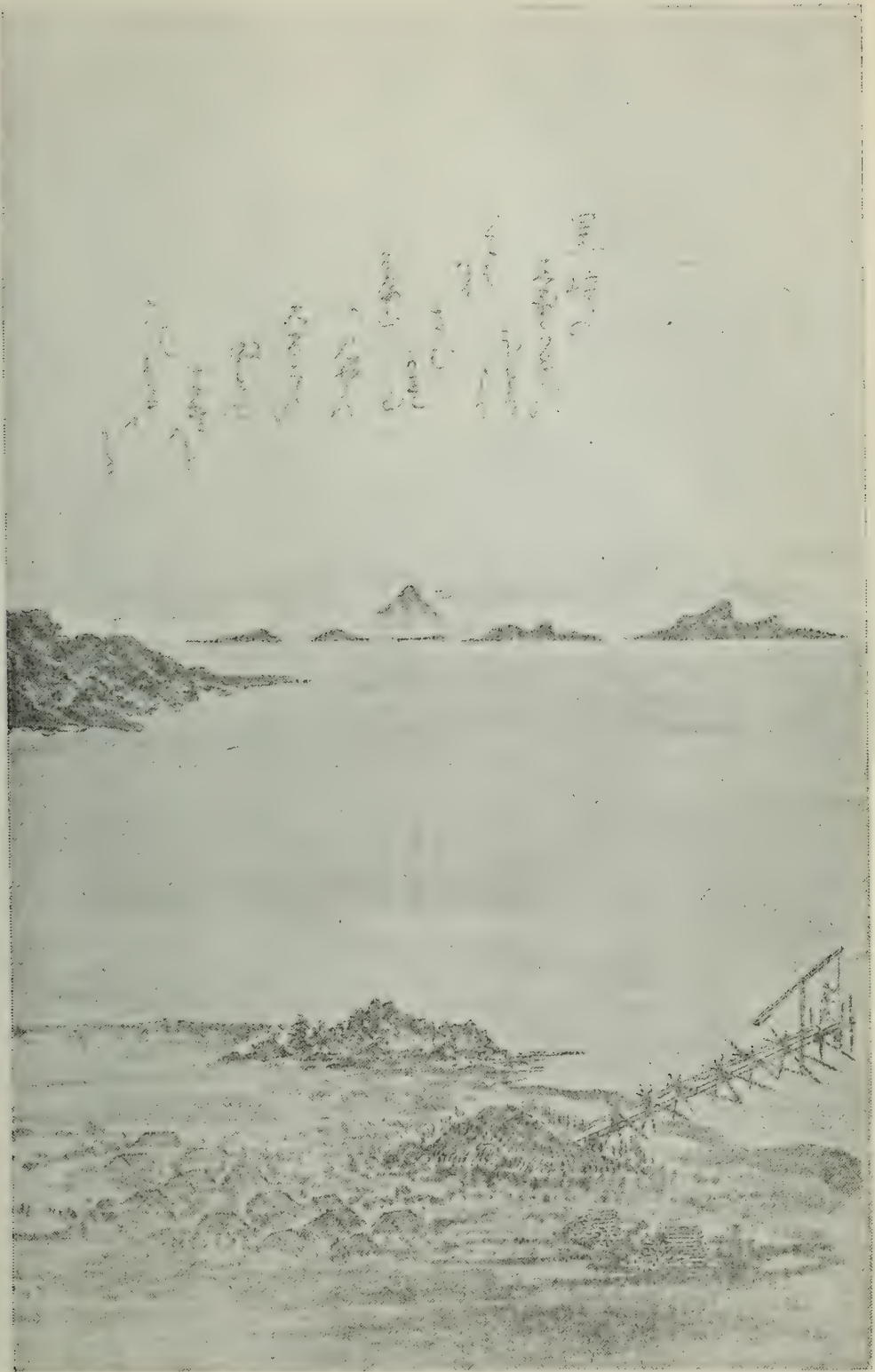
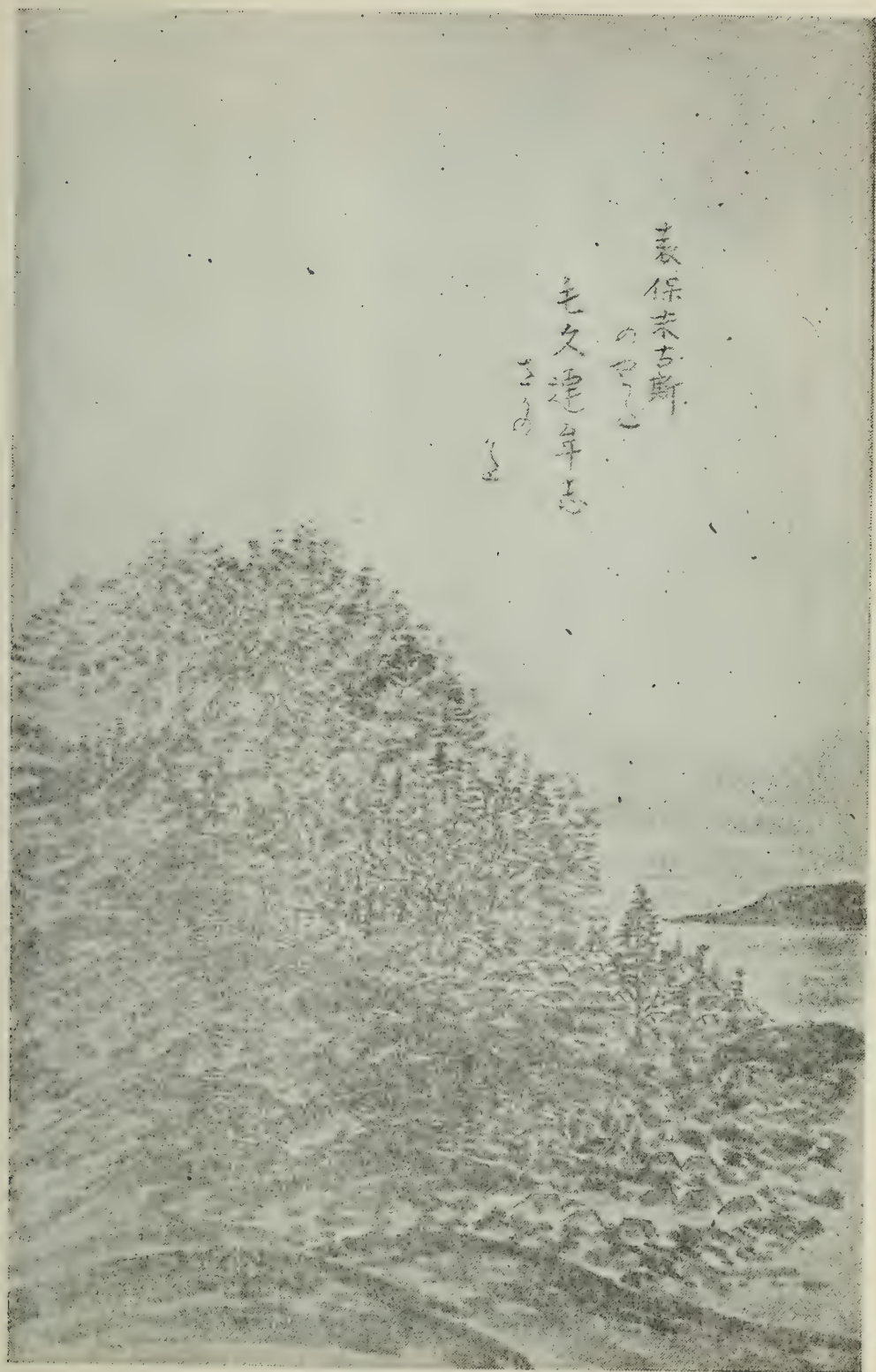
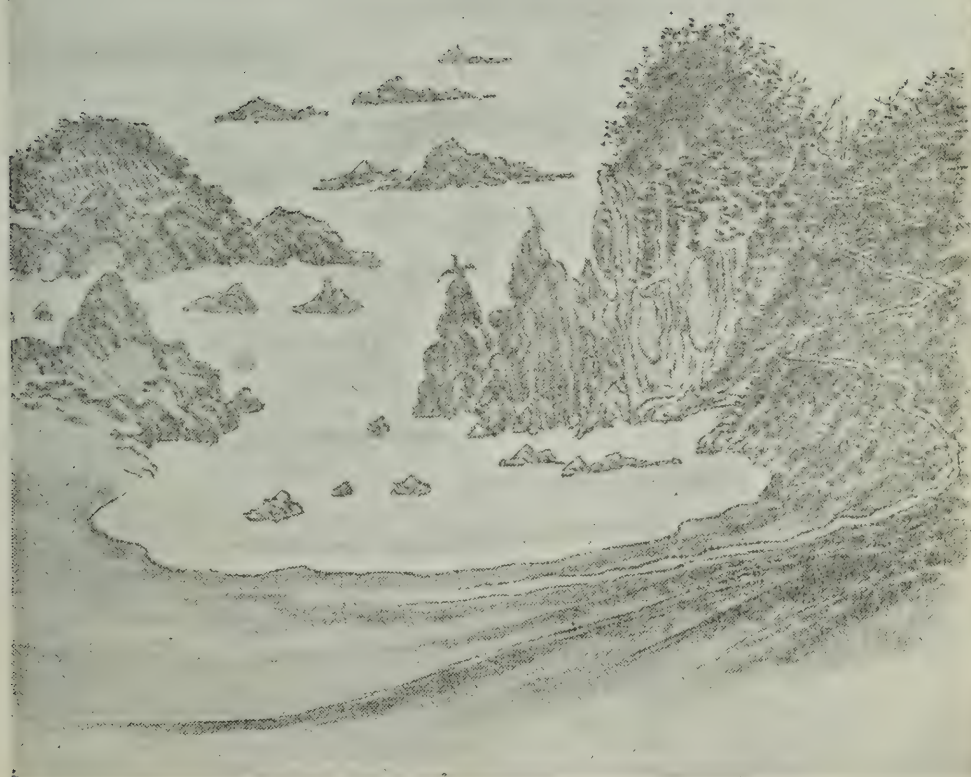
　おきつしまほのかにそれとまほかたほこき行船のしるへなるらし。

此夜、浦のあらおら、さしことの戯れとてつゝみうちうたひ、雌鹿、雄鹿、中鹿とて、こゝそこと舞さゝめきて夜は更たり。こは、世のなかの田の實よかれの、あそひのひとつそかし。いねかてのあまり、志司袁登利といふことを句ことの下にすへて、

あら樂しおもひはあらしなりはひをよし世のなかとうたふなりけり。

廿二日。あしたのまくもりて風はやう吹て、雨もやかてふりしきりぬれば、

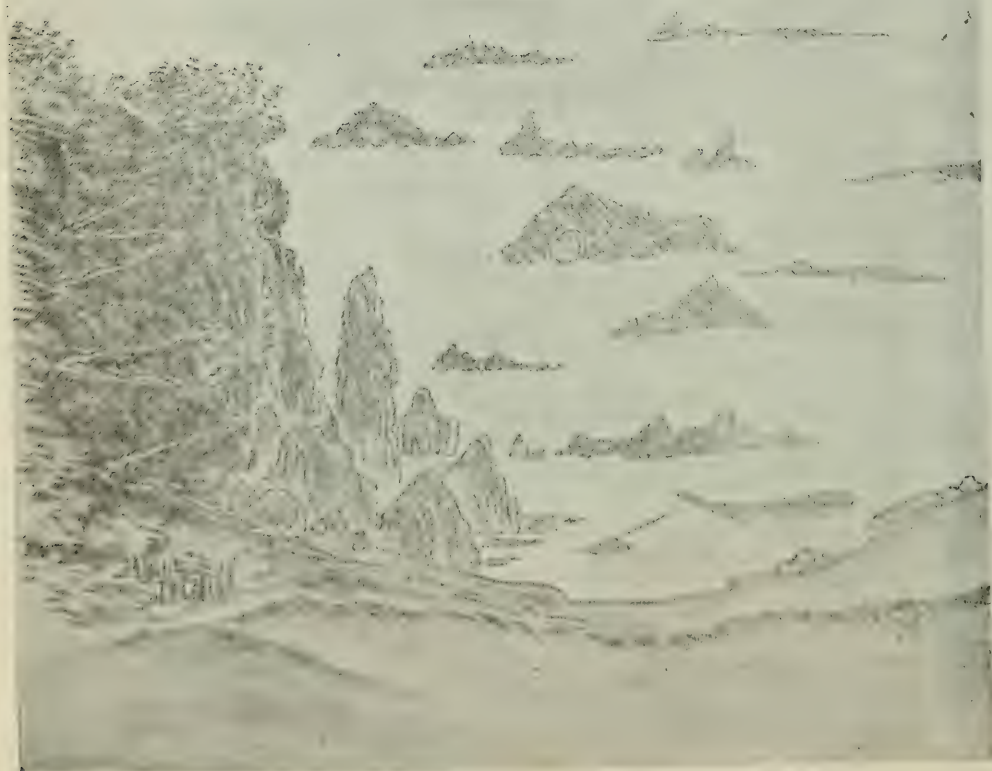
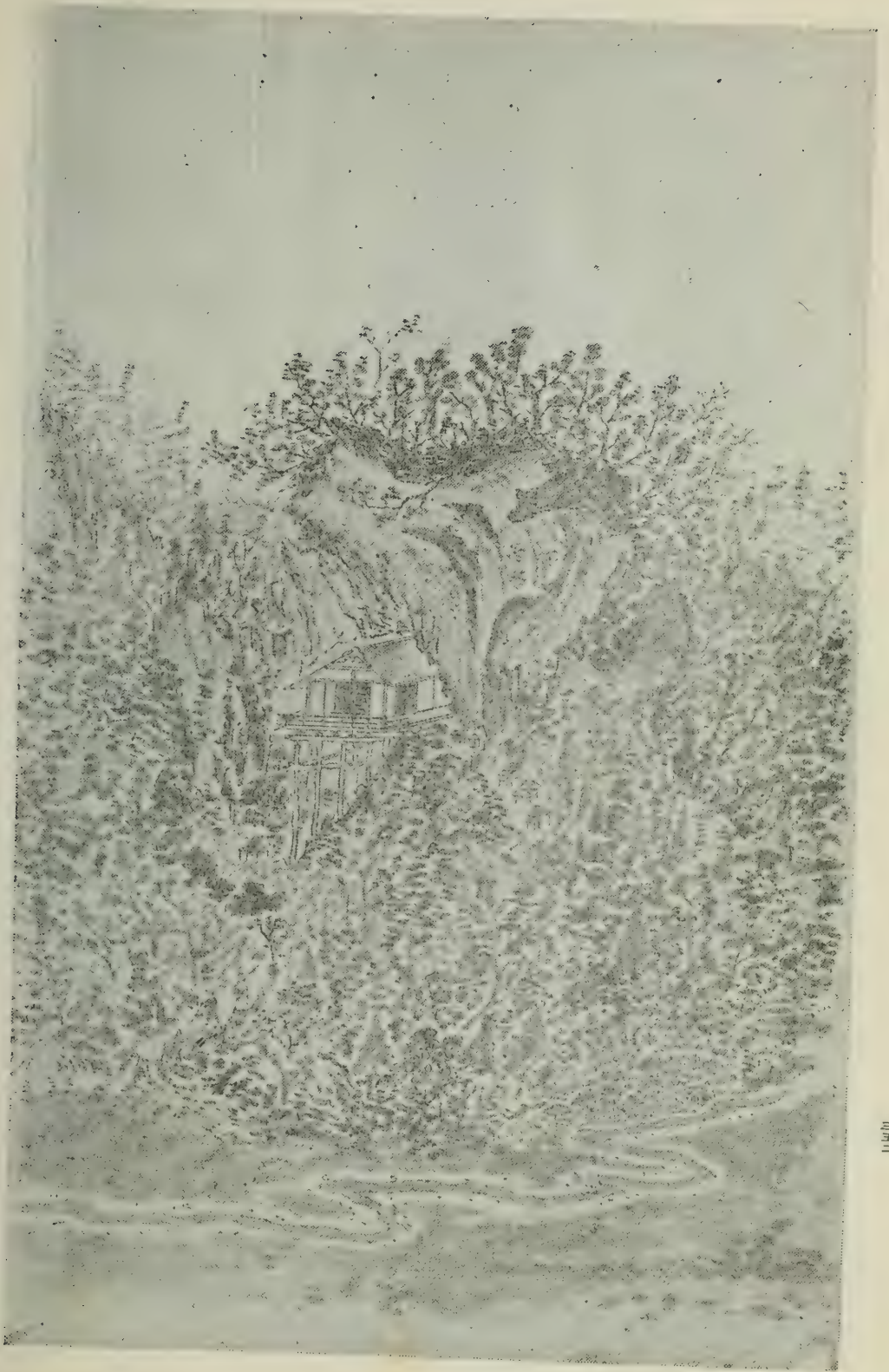
廿三日。こゝをいづる。軒端の山は笹森赤翻解由といへる柵のあとなと。梢ともすこしけしきはみ、つゆもみづる（此項以下缺――編者）

甲 神明の祠
乙 多聞天の堂
丙 太谷寺坂

森山彌七郎の

松神邑
の小濁河の
源なる
不動が
瀧その
水さわく
白く淅ニ泔
となるもとう
とし

薬獵りに

三月半過ぎ小湊を出づ

淺虫滯留

こその夏のころほひ、久珠黎香理して通可呂の夜万てふ山をわきめくり、毛文のくすり探てたいまつりしかは、おほん都介差の藥のそのにうつし植させ給ふ。さりけれは、そのいさおしとて、ものかつけ給ふおほんめくみの露あさからす、旅衣の袖うるふはかりのかしこさ。はた、こたひ、くすりのかみよりのつかひとして山崎永貞、やつかれ、いつこのくまわにかさすらひありきなん、尋ねもとめてんときけるに、必樂奈避のほとりにて會ぬ。揶滿左吉のいへらく、この春も、齶田にちかき太山に入へうのおほんおほせをなんうけ奉りたれは、いて、こたひも、そこいさなひてんのえたちにて、はる〳〵かくは申來るなり。いさたまへなさせちに聞へけれは、たかきおほんめぐみのかへりみを露もつかうまつらではと、そのおもむきをのべて、かつ別たり。かくてやよひのなかは過行ころ、すゝろにこゝろあはたたしく小湊を出たち、春の山路も見まく童子、太母祇の山里をへて、神ゝ木の坂とて、よもやもの、よく見やらるるところあり。雪間の芝生に山賤らか休らふを友に、巨瀰箏等のかたなん、雪のむら〳〵とけち殘たるあたりに見へて、

八重霞へたつはいつこみなとへのなみかあらぬか殘るしらゆき。

ひるつかた麻蒸のゆけたにつきぬ。こゝに、ひとめくりは浴してなと、相しりたる人々とかたらふほと、のきはの山とおほしくて鶯のなけは、

すみれ、かたかごの花

四月はじめ青森に至る

白雪のふるすをなれもいつるゆのわきて長閑きうくひすの聲。

遍志武のすなとりせりける海士のやの籬根に、紅梅の咲たり。あるし、とよりあみおひ來ていさ入て見たまへなと、こゝろありけにいへは、

泉郎ころも袖やにほはん紅のこそめ身にしむ梅のしたかせ。

ここに日數ふるまゝに、野路にはすみれ、かたかごさきませて、いそ山さくら、浪のうつかと盛なるに、鳥のいろねをつくしてやゝ春のくれ行もおしく、とにあふけは、ちかき山より折來しとて、わらはの手毎に花もてあそひ、あるは、こきちらしうちたはれて、はまちにつどふ。

折めつるこゝろも波のあまの子か花こきちらす春の手すさみ。

太山の花やいかならんと、しきりにゆかまく、こゝろのみさいたちて、

さきもいま花より花のなかにおつるはなのもろたきいさ行て見ん。

日ころ花にうかれ、烏豆伎のはしめにもなれは、このいてゆのやかたをいつる。山きしに見へたる一村に、わきて花のいと多く咲たりけれは、

軒はよりかこふも花よ花の雲いく重かさなる山もとのさと。

やをら蒼杜のみなとべになりて柴田の宿をとへは、このころいたはりにふしてけるとて、人

青森を出て
治右衛門櫻

やききり

々も集ひかたらひて、三日よかをなんへたり。

七日。こゝを出たつに、司播多、奈介牟良、枳武羅、美久邇迄り來けり。濱田なる治右衛門櫻見まくその門に到れは、盛うち過る花のなから斗ちり初るか、あたりの木々の葉にはら〳〵とこほれかゝりたるなと、花は盛を見るかはと、

めつらしなちるかちるかはまた木々の梢につもる花のしら雪。

人々にいさなはれ、妙見ほさちの林に入て森のしたみちかいわけ、刀知多家、企毛良太郞の藥とりて人々にわかれて、高田の村の桃、櫻、かつちり、かつ咲たり。機織のみやところの花苺の上にちりたるに、ぬさとるひまに、かくなんおもひつゝけて手酬たり。

あやなくも花の錦のうつはたもをりすきにけり神のひろ前。

このころ、もかさのやまふはやりてけれは、こゝのならはしに也毘吉離とて、はゝきの形にわらをつかね、うれなん、火にくろめてけるは、やきしめのこゝろにや侍らんかし。行すち、やことの門にひきはへたるに、

苗代の小田にはひかてなかれ江になひく藻猪のかみのやきしめ。

片子山行ほと野雞の鳴たり。

をのかつまつれなくなれもかた戀の岡邊のきゝす聲のたへせぬ。

いとはや、なみ岡のすくにつきたり。水樹になりて毛内の門に音なひしかは、去年のうけいのことに露たかはて、うれしともうれしなとありて、

夏草の露もいとはて葎家にとひよる人のこゝろふかさよ。　茂肅

とありける返し。

たひ衣來寄れはうさも夏草の露のなさけのかゝるうれしさ。

めつらしな待かひありてほとゝきす去年にかはらぬ初音をそきく。　司家女

この返しをす。

きかはやとこふかひありて霍公鳥初音をたくふ人のことの葉。

れいのことゝてまとゐして　夕早苗。

乙女子か採る手涼しくさなへ草露吹こほす小田のゆふかせ。

寄水雞戀。

契おきし人來〳〵とねやの戸になさといつはりを鷄なくらん。

夜邊になりて、霍公鳥鳴たるやと思ふをりしも雨なむふり來て、

聞つともおもひさためす時鳥あめにまきるる夜半のひとこゑ。

八日。きのふのことに題さくりて　野夏草。

あけまきかうしひきわけしあとしるく路もなつ野のくさそかたふく。

忍戀。

人とはは露とこたへてしのふ草しのふにあまるそてのなみたを。

一溪雲鳥。

やま人の栖家や谷の雲ふかみすきゆくとりのこゑかすかなり。

あすは弘前にいなん。

九日。藤崎に到れは、去年の夏不加烏良にてわかれたる、さとの島のくすし大久保なにかしにあへり。なにくれのかたらひに日のかたふけは、河越か屋戸に泊りぬ。

十日。この河に美乃宇袁とるあしろ人の、刀畔てふものを見にいきしかは、河瀬に杭うちわたして縄網をはり、四手網さしおろしてとりえたるを見れは、ことくにに美古比てふ魚にことならす。このほとのあめに、みかさのまさりて、とることもえせさりけるを、又雨や近き空ならんなと、けふりうち吹かてら手糸ひき試けるを、あじやのとにたちて見つゝそ思ひつゝける。

はるゝ日も袖やぬらさんあめにきるみのてふ魚をまつあしろもり。

藤崎にて

みの魚の漁

かくて比呂差吉に此日つきぬ。
十一日。こゝちそこなひてけれは、くすりなめて暮たり。
十八日。この夜、藥の問丸遠藤直規の宿に語らへは、とひ來ける人々にはしめて見へたり。

佚羅宇僻　滿春

參州隱士國歌工　神草奇禽入句中　燕子花開邂近夕
八橋佳咏有遺風。

といふ、くしをなんをくられけるに、
やつはしをふみこそ渡れ行水のあさきこころもふかく見なして。

むさしのくにの　僧　尙

東都尙也事遊方　禹穴龍門破布囊　此日逢君談海岱
天雲渺々水茫々。

かくそありつるいらへに、
むさしのひろきまねひのことの葉にかたりはてなく雞かねそうき。

萬都爲　勝　文

三州遊子別山鄉　杜若花開發旅裝　探勝經年來此地

殿瀨村の藥園

野田鳴鳥入詞章。

といふ、しゐんの末なるもしをおなしさまにものして、

衡なく野田の河なみかくはかりなさけもふかき人のたまつさ。

滿通偉　勝善

遊歷度年奧羽間　每過名勝咏歌還　相逢塵尾揮來處

太古美談一鮮顏。

かかることのむくひに、

道奧やいてはにとしもふることをかたりもあかて更るなつの夜。

鳳の來しむかしかたりや桐の波那　介玖太　其友

とそいへることの、これか和句とはあらさめれと、かくなん。

黃金の山にしけるなつくさ。

廿六日。山崎永貞とともに殿瀨村にかついたりて、去年採り來りし草木の苗、はた、もろこしの苗なと植ませたるを、ひねもす見めくりて、日のかたふくころ、そのをいづ。

涼しさよ歸るたもとに吹かほる植しくすりのそののゆふかせ。

かくて夕附行ころ北岡の屋戶に話らふ。

廿八日。きのふより雨ふりもをやます、いやふりにふりぬ。

廿九日。かねてものしつることなれは、とく〳〵と開へしまゝ、このころの雨霽にくすりからまく、あすなん弘前を出て、まつ山口に相馬の澤水をわたり、尾太の、やまわけころもいく夜かさねて、雌谷の毛呂瀧にうき世のちりやあらはん。しはしの餘波にものもふは、なりにし里のならひにこそあなれ。さらはとて、れいの人々なさけ淺からす。

滿春

菅蓋爲笠竹爲筇　荷鑱躡跬入碧峯　共道明朝採藥去

白雲深處覓踪蹤。

といふ、から歌作てをくりけるに、

生藥生ふてふ山もしら雲をわきてとなへん人のことの葉。

僧尙

巖城殘雪送仙車　採藥應栖洞裏霞　此去安門山百里

菲々流沫半天遮。

このくしのあらましをこたふ。

けちやらぬみねのしら雪落瀧つ見つつし思ふ人を偲のはん。

勝文

輕履明朝何處遊　君言山上入雲投　行々採藥桃源去
　更見胡麻盃裏浮。

となんありける。

　藥かり世々さく桃の花も實も折らはや君か家つとにせん。　勝善

雌屋溪源尋藥行　雲中路遠犬雞聲　山深王府金銀穴
　應有鸞車仙女迎。

かかることの聞へしかは、

　麓たにえやはわけ見ん仙人のすむてふみねはいやたかくして。

　雲わけて入る峯高し久須黎かり　其友

となん聞へつるに、

　そてにあやめの殘るうつり香。

　岩かねを枕にあけん具秀離可理　東橋

とそ聞へてけるに、

　ひるも鴨のたたく谷の戶。

仙薬もあらんわか葉の奥の不二　文石

とそ聞へてけるに、

鹿子またらの雪のうの波甫。

嘗なから氣味よく入む雲の峯　郁桃

とそ聞へてけるに、

もすそもくちめ栗花落の山わけ。

五月となる

かくて、なにくれのことにかゝつらひて、いまた、出たつ日とりはいつ〳〵と、そのえたちよりもいひ聞へねば、ためらふほとに差通吉になりて、さゝさゝと笹葉うりありき、牛尾菜うり、輿呉美〳〵、さうぶ〳〵とうりありくに、あやめひく日もいよゝ近つきて、けふは委介なり。

にきはへる軒をならへてあやめ草ふく風にほふ宿のあさとで。

けふも人々とかたらひくれたり。

藩主下國

九日。けふは、くにのつかさの、むさしより入らせ給ふの日とて、夜邊よりそのまけして、うちと、はき清めてけるに、くぬち、こと〳〵にをかみ奉らんと、人さはにむれつとふ。

愛宕山へ

十日。こゝにあかめまつる遠太祇のみやところあるにゆかまく、はた、ほとときすもきかま

とぶさ

愛宕の社

くほりして弘前を出て、磐樹川を渡り、熊島、高屋なと行過るとておもひつゝけたる。

　ほとときすなかすはくましまちてたかやとに聞しかまつこととはん。

名殘もなう殖わたしたるをちかた、いまはた、もはらうゝる田の面も見へて、やはたへぬれば殖田のやかたになりぬ。

　きのふけふうへ田のさなへ風過てたもと涼しきもりのしたみち。

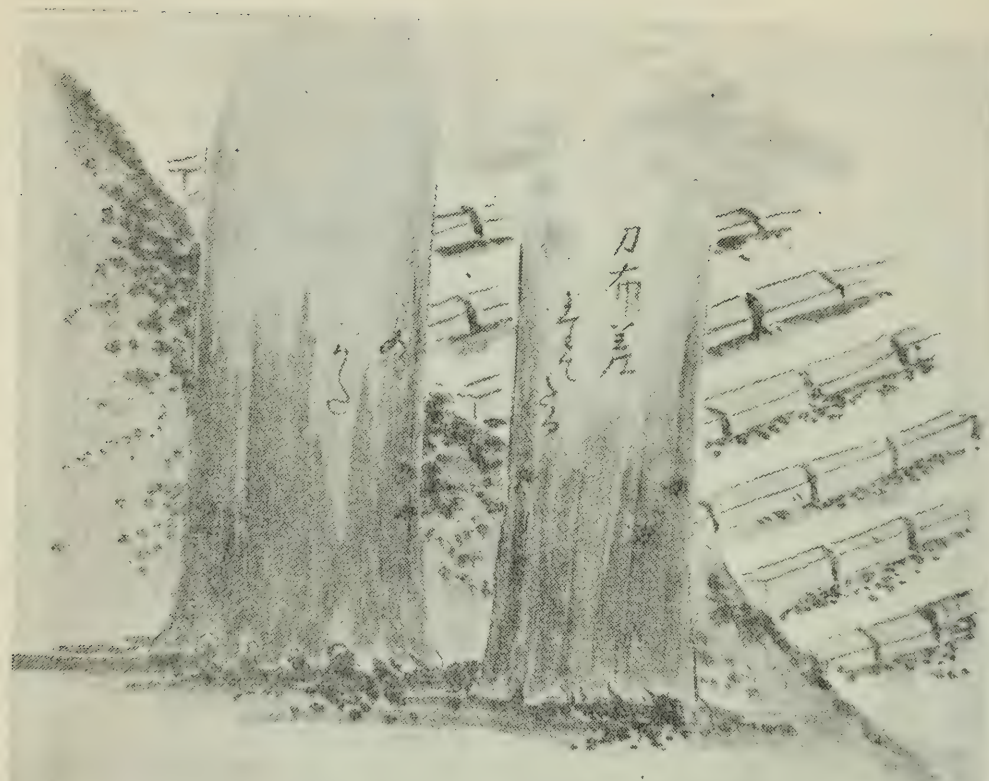
やをら、をたき山にはる〳〵とのほる。坂のかたはらなる、この橋雲寺をあらたに造りかふるとて、やまの大杉ともを伐りたふし、そか、うれ葉を折て、こりつる木の根のこゝろことにさしたり。これなん、本末をは山の神に祭りてと、かいしるし給ふたるふるきためし、「鳥總たて足柄山に船木きりきにきりよせつあたらふな木を。」となんよめる、戀にたくふ万葉集のふることも、かゝることをもととして、杣人、山賤等か家々に傳ふそれ〳〵ののりありといへど、見しはいまはしめ也。うべ、むつきのはしめ、斧に、みてぐらとりそへて山口祭そせりける。堂にむかふ左に理元大師の堂、右に飯成の祠を建て、元祿の石のともし火あり。ももとせのむかし堂も寺もたてしなと、人のとき聞へたり。岡ひとつおりのほりして、細越といへる村にかゝりて行に、

　ひとりのみわくれはこころほそこへに名のりてもかな山ほとときす。

刀布差

宮館村工藤氏

さなふり餅

弘前を出て

花輪といふ村もいと近く見やる。（天註――波奈王の名、南陪、仙臺にもしか聞へたり。）山路、かきねの空木花さき、かゝ、ちりき。

時鳥いつをさかりとうのはなはさきちるさとにいまた來なかす。

折笠といふところにいつる。めくりの垣根ことに卯つきのみそ咲たる。

うの花を家路のつとにをりかさしゆけとつれなしやまほとときす。

去年見し宮館の村につきて、工藤なにかしとかたらひわかれて三ツ杜をへて、獨狐に出て石渡、土子崎（天註――筒子崎の名は（以下缺））といふやかたに休らへは、田植をふる日にやありけん、れいの左那不離もちに、いをのひれをそへて窓ふたぎあへり。濱野といふ町しりより磐城川わたりて、比呂差吉につきぬ。

十二日。つとめて雨いたくふる。このあまばれにいでたちて、山崎永貞のいさなへるにともなひ、ひるつかたより弘前をたち出て、介良那爲阪の岡邊に、いとたかやかに、きよらなるやを作てけるは、おほんつかさの、なりところにこそありけれ。うちのしつらひなと、きやうをさかせてけるなさ。ほとなう惡戸のやかたに入來て、

いさここに百千反なけほとときすいかにきゝてかあくときのあらん。

湯口、黒瀧、五所、水木在家といふところよりうち見やれは、いはき河をへたてて草のなか

曾遊の地

小倉の神明

煙草の産

に、鳥井野、兼平(かなひら)、如來瀨なといへる村のありけり。此あたり、もはら去年みし。相馬の澤にわけ入る。以斯久羅といふ澤をへて、鮮樂具末委の一盃盛といふ巖のほとりもやゝ過て、不動明王のいはやど、猿渡の橋は甲斐の猿はしよりもあやうく渡て、古玖良のいはやとにおまします神明のひろ前に到り、去年のごと鈴ひき、ぬさとりてこの村に宿つきくれて、くもりたる河瀨に、めかる蛙は、山吹のうつろへる頃、いてに聞たるにおなし。

月いつこくらききみきはにたへすたゝすたく蛙の小夜ふかきこゑ。

猶夜くたちて子規の鳴やと聞て、

ほとときす又一聲とおもふまにつれなくあくるなつの夜のそら。

とはしらみて、いよゝ河津鳴たり。

十三日。そのてふそのに煙草うふるは、この村の名ところにこそ、手毎に苗もてありく。居を出て外小倉(そとこくら)といふ澤にわけ入る。みいけに山々のかけおちておかしけれど、なからはしける蕁菜に、かつくもりぬ。岩城山は雲にかくろひて、雨ふりこんなと語らひ休らふ。獅子が澤のなかめいとよく、高岨より見やる太秋の山里は、將棋なとたてならひたるかことく、いとさゝやかに木のまごとにあらはれ、こなたは杉か澤のみやところところと杉群をさし、天狗森、花咲松に至れは都念子の花咲、香麻都介の花咲たり。

村市を立つ

十四日。小雨そほふるに、かちの麻衣の腰斗なるを着て、蒲のはぎまきをして村市をいつるに、ほとときすの聞へしかは、

時鳥なれもつはさや重からんあさのさころも沾れて來ぬれは。

とゝき、もくた、みづ

多黨美太以、布地介波をへて、香等離のわたり水ふかからすして、左布澤といふ山路にふかう入ほと、いよゝ雨ふる。わけ行溪のかげみちに生ひ茂りたるなかより、刀度吉、毛久多、美豆（天註——羊乳（とゝき）赤）竹麻（もくた）水麻（みづ））てふ、此みもとの草を折て、これをいかになと人のいへれば、をりしも鳴過る鳥にたぐへて、

ほとときすなれもくたにの涼しさよ日かけを遠みみつきよくして。

尾太鑛山の廢址

晴れて木戸の澤、瀧の澤、路が平(たひ)なと、山河にそひてめくり棧をわたりて、阿葛澤(あつら)といふ河邊の草のなかに、やねはほねばかりなる杣人のやかたのあれば、こゝにひるのなかやごして休らひ、いでとて、さらぬたにあやうけなる棧の、こころ〳〵はおちはてて、行へうもあらす。かづらをたぐり、なめらかなる苺をちからにつかみ岩つらにひざまつき、木々の梢をあなゝゐのごとくふみ嶽の麓にたどりつきて、とよみなかるゝあら河の高さし、なゝめにおちかかりたる棧のしたつかたにたちて、ふりあふき見れば、いやたてるしら雲の上に虹のわたりたるかと、高山の末のいはほの、はさまごとに、はしらつき立て棧を造り、家もひし〳〵と建な

らべたる。屋はみな、くちほろびて、棧のぞみ殘ける。いにしへ、このいはねの斯岐の中に、いさよきかねなんほりえて、世にいふ寶字のしろかねも、かゝる山より出てたからとはなれり。山に神おましましぬ、みなを尾太(をふ)こんけんとて、こしふるましらをいやまひまつるとなん、尾ふとき猿やすみたりけん。路を河についてのほれば、大床、小床、裟吹のとこなど、たたらふき、はくからみしやかたども、なごりもなうたふれふし、ふきたるそぎた、はしらもくちおり、ちりつかなどのごとくいやつもりぬ。河邊に白堊あり、いはねに花蕋石もまれまれにひろふ。（天註――花乳石の又の名を花蕋石といふ。生代州山中有五色。）いまた消のこる雪の、星の・さく〳〵見へて、

山の名のしろかねにこはさくはなやたくひも夏の雪のむらきへ。

白銀ほりしのちは近きまで銅ほりたりし山なれば、かく斗も、みちのかたはかりはのこりつれ。さもあらずはこそ、至らんことのかたからめど、おなしみちを歸り、かの、ほねばかりたてる杣小家にきやどる。みたり、よたり、かたらふほど、あないしつるおのこらは[illegible]とて、ひの曲ものの大なる、かれ飯ごを枕として、うちならすはなの音、山川の岩うつ波の聲にいささひしく、いもやすからずおきいつれば、人々のふしたるあさまくらともいはず、月はこゝろのまゝにさして、

わけぬれし袖のさこゝろもかたしきて夜半のまくらに宿る月かけ。

夜ごともにおき居てける。軒のあたりの高くさの中より、耳にさしあてて、ふと、水鷄の鳴
にきいおどろく。

　　夏草のかりねの宿のとほそなみいかにくひなの叩なるらん。

眞木たてるみねも、いとはや、しらみわたりて、

關屋の跡
人名萬足
おくかな

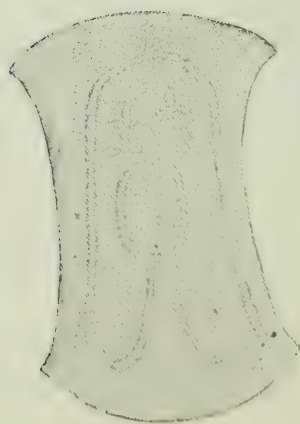
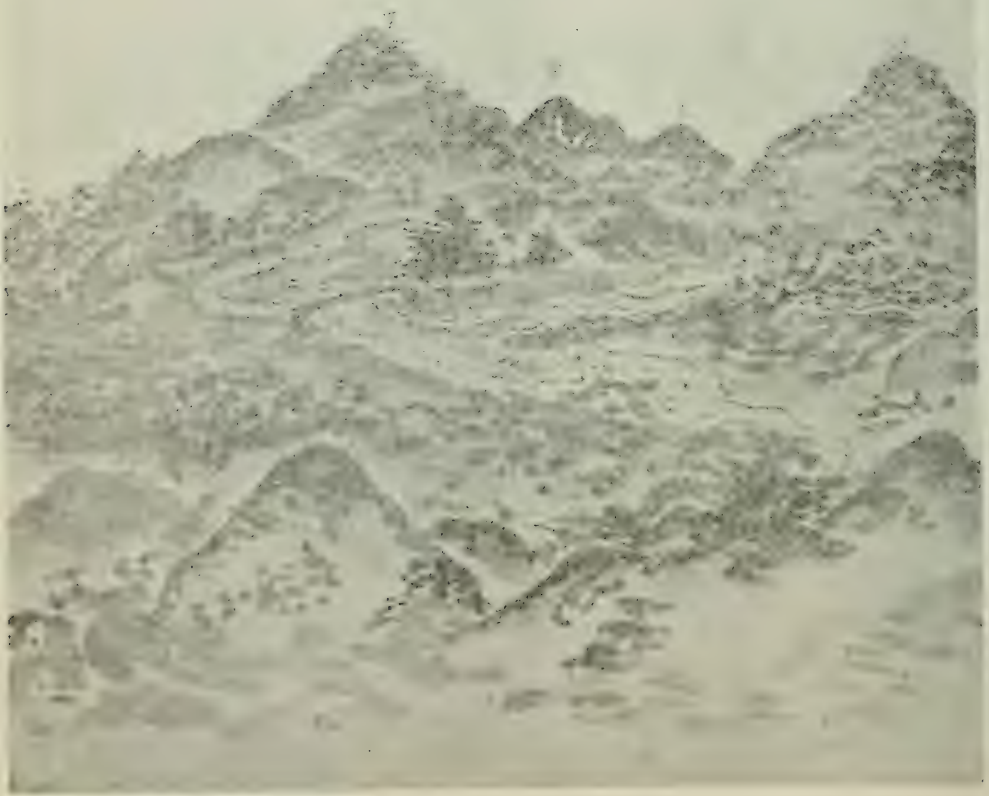
十五日。おき出て、あらおら眼すりもて、よんべ、まさに万足（天註――まんぞくてふ人の名は、ところ／＼に聞へたり。）を夢
見しは、あれが魂やきつらん。あな、おくかなのやまなかや、われも現にみしなど、いろをそ
こなひていふは、十とせの昔はこゝに關屋ありて、家居も軒をつらねて、栖たるもの、あまた
身まかりし。そがつかはらの、此小屋のめぐりにいと多かれば、しかいふとなん。朝飯たく

火消の禁厭

とて、自在鍵さげたりける繩に火のかゝりたれば、ひぢすれ、はなこくれとて、肘、鼻の赤む
までずりぬ。こは火をけつまじなひの、ことくにぶりありとて、わらふことかぎりなし。
（天註――ひぢすり、はなこくるいふ、かぎなはに火のつきたるをけつことのふり、ことくにの人の集れは、たがふなり。）かくて鹵淵、曲淵などいふ、いとあやうきき
しをつたひて、母不介の倉といふ、そのたかさ、はかりもしらぬ處に、

　　あふき見るたかきいはねの松かしはめぐるもふかき谷河の水。

河原平村

こたひは瀨をわたり、ふちにのぞみて、棧をよそに砂子瀨村にいでて休らひ、河原平に、いと
はやつく。

尾太銀のこと
高二銀の重さ
六七拾泉ニ鑄て
切て用ひらし
あるとあり

めくそ落し

たの、かけご、のた

十六日。朝くもりたり。けふなん閭門の澤、諸瀧の山ふかく藥からはやさて出たつほりに、さけすゝめければ、手水かたてに徤男の盞をとれば、あるしの翁、めくそおとしにまいらせろとて、家の刀自に、ひさけとらせぬ。かくて、やすの木の皮もて造りたる多能てふものに、よね、みそなど入ておび、腰に懸籠(かけご)てふものをつけて、能太といふ、からながきものして、くすりほりとる設にもたせて山路をわくるに、斧淵といふところに來けり。(天註――斧淵作于大河。)こゝなん雨のいささかふりても水いやまさりて、越しわつらへるなとかたらひて過る。

つま木こるをのの名たててうつ浪をなさやまかつの越しわふるらん。

安門川溯行

安文の河そひにくれれば、ふゝきの葉とりて八日をとらふ。柳の梢くだいて虫とり、いしふしをとりて夜万弊、以波奈、自婦のざこつるあないあり。安門、不介郝、於香以地古、かかる三のあら川の源は赤石の山かけよりいで、大河といふなるは於太企方多やまの麓よりながれ、遠爾可波弊は、岩木山のほとりに聞へたる、加字都か岳をみなかみとしてながるるなと。柳澤といふにいたり、辨財天といふいはほ(天註――辨才天岩在於安門川崖。)のほとりに到るに、文無いと多く、河邊ゆく沓もかくばし。いにしおととしの冬雪にわけ見しところなから、梢は青葉さしおはひたる夏の河ぐまは、今見しをはしめのやうに、いとめつらし。日の午ながら、行末に宿るへきかたのあらねば、鬼河邊のほとりに、すみすてたる柚やかたのあるに入て、いなこもに

再び柚小屋に[illegible]

めつかひ、へら、まどじやくし

流木の斧印

諸流を見下す

蕨、うどを折り

やまべ、いはなを釣る

ふかくひめおける鍋とうだして、よねかしぎたき、咩都香比に盛り陛羅にものし、万姑志夜具斯に水龎の汁をものせり。此やかたのめぐりには、流し木つみたるに、しな〳〵の斧じるしあり。ふしつる枕がみに河音たかく、こゝらなく蛙のこゑおもしろく、こや、「神名火の山下とよみ行水に川津鳴也秋といはんかも。」このこゝろも、涼しさを秋とやいはん、うべ、秋を鳴聲の涼しう、水雞、奴要鳥鳴ませて明たり。

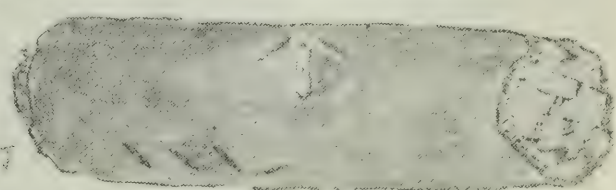
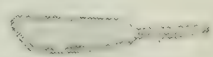
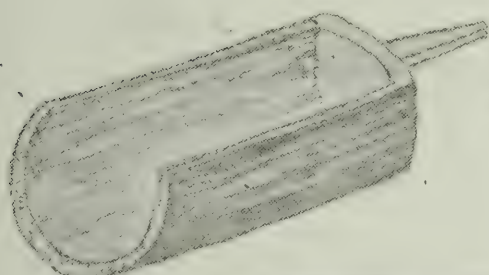
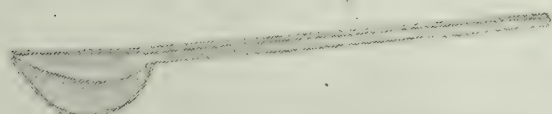
十七日。いまたくらきよりものして、谷川のなかれに、手あらはんとておりたつ。はやせのこゝかしこに聲したるは、「瀬をはやみたきちなかるるしら波にかはつ鳴也あさよひことに。」といふ歌のこゝろはへにかなひておもしろく、柴倉山の麓にまちかくわくれは、むかしや穿つらん、かなしきあとあるほとりには、峯のことき玉靈斤あり。枝折のみちのうちかほるは牡桂のひとくさ、冷翠金剛の花咲たるいはね小坂にいきくるしく、雪を探てのんごをうるほし、於介以知胡の澤にくだり、毛呂太奇の上よりはる〳〵と見下したるあやうさ。祠あるもとに、からうしてぬさとり、木々に身をそへて、

　雨とふり雪とくだけていはかねにもろたきなみのかかるはるけさ。

あやうげなれども見すてがたく、やをら見おへて、かつ、いろ〳〵のくすりかりくらして、於爾介波幣の、あるしもなき宿にふたゝび泊をさたむ。あらおら、水無月ちかき早蕨を雪の中

河原平歸著

村市を過ぐ

白澤村

に折り、うどのわかめをつみてこれを烹てものし、はた、軒ちかき川瀨に夜万弊、以波奈つり來て、あぶりものとせり。

十八日。ひのいづることをそき山おくながら、峯の梢しら〳〵とあけ渡れば出たつ。比波離澤、香布刀山、波夜差和をあとに、數介布などのやま〳〵を左に見やりて分來ぬ。よへの雨のなごりの露いとふかく、ぬれて、午の貝ふくころ河原平に來る。

誰か袖もひるまになりぬやまいくへつゆわけころも沾れて來つれは。

かくて日のかたふけは宿りたり。

十九日。あまはれの空くもりぬ。河原平をたち以知の渡をして、刀能衣阪をおり來て村市のやかたを過る。みちのべの籬ねに紫彩の空木の唉たるは、いまた世に見さるものか。

仙人の栖家ならましくれなひのゆきのかきねや里のうの花。

太秋村にいなんつとて、加奈世といふ淵瀨のなかれを左に見なし、いはきねを北に見やる。この峠の遠近のなかめいとおかしく過て、上太秋の、むらをさかもとになかやとして、ふたゝひ下太秋、白澤をへて（天註――下太秋村、白澤など、みな見しところなり、「雫のもろ瀧」といふ日記に精し。）、右に保雞澤など、馬こそあらね、このあたりの野をなへて牧といふめれ。枯木平の牧も、ほとちかければにやあらん。青平（天註――靑平、同名南部田名部のちかきに在り。）といふ處を見過るほと、岨たかく、谷川ながれみなぎる音とよみて、

雨いたくふるにぬれて、根野山といふ、家三四斗あるかたに

さして行をちの里こそいつこともしらね野やまの五月雨のそら。

猶わけぬれて、いはきやまの梺の野良になりて、行かひのすちに出て、吹上といふ小川の橋に大なる卒堵婆をかけわたせり、ゆへやあらん。雨のをやみしかは、

旅衣すそ野を風にふきあけの川瀨のなみもはれわたる空。

くら〳〵に百澤につくほと、雨又ふりいづ。たどる〳〵規房のもとに宿つきしとき、あるし

百澤村齋藤氏

家に在る身にさへつらき五月雨にぬれて古家のたひねうからん。

と聞へたる返し。

たひころもくちやはてなんさみたれに沾れにし袖をこよひほさすは。

なにくれかたらひて更ぬ。

二十日。この磐城山のふもと鬼神のほとりをかりて、大清水(なほしつ)のあたりをわけくらし、庚申のいしぶみのほとりをへてかへる。

廿一日。雨いやふれば、かたらひてまとゐし、くれたり。

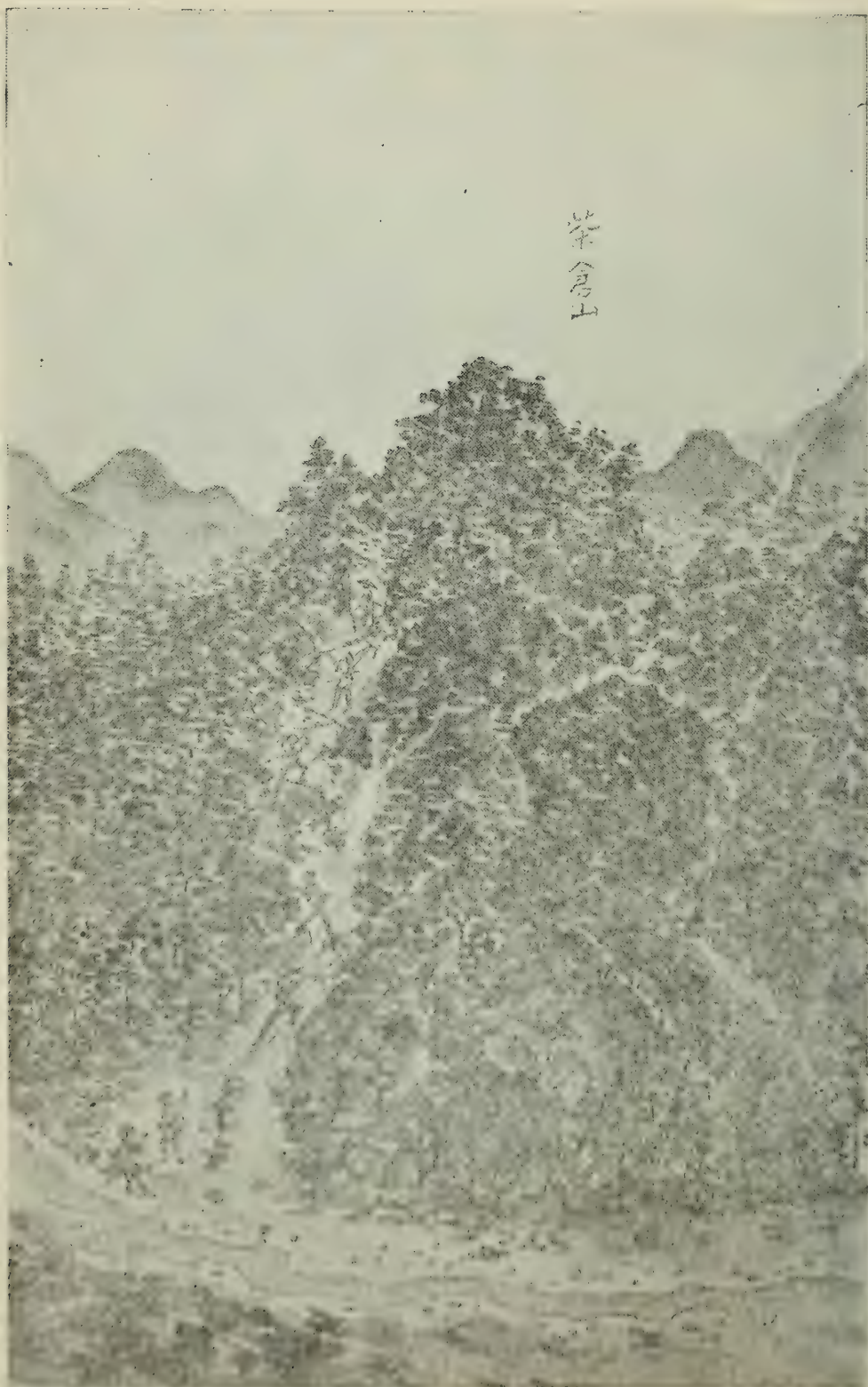
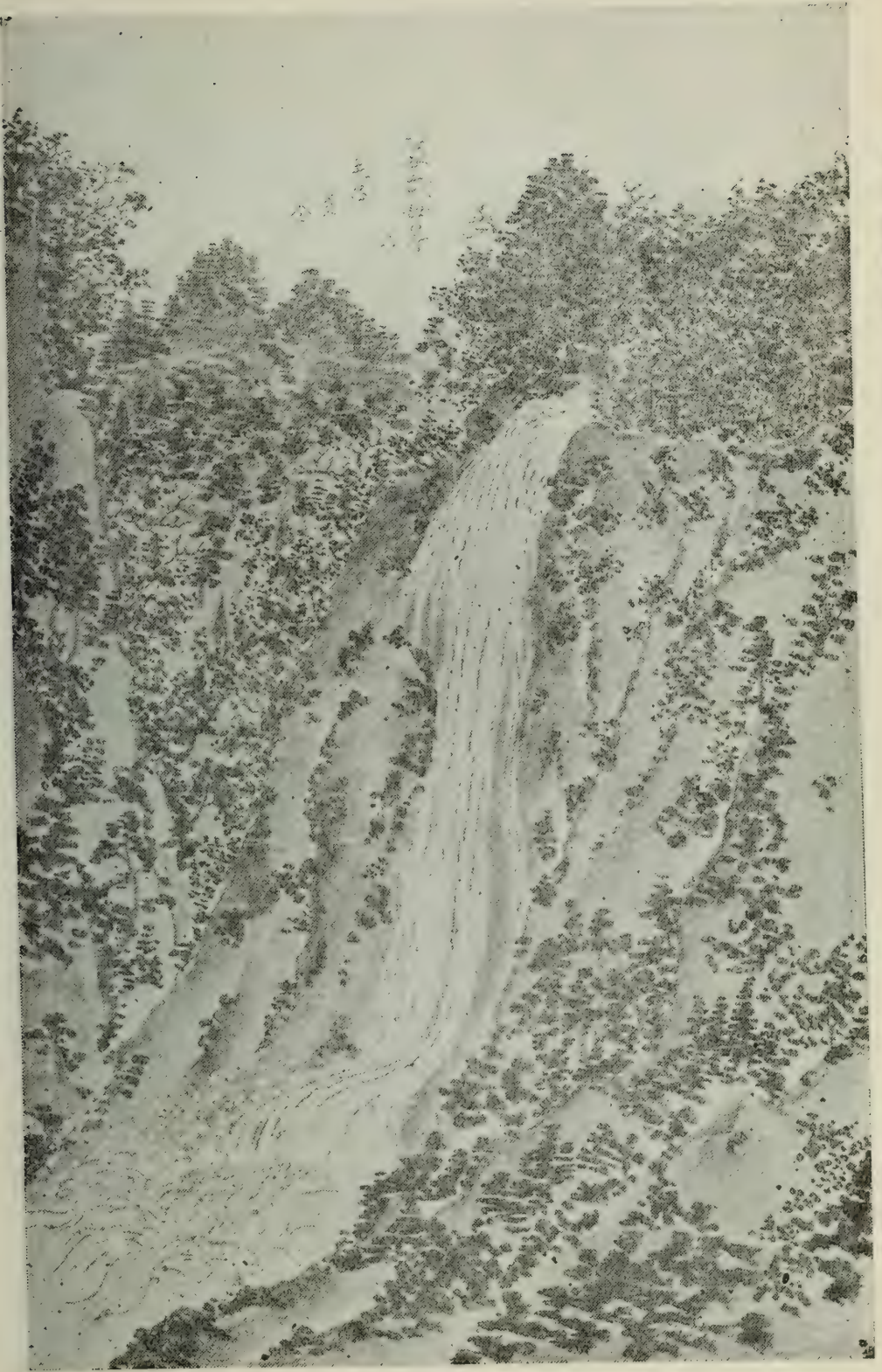
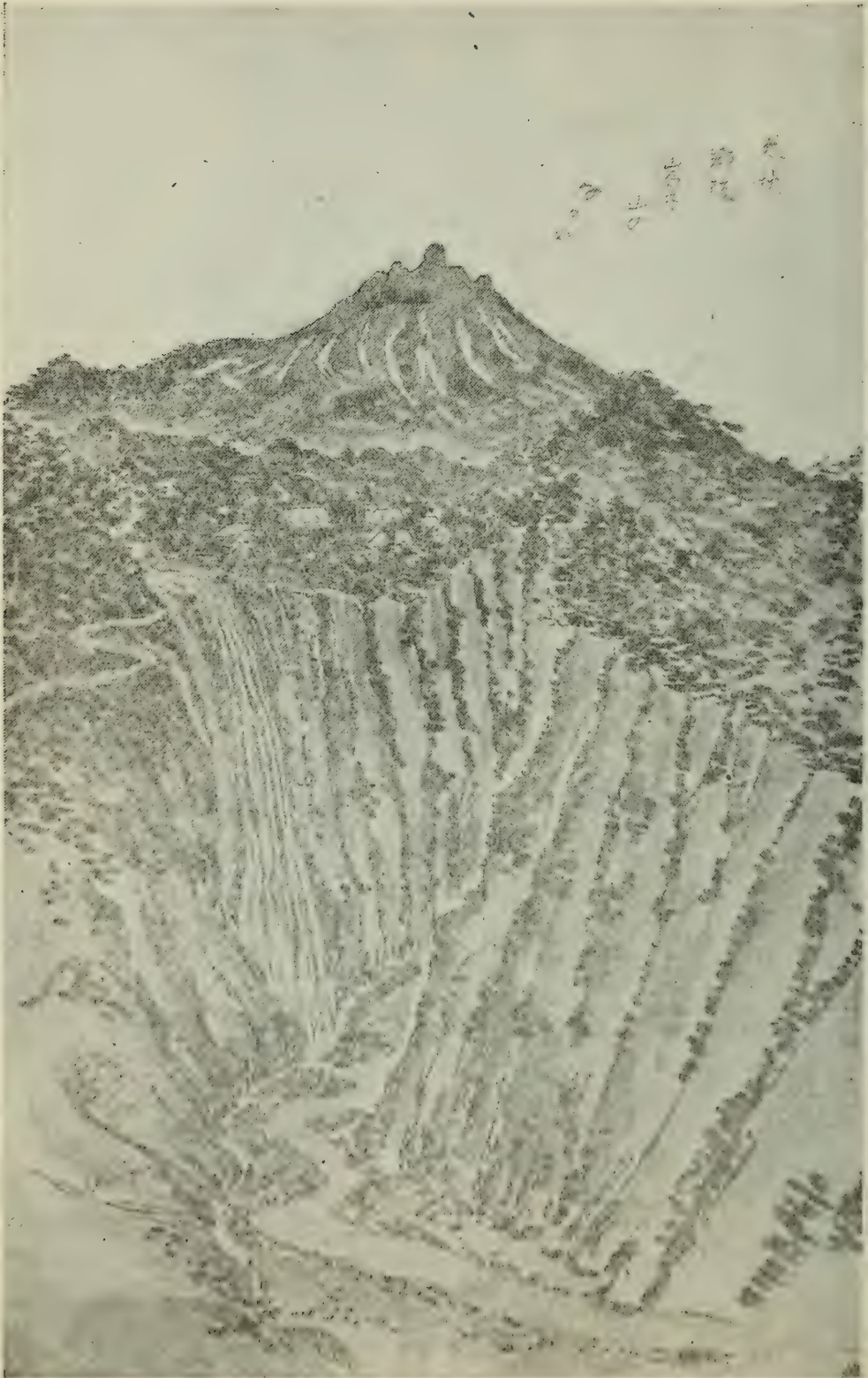
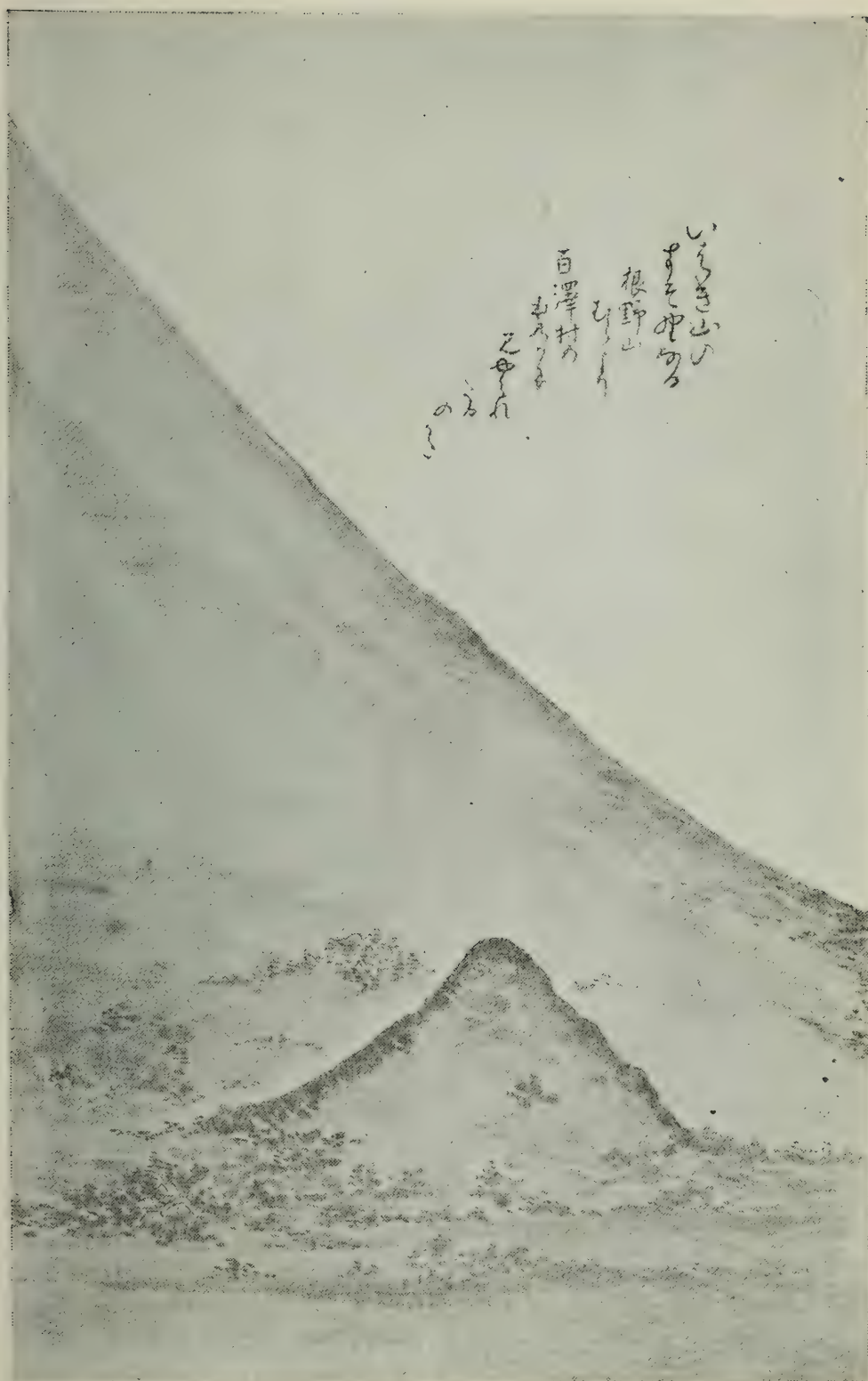
守山に登る

廿二日。毛利夜万にのぼり守山明神の玉籬のあとをたどり、しけりあふをけらの露にわけぬれて栗列(はまうつほ)を採り、柳葉菜をとりて久呂都地のかんやしろのほとりをいきて、やまべのみ

岩木山登山

五月の櫻花

綱曳坂

法晃坊泣せ

ちを清水にいてて、觀音にまうてて歸りく。

廿三日。いわきねにのほらんと百澤を出て、波斯多傳、久比連刀、遠登師能澤、左に寺の澤といふ名ある處あり、寺の、むかしありたりしあとゝなん。姨石、大黒石、このあたりを嶽坂とてかたらひのぼるに、交讓木、椶、檽正樹、山圍萎、乾歸、王連、水葒、古郝迺徵、委搖麼而、以波異知吳、そのとは、見もしらぬ木くさのいと多し。行めくるかた岨に櫻咲たり。こはいかに、山櫻の眞盛なるはと、人ことに手をうち見あきれて、そのもとちかくあふきたゝずむ。

　五月雨の雲かあらぬかたかつ尾にたくひまれなる花をこそ見れ。

雪のむら消たるあたりにわらびもへ、すゞのたかうなやゝ生ひたつに、すみれ咲まじり、岩間のつゝじ火のごとくもへ、木々のこのめは春とやいはん。

　櫻さくこのしたかけにすみれつみをりたかへたるつつしさわらひ。

ふりあふけは、いよゝたかき綱曳(つなはへ)といふ阪の、いくはくの太雪に埋れたる氷のうへを、あしをつまだて、またぶりを杖にてよぢわぶる。むかしは、このみさかにつなをひき、くろかねのつかりをひきはへて、人のとりのほらんたよりさしたりしとか。さりければ、つなはへの名そありける。いつの頃にかありけん法晃坊といふすきやう者、年ころ、このみたけにのほらんことをひたねかひて、やゝまうてのほるに、かゝるさかのなからばかりになりて、つゆ、

種蒔苗代の占ひ

頂の神祠

五色幣と白幣

あゆむことのあたはず。せんすべもなう、岩つらにもろ手をついて、あはれみたまへおほん神と、聲をあげてよゝとないたりけるとて、いまも、このこときいつたへて、綱はへ坂の又の名を、ほうかうぼうなかせと人ごとにいへり。うべ、この路のあやうさは、富士大峯にたぐへつべう。錫杖清水も雪のしたにながれ、劔箇嶺(けんかみね)は雲埋てふかし。雪間〳〵に差具良草の、白紫の色を交へてひし〳〵と咲みち、はかりもしらぬ谷を鳥の海となすらへて、火井に硫黄もへ、風井にかせふきいでていと寒く、涌づる雲は、いさなふ人の、をくれさいたちたるを見けつばかりたちおほへるに、躡雲雙屐冷、採藥一身香となんすして至るに、みたらしの水あり。これなん種蒔苗代とたとへて、葉月にまうづる人々こゝにつどひ、よね、ぜにを紙につゝみて、この池のこゝろに、いたくねんじてなぐ。かく投て、うけひき給はぬは、さばかり重きも、ちりなどの如くうきただよへれば、かのうちたるものゝ佃りたる田の實の、よからざるよしのうらひ、まさしかりけるとなん。みまへになりぬれば、生ひたつ梢もさらになう、岩は角のごとく組たちて、みかきをなしてめぐり、中に、ちいさきほぐらひとつを午未にむけて造り、西南の峯には鳥海山をうつしまつり、北なる峯を赤倉とて、岩鬼山大權現のおましあり。この、いはきねのことは、こと日記にいへは、ここに精しからし。ふん月のみそかの夜より葉月のもちを限て、としごとにまうづるのためしとて、こゝらの人、にゐまひりす

御幣づくし
御神體

る子等は、五色のみてぐらを手ごとにさゝげ、ふたゝびまうでのぼるのものしは、しら幣をとり持て、笛吹、つゝみうち、このみまへに到り、にぎてして祠のめぐりうち敲き、さはに至れりなど人のいへり。うべならん、さはかりふかき谷そこまで、幣の紙と串とに、いはむらたかく埋みなしたり。見たまへ、此御幣づくしをといふ。木のうれの尖りたるを、もはら、つくしといへば、かくは、あないのいひけらし。御戸おしひらけば銅佛三軀、石像一軀、こは岩木山大權現とあがめて、御前に、くろくすゝつける石の、まりの大さなるを石の臺にすへて、おなじほぐらのうちにひめたり。ぬさとりをはりて、かたはらの岩の面にかいつくる。

道奥の　於久のつかろに　ならひなき　山はいはきの
名にたかく　夏に花さき　秋太雪　ふりしむかしに
齋ひけん　御代安珠の　神籬を　とよみてぐらに
うち叩き　ねきこととなふ　こゑ／＼に　はらひはらへば
六の根も　清く淨しと　となへもて　いなほのうらひ
八束たる　とみ草榮へ　民草の　茂るさかへに
君も臣も　あふきいやまふ　このみやところ。

うこきなきためしを御世といはき山しつもる神や猶守るらん。

四方展望

いさ歸りいなん。山つととて、あない、玉遂をとり土馬駿をとりて、万年艸は、かれこれなとあらがひつみて、陛に遊龍のあるかことく葒草の生ひたるを採り、爾良波万都を頭の霜と折かさし、見渡すひんかしは弘前、靑森、西に鰺か澤、深浦の湊、南は雌谷(めや)のやま〳〵雲のひま〳〵にあらはれ、北は小泊の浦、夷のちしまは雲と浪とのうへにうきたゞよへるかと、晴たる、よもやものなかめは殘るかたもなう見やられ、かへさは岩群にはらばひ、雪の柴舟にからくしてのり下り、雨に着る蓑川のなかれを渡り、小石たばしる霰坂を過ぎ、姨石をへて暮たり。

だけ温泉へ

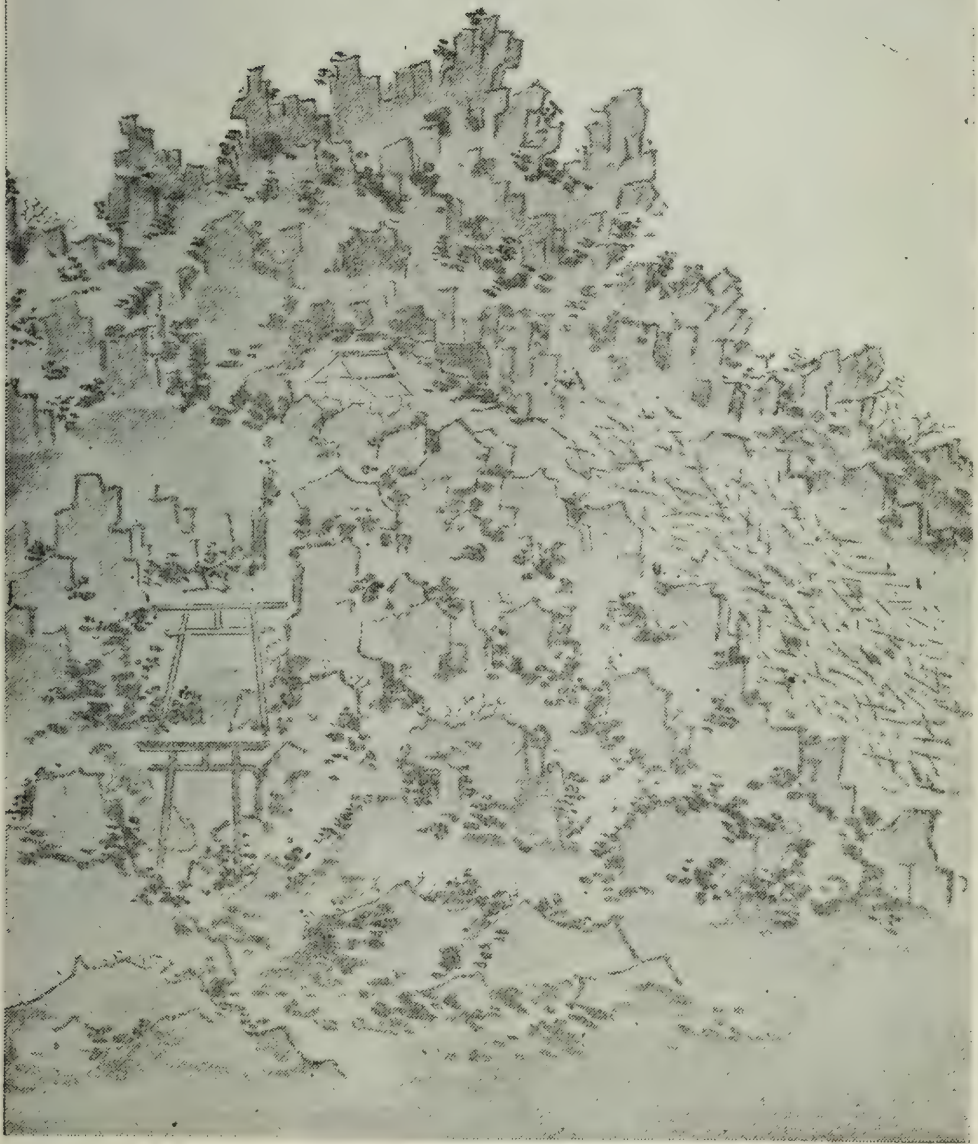
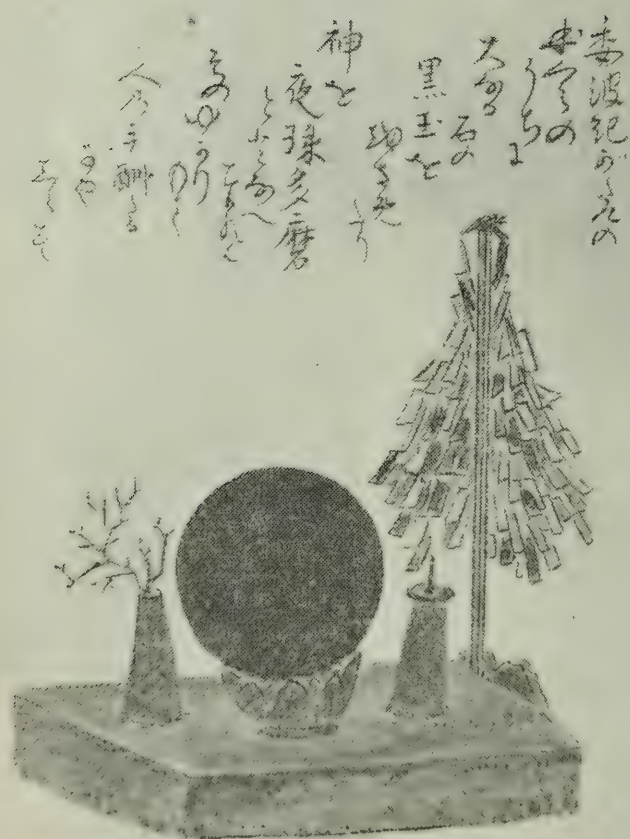
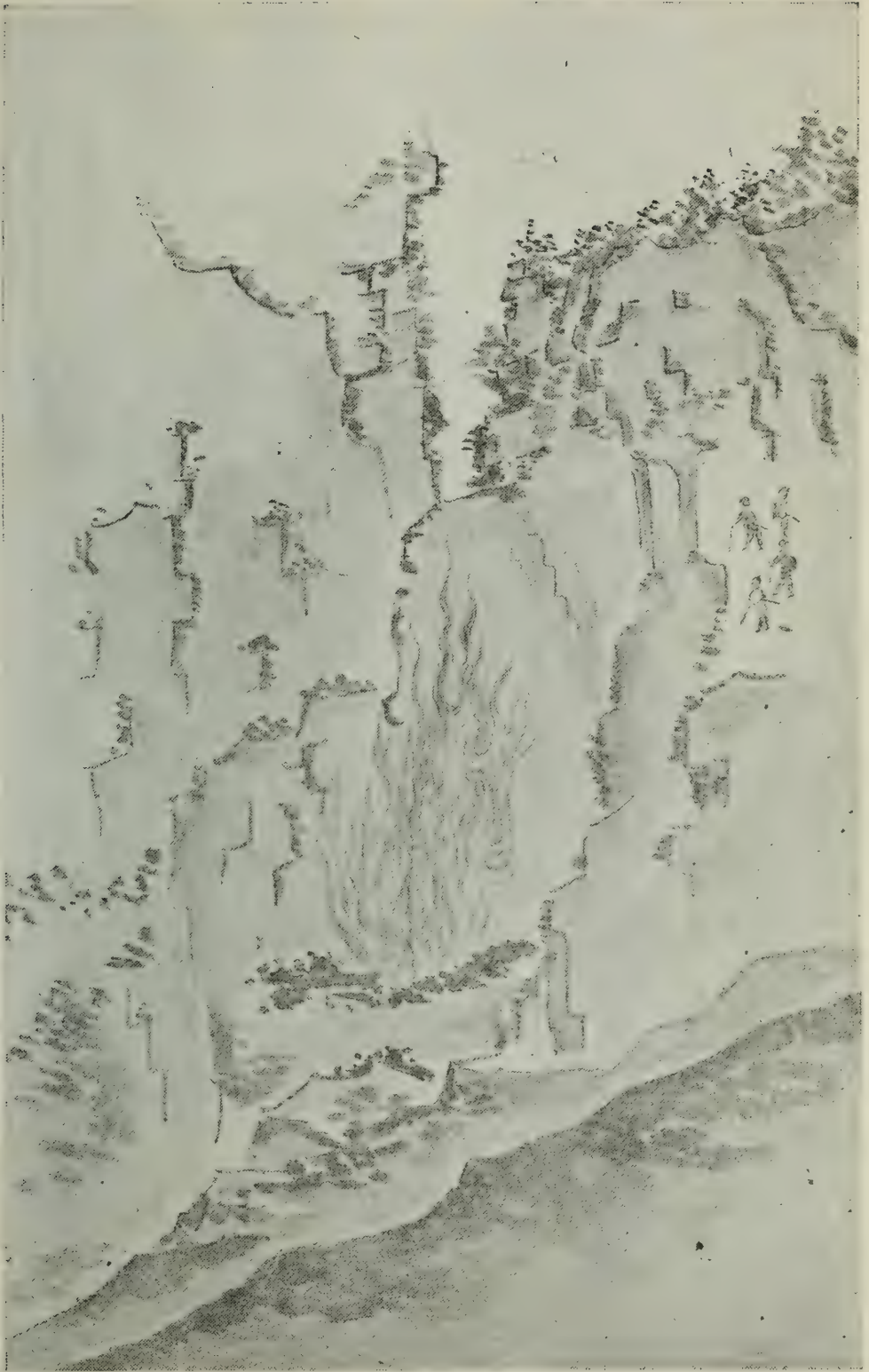
ひやこ川

廿四日。けふは陀雞(だけ)てふ温泉のもとへとてひるよりたちて、森山を左に長者杜を右に、野良ゆき、澤つたふ。このあつさ、かゝる雪のみたけをあふき見ても、露涼しさは身におぼへずとて、馬ひきのあせわくがごとく、なかるゝ小川にまそでひたして、あなひやこ、まことの比夜古介波とて、木の葉采て水むすびあけ、いきもつぎあへずひたのみにのみて、うまひきたてていにき。かく見て折句うた。

ひさなかはやすらひゆかんこのもとにかせふき水もわきかへる音。

うへ涼しう、かれと友におりたち、むすひてすぐ。黑森、中山を見過て手斧杜の麓の野良、嵩てふ湯のやかたになりぬ。近きとしまでこの温泉は、奥なる谷かげにありたりけるを、ここ

硫黃氣强し

連る山々

にうつして、陀雞の名いまは此野良に在り。あらため家作り、溫冷のふたつの湯ふねは、かけ樋よりはる〲とさりて、やまうど集ひ、叢生にいなりの雞栖あるに、人わけまうでたり。

廿五日。雨は夜邊よりそほふるにぞ、つれ〲と、いふせき窓に暮たる。

廿六日。きのふにいやまさりて雨のふりたり。

廿七日。あしたの間くもりて雨ならんといへど、岩樹山のふもとふかく加禰久良夜万を見やり、湯の澤とて、山川のたぎちながるゝ水をわたりわけのほれは、硫黃堆といふ。かの、いてはなる鳥海山になすらへし、此いはきねの、ひだんのなからに攀て至るに、ところ〲湯のけふりいやたちにたち、あるは火ともへ、こひぢの浪の湯をかへらかすがごとくに、ふち〲とわきたばしる泉あり。山はなべて、そのにほひ風に吹まよひ、わきざしかたなの、つは、めぬきの色すら、みなくもりうせたり。谷かげに白虎あり、いはゆる理石にやあるらん。此靈黃は石硫赤、石硫靑、うのめ、たかのめなるくさ〲のあれは、げにや和同六年のいにしへ、みちのおくの硫黃を奉りたりしも、この山なともや、もとしたりけんなとかたらひ集ひ休らひて、むかふ南は馬の背山（赤石川源）、中村川のみなもとの山、中野澤山、前川山、大然山、ちかきは以波能畔、九十九森なと見やりて、手斧山の麓に澤水を渡て到り、山に探る以波万兎、委波伊知吳てふものは、世にもまれなるものか。

湯段の温泉

一本杉

あかしまやなきはな

十腰内村長見氏

廿八日。陀鷄の湯のやかたをたちて、湯谷(ゆだに)いて湯のやかたに至る。此みちのかたはらに、うへは、まはにのことく、ゆの澁ながれかゝりて、田井のやうなる處あり。この土を馬の好てくらふ。湯も、しか有馬にたくふなど、あない、いさゝか采て、いまは馬も、草多かれはくはじなど。

霜ふりてかるとかれなはくさもなみ野はらのまはに駒やはむらん。

枯木平の牧、冷水の澤、杉平、右に一森、黒森、遠姑斯の澤、左に黒山、手代山、松平(たひ)村になりぬ。かくて土倉坂をのほり、白澤、又の名をあしやちといへる處の、一本杉といふやかたに來て宿つきたり。(天註――白澤といひ、あしやちといふ。しら澤のおなし名太秋のほとりにもあり。「雪のもろ瀧」てふ日記のうちに、うた唄し女すみたるは、こゝのしら澤といふ人あり。)

廿九日。雨いたくふれば、おなしあるしのもとにつれ〳〵と暮たり。

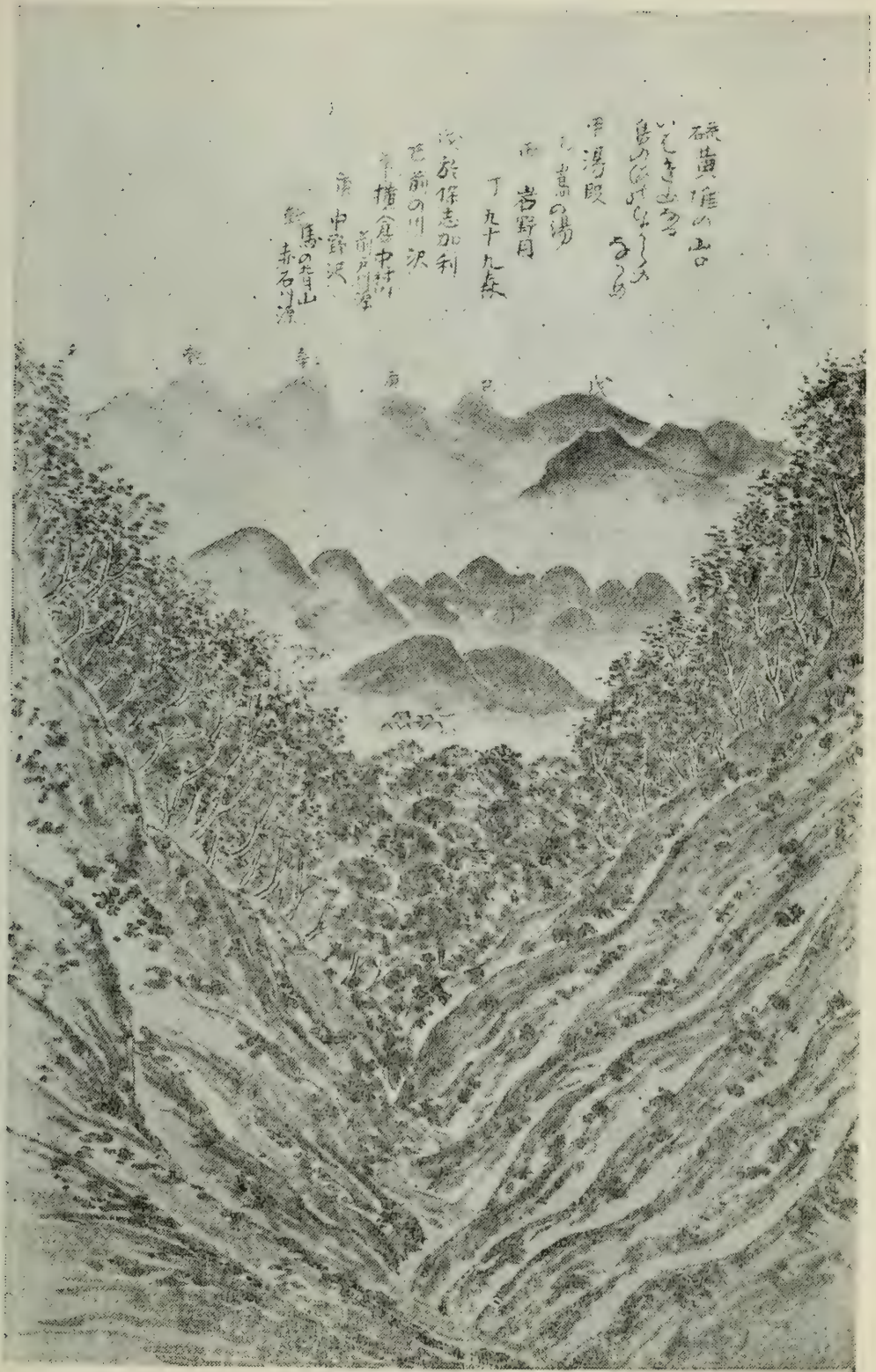
三十日。中邑川の水上わたり瀧の澤のやかたを左になして、古館とて、やかたあるもとより七曲りといふつゝらを過て、磐城山の裾野笹平(たひ)といふ山を左に見て、生ひしげる黄連茶(はたつもり)をとへば安加司馬とこたへ、柳葉菜をとへは夜奈企波奈といらへたり。丁子小平(たひ)をへて、右に石山、大伊勢鉢山を見て野行はる〳〵と長平(ながたひ)村に入て、野路遠う十腰内觀世音のかたはら、これを神といやまひつかへまつる、はふり長見(なさみ)なにかしのもとにつきたり。(天註――この觀音菩薩のことは去年記したれば、もらしぬ。)

湯股
岩野目
九十九森
於保志加利
中野沢
赤石川源

全休業の日

赤倉嶽登山

大石明神の石割杉

險しき谷川を溯る

徽寧都企の一日。あさひらけの空いと涼し。けふは、いとなき業もなへて休らふ日なれば、秣もからず田草もひかず。此一家もしかりなといひてとゞめつれば、うらふれのこゝちあるにまかせて、人々もとゞまれり。としごとのためしなれば、ひのゐちぞくふめる。

圓居して身にしむはかり涼しきはむかふひむろの宿のあさ風。

かくて、かたらひくれたり。

二日。つとめてくもりたれど朱鞍が嶽にのぼりてんとて、右に獨活盛(うごもり)山左に猫杜、あるは介兀具羅毛離、雄槻山などかへり見つゝこの比夜姑川わたりて、野中に松の一群たてるは大石明神とて、御前に大なるふし岩、たち岩のあるあはひに、石割松、いしわり杉の生たり。その大杉の下枝に紙をひし／＼と結ひ付たり。こは乳の乏しき女の願ひ、はた、懸想しける願ひもありて、おもひあふいもとせのなかのいく世を、杉のもとつ葉の、かはらぬ驗をうるとなん。谷川さかのほれば、早川の瀧とおち淵とよどみ、あるは石の樋の如くなかれ落る水のすがた岩のすかたも、作りなせるかごとく、きしの高さいくそはくならんや、水のふかさ、いくひろといやいはん。そひへたつ巖をつたひ木末をたはめて、みな、ましらのふるまひをして、からうして登得しは綱を投おろして、これをたよりにひきのほれば、ゆくりなう人の來るにふとおどろかされて、胡鸞おほく、岩のはざまにはねをふためかして、空に群れたちまどふ。

あまとりのすくふいはほをよちてしも又そひへたつ山のたかけむ。
はかりなき溪は雪にかいい埋れ、ふりあふき見るいはねにも雪のいたくこりかゝりて、雨のごとく下とけ落る雫にぬれ行を、あしとく過よ、碎けおちば雪にうたれ埋れしなん、と、よばふこゑ〳〵も水音の早くとよむにまきれて、えしらさりけれど、うちまねけばそれとしりて、あゆみとうして、猶ふかうわけ入る。こはいかにぞや、わけ來し野邊も、なでしこ、ふちばかまの、秋まちかほにひもとき初たり。いはむらに櫻咲たるはと、見あさむまで見おどろかれるいろをかつ見る〳〵至り、この山櫻の盛なるはなさ、うへ、こゝろなきあないの山賤すら、六月のかばざくら見よやとて、折かさしたる風情たくへんかたなし。

折得てもゆめかうつつか花の雲かゝるさかりをみな月のそら。

けにやあらん、この月の八日はかり、いてはのくになる月のやまに、はせをの翁ののほられけるに、「三尺はかりなる櫻の、つほみ半はひらけるあり。ふりつむ雪のしたに埋て、春をわすれぬをそさくらの、花の心わりなし。」と、おくのほそみちてふふみにありしはさ、いまこそしられつれと人々にかたらひ、生ひしけりあふ木の枝ともを、あなゝゐのことくふみもてわたり、いはほにしげきかづらをたぐり、くさむらをうかゝへば支連まれ〳〵に生ひ、鐵脚威靈仙のありて足にまとひ、たもとにかゝるをはらひやり、やをら、いたゝきにほどちちか

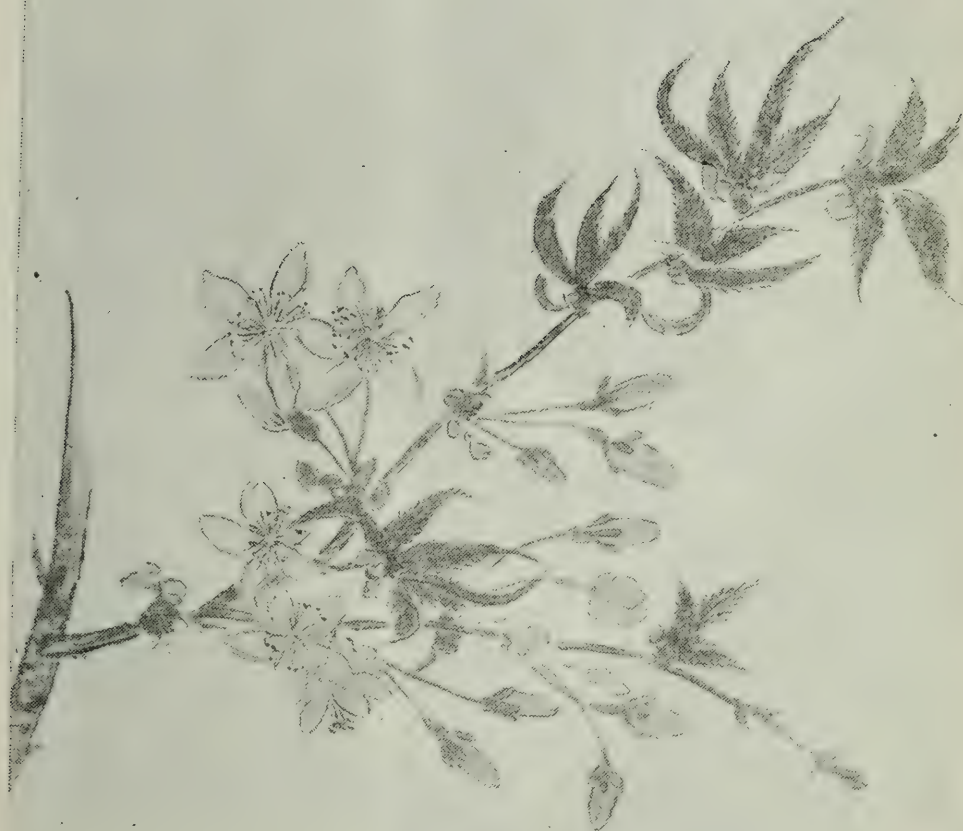
頂近し

けん。こや、いはきかたけの北ひらのみねなる赤倉か嶽とて、つねに、雲霧ふかくたちこめて、ほのくらし。遠きむかしには、この山の麓よりいはきねにのほりまうつるに、まつ、このあかくらがたけを越へしかと、いとさかしく、身をあやまつことをり〳〵なれば、とゞめて、今は百澤をふもとゝぞせりけるとなん。磐城山の三のみねのうち、岩鬼山とて、此あかくらをあかめまつり、おに神もかくろひすみて、をりとしては、あやしきものゝみねによぢ、ふもとにくだる。

大人、山のおつこ

その身のたけは、すまひのをさよりもたかく、やせくろみたる、そのかたちを見し人あり。そのすかた一め見ても、やまうおこるものあり、はた、それになつさひては、はらからのことくむつび、酒さかななとをとらすれば、つと、のみくひて、そのかへりみとて山の大木を根こしにし、あるは級の皮はき、馬二三かおふべきほどかゝへて來てくれけるなと、よりつとひてひそ〳〵とさゝやき、それを大(おほ)ひと、やまのひと、あるは山の翁(おつこ)とて、山ふみみちびきするあら雄らとも、おそれわなゝきて、えすゝまずして、かく、あやしきことのみかたりあへり。もとも人至らぬ山おくには、かりに氣をむつひて、ものゝあらはるゝためしもやあらん。はた山都、山姑なといふものもあるてふことのあれは、このあないとものいふにまかせて、いかゝとためらふほと日は西の梢にかたふけは、かくては此あら山中にくれなん

下山

と、もとの梢をつたひて、いくはくかたかきみたけの岩むらより、からうじて谷に下り、いは

ねをよぢ雪のたかねをくだり、谷川つたひにわけ出れば、空なんかきくれ雨のふりくれば、これや山の人のなせるわざならんかと、みちとく、あないぬれさいたちて河原行て野はらになれは、大石の神のひろ前にしはしぬさとるほど、いよゝ雨のふりにふるを、さちに笠やとりして、をかみとのゝはしらにかいつくる。

委泊祇やま　そひらのみねは　明玉の　塵やつもりて
あかくらと　となふてふ名の　いやたかく　たきちなかるゝ
河くまに　祀るもひさし　涉寶巽始の　神のみかきは
をのつから　松と杉との　相生ひに　誰かたねまきて
いはのうへに　根さしもふかき　契りかな　里のその名も
騰居斯寧衣　ときはかきはに　たくへなん　千代よろつ世と
うこきなき　御代を守の　ためしなるらん。
岩の上に生ふる松杉見てそおもふ榮行御代を守るへしとは。

紆度毛利に雲集ひ、月山のかげいやくもりて、くらくになりて遠差美か宿につきたり。

三日。夜邊より、板柳邑にすめる高屋玄棟といふくすし來りけるにかたらひて、雨の日のものかたりに、つれ〳〵もしらてくれはつる空の、いさゝかはれて月のほそくさしいで、崔公

鳥さへ鳴たり。

ほとゝきす名のみゆふへに三日月のかけほのくらき山もとのやと。

かくて更たり。

四日。あまつゝみしてこの宿を出たつ。來し長平村にわけいで黑澤をわけ、石火箭坂をくだり屏風長根といふをおりのほり來て、長間瀨村といふにかかり前戸川わたりて、濱橫澤といふ村につく。このみちすがら、保多留久左しげうありしかば、

濱橫澤村

きしの波よるはすだくかほたる草おほかるさはをわけいでにけり。

この村は、むげにわびしき山里のやうなれど、鰺か澤の港邊にいと近く、なにくれのたよりいとよけん。さりければ、はまよこさはの名もありけるとか。

五日。よんべよりの雨いやふりて、めにちかき松長根といふなる高岨も雲ふかく、河水とよみなかれたるに、里人來集りていふ。いつも、さつきの田植はてて、手あらひ水とて、河水のふかくながるゝためしあれど、ことしは、さる雨もいまたふらねば、いたくやふらんと。けにやあらんいよゝふりまさりて、きのふ渡來しふたつの柴橋もながれ、窪田に水みち、あげ田もあふれ、あちかさはのほとりにても橋おち家流れしなど見るがうちに、人々なげきさまよひ、なか〳〵のさはきなりけり。

五月の手洗水

六日。水おち雨はれたれど、川なんいとふかう、行ことあたはじとて、おなし宿に、けふもかたらひて日はくれたり。

七日。濱横澤をたちて、長間瀨、横山、羽立、小野畑などいふ村ども見へたり。鍵懸(かんかけ)坂ひとつ越し來て、黑森をさして、湯に通路をよこぎれて長阪を上れば、館前とて、ふる柵のあとのほとりよりからくして河わたり得て、目內崎、漆原のやかたをも過て穪里の村長が家に中宿して、行みちのゆんで、めての田面、ことごとに波うち入て荒たり。鬼袋といふ村のありけり。わきて此あたりの田は河そひに佃てければ、岸なみうち越し田も畠も淵瀨となりて、世の中のうれへとて、里の子等うちなげいて道造たり。

河水に鬼俗さへほころひて田はたのこらすこほれ祉すれ。

と戯れたるは似つかじ。挪波須山を見やり一ッ森村も過て、大然村につきたり。この村のしりに桐山ありて、大なる白鐵樹のいやしげりたり。前は、師可黎か嶽よりうちつづく大嶽のごとき巖(くら)壁にて、人の登るべうちからなし。この、みちのおくの、もゝのかんみやしろのうちに志加利和氣の神おまします。しかりわけはもと鹿獵分(しゝかりわけ)のこと葉にして、この然も、そのことばの、それがよしにや侍らんか。かのかん籬は、南部森岡に近きほとりにおましましき。」河邊見めぐり村はつれば、末迫りて行末なく、ほのくらき山里なり。

八日。川水ふかく、此山おくに藥採ることもえせで、ふたゝびきなんといひて、きのふのおなしすちを目内崎村にかゝり、山路をわけて姨袋といふ村にいでて行みちもなみ、河水にやぶられ行すべなう、大野坂をおりて濱邊にいづ。櫻澤、柳田なとの村々のさはきいふへうもあらず。闢村に宿つきたり。

闢村に至る

九日。はれたり。風合瀨に中宿して深浦に夕附て來る。相知りたる里圭の宿も去年の秋やけて、とまふきの門音信てなにくれとかたらひ、濱町に至り、あな久しなど、なりむつひたる人々とひかたらひ、去年宿りし和介差夜なにかしかもとに宿つく。竹越の屋戸のあるし、

深浦にて

かたり合にをりよくかせの薫りかな　里圭

といふ句してけるに和句。

秋とあさむく庭の眞淸水。

又、相しれるかもとより、

まれ人にこよひはましるすゝみかな　其柳

友たる友と見るなつの月。

十三日。このあまはれに、大間越のさかひはるかにわけ入らんと永貞のいへれど、このころふかき水のみわたり、あつさにくるしみたるけにやあらん、われのみ藥なめて、この浦にと

舟神樂

丹後船ならぬ誓ひ

獅子舞ひ

まくちの觀音祭

とまりたり。

十四日。舟神樂といふことして、舟に、しら幣おしたて笛つゞみにはやし、なにまろ、かまろの、かゝりたるあはひをこきめぐる。

大船をかぢのまに〳〵やすらけくしほの八百路にはらふはふり子。

ときの間に小雨そほふり來けり。

十六日。丹後船やあらん、このころうちつゞく雨、たゞならぬ空なことさたして、こゝら泊したるふねのこりなう、かぢとり、ふなをさ、みな神のひろまへに集めて、いはき山の牛王寶印をのませて、たんごのくにのものし、わきて由良のみなとべの人をいみ給ふいはきの神なれば、さる國うどはあらざるよしのうけひぶみに、みな、つましるしをそしたりける。

十八日。神ぬしあまた、笛つゞみにはやしもて、「寧樂の都の八重ざくら、手折ば袖にちりかゝる、いろなる花は匂ひあるもの。」と神歌うたひ、あるは獅子頭まはせありく。門々、濱邊、にぎはゝし。

十九日。万久知の觀音ほさちの夜まつりして、いと高きみさかのうへなるともし火、うちよる磯邊の浪を照して、みるめも涼し。

二十日。この觀世音を、れいの神といやまひ、ほふり、神樂し奉る。此ことはつれは、泊した

る國々の舶子とも集て、濱の眞砂のうへにてぞ、法樂のすまひせりける。やといふほともあらでまけたりしかば、はと、手をうちてわらふ聲、潮のわきくかとおもはれて、

莫名藻のなのりもあへすいそのなみ寄てすまひのうちまけにけり。

夕くれちかう、とよみ聞へたり、いまた、をへざるにや。

人魂火

廿一日。戊ひとつ斗ならん、くゑまりの大さなるひかり磯山より北をさして、うなのうへにて、星のごとく三にくたけてちりたり。

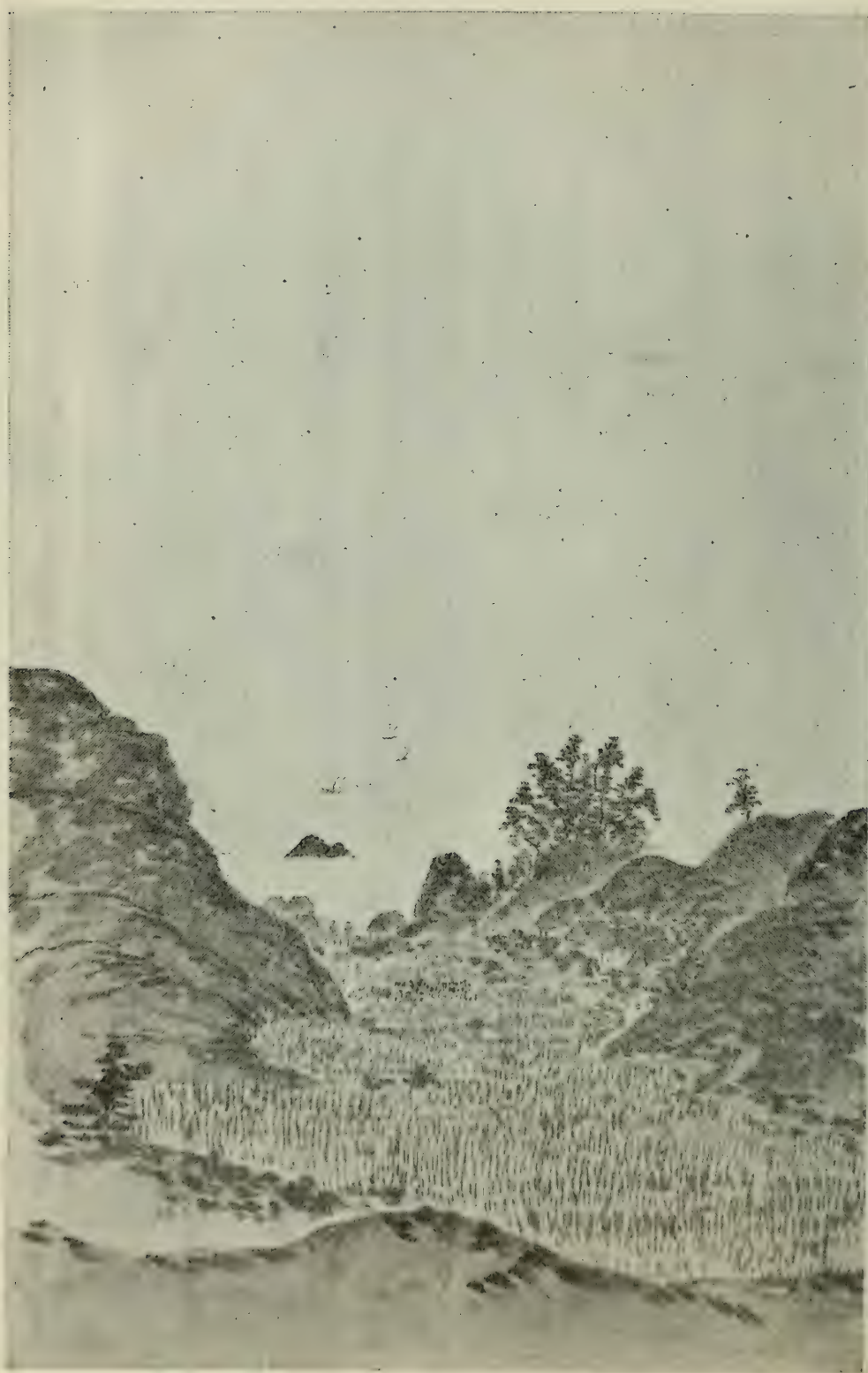
愛宕の夜祭

廿五日。此ころの雨にさはりて、袁黨企の神の試樂こよひそしたりける。その、みあかしのひかり濱邊よりのそめば、いと高やかなる木のあはひにはる／＼と見へたるは、あめなる星かとたどる。

六角澤また琥珀澤

廿八日。永貞の、きのふ、西なる磯より歸り來ければ、ともなひ、この浦輪の山六角澤といふをわけいらんとて、木花開邪比咩のみやところあるにまうてて、千葉彈正のすめりしふる柵のあとを左に、かくて六角澤になりぬ。この水のくまごとに、立石、ふしいしのあるは、みな松精、黃珀のごとにて、うてば碎けてちりぬ。さりければ琥珀にたぐふ石多くあるをもて、もはら胡波具差播とやいふべけれど、浦人らつたへあやまりて、六角のゆへさらになき名の此澤にありけり。いと大なる七葉樹のしげりたるほとりに、莓のしたたりのやうにておち

やましまたへ

多太羅

くる瀧あり、きのふ、けふの、日のはつか照りても水あせき。名を箕輪となん。

人ことにむすひほさまし雨にきるみのわの瀧は雫のみして。

かくて、おなしすちをわけ出て歸る。

廿九日。夜万志滿多といふ太山に入らんとて、吾妻濱の奥なる、しほがま六柱の神をうつしまつる木ふかき杜をゆんでによぎて、加奈差香のしたより、八十一隣比畔の神おましませる眞木たつ森をわけ、美南微麼駄山のこなた淤寶玖樂とて、そのたかさやいくはくならん。麓行水のみわたりて、巨母黎阿奈といふいはやどのあるに入て休らひ、とばかりありて、ふちせつたひにゆく。左右のいはねたちそびえ迫りて、この河水のいとはやたぎりながるゝさま、画に見たらんがごとし。わきて多太羅てふ名たゝる處の水のときが、こゝらの岩にへだてられて、みなわさかまき、とよみながれぬ。過來しかたをふり返りあふき見やれば、あらそひたてる岩のすがたなど、たとへつへうものなし。猶ふかう入ば、下路（おりぢ）といへるところ、洲楯山近う追良瀬山のさかひに入るなどいへど、探る藥もあらねば、銚子口といふみわだより、いざいなんと歸る。山には雁翅檜、蒼官枝をきそひたち六亭剤、獼猴桃こだれかゝりて、みぎはくらし。かくて、おなしみわだを里近うわけめぐり出て、田井に水ひきわたす井堰の水際に、しら幣のさしたるを、おしうごかしたゝすみて、

みそきするわさこそなけれそこひなくこゝろもきよしやま川の水。

やをら、あつまのはま田露ふかく見て、海の面に日の入はつる夕汧、風涼しう、みなとべのやかたにつきたり。

七月一日

布眉頭貴の朔。不香紆良のみなとべに在りて、ひましらみゆく窓のうちに、

ふる里の夢はなこりもなみまくらうつゝに通ふ袖のはつかせ。

雨の、よべよりをやみもなう、いやふりにふれば、藥採るのわさもなけん。

帆立貝化石

二日。はれたるうなの上いとおかしう見わたして、ふたゝび六角澤をわけ溫泉の澤をめくれば、石牡蛎にたぐふて大なる保多天貝の、落葉のくち重りたる如く岨ひらの土の中よりほりいづ。しのはらをかいわけ鷲の巣やまに入れば、いさらゐのごとき澤水のなかれに、たかねよりおちたるこゝらの石ともは、金鐵屎の如く鐵色にして、いはゆる生薑的、繩的にたぐふ。はた蛇含にたぐへる石あり、空綠にくらふれば、もともその色うすき石あり、白青とやいはん。左布奈加尼といふところに、はだすゝきわけ出て休らひ、あな涼しと見わたす。こゝのいそやかたをはしめ蝦夷の島山なと、見しりたるところ〳〵の、繪にうつしたるやうなるあら海のさまなり。

眞帆かたほふねそ行なる海ふくも野邊よりわたる秋のはつかせ。

激煩久樂

太多良

深浦を立つ

糯米土

追良瀬村

かくて深浦に歸り來つれは、

　攀のほる都多たとりて「や藥採り　　里圭

といふ句かいたるふみの贈り來けれは、ふみてのまゝに、

　露に沾たるあさの小衣。

と和句せり。

三日。けふ、ひるよりこの浦をたちなんほりに、相しりける波丈のさふらゐに、人の行にたぐへてやる。

　あはてけふわかるるものか秋のかせ。

かたらひむつひし人々送り來りけるに、磯へたに至りて別たり。

　又こゝにいつかしきねんたひころもうらの秋かせたちわかれては。

去年の夏たち別しころ、いつ行逢の阪は越へなんとなかめたりし坂中にたち休らへば、糯米土あり。これなん、もろこし人の衣を浣ひ、白甆器坏を燒くのたくひにして、さぬきのくによりいづる陶つくるの土に、いさゝかことなるか。浦つたひかたらひつれて、廣戸の浦やかたもいとはや過て、追良瀬にひるつきたり。夕くれて、

　まほならぬかけもあはれと三日の夜の月にものうき山本の里。

見入山に登る

鷽木村男女忙し

あけなは、この山やからなん。

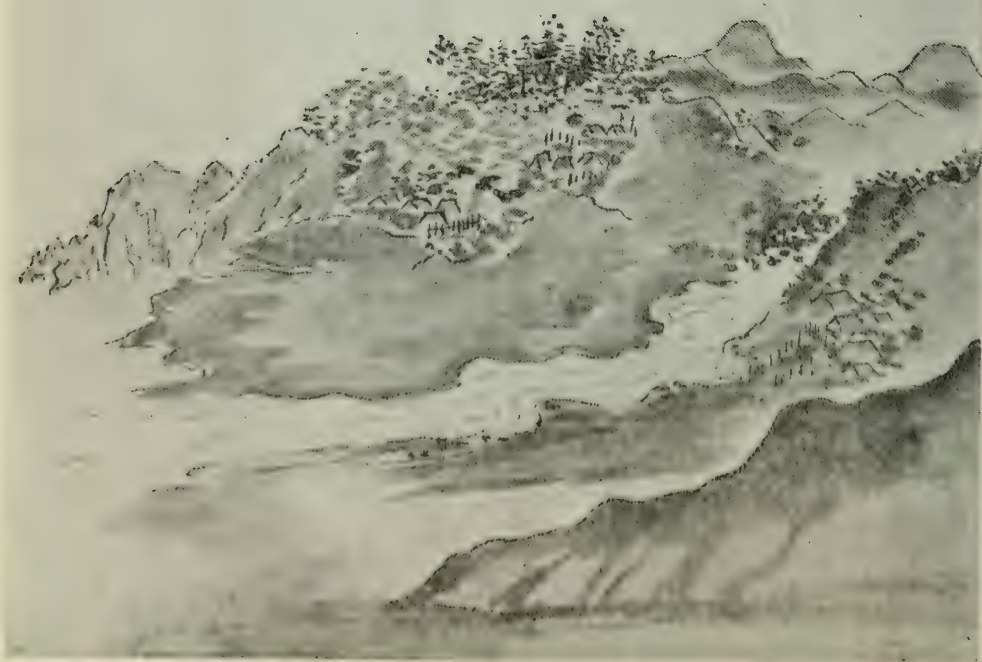
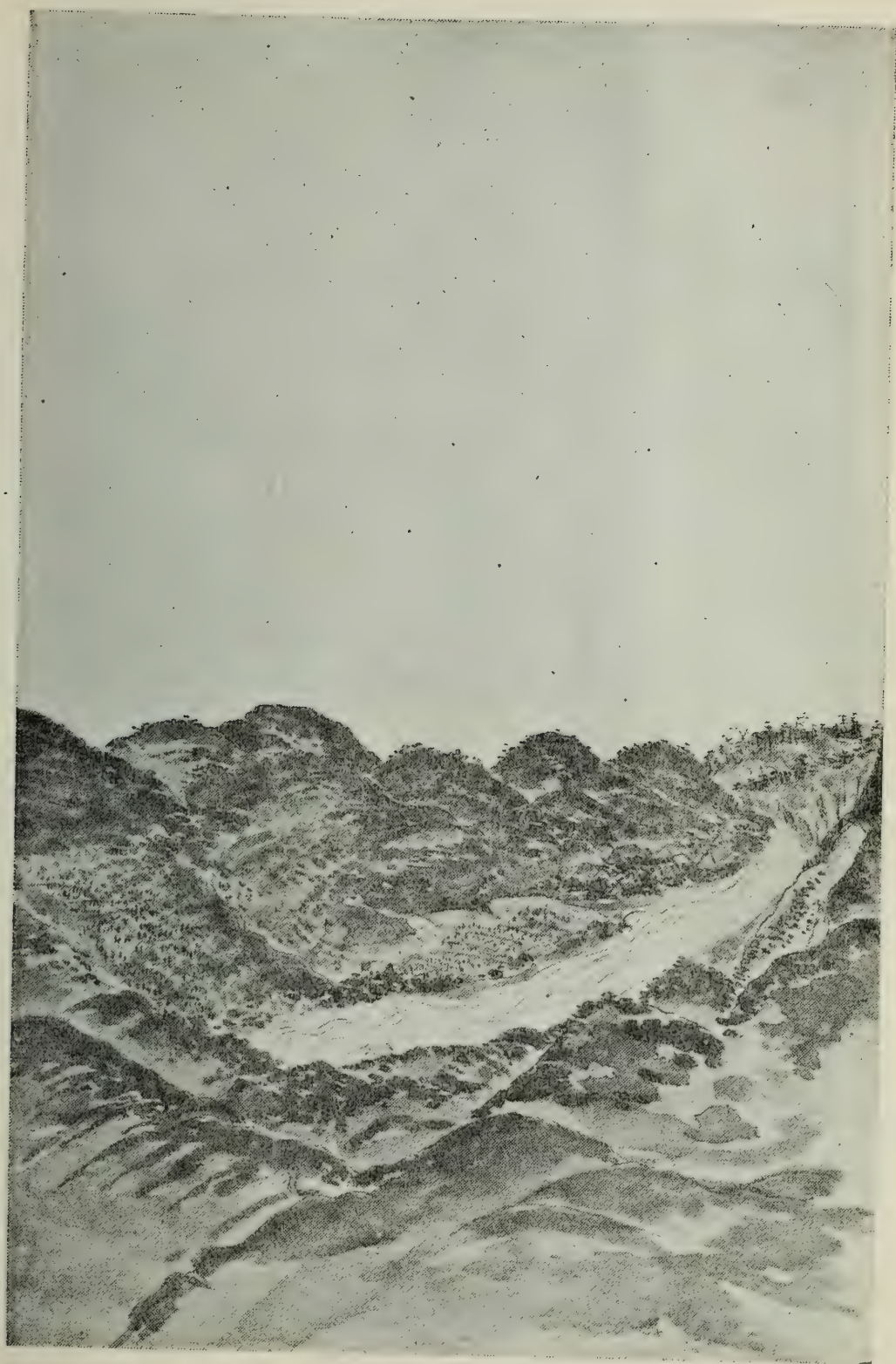
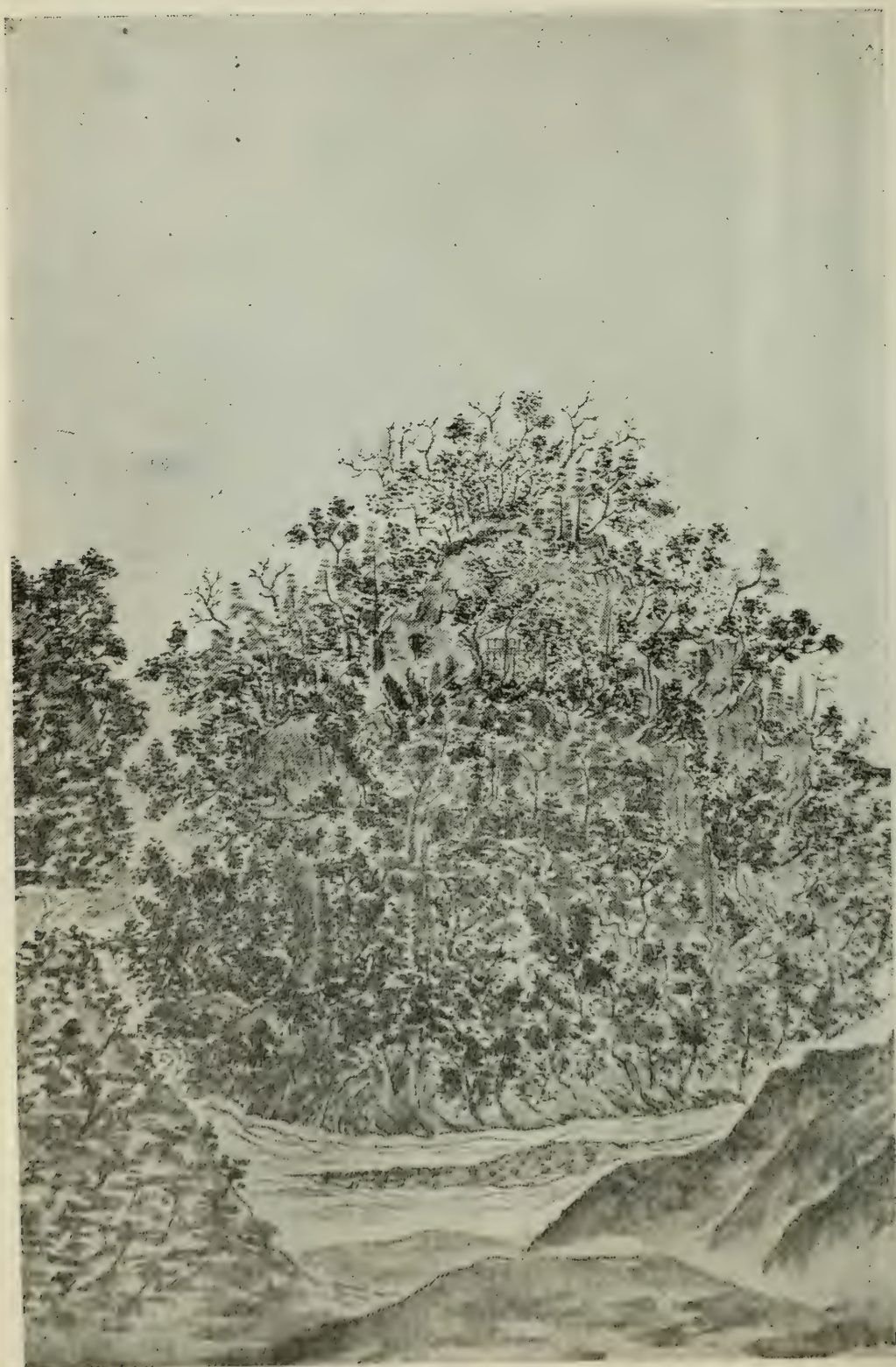
四日。はれたる空のあさひらけおかしう出て、この山河の水上をさこゝろさして、左に坊主倉(ほつくら)、鍋淵、右に鷲の巣山（天註――わしのす山の名ところ〳〵に聞へたり、その鳥すつくれは、いつこもしかいへり。）、保姑太氐、ゆんでは袁差南美山など、濁たる水の淺からず、腰に越へ乳を過るのふかき瀬わたりして、ともにたづさへたすけられ、からうじて曲り倉といふをへて、委地不知のほとりより見入山にのぼる。をとしの秋まうでたりし山ながら、猶さかしきやうに見おどろかれたり。みまへにしはし、おばしまにより、こたひは山のなから斗よりまくだりにくだりて、松原村もやゝ過て洲立(すたて)山、瀧の澤、上段(かみきざ)、下段にわけ入らんも、いにし水無月廿四日の水うちあふれ、はた、こたひ此頃の雨にいやまさりて、ところ〳〵瀬はふちをなし、山つきくだけ、こひちながれて水底はしらず。渡らんにすべなう、たどる〳〵歸る。

五日。追良瀬村をたち、みちいさゝかくれば、小雨ふり出るにぬれて鷽木につきたり。明日はこの山に入なんとて宿つきぬ。時の業とて、麻刈蒸し糸ひくとて、女は麻苧とるにいとなう、男は乾草(ひくさ)とて、くさかりほして冬の秣とそせりける。その草かる子らに童もまじりて、馬ひきなべて歸る夕ぐれたど〳〵し。

　秣かりかへるわらはのあなかまとゆふとさろきの聲そ聞ゆる。

寶貝居太氏
久樂乃

ねふた流し
盆踊り

風合瀬過ぎ
赤石へ

小夜すがら雨の音枕に聞へて、

六日。雨ふれば、おなし宿につれ／＼さなかめてくれたり。

七日。飯の杜、升形の山にわけ入てんといでて、紆衣乃夜滿、不多萬太をへて賓都玖樂といふ山澤に入は、左にいゐのもり、右に麻須介駄、追良瀬川の音きこゆ斗ふかく入て、久知具呂、孤米乃巨以他夜、斯路委枕也、曾路乃企、佉莽都香、椰万野寧祇なと生ひ茂りたる澤水の中にまとゐして、ものくひやすらひ、くれ近うなりて里にいづ。くれてつゝみうち、ふえ吹て、ねふたながしのあそひあり。めのわらは集ひては、盆おどりの山口、まつ、こよひそしたりける。

　　つゝみうち笛ふきすさひをとめらかうたふも星の手酬なるらん。

猶更て、聲とよみ聞へたり。

八日。刀度呂岐をたちて濱路を行に、なにくれさ咲たる花のなかに蔓荊の花盛なるを、浦人濱香といひ、濱桂といひ、はま蔓ともいふといへは、おもひつゝけたり。

　　涼しさよなひくつまゝやはまかつらくり返しふく浦のあき風。

風合瀬のやかたもうち過ぎ、はまちはる／＼と行に雨のふり來ぬれば、

　　ほすひまも浪かけ衣うらつたひぬれかさねきぬ袖のむらさめ。

大然村へ

大戸瀨、小戸瀨のはまも見をへて田野澤より金井か澤に至るのみちのべ、單州漏蘆のいと多く咲たるなかを、夕くれ近くあまつゝみして赤石につきたり。

九日。淤寶斯介黎村にふたゝび至らん。この日雨そほふれど、いつも、ひるよりはれなんの空くせならんと人のいへば、阿香委師の宿を出て貴能美挪にまうで、松源庵といふ寺の前より日照田村にかゝり、（以下缺――編者）

雪乃母呂太奇

比呂差吉の稻置よりは申酉、以波貴がたけのあなた、芽谷てふ澤の山おく岩樹河をさかのはれは、名さへことなる阿武毛牟の瀧とて、世にしらす、たくふかたなくおもしろきかありととしころ聞て、見まほしく、ゆかまほしくおもふに、草枕旅に在る身も、あしわけ舟のたくひありて、おほへす冬にもなりしかは、梢あらはにのこれるくまわもなう、まほに猶見なんのこゝろあはたたしう、かんな月のはつかまり三日、この秋よりそなりむつひたる不可予良のはまやかたをたちづるほと、浦人らせちに餘波おしみて、玉筐ふたたひ來ませ、そらことなせそ。その來らんしるしに、調度ひとくさ、ふたくさは、ここにとりものこしてなと、なさけくしうひたふるにいへれは、かれふの艸のかりそめのたひねなから、かと出、ものうけきおもひそせりける。尙こそそのみちく、そのところのなかめ、いかならめなとありて、

雪はさそ霜に見るにも瀧のさま。

といふ、くして、竹越のあるし里圭てふ人のもとより贈ける。これか和句とはあらされと、

赤石に泊る

その末をつく。

落葉のむしろいく夜しきねん。

やをいつるほと、わきてけふは海しつかに、冬の日なからうら〳〵と波に照り、むかひ見やる飯盛、升形のたけ、かへり見やる洲立山なとも、如月斗、のこんの雪見たらんやうに、よんべや、はつかにふりたり。

木々の目屋春といはまく行て見ん冬も長閑に雪のむら消へ。

吾妻のはまひさしふみしたき、のり行駒も聲うちいさむこゝちして、船ごものいと近う行なんありけり。

泙わたる海の面楫とりか鳴あつまの沖邊過る船人。

鷄栖か埼と荒碕とのあはひなる海へたの野良に休らひて、かれ飯そくふめるまとて、馬ときはなちやれは、霜かれの草のなかにたちあさる。

青くさのましる枯生をあら駒のむらはむいきに解る朝霜。

嵒樹峯の雪いとしろう、磯の見るめもいや寒くして、赤石のやかたに、くら〳〵になりて寺澤かもとに宿つく。

廿四日。夜邊より雨ふり、けさ猶ふりもをやまねは、え出たゝす。鯵か澤のみなとべなる願

行寺の新發意、のりのわさすとて、このやとにありけるとかたらひてくれたり。

廿五日。風あらく吹てあられふり、空あれにあれて、けふもむなしう、世のさまかたりて日はくれんとそせりける。

廿六日。空よけれは、近きあたりまてとて馬にて澤路をわけこし出るに、きら／＼と雪のかゝりたるやまもとに見やる、姨俗のこなたに家ひとつあるを、瀧の下と馬ひきのいへは、

いかはかりたきのした水こほるらんやまもましろに雪のふれゝは。

田の中の砂森てふ處に大なる木あり。これなん一本木とて、葉は桂のさえたさせと木は槻の木にて、あやしう、としふりたる木のよしをかたる。

夜はいかにつきのかつらもふゆかれてかけいや寒く見ゆる一もと。

左の山の笹生にも柵のあとあり、右に大館、小館、佐久館といふかありし山かけを行て、日照田村といふ山里を通るほと、けふのぬくさよ、まことに十月小春のしるしにこそあらめと、しりなる人のかたりくを聞つつ、

あさ日てり田井のうすらひとけぬらし里は小春のしるし見つれは。

山岸の杉群に鳥居見へたるは、大同の物語そせりける觀世音の、おましませりける堂あり。左に、津輕澤といふよりなかれ出る小河渡り赤石河わたり得て、館前、川崎なとの村を左に

目内崎のわかの林

見て、山子（やなご）のわたりも余所に目内碕（めない）といふ村をゆくに、高皿の木々茂りあひたるなかに神やおはすらん、和歌のみや、わかの林といふ名そ有ける。

　むかし誰れこゝに言葉のたね殖てわかのはやしの名にしけるらん。

猿樂の林

猶そのいはれをとふに、中むかしのことにやありけん、松前の島つ國なにかしの守のわか君、こゝに在つる寺にものまねひして、ゐかさやみて身まかり給ふける、そのなきたまを神とはいはひ奉りたるにや。かの君に三人のすんさあり（天註——みたりのすんさの栖家のあともありける。その人々の名は何とやらんいひきと。）、はた、めのとこ山上八九郎といふものゝふのありし、やのあとは、いま山上とて、門田の名のみとそなりける。金澤村のしたつかたの漆原といふ處に、家はつか斗見へたり、種里のこなたに猿樂の林といふ岡邊あり。むかし此あたりに、長勝の君と聞へてすみ給ふたるころほひ、さるかうまはせて人々に見せ給ふに、これを見てんと、ちかきうら山里の老たるわかき、うち群れ、さはに集ひ見れと、まほならねは岡にのほりてそ見ける。そのほとりにやあらん物見坂の名聞へて、さるがくの林のこなたにありき。

種里村臥龍軒

たねざと村（天註——むかし世中のやはしかりけるとしに、この里の門田もよからす、里なん、こと處にうつしてんとて里人ら家に火はなちやきしかは、門田の水わきぬるみて、穂なみ八束にたれるまてよくみのりてけり。こと里はひつしもなくかれたれは、此里より種いたして、こん春のなはしろ蒔たりけれは、いま種里の名は、かくそありけるとなんいひつたふたる。）に入て、臥龍軒といふ寺に、人のふみあつらへしかはとふらふ。此寺なん、もと弘前の鳳松院をこゝよりうつして、そかあとの、ほろひなんしるしにたつとか。あるし

の牧山達童上人のかたりてけるに日はくれたり。この上人、國てふくにをめくりて心の月を見てんと、この山里に光かくしたる人とあらはれしかば、

山ふかく牧の童やうしのあさたつねてここに月を見るらん。

といへば、上人、こはそこにこそとて、はと笑てけれ。

廿七日。こゝなる、やはたのおほん瑞籬のありけるにまうてんとていづ。こは、くにのかみの遠つみおや、長勝の君とかやうつし祀給ふ。そのみよのうまご爲信の君とか、まさしき夢のさとしありければ、春雪いたくふりたる日、かゝるみやごころにまうで給はんとて、かちぎふんで、やをらひろまへに到り給ふほど、雪の中にふみあて給ふはなにならんととらせ給ふに、石の寶螺やうのもの、石の鯰尾鉾めけるものなり。この、ふたくさをとりかへり、いさ此いし貝吹たらんに、聲のいでなはこそ、軍いだして戰にいさおしのあらめ、聲あらずは、いくさいたさじといたくねんじて、ふいすまし給ふて、おもひしことに、しかまのかちをえて、雪のしらゆふとりもあへず、いやしぬかづき、ふいをさめ、あなかしことてほぐらにをさめ、好田の里に城つくり、はた弘前の稻置をつくり給ふたるとなん。奈良何かしと語らひ、ひろまへに至る。

神籬に石のひろほこいしのほら吹をさまりし御代のしつけさ。

深谷村過ぐ

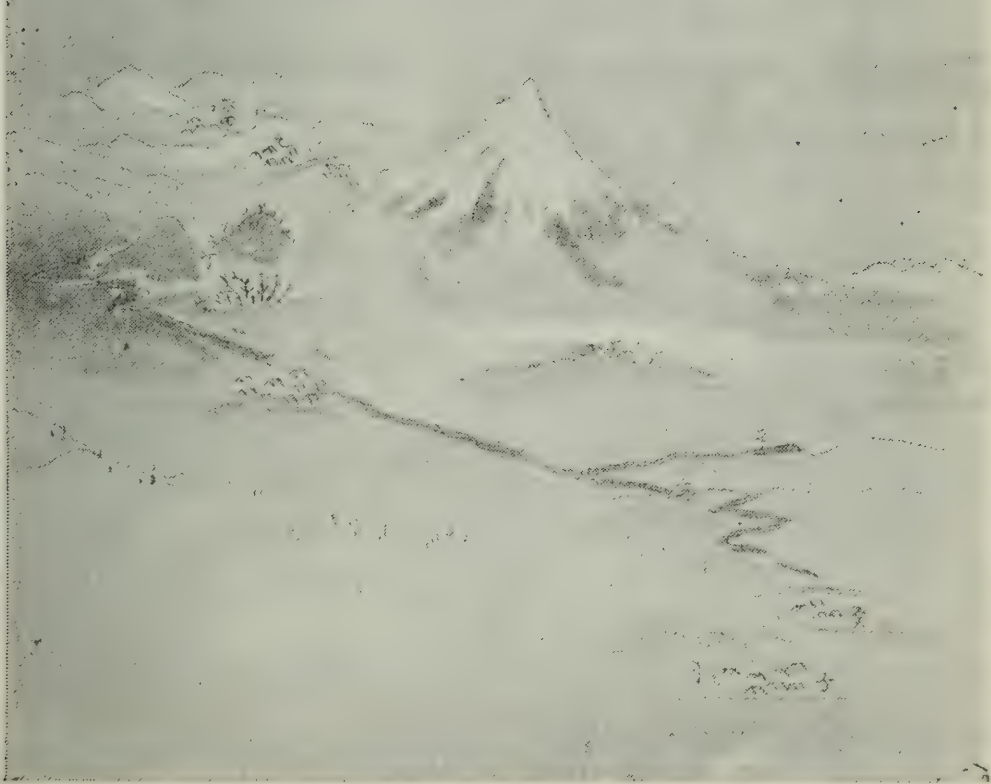
枯樹平の牧

さかいて奉る。長勝の君のふるつかは、一ッ森山のほとりに在けるとなん。そのこなたに藥師ふちの堂あり、はた此やはたの峯にも、おなしほとけのおましませるなと人のいへり。鬼帒邑、一森邑、大然(おほじかり)邑といふが、源に見へみ見へずみ右に見て朝河わたり、いや高き志加利山、比刀都母離山をめにはなたず、小森村をゆんでに、熊野の祠のこなたより山ふかくわけて深谷(ふかや)といふ村に入て、行へきさきやいづこならんと、

山越へてこのやま里の人にとふかやはらさゝふ路はありやと。

細ケ平(たひ)（天註――細箇平を俚人うち戲て、へそか平とそいふめる。）の村はしに飯成のほぐらあり。そのかた岨に、おばしがたのなりしたる石をならへて幸神と祀る。猶わけいでて行、谷ふかう、けふりいやたつかたは炭やくにこそ。

白雲のわき出る山にすみかまや里のけふりもましりたつなり。

岩木山を左に土嶮といふ長坂を下れば、荒河の流を近う隔て、山田佃る蘆萢(あしやち)（天註――野地といひ谷(やつ)といふ、みなおなし。しかはあれと萢(やち)てふ文字をつくりかよはせるは、此あたりのみに聞へたり。）といふ村の見へて、松代(まつだい)に、ひるいひくひ休らひ、なべこはし石（天註――鍋砕(こはし)坂の名、松前シリウチ山に在りけり。）をへて、わかき男女の懸想しけるうらひの鍵懸の梢、冬枯て立り。かくて、いはきやまの埜近うふたつもりやま、杉が平(たひ)を過れば、枯樹平の牧になりぬ。馬は、冬來れば家にとりかひ養ひたつとか。牧に家居やありつらんかし、そのあとお

ほしくぞ見ゆる。湯谷（天註――湯谷ならん、もはら湯段とそいへる。谷、たん、いひたかふならん。）の、湯あひのやかたのをさ長兵衞さいふかもとにやごつきて、ねち、ひえさて、ゆげたのふたつあるにゆあひして、ふしたる夜半ばかり、やまⅰ風さと吹來て猶冴へ、時雨ふるに、

いはき山ふもとのいほのかりまくら夢はあらしのさめてしくるゝ。

かくて、とりは鳴たり。

廿八日。あさひらけゆくいはきねの雪、枯たる芝生、青き篠原に、日のほのかにてりて又雲かゝりたり。氷れる雪ふみしたき、駄景てふさころのそがひに見ゆる、いてゆのやかたを左に、𣘺木の坂を越へ高牧の坂をくたり、みたにに遠うあら山河を見やり、白澤さて、山のやかたありけり。此村はしの、馬の神のほぐらのかたはらに立る柱のうれごとに、うまのくら形やうのものを造りたり。こは、うしにてもうまにても、神のたたりありと移託辞巫女（いたこみこ）のものいふについて、そのつみのあがものに奉るさなん。ほぐらのうちに、駒形のある石に實居さしるしたり。うべ、そのころは家もあまたありて田のみのよからさるさし、千見のえだちここに到て、こや田の實いさよけん、れいやうに貢奉るべきよしを、いたくのゝしりてけるむしろに、酒すゝめて、なりはひのよからさることをなけき、貢かろらかに引たうびてと、山田のひたにわふれご、露ひくべうけしきもさらに見へざるをりしも、ひさげに酒とり出てすゝ

めらし

村市村

多門天の池の杉

むろ女の、みめことがらよけなれば、毛見のさもらひ、うちたはれて、わをうな、歌、ひとつうたへ、この處女(めらし)、それを肴にせん、よや〳〵とせむれは、すへなう此女身じろきして、「しら澤は出風いりかぜあさ嵐、したは冷たち實もとらず、ひいてたもれやとのゝけみ。」と、聲おかしう唄ふを人々、こは、をこなることを作り出てうたふものかな、なめしならんと身に汗しておもふに、此せめつる士とも、しれにしれたるやうにあきれて、盞もとらで、貢かろらかにとりしかば、さることやありしとおほんつかさ聞給ひて、此士ともにも、ろくたうばり、女にも物かつけ給ふたるとなん。過し卯辰の飢渇の頃ほろひて、今は家四五ある處ながら昔、さる名所(めんしよ)なる女もありしと、うすづく女の語る。世に秀たるものを名處とのみそほめけるも、又あやしうめつらし。太秋(たやけ)といふ邑に入り、左に鶴田といふも見へてあやうき橋をわたり、郷阪(ごうとか)とておそろしきを左になし、ふか澤とて又たくひなきやけ山をわけ、瀧の澤といふをへて、遠かたに合頭(がうづ)といへる嶽なん見やりて河にのぞみ、ゆき〳〵て村市村に九折わけくたり、大路に出てこゝに宿もとめぬ。

廿九日。よんべの雪、けさはなごりもなう晴て日のてれば、やを出て、藤河といふ村のこなた疊平といふ村より入て、於保比良山の麓守(もり)澤とそいふめるほとりに、大同のいはれいひ傳ふる多門天の堂あり。山本に群れたつ榀のいと多し。去年ことし、あらため造りたるさしら

牛鞭形、馬鞭形

うち舟

清水観音の花咲松

れて、清げに見へたる堂に入ば、いにしへのみほとけにやあらん、むさか、なゝさか斗にくちたる、みかたしろの二までたてり。此堂のしりに、人のたけしたる處にはかれば、七尋斗めくる大杉あり。こゝらの杉の中に、わきて、いくはくの年へたるといふことをしらず。此木のなから斗折くちて、そのうつほに水渟りぬ。これなん池の杉とて、むかしより今猶立り。三枚比良といふ濱に登りて、かゝる杉の半を見をれば、ときとして、鯽（ふな）なんおどることありなど、あなひの、手をさしあふぎ見て語る。

泉郎の苅るもふしつかふなすむ池のなみたつ杉もいく世へぬらん。

かくていなんも、水ふかければわたりもえせて、むら市に又歸り來て、此村の下つかたの河邊より、うち舟とて、ひともとの木を、くりぼりにほり造りたる小舟にのり渉るに、岩木山の雪晴たるけしき、いとよし。さしむかふあなたのきしべに、冠のかたちしたる山あり、それなん小高森といひ、大高杜といふあり。此二ッのかひより見ゆるをとへば、むかし清水の觀世音をこゝにうつし、樓たかう建てあかめたりしを、近きむかし櫻庭（さくらば）といふ村にふたゝひうつして、いまこの山には、その礎のみぞ殘りける。樓のそこに在し頃より今の世かけて、花咲松とて五葉の群立るを、水棹さしあてて、渡しもりの翁か語るまに舟はつきたり。（天註―武南左起松は、をりとして今も、五葉に花咲とぞ。ところの人のいへる。）

淵々臨みて

河原平村

花さきの松のいつ葉のいつまでもいくとかへりの色や見すらん。

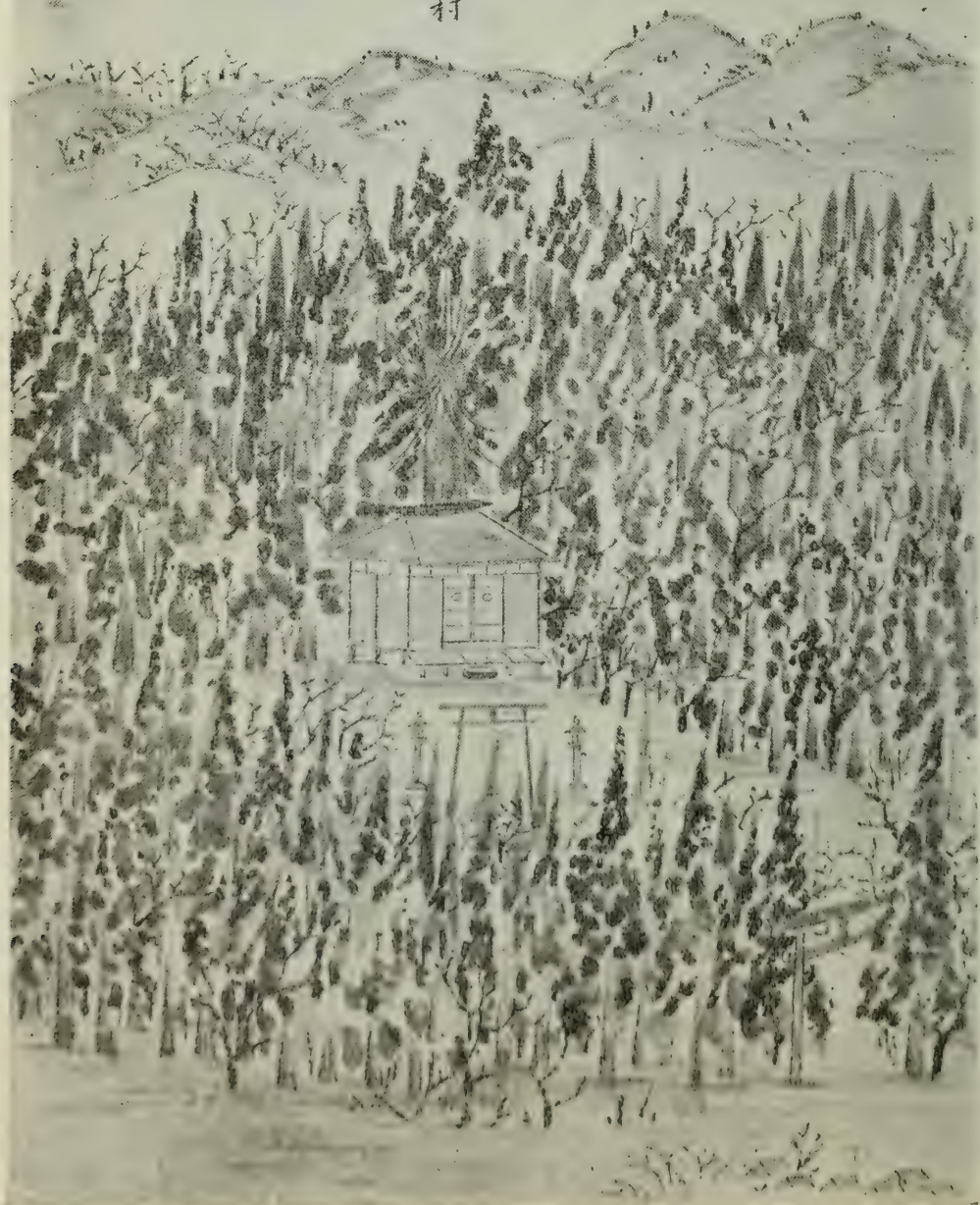
あなたは槻の木比良、たかうなの形したる山は獨古森なと、しりよりくる人のいひついて話りつゝ、比良澤の流を渡りて岸にのほり、七曲の路を左に見てわけゆく。(天註――七曲といふを行ては平澤、高森、小倉、追附、相馬、藤澤、境市、紙漉澤、御所、黒瀧、夕顔闘、悪戸なといふ邑をへて弘前に到るといふみちそ有けるとか。)高岸つたひ、眞蒼なる淵のみあやうく見下して、森の淵とておそろしきところを、うすき氷をわたるこゝちに細路を行き河邊村過るほど、見し多門天の椙群を河越に見やる。むかう岸に瀧のところ〳〵おつるなと、めとゝまれり。橋ほそくわたしたるを、馬の背といふ谷河なりといふと聞て、

こやかけるそのあしなみにひきかへて此馬のせの橋そあやうき。

輪巻の淵、龍面(れうめん)のふち、はた、香取のわたりといふところあれは見つつ、

きし波の岩にくたけて冬もちる花の香とりのあらき山河。

きしへの山路おなしう行に、鈴淵、殿衞淵も見すきて宮守平(たひ)といふやま里に來ぬ。木戸澤の九曲は、寒澤山のこなたにつつくにや。砂子瀬村に到り、をさばしをわたる。左は湯の澤とて乙部の嶽(天註――越部(おつふ)は尾太とも、又甲田山に聯句していはん料に乙生、乙部なと、すき人の書たり。此山は、いてはにちかくそびへたる銅ほるところ也。オッフの名はもと蝦夷いへるなるべし。)より流出る荒河、右は大河、是を一瀬にわたり、山路、片岨、野原を行て河原平(たひ)村につきて、米澤長兵衞といふあるしのもとにやとかる。

多陀美陀比
毗沙門堂
甲大平山
乙三枚平山
丙池ノ杉
丁畳平村

以雛乃數起

毛皮のかつころ

柴倉が嶽

毛呂瀧又は安門の瀧

霜月朔のあさとく出たつ。あるし、このかつころを着よとて、羚羊の裘のおもけなるをとうたしけるをかりきて、日はさせど梢の霜のいやふかく、しみ氷る雪のうへを軒端の山路より入て、大澤といふなかれなる朝河わたりして、燒山てふ篠生のなかのみわけて、木々ふかきあたりを行て石割の河原つたひゆくに、おもしろく木のなかにおつる瀧あり。ここを小原澤といひ、大原澤といふもやゝ過て、雪はことにいとふかき、あら山中の、茂りあひたる高嶺をいくへか越して、柴倉か嶽とてふりあふき見るに、いやたかく、木々猶ふかくたちたる麓に、折ふす枯柴をむしろに、かれひどひらいて、

　いやたてる山のしはくらしはしとて雪にかたしく皿のさかしさ。

路もなみ、雪のうへにこうし行なやみて、いましばしとて、猶あなひと友にかたらふほど、ましらの來るやと聞つゝをれば、あまた呼つれて、高き木のうれに、おや猿ならんのほり居て、朽殘りたる木の實をさとゆりこぼし。これはめとやせりけるならん。雪に埋れたるおち葉のなかに、かいわけ、あつまりてひろふ。

　親猿のおとす木の實をかきわけて雪に小さるのあさるあはれさ。

雪に手をつき梢をふんでやゝのほり、かつくたりては、さらに幽なるおく山になりて、岡市籠の澤といふにわけ下りぬ。此澤水と、踏懸(ふかけ)の澤といふ山河をわたる。ふたせのあら河、な

高さ百尋以上か

二の瀧三の瀧

木を流すに

かれあひて落瀧つ名を毛呂瀧といひ、この水おちながれて闇門の澤に入ば、こゝところの人はもはら安門の瀧とひたにいへれど、杣山賤らは、もろ瀧といひ、あるは、あんもんのもろ瀧とのみぞいふめる。かくて、この左のたか山の岸に生ひしげりたる小笹を握み、木々の根をちからに雪にふみ立て身をちゞめ、おせあゆるこゝちにからくして見くたせば、そのたかさや、いくそばくならんと凡をはかれば、もゝひろにもや過ぬらんかし。たゞ水の、あめよりあめにくたるおもひのみぞせりける。こや、こゝさへくからくにに、あまの河の、なかそらより、なかれくだるかとうたがひたりしも、此瀧には、たぐへつべうもあらじかし。三ッの瀧といふなんいづこならんか、行こともあたはて、一の瀧の末に二の瀧のおちつらなりたるを、はつかに見たるのみにてやみぬ。

半天にあふきや見なん見くたすも行衛白雲かゝるたきなみ。

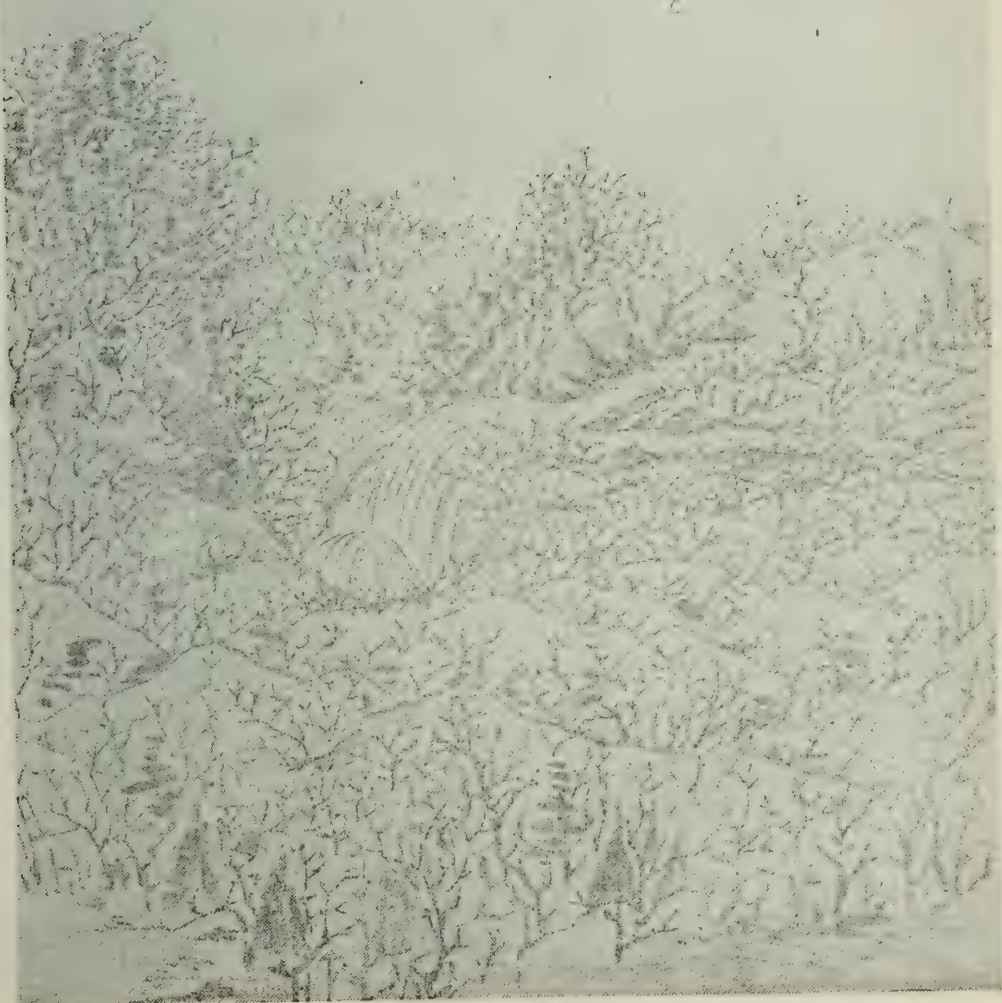
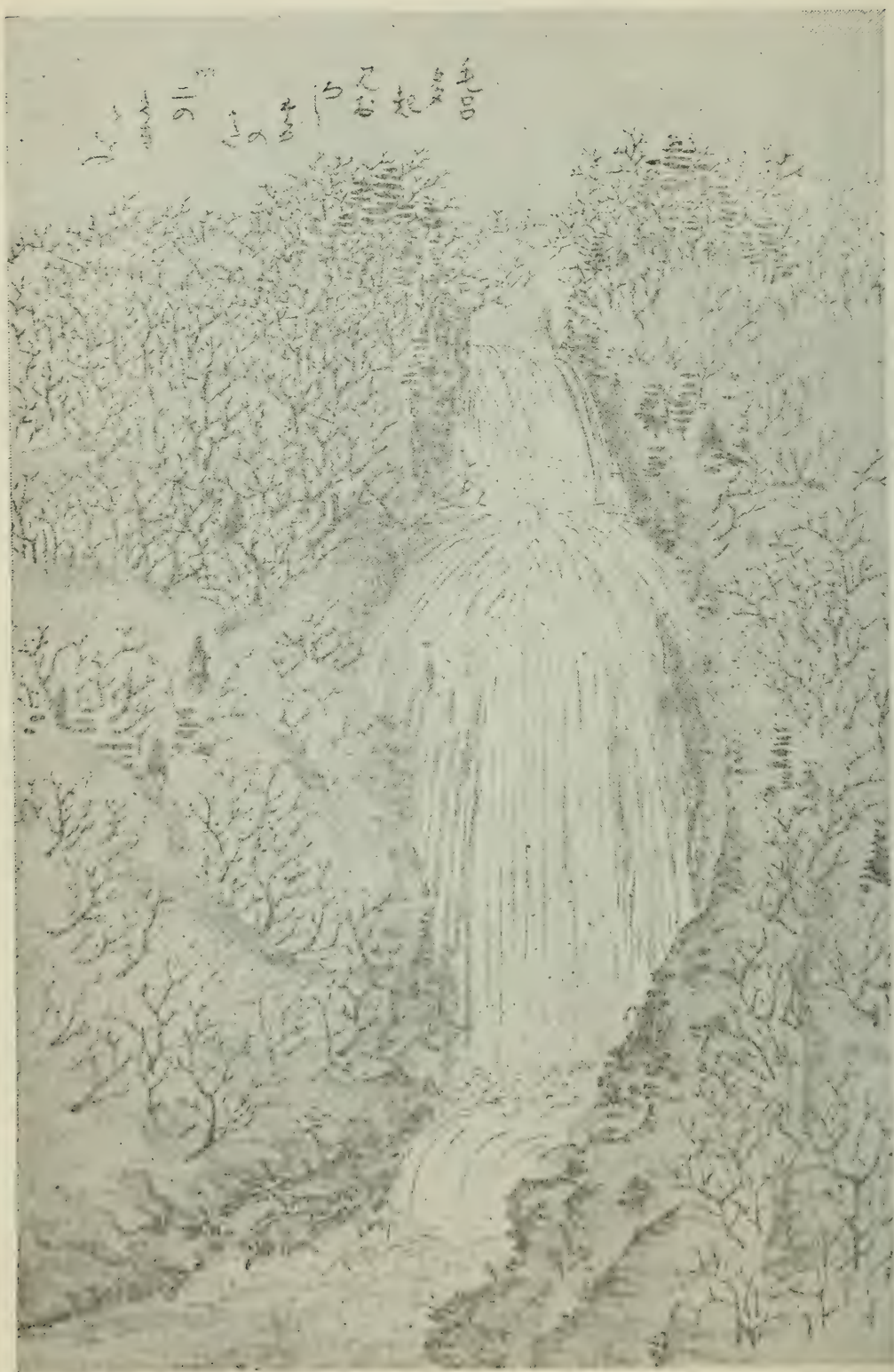
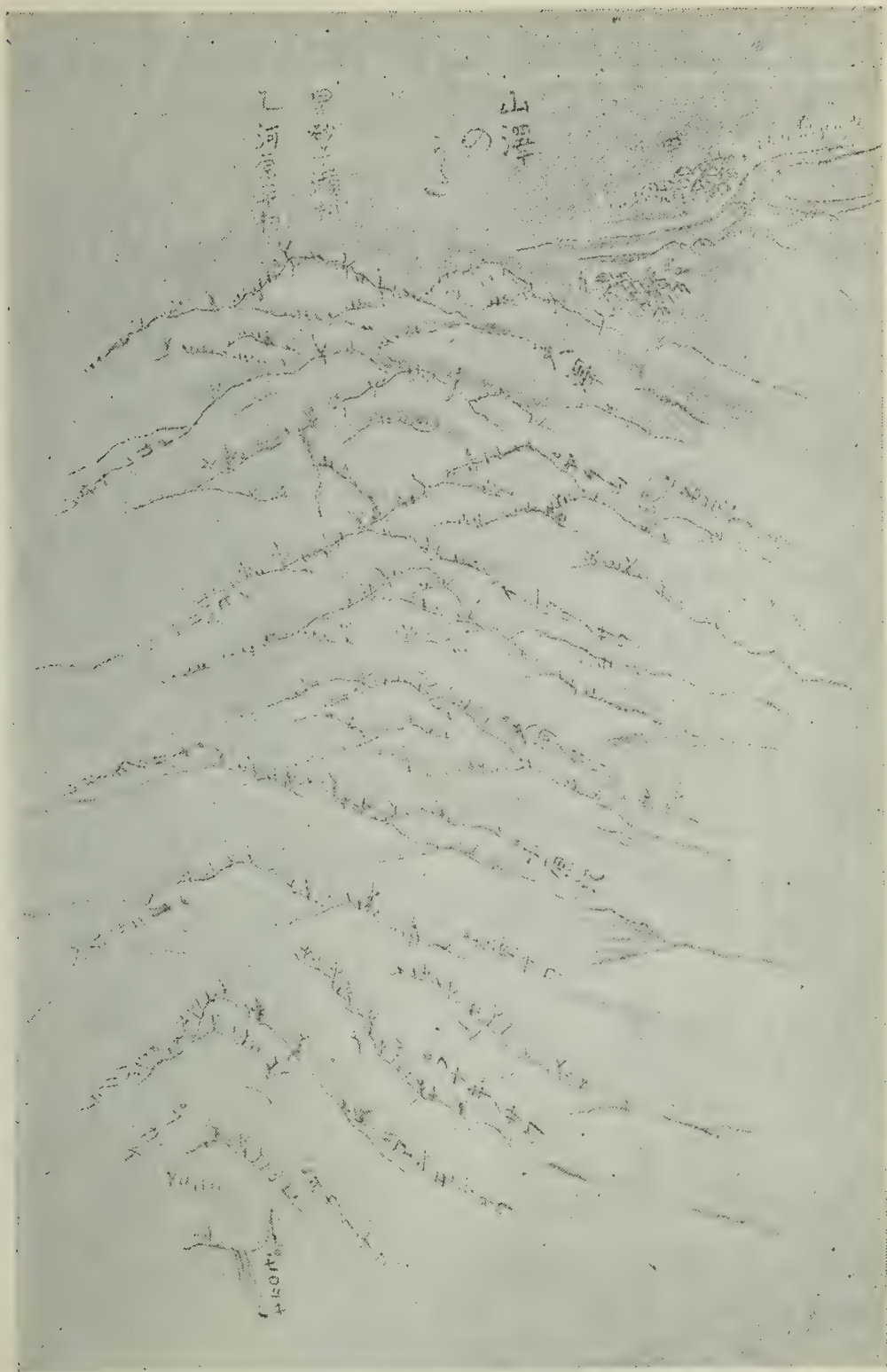
もろ瀧の末こそしらね水けふり雲と霧とのなかにおつれは。

いちの瀧は寅卯のかたにむかひ、三の瀧は卯辰にやむかふならん。世に、こゝにことなるあやしき瀧の、又たくふかたやはあると、ひとりごちたるを、あなひ聞ていふ。夏の頃流し木とて、こりためたる樵木をこの瀧におとし流すを、二のたきになかれ止るを、長き綱にすがりくだりて、かいながすわざにたづさはるものは、山男の中にも誰れ〳〵とまれ也。二の瀧

甲水落合
之表尓加波間予甲
両阿元毛武澤圖之

山澤のこし

山小屋にて

なだれふき

の高さは、紀の那智の瀧のたけたらん。われわかかりしむかし、西の寺めくりにいきて國てふ國をも見ありきしかども、このもろ瀧のたかさなりけるたきのあらんとも、もろこしはしらず、此日の本には又聞も及ばすなど語もて、不可計の澤水しばし渡て、秋冬より春かけてながし木伐て、かゝる瀧にまくだしにくだし、刀舍の湖に行水に（天註——ふかけの澤水と岡いわこの澤水とおち合て安門のもろ瀧となり村一川とながれ、なから斗に至て、いはき川といひ、此末とさの水海におちてのち、あらきしほせにおつといふ。）この木ごものいざなはれて過るを、駒越の渡（天註——こまこしは弘前に近きわたり、すなはち岩木川なり。）に止てける業すなる山賤等が、眞柴もて造りたる小家のあるに、あなひ、まつ入ぬ。伐木のわさにや出たりけん、人あらねど、あなひも山賤なれば、わか友がほに、たき捨たるほたふいたて、さしくべ、かたはらなる斧して大木わりさき猶さしそへて、やゝ寒さわするゝ斗ありて、ありつる鍋とうだし雪のながれにあらひ、もたる袋のよねいだして、かしぎたいて、なだれぶきさて、霜雪にくち殘たる山ふゞきのくきをとり、しるくさとし、をのゝえのやうなる飯がひとりて、いひくひをれば、はなうた唄ひ斧さげたる山男、峯を下り、入口にふたぎたる、かけむしろひきあけ見てあきれ、たそぞとさふにあなひ、しかくのよし禁の村をさがいひつれば、かく、こよひはやさしてよさいへば、よきこと、泊りてなさかたらふをりしも、亦三人か聲にうたひつれ來て、何人と見おどろけるけしきあれば、此流見に、はるく來し旅人とつたふるを聞て、こはいかに、かゝる深山のおくは夏すら、ことん

一夜を山小屋に

秋田詞津輕詞

たんば燒

瀧鳴りの音

は、たやすからざる、さかしの山々、あらき山河のいくせをも越して、雪さへふりたる霜月の空に、もろ瀧を見んとて、人の來るためしやはある。かゝる嶽山を朝夕ふみならひたる山男も、えせぬわざかなとて、をのれらも、いひたきくひて日も暮ぬれば、火たきたて、ひねもす木伐りし山ふみの物語、あるは夏河にいはな、やまべ、すなどりしなど、おのれ〳〵がいはまほしきことのみかたり、物といへば、しり申さぬと飽田聲にこたふるは、この山のあなた、いではの國藤琴といふ處より來る山賤也。何ごとのいらへにも、うまやいとこたふるは、わけ越し出し太秋の山里より來し、山賤か長となん。（天註——宇万也以とは、もとも、さやうにさふらふなりといふこたへなり。）里は、ねよとの鐘きくころならん。あなさびし、何かなとて、ふたゝびいひたき、丹波燒てふ、もちひすとて木櫃（きつ）にいひがひつき立て煉り、木の長串にさし、みそあぶりつけて、いざ是くひねとて、ふたさかはかりなるをさし出したるを、みき、よきばかり、われはくひてやみつれど、あないも山男らも、よさか、いつさかもやくひぬらんかし。火は野火か炭かまのことくたきてかたらひ、ふさはやといふほど、なる神のうちしきるかと山ひゞき谷こたへて物の音聞へたり。こはいかにと、みな、こゝろきももけち、たましゐ身にそはずあきれまどふに、山長さらにおどろけるけちめもあらで、これなん瀧鳴（たきなり）の音也。雨にやあらん雪やふらん、一とせに二たひ三たひも、かく鳴ることのためしあり。かゝる清き太嵩（みたけ）のいたゝき、やま〳〵のおく、河てふ川

の水上にすみて、そことさためすしとし、くそまりて山をけがせば、瀧の神やいかり給ひなん。さりければ、かゝるやま男となりては、つねに水の神をいやまひ身を淸うもち侍らさめれば、このおそろしき瀧のうへには、かりにもすむことの、えしもをよび侍らじとかたるを聞つゝ、人々もこゝろおちゐたり。火は猶たかうたきそへ、たき捨て、さらばとて、けちもはてず、あしさしのべたるまゝにふしぬ。こゝにふしなれたるものしは、いとはやふしつきぬへけれど、八重むす苔に、かやむしろしいたるうへに衾かたしきて、ひち枕すれと風いと寒し。

　眞柴もてかこふとすれと吹あれてふしもつかれぬ雪の夜あらし。

いまた夢もむすはぬ枕の山に、猿の聲とおほしくて聞おとろいて、

　なれも嘸身や冴へぬらん軒ちかく小夜はすからに三聲鳴也。

さらに、いねもつかれねばおき居て、ひとり、ほたのみたいて露いもねすして、とはしらみたり。

　かは衣しきて太山のさゝ枕ふしもつきなてあけぬこの夜は。

こと人々もやをらおきぬらん、めさめ、しはぶく。

二日。夜邊より降たる雪のふかさは、三さか四さかにや過ぬらん。猶をやみもなう、きのふみし瀧の邊の木々、檜原、五葉の枝も、うちこたれふり埋たる中に、たぎりながるゝ朝川わた

り、あないをちからに、きのふ分入たるやま〳〵をたどる〳〵、からくして鬼河邊といふ處にいづ。

ふる雪にこもりやすらんおにかはべ名もおそろしき山のかけみち。

瀧々多し

かくて、河原平の村につきぬれば雪はれ、日もいまた高ければ砂子瀨邑をへて、いもりたひを余所に高岸をくだり、香取のかち渡して藤川の邑、疊平の邑など行ほど、雪のなかにちいさき瀧のおつるもおかしく、又名に聞へたる脊瀧、行人瀧、乾瀧、大瀧、綱瀧、七瀧、上黑瀧、下黑瀧といふ見どころもありといへど、毛呂太吉を見たるめに、いかに見るかはとて、見んこともおもひぞ止りぬ。（天註――香骨瀧、行人瀧、尻加比瀧、此三ツの瀧は村市の卯辰、馬の背澤に在り。大瀧、綱瀧は、たゝみたひの森澤なり、村一の乾にあたる。七瀧、平澤村のおく、村一の艮に在り。上黑瀧、下黑瀧は砂子瀨邑の卯辰、湯の澤の奥に在り。）

村市歸著

やをら村市に歸り來て、やどりし宿の門のとに、今と音信しかば、あるしの翁戸引あけて手をうちて、こはまことに、わがとし六十にたりぬれど、かく冬の空に雪をふんで、いとおそろしき山のおくがおくなる闇門の諸瀧見し人こそ、いまをはじめに見たれ。あら山賤等もをよはぬためしなりけり。われだにその瀧はいまた見も侍らぬ。おもひかければ鉈（なた）でも舟うつと、わがおや神（かみ）のつねにいはれたるを、今こそ思あたりたれなどいひもて、誘ひて入ぬ。

あをの皮衣

三日。つとめて雪のいやふれば、けふ斗は休らひて、明なばなど、ねもころに湯などひかせ

子を間引く

長面村

世の中瀧

ぬ。くる人ごとに、男も女も、背に、あをの皮とて、かもしかのかは衣を負て入來て、そか中に、此子養しとて、をさなき乳子をかゝへていふ。こや世に傳ふ、此あたりにては、わがうめらん子の多ければ間引といひて、うめばとく、その女のはぎのしたにしき、おしやり、空しくなすの聞へ昔はありしかど、今はさるためしもなう、人の子すら、やしなひはぐゝみたつるのこゝろさしは、直きをしへのみち、到りいたれるかなとかしこく、ゐよりて、よき子ぞといへば、うまやい、めご子とていぬ。（天註——うまやいは前にいふ。つねに兒ともをよばふにもメゴ、あるはいふメゴコともいふなるは、メグシといへる古言にこそ。）

四日。雪のあさびらけ行おほたか森、こたか杜、河きしにたてる獨鈷杜、花咲松など埋れたるをむかひ見つゝ、ひるより晴たれば、近きあたりまでとて出たつ。田野尻の渡して長面(ながつら)村に至る。この里のしたつかたの水際に、いはやの觀世音とて、いはやどにほさちおましまして、水あさきとき、岩をつたひてまうづる人のありけるとか。むかふ岸邊の鷹巣山、いささかしのところを見やり、みちのかたはらの鳥居に入れば、世中瀧とて、世のなりはひをしれは、しかいふ瀧のもとにいたりて見れは、おちくる水は村雨のごとく、はたひろはかり高き處よりはら／＼とおちかゝる。下なる岩を新穂石(にほいし)とて、にゐほつかねたるかたちしたるに、水氷かゝりたり。此水の日をへて、ふりつむ雪もひとつに、いやたかくつみかさなりて、まほの新穂つみたらんがごとし。としさむき年はいと高う重り、さむからぬとしはひきし。

そのほどらひをはかり、睦月のころ國のかみにけいし奉りて、こん秋の田の實の、たると、たらざるとをうらひしてしり給ふるといふは、かの、ひいけのまつりにひとしかりなんかし。ちいさき不動尊の堂すへたる岩の面にかいつくる。

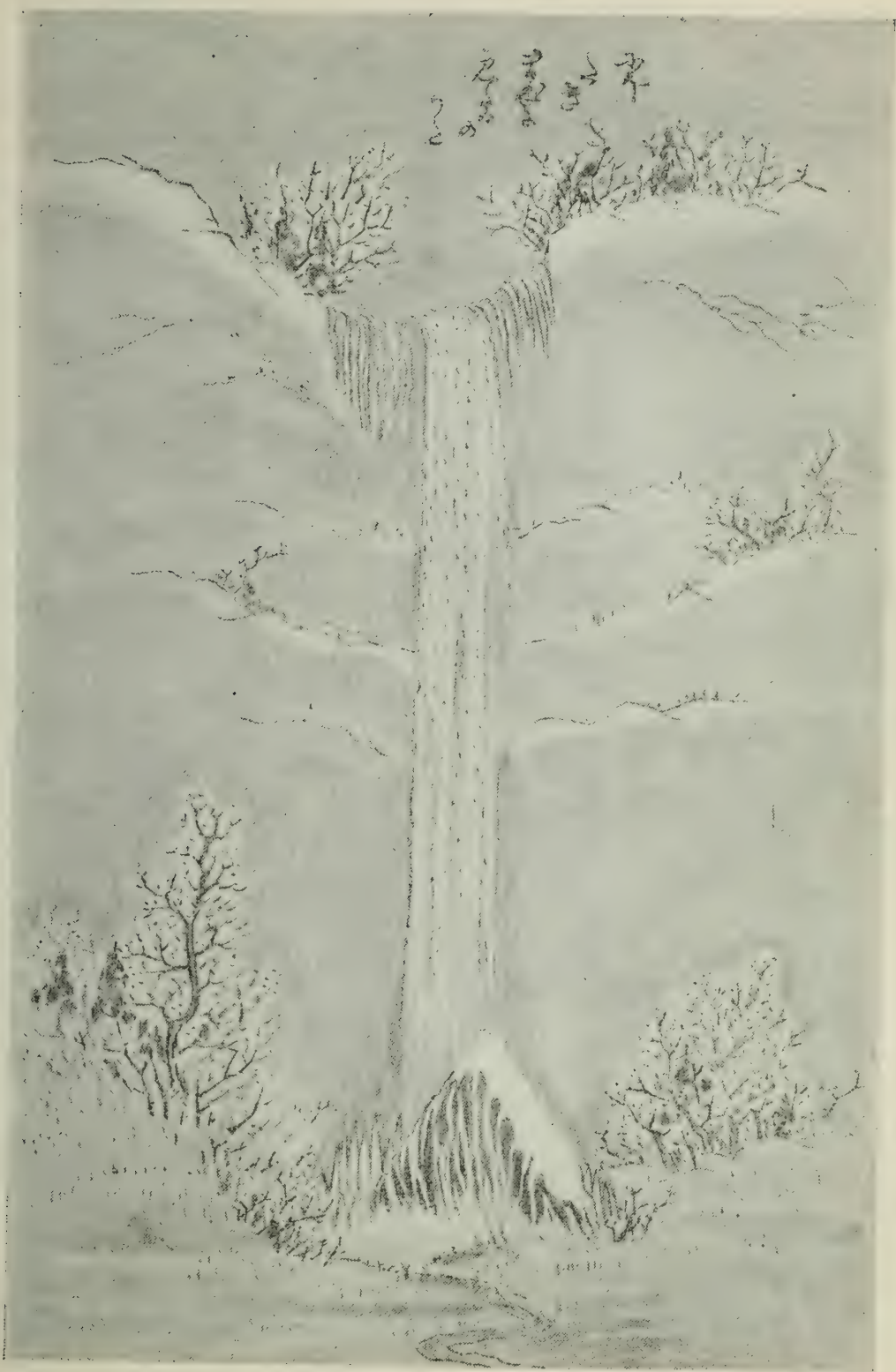
とよとしのしるしを水もふる雪も千束に氷れ新穂のたきなみ。

この水のなかれ出て路の左のかたにおち流て、影ヶ塔とておそろしき淵に入る。行ほどなう夏菩提といふ邑に來て、雪の中に、朽たる卒都婆のさしたりけるに、かいつくる戯れうた。

夏菩提邑

こゝの人春秋冬はしなぬやらなつぼたいてふ村はありけり。

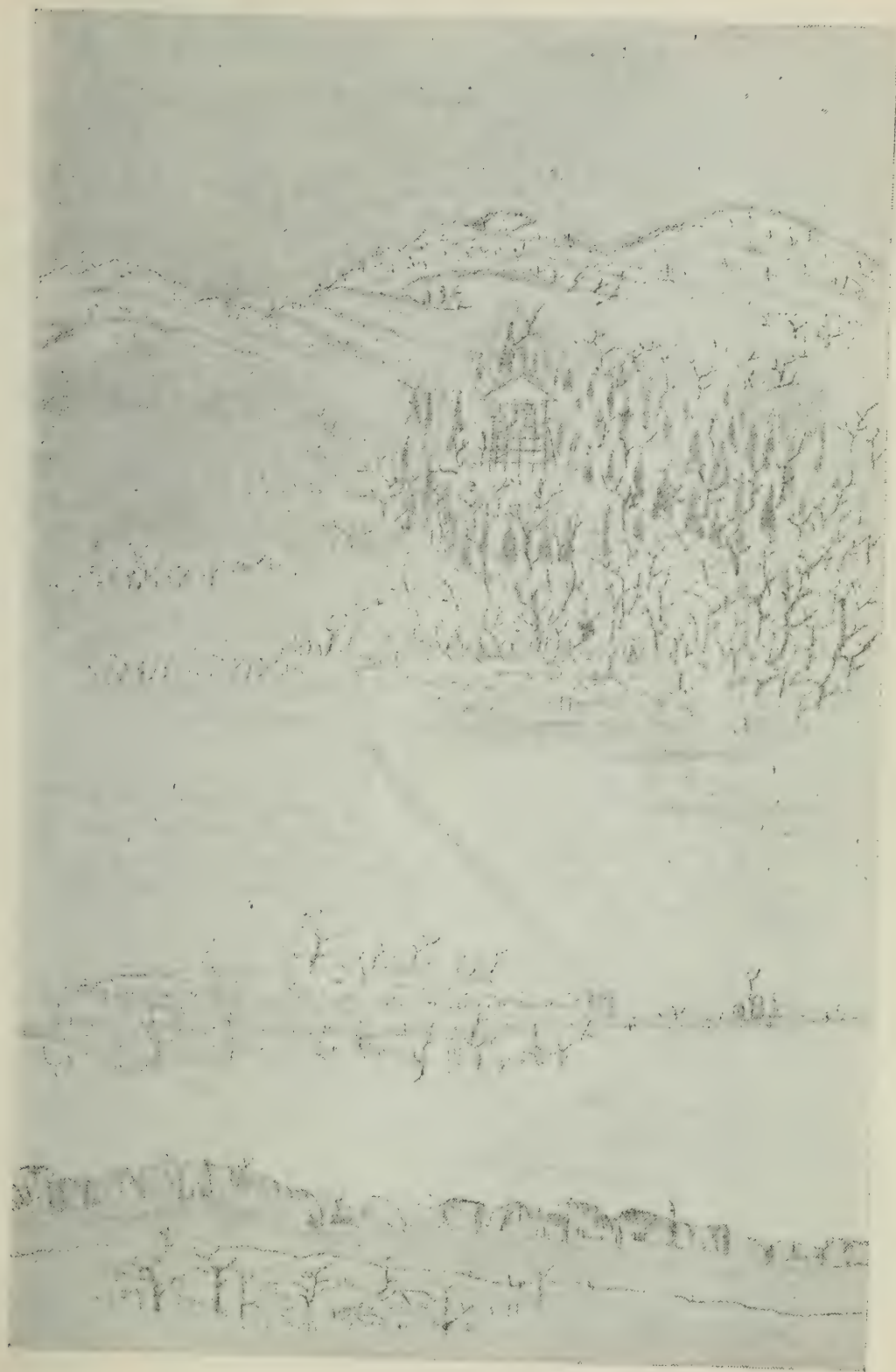
櫻庭の清水観音

あないも、ほゝゑみてすぐ。河わたりてこなたに田代、番館、中畑、米箇符をへて櫻庭といふところの山ぎはに、大同のころすへたるとて樓のごとく、いと高き清水の觀世音の堂あり。こや、花開松の山よりふたゝびうつしたるといふか、こゝらの杉むら、こゝらの木にふりかかりたる雪のなかより、をばしまたかく、つとあらはれたるを、そことしるへに山きはの里にいたり、いくはくの坂をのほりて、氷のこゝりたる岩のしただりに手あらひ、くちそそいで小橋をわたりて、うしろさまに此堂に入る。軒は杉のうれにひとしう、いとたかし。春は霞む木の間に、木々の櫻見へみ見へすみ咲ましりたるは、になう、さくらばの里の名もいちしろくおかしき處といへど、かきたれてふる白雪にかくろひて、遠近のさかひもしらす。

春もかくなへて梢のさくらはなそのをもかけをみゆきふるなり。やをら堂よりおりて坂くたりはつれば、なかれくむ翁のいはく、西福寺といふかありたりしふるあとはあしこと、このぼさちにつかへまつる齋藤なにかしといふか家に、かの翁は水荷なひもて、つと入たり。此清水の村より出てゆく〳〵も、黒土村のはしより國吉（天註―もゝとせのむかし相模守國吉といふかなたくみ、こゝにすみて、そのつくりたるつるぎ太刀いまも世に殘りたり。さりければ所の名に聞へたり。）の村はしにかけわたしたる板橋をふみゆく小河は、いはきねのしたゞり、その麓なるいて湯の末もひとつにこの大河にながれましりて、このあたりより村市河の名も岩木川となかれかへて、十三の浦におちて潮瀬にいづとなん。竹のうちといふ、さかどのにひと夜ねて、

五日。よんへより太雪ふりつついてはれねば、雪ふませてとて、つぶねひとりに、みちあないさせつるなさけは、雪よりもいやふかし。

　　ふりつもる雪にはみちもあらなくによし行やらて楽なは宿かせ。

といふことを、あるしかもとへやる。二三尺斗も降て、はつかにも人のわけたるあとしあらねは、ふかき河など渡るやうに、はぎふかうさしいり、身もなから斗はふみいり、からくして坂本村をへて三本柳のむらはしにたどる。むかしはいと高かりし柳の、こしふりたるもありつる物語をす。

百澤邑にて　齋藤規房氏

ありしその三本のやなき埋れてゆきのふる枝やいつこなるらん。

中野といふ處にて、あないにものとらせわかれて、

岩木山みねをしるへにわけ來ても雪のなか野の路そしられぬ。

からくして百澤邑につきたり。みてらのかど高きいらかも、そこそとはいさ白雪に埋れて、春わけ見しをこゝろあてに見やれど、さたかにはしらしかし。此秋より、齋藤規房こゝにすめりとかねて聞へしかば、そこなん、とふらふにも雪の下庵たつねはぶる聲に、あるし、たそとさし出て、こはめつらし、久しとも久し。いつも〳〵、いもと、うへのみ語り、けふもけふとて今いひ出たるに、まことのかげなんさしつるものかと、よろこべるいろ見へて、

おもはすよ妹もろともにしたふ身のおもひを人にかたるへしとは。

となん、ありつる硯して、かいつけてそ見せける。この返し。

いもとせのふかき情を旅に在る身にうれしさのやるかたそなき。

なにくれとかたらふまに時うつれば、

ふり埋む雪のしたいほとひよりてつもるおもひのとけてうれしき。

といひしかは、あるし　のりふさ。

いふせくも日をふる雪のしたいほにとけてかたらふけふのうれしさ。

あるし、をのかつまなる　知可子にかはりてよめる。

　なにとまつかたり出なん淺からぬ雪路わけこし人のなさけに。

この歌の返しをす。

　あなひさと語るうれしさふみわけし雪よりふかき人のことの葉。

筆を火にかざして

空くもりたれど、日はかたふきぬらん頃、あるし、しみ氷る筆を火にさしあてて、

　雪あらし音は枕にうけくともせめてひと夜はやとりてもかな。

とそ聞へたるに返し。

　おもふとちかたりあかさは憂こともあらしよ雪よ余處にきかまし。

夜もすからかたらひて、

六日。人の通ひたるあとし見へねは、日たけて、大雪もふみわけてたゝはやといてなんほりに、のりふさ。

　おしまるゝ又とふほともしら雪のふり行たひの人のわかれは。

と、いへりけるに、

　白雪によし埋むともまことあるみちしたつねて又もとはまし。

高杉の宿迄

と返しして新法師邑、宮地邑、五大邑（天註——五大尊やむかしすへたりけん。今は五代と書く、五世をさめし君やありけん。）、春來しところ〳〵

も過て、吉田の村やかたより入るべきかたをためらふに、いつこへと人のとひあやしむに、深浦に、鰺ケ澤をへていなん山越へのみち雪ふかく、えゆかて、このほとりをさして、大道にいでんかたはいつこにや。このすちをといふ。高屋、蒔苗などの村をくる。かた岨の、雪に埋みもやらでたてる藥師堂、ゆへありげに見過て野をはる〳〵と行ば、獨狐といふ村よりひろき行かひのすちに出て、高杉のすくに、くら〳〵にやどつきたり。

鬼澤を過ぐ

七日。つとめて雪いとふかければ、馬にてわけてんとて出たつ。

あさまたきたかすぎぬらん駒のあとほのかにそれとみゆきふるなり。

とく行たらんうまの跡、はつかなるをしるべに、住吉をへて鬼澤に到る。逆水ひき流したる方も雪に埋れ、ゐせきほり得し鬼をおに神と祭る。そのゆへあれど、もらしたり。その神の森の梢の雪いとふかし。

こや聞し安達か原のほかに又雪にこもれる鬼神の杜。

藤井、貝澤、大森、十面澤の村に入ば、駒も行なやむこゝちに、

のるこまにまかせてみちしまよはねどつらさは增る雪吹やま風。

十腰内の村

十腰内(天註――十腰内はむかし、かなたくみ月山が遠つおや鬼ノ神太夫かすみて、その太刀の世に九腰あれば、とこしなきよしの村名なりけりともはら人のいへと、蛇多澤(トコヲコシナイ)てふ蝦夷人の言葉のこゝにのこりたるをもて、太刀作りのあれば、それにそへていひあやまれりけるとか。)を行、左に觀世音の林、雪の下に見やりたる風情ことにおかし。

此あたりはみな岩城山の裾野なれど、ゆきげの雲にたちおほはれて、

かきくらしふるしら雪のけふいくかそれといはきのたけそ見やらぬ。

立石野行ほどいや寒く、里あり、浮田といへは猶うきおもひして、

はらへとも寒て身にうきたひころもゆく〳〵つもる袖のしら雪。

鰺ヶ澤過ぐ

かくてはる〳〵と上野、坂本、前戸をへて、鰺か澤のやかたもやゝくれはてたれば、あひしりたる門々も音づれず、雪路とく〳〵からよりしてわくるに、空くもりてくらけれど、みゆきふりしく礒山陰をこゝろあてにたどる〳〵雪さへいたくふり來て行末しられぬ海邊のかたに、鬼火にやあらん、つかはらとおほしきあたりを飛行を、したかひ來る男の、きつねにてや侍らん、いつもきつねの、かく火をけちともしする、濱路の野良つかはらといふまに消たり。

かきけちてみちこそ見へね雪のうちに猶ともしせよ野邊のきつねひ。

赤石村

やをら赤石の村に來て、やとりし寺澤かもとにやとる。

深浦歸著

十日。このほどの日は、ふゞき、あられ、霙かちにて、ひと日たに、いでたつ空もあらさめれば、こゝに三日なんありて、けふなん馬にて濱風にふかれて、夕日浪のうへにさしかけろふころ、ほのかに雪ふるやとおもふまに深浦に至る。

旅衣雪うちはらひなれしやにけふしもとふかうらつたひ來て。

都介路迺遠地

津輕
共二五冊

寛政九年元日深浦にて

宮々に詣る

かしこき御代のめくみひろう、たゝしきおほんまつりことになひかぬくまわもなう、としは九といふ。道奥や津刈のをちにとゝまりて、玉匣ふたとせあけて、三のはしめのけふになんあへり。とりの、四方にはつこゑをたつれは、とし男せりける屋戸のあるしは、人しらす、いとしのひやかにおき出て、かな戸おしひらき、五葉、弓弦葉さしたる提桶して、花くむてふためしは、いつこもおなしなから、海へたの泉、小河にのそみ、あるは、やかのくまなる筒井のもとによて、「俺玉の歳のはしめのとし男水をはくまてよねをくむなり。」といふ、ひとくさをすんしてむすひあけ、ほたきやに入ては、豆からにきり火をきりはなちて、はらはらと鳴るは爆竹めけることゝちして、ありとあるかきりの人おきづる。やをらひともしとりて、こゝにうつしまつる磯山かけの、うちとのかんみやしろにまうつるに、われもましりて、みむろの前に鈴ひき、ぬさとり、いやまひたいまつりて、

おくの海なみのしらゆふかけまくもうちとの神そかしこかりける。

雪の高嶺には、菅大臣のほくらをあかめまつる鷄栖のもとに、ともしひをかけて奉れり。

みつ籬にふゝめる梅の春の色をけふしも神やみそなはすらん。

さかしき磯山のそかひのかたに松の群立たるは、木花開邪姫の、かんみやところありけるにのほらんも、小阪のかいうつもれて雪のふかかりければ、こなたよりをかみ奉りて、

不盡の峯にたくへて雪のあけほのや霞むすかたをけふこそは見れ。

地主權現を、なやことおなしとのゝうちにおましませる、保食の神をまつり奉るといふ。この御前に浦人らむれ集ひ、いやしぬかついて、あなたふとしと、をのれ〳〵かこゝらねかひ、こゝろにみちぬらんかし。

ねきことに泉郎の得まくや祈るらんはたのひろ物はたのさものを。

船の乘初祝

はた、やふねこようけひめのみやしろのあり、輌遇突智の神なとを齋ひまつる岡邊のあれと雪の高くふれは、いそへたにたちて、こなたよりはる〳〵とをかみ奉りてそ歸る。ゆんてのかたに、去年より泊もとめて冬籠したる、しらぬひの筑紫舶の、けふなん乘初の祝すとて、楫とり、水主、ふなをさ、ふなとこにのほりゐて、太雪かゝりたる苫ふけるふな屋形は、しろかねをつめる寶船よといひなすらへ、ともつな、へつなときはなち、おも車に帆繩まきあけ、眞梶しけぬくまねして、みなおりていにき。かくて家に入れと、いまた空のいとくらければさ

岡戎を祭る

甕松昆布の幣

大福茶と居蘇酒

もしかゝげて、倉稻魂命をや遠つおやよりまつるならんふりは、あいたふりにひとしう、宇賀のもちをそ備ふる。（天註――いではのくになる秋田のあかたのほとりに、をがの岬とて、その家に在る男の數にあはせて、くつかたのもちをそなふ。此浦人はおか玉ばすとて、鶏の卵のなりしたるもちを四ツふかくひめて奉る。）この浦には此神を岡戎と唱へて、とりの子のなりしたるを三ツか一ツをたいまつり、皿むすびといふものを、いなくきもて造り乾鯛鱠をもり、ものゝふの家のことのばら、あき人の宿のたはらごなと盈とゝのへ、ひめそなへ、明のかた斗は、ひきのこしたるしりくへ繩は、暦見ぬうら人らも、なにわざしそむるにも、むかふに、たよりいとよけん。よね俵に、いつ葉の枝さしたるを甕松と唱ふるは、福山の島ふりにこそならす（天註――松前にては内板の松といひ、かめの松といふ。此浦にては、たゞかめ松てふ名の聞へたり。）、ゐひすめのゆふつくるもおなし。さりけれと花ひらの餅飯は、うへも春めける名にこそありけれ。いまた、あさいにこもりたる門しあれば、このしけう、ものにまうづる人の、いてもこぬしはぶきをあららかにして行かふは、その宿なるいぎたなきぬしの夢を、よそながら、うちおとろかさんの料なれと、高しはぶきの音も磯波の聲にまぎれて、起づることのとからぬ門もあれと、おほそう、星をかさゝぬはあらしかし。灯あかく埋火のほとりにまとゐして、くたものくひ、大福の茶に椒柏のみきのみて、太箸に、もち飯をそくふめるためしは、こと國に、たかふけちめありともおもほへすゝやをら窓のしろ／＼としらみわたりて、はつ日の光ほの／＼とさし出、見やらるゝあをうなはらも、あまねうてりみちて、

雪の遠しまなこは、鏡をかけたらんやうにきら〳〵として、

あさ日影にほふめくみに奥の海蝦夷か千島も春やしるらん。

れいのわか水を硏にうつして、去年の海のつららもとく〳〵とかいなかし、ふてこゝろみてんと、

田鶴も今朝千代をとなへてあまとふかうららに霞む波流は來に家理。

とかいて、わかんみむすひのおほん神のみまへにそたいまつる。

錢馬を與ふ

二日。海山にとめるうらやかたとて、うへ、にきはゝしう軒をならへたるやは、問丸、蜑の栖家も、とし繩をひきくへたるに、わらはへのむれ來て、としのはしめのことふきいはふに、いざ、うまここにのせてんのためし此浦にも聞へて、五葉の小枝にさしつらぬいて、孔方をそれらにとらせてけり。かゝる錢馬といふことを、

松の葉の榮へをいはふみちもせに馬ひきつれてあそふうなひ子。

葩の餅

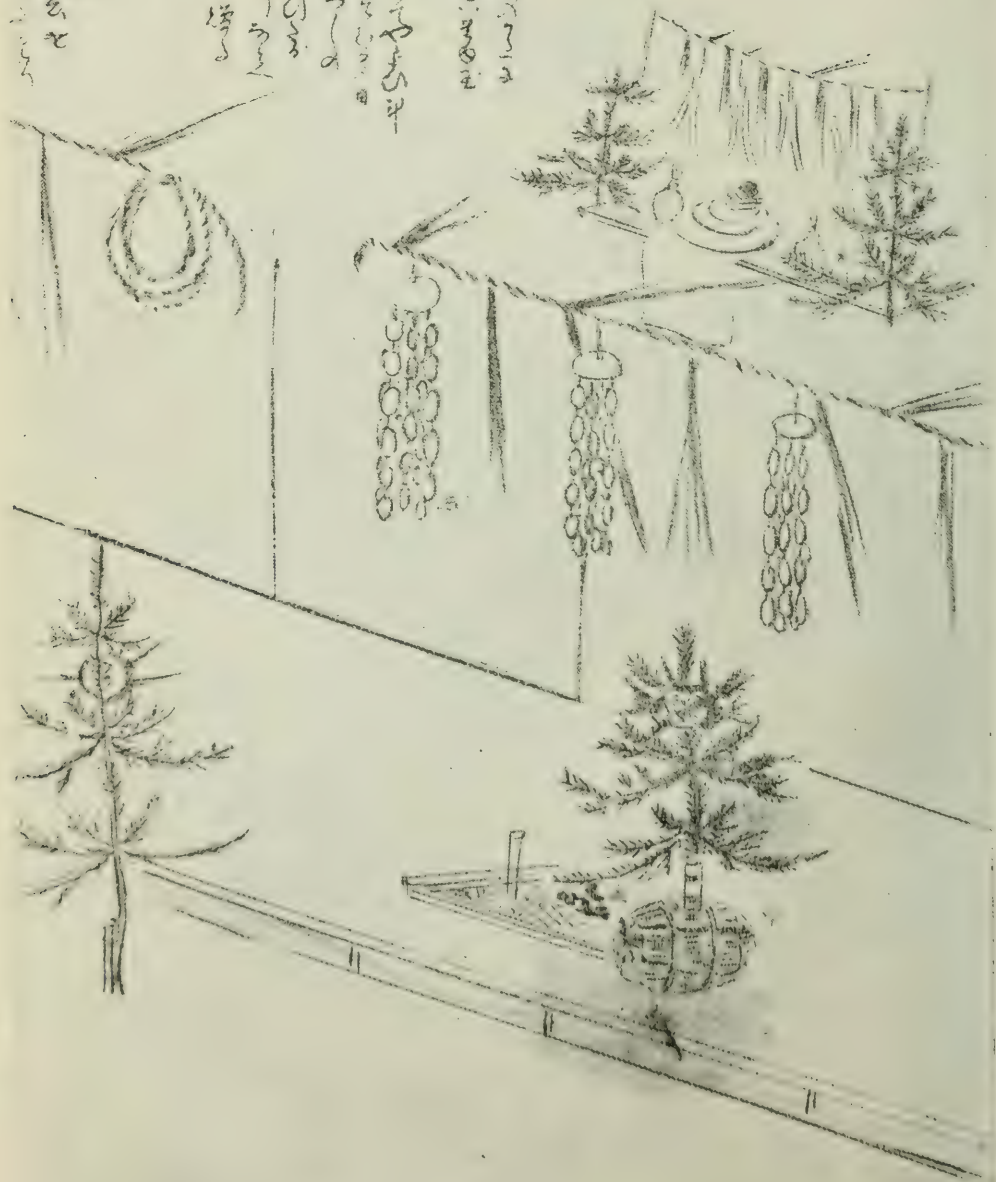
三日。このあした、葩のもちひとつ、をりうづの外に落したるは、夜べ鼠やしたりけん。これを見て家の翁の、こゝろにおかしとやおもふ、ほゝゑみつゝ、いやふる雪をうち見たる。

あな樂し六のはなひらちりかひもくもりて老の來んみちもなみ。

七日のためし、いつこもおなし。さりけれと、なゝくさはあらしかし。

十四日慣例

赤粥、白粥

びんちょ めだしの祝

八日。女あまた、朝汗の海に、もすそうちそほちて、冴る朝間ながら、ふるさとにくらふれば
いとよけんと、唄ひ連て紫菜つむ也。

いそやまの梢もやかてさくら海苔つむ手に春の長閑さやしる。

十一日。竹越の家に、けふなん船魂のおほん神をいやまひ祭りて、うたけをなんしたりけ
る。

すゑかけてふねの行かひ倚やすく楫のまに〳〵千代をつむらむ。

となかめて、ふなの神にさゝぐ。

十四日。爐の灰ならしをさめて后は、火はししてさしつゝきなさすれは、田に鴨のおりゐて
苗代ふむとて、ゆめ、さることさせし。田植ふるのためしあり。暮て、やかの人來集るとき、戸
窓ふたくの餅にひれさしそへ、長串にさしはさむ例ありて、はた福鶴子もちといふものを棵
にあげ、又は窓より外に投やる宿もありけり。こは、こと國にて嫁の餅とて、鼠にあたふの
たくひにこそあらめ。

十五日のあかのかゆ、十六日のしらかゆをそくふめる。

二十一日。びんちよとて、女のわらはのむれ集て酒かひ、さかなもとめて、うた唄ひ、男は、
めだしのいはひをそせりける。

きのふの酒に、又もや、けふもゑひそへんとてわらふ。

醫師樋口氏

廿八日。去年弘前にてかたらひし、むさしなる樋口道泉といふくすしのもとより、すむ、さもらひのほとりなりける新阪、古阪といふ處を行とて、「あたらしきとしに越へつゝいつしかに身はふる阪の雪のしたみち、とよみつとて、ふみにそへて贈られしかは、

白雪のふるきあたらし身につみて人はちとせの阪やこゆらん。

とて、ふみの返しにそふ。

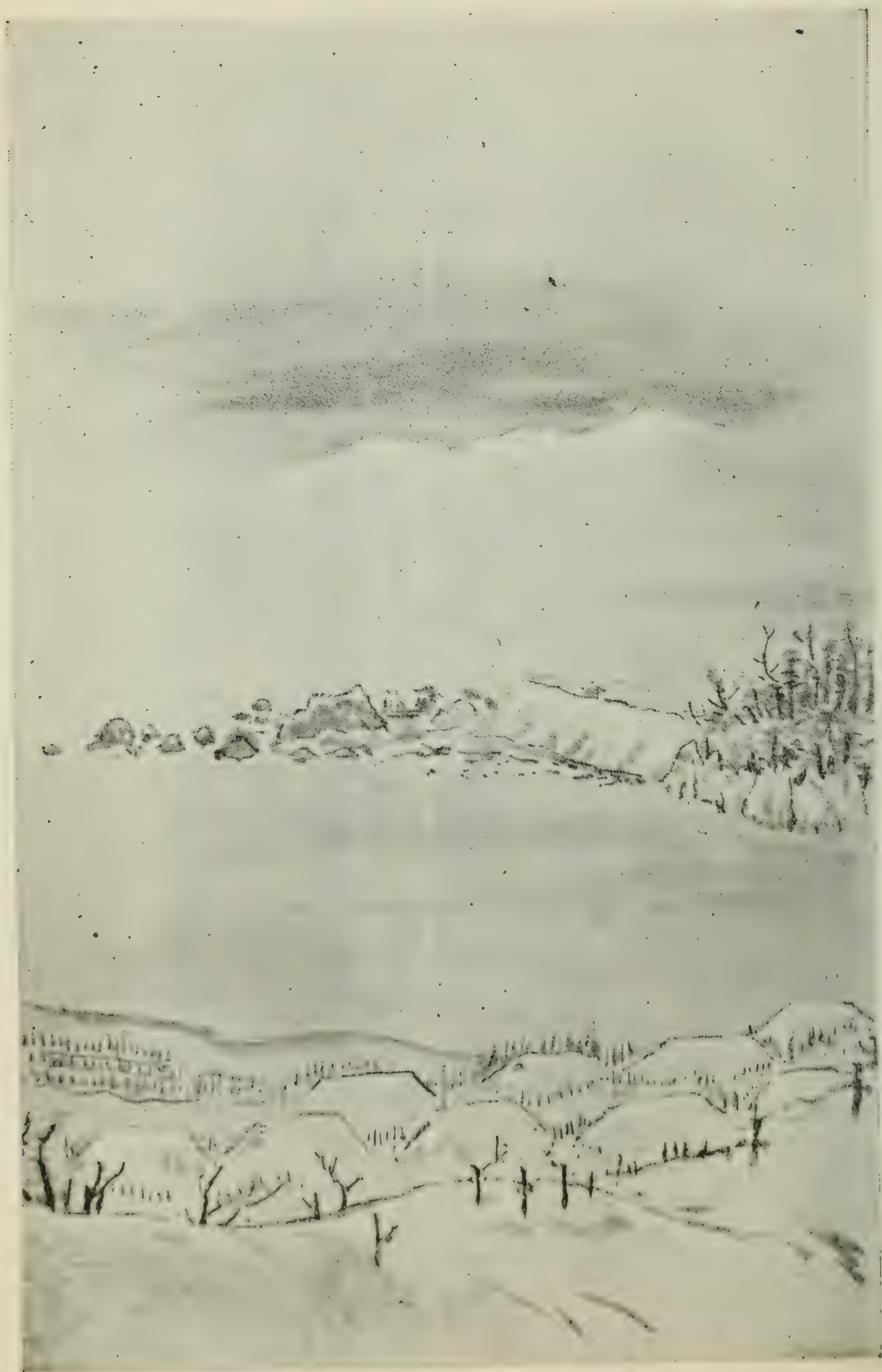
寺田貞於氏

きさらき朔。「行としの餘波のみかはこや歸る君と春とをこゝにまたなん、と、雪のふるとしのことにや、寺田貞於をわかるゝとてつかはししかと、まその如く、こたひ、そのゑたちにかゝつらひて、ふたゝひ、さもらひに來てすみてけるとて、けふなん、はまやかたの竹越かもとにてまみへしかは、ふみてをつとにをくられたり。この、ふてのつとてふことを句ことの下において、ひとくさを、

こゝにけふ春をまち得て樂しさのことかたりいつとしやをそしと。

三日。岡邊に在る竹越貞恭のやとに、貞於、とはせけるおなしむしろにありて、盞のさらに、もゝの福と、もゝの壽とを、こかねの色にかいたるをいたして、あるしせられたるに、

ちよかけてさちことふきゝこのやとにいくたひめくれ春のさかつき。

都介路迺遺地

十日。春光山といふ觀世音の堂も、春雪にふり埋れたる雪の梢を、圓覺院のうはそくかやどよりうち見やる。

木々の芽も春の光のやまのはは花とみゆきの霞む長閑さ。

十五日。ことさへくから人、程劍南か書たるを、長崎の津よりつとにもらひしとて、老翁欹枕聽鶯囀といへることとも宿の屛風にありしかは、

さらぬたに老は寢覺ぬ柴の戸の明ぬに來鳴そのゝうくひす。

童子開門放燕飛

うなひ子か門しあくれはつはくらめおのかねくらを余所になくなり。

片暖柳條無氣力

青柳の絲のよる〳〵冴かへりまたしもむすふ河くまの里。

半晴花影不分明

春の日の晴みはれすみ咲花の映ふかけもさたかには見す。

十八日。あまた鳴つれて、仄に見やる千鳥のかたをさして行に、歸雁遙といふことをおもひ出て、

奥の海行衞も浪に羽ぬれて皈るや鴈の霞む遠方。

十九日。うちとのかんみやしろを、おかめまつるあたりの雪の、ほの〳〵と霞渡るを、

消のこる雪のしらゆふかけまくもかしこは花の面影にたつ。

二十日。あかつまのものせよといふとて、からのいと長き、とかましてわかめかりありく
は、このころ、披岸に至るみほとけのわさすとて、日ことにもち奉り、人をも集めて茶呑てふことをして、くたものをくはせ酒をものし、はて〳〵は唄ひ舞ふためしそありける。

彼岸の佛事に

春の海汻たる且のいそつたひ行てわかめのつとにからまし。

廿五日。弘前に在る樋口道泉淳美のもとよりかり見たる、外かはま風てふ日記を、けふなん返しやる。ふみのおくに、

めつらしなそとかはま風吹よせて拾ふこと葉の玉の數〳〵。

廿七日。貞於のさもらひにあそひて、ぬにしろのほとりなる湖より得きとて、鮒なん、これをさかなにとて杯とりて更たり。

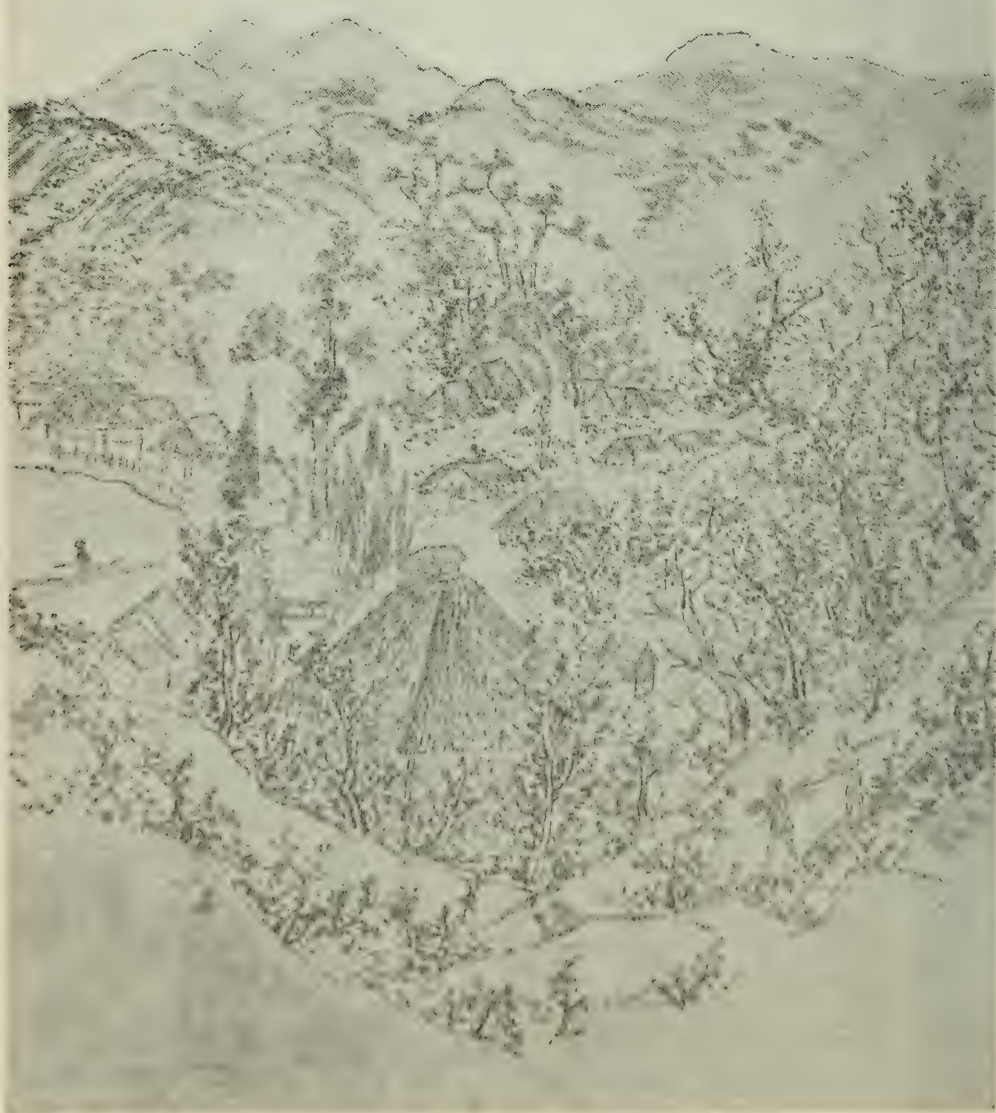
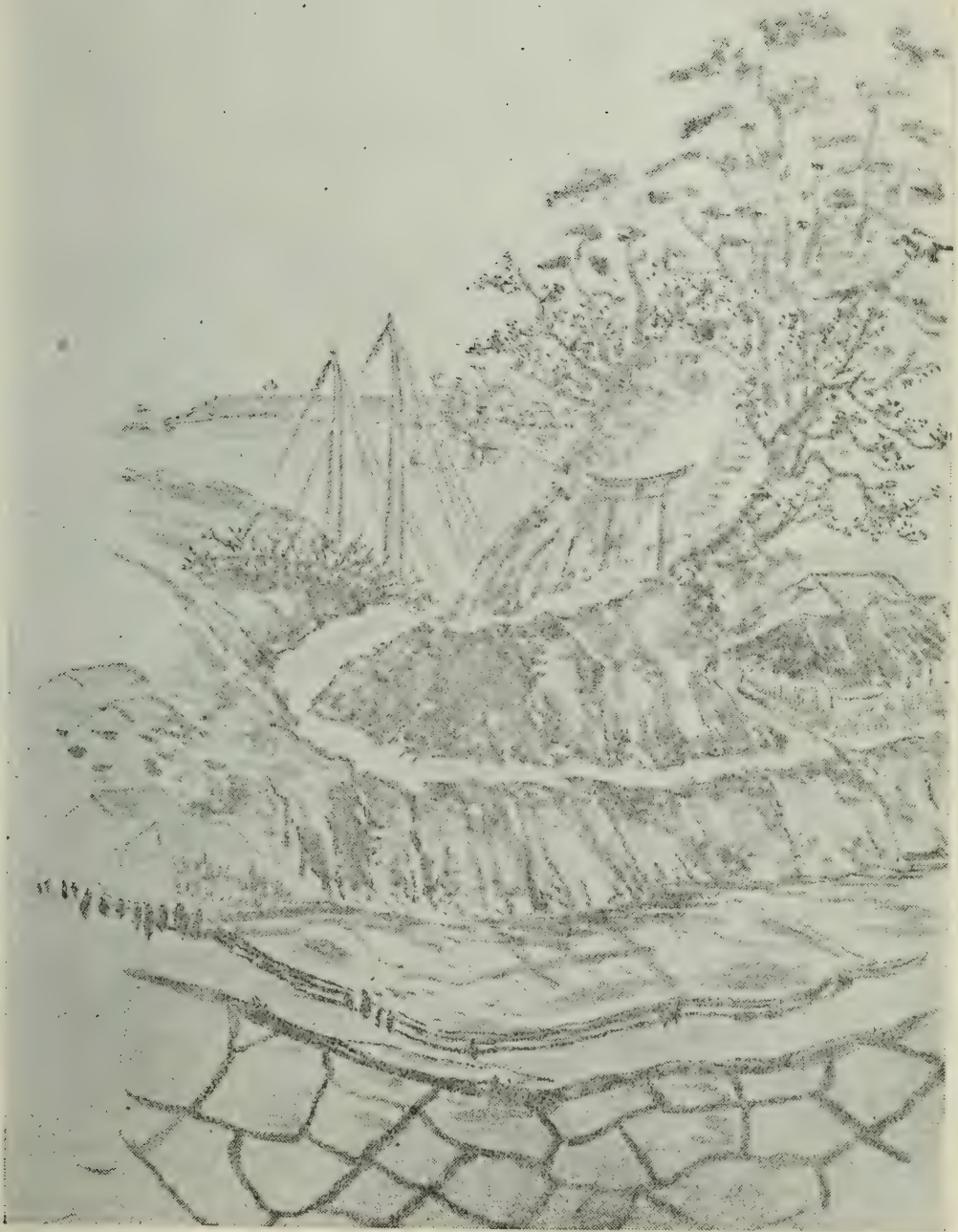
こやあかしもふしつかふなつかのまも月雪花のものかたりして。

三月三日。かれ枝のやうに、いまた、ふゝみもやらぬ桃の枝を、いはひへにさしてけれは、

また咲ぬもゝのした枝をうら人の手折やけふのしるしなるらん。

尙齒會あり

けふは弘前の稽古館に於て、此日の祝にとりませて、尙齒會をなんし給ふのよし、かねて、き

都介路迺遠地

のふ、人のつたへ來しとかたるをきゝて、
　　けふに咲くもゝの齡を老やへむ君かちとせのかけにむれ居て。
八日。　寒食東風御柳斜といふ句を、人すんしたるを聞て、
　　里くらくたつは柳のいくむすひけふりなひかぬ夕くれのそら。
十一日。春雨ふれはなかめたり。
　　天のめくみ君の惠のときつ風ふきもたかはぬ御代のはるさめ。
十五日。　春江潮水連海平といふことを、
　　みち來れはしほも入江の春なれや浪もうこかす風たゝすして。
海上明月共潮生といへることを、
　　宵のまはいさよふなみにあらはれて月もみち來る沖つしほあひ。

鍬卸し祝ひ

十六日。鍬おろしの祝ひとて、たかやしをけふにはしめて、家ことに、むつきの、まゆ玉のもちもてありく。　昨夜閒潭夢落花、可憐春半不還家といふ。
　　ふるさとの花しうつろふ夢路よりなかめてわひぬ春のなかそら。

初鶯

二十日。うくひすはしめて囀り、つはくらめ來けり。
廿九日。寺田貞於のさもらひに、ひねもす在りて、見やる吾妻川のへに霞たち、そひへ松の

一本たてるに、そかひなとのおもしろさ、いはんかたなし。

ゆく川の上はふかめて松ひと木見へて霞の水尾そしらるゝ。

春田うつは、かたなとのやうに見やらるゝ。

苗代のたねやまくらんすきかへしうつ磯波も近きみなと田。

雨のそほふるに、あつまの濱のあたりおかしう、鳥なとむれり。

とふ鳥もしはしあつまのはまひさしさしてたのまん春雨のそら。

こゝらの船とも、このみなとべをさしていりくなと、けしきこと也。

遠近のふねはみなとに寄るものを春の泊やいつこなるらん。

椿眞盛り

さしふりたる椿の、この磯山に在ていま眞盛なれは、

綿津海の花のかさしの玉椿かけて八千代の春をさかまし。

四月朔。小島遠う見へたり。こは、風によて小島、大嶋みゆといふ。

夏衣たもと涼しくけさそ見るこしま大しま風かよふらし。

鹿嶋人形を流す

八日。鹿嶋人形とて、かたしろあまた小舟にのせて、笛つゝみにはやし、祝、あまたしたかひて、のち海に流やりぬ。

船出を送る

十日。もゝあまり泊たるおほふねの、みな、風をまち得て出る。家ことに笠あけとて、長き

吾妻濱にて

小山内長助舊館址

棹のうれに菅笠をゆひそへて、その、ふなをさか宿りし屋のうへに立るならひなりけり。こは、楫を枕にむつひたる、あそひくゞつもせり。はた、それらか、そのふねを聲かぎりよばふは、袖ふる山の昔そ偲れたる。

十一日。桃さき、梅、さくらも、いままさかりにそなりぬ。　花間笑語聲といふことを、

　いろふかく花もほゝゑむ木のもとに誰れおもふこと語りあふらん。

笠島行憲といふ人にあへり。

　なれもけふいてゝかたらへほとゝきすまつに木高きもりのしたみち。

廿八日。人々とともに野くれ山くれとわけありき、吾妻の森といふに神おましませり、六所明神といふ。このもりかけに、いしふみふたつたてり、康永元年二月廿九日とそ記せる。いまひとつは文字さたかにも見へす。このあたりは、なかむかしのふる館のあとある、ぬしは小山内長助とやらんいひたりしなと人のかたれり。流を吾妻川とて、南又、山師又といふおく山のふたつの水、ひとつに海に入る。しか、あつまばまの名そありける。あづまいしとてくさ／＼の眞砂の、めもあやなるをひろふ。そかなかに多は、木のくゑし石となり、炭のくゑし石となりたる也。

廿九日。輪嶋なにかし、さもらひに在て、「いさとはん木の下やみの蹊道　波丈」しか聞へ

しかは、しるへにたとる遠のうのはな、と、つけつ。

「貫之のうしのいひけん、しら雲の八重にかさなるこの都介呂のをちに在て、かく、とし月をへて、やをら春にもなれはとく〳〵とおもふに、雪のけちゆきなんをまちてなと、やよひの日数もなから斗過ぬれは、かゝる浦山の花はいかに見捨てけるやなと、なさけ浅からす人ごとにいへれば、こころひかれて、杜鵑まつころほひとはなりぬ。いて、こたひは、青葉さす木のしたやみやたとらなんと、せちに思たちしかは、

うらやまし行さき〳〵は夏の水。　里圭

青葉折しき人を偲のはん。

とついで、しかすがのわかれものうく、いま、ひとひ〳〵はなといひもて、さつきの朔の空と日はへたり。この夜明なば、かならずものしてんとおもふほりに、ゆくりなき雨の、名におふ五月雨めきてふりすさひぬれは、えしもいてたたず。さりければ、

五月

端午の節句

五日には、つとめてと人のいへるに、

その家はふかてまたなんのき綾目。　波丈

薫る言の葉そての久須太万。

となんいふ和句をす。

都介路迺遠地

都介路迺遺地

見送りの門にきはしき幟かな。　桃兒

こよひいつこにあやめしきねん。

かくて此日も、しほくもりして風やたちなん、けふの祝ひここにしてなと、うまのはなむけにとりませて、れいの笹粽てふものを、くぐの草もてゆひたるをといて、はた、ほとつらの根をそくふめる。ここら、とまりもとめ、むやひしてける、なにまろ、かまろともゝ、みた小幡さしてけるか、しほ風にふきなひき、うなも、いそやかたも、わきてにきはゝしう、船なる屋形までもあやめさしたり。

ふなやかた軒はのあやめふくほとや沖つ潮風けさ匂ふらん。

かやふけるさゝやかの宿に、さうぶのみをさして、えもぎは、ふきもまぜざりけるを、わらはべのあふき見、あさみたるを聞て、此家のぬしにかはりていらふ。

折そへてよしふかすとも蓬生の軒やあやめに茂りあふらん。

里圭のもとより來るふみのはしに、

粽ゆふ男はぬめるすかたかな。

と、かいたりけるに、

とうめか菖蒲ふくまちはつれ。

けふの祝をと、やとのあるしのいへは、

けふことにひかるあやめのなかき根やちよにくらふるためしなるらん。

よんへよりの雨けさは晴るれと、袖は五月雨のおもひして、

けふは身も六日のあやめひく人のあらぬ袖さへ沾れてたちうき。

佐渡の島のくすし　似松

わすれ草のなかに忘れぬわかれかな。

いとと夏埜を行まよはなん。

（六日か）

ときのまに、雨の音してふりにふれは、けふもはた、とゝまれとて止りぬ。

七日。此ころの雨は餘波なうはるれど、名殘をおもふ袖かつぬれて、けふそ、この深浦をたちづる。

深浦を立つ

ふる里をいつるおもひよこそ此年なれにしたひのけふのわかれは。

こその秋の初より、ことしの夏かけて、朝な夕くれ、かたらひとひむつひたる友垣、やとのあるしをはしめ、みな送りすとて、をさなき童までをのか門々にたち、あるは、手をあけて遠かたにまねき聲をあげて呼ふに、のる駒も行なつむこゝちして、吾妻坂になりて、やとのあるし、人々にも、いまはわかれなんといふとき、

けふよりは行衞も空にしら雲のたちなんうさをおもひやれ人。

とて、馬ひきむけてとく／＼と追ふほと、行合の阪もくたりはつれは、ふしなれたるうらやかたも、いそ山にかくろひて見へねはこゝろほそく、

たひ衣來なれし浦にわかれてはいつ行あひの阪は越へなん。

凪合瀬の岡邊にのほりて野良を行ほと、宮地、下々村、館ヶ村、野中なといふ處を山きはに見て

子規なく

晴山もちかつきて、芝生におりてかれ飯くふほと、子規のはつ聲おかしう遠かたを過る。

五月雨の日をふる雨もけふはれてやまほとときすいてて鳴也。

猶野路を行に、大船となんいふはやしのほとりに、眞帆片帆海につらなりて、追手ふくも風情ことにおもしろく、霍公鳥もこゝに鳴しかは、

海こくも楫のまに／＼おほふねのとまりさためぬやま不如歸。

狐に會ふ

村の近つくほと、尾の末ましろなる狐ひとつ、草のなかかい分て行を、こは田野澤村のきんこてふ、名ある、ふるきつねのゆかりならん、な追ひそと馬ひきらかこゑ／＼いふに、いととおぢて、かへり見／＼うせぬ。

しけりあひて身こそかくろへ野狐のをのか行衞になひくなつ草。

柳田の田つらを行に、やかて植なん料に、田の面に馬ひきわたし、かいならさせ、あるは苗か

つしけりぬ。

かけおつる里の柳田風ふけはちまち涼しくなひくわかなへ。

行みちのひたんのかたはらに、いまそ眞盛なりける藤の、ひろき野にひし〳〵とかゝれは、

紫の糸くり返し夏かけてさかりを見する野邊の藤か枝。

闕邑の甕杉
阿彌陀杉

闕邑になりて安浄寺のしりよりいりて、八幡の森を左に田の中路を行は、甕杉、阿彌陀椙とて名ある杉ともありと聞て、馬しはしつなかせ、見にとてわくる。（天註――「むかし、杉のもとにあみたほとけをほりえ奉りしとていま、あみた杉とて田のほとりにあり。）かめ杉は山ぎはの小高き處にあり、その木のもとに貞和三年、貞治六年の石ふみともたてり。なかむかしのころ、しるよしのさかひにすへたりし、その闕守らがふるつかにてやあらんかし。いまた日たかゝう安自介差波のみなとへに到り、七ツ石といふ處なる

鰺ケ澤

雀部（さしべ）といふ、さかさのに宿をさたむ。

八日。けふは空あしくこゝちもよからねは、えしもいでたたてあるに、あるし、茄子と龜との、ふたひらの画をとうたして、これに歌かいてとひたにいへれは、かうかへて、茄子のかたあるに、

とことはに露の玉なすひかりをやちらす朝夕やとに見るらん。

龜のかたあるに、

芭蕉の句碑

いく萬池のこゝろに墨かきのかめの齢のかきりしられし。

と、あしてにかいてとらせたりけるは、かたはらいたきこゝちそしける。

十日。このころの雨けふなん晴て、ここを出んといふとき、此里のちかきあたりにおかしきところあり、いさたまへとて、あるしのはらからと友なひ、死虫庵をゆんでに、なゝつ石神のほくらをめてに、薬師の森ををちかたに見て清き岡にのほれは、「蝶の飛ふ斗野なかの日かけかな。」といふ、はせをの翁の句を、いしふみにかいて近きころたてり。なかめすれは、あをなばらに權現か岬、大島、小嶋、刀舎の碕、安日氏のやま〳〵ひきつらなり、米中の雲のなかより、岩木山の、雪をまたらにおびなしたるすかたことなり。雀公鳥のふた聲三こゑ聞へたるは、船山のあたりとなん。

しらすの漁

をのかつましたひやすらん時鳥このふなやまをこかれ來にけり。

此山をめくる谷川の末は、海に入るあたりに四手あみして、志良須てふ、さこの、すなとりなんしける人の、河へたことにたてるか、とをしろう居ならひたるも見やられて、

魚の名のしらすに寄るなみすらも雪か花かと見ゆる遠かた。

ことみちより坂くだりて、この小河をつたひ來てかの魚を見れは、みやこちにうる知利咋死差胡に似て、珠流河の國清水のなかれにとる白洲にことならず。やにかへり來て、ひるより

十腰内泊り

岩木大權現

十面澤に出る

鯵か澤をたつ。人々も送りきて阪本にわかれたり。浮田のやかたになりて、そなたへ、ふみあつらへまくおもふほりに蜀魂のなきたり。

霍公鳥かくとしかたれわかれちのうきたひこころもひとり來にけり。

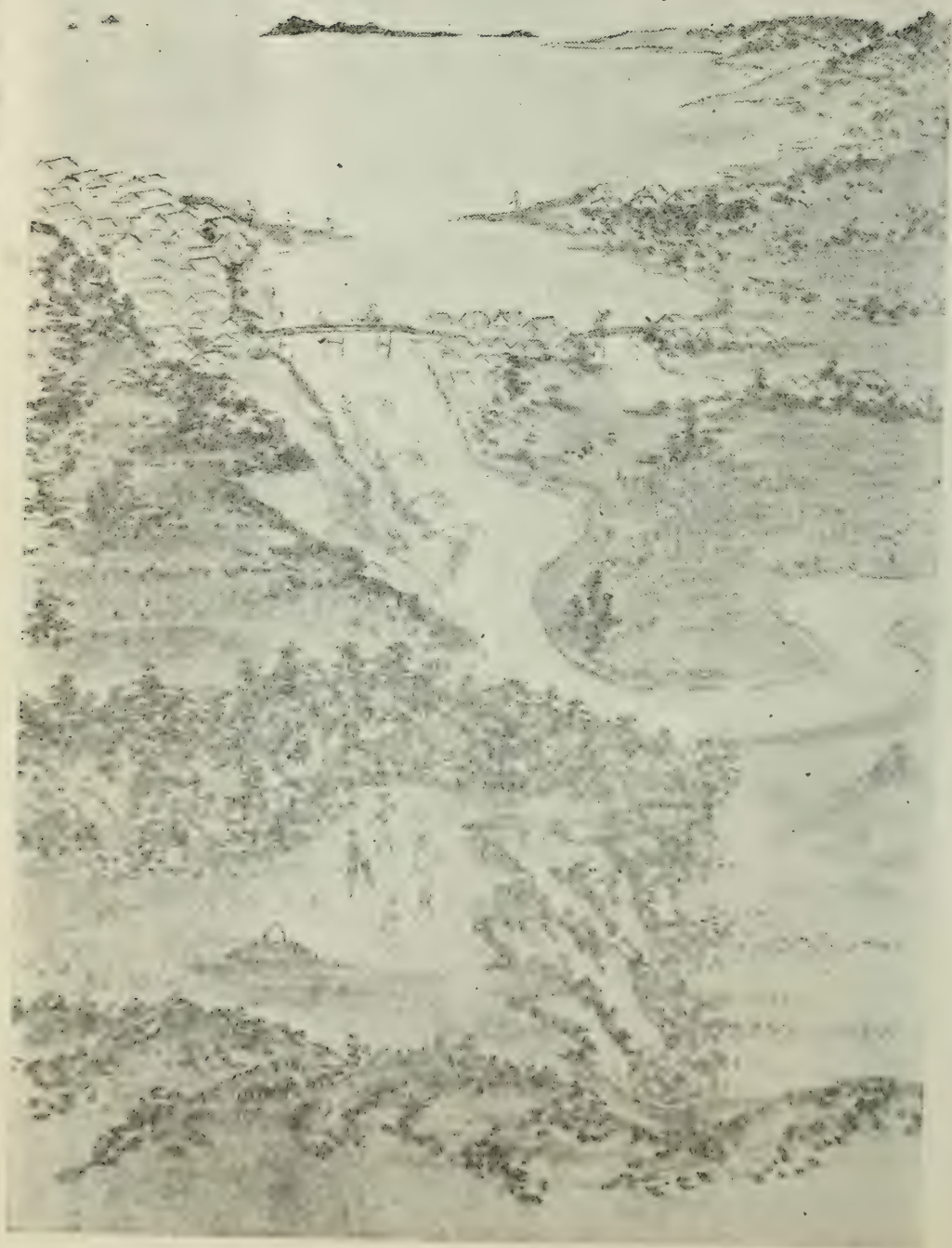
立石村をへて、いまた日たかきに十腰内につきて岩鬼山大權現にまうてんとおもふほと、雨のふりきぬへう見へしかは、去年休らひしやとにやどかる。やをら、ふしつきぬとおもふほとに子規の聞へて、

かりねする夜床しないて時鳥きけは見はてぬ夢のみしかき。

十一日。空山を左に大森山のほとりをへて、その處のひとつ家のあるし、長見筑後とやらんいふ、かみぬしのあないにてこの堂にまうてて、御坂のかたはらに、としふる大杉のうれ朽たるを見て、大同のむかし語りもうへならんとおもへり。藥師森のこなたこそ御月山にて侍れなと、馬ひきのをしへぬ。あなたにやあらん不如歸の鳴たり。

月山の名にめつるともくれぬまはなと霍公鳥いてかてになく。

南にわくれは、大石大明神といふ神のおはしませりなと聞つゝ、おほみちに出て十面澤といふあり。こなた、かなたを時鳥の聲聞へたるは、何となう、ふる鄕をしきりにおもふ。けにやあらん、もろこし人は、かうやうのとき、こしかたをしのふこゝろをもて、くしにつくりて

都介路通過地

いまもうたふ。さりけれはわれも杜鵑を聞て、もろこしふりに、かつ袖ぬらして、

ほとゝきすなく音にしはしなくさめとつらさはまさるうき旅の空。

藤井のやかたを行ほと、名におふ花の垣根ことに咲たるは風情ありけり。

かけ見へてかかるふち井のそこふかくむらさきふかき波やたつらん。

車澤の小瀧

高杉のすくよりこみちにわけ入て、中別所といふ村なる車澤といふところに、ちいさき瀧のおちくるなからはかりに、いろこき杜鵑花の咲たり。此水は、岩樹山の麓をへてこゝに流たるを、田にひきもて行なと、

山いく重めくり車のたきつなみひきもとゝろく音をこそきけ。

古碑多し

この中別所と宮館といふやかたありけるあはひに、五百とせのむかしにや、やことなき人のこもりおはしたりしとおほへて、館のあと、あるは、ふるき石ふみありと聞て見まほしく至れは、石佛ヶといふ田のあせ、畑中、木の下、草の中なとに、石塔婆のこゝらたち、あるは、ふしまろひ苺に埋れ、すれやれて、文字のすかたもやゝ見やらるゝは、いかなる君のこゝに棻へし、なきみあとならんと、そのつかしたる處に行て岩畔古碑空綠苔と、すゞろになみたおちて、しらぬ弘安、正和、延慶、永仁、元應は、よみもときたり。

誰れ栖て遠きむかしを水くきのあとをはかなみ建そいしふみ。

宮舘村寺

高松のこしま

南無阿弥陀佛
光明遍照十方世界
念佛衆生攝取不捨
正和二年十一月

延慶二年
孝子
敬白
右
五七日
永仁六年三月廿六日
敬白

新岡村を左に、なかつか野をわけて岩樹山の麓を近うゆき、高岡をへて百澤にいたり齋藤の
もとにいたりて、去年別れたりしものかたりして、あるし。

うれしさはたくひも夏の草ふかき笹のかり家を人にとはれて。

といへりけるうたの返し。

うきおもひこよひは夏のくさまくらむすはて人と語りあかさん。

かくて日は暮たり。

十二日。けふはかりはとてとゝめて、あるし矩房の云、あか父なる矩勇は、もと、せちようの
人なから、いさゝかのあやまちに、そのえたちもしそきてより、わは旡差志にまなひ吉川の
なかれをむすひ、たまくしけ、ふたゝひふる郷に歸り來て、世のちりをさくとにはあらねと、
この、いはき山の麓にはすめるなといへるを聞て、

苔清水むすふ庵にかくるとも世にたかき名を人やしるらん。

やつかれも、ちかきにこのくにをたゝんといへは、

ふる里へ歸るときけは晴る日もそてになみたの五月雨の空。

となん、あるしのいへるに返し。

袖ぬれてなみたの雨はふるさとに歸るこゝろのかきくれにけり。

とて、雨ふれは日をこゝにへたり。

十六日(マヽ)。巨久良の神明とて、相馬の澤てふところのいはやとのうちに、うちとの神を、たか、いつの世にかいはひたると聞て、去年の冬安門の諸瀧見にいたりしとき、まうてまくおもひしかと、雪のふかうして、えまうてさりけれは、いてこたひ、そのところへとこゝろさし、ふたゝひのたいめなと、百澤を出たつ。あるし矩房、しはしみち送り出て、

百澤を立つ

　　としをへてしたしむかひも夏ころもかさねてと又いつをたのまん。

近き日弘前に至らば、めくり會んなといへるに、

　　けふよりはひとり立木もなつころもうらなくおもふ人にわかれて。

やかて矩房にわかれて、手ならふ童にのみにさいたゝせて、一本柳のやかたよりわらははにも別て、坂本をへて目屋の澤に入て、去年宿りし國吉村にかつ至る。稲荷の社にまうてんとて御坂高くのほる。坂中に男女の立ていふ、「ことしの寒よ、苗のおがらぬことよ。うまやい、五ぐわつとりこもこず、うの花もさかぬ。」と。五月鳥子とは杜鵑をいひ、このあたりにていふ、うの花は金帶花とやいはん。なべては賀佐てふ、糧としてその葉は喰ふ灌木のたくひ、深浦のみなとへにては鰯ばなとこそいふめれ。

國吉村にて

苗おがらぬ
五月鳥子
がざ、鰯花

　　此里はまたほとときすきかなくによし卯の花はさかすともあれ。

清水

中畑に泊る

乃計羅川を橋よりわたりての名を黑土といふ。なへて井堰の水増り、路もなみあふるゝに、

　早苗とる日や近からん小田のくろつちかいやりてならすあらおら。

ゐせきをつたひ清水にまうてて、うてなたかうのほりて、をはしまに倚て遠かたをのぞめと、枝葉さしおほひて見やられす。くたりて、ひきく瀧のもとに、

　木をわりてとるもはるかにめくる樋の行水きよみつたふ山かけ。

やゝ村にいてて、

　咲しそのさくらはいつこ茂りあひてそこともしらぬ杜のしたみち。

藤の多く咲かゝりたる米ケ袋を河越しに見て、福村といふあり。きし邊の藤の眞盛り

　河風のこや軒はふくむらさきのはなのふちなみ寄るをこそ見れ。

中野てふ村をゆく。

　夏草のなかのかよひちしるへしてしけき往來にみちもまとはす。

中畑の村長三上なにかしかもとに宿つきて、外面になかめて、

　秋はさそみのるをや見ん世のなかはたうへ畑うつときのいとなさ。

くれて猶うちくもりぬ。

十五日。つとめてやとをいづ。かけのとうろといふ山の藤、こゝらかゝりたり。時に見し、

村市村にて

とゝこかふ

世の中瀧も青葉の中におち、たきち流る河のせに蛙の聲おもしろけれは、聞つゝ行〳〵て村市村になれは、去年宿りし宿に入て、なにくれとふる翁の物かたりを聞つゝ、とゝこかふとて、かふこのきゆつくれる宿のいとなう見へしかと、ねもころにものし聞へたり。

びき、もつけ、かはづ

山路分けて

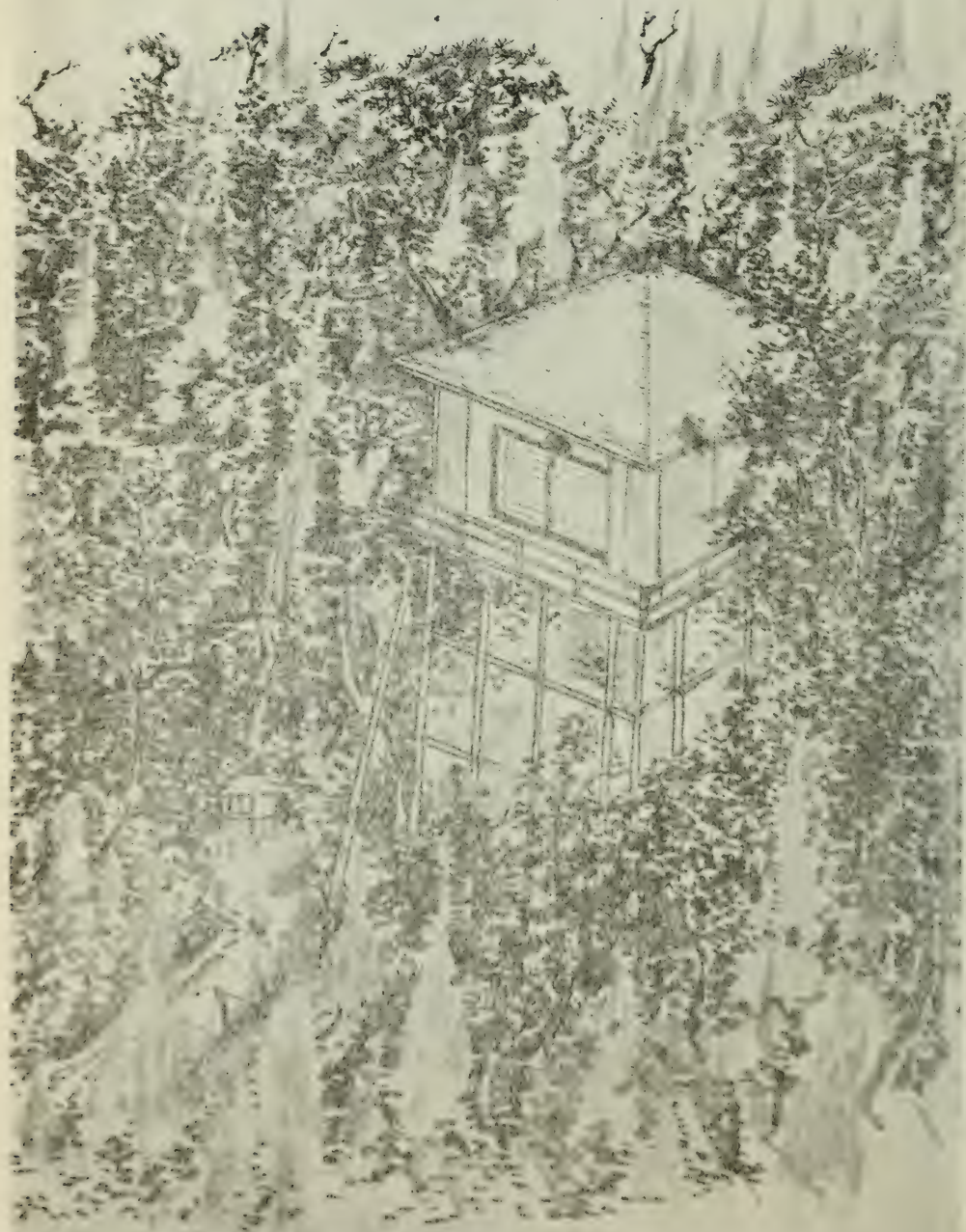
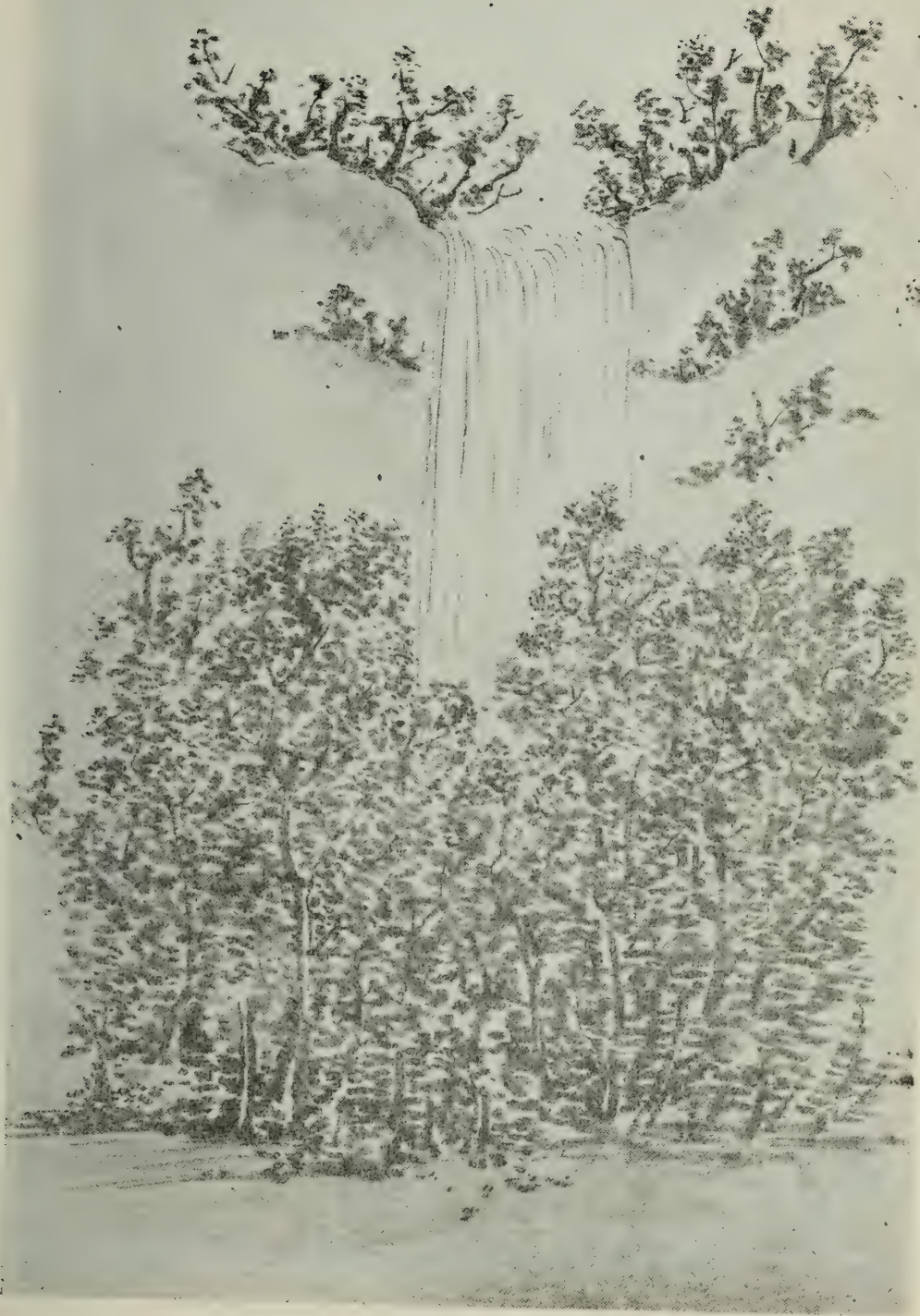
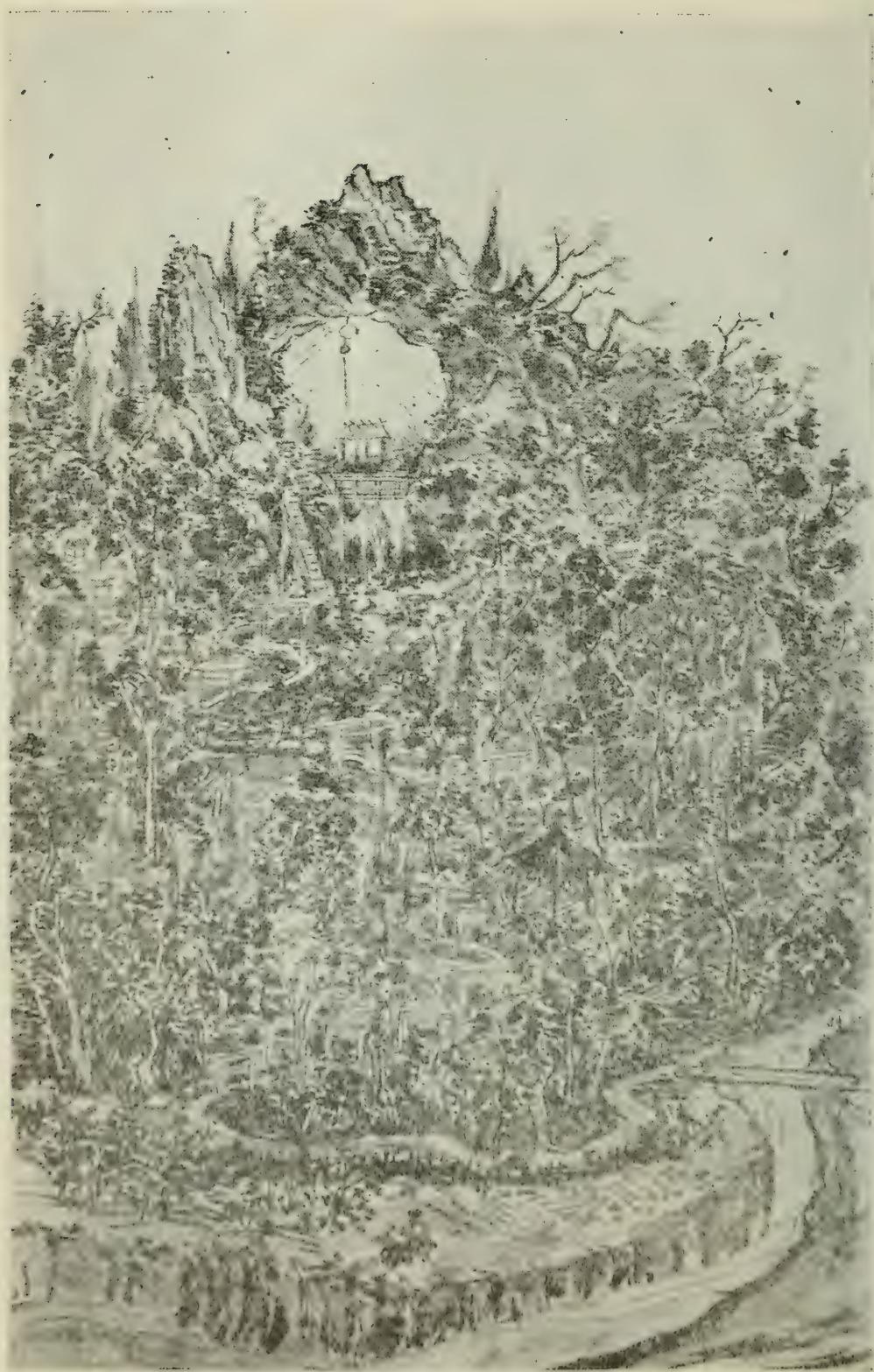
小倉の神明

十六日。あないをさきにあさ河渡るに、かはづの聲いとあはれに聞へたるを、わきてことしは、かはづの多かるなと、ひとりこちたり。みちのくにては、田にすむも清き河せに鳴くも、みな、ひきとのみいへれど、此あたりにては田に集くをひきといひ、色くろく大なるひきかへるをもつけといひ、川にすむをかはづとはいふと。こは、無名抄にかいのせてける傍のありておかし。かくて山路行なんとて、平ヶ澤村を谷そこに見なして高森村に至る。弓手に大高杜、めてに阿自良澤、磨砂(みがきすな)といふ山みちをわけて尾太(なつぶ)のかな山路をよこきれは、天狗森といふほとりよりあないに別て、遠方にふじくら、あしら澤、さくら澤、あいないを見やり澤田といふ村に來る。このあたりのわざとて竹箕、籠匣造り、田はた作りぬ。小倉といふ處の見へたり。洞のことき、いはやのいと高き也。唉澤川の岸べ路べたに在る、茂き林の中なる鳥居あまたわけ越へ、かた岨つたひてかけわたしたる、はしごをのほれは、をはしま高う、御社はさゝやかに、ふりあふき見る岩の、うつはりのことき處に鈴鰐口をかけて、まうつる人これをひくとき、あめにひゝくおもひせられて、こゝろきよし。けふは弘前よりとて、すんさ

都介路逍遙地

都介路適達地

窟の不動尊

金平石

あまたしたかひし人のまうてけるとて、村のをさも出むかへり。かくてのほり得て、みむろの前に手酬して、

宮柱ふとしきたてていはやとにうこきなき世をまもる神垣。

こと神のほくらもところ〴〵にあるに、ぬさまつりてわけ歸る。この、さくさは川の高はしとて、あやうきひとつ橋を渡り、山路はる〴〵と、いはやの不動尊とて此流のきしに堂あり。高さ、はかりもしられぬいはほの上に、木をよこたへて大なる鰐口をつりあけ、長きつなをさけたり。とりてひきならせは、山谷にこたふる音の、さらに幽に聞へたり。追付、山田、前相馬、まそまへ（天註――ヲッツケ、マソマヘ、みな夷の國に在る名とこそ。）、水木在家、あるはいふ紙漉澤を來過て、賀佐の坂越へて五所といふ村に入て、如來瀬邑に、いとふるきいしふみのあるよし聞て、川わたりてその村になりしかは、みちはたに立るをさくりみれと、いくはくのとしやへたらんかし文字のありけも見へねは、歸らんにも夕くれの近けれは、此村にやとはかりつ。

十七日。つとめて、よんへのやとを立づる。あなたは金平といふ村の見へたり。そこより、かなひら石とて、眞鉋もてけづりなしたるかやうに平にして、石の面は虫のはみたるごとし。くにうと探て、ゐせき、やり水の橋とし、そのにおき庭にしく。われ一とせ、この石もて絹紙なとを草の色に摺りしかば、偲ぶもちすりにことならす。人々の見て、こはおかしとて

からない坂の展望

これをはしめにならひて、人みなすりそめたりき。鳥野、龍の口なといふところも過て、伝良寧以左可（天註——カラナヰ、カルナヰにや。かるは夷人の畠をいひナヰとは澤をいふ也。）のなかめいかゝあらん、田井に水ひいて河もいとあさけれは、塘をくたり岩木川をわたりて、かの岡にのほりて見やる。岩樹山の麓の里はいくはくならん、木々の中より見へみ見へすみ、千町の面は馬引かいならし、あるは植わたす。田子の菅笠のひし／＼と星のうつるかことく、蚊の集く聲のやうに遠う近う、歌うたふも聞へたり。

　からないさかくともしらしひのもとのひかりにいとゝ榮ふとみくさ。

弘前に至る

むらたつ松のあはひに、むかし、君のなりところのありしを、ふたゝひおこしたて給んの、そのいとなひそありける。此日弘前に至りて、れいのなかゐかもとに宿る。

十八日。くすし小山内元貞にいさなはれて、そこともなういてありく。鹽分町といふ處を行に、誰かすさみにや、夏刈の蘆ふたもと三もと、水の面にうちなかしたり。

　あしの葉のすかたを舟と見てしかな沖のしほわけいつるおもひに。

白藤明神といふみやところに、名におふおほ藤のさしふるかかゝりたるみまへを過て、外瀬（このせ）てふ邑の、かきねの中にかこひなしたるくさ／＼の薬は、おほんつかさの御遠也。かくて水涼しけに軒は行宿のあゐに、伊藤、古郡、廣瀬、山崎なとの、くすしの圓居に日はくれたり。

加集比良以斯秀理

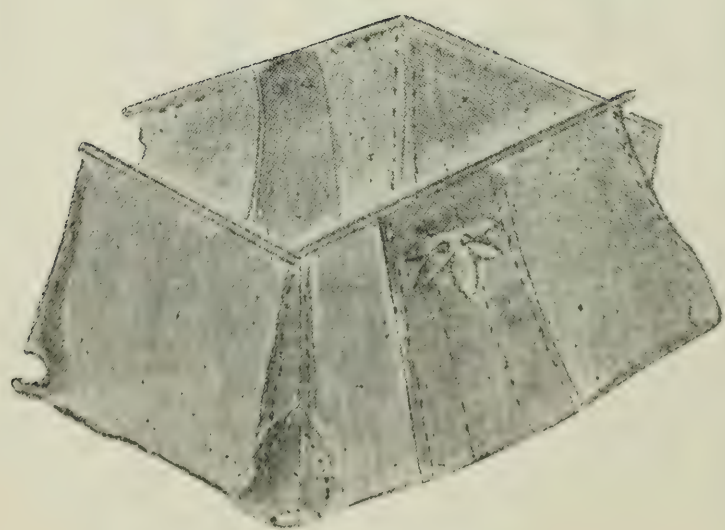
水鶏いと多し。

　　こや鴨それともわかし軒近くたゝく戸のせの水の音なひ。

小夜中に歸りぬ。

大平山長勝寺

二十日。禪寺かまへとて、三十あまり三の寺〳〵軒をつらねたる。そのをさなる大平山長勝寺にまうでて、樓のおほがねを見れば、「施護檀那、見阿彌陀佛、沙彌道曉、沙彌行也、平高直、安倍季盛、少彌道性、沙彌行心、丹治宗員、平經廣、源光氏、僧證嚴、沙彌道法、藤原宗直、藤原宗氏、沙彌覺性。勸進　都寺僧良秀。大工　大夫入道。皇帝萬歳　重臣千秋　風調雨順　國泰民安。嘉元三年丙午八月十五日　大檀那粕模州菩薩戒弟子崇演。當寺住持傳法沙門德熙　謹書。」とぞありける。平福山万象寺の門に入て一教祖貫和尚に見へて、此寺のいはれをとへは、和尚のいへらく、そのかみのことにや、法相のなかれをくみて道教院といひ、最明寺との入給ひて、かの唐縣姫のなきたまゝつりしころは眞言にて初七日山靈臺寺といひ、嘉元三年のころほひ宗洞にかはり、藤崎よりこゝにうつしたり。中頃、唐縣山といひしときは寺のいたくあはれたりしかは、人ことに、から板じきの万象寺なといひしと、うちゑみてかたり、姫のかゝみ、玉手函てふものも在しか、うせたり。ひめの、りはちのくろかみ、こは學了房道崇入道のもたまひし調度也けりとて、すゝつきやれたるかはこに、さゝりうたんの

都介路逎遠地

かたありけるを、とうたして見せられたり。

廿一日。毛内惟一のとひ來て、あな久しとて、

　奥の海みるめ樂しとうらつたひ言葉のたまやひろひ來つらん。

とそありけるにむくふ。

　おくの海見るめはあれと言の葉にえやはをよひも波わけて來ぬ。

廿四日。夜邊なん、くすし北岡かもとに更るまてありしかは、けふは眠さに、午のつゝみうつころ、ひちを曲るのわさに夢は見つるやとおもふをりしも、人の音なふけはひしたるにおとろけは、　ふる郷の夢をや見つるたひころも露のひるまのくさの枕は、といふ歌を、枕上にかいのこしたり。こは間山祐眞のとふらひ來りけるよ、あはさなることのくやし。

　とひ來ける人は夏野のくさまくらつゆのひるまの夢かうつゝか。

人のすゝめて、　雨中早苗といふことを、

　ぬれてほすひまもあら田の五月雨にけふいくかとるさなへなるらし。

雨尙ふりきぬ。

間山祐眞を訪ふて

廿五日。廣埼をいてゝやかたはつるほと、和德といふ田つらに、きのふの露のひるまの言の葉かいおける間山祐眞の、このころすめると聞てとひよれは、いまた、さもらひよりのかへ

さならねと、しはしはかたらひてなと、あるしのめの聞へけれは、入て、さうしひき明れは、田名部路の釜臥か嶽丑、耕田山寅、阿遮羅山、石河山辰なと、稻置のほとりまてもひきつらなりて、岩樹根は雲をおひなして、そなたの窓の中にあらはれ、見やる遠近のうへ女、聲おかしう苗もてわたる。

さなへ採る千町の面に風すきてなかめよしある宿の涼しさ。

やをらあるしの祐眞飯ゐ來て、きのふの夢はいかに見てしかなとあるほとに、友かきの工人あまたとひ來て、このあそふこゝろのおかしうくれて、

糸竹のしらへの風もふきかよひはしゐ涼しくくるゝこのやと。

工人もみないにき、夜ははや小夜中と更行ころ子規の過行を聞て、これを冠らせて五くさの歌よみ侍らむとて、あるし硯さし出しけれは筆をとりて、

保　ほとなしやきのふは聞し鶯の聲をよそなるやまほとゝきす　祐眞

登　とはるへき庵ならねとほとゝきすきかはやとまれの人も來にけり　理都子（あるしのめ）

刀　戸さしせてまつ夜はいくよ蜀魂たゝひとこゝゑにあけなんもうし　祐眞

吉　聞人もありける夜半の不如歸なれもおしまぬ聲をこそなけ　秀雄

數　すむ宿もやまもと近み時鳥なく音をたへす人やきくらん　理都子

かくて、とりなきぬれは、

草枕むすふほとなき夏夜はたひのつかれをいかにやすめん。

とありつれは返し。

うき旅のうさもわすれて夏のよの話るほとなく明行はおし。

廿六日。わかれいなんのほり、あるし、そこのふる郷に歸りいなは、みちのおくの手ふり、あはれにかいなしてけるまき〳〵、さそ、見ると見る人のめてくつかへりて、紙のあたへもたうとからん。このあたりのうら〳〵、しま〳〵、至らぬくまはもなう、詞の玉やひろひけんなといひて、

道奥のそとかはまへの眞砂路にかす〳〵のこる水くきのあと。

とそいへる返し。

人な見そ外かはまへのまさこちにつけし衞のあともはつかし。

いてたつにのそみて、ふたゝひあるし。

名にしおはゝ又もたのまんあふ坂の關の戸近く人は行とも。

この返しをす。

歸るとも人にあはむと契りおきて又しら河のせきは越まし。

わすれすよ又逢事は久かたの雲井はるかに皈るたひ人。　りつ子

とありし返し。

　かならすよ又もとはましひさかたの雲井はるかによし歸るとも。

正安の古碑

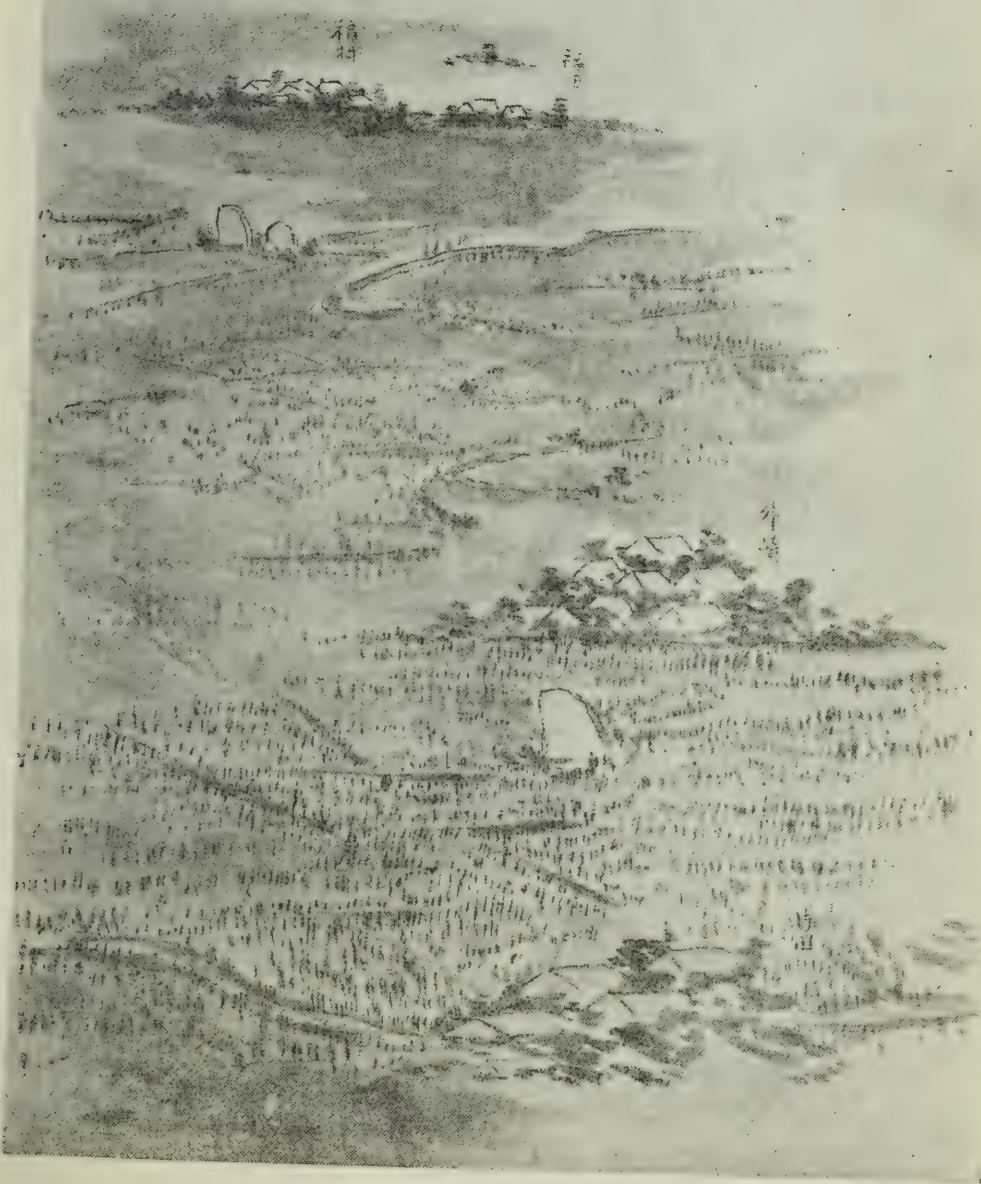
寺内チといふ村のほとりに、としふるいしふみのありけると聞て、いて見はや、そこへ見渡しのいと近けれは田のあせつたひ、祐眞にわかれて至れは、福村のこなた福田といふ村の田の岸に、おとろ夏艸しけりあひたるをかい分れは、正安二年、三年の石そとはの、ふたつまてありける也けり。いかなる人のしるしにてや。かくて外崎(とのさき)村の池のほとりを過るに、建武のとしなるいしふみたてり。かた田むらにいてて、みな植わたしたるなかに、いまた植もやらぬ田面のかしこに見へて、

　ゆひやとふ人もいとなく生ひしけるかた田はかりや植のこすらん。

津輕野

このあたりをなへて津輕野と聞しかと、今は田となり家居して、都加乃村の名そ、かた斗のこりける。名たかき萩も草にへたてられて、生ふてふこともしかすかに見へねは、

　秋はさくけちめもそれと夏草にましるつかろの野邊の萩原。

藤崎川水ふかう、つなふねくり寄たるにのりなんとするに、白雨のきほひかゝれは、人みな

とひのりつ。

河のせのつなとくわたせ渡しもりをちにあめひく夕たちの空。

いふほともなうふり來けるに、ぬれ〳〵てゆく〳〵ほとときすを聞て、

このころはをのかさつきと里ことに出るやまてふやまほとゝきす。

藤崎にて

かくて日たかう藤崎に至りて、去年やとりたりし川越かもとにかつ至りぬ。

安倍高星丸の遺蹟

廿七日。あるしのあないにて、ふるあとども見ありく。そのいにしへ、貞任のきんたち千代壽丸の弟安倍の高星丸は、乳母か、ふところにかゝへてこの藤埼の城にのかれかくろひて、末の世かけて安倍の流、貴きもいやしきも、みちのくにひろく榮行也と語れは川越聞て、こはいまた、もはらは人しらさりける物かたりにてさふらへ。われ、としすてに老たり。あけまきのむかし、あか祖母なるものつねのもの語に、その老女わかかりけるころまては、今のたまひし高星殿、月星とのといふ人おはしたる館あり。いにしへ人の流にてやありつらん。今は、此宿の址さへしる人も侍らす。こや、その月星とは高星の子にてやなと、うちものかたりつゝ、

出土の遺物

川へたにおまします稲荷の神かきにまうてぬ。翁手を折て、はたとせのむかしならん、雨ふりつゝきたる頃、河きしくつれはてて井筒のやうなるもの二ツいつ。つちかいあはけば、そかなかより、炭と飯匙(めしべら)のことき、いと大なる笏なとのありたりし。人のかはねを埋

館の址

しところにて、骨すら土にかへりしにや。かゝる神垣のしりなるところにて、ひとつは水の底に在とて、人ことに井戸ふちと呼ふ。このあたりはみな一の郭とそいひつたふる。うへ、こころ〳〵に封疆のあとゝくづれ殘ぬ。明城となりてあばれながらも、天正、文祿のころほひまては南部の士來集りて、もりつるよし聞へたり。そことなうたどり〳〵て、小田の中路に出たり。みちはたの鳥居は何の神にてかましますととへば、源九郎判官の馬、はらやみてふし死にしにたるむくろ、しづくらともに埋し處、こなたは月輪沼といひ又したぬまといひしも、した袋てふ田の字となれり。日輪沼も、うはぬまとて田となれど、又の名を柳の池とて大池たりしよし。

唐絲姬の遺跡

時頼入道におもはれし韓絲の前、むしちのふるまひを人のさうけんして、津刈郡になかされぬ。入道道崇は正嘉、正元、文應の三とせ世をしのひ、すきやうし給ふかこゝに至り給ふと聞て、から糸姬、われ世に在しころは、かまくら山の花にもまけじと、よそひたちしすかたも、かゝる草のいほりにすみやつれて、われながら、むかふかゝみにさへはつるすかたをもて、いかてか君にまみへ奉らんとて引かついてふしなけき、やをら宿を出て、柳の池に身をむなしくなしつ。したかふ女房うちおとろき、はせつきしかとそのかひなう、木のもとにたちて、聲をあけてよゝとなきぬ。

靈臺寺創建

かくて入道至り給ひて、せちなるおほんなけきのあまり、七日の法のみわさに千僧を集め、こゝに寺を建て一七日山靈臺寺といふ。

その寺のあとは、庚申塚となりて松のむら立り。かの經のなきからを埋み、つかして日輪沼のかたはらに在りし。から糸のもゝとせをやとふらひけん、延文四とせの石のそとは、畠中に立たり。

青柳の池のみどりのくろかみもあはと消へにし世をおもひやる。

道崇入道は出羽の國におもむき、窪田の里に二七日山の寺を建て、角館に近きほとりにも三七日山をいとなみ、今西明寺村に猶在り。入道、この三とせのほどの國めぐりしたまひて、探題、目代、あるは領主の輩に於て无道猛惡ならんことを見さぐり日記して、文應の秋の頃、鎌倉に至りて三百四十四人をめししかど、賞いと多く罰は少かりきとなん。かしこき君のおほんいつくしみにや。弘長三年、最明寺の北なりける亭にとぢこもらせ給ひ、尾藤入道淨心、宿屋左衞門入道最信、二楷堂信濃入道行然、この外の人は、至らんことをゆめゆるしたまはて、おなじとし霜降月廿あまり二日といふに、「業鏡高懸　三十七年　一槌打碎　大道垣然。」とて、うち眠るかごとく、をはりをとり給ふとなん。正五位前相模守平時頼入道最明寺學了房道崇大居士と、かの寺の牌に殘けるとか。弘前に栖る山崎圖書なりける人、唐絲詞を作てあとをとひ、はた伴才助といふ人、そのあらましを、からふみにのべたり。みな左にのす。

山崎圖書の唐絲詞

伴才助の跋文

唐絲詞

鏁臺宮闕與雲連、相府覇圖稱制年、妾御並進傾國選、蕙性蘭心各競妍、主恩錯採葑菲質、日々深閨雨露偏、燕趙歌舞總不問、鳳皇簫諧鴛鴦絃、袖浦秋月同讙歡、扇谷春華共床眠、那料衆姑遂爲祟、薄命履霜氷又堅、佩玦金屋無消息、銜寃鬼方此播遷、蓬門風霜淚常滿、瑤臺日月夢空牽、　　相公微行問側陋、千里既到我東邊、美人潛匿終難避、試問粧鏡照嬋妍、拂黛理鬟泣燋悴、象掃玉釵不復全、冉々歲月塵埃積、羅裙錦襠　　節操不變貌徒改、何顏再對相卿前、螻蟻只甘誤百歲、菅蒯難報當年憐、竊嗎侍兒欲改意、心事萬端不可傳、賤妾唯誓柳池水、此心兩落不上天。」　津輕記室源道冲。

蘭洲先生唐絲姬詞小引

古昔名媛美姝、或身投毛狄、或生爲人彘、其如此之類何世無有邪、盖尤物無所容乎、可哀哉、相傳唐絲姬者、最明寺時賴之妾也、以美專寵、而遂遭其難、見遷於津輕、播蕩在藤前邑、後年聞時賴之微行東巡至津輕、姬謂其必見蹤跡、竊謂侍婢曰、妾昔以色承寵、今華落貌衰何再相見乎、遂抱石投水而死、時賴至、大哀悼爲建佛寺、多寄之田宅、以薦其冥福、實弘長元年云、其所建立稱滿藏寺、今弘前大平山中稱滿藏寺、舊徒自藤前是也、事詳寺中所藏緣起、姬投身處曰柳池在藤前、今皆鞏爲、田古碑沒在田間、文字壞滅不明、但其末所記、延文二年八月之字尙可讀、四字

作二古體也、案延文上距弘長殆百年、其事與紀年不合、倘果若其所傳則蓋碑後人所追建歟、蘭州先生有唐絲詞一篇、其所手書尹請以刻、諸墊中、因略述其事。」

堰神の由來

堰八太郎左衛門の人柱

藤崎にいつるに福田の神といふみやところあり。そのゆへはさとへは、黒石のほとりの境松といへる處に、堰八村とて、田井に水ひく八なかれの堰あり。そこに、さもらひを建て守れとも、いとあらき水のためにおしやれて、いつも成ることのかたけれは、堰八太郎左衛門といふもの〻ふ、われきく、世に人柱といふためしあり、さりけれは水をさむるにやよけんと、あめにいのり、つちにちかひして、慶長十四年己酉四月十四日、つゐきのこと き井杭のさきをわか腹につき立て、いて、うてよとて井杭とともにうたれ埋れて、塘つき柳植てよりは、露のさはりもなう、千町の面に水ひくことのやすけに得たり。その太郎左衛門かみたまを神と齋ひ祭りて堰八明神と唱へ、福田の神とも堰神とも申奉る。その頃、おほん司より五千刈の田の町をこの社に寄せ給ふか（天註――慶長、元和の五千刈は今の一万刈にして、五十人役といふ也。）、いかなることにてや、めしかへされたれは福田の社もあれにあれ、雨の大にふりつ〻き、塘くづれ堰やふれて、つけともくむかしのことくならさりければ、田作りうれへて公にうたへ申しかは、福田の神の御たゝりならんと、うちおどろかせ、田地もとのことく堰八か末の子にあたへ給ひ、正保乙酉年にふた〻ひ社も建給ふ。このみやしろのうちに、太郎左衛門、手つからつくれる木の形代あ

都介路迺遠地

韓縣經碑

古塔婆者大日遍照之弘儀
周遍法界之安躰也
祖尚
放回
延文二二巳 天八月十日
過去忌日先考先妣安養浄刹
現在…乃至法界平等利益者也

門多天王堂

五郎祭、六郎祭

源空寺の法然佛

り、ふかくひめたり。その末の子堰八吉宮といへる、かみぬしとなりて、社のかたはらに家居してすめり。かくて神に奉る。

千町田にひきて井堰の神やもるみのりもしるくしけるわか苗。

奏社の神垣のあるは、多門天の前宮にてなといひつたふ。みちのかたはらに多門天王の堂あり、鶏栖の額に奥法山と記せり。むかし此あたり、おくのり郡たりしよし。此奥法山興福寺はいと大寺にて、今弘前にうつして奥法山藤崎寺といふ也。うべ、外堀のあとて殘れるふるあと也。なかむかしの頃までも五郎祭、六郎祭りとて、六月三日ごとには多門天王の祭りをしたり。神輿の前に鍬形の劔、鎌形の劔といふものをもて渡り、五郎、六郎の君たちふたところ、さいたち給ふのまねひをそしたる。近き世となりては、そのかんわざもたへはてて、かまがたのつるぎ、鍬方のつるぎとて、木にて作りたるが、今は堂のうちにのこりたるのみ。五郎、六郎の君は、高星のとのはらにてやあらん。五郎君にや六郎君にや、ひとゝころ、水におちておほれ身まかり給ふとなん、いひつたふなど語り、又此堂のかたはらに市籠木とて、としふる槻を古木明神と祭れるものかたりをし、此藤崎に、金光山攝取院源空寺に、法然聖人みてつから作らせ給ふ、おみたほとけの像一軀あり。こは、山城の國伏見の里なる大樹院の僧侶蓮池房藤崎に安居し、波岡に行乞し中野村にいたりて、ゆくりなうこのみほとけを

得たり。后に、山號院號寺號等を増上寺より寄附ありきとか。なにくれとかたりて毗沙門天の御前に休らひ、川越に別て、水鷄村に行人とつれかたらひ、くら〳〵になりて、

たと〳〵しそこと鷄の里わかすたゝくはかりに日は暮にけり。

水木村になりて擧長館に至れは、あな久し、去年のこのころ別しなとありて、あるし

宿しつるほとも久しき床夏につもれるちりをけふやはらはむ。　茂肅

となん聞へし歌の返し。

めつらしな露もちりなき常夏の宿に凉しくこよひねなまし。

なつかしきむかしを軒に今そふくはなたち花の匂ふ夕くれ。　司家子

とありし返し。

なれしその香をなつかしみとひそよるはなたち花のかせをしるへに。

廿八日。人々とゝもに題さくりて、　早苗。

凉しさよあしのまろやの秋風を見せて門田にそよくわかなへ。

螢を、

水木村にて

館の腰村

風ふけはこほるゝ露の草の葉を散りて螢の影そみたるゝ

厭戀。

いとはるゝ身に見し人の面影のなさしもおもひはなれぬそうき。

述懷。

おなし身のおなしこゝろをたねとしてまかせぬはうきやまとことの葉。

廿九日。夏草滋といふことを、

秣かる人やなからん夏野にしけりあひたるさゆりなてしこ。

初五月雨。

五月雨の軒のいと水けふよりやかけて日をふるはしめなるらん。

暮林風。

ゆふかせにつはさふかれてむらからすみねのはやしを越へわひてなく。

三十日。館の腰村に行きて福左內といふ邑に入て、

ふしたちてくろ田に殘るさなへくさなへて植ぬやいとなかるらん。

その邑にかつ至りて、くすし山崎の宿に至る。

六月朔。いはきねの雪とり來て陶にもり、氷もちもとりませて歯固のいはひせり。

水無月のあつさもそてにしら雪のけたぬひむろの山ちかくして。

ひるつかたより、去年やとりし夕顔堰村なる今氏のもとに至る。ほとなう風のこゝちしてふしぬれは、去年もかく例のやうにとて、あるし藥さゝのへくれられたるに、やかて、わらはやみとそなりぬ。公につかへまつるくすしのとひ來て、やまうをこたらは、野山ふかうわけ入て藥からましなと、いさなふふみも日ことにきけれと、すへなし。

邇辭貴酒波末

津軽
共五冊
津軽

このひとまきは、陸奧の津刈路に在りて見しところ〳〵をかいしるしたるか、うち散てありしを、それかまゝにかく集めたれは、はしめ、をはりもさたかならじ。
むつきのはしめ藤埼をたちて弘前にいたり、あるは、樂かるてふこさにたつさはりてやま〳〵をわけ、うら〳〵をめくりてのち、出羽の國飽田路にゆかまく鰺か澤のみなとへに來るまて、二とせあまりの事をかいませて册たるものか。のち見ん人にはちらふのみ。

藤崎にて元日

道奥の國みなぶ、つかろのともかきのもとに、夕つゝのかゆきかくゆき、ひとひふつか、みかよかと、しら雪の日をふりつみて、みふゆつき、春をとなりとけふにくれて、みたまの飯手酬るなど家ごとのいとなう、にきはゝしかりき。

父母のみたまもこよひ在かと尙おもひやるふるさとの空。

曰なんふせて、やはら人のさたまれるころ、ひとりおき居つゝ、ぬさとりむけて、

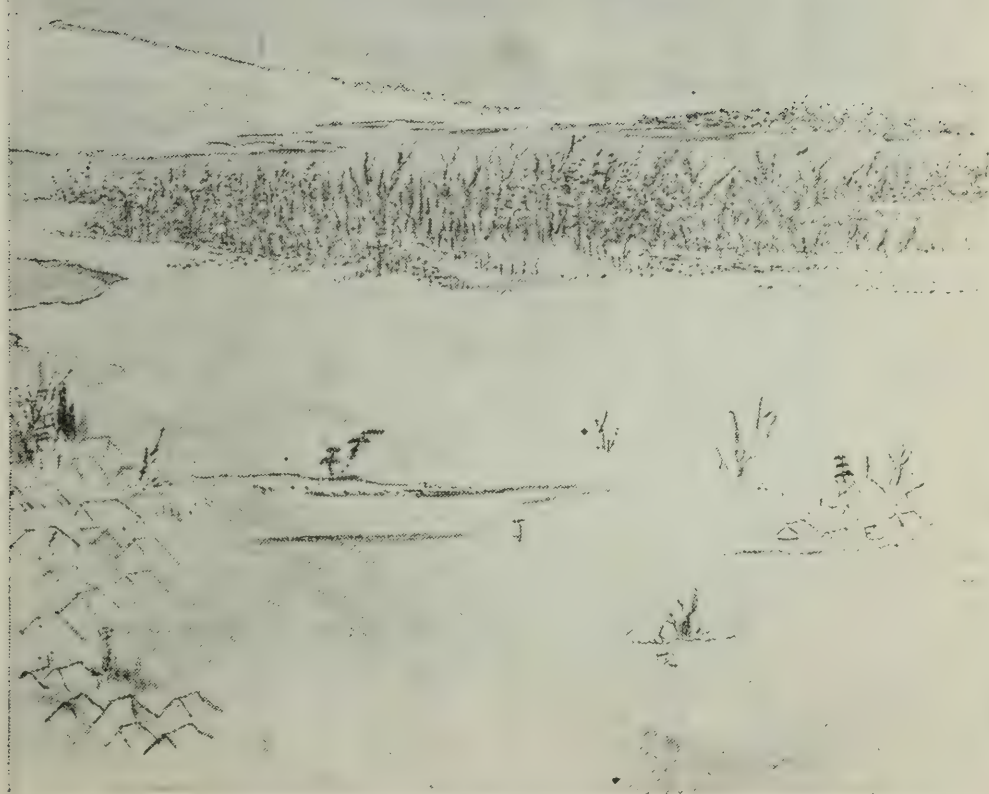
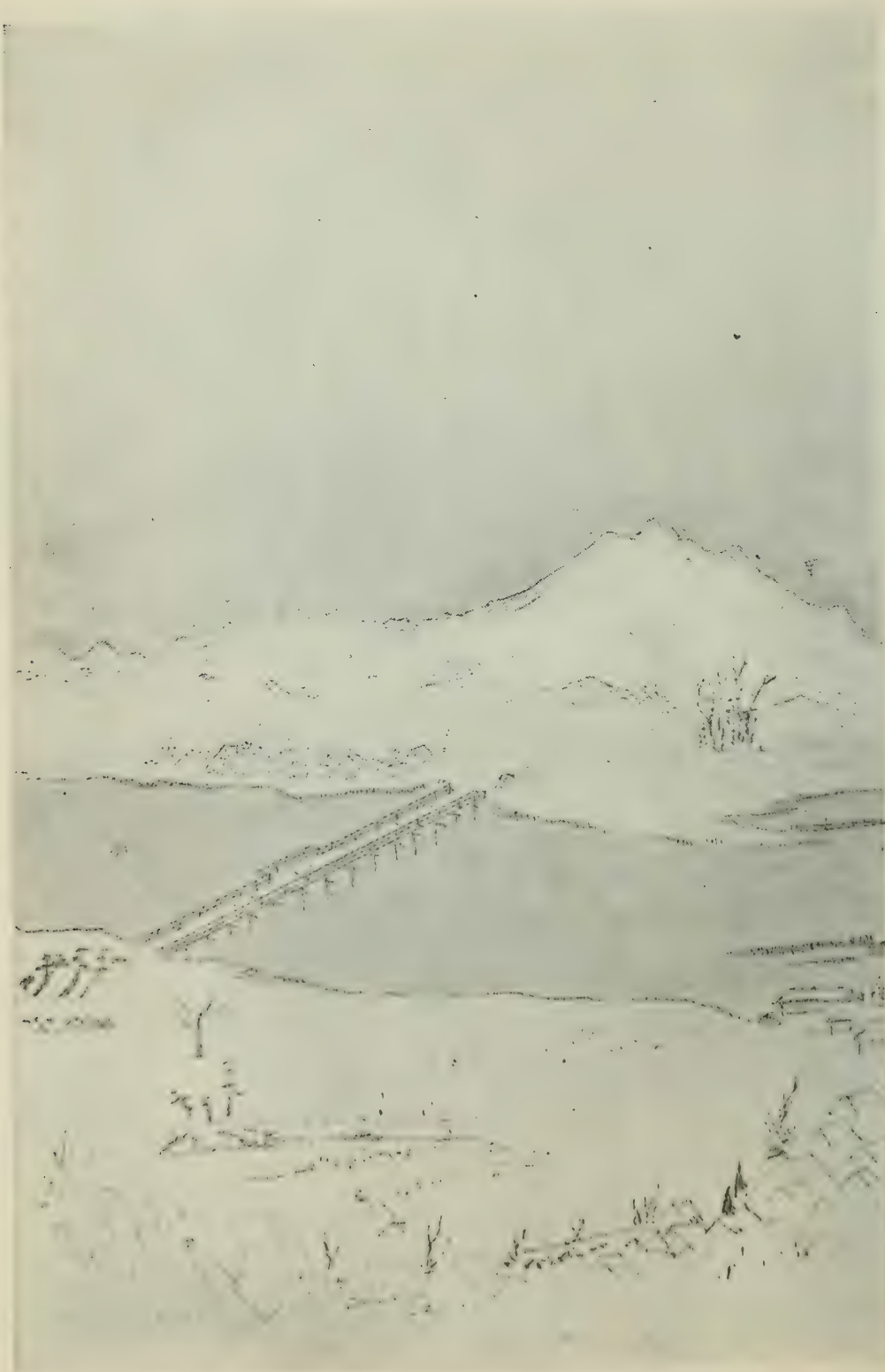
みちのおくにこよひは十府の薦枕高御産栖日の神齋也。

かけろの初聲に、ことしは去年と、いなのめの明渡る。阿倍の高星の門ひろう榮へたりき、ついひちのとなる川越なにかしの屋戸に在りて、篚珠のとしのはしめにおへり。あからひく日のうら〳〵と、ひんかしにつららく雪のやま〳〵を遠う近うてれゝば、

太雪ふる去年のすかたをそのまゝに春と岩樹のやまそかすめる。

二弘前に至る

二日。辟呂左岐に行とて、三千寺(さんぜじ)の林の雪の中に、はる〳〵と偖埜のことにつゝきたるは松

藤崎の里より三千寺の林

にこそあらね、うち見やりては、田兒のうらわといはまほしう。

　たくへても三穂のうらといはき山かすめは不二の面影にして。

津刈野を行とて、「つかろの野邊も埋れてけり、と、くちつうたにしたるを馬曳のきいとがめて、もと末ともにとなへてなと、うへもこゝろありけに聞へしかは、「しら雪のふる枝の萩やいつ萌へんとつきしかば、聞すへしらねと、こは面白かりなんと笑ふ。かくて弘前に至れば、たかきいやしき、狹布にあらぬ、さよみのへりの簾を、なそへなうかけさけたれば、わらやもみやのおもひして、しりくへ繩ひきはへ、門〳〵をいはふかさり松に、雪をとをゝのけしきことなり。藥のみそうるめる四の家の門には、よねたはらをふたつ居て、それに松立るもおかし。こと屋戸にもまれ〳〵に見ゆ。

三日。毛内弓弦のもとより、こゝになかるゝ土淵川の名たゝるあか玉にそへて、「埋れしちりのなかなるあらたまも君みかきなは光そはなん、といふ歌かい贈られたる。返し。

　又たくひ世にあら玉も光副みかきそへたる人の言の葉。

此ぬしもやかて來けり。

七日。鐵鷓鴣、白馬なとひき連りて市人の來けるに、雲井なす、白馬のせちゑのこゝちそせられたる。

十六日の夜、春秋亭にいたりて　朝霞といふ事を、

旦汗にこくや眞楫の音はしてへたつ霞の奥のうらふね。

春木といふことを、

霜むすふ柳のいともはる風にやかてふきとけ花のしたひも。

春戀を、

すみれつみ筒自早蕨をりふしは見れとも人めつゝむわりなさ。

橋苔。

山ふかみ八重むす苺を誰ふみて入りしあと見る谷のかけはし。

日ことに、むつきのためしはさし〳〵にしるして、ことふりにたれは、こたひは精しからじ。

毛内茂粛の六十賀。

殖て見る老に友なゝ齢とて間籬の竹の千代もへたてす。

二月五日。去年より來ける空也堂の空阿みたふの、あけなは此弘前を出たちけると聞へしかは、「身を捨てこそ、と、すして別とはなりぬ。

面白うふくへうかへん春の水。

とみなる事ありきとて、和句は、えせていにき。

五所河原

十四日。五所河原にいたりて、閑夢亭とかやにひと夜をうちものかたらひて、

（自畫像の題歌とす）

ひちを曲て樂しき宿そ閑なる夢のまくらはよるひるとなく。

つとめておなし屋戸に在りて、 雨中梅といふことを、

春雨のふる枝の梅のしたしつく香をかくはしみ草やもゆらん。

寄鳥戀を、

吾れもしかあさるきゝすと身をなさは人を偲の岡になかまし。

藥かりに

ある君の仰ことうけたいまつりて、さつきのころほひなん、みちのく山に藥獵せん。しかはあれと、その道にたつさはる人なう、みないまた、ふみはらはのこゝちに、ふみまよはなん。われに、さいたちしてよなと、こゝらの人とらのせちに聞へ、小山内玄貞、山埼永貞のひたふるにいへれば、いなみかたく、さりけれと、わは、その山口たにやはきはめし、おほつかなみのよるへしらねと、とし月重ねし旅衣の袖せはき心も、ひろき野山の草を枕にむすひ、かた

弘前に

しきなれて、これはかれはの名こそつはらにはあらね、人しらぬ太山、谷かけの木くさのすかたも、木のめうちけふり、雪間にもゆるはつかより野邊にしけり、梢にくらく青葉さしおほひ、もゝくさの露のなさけふかくひもときそめ、なにくれともみづる枝、このれ、枯生の霜のうちなひき、ちりつむ木々の木の葉の、雪のしたにふりかくろへる色までも、朝なゆふべに、わけまよひなれたるをこゝろのしをりとたのみて、かのふたりのぬしのいへらんにまかせて、出なん日はいつ〳〵とうけひそしたるに、ゆくりなうわらはやみして、夕顔堰(せき)といふむらやかたの、くすし金恒德のもとにくすりなめて日數經て、さつきの空むなしうくれてこゝちをこたれば、多氏乃巨始のくすし山埼顯貞のやとにきのふけふはありて、人々に、ひとひ、ふつかはをくれたれと、於保和邇のいてゆのやかにめくりあはんと、かねてちきりて、水無月十七日。つとめて館腰(たてのこし)を馬にて出つ。柏木村太王樂滿受のあたりの路、おしかこふ卯木の眞盛なれは、

　ふりうつむ雪のかきねをみちのへにわきて涼しき里のうの花。

中埜目に到る道のかたはらに杜あり、鷄栖の額に俵升山とかいて、飛龍權現のほくらの前なるゐせきに、石の杜をあまた橋にかけ渡せり。これなん、左井の磯山の神籬のほとりより出るにおなし。龜田、水沼、藤崎を經てみちとく過て、午のつゝみうつころ避呂瑳吉に來けり。

山崎道冲家藏
二尺

十八日。玄貞、永貞いまた出たゝで、明日なん友なひ侍らん、しはしは、ふるさとの餘波おもふこゝろやりに、富田の眞淸水むすひて、けふのあつさわすれん。いさたまへなと、かたらひつれて、水車江をめてにかつ至る。この富田のやとにすめる翁山碕道沖とて、もんしやうのはかせあり。小山内のゆかりなれば、とふらひてけり。われきく、此宿に遠つおやより持つたふる、みつちのかしらとて、しらほねなんありつるよし人のいへは、見まほしく、人にも見せまくこの事をいへば、あるし、いたくひめたりけれどとて櫟の上にをさめたるを、人あまたのほらせ綱をつけて、おもげにさげおろし、その筥のふたおし明れば、形たくふものなく、人々見あきれ、身の毛いよたつここちせりなと語り、此あるしのもとをやはら立て、雲堆に米搗く舍のほとりになりて寒泉むすひなと、やゝ時うつりき。

車井にうすつくよねの音もとみたきちなかるゝ水の涼しき。

と、うちたはれて弘前に皈りつ。

とみなることを、ふみにいひもて來れはとて馬とくはせて、夕附行ころ多田能居始にくれてつきたり。（天註——館ノ腰、此名南部大畑の浦の山、或出羽秋田郡にも倘ありき。）

十九日。あさひらき行空に出たち、榊村よりこみちに分入て若松、常盤なといふ処を行とて（天註——嫁女（よめ）の輿、ときは村に通れは、村の男女集りその女を輿よりおろし見て、よきよめよ、としはいくつ、名はなにとなととひてのち、村長のもとより、ときは木の枝折て、行末栄へよとてくれたりし。されけれは村を常盤とはいふとなん。）

いつの世に殖てわか松いやたかくときはかきはの色や見すらん。

東光寺村、境松、黒石の里を経て、追子樹（おつこのき）、尾上（をのへ）、小和杜、柏木町、大光寺村、吹上、薬師堂村、高畑、乳井、八幡館、鯖石なと去年見たりしところ〳〵なれは、ことみなもらしたり。宿河原の村に来つゝ地着の屋戸寺田於貞（マヽ）のもとにとふらへは、こはめつらしとて語らひ、こよひはこゝにとまとゐして、深浦の湊にての事なと語るに、病起るにふしたり。

（「都介路迺遠地」には、寺田貞於）

二十日。あるしとともに大鰐にいなんとて、やはら出たつ。田の辺の山際に照田稲荷とて、木ふかき杜にみやところあり。こは、寺田の上祖の斎ひまつりてけるよしをかたれり。寺（て）田（た）、照田（てらた）、相かなふにや。

夏の日のいかに照る田のてらしてもかれぬめくみにしけるとみくさ。

湯の河原

造り坂をまくたりにくたる。此坂なかより物見の岡の石の塔見にとて、去年のさつきのころわけいにしすちともを、こゝろあてに見わたしたる風情、ことになつかしう面白きところなり。かくて、ひるつかた湯の河原のやかたにつきて、休らふむしろに、あるふみなんおしひ

鈍水利根水

大鰐にて

らけは、弘前のくすし伊東春益なる人の贈ける　風流才子共横行、朝索佳靈暮水晶、探藥無愁七十壽、深崖必有上池清、とあるくしゐ見つゝ、ものゝはしにかいつく。

なゝそぢの毒にしぬとも生藥なめていくたひ延命たまのを。

此日雨やあらんとてくすりも採らで、うちもの語りて氏樂院はいにき。

廿一日。北山の麓をわくるに、鈍水、利根水とて、いと、ちいさやかの泉ふたつならひたり。鈍水をむすふ人は、ものわすれしてこゝろをさなうなりゆき、利根水を飲みたらんかきりは心すゝしう、さへもいみしうなり行ためしをいひ傳ふ。利根水は水の心もきよけに見へ、鈍水は、そこのこひちうきたちて濁れり。むかし、都のさすらへの君此岡に栖給ふとやらんか、此水を硯水にめしたまひ、はた、國のかみも近き世浴したまひしころも、よき水とてめしたまひしとて、能人のしれり。しかはあれと今は水あせて、かく侍ると語る。此あたりならん鞍男のうしすみ給ふたることともをおもへは、さすらへのみやこ人といふなる物語は、津輕津の司にやあらんかと、養老のいにしへまて偲ひ出られて、鞍館に出て飯る。

廿二日。近きあたりにかりくらしたり。この億寶王耶なるいてゆのほとりは、大雪ふるとしの寒さゐはけしからで、速田(はやた)、あるはいふお早田(にった)とて、むろのはやはせよりも、いとはや、いね佃る小田のあり。瓜は、鳥羽のあたりよりもさかりになる、うりふあり。茄子は珠流河の

阿遮羅山

三保よりもはやく、弘前の市に土毛とて持出てそうるめる。けにやあらん、夜ふかう枕かみの壁に、きりきりすの、秋ふかき聲のやうにひたふるに聞へたり。

夏衣かたしく床のきりきりす鳴音涼しき夜半のたまくら。

玄貞、永貞も、めつらしとやめさめぬ。

廿三日。阿遮羅山にのほらんとて、波加万古司のこなたの岨より菜豆(さいまめ)か澤、あるはいふ奈万久左の澤邊よりして牡丹平(たひ)、杌木(はのき)邑なとを行に、眞山本山の神をうつしまつる杜の見ゆ。瀧の澤の高きにのほりて、遠近のなかめいとよし。小徑をよこきれて行は名は何とかいひし、このあたりにむかしは寺のこゝらあり、家居こゝらありつるよしを、あないの話て過ぬ。片岨に刀禰里古、阿袁都豆良、仁禮なと生たる中に、都念子、いはゆる胡鬼板、こぎのこを、加世志保里、その實すら、つくはねとはいはで羽子豆(はごまめ)といらへたるもおかし。此木の枝もて帚に束(つく)りぬ、さりければ、はき柴の名もおへり。（天註――加世志保里にことなり。ことくにゝて山わらともいへり、もとも帚に作るところあり。此事聞あやまれり。）尙のほりて、いたゝきはきはめてんとやはら到れば、子懸山の見へたるに、筑波寺にをこなひ法相のむねをひらける、徳一大とこのいにしへをしのひて葉山しけ山とすし、たゝすみて母地能木、加良宇自、奈加美禰、必呂舍伎、玖路委辭なと、のこるかたちなう雲かあらぬかと、あをなはら遠う見やられたり。

通辭貴洒波末

なかめやるたくひも浪の末はれて涼しく見ゆる遠の海つら。

山を下りては、けふなん倉館の溫湯(ゆ)のやかたへとて、くら〳〵になりてつく。青草にませて、をけらの根なんほりたきて、かやりひたつるやあり。匂ひかくはしく、

さらぬたに旅はうけきをうけらたく蚊やりのけふりむせふいふせさ。

をけらは、こゝのくにつものとか。

廿五日。この日、つちのつかさになりそむるとはいへと朝風涼しう、かた山里めけるかたに行とて、大森山のこなた龍(たつ)の口のしたつかたに、苦木といふ村の見へたるをしはし離れて觀音菩薩の杜あり。元ト村、長峯、九十九森、唐午(からうじ)(マヽ)、梖木といふ村はしより、いさゝか斗あさら山の梺へいきて、安布良以志といふものをひろふ。世にいふ星屎、霹靂石にたくふものか。

廿八日。このころの雨はれにたちいづ。長峯村より、こみちをわけて杉浦(亦の名を於保比良)を經て、牧やあらんか駒木といふ村の名おへるに、野かひのうまの、たか草のなかにあさる。

はなちかひあるはひきすてますらをかつなく駒木にいはふ聲する。

和連夜万とて、さゝやかの沼水ある處あり。いつの世ならん、大鮫のすめるかうき出て人をそこなふ、此魚の出來(こ)ぬ料とて、桂木の杙(いぎ)といふものを池の心にうちてけり。かくうちては、ひれふりいつるこそのあたはぬためしとなん。このおほいをのゆるき出ては、あるとある

山田、やまはたの、みなほろひうせなん。さりければ、かくはふんじ、すそしはかりたりけるさ、あないの翁の、火うち帒とうだして、うちもはてす話る。大津長峯といふ麓に清水掬ひて休らひ、波奈古久利坂、小國(をぐに)川、琵琶が平(たひ)、あるはいふ比波野のみちを弓手にふみまよひ、ゆき〳〵て折戸、平六の山里のおくか奥なる、井戸澤といふ村に近つきて引返し、湯坂にかゝり切明の出湯の舍りにつきたり。溫濤(ゆ)は、おちくぼなる處より涌出る。湯桁に遠離刀、間以呂玖、爲度左波の童とも谷川をさかのほり來て、あつさや避てん、浴して、夕つかたまてありて皈き。

廿九日。けふはこの山分めくりて、谷水のみなもとちかう比加雞澤といふに入て、白石脂をひろふ。品よからす。

書月の朔。しぬぬめのころ戸おしひらけは、いてゆのけふりいとくらくたちなひく。空は、いまた明はてぬこゝちす。

かさなれるみねの八重きりあけしより涼しくなひく秋のはつかせ。

やかて霧明を出て琵琶野を行とて、

ひはの行袖はきのふにひきかへて秋をしらふる風の涼しさ。

志利起の太多良澤、瀧乃杜、淺木乃杜、三ツ杜、此あたりのなかめこそおかしけれ。倚山路ゆ

き〳〵ては大津長峯を左に見なし、右は子丑に青鬼(あをに)の以香都知山のこなた、阿知美禰のふもとに臼木場といふ邑のありし跡なと、谷川をへたててありき。をりと、へいろ〳〵も仄に冷水(ひやみづ)平(たひ)をたとる。丑のかたに、いと遠うそひへたる山の見ゆ、そこそ十灣權現をうつしまつるといふ。遠きむかしのことにやありけん、去河(さるか)の神（天註――此神離毛馬内にもありき。去河を今は猿賀と文字かい改り、黑石のほとりにその神そおましませる。）此十和田の神とおなし座(おまし)にうつしいはふなといへり。燕巖の有るなんをしふ。刀毗差加をくだれば、輪瘤山の麓とおぼしくて小國邑（天註――乎具邇村は蟹田の浦のほとりにも、おなし名のありけり。）といふ村あり。不可澤を行みちあり、長根とて尾越へする路あり、これに別れ行し人々も長坂の峠にて行あひぬ。かくて芝生に休らへば、くぬち、殘れるくまもなう、遠き海よりはしめ一目に見やられて、横前を過るに親外(おやはづれ)といふ處のありて、幸の神やいはひまつらんかし、その名聞へたり。阿遮羅夜万を左になし、岩城峯をむかひ見て彌助長峯をくだるに、弓手は昆布船、志加良なといへる澤のへのあたりに、としふる杉の、こゝらかんさひて立り。廣船といふ村なんそのしたつかたに見へ、二ッ森のしたなるみちを行に、ほゝしろのひた鳴になきたるをうち見て、萱野(かやの)鳥子(ごりこ)か鳴よとて草苅る男あり。

　ますらをかこゝに秣をかるかやのとりつかねてや家路いぬらん。

至りいたれば尾崎村になりて、此處に宿つく。

本郷村まで

高館舊址

惠心作明王

二日。町井村の觀世音の松山に入れは、麋卿、遠介良はこと草よりもしげう、麓にあふらの泉うちあふれ流て、越の臭水、石腦油のたくひにこそあらめ。平田森村にかゝれば釣盛（はしもり）、齒森、刀杜（かたなもり）といふも見過たり。このほとりは去年見しあたりなれは、かいもらしたり。尾上村より黑石を經て上十川村を通る。此あたりの垣根のうちに吾妻木といふものゝ花咲たり。

あつま木の花のしたみち風過てゆきかふそての匂ふ涼しさ。

本郷村につきたり。

三日。やのしりより塘か澤を左にわけて、燈臺松といふ木のもとをよちて金屎森のこなたに、四方の見やりの面白さは阿遮羅山にことならず。高館のふる柵のあとなる池の心に、山のかけおちたるは、涼しさいふべうもあらず。田野澤といふ村の見へて、安人（あんにん）の澤の奥に村の爪に見へつ。尾ひとつへたてて杉のこのれのみ見へしは、加美登賀波なる長谷澤（ながや）の不動明王の森也。此明王は惠心僧都の作りたまふたる、兒懸山（こかけ）、麻苧山（あさを）におはしますもおなしとなん。むかしは長柄山（ながえ）、ながえ坂ともいひしとなん、南岳院のうはそこか、遠つおやより守り奉るといふ。那面刀差加（なめさか）を經て小峠に至り、頭目岩のもとに柴折しいて休らふ。去年見しところなからおかしう、眞砂あられなす石英を人々ひろふ。かくて山越せんと椛澤、からすざは、薦槌山（こもつち）（天註――巨毛都地山、十三の邊にもその名聞へたり。）、由不禰（ゆぶね）、猿倉、逆箭の澤、代能澤（天註――代能に方言にして手斧の一種也。）な

櫻蚊多し

原子の館址

と見やり、あるはくたり、あるは分めくりて苛澤村（天註――苛は蕁麻のことといふ、もと草の名也。今相澤てふ村とせり。）近う盲婦石、瞽夫石、牛石といふ三の石は、みちのべの、をとろのしたにありけり。木こり、柴人、山路のつとに杖を折ㇼ來て、委多久、咩久良の塚石に手向けるとなん。鵤鵼石をよばふのこゑ〳〵、喚かはして過る。苛澤のやはたの神籬を澤中にをかみて、須多澤、左吡澤をたどりてわけづるみちは、櫻蚊といふものいと多くて、顔のあたりにすたくことのうるさく、此野はらを行かてに、くさもてはらひわびて、

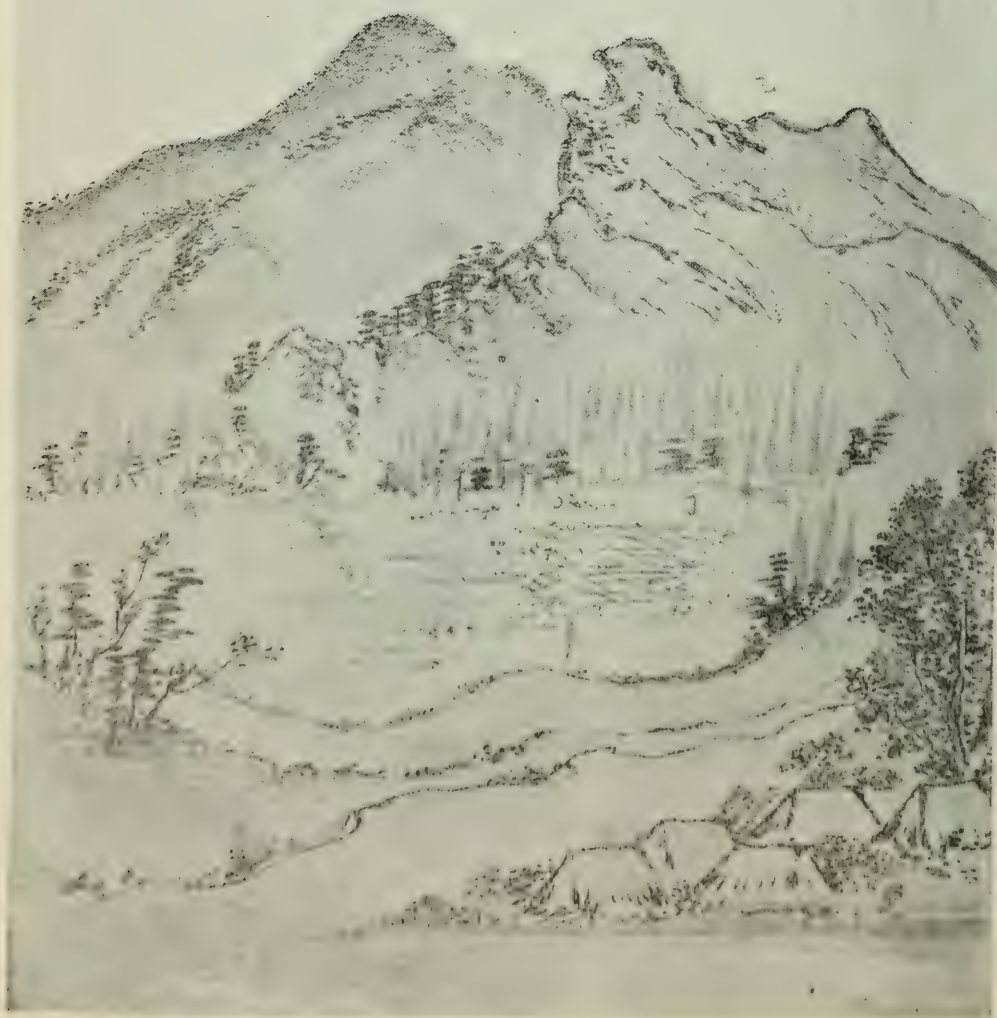
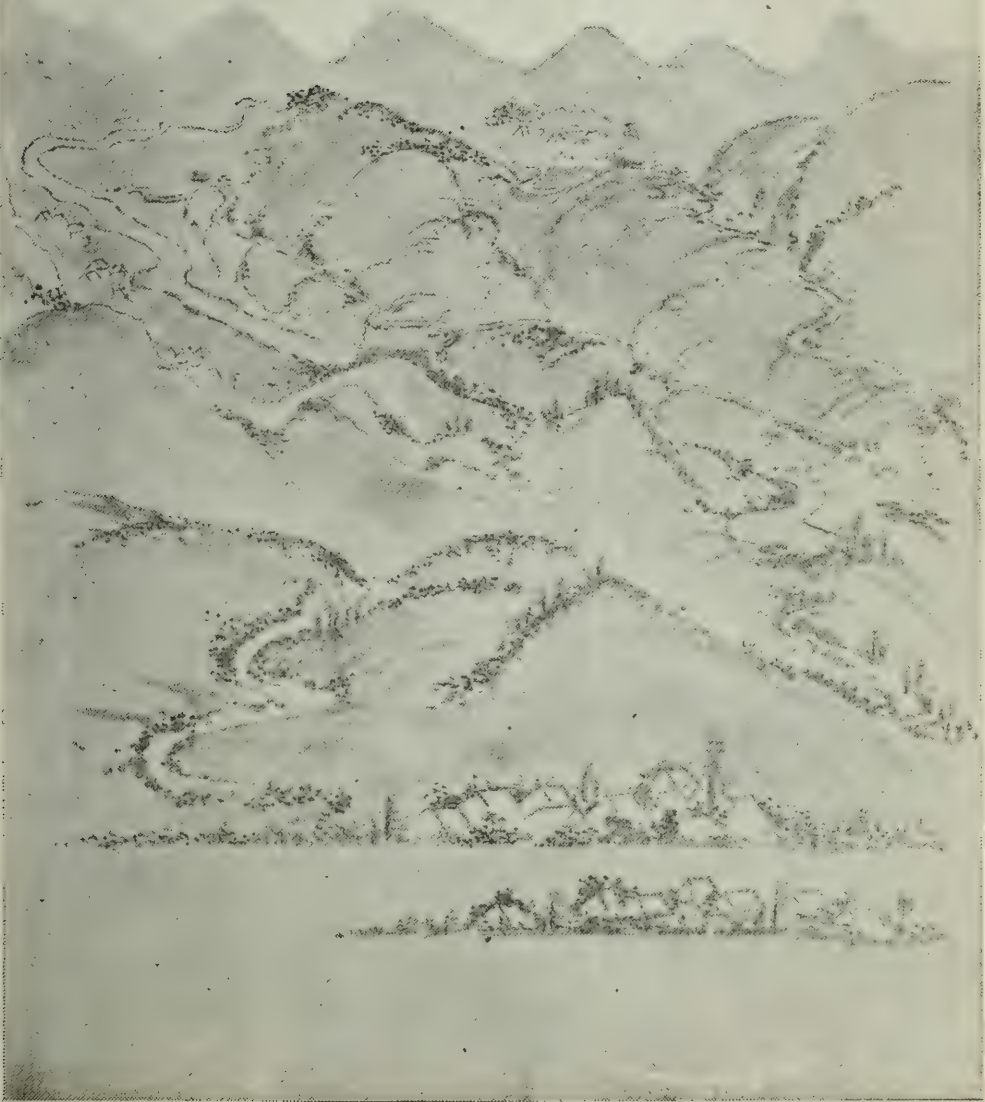
見し春はいとひしものをさくらかのはらへとたへぬ袖の追風。

毛呂古志の山のほとりをへて中野邑に來つゝ、中河なにかしといふくすしのもとにやどる。

四日。瀬平澤の比企能非多秘久差かるとて人々の行にわかれて、水木なにかし、平野なにかしなどとふらひ、行岡をへて夕顔世吉にくれて、金氏のもとにやどる。

五日。やどを出て五倫平を過き、十川わたりて持籠澤、羽野木澤、原子などいふあたりに麥なん刈りをさめけるは、さつきの麥秋にことならす。

草のはらこむきふとむき秋かけて刈りほとかたに見ゆる一村。

此原兒のたてあとなど、みな見しところなから、そのかたのあらましをのす。多米委家のほとりをよきて多和良母刀の見へて、杉羽立の村跡をたどる。

七月廿一日
弘前にて

なかめふる差都企のころほひより、くすりかりしてこの通香呂のくぬちめくりしかと、しはしのやすらひにとて、なかかへりてふことして比路舎貴に歸り來て、日は十日はかりもへて壽月はつかまり一日、明なはふたたひ出なんと毛內の館にとひ、夜ひとよかたらひ更て、あるしの刀自。

露ふかきよもきかやとにまつむしのまつかひありてとふそうれしき。

となん、司家子のかい聞へしかは、

松むしのまつさへよそにさはさりしつらさよあかぬ音をのみそきく。

と返ししたる。そのふみてして　比底子。

尋來てやとすもうれしむくら生に露の玉なす人のことの葉。とそありける返し。

たひころもやつれしそてにおく露を玉とし人のみかくことの葉。

かくてとりは鳴たり。

廿二日。山崎永貞とともに、膂漏差奇をつとめていてたたんといふはりに、たてふみにこめて茂肅のもとより、

秋風のいとゞ身にしむたひころもたちわかれゆく人の餘波に。

と聞へてける返し。

旅ころも袖のあき風身にしみてたちうかりけり里のあさとて。

土淵川をはしよりわたる。このころの雨に、水はさゝにごりしてなかれたる河原つたひに、玉ひろひありく人にやあらん、もとめ〳〵うかかうあり。

すめる世の光たつねてにごるともいつちふちなる玉やひろはん。

藤崎をへて、こみちに入て野はらを行は、合子草のいと多く足にまとひみちをふたきて、そのかつらの實さゝやかに鳴りたり。水沼といふやかたの田井に、剪刀草の花いと多く咲たるあぜつたひに、あなあつと見たゝすみて、

秋風の吹ぬにした葉うちなひきゆく水ぬまの面高の花。

多𣇃乃巨斯に來りぬ。永貞のふる鄕なれはいとめやすく、あるし顯貞とかたらひやゝときへて、やをら夕顔堰に至りて金玄秀の宿をとひ、むつかたりしてけるほと、里の名におふ夕かほの、かきねもたはに咲いつるまで日のかたふきたり。

咲にけりやとの夕かほせきいれしみつをかゝみとかけうつるまで。

野みち行ほと、鶉あみかたけもて、あるは地錦といふものをまふしとして、めとりの聲に笛

羽埜木澤迄

吹あさむく。

なれもさゝ草の夜とこのつゆなみたいとゞうつらの音をや鳴らん。

羽埜木澤てふ、榛樹、金鈎梨（天註――金鈎梨をこゝの俚人、あまかんぞといふ。あまかうぞにやあらん、その葉、花穀樹に似たり。）のしげりたる里にくれたり。こゝに宿かりて折句うたを作る。

はらへたゝのきはおほひし木々ふかくさはりて月にわきてうからん。

と、かいてふしぬ。

廿三日。あしたの空かいくもりたるは雨ならんとて出つ。松の木村と介泥夜万のあはひの塘を行ほど、遠きみきはの原に千屈菜のさかりなるは、戸澤といふ村のありけるほとりよりいろこき紅のむしろを、ちまたのやうに、ちまちかほともしきたらんかと見やられたるも、あへかにめとゝまりぬ。原子のやかたよりはこなたに、輿呂必がふちとなんいふがありけるとかたらひ、むかし世のしつかならさりしころ、たゝかひにうちまけ、城ちかき水のほとりに鐵甲ぬきかけ、ものゝふあまたなみ居て腹し、身まかりてけるところありと、馬ひきの、けふり吹かてらいにしへを話る。

物部のかけしよろひかふちなみかよせてをまたてあはと消へけむ。

雨のふりくるにぬれて、伐者差可といふをくたるとて、その花もいたく咲たり。

鹿の子山

阪の名の胡枝のしなひをふきこへて雨のいろ見る野への秋かせ。

小田川のやかたに來つく。雨猶ふれり。

廿四日。あまばれに巨多加波の宿をたち、喜良市、野崎とて、みなおなしむらなかをいでて、古館をめてに燕泊といふそかひより、佉乃古夜滿にわけ入るみちのへに、白菀の風になへふしたるしたに、こがね色に咲たるは百脈根の咲殘たるならんと見れば、つるすみれのをくれたるなり。これなん黃花地丁とかいふ草の蔓生にこそあなれ。山下とよみ瀧のおつるあり。

いはかねの雪とくたけてやまの名のかのこまたらにかゝる瀧なみ。

夜邊の雨風に、木々の嘉慶子、みちかつ埋むはかりおちたるをふみしたき行ほと、笠なん吹やる風にいよゝ落れは、あないら山つとにせんとて、をのれ／＼か笠ぬいて拾り入たる。

風にちる李ひろへとゆるふともかさのかり手に手やはふるへき。

ところ／＼の梢いろつき、折傷木の實の紅に、日かけほのかにうつろひたるもおかしう、加万乃差波てふ處よりみねのなから斗にのぼりうがちて、楊梅のごとくこがねの光したるは、世にいふ蜜栗子といふものにや。はた土子、靑金削にたくふものなん掘えて、歸るさは黃楊葉の遠志いと多かるみちをわけ、ぬかりみちにいつれば、鹿の行けんさゝやかの足あとも交りぬ。

つま戀ふるおもひはいまたなれも又なきて鹿の子の親したふらし。

野はらにかかりて行に、雨しはしはをやみたるに、

　露ふかき野邊は尾花か袖かさにゆふ日かさしてはるゝむらさめ。

野分はしたなう、千種の露も名殘なう吹みたれたる野なかをいでて、

　眞葛原萩のにしきのうら見せて露もたまらす野分ふくなり。

雨かつしきり、ぬれ〳〵て金木の里に至るほと、人こそ見へね、ものかたらひて衣うつ屋のありけり。

　たひ衣ほすひまもかなきぬたうつやとしたのみてこよひしきねん。

河倉のやかた近う、人あまた行たり。

　かち人のぬれしたもとやかはくらんむらさめはるゝ野邊のなかみち。

くら〳〵になりて中里といふにつく、相しりたりける巨米夜なにかしのもとに宿る。をさとし一夜泊りつるむつひをいひ、つかれふしたり。

廿五日。風のふきもをやます小雨そほふるに出て、瀧の安鷄といふ處なる鳥居のもとより太谷にくたれは、いとおもしろの瀧あり。とからぬ巖のつらより、麻苧の糸をさとみたしたらんかとおちかゝりたり。春はつつし、櫻の花ことにおかしう、秋も時雨ふれば、みねの木

々、きしの梢のかげうつろひて紅ふかうおちくなさ、あふぎ見つゝ、見しものかたりを、みちひきし人のせり。

おち瀧つたきのしらいとうちしくれ日をへて染んみねのもみち葉。

ことみちよりのぼり、此瀧の水上をきはめんとてくたれば、はた瀧あり。水を渡りゆきくて、牛の久比登といふ處のあり。

すかたなすうしのくひとの瀧きよみつなきてはなとひきかへすへき。

五倫村

みなそこに青石脂をさくりもとめて山をいでて、里近き、仁兵衞瑭といふ池めける水上の澤中より、此ころ金鈑をこゝにほり得しといふ。そのかけのこりたるか、くさむらにあるを見れば鐵屎のことし、生鐵、鋼鐵にやあらんか。まほの介寧久曾ならんかとためらへは、むかし此あたりにて、たたらや吹てんといひてやみぬ。里つゝきに五倫といふところのある。こゝなんいと古きつかはらにして、そこの五倫石をうつして、その跡はごりん林とて村の外にあり。かゝるそとはは、たかしるしたらんこと、さらにしらす、梵字の形すらやぶれ、まろび、あるはたてり。いかなる人の戸とも埋し處にや、此石卒堵婆をかつらもてゆへば、わらはやみのをこたるとて、まとひかけたり。さる石あれば、こゝの村名とはせりけり。くれちかく中里に歸る。

廿六日。空いとよく晴たり。うへも世のなかの人もこゝろや晴てんとて、やどりをいづ。
磐井河をわたりて間木の坂といふあり、むかしの牧なるよしを、人のもはらかたりたり。

おりたちていはゐの水はむすはすもまきのあさ風袖に涼しき。

追別（おつへち）、高根を通るみちのべの草かいわけ、引むすひたるところありけり。

行くれてたかねし夢のくさまくらむすひすてたる露のをすゝき。

下高根をへて、ひるつかた薄市につきて、このおく山に入らんもみち遠く、日はしたなればとて此休に、

廿七日。月をかさしおきいてて、

いくくすりいつこのやまにあり明の月のかつらの香をやたどらん。

中の股といふ山に入てんと、朝露ふかきしのゝめのみちをわけ、あさ川わたりして、鈴子香、杜當蒜など、わけまよふ袖にかくばしう、加都良のした風にほひわたり、山路の梢やゝけしきはみたれはうち戯れて、

はつしくれ杵とやまたん臼市にまた色搗ぬみねのもみち葉。

河くまのつゞらに、その葉のかたち、つゆ、寒莓にたかふかたあらぬ以知刮の、いさ多かるみちを、夕附ころ宇須委地にいでて今泉につきたり。

廿八日。つとめてくもりたる空のいと涼しう、けふなん此山越して蠏田の浦囘のほとりに出んと、温泉の澤といふより大母澤(おほむさわ)を分入ては、さらにみちもなけん。春は太雪の氷たるに行しをこゝろあてに、あないのおのこらさいたち、茂りたる高しのゝなかをかいわけ、こしなたてふものして、かつら、木の枝をうちはらひて谷河にくたりては、いくはくのふちせわたりてかた岨をつたひ、鍋碎(こほし)といふ坂をやゝへて、からくして、ふたゝひしのゝなかみちをわけて峠になりぬ。名を轆轤揚ヶとていとさかし。こゝなん、むかしおも車して、みや木ひきあげしといふゆへなん。くだりはてて、みちなん三里はかりもきつるとか、小股の澤といへる谷川のきしべに庵めける屋形を檜皮ふきたるは、そぎたはぐさて、山賤等か住すてたる宿に火たきたて、とに居ならひてものくへば、ぬれたるはぎまきに蚤のいたくかかりたるうるさゝに、とく過る。みちなんいとやすげなり。大河目といふ坂中に立て、蠏田の浦やかた見やりたるもおかし。臼市山に見たる莓の、紫金牛にましりて生ひたるをかいわけ、殘たる實を採くふあないあり。名をとへば都知波比委知呉といらふ。炭かまのほとりも過れは牛みちありて、いとひろう大平(おほだひ)といふ村にわけいでて、山本といふ村にさし入るほど、村雨の名殘、けしきいさゝかこと也。

　やまもとに立る赤葉のはつしほや夕陽かけろふ里に來にけり。

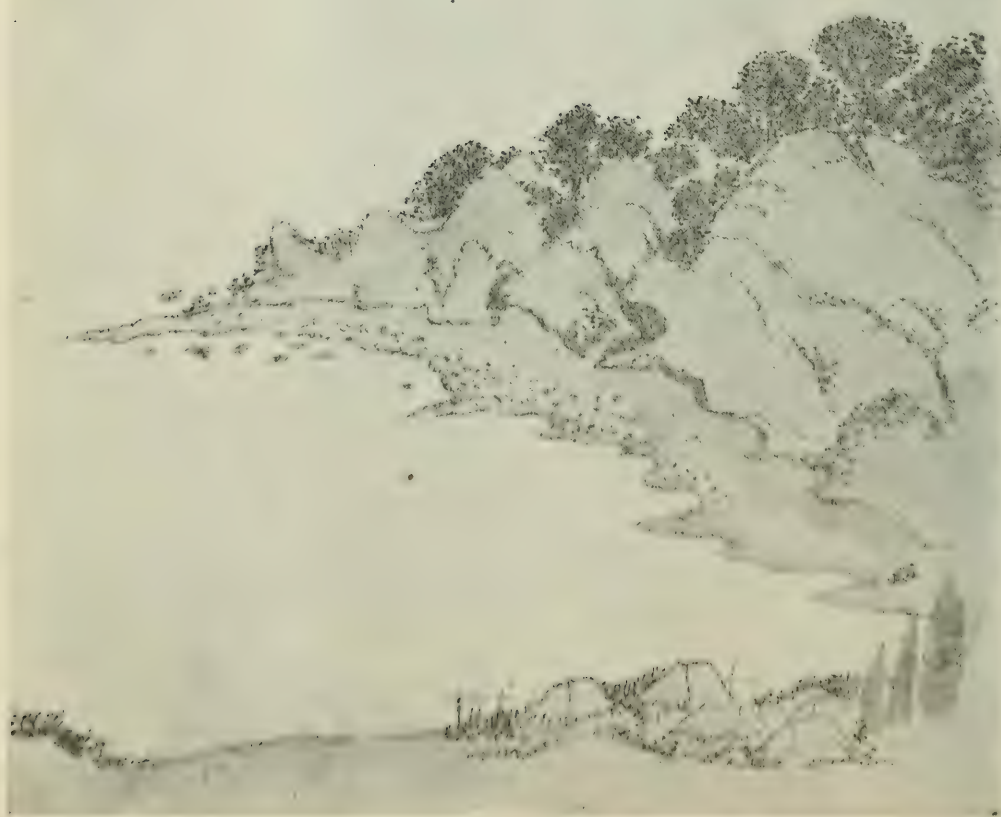
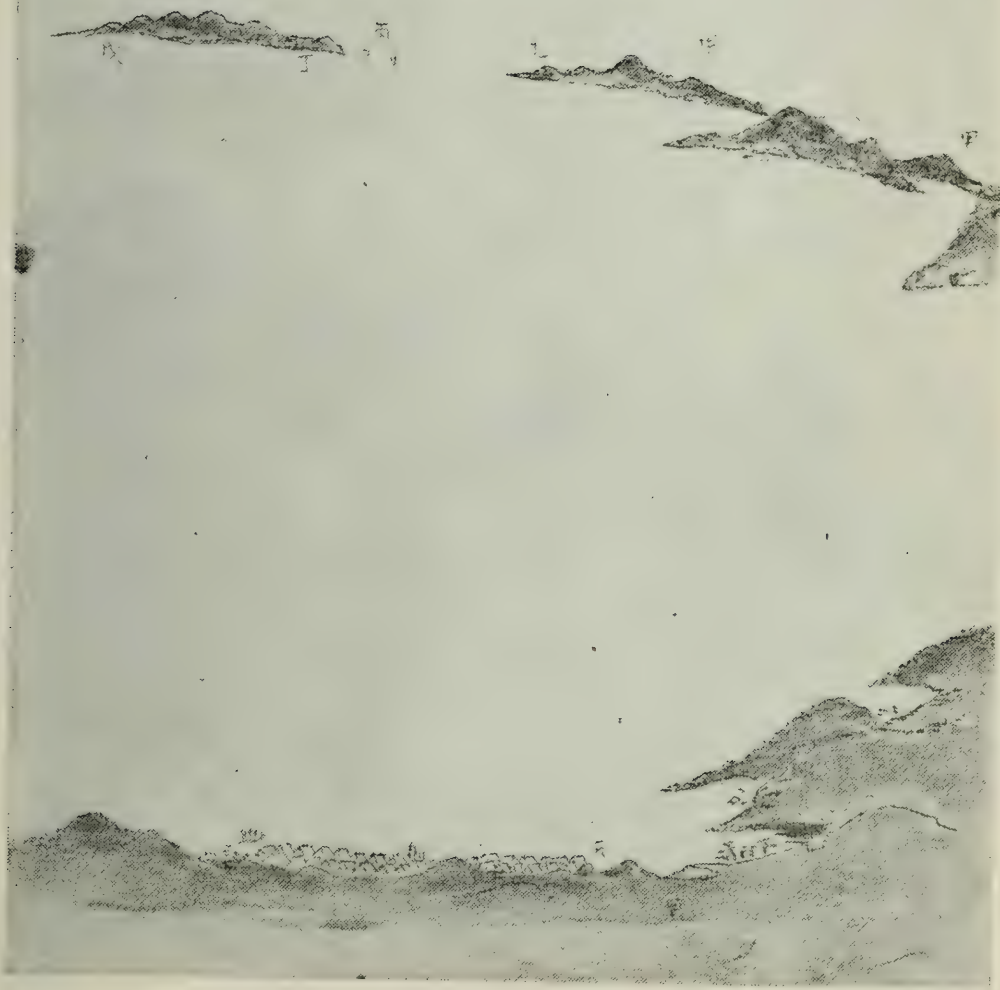
黄澤は真丹土の色也 澤邊もしく
海邊にも在り 丹土のある濱のなかにて
赤くその地さへ魚も色赤し
朱砂ありともあるらし 一とせ櫻に石こ
ひろふ好事の人此所に遊び黄土
二色濱といふとなん云ふなるべしと
誤なり

誰か名をいひはじめけん黄砂濱と
とりくに陽の光かゝるらん

津刈磯山
松前東
吉岡峠
松前西
平舘

中小國村

石漆あり

なつきおし

上小國(かみをぐに)といふ處をへて中小國村に宿かる。この小國てふ名は御國ともいひし、かきしなさいふ人あれと、いかゝやあらん。切明の温泉のほとりにもおなし名のありけり。

　おもはすよ人もかよはぬやまふかみなか〳〵おくに里(御國)のありとは。

さはいへ、加邇多の浦やかたのいと近けんとか。

廿九日。やとりを出て見れは、門田、山田、みな稗のみ佃(つくり)て、

　とみくさはよし殖すともひえをしもおくてや小田にいろつきぬらん。

下小國より長坂を越して蟹田の浦を川のめてに見なして、中師(ちうし)、石濱を過るみちのへに水火炭あり。浦人、委自紆流志(いしうるし)といふとなん、六くさのうちのそのひとつならん。野田の浦につきて、過來つるところ〳〵名をかぞふれは、

　こは秋もはやふかとまり(深泊)あまの屋のひとつふたつや(二屋)すきて(杉邑)いまつ(今津)く。

かくなんありけり。磯より浪のうち戯て、しほのひるまはかり玉川を渡に、鎌さしたる男行たり。

　河の名のたまもやからん海士の子か袖吹わたる野田の秋風。

この濱みちに鬪牛兒の花いと多し。紫ふかう咲たるなかに、牛の子あまたを、あけまきかひき出て、つのつきせよなとうちやるに、角はやゝ松の子のことく生ひ出て、すへなけれはに

平館を過ぐ

や、額おしをしてたゝかふを見つゝ、なつきおしせりけるはとて、はとわらふ。こは此草のなかにて、うしのたゝかひも名におふこゝちせられて、面白しとおもふ。根岸、平館、石碕をへて小川あり、巨呂古路川といふ。

　時もいまかしか鳴らしころ〳〵と音たてて行秋の川なみ。

宇田のはま、九ッの埼なとみな見し處也。

弘前にて

葉月はかり、この都介呂の比路差岐を出たちなんのこゝろほりして、なにくれとこゝろあはたゝしう、しかすかに四とせ五とせ、たかきいやしき、かたらひむつひたる餘波のおしまれて、十四日の夕くれて、とひ來ける人々とおなしむしろになかめて、尙ものおもひうち偲はれて、

　月の友こゝにしあれとわはいつとふる里人やまつよひの空。

かくて更たり。

十五日。けふはこの里なる神わさなれは、こゝらの人とらとよみ來集りつゝ、夜はまたあけはてぬより、てるたへ、あかたへのきぬきて、またらまくの幄屋めけるものをひき出て、貝の

聲つゝみの音、笛の手など遠う近う風に吹いさなはれ聞へ、かつ至り、おもひ〳〵に出たち、
ついひちのうちに、やはらねり入りてき。かゝるにきはゝしさにうかれたち、名におふ空も
よそに見かちにそせりける。ひねもすとよめき暮て、小夜うち過るころ雁のこゑ聞へて、

月こよひなれもこよひをまち來るやはつ鴈かねのすみ渡るそら。

なにくれとたつさはりて、
廿一日。けふなんこゝをたゝはやと、こゝろつようおもひさだめて、あけくらの空よりもの
し、駒の荷鞍によそひしたるに人々のとひ來て、うまのはなむけして　角田氏なる人の、

折ふしは無事音つれよあまつ雁　其友

かゝる句贈られしかば、「木萩か本の圓居わすれし。
別れの盞もやゝとゝむるのをりしも、相むつひたる齋藤矩房。

皈り行ふる鄕よしやへたつとも馴しつかろの友なわすれそ。

となんありける返し。

わすられすこゝろ通はん友垣は遠きつかろの奧へたつとも。

とし月を經てなつさひ、とひ、とはれたる多かる人々のもとへ、かくなん申殘しぬ。

袖のつゆおくのつかろのみちのくをけふわけ捨て皈る身そうき。

ふしなれし屋戸のあるし中井なにかしをはしめ、淺野なにかし笹田なにかし、越しかた行末を話りつゝ駒越といふ渡まて送り來て、別なんほりに、

いはき川つなひく小舟くりかへしおもふなこりを人おもひやれ。

道遠けれは安地賀舎泊のみなとにくら〳〵になりていたり、菊舍といふ、くすりひさく宿に泊もとむ。夜とともに衛うちむれ、舟こき通ふ音なとに、いもやすからず、またゝくともしひをかゝけて折句歌をかいつく。

あとまくらちとり鳴也かちの音さよはすからにわきていねうき。

ときのまに浪風さはきて夜は明たり。

廿二日。けふは人々のとひ來てかたらひ更て、雨ふりきぬるに、遠う衣うつとおほしくて、

さらぬたにほすまも波のあまころも侚ぬれそへん雨にうつ音。

と、なかめてふしぬ。

廿三日。雨猶ふれり。さるけにやあらんかし、濱風をひきたるこゝちして、かしらいたくやみてくれぬ。

廿四日。相しれりける竹越のあるしかはらから、世を經んいとなみのためとて、ふみ月のはしめつかた深浦の港よりこゝに栖家してけれは、けふなんこゝちもよげなるにまかせて、い

佐野正學氏

て、そのやさりまてとて至る。なだ船の、こゝにいで入くなる津守のえたちにてありける佐埜正學、わかたひねの屋戸をとふらひ來りて、たかひて、おはさなるつらさなと書て、そのふみのはしに、

旅ころも來てとふかひもなみの音かゝるもつらし濱風そふく。

といふうたありしを見つゝ返しす。

あふことの浪かけころも袖ぬれてたちこそ渡れおらき磯回に。

人にたくへてつかはしつ。

廿五日。かのぬしとふらひ來て、なにくれとのことうちかたりて筆とりて、　まさとし。

かきりなくうれしかりけりことの葉のなさけもふかき人をまち得て。

とそあり。返し。

おもふこと語りむつはんなさけしる人に會ひ見しけふをはしめに。

廣埼よりふみの來けるを見れは、

力無の蔓を離れし出様珊瑚かな　郁桃

といふ句かいのせたり。「うれしやこれを秋の家土産、と和句せり。蒼杜より來りしふみに、あか親八千雄、出湯浴して在りてことはさるなとかいて、末にくしあり。　斯波文

一劍長提六十州　風流萬里遠冥搜　白雲興盡今歸去
早晩應期君再遊。

はた、柯樂不圖の遠き嶼邊より渡したる青珠を、はたばかりつらぬいて、つとにさて、そのつゝみ紙に、

友人將遠去　持贈數顆珠　是不鮫人涙　言得合浦隅。

かゝるふたくさのむくひを、ふみにまきそへて、さちなるたよりをまつ。

そとかはま浪かけ衣たちかへりふたゝひ來三かやとにあそはん。

めつらしな名におふ浦にひろひ得てみかきそへたるたまのことの葉。

廿六日。池田なる人あないして、化石なといふ、はいかいの連歌なかめける人々をいさなひ、佐野正學なとかたらひて大鷹山の藥師ぶちの杜にいたり、此かへさは、わさと行くらして天童といふ高岡にのほり、ともし火とりて草の上に、かれこひらいてありつるほとに、委加つりふね、こゝらの篝たいて波路もかゝよふひかりは、星のはやし、むれたる螢かと、うなのやみさへさらにたとらで、こなたさまにこき皈りくるに、

漁火のかけをしるへとこきつれてやかてみなとによるの友ふね。

まさとしの歌はわすれてけれは、かいもらしたり。此浦のおや名ある、味か澤のべを左にな

花山院忠長の歌

羽笠の繪

古燕の事共

して、くれふかうみなとに皈る。

廿七日。水渟る以祁多なにかしといふ問鷹に至れば、菊をあまた隠にさして床の上に、「想像コヽハ憂世ノ外カ濱朝夕波ニ濕ル袂ヲ」東源叟」と書て、包紙にかいませて、「花山院少將忠長」と記て、「くらふ山よしややみちにまよふともしるへしあらはのほりてや見む。」こは、此君さすらへおましましころ、おほんつかさを、東源叟とかい給ふたるにやあらんか。ものかヽんと乞へば、硯筥のふたの上に、小河宗宇といふ人、宮奴の鈴もたる圖を、變画のことにうるしにてかいたり。これぞ羽笠とて、いはゆる「猿蓑」に「雪の日は竹の子笠そまさりける。」「冬の日に「いかに見よとつれなく牛をうつあられ。」といふ作者にて、此津輕には、元祿のころ尾張の國より來つヽすめり。のち又かの國にや皈りけん、罪ある人とおなしさまにうたかはれて、からめてひとやに入ぬ。そのつま尼となりて、ひとやの前にいたり、「墨染もいまは眞白になりぬらん一日に千度おつるなみたに。」とよめり。うたかひもはるけん、羽笠、身につゆ事なう、ひとやを出しとなん。ある人のいはく、此湊の新地とてある鹽越屋義兵衞といふか母にて、丁形婦古燕といふ、はいかいの連歌にこヽろふかう、つねにはおのかこヽろの月見てんと、いさま〳〵にひさをむすふのわさして、としは八十とたかくつもり、いさヽかの病して、ことしみな月の中の二日、さんきかい三たひとなへて、ふみて

芭蕉像に讃す

をこひとり、老のほけ〳〵しきか、かくそかいなしてけり。「世にからをぬきおく西の涼みかな。」とて、きのをかいけちたりとなん。こは、脫殼烏龜飛上天といふこゝろにてやあらんかし。その身はいやしきあそひくゞつの家に生れても、すめるこゝろはあめとたかけむ。そのむしろにこゝの化石ありて、「恰坐せん南無蓮の花。」と和句をそしたりける。これや大智禪師の辭にして、「脫殼烏龜倒上天、須彌山頂翻筋斗、恰値老僧坐地爐、自燒糞火飡紫芋。」といふ事にこそあなれ。さりけれは、「あくた火にこれを手酬と芋燒て。」付つ。古燕の句多かる中に、「とにかくに命ありての櫻かな。」「山のてに枕定めんほとときす。」なと聞へしとなん。

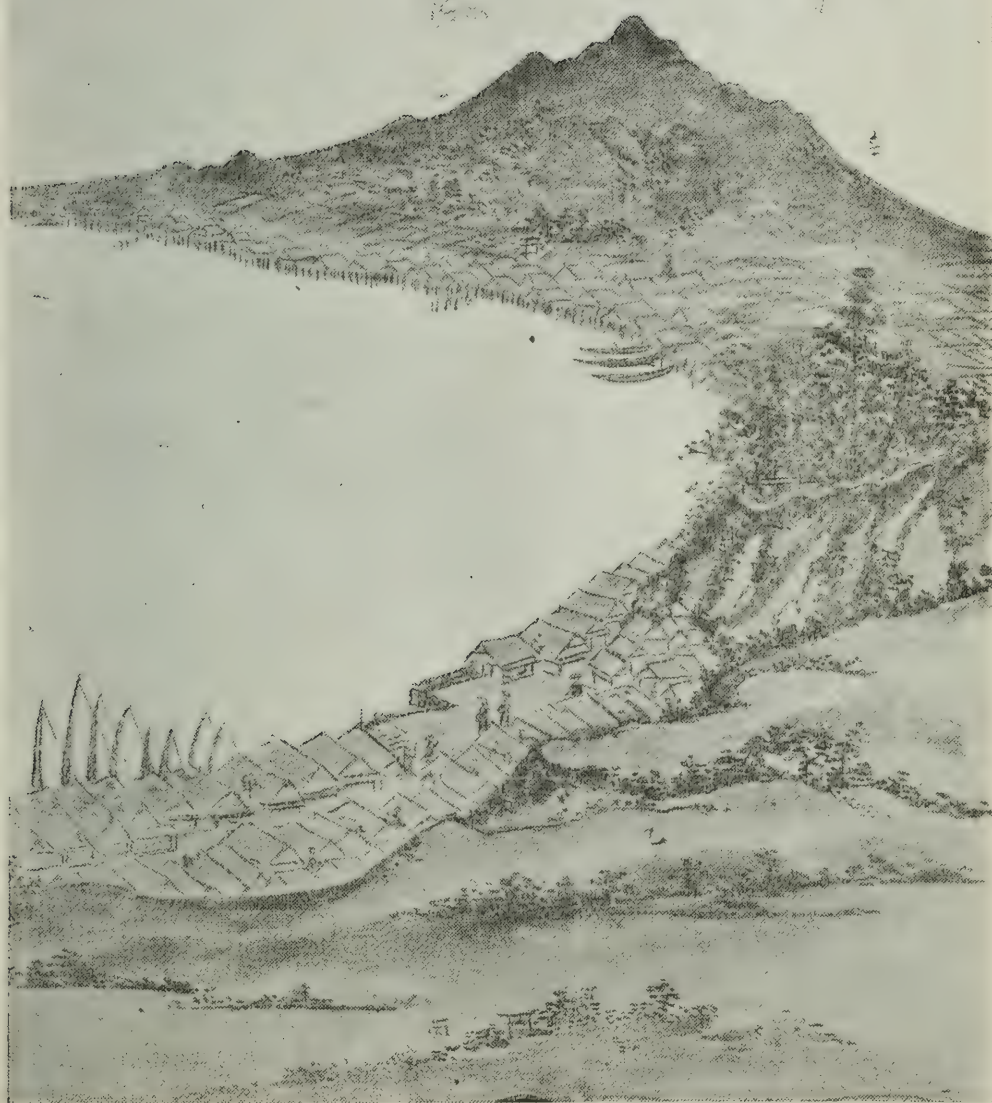
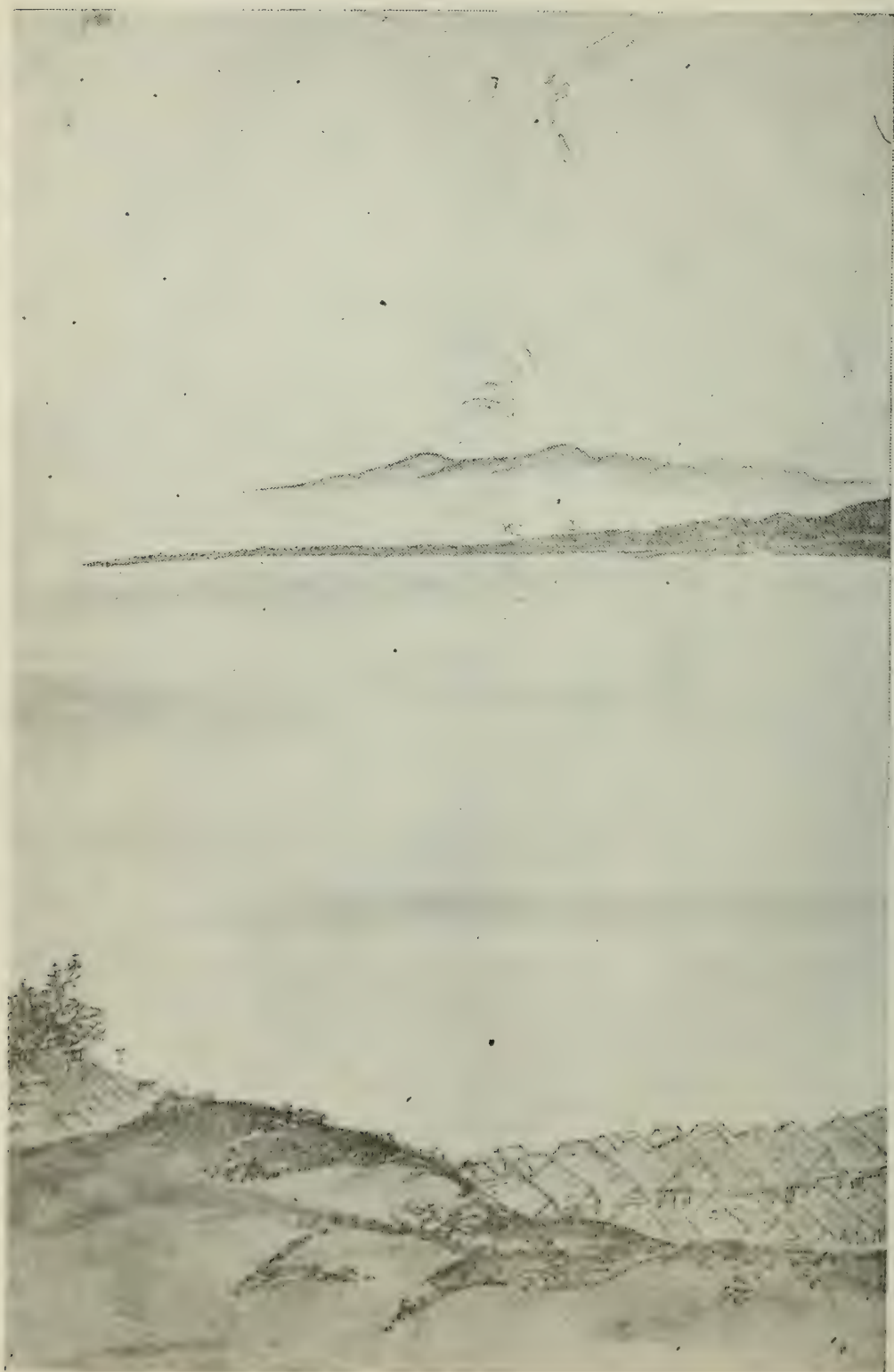
廿八日。山路にゆけは、海は波高うあれにあれ、田面は人あまたありて、うた唄ふか、こなたかなたに聞へたり。

　潜するいとまやうなのあるゝ日は濱田におしね海士の苅るらん。

小家の門に蹲りて鎌研く男あれは、

　みなと田にほなみ來よれは海士の子かはやかりしほと敏鎌とくなり。

二三日、さらに事なけれはもらしつ。

なかつき朔の日。笹部氏のもとより、見風のかける画とて、はせをの翁の笠ぬきてたつさへ、

わらくつをふみて杖ひきけるかたもて、これにものかいてといへれは、いなみかたくて、

鐘禮晴天風邇雨吉久婆世遠可南。

八日。正學、けふなん弘前に皈りけるとて馬曳さゝめて、

別れなは又逢事はしら雲のたなひく山を越へへたてなん。

と、たゝうかみにかいて見せける。返し。

立かへり又言とはむしら雲の八重たつやまは越へて行とも。

ふたゝひ。

旅ころもいとゝ身にしむふるさとに人はかへさの袖のあき風。

すんさとものさく／＼といへは、此歌の返しは道よりしてんとて、馬とくはせていにき。

九日。菊の眞盛を、いたく折て人の贈りけるを見つゝ、

かくはかりたひにいくとせふるさとの間籬の菊もけふ匂ふらん。

十三日。空かきくもりて、夕つかた晴れたる海の面を、いときよう見わたして、

さやけしなたもとに霜を奥の海の見るめに迷ふなか月の月。

深浦より、いつ／＼か來ける、いさはやなとかいてふみあり。近きにいなんの返り事せり。「

追柯呂能通度

南部
共七冊
南部
追柯呂能通度

小湊附近除夜より元日

臼、鍋を伏せる

春木かける

ことしも、いとはや、くれいなん。雪のなかに行かひ〻けき、たまはこのみちのおく、都加呂路にこのとしもありて、避良奈爲（天註――平内は小湊をなへていふ名也。）のほとり、童子といふかた山里なる比企の腰かたけのふもと、こゝもいにしへ錦木の里てふふるあとゝ、はらそ人のいふめるあたりも近う（天註――南部路古河村に錦木のふるあともはらあり。）、冬籠の門のとにたちかふきて、

月も日もさをなくるまに行としをけふの細布をりもとゝめす。

草枕、かりねする宿のいふせき窓の戸さしかため、あるとある、やのかきり、ゐならひたるをまちえて、おほ臼、小うすを、やかのくまにふせ、すひと（天註――すひとはすびつならん。爐火をさしていふなり。）の木尻てふ處には親鍋、子鍋をふせて、やかの人すてにさたまりぬ。庭鳥かけろといへは、としみする男、あらたに菅むしろしきかへ、人みなおきつれば、とに聲あまた聞へて、おほ雪をふみしたき人のむれ來れるを、ひたふるにいぬのとかむるは、こよひのあかほしをいたゝき、春木かくるといひておく山にわけ入り、おのれ／＼か斧しるしを立樹にうちうかちて皈り、このと

嫁、埒、親の里に さなだ

おつこは横坐に

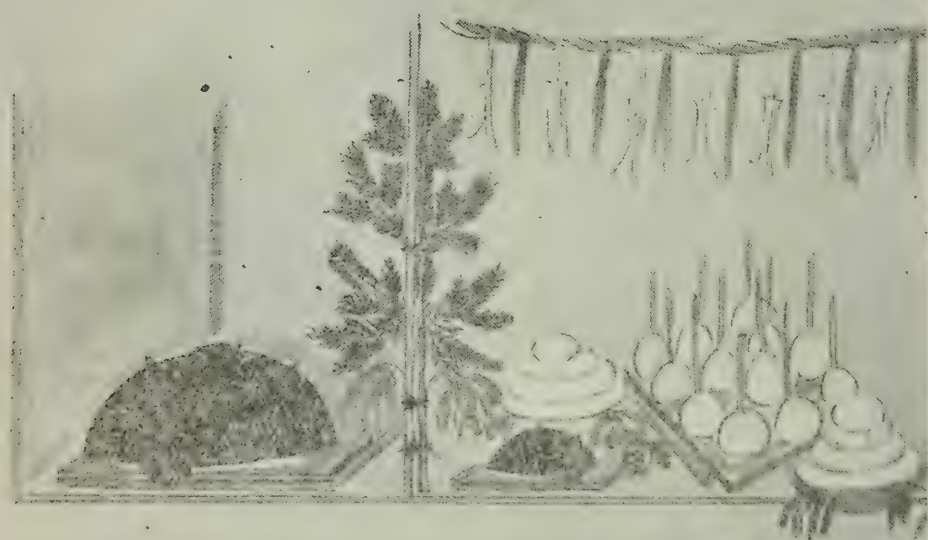
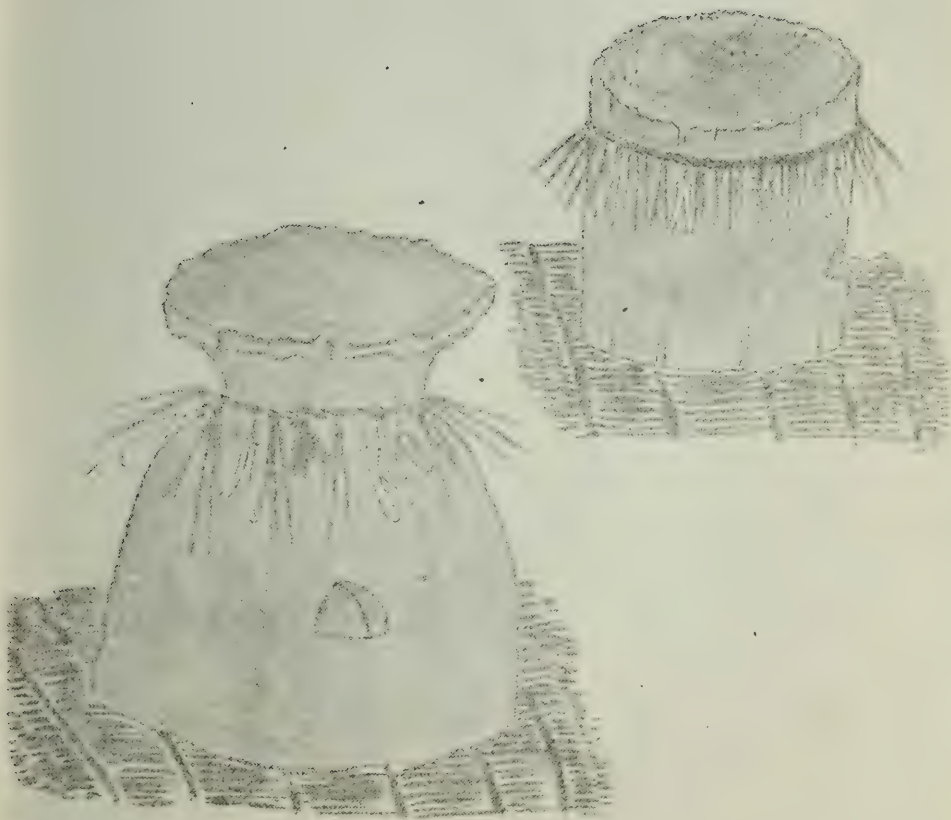
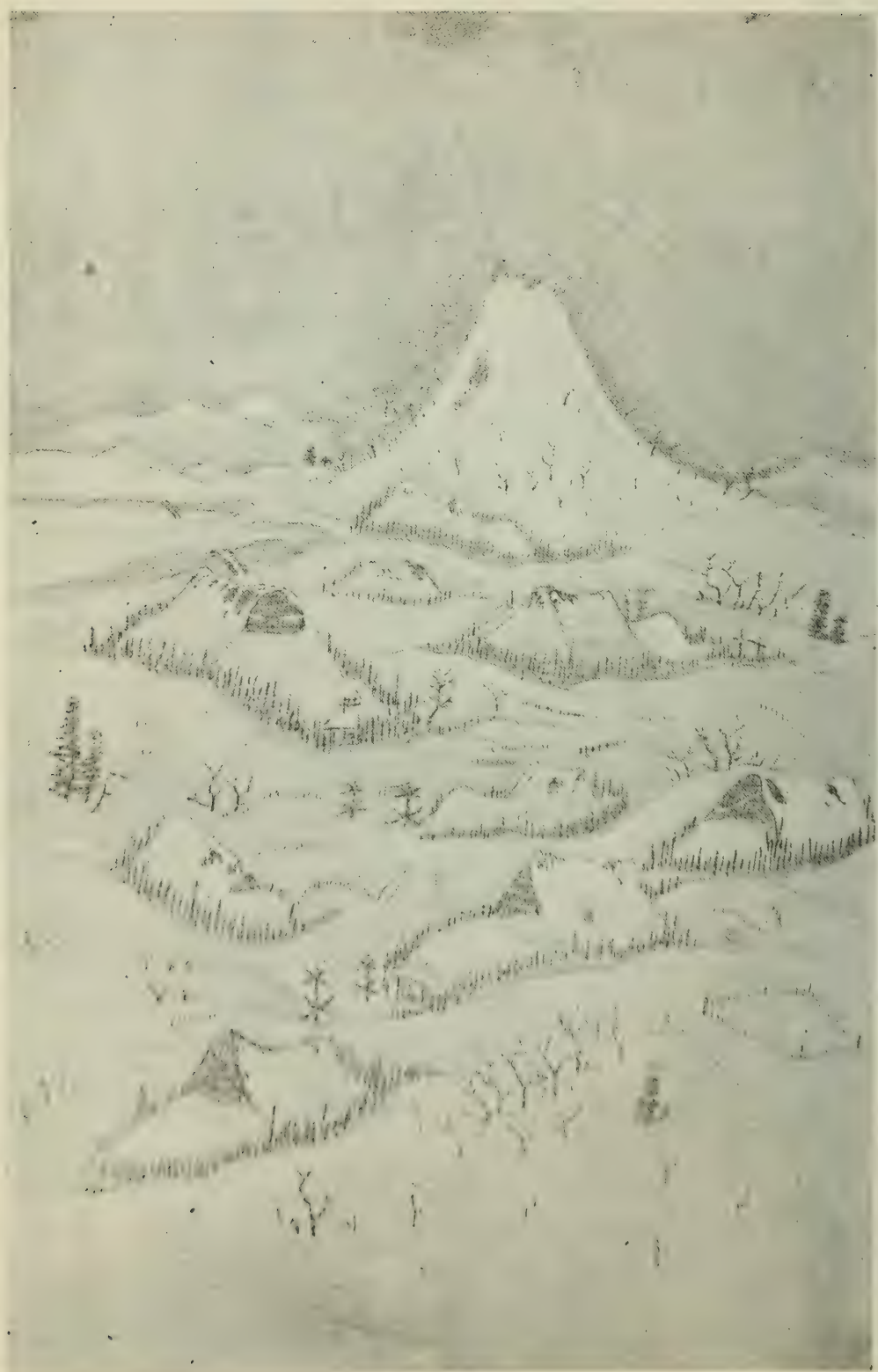
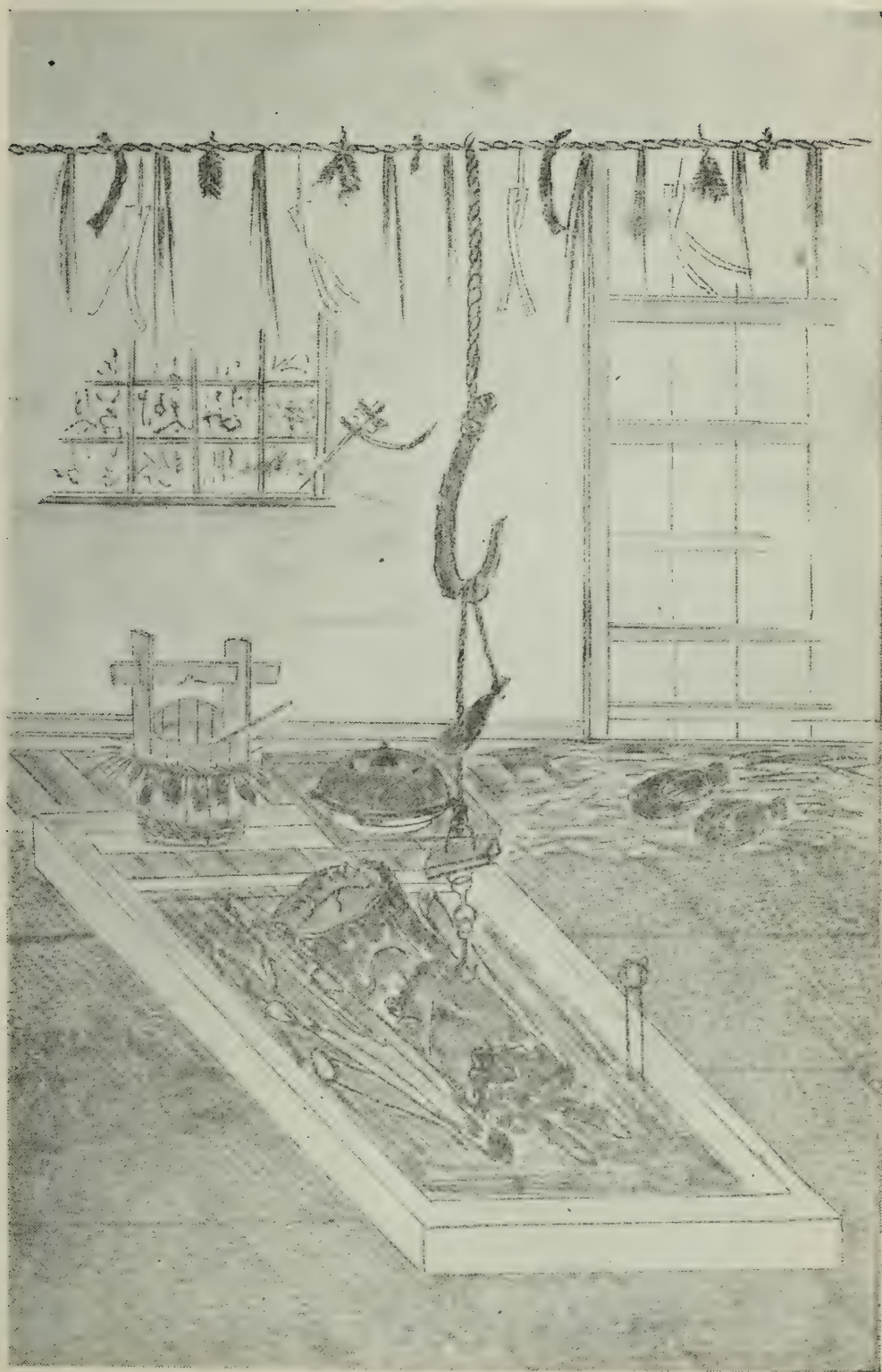
樽吞負孫八

しのいつらにてまれ、その木こりてんの料とか。ひんかししろうあけぬれは、かいうつもれたる雪の門のわか松に、初日のうら〳〵と、やまのはよりてれは、

門にたつ雪の小松はにしき木やふりし手ふりをみちのくの春。

はる木かけわたしたる山賤らか、はつこゑにうたひこちて歸りく。

二日。その三とせ、おや里に行かよふはつよめ、はつむこかね、きよけにさしぬひしたる左南陀（天註――短衣をサナダといひて、肩に〳〵の繡のある、紺のあらたへの衣。）きたるおとこ、女のよそひ、樽せおひの孫八か、かゝみもち、さけのおほにへ、たらのをさなとおもげに、めおのしりにつきしたがふ。このいもとせの、はねをならふ契にむつ語して、おやおもふ子のあしもそらに、深雪ふみわくるゆきかひのしけう。かの、めおと〳〵のとひよる門々のにきはゝしう、すひとに火たかうたいて、とは大雪にいや寒けれさ、屋のうちは春めき渡ることゝちせられて、常居の横坐てふ處には、おつこゆるぎいでて、ゑて、あつは、おぢ、をば、よて（天註――オッコは老翁也。エテとは亭主をいひ、ヲヂは弟をいひ、ヲバは妹をいひ、ヨテとは、なへて末の子をさしてよぶ。）居ならひて、去年よりかみしたる濁り酒をなんくみかはし、なによけんには、多都、加度乃巨、たらのこ、鱠を山なせる斗大皿に盛り、やその翁も酔なきはな聲にうたへは、みな手をはとほとうち〳〵て、「たるしよいのまこはつが」と戯れり。名をばたれともいへ、むこ、よめの、つふねとなりしたかひ、手樽おひ行女の童にてまれ、あげまきにてまれ、孫八とそいふめる。

近村昌能之度

まかなひ立つ

年始客の山歌、草刈歌

めらし

三日。さくものして、むこよめのかへる日とて、ちゝはゝの名残いかならん。浦のはきまき、ゑひ葛のはき巻にまかなひたち（天註――山にても畑にても旅にても行に、わらんづ、はきまきしたるを、まかなふとはいふなり。）、うちけふるかことふゞき、たばしるあられを笠と袖とにしのぎて、みな、すむかたの里にいにき。むかしは七夜とまりて、しうとのやの、寒飯（ひやめし）のゆづけといふものをくはでは、いかでかもどるべきかは。百とせのこなたはかり、かくとは、ふりかはりたりけるとなん。

四五日は、ちかとなりの村のもの、しか、よろこひとなへ来る也。やれたるはかまはをりを、いにしへふりにきなし、すゝづける扇をなかからひらいて、樽の代とてひとつゝみの錢もて来り、ぬかたれていやしければは、れいの、にごれる酒を、ひさげにみたせてすゝむれは、わは、ところ〳〵にて、いやかうへにのみつなといへと、いな船のいなにはあらて、杯いくたひもめくれば、いはんすべ、せんすべしらぬ翁も、かしらうちふりて山歌といふものを、いと高ううちあげて、「石川の橋のたもとにたつめらし、よめにとるべが名をなのれ、それにとふより親にとへ、おやのさためたつまならば、いくしましよてやおちやくぞの。」（天註――メラシとは小女[illegible]は仲人をいふといへり。）と手をうちかへし〳〵、又「下も山で、舵で船うつ桂ふね、海をおろしてこがねつむ、綾や錦の帆をあけて、これのざしきへのりこんだ。これの亭主はくわはな人。」又、艸かりふしといふ一ふしをうたふ。「津輕どのが、新城（しんじょ）長容をけござる、あととさきとに錦千

七草粥なし

かくし門徒

俗謠一ツ

山子の斧印

本、なかにお鷹をすへ持て、殿のおまへに立とめる。」女も聲をそろへて、十五七といふひとふしをうたふなり。「十五七か、澤をのぼりにうごのめかいた、うごのしろ根をくひそめた。」と、手のほうしうちかへし／＼舞ぬ。

七日。なゝくさのかゆ、さらにまねひもなし。こは此あたりに、さとりのはやし、なもあみたふとなふいらかはあれど、隱し門徒とて、ひたふるにそのなかれにのみふかくこゝろさして、たゝのちの世をと、をさなき童まて偲びて、かみさぶる、あかひのもとのみしは、つゆものこらねと、みたまに飯手酬け、みしめひくやともまれ／＼にはあり。

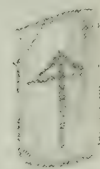
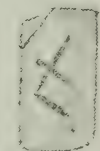
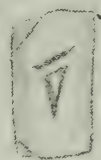
九日。小港にいたれば、なにならんわらつとに入て、誇しごげに、しはかれたる聲をあげ、「けふのしほひに蛤ひろふて、たもとぬれつゝふりわけ髮の、しとげないふりしほらしや。」かくて此男、わかしりについて久末かもとに至り、いたく醉たり。だんな、ゆるしたうばりてよ、まつ、たるだいのべねばとさし出したり。しかすかに、手なとのいとつたなう、よみもとかれねど、人しればこそしりねと、あるしわらふ。われきく、黑石のほとり折戸、平六、井戸澤なとのおく山里は、山子とて杣人、山賤等か栖て、その業にのみ、をさなきよりたつさはりて、文字なとはゆめしらされと、をのれ／＼かしるしといふものあれば、これもて、何村の誰れかれといふことをしれり。ふん月、むつきは、わきてものしけるその樽代てふものに

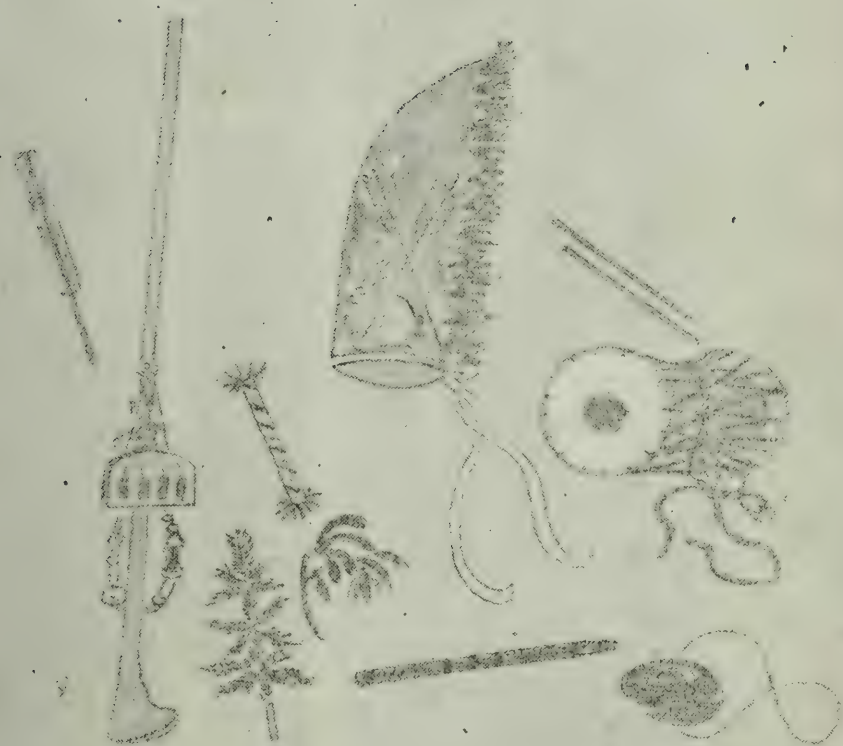
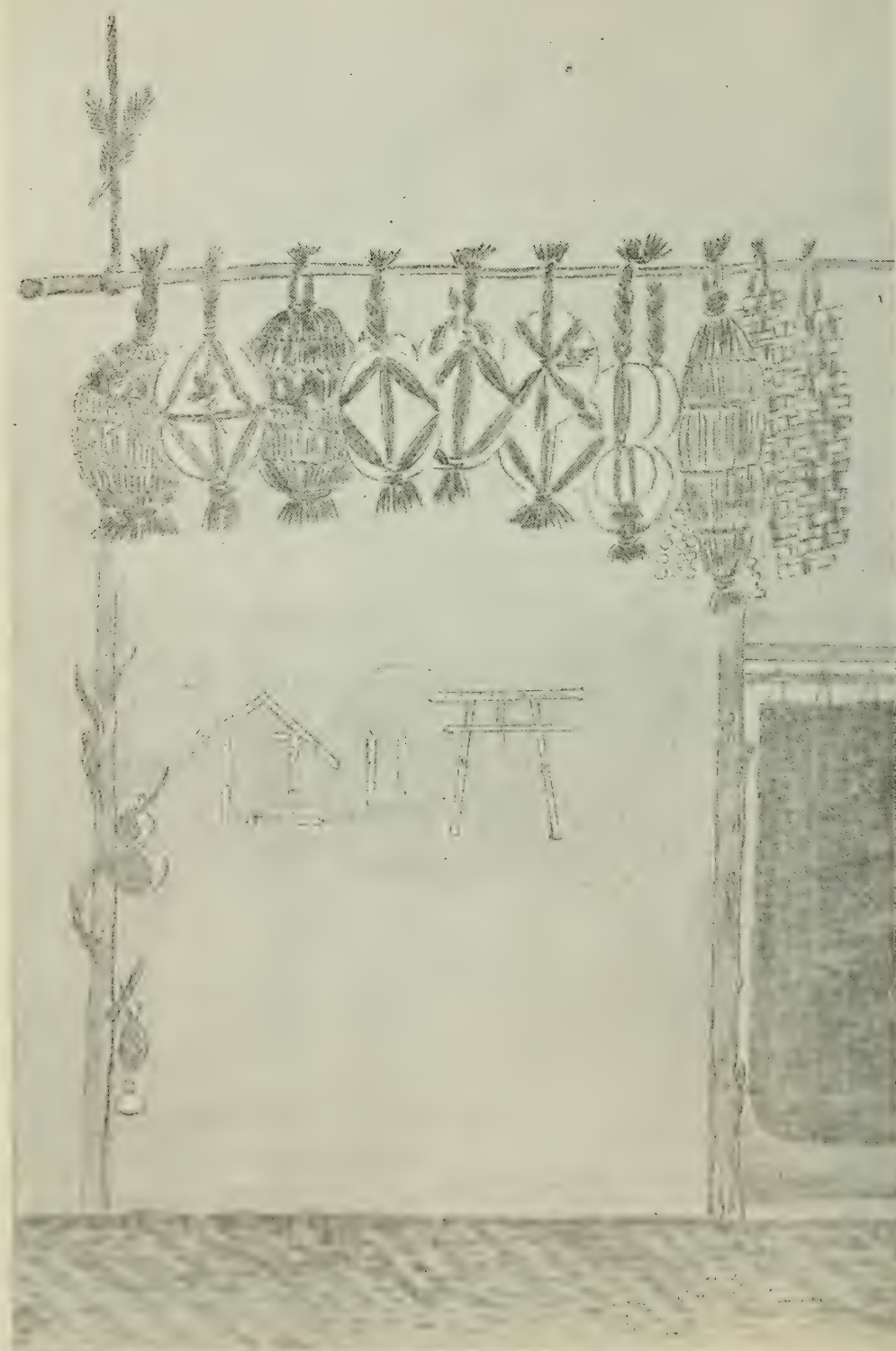
繭玉の餅

ゑぶりすり

歯固の餅に

も、しか、しるしせりとなん人の語りきと、あるしとともに話る。そのしるしは、蝦夷のトッパてふものにことならすと、その見しあらましを左にのす。

十五日。おはぼ、いなぼ、まゆだまになすらへしもち、いと大なるを木のうれにさし、あるは柳の糸にひしく〳〵とつらぬきたるは、玉をあめるか、梢にたばしる、あられを見たらんやうに、ゆふ、しりくへ縄のなひくに、よひらの花もちゐ木の枝につけて、かもへなけしにさせるは、花のしらゆふみよしのゝ、かつてのみやところさもおもひなせり。ゑぶりすりといふもの、むれ來る。（天註——ゑんふりずりの藤九郎か參たとて、南部、仙臺なとにて田うへてふおとりせるも、もとは、田の杁かいならせるまねひよりはしまれり。）ことなる立烏帽子に白うさき、とか矢のかたなとかいて、五葉の小枝もて舞ひ、あるは扇、ゆづる葉折かさしてまふ。笛つゝみにはやし、鍬からといふものに鳴子、馬の鳴鈴、つかりなとつないて、これをつきてほうしとりて、うたうたふに、あられはしりのこゝちす。こは、かたゐらかわさにてもあらす、村々のわかうどかうち戯れにそしける。田植、やらくさ、鳥追のためしは、さしく〳〵しるしたれは、かいもらしぬ。霞をめくるうはそくか、屋戸の人の數にあはせてくれたるまもり札を、鳥居の形、みやしろのなりにかべにおし、板戸におしたり。むこ、よめの持來るかゝみもちも、神にそなへたるも、小正月といふことはつれはわらにつゝみ、こもにつゝみて、氷餅もひとつに掛ならへて、水無月の朔、ひむろの祝、はかためのいはひとて、もはら家ごと

蝦夷國の　トツパ

芽出しの祝
厄年祝ひ

杓子舞ひ

にそくふめる。

二十日。芽出の祝とて人ごとにいはふに、としなをし、あるはいふとしとりとて、誰れか兄ははたち五、かれがをばは十あまりな(マヽ)ゝつ、こゝのゐては、よそまりふたつ、かしこのあつばはみそち三なりければとて、その門〳〵は、松も、とし繩も曳のこして、樽入れしたるやからを呼集め酒もりすとて、歌うたひ、つゝみどう〳〵うちならし、みつの弦のこゑ〳〵、そのやと〳〵のかまびすしさ、女ごもも、ゑひうたひうかれたちて、女ひとり、みじかき衣きて、かまはゞき、ぼうしにはちまきして男姿によそひたち頭うちふり、杓子舞てふことをせり。その辭に、「さくし舞はみさひな、奥山のやまなかの、金平とのゝ弟の、金四郎といふ人は、さくしうちの名人で、さくしうちの道具には、一分のみに二分のみ、前かんなにしりかんな、番匠箱に引入て、ひきからかつてひつちよつて、一の坂もせこ〳〵、二の坂もせこ〳〵、三の坂の坂中で、あんまり腰もいたひし、こしをちくと休めて、あたりをきつと見たれは、さくし木が澤山で、さくし木のあらためにに、一にとつてはいたやの木、二にとつてはにがき、三にとりては櫻の木、四にとりてはしころの木、五にとりては五葉の松、六ッにとりてはむくの木、七ッにとりてはならの木、八ッにとりては山桑、やすの木とも申也。九ッにとれは金剛の木に、こもの木、十にとればとちの木、ことをかいたる杓の木の風折れ、さくし木の上ものだ。本

ごせやける

たろばけて

もゝた

をばとんとなをして、うらをはさつくとはやして、七日八日かゝつて、さくし三ぢやううつぱたいて、ひつからがつてひつしよつて、おく山の山口て、山もりに行逢て、さくし一ちやうとられて、さくし舞は見さひな。二ちようなるさくしを、明日の市に立ふか、けふの町に立ふか、來月の八日の町は、さくしの直かよいほどに、大町をのぼりに、新町をくだりに、さくしうりたいものかなと、ふれければ、けんだんとのゝしろもくと、たいくわんとのゝあかもくと、とうふのほねをばあやつて、ゑんやくんやとなきあふところさ、さくしうりを見つけて、ほへばたゞもほへなひで、あまり小づらはにくさに、さくしの小ばなはかけるか、狗の小はなはかけるか、あとさむいてぶつつけた。犬の小鼻はかけなひで、さくしのこばなぶつかけた。あまりにごせはやけるし（天註――はらぐろなることを、ごせがやけるといひ、あるは、きもがやけるなと、ところ〲ことなり。）、前なる小川になけこんで、もつつすつつうかれた、さくしまひをみさひな。一ちようあるさくしを、大町をのぼりに、新町はくだりに、さくしうりたいものかなと、ふれければ、さくしなんぼといふほとに、あとをかへり見てやれば、六尺あまりの大男、すねを見ればたろばけて（天註――末ひらきたるを、なにゝても、ばけるとそいふなる。）、しりを見ればたなじりて、はらを見ればざるばらて、げほうつむりにやりをとがひ、つらがあまりにくさに、七貫五百といひかけた。ねぎつてこぎつて七文きなかにあきなつて、七文きなかのせにをば、一貫さしにぶつつないて、あつちのもゝたをたゝかせ、こつち

のもゝたをたゝかせ、おほまちのまんなかで、けいやく〳〵にむんずと行逢て、これではたゝも
なるまひや、けいやく〳〵三盃わは三杯、四五六七杯うちのんで、あつばのところさみやげに、な
には又よかろ。いはし一疋かいとつて、どうなかゆふてひつかづきて、さくしうつたみさひ
な。」と、聲とよむまで笛つゝみにはやしぬ。きねふりまひ、さかこしまひなども、をりかさ
ね〳〵まひあかしぬ。

黑石にて

ふん月のなからはかり黑石の里に在りて、おもふどち、うちものかたらふなかに、こゝより
いと近きわたりのとやまのかげに、斯志賀差波とて、あやしう鹿の頭を彫てける石のふたつ
までありと、人々のものはらいへるを聞て、いさそれ見にいきてんと、吉田なにかし、岙田なに
かしなどいふくすしをはしめ、しるしらぬ、あまたしてこの路をいかば、いさゝか遠けれど、
そのあたりをよくふみしりたる山賤ともにあないさせてんとて、上十川(かみとかは)といふ村に入て、や
まちをわけはる〳〵と行て、長谷澤(ながやさは)の不動尊の杜を右に、左に小峠の坂、題目石も遠からず
見やりて、安入(あんにふ)の坂といへるところに、しはし人のけふりくゆらするひまに、多かる眞砂を

安入坂の石舍利

手すひにかいやれば、寶石(マヽ)にまじりて白粟のこほれたらんやうに、石舍利のあるを拾ひうれ

しゝが澤の
しゝ頭石

ば、見る人あきれて、こは保呂都企の外にも亦ありけるものか。いまた、ところの人もしらざる山中に來て、旅人のひろひ初てけるもあやしなどいひもて、かくてその山に來る。かた岨路をおりて、かの岩のもとにとて細みちをわくれば、めくりは五尋六尋斗の岩の面に、鹿の頭の大なるも、ちいさきも、いくはくとなうひし〳〵とほりたり。又木のなかに小岩のあるにも、おなし鹿の頭かたあり。こは誰か、いつの世よりせしといふことをしらす。たゝ神のわざにて、いつも七月七日ことに、かならすふたつをゑりそふともいへり。こゝに近き村々の鹿踊（ししをどり）のしゝがしら、としへて舞ふるびもてゆけば、此石のめくりにほり埋む、ほかにゆへこそしらねと山賤らか話る。うべ、鹿の頭ほりたるすかた、おろかにもゑりうかちたるともおもほへす。吾田多良の嶺（ね）にふすしゝのと、こゝにいはゝいひてんかし。

しは人のしをりしるへにかくふかくさゝはらひはらわきて來にけり。

と折句歌になかめて、長坂村に出て黑石に歸る。」

長谷澤不動明王

追柯呂能通度

鱈の産多し

網卸し

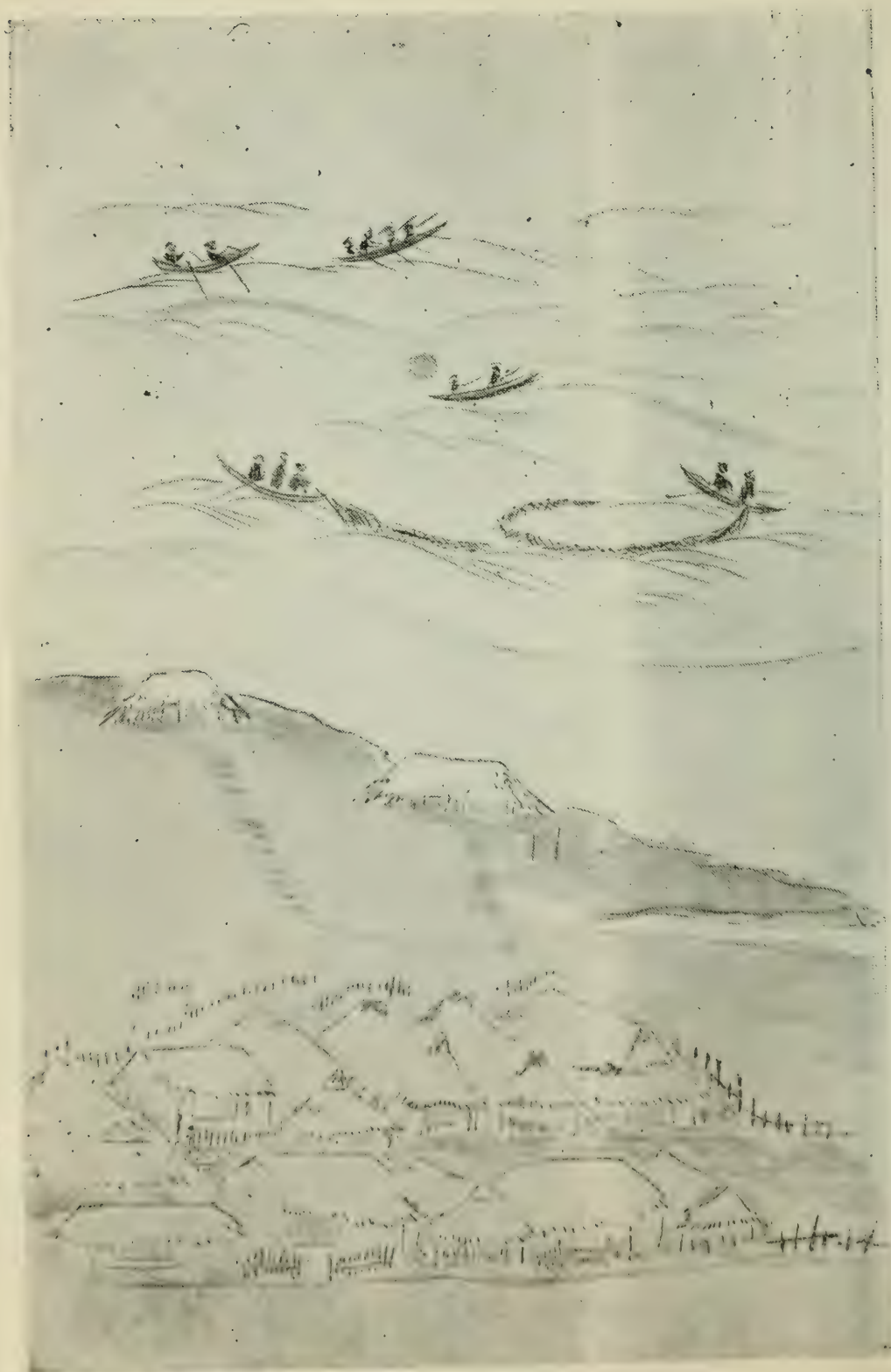
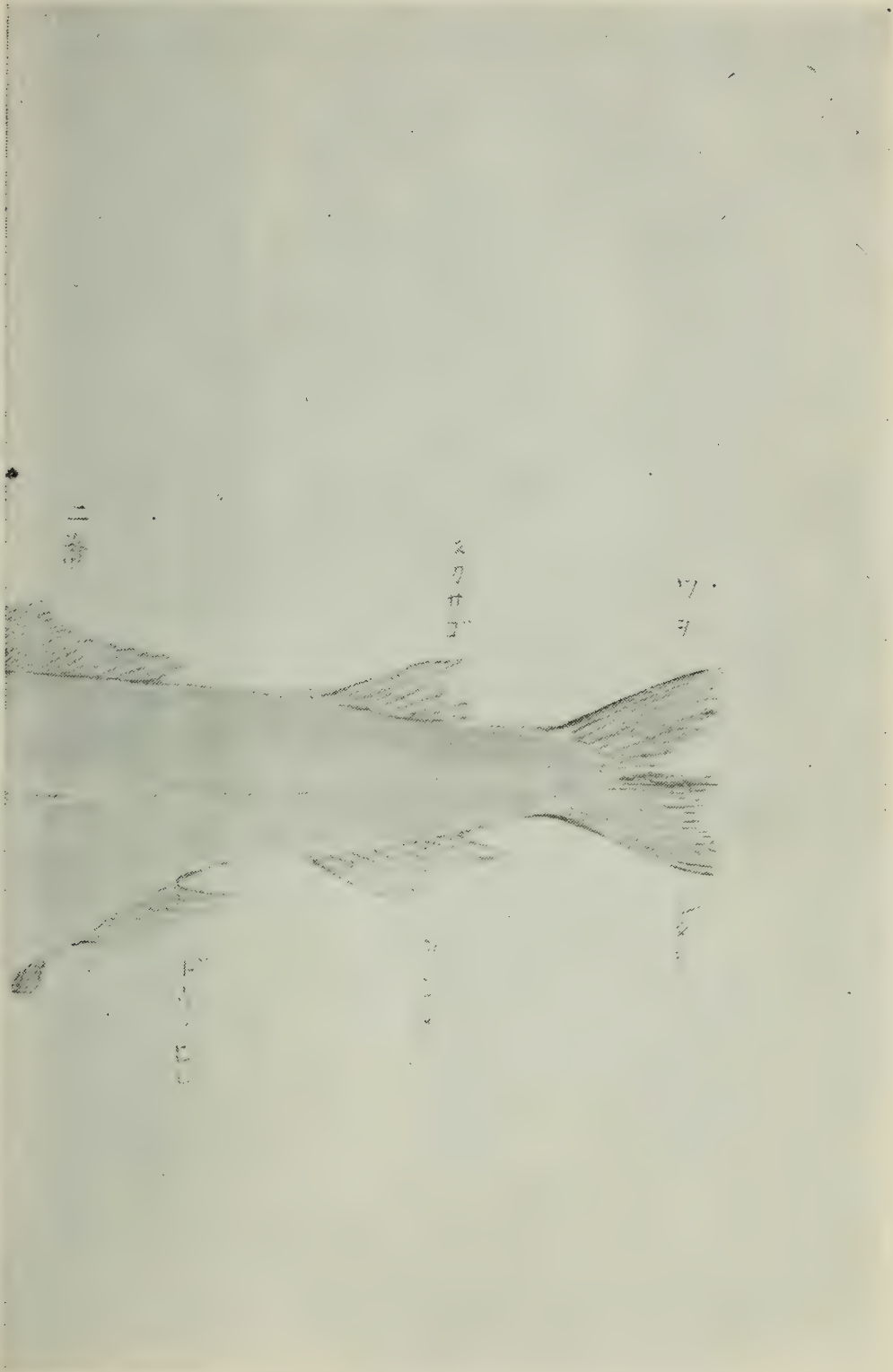
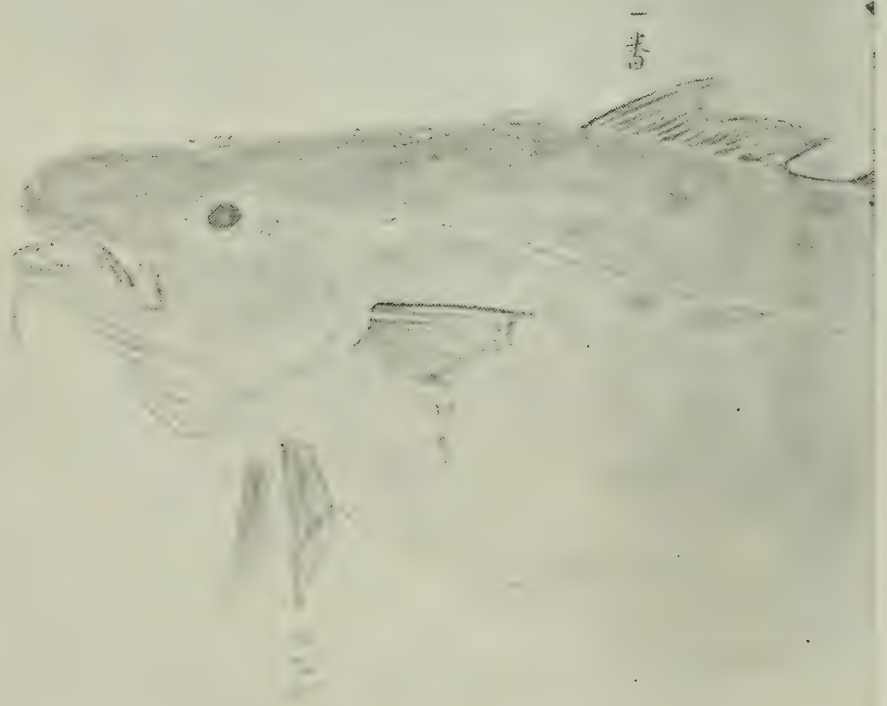
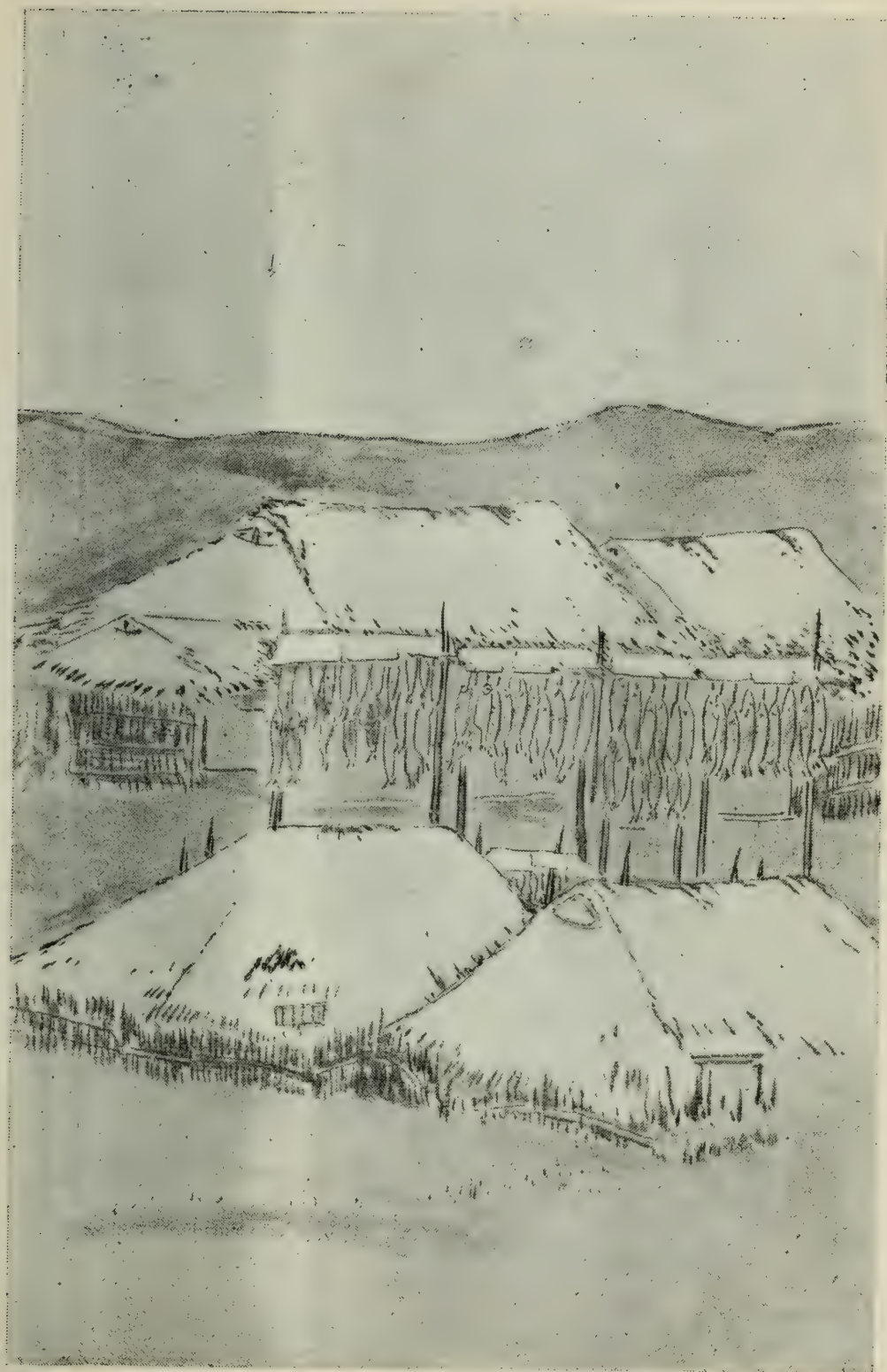
鱈の子桼

初鱈漁

「道奥にはわきて大口魚なんいと多し。氣仙の海、盛の浦なと、なへて此すなどりありて、「さかりで鱈がとれろかし、おく濱へ、やりたくないぞわかつまを。」そのおもふこゝろせちに、浦の乙女がうたふにてもしるべし。糠部の海、泊の濱、あるは脇の澤の浦にもいと多し。蝦夷人もとりて、それらが辭には衣連久知といへる。阿以奴万の多良、南部の泊のあたりにとる多良は腸に毒ありて、此わたくひて身のはれ、あし手なへたるものあり。ここ浦のたらには、さるためしもなけん、その魚のすむ海によるとか。津輕郡にては、ひんかしは浦田の濱、藻浦の洋よりはしめ、西は根岸の浦、平館のなだのあたりまて網せり。空寒き冬至のころより、しのぎかたき寒のなからまてのあびき也。南部路はいさゝかをくれて、春かけても釣うることのあり。津刈の海に、あみおろしとて、あびきの始の日より網代家(あじや)につといここり居て、そのめともは鱈の子桼(しこぎ)てふものを搗て、いり豆をねりませて、わらはべのうちむれ來るにとらせ、神に奉る。漁にいつる泉郎人らは、そのたらのこしさぎをとりて、たかひにうちあひ、身にもかしらにも、いたく雪のふりかゝりたるやうにぬり、ぬられても、多良とりうるまて、はらはざるならひ也。かくて夕くれ近う、沖べはるゞとこき出て、網おし卸り來て、つとめて星をかさしのりゆき、まづ初鱈とりうれは神にそなへ、をのれらもくひ酒の

みて、人の門々にたちて、あぢけ、くひにこと、聲たかうよひありけば、老たるわかき、童まても、あぢやに入みちて鱈汁をそくふめる。そのころほひは雪のいやふれは、海もあれにあれてけれど、あらき潮迫に、もゝふね、ちふね、木の葉の吹ちりたるやうにこぎみたれ、しみ氷るたもとに雪のふりかゝり、ふゞきにまみれ、身に冴へ通るあら汝の、からきおもひをおもひやるべし。浦人のこと葉に鱈をくふといふことあり、これをいかにとさへば、ひさつ舟に三人五人、なゝたり、やたりなど、そのくみありてのり、わかさしたる網にかゝりたる魚のしるしに、尾鰭をくひさきぬ。わがひれはこびれ、誰れはどうのひれ、かれはをした、したを、上尾（わを）、たかさご、二番、一番とさだめ、みなそれ〳〵にくひもて、うちませてき。はた、舟いと大にして人あまたのりて、ひれあらざれは、多良のせ、かしらなどかいやぶりて、そのしるしをたつ。釣たら、あみだらのけちめかくこそありけれ。浦人のいふ、多良に十二品（くち）ありといへど、そのしな、くさ〳〵そありける。しかいふ名ども、こぼうたらは小腹にして、ゆふかほたらは色しろし。ごふけたらはいと大にしていろくろし。でたらは子をおきいてくるをいふ。たつたらは男たらにして、雲わたてふものゝありけるをいふ。ちくせんたらは、きさらぎはかり子を生り。そのほか、よりたら、はがみたら、くろたら、あるはくちぼそ、こがねはだ、なもみはたなどいへり。南部路にていふゑひすたら、越後たら、きじたら、すけさう多良。

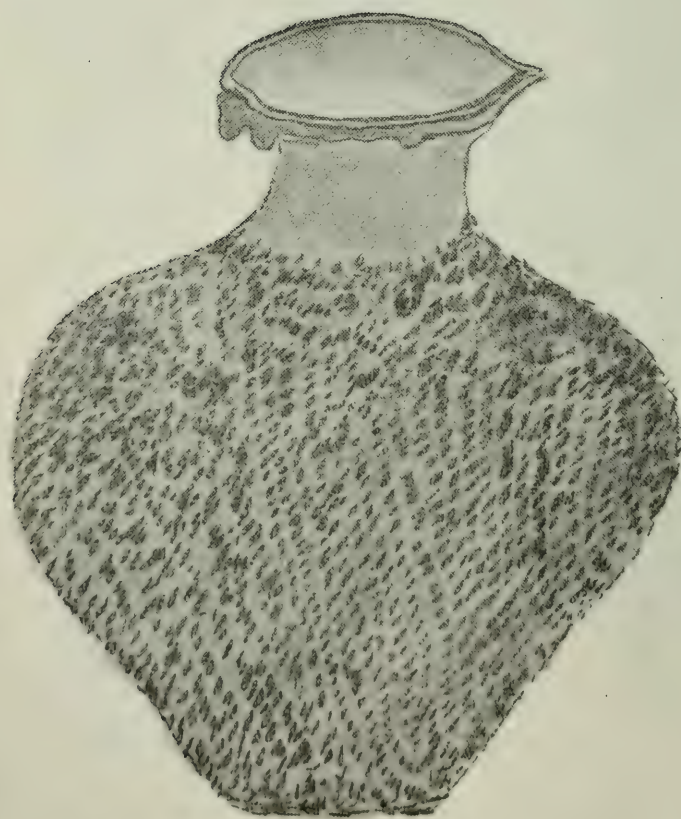
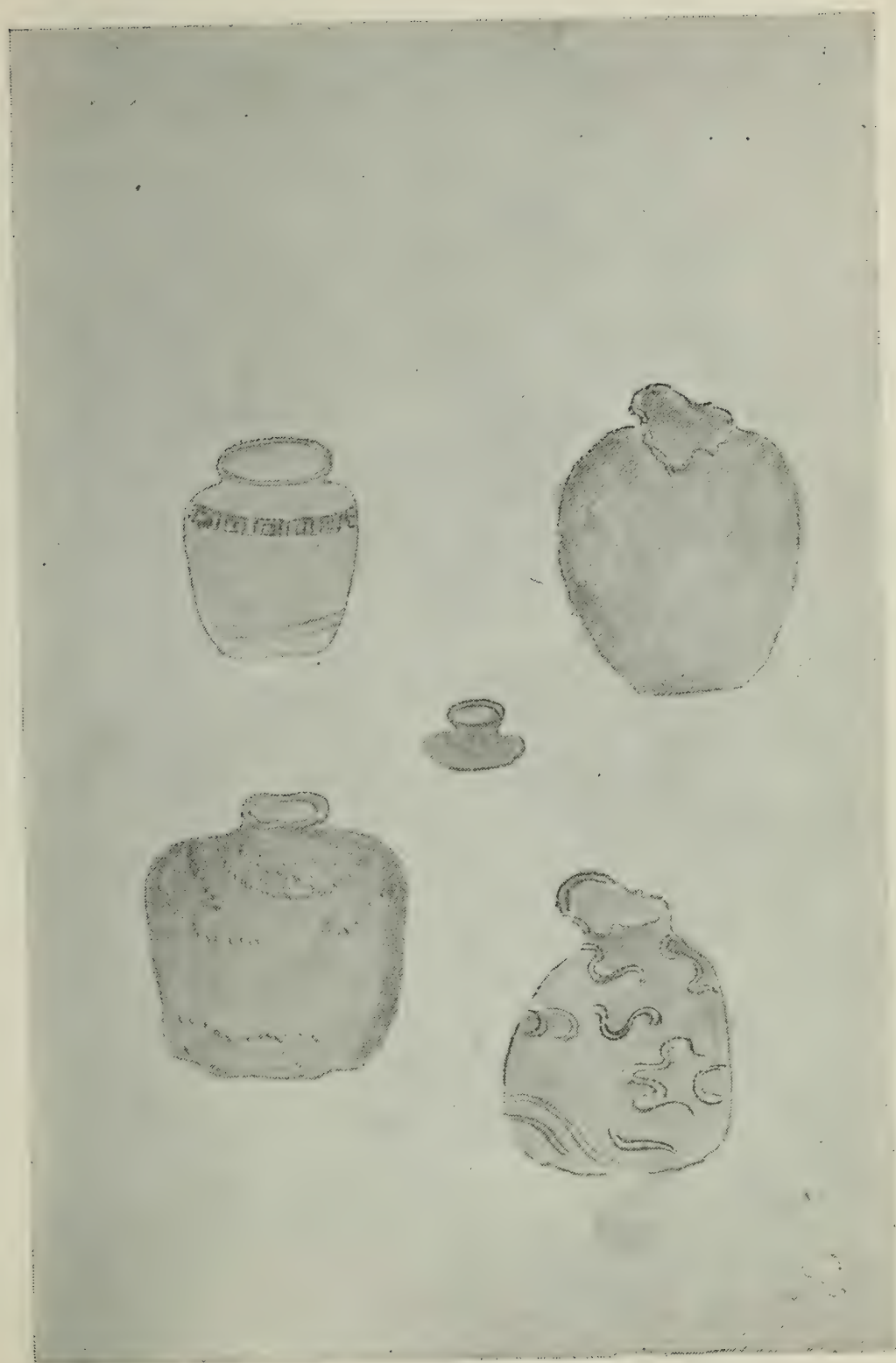
「鱈をくふ」

鱈の種類

追柯呂能通度

津輕の海士の屋にて、子鮭には子のいてこぬ料に、なばりてふものを木にて造りてさせり。そのかたしかり。

魚鍼(なばり)

「寒苗の里より、みかべのよろひなすもの、あるははにわなすもの、あるはふる瓦やうのものいつるもいとあやしとおもふに、又このころ、黑石のほとりなる、むかしいふ小杭埜、いまいふ花枚の邑のこもり、山はたけより、さむなへにほりえしに、おなしさまなるものほりいてしとて、しりたる人のをくりしを、めつらしう、かたにしるしぬ。はた、甕か岡といふやかたのひろ野あるその小高きところをほりうがては、こがめ、へひち、ひらか、をつぼ、下壺、あまの手抉やうのものまて、むかしよりいまし世かけてほれとも〳〵つきせず、なにの料にうつみしにや。凡、いはひべ、とりへひちに似たるもの多し。しか、そのかたをひたんにのす。

作良かり赤葉かり

共五冊
津輕

瑳具樂香里

すへらきの御代の榮もいちしろく、小田なる山の霞そめて、こかね花さく春の日かけのきら〱とのとやかに、いくはくたかき雪のいはきねも、ほの〱とにほふひかりに、民のこゝろものひらかにゆるひ、きうそう寄むつひ、よろこほひに、こととひかはしむれありくはつ春にしもなりぬれと、雪いやふり〱て軒たかき宿も埋れはてて、いまたにみふゆのつきぬやと、うつみひのもとにつとひ、こそのまゝなるふゝき、はたれ、まれ〱にはれたる日すら、ひゐつかたよりはいつもあられ、みそれかちにて、夜のほとろ人しらす降ては、木々もとをゝに咲こたるゝ、花の面影をみせたる、あさひらきのおかしさはあれと、花くはしさくらは、いつの空にか見なんとふりつむ日數かさなりて、たひ衣きさらきのすゑより、やよひのはしめつかた、田つらの太雪またらにけちて、万武作久の梢の花こゝらさけは、こん秋の田の實いとよけんと、まつ花うらをとひまけて、やをら春の山口は至れり。 斯氏巨布志のはなのま

しろにさかりなるを、いまはた雪のふりたるかと見おとろく斗、これなん田うちさくらの花とて、このめはる田をそうつめる。八重霞立野の牧のあら駒もわか草にいはへ、たのしき世にあふことは、獨戀の岡のきゝすのつま戀ふこゑものとかに、春のけちめもやゝしられぬるに、つれなう暮行空のならひ、さりけれと、花は梢にいろをにほはす、雪のふるすの鳥も來鳴す。あやなき春のわかれ、さのみやはとはおもへれと、しかすかになこりのおしまれて、卯月のはしめにもなりぬ。そのむかし花山少將なにかしの卿さすらへおはして、「みやこにて話らは人の僞といはんうつきの梅のさかりを、となん、かの島わたりしてなかめ給ひしとか。うへこのころは、霍公鳥きかまくのおもひ露もおもほへす。たゝ花をし待またれて、籬の梅のひもときそめて、風かくはしう吹まよひ、きひはなる櫻のしなひなとの、きり垣、ついひちのうちより、うれのみ、はつか斗つとあらはれたるは、まほに見たらんよりも、すゝろにこゝろのうかれたち、そことなう山ふみし、わけくらして、

梅、櫻、桃、山吹

それと見てまよふこゝろの雲はれんまことの花にたつねあへらは。

せんさい杜林の梅、櫻、もゝ、山ふきの、枝をさし交へてこと〲にさきみちたるを、青葉さすころほひ、ひとめに見なんことの又たくふかたやはある。

梅さくらいまをさかりとみちのくの春や卯月のなかはなるらん。

ともいははいひてんかしと、なかめすてたるも、かたはらいたきこゝちせられたり。

「花一朶を折かざして、山里めけるかたより、みたりよたり、女のうた唄ひつれてくなり。

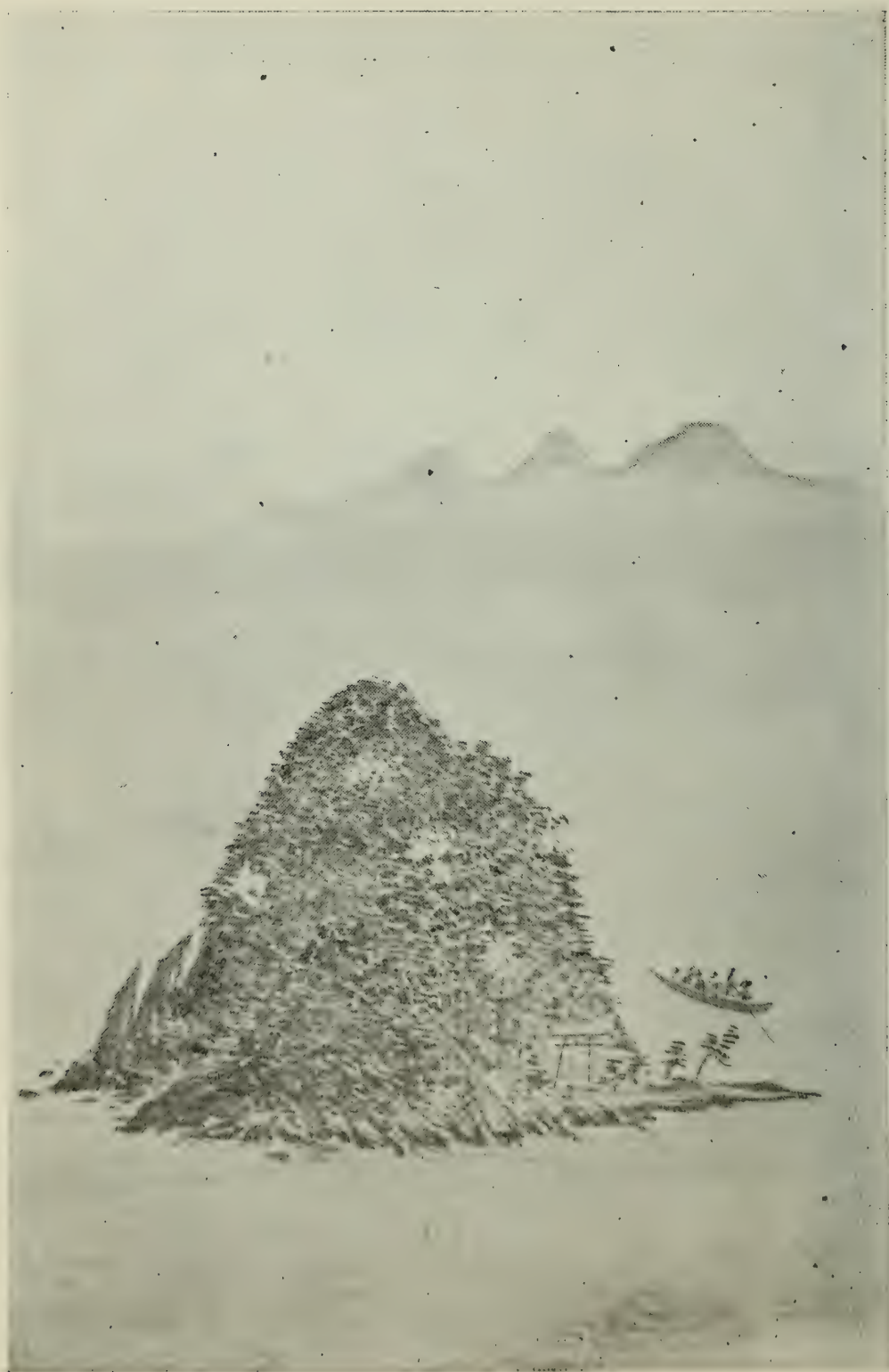
「だけ〳〵の、だけのみこしのかばざくら。」その末は、あまたの聲にうたひけたれて、えこそ聞しらね。

たけ〳〵に咲るみこしのかはさくらにほふや春のとちめならまし。

のちにきゝしかは、「つかる繁昌と（此項以下缺——編者）

作良かり赤葉かり

南無青面金剛

作良かり赤葉かり

作良かり赤葉かり

作良かり赤葉かり

作良かり赤葉かり

野山色染みて

母美地介黎

あきもやゝ淺茅のうれ葉いろつきそめて、野はらのくさの花ことにおもしろく、里の砧もをりしりかほに、衣かりかね身にしみ渡り、ふてつむしの、かたおろしなるこゑさへくさのまくらに近う、月のあはれはさらなり。ひとこをりうちそそくむら雨の露、ふかき山の梢とものけしきたち、日にそひ夜をへて、尾上たかさこの木々のこりなう、もみいつる色のわきてあへかに、たくへんかたなう。こや山比咩の、にしきをりかくやと見るかうちに、そさかはま風いつしもあれかちに、いそやまの赤葉吹いさなはれては、波のはなさへいろめつらしう。みちのく山の、あらしはけしう吹おろす木の葉は、うへも、こかねのちりくかと猶おしまれて、こゝにとしはへたり。」

「ことしねくすりかりして、うみ山のくまわもつゆのこりなうめくりて、もちの月なん、刀合のみなとへによみして、

又たくひなみちさやかにてる月をけふこそ見つれあらき汝せに。

かくて比呂差吉に至る。

作良かり赤葉かり

「葉月はつかまり八日。ゆくりなう雪のいやふりて、

はつ太雪ふりにけらしないはき山ふもとのこすゑしくれまつころ。

「なか月九日の日。たかきにのほらうと人のいさなへるに、

した露をなめてちとせをふることの山路の幾久やけふに折らなん。

「十三夜。ひとり、かたふくまて猶むかひゐて、

くりかへし見まくほしさよ十五の空にまさきのかつらなか月の月。

「十日まり八日。山路にいきなんのこゝろほりして、そことなうさしいつるに、糀町さかやいふなるところに出つ。わきて此あたりは、とみうとのありかにて、さらにすめらん門ともおもほへねと、菊なんいろ〳〵さかせて籬おしめくらせたるは、土生のふせるかことき住みかなり。すむはたそとなと、行かふ人も、めとゝめ、たちやすらひき。ときのまに、雪のこほすかことくふりくれは猶軒ちかく袖うちはらふほと、菊おほふいよすのやねも、ましろになりぬ。

花ゆへに匂ふあるしのその名さへきくにとはるるみちのへの宿。

とはかりありて雪ははれたり。人のいふ、中埜の山里なる麻苧山の黄葉今まさかりなるを、此雪にいかゝあらんときいつゝ、こは、去年をさとしよりも見まくそほしかりける。いてこ

たひはとおもひたつに、はた空のかいくらかりて、雪は鐘禮とふりかはりぬ。

　　行袖のぬるもいとはしはつしくれふるに染るをみねのもみち葉。

藤崎にいよゝふりくれて、相しれる河越のもとにやとつきたり。つとめてのそら、きのふにいやまさりて雪みそれめきて、軒の糸水いとものうく、せんすへなう、ひとひ、ふつかと日はへたり。

　　ふるほとはそめもつくせといやふらはあめにもみちのちりなんもうし。

かくて、ひとひたに、さらによけん空もあらねは、雨つゝみしてたち行ほと、とをしろう見やられたるやかたに、赤葉のひともとと見ゆるか、こきもうすきも、おなし梢にこきませたる。そこなん河邊とそいふなる。

　　遠方に染るもみちのうすくこくたつや河への浪のうき霧。

みちとをからねと、やをら久呂委司にくら〳〵につきて、過万爲かもとにいねたり。あしたになりて、このあまはれにとて、きのふけふありて出つ。黄葉のなかれくむみてらとて、からめける樓わたとのなとありけるは、かきにも、ついひちにもひし〳〵と植わたしたる木ことに、みなもみちたれは、ひかけまばゆく、みしめ引さゝやかのほくらのめくりにも、なみたつかえての木ともたかからす、ひきからす、なからはぬきとちりたるなと、風の手酬たるか

中野村にて

と、からにしきかつしくみまへをよきて、いしはしのきちかき、へたてある杜かけにおましませる、袁多者のかんかきなとは、松杉に遮られて、時雨たるいろのなさけふかし。

　とるぬさも閼伽もそめなんもみち葉や御寺のみきり神のみつかき。

はる／＼とゆき／＼て、蛾虫の阪といふあり。三とせのむかし雪によちて、そのときゆ、おかしとつねにおもひしはものかは、こゝらの木々みな、ゆふ日の色にそめなしたるを越へかてに見つゝ、たたすみて折句うたを作る。

　から人のむへもいひけむしくれてはさかりの花のかくはをよはし。

奈可乃村になりて、あら河につちはしかけわたして岸高く、むかふをのへ、そかひ、かた岨、いはね、小阪の木々、たかきもみしかきも、おしなへてもみつるなかに、おち來る水のたきちなかるゝ風情、はら／＼とちりくるに夕陽かけろひて、むらたてる杉のした枝なとにはひかゝりたるつた、ちりかゝる木の葉は、これもしくれたるかと見おとろくはかり、めとまりて、その名さへよもにたつたの河なみの、たちをよふへうもあらしかしと、かしの實のひとりこちて、はしうちわたる。不動尊のみまへちかう、さゝやかにたてるひともとのこすゑの、わきて、こまにしきを、ひとむらひるかへしたるかと、めもあやに、をかみとのに入らんとて清き瀧のもとに、

板留溫泉より藤崎まで

くりいたすあさ苧のいとの色ふかくそめて赤葉をくたすたきなみ。

きしへにたちて、

そめつくすもみちもふかき山川のいかにあさをの名になかるらむ。

このゆふへ、異他度兎のゆけたのやかたに泊る。あさひらけ行空のいとくらく、湯のけふりにやと見るに小雨そほふりてはれたれは、飫岐于樂といふ山中のいてゆのあたりにも、よきもみちのありと聞てわけいりて見るに、谷ふかく、斧の音ほと〳〵と遠う聞へて、さと、風にちる木のもとにたちて、

山なみのたちもへたてて沖浦にふな木こるらんもみち落り來は。

雨のしきりにふりこん空のけしきに、あしとく奴流山のやかたをゆんてに見やりて、かなたはふりなん。

をちかたの里は時雨ていくちしほ雨にぬる湯のわきていろこき。

波寧麼奇のむらなかに、よしあるさまに植なしたる庭の、いはのはさまに、つとさし出たる楓のもみちしたるに、とひより笠やとりして、

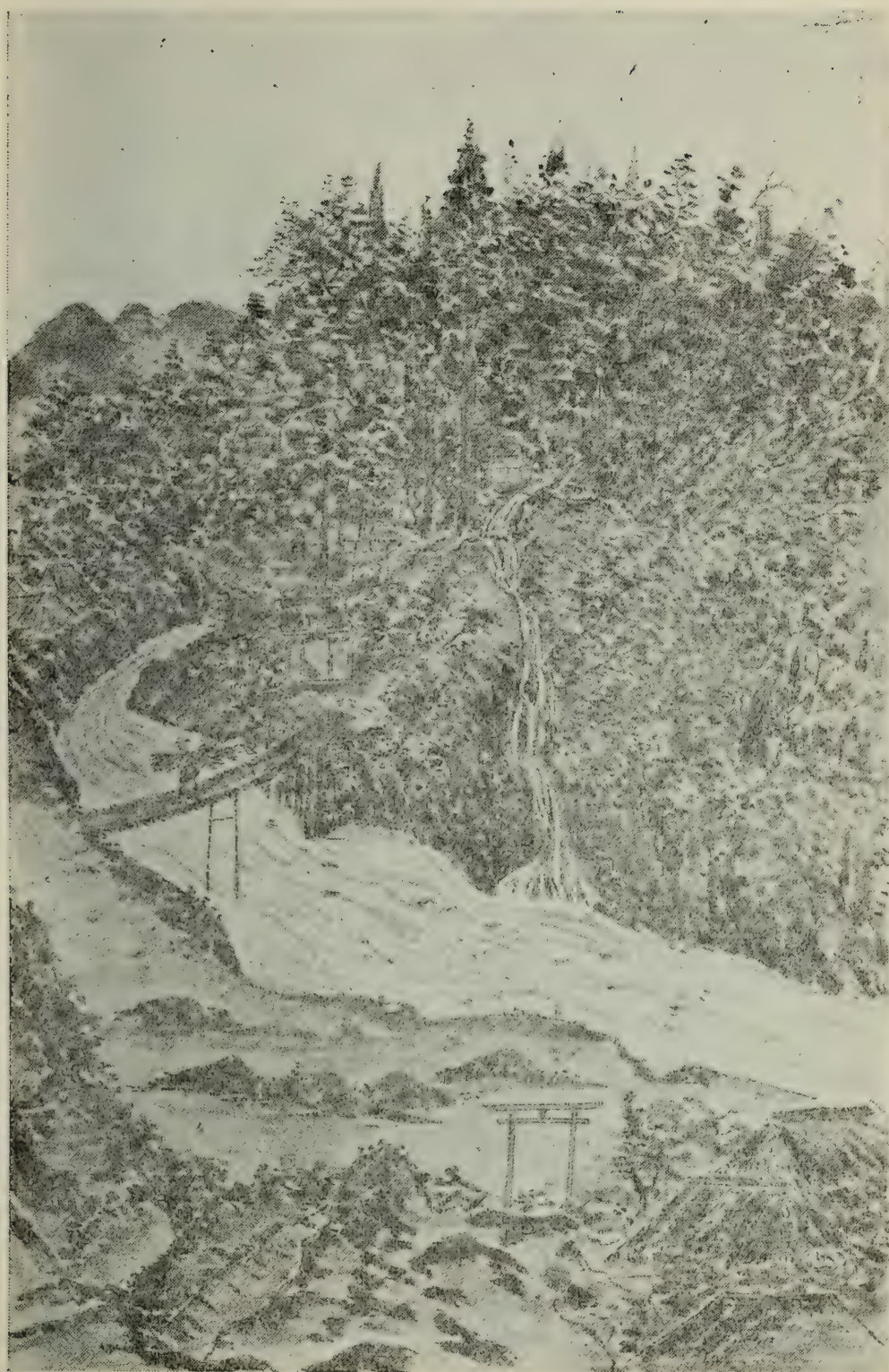
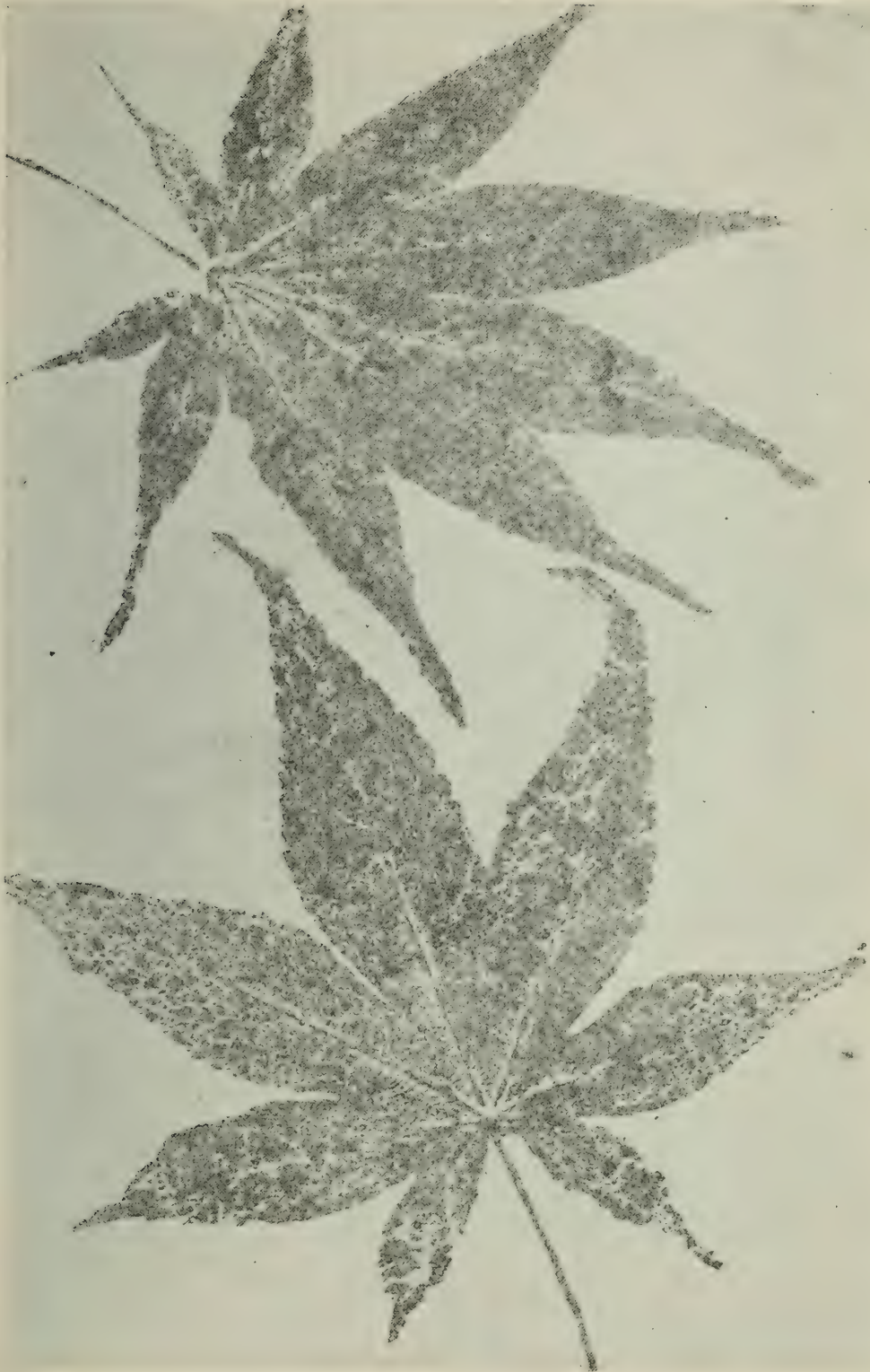
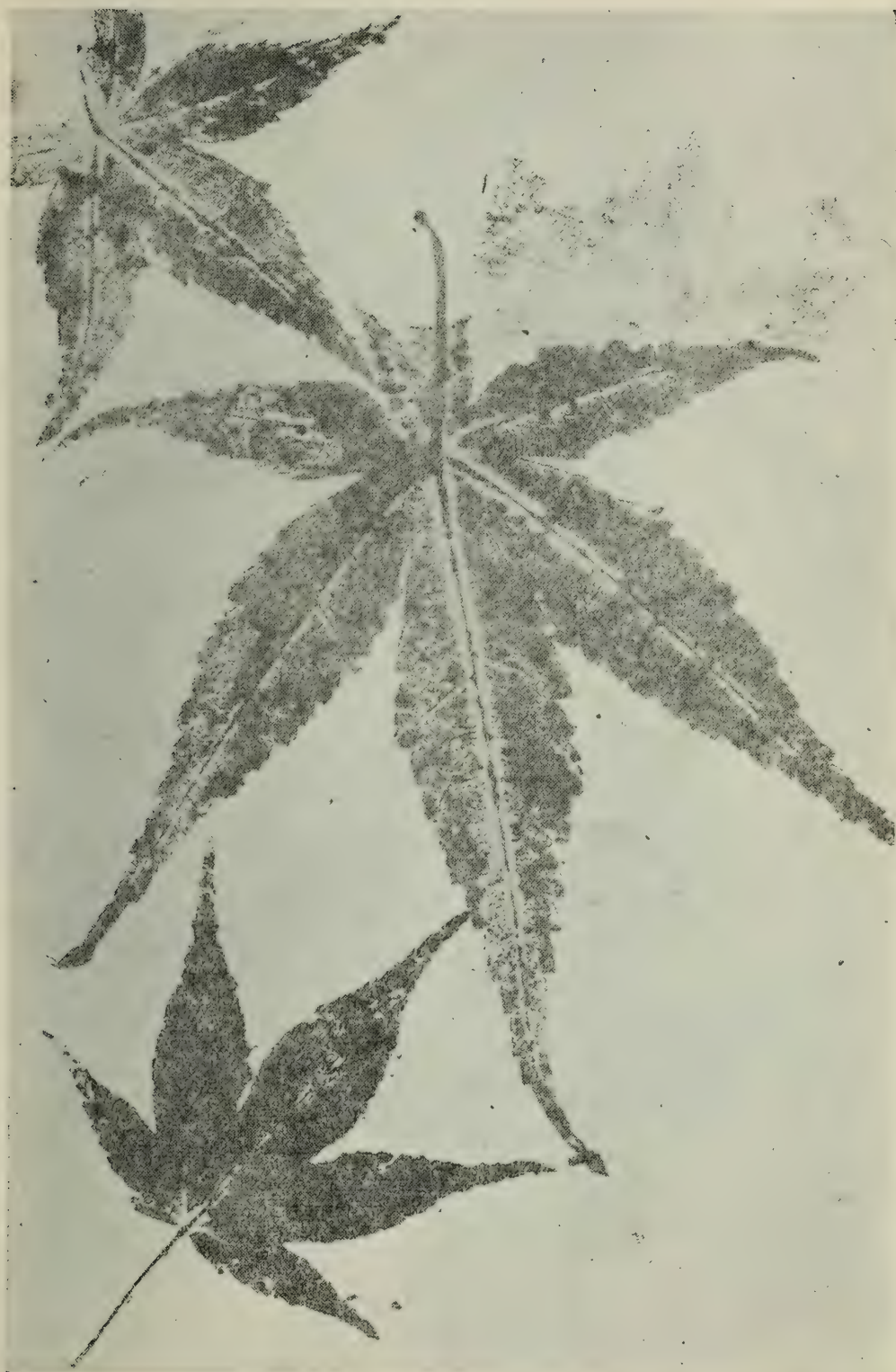
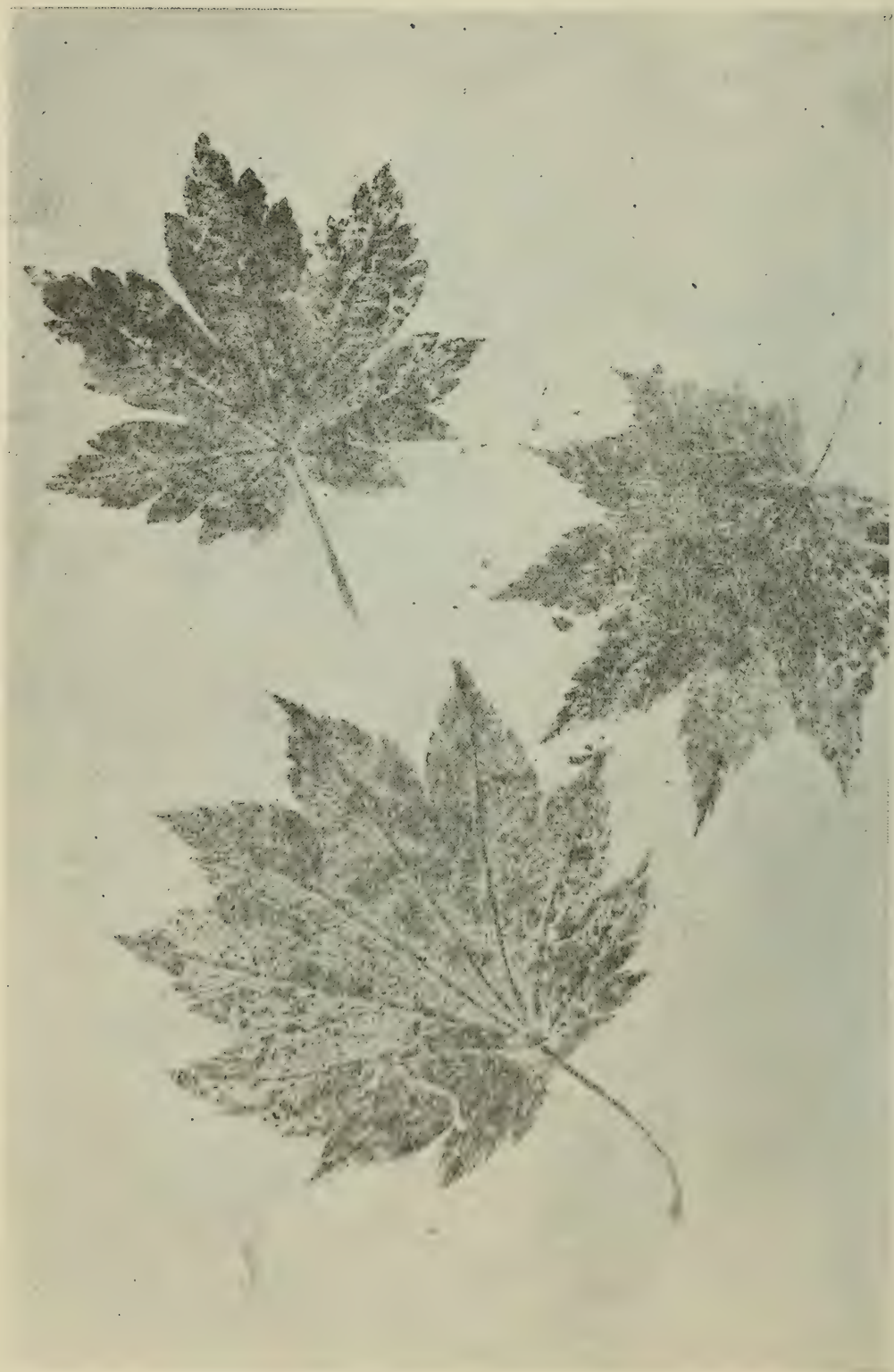
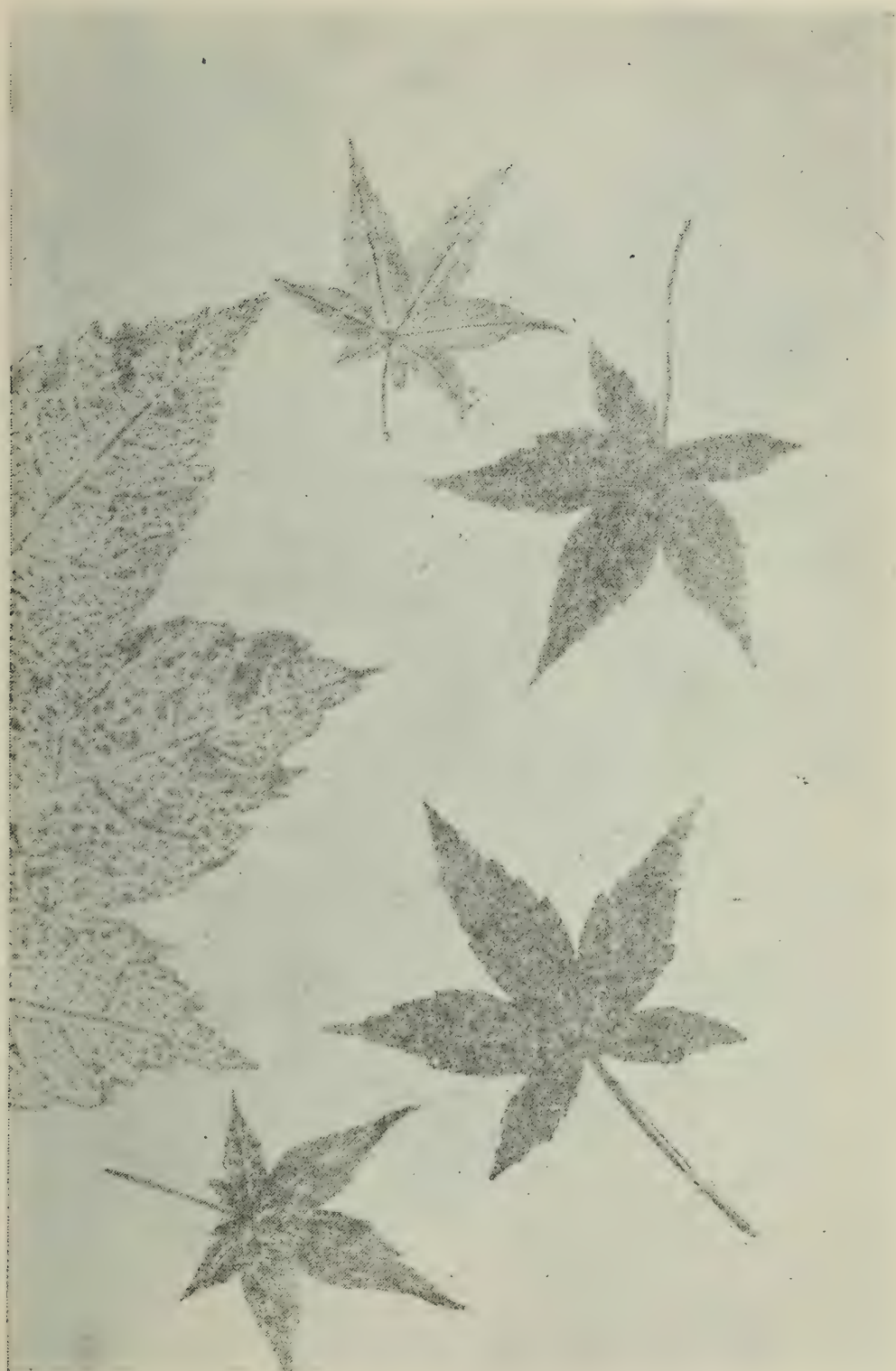
牧の名の花やはをよふひともとに秋をつくしてそむるもみち葉。

いとと雨ふる空ははやうくらかりてければ、このもみちたるやとのあるしの、一夜はいねて

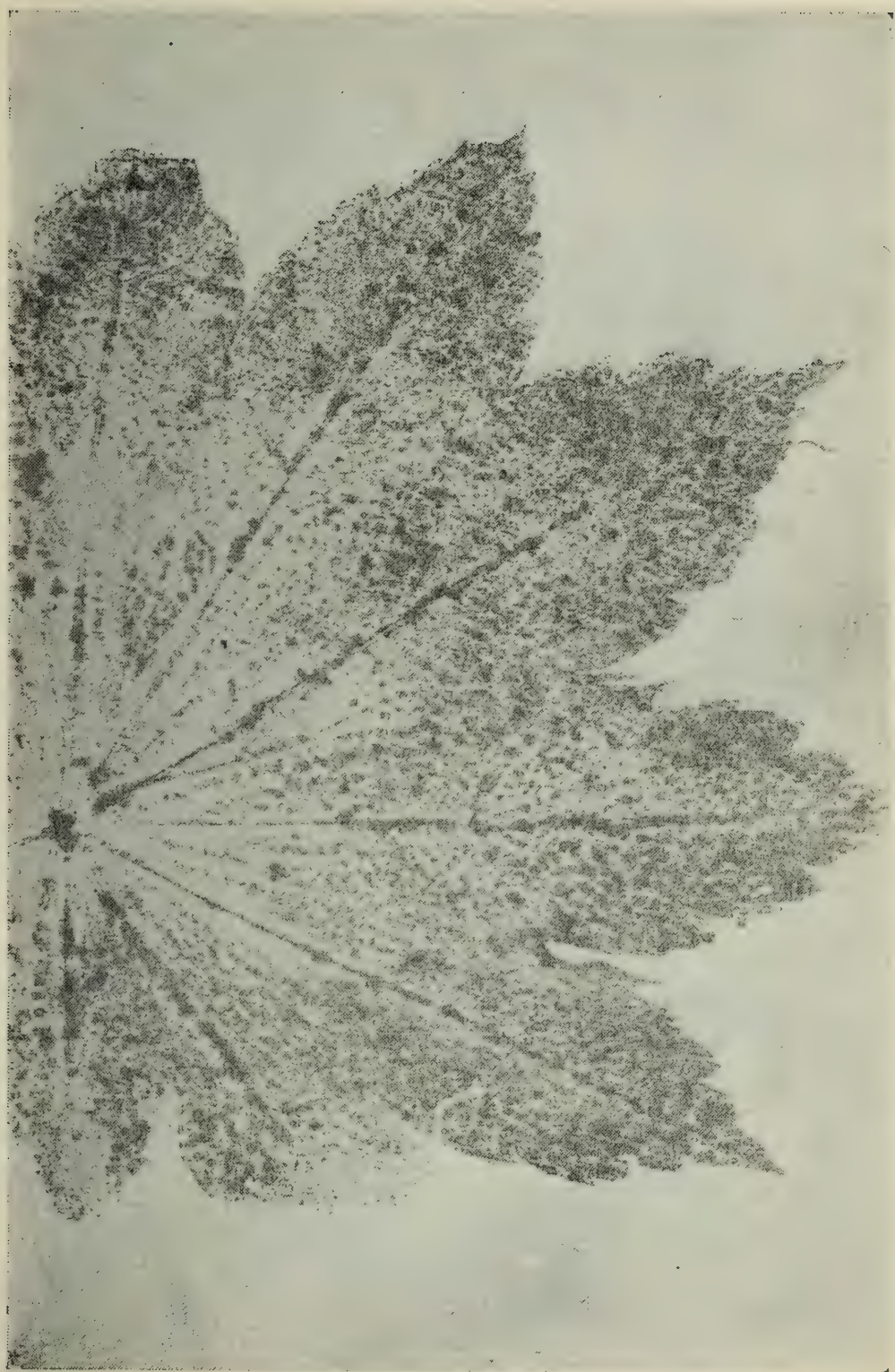
などいへるうれしさに入ぬ。あくれはたちて久路以司をへて、猶雨ふれるにぬれて布自作企につきたり。この雨の日のつれ〴〵に、去年をことしのさきつとしより見しもみちの、おかしきやま〳〵はいくつと、手を、ひたをりにかそふれは、

「ひんかしは、しんぼくのさか、くゞり戸の谷かげ。「うなべには、あきつのいはやどのほとり、かうふり山、花折山。「山おくには、きらいち山、なかさとの山、よたき、よこだけ、雄鞍山、大瀧の河のべ、にふないの林、小田山の埜、多岐の澤、きりあけ山のそがひ、みつめない、玖刀自夜万、巳久良揶麻、めやのさは、太秋やま、しらさはの溪、おほじかり山、ふかうらの浦山、をいらせの山河、とこしない、じはきねの麓、おにがみの杜。」

そのとは、いくそはくそならん、あけてつはらには、えこそよみもつくされね。はた、いまたわけも見ぬくまはしらすて、おなしさまにかいもらし、かく見しこのあきのいろの、あたにちりくちなんことのおしけれは、かいあつめて、たゝうかみのあはひにおしもてきて、これにぬりて、そのいろこのいろに似るへう、紙ふたひらみひらにすりて、栲縄のなかくくりかへし、まそかゝみ見まくこゝろの猶あきたらすして、かゝるをさなきすち〳〵をも、つゆはちらはす、あかふる郷のつとにもていなんかし。」

作良かり赤葉かり

作良かり赤葉かり

作良かり赤葉かり

作良かり赤葉かり

作良かり赤葉かり

栖家の山

青森の湊をたちて大濱にいたり、北畠大納言具永卿のむかし語りを聞、寒苗のふる事をおもひ、千本櫻といふ花を見つゝ、地輪を堀つるをかゞなへ、津輕大領馬武がふる事のかうかへ、九十九社、機織の社、青氷の瀧、缶坂の物がたり、大杵根の神籬、斧掛の杜、黄金山の神、小田山のかゞなへ、三葉の松相生のいはれ、後方羊蹄山のまほのものがたり、花山院四位少將忠長卿のもんしやうの事、金光房上人のいはれ、日持上人岩の題目のいはれ、亂のころ瀧本重行の妻家の柱に歌かい記したる話、戰死のなきたまゝつり行ひのむしろに、ふみかき歌よみくはへて、田舍館の柵のあるじ掃部の孀自害せし物語、花少將の源氏物語のそのまき〳〵の名をもて村名さしたまひしことはた、くゑんじ踊唄の唱歌の事、渡嶋津輕津司從七位上をたうはりし諸君鞍男等のありしいにしへもの語、三國傳記に在るてふことにたつさはり、その石の塔をたつねし日記、乳の井の水の色折さして變るものがたり、鬼の齒椎の物語、鬼の頭を伐りたるそ

のつるぎ太刀埋しふる塚のいはれなど、あるは、こがね鳥の事をもむねさかいなしたる冊子なれば、これか名をいはゞ栖家能椰莽(すみかのやま)さやなしてんものか。

青森を出て

大濱十二所權現

南藏法師

卯月ばかり、陸奥のおくの國べは、もはら今を花のまさかりなれば、すゞろに心うかれたち、そことなう見ありきて、夕日花にさしかげろふころ蒼杜のみなとべを出て、卒土か濱傳ひして大濱の里に至り、十二所權現の櫻も見まく、こゝにまうでてぬさとる。此みやしろは、いそのかみふりにしみやところながら、すたれたるを、文祿のむかし北畠大納言源具永卿、ふたゝびおこしたて給ふのよし。うつばり簡に、金光寺持國多門天北斗寺妙見大菩薩建立以後熊野山十二所權現勸請於十彎寺南藏坊時勸進小幡東覺坊、とぞありける。この南藏坊といふすけの事は、出羽、道奥の國にて、わきていへり。所謂難藏はもと幡摩の國書寫山のほとりに、ほくゑ經をたもちたる僧侶にて、熊野に三とせをこもりて、慈尊のいてませる世にあはまくとひたいのりして、みちの奥と、いで羽のあはひなる言兩といふ邊の湖に入にし事は、三國傳記といふふみにつばらにぞ見へたる。やはら此神籬をいてくとて、

みくまのゝうらのはまゆふもゝ重にも千重にもかゝる花のしら雲。

とばかりながめて、神ぬし澤田のもとに宿つく。

十四日。このあたりに名だたる三内の櫻見てんと、つとめて大濱を出て川渡り新田村をへて、石神の村にこゝらの花の木ありて、そこに、ちいさやかの祠ある側に文永の碑あり、こと文字は苔にかいけたりて、それとは、よみもとかれず。みまへにぬかづきて、

石神村文永碑

うごきなきためしにまもれ石神のみがきのさくら風もさはらで。

遠近のやま／＼村／＼里／＼は、紅の雲かあらぬかとうす花櫻の咲わたりたるは、世にたとへつへうかたこそあらね。世の中は名殘なう暮れはてし春の、いまはたこゝにとゝまれるこゝちのせられて、野山のみちのいとおもしろく、かくて三内村に來けり。飯形、譽田のおほん神をあはせまつる社あり。路いさゝか斗行ば向三内、亦の名を小三内ともいふ處あり。こゝにも飯成の神籬ありて社の花高やかに、大三内、小三内も、杜の花なへて世の櫻に似ず。

三内の千本櫻

一もとの木に、一朶三えださゝやかに茂りて、花に花の寄生あるかとこゝく、又たくふかたこそあらね。いとちいさき櫻はひし／＼としげう生ひたちありて、この小櫻にも、小枝毬のごとくさして木ぶりもみなおなし。人にとへば、名におふ三内の千本櫻と申て、亦と外になき櫻木也。卯辰の、世の中凶しかりし年の前までは、三芳野はしらず、ひろき世の中なかにも、かゝるおもしろき花ある處はあらしやと、吾かすむ郷なから、花咲ころはこゝろほこりかな

委斯賀美乃社

文永の碑たてるかゆへに石神のみなやおらん、亦石のかんさねやすし／＼けん、さらに知るてふ人もなし。

（丙）石神なとのやかた〳〵はしめ、（甲）三内、（乙）小三内の櫻まさかりを遠近に見なしたるさましか〳〵。

りしかど、その世のためにたき木にこりて、今は花の木も殘りすくなうなり行てしか、若木も彦生もいと多ければ、十とせをもへたらましかは、むかし春といや榮へなんと、あないせし村長か話るに、此花、あはれ一枝を神の祟りもあらすはといへは、何の祟りあらんかはに、おしけもなう手折くれたり。

一本にこもるちもとのさくらはな手ことのつとに折れとつきせし。

此村の古堰の崩れより、繩形、布形の古き瓦、あるは甕の破れたらんやうの形なせるものを、堀り得しを見き。陶作のこゝに住たらんなといへり。おもふに、人の頭、假面なとのかたちせしものもあり、はた頸鎧(みかへのよろひ)に似たるものあり。これや垂仁帝の御代ならん、君かくろひ給へばこれにしたがひ奉りて、生る身の露とけち行ためしをなげいて、あはれみとゞめたまひ、其人に代るに埴輪(はにわ)てふものを作らしめ給ふとなん。こは、そのはにわ、たてものゝたくひにこそあらめ。此あたりはもとも古キ處也。往かふ豆か坂はまむか坂にて、かの津輕大領馬武なとの栖家しつらんも此近きに在り。こや三内も、むかしは寒苗(さむなへ)の里を、今しかいひつらんかしなと、ゆくりなうおもひわたりしもおかし。浪館といふ村に出つ。遠きむかしは、このあたりまても潮のみち來るといふ。いと大なる八重櫻の、やゝうつろふを見たゝすみて、

面影も里の名におふ花のなみたてらはそてにかけて見なまし。

安田村を過れは、山路　花の多かるかたぞ見へたる。みちのかたはらに大なる黒き石の、みさか、よさか斗なるが生ひ立るに堂をおほひ造りて、是を生出の觀音と唱へ、國札うつとて西の寺めぐりにたぐへて、くにうどの、もはらまつる處なりとか。細越とて、花のとをゝに盛りなる山里のありけり。

生出の觀音

往かひの袖にちらなんやまさくらなとほそ越のみちもせにさく。

高田の村末に出たり。こゝに九十九盛りとて、千町田の面に、培塿とやいふらんものか、ひし〳〵とならびたり。諺に、むかし山姨とて、おくかなき女のありて、麻蒸の浦なる裸嶋のさむけなれば、麻衣を織りきせんとて、うみそをあまた、へそにつくりおきたるか、くゑして多くのつかとはなりぬ。その山嫗は神となりて、いまは機織のみやとは申也と、八十の翁の、をさなき童物語をそしたりける。九十九森はそのむかし、こゝに新墾せしときの、つちかいつかねたるにこそあらめ。機織の社は中に天御中主の神、左にたなはたひめ、右にいさなきの神、此三柱を齋ふ。此みやところの西北のかたなる壟の上に祠ありて、稚產靈神保食神を祀る。里人は祖神堂といひなして、五月五日、近きあたりの人牛馬ひきつれて、こゝにうちむれまうつるなと人の語りぬ。かくて至るに館中野、おなし村なから名を隔ぬ。こゝに

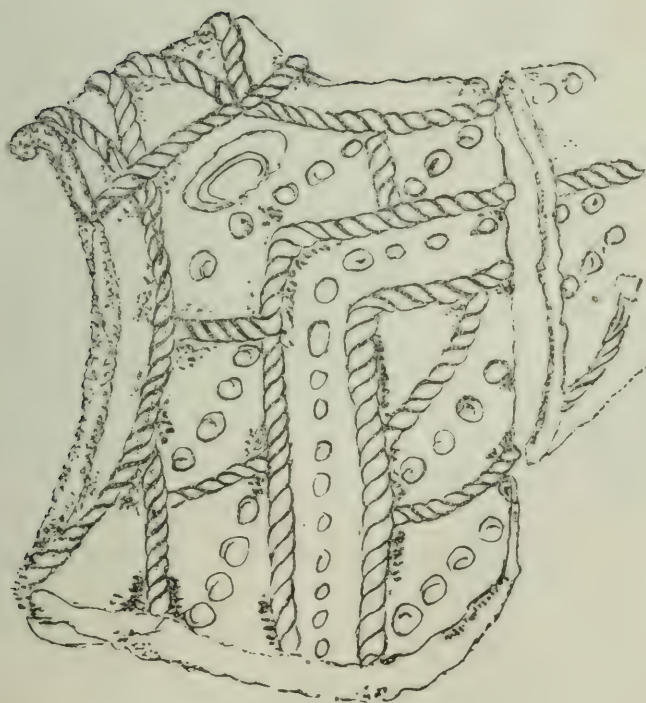
高田村九十九盛の俗說

そうぜん堂

此石、淡海の竹生嶋の外嶋のごとく金輪際より生ひ出たるよしをいひて、しか生出岩の名あり。菩薩にたゞへて生出の觀音といへり。菩薩堂は路の側に草葺の四阿のうちにある也。

（甲）機織の社は（乙）高田邑の近きほとりにあり。畠居、二十折、幡織など、その文字くさ〴〵あり、棚機都賣を祭るゆへやあらん。（丙）祖神はさうせんなり、訛りて出羽陸奥にいへり。祖神は道祖神のはふき詞ながら、しかいひならはしてたゝ馬櫪神のことくおもひ、馬の神ととなへ牛馬のみ曳いのりて、人はいのりせぬことの神とは、ひがこと也。（丁）九十九森の名、出羽の象潟にも、八十八潟九十九杜と唄ひ閙へたり。

寒苗の郷の(甲)飯形の神籬のほとりなる(乙)千穗櫻、或云千本左九良の小枝の形しかり。

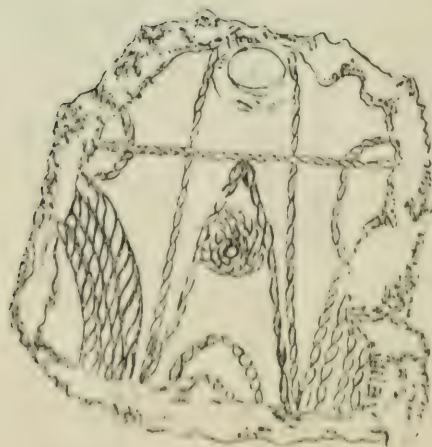
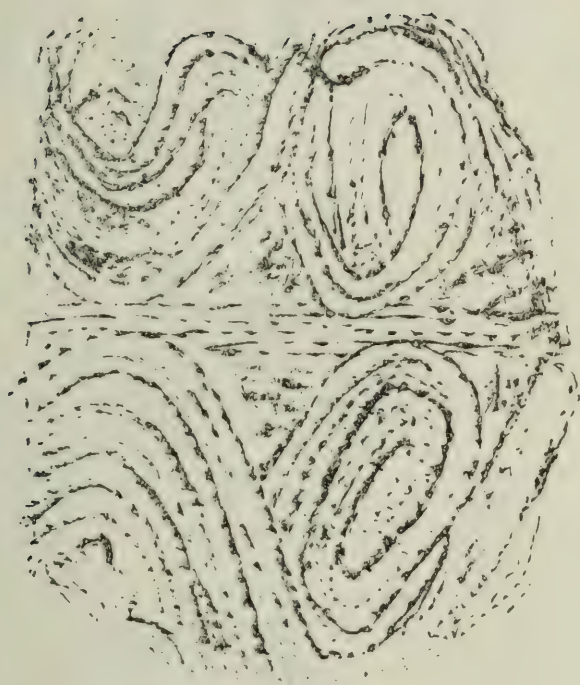
卒堵濱蒼杜に近き三内の村は古名寒苗の里也。此村の渠のほとりより瓦陶のごとなるものを堀り出る、其形は頸鎧のごとし、所謂幃延（よだれかけ）ちふものに似たり。美加幣乃與呂比といひしや、甕甲（みかへのよろひ）ならん。

其一

活目入彦五十狹茅尊の御代ならん、野見宿禰土偶人を制りて殉死に代てこれを埋む、その功を感したまひて土部の姓を賜ふ、今は土師といふ。そのつちひとがたを多氏母乃といふ、埴輪といふ。寒苗の郷に掘り得る中に假面の如きもの出る、これや波邇王ちふものにや。

其二

其三

乳内の觀音堂

横内村

泊る。

十五日。きのふみし機織のかんがきの花のおもしろく、あきたらなく、またも見まくほしうおもひやりて、

青柳のいとくり返したてぬきにはなのにしきをはたをりのみや。

乳内にいたりて、かの圓仁の作らせ給ふ觀世音の堂にまうてぬ。四百とせのむかしは、しら山のみやしろといひて、山に八十一隣姫を齋ひまつりし處ながら、いまは此神を地主の神として、觀世音菩薩はそのころ、槻樹館のあるし隅田の小太郎といふ人、堂を建てをさめられしとなん。こゝを、こがね山の神の社にてもあらんかと、かねて、ひがおもひしたれと、あだことなればかいもらしぬ。此堂にはいくたびとなうまうてしかは、いはれところ〳〵にしるして、こゝには精しからじ。田山村へ行とて花やあらんと尋れは、村屋の軒端かくろふ桃のさかりなるは、桃の源に、人しらぬ世をのがれたらん栖家にひとしく、たきつ流るあら山川のきしべに、いくばくとなう紅ふかう咲たり。牧は高山のそがひに在れと、いはゆる駒の聲聞はかり、いと近し。此山里を出ておなしすちを來て、荒川、八役などの村、妙見の森もよそに、花あるかたをとたどる〳〵分て横内村に宿つく。

十六日。つとめて出つ。壇孫六、その子彈正左衛門の館の跡に朝日山安入寺常福院といふ

あり、むかし玉清水村よりこゝにうつせるといふ。古き阿遮羅尊の前に、あかふる鈴の音聞へて、花かめに八重一重いたく折さして、ぬかづく法師あり。

ふる寺に匂ふあさ田のやまさくら折りて手酬の花のえならぬ。

駒込阿保氏

幸畑を經て駒籠に來りて、神ぬし阿保なにかしのもとに至る。

十七日。あさとく、ふるきところ〳〵を見さぐらんと、桐の澤、今いふ小河澤、この奥に玉清水の村あとのあなたに、横瀧といふなん落たり。そこに横瀧の社とて、濱名妻の神といふを祀る。こは大杵根の神の末社なりしか、元和のころ小河澤にうつしまつりて、今は觀音と唱ふれと、まことは田の神なりとぞ。

十八日。雨もよの空なればとて休らひて、あるしと物語して、けふも阿保の屋戸にくれたり。

駒込川溯上

十九日。この降魔籠河のみなかみに、大瀧とておもしろき處のありと聞て、山賤をあないに憑みて、幸畑の村に渡り川を左にさかのぼれば、左加利山といふ山のこなた澤山藥師といふ岳には、青砥山とて青砥石出る。此石にまじりて、竹玉のごとき石管出る事あり、それ砥り得しとて人のくれたり。馬の神山、天狗森、あるは石家戸とて窟のふたつあり。三角とてよこたふには梨の木多く生たり。堀子山には蝦夷か城のありて、めぐりの堀のあとなど今

大瀧の壯觀

に殘れり。鍋子坂、鴉覗のゆみで方には日會淵、その馬子は大鼻のそびらに入道嶮のおかしと、あない、ゆびさして小峠にのぼる。こゝにも辨慶のちから石のあるにより休らひて、霜松澤といふを遠かたに見やりて大峠も經たり。大瀧もやゝ遠う木のなかに見へたり。柴人の、しるべはかりにふみわけたるみちあり、蛇拔の澤より路の絕へぬれば、木のうれのみよち、くたり得むこともいとかたく、方をさし迷ひたれば、せんすべもなう、谷をへたててぞ見やりたる。瀧は綿などをくり出すかと見へて、みねも尾も霧のみふかく、ちひろの巖にかゝりたり。その高さは三十尋斗と人の話りぬ。うべならん、ふりあふげば、雲さかゝる岩かねより、いまた消へのこる雪のしたゝりに、紅ふかう映山紅さき、岩かねの山さくらも、あやしきまておもしろき太山也。

山かせに瀧のしら泡ふきまよひみねのさくらのちるかあらぬか。

見るかうちに、虹のかゝれるもおかし。

落瀧つけふりとむすひしら雲となびくか上に虹のかけはし。

金守神社

此八重山を分入れば卷返しの飛泉、空瀧、三階なといふ瀑布あり。そこもはる〴〵と分至れは金守の神社のあとあり、杣山賤等は金堀の神といふ。これや、黄金山の神の、ふるきみあとさもおもひ定めてんものか。いで行て見まくさおもへど、いと遠く、みちさへさだかなら

ほとき坂
大杵根神社
極樂寺址か

ねばなど、さらに、あないのさいだちすゝまされば、すべなう、もとこしかたへ皈る。うちむかふ高き嶺より落るをとへば、青凍の瀧といらふ。入道倉のこなた、肌脚か家戸のあなたに小高きところあり、佛坂といふ。これなん保止喜坂なり、その山の姿の缶にぞ似たりける。そこぞ田村麿將軍の齋ひまつりたまひたりし大杵根の神社の舊る跡なる。そも〳〵此御社は左に濱主の神、右に濱名妻の神と申奉る。中のおましは、遠つ祖より神司の家にひめて、佗にゆめ話らざる神にてといへり。はまぬしの神を近き世に毗沙門天と齋ひ、はま名妻の神をも觀世音とぞ唱ふ。中むかし大杵根の社を、野内の浦邊近き吾妻か嶽にうつして吾妻の社とは申しかと、野火かゝりなと今はあらじ。その東が岳に寺の跡と人のいふ處のあり、それぞ、あづまの社の跡也。はた此瓫阪にも、元龜のころほひまでは神の跡とて、その大杵根の社有し處存りしか、うちあばれて、そことしるしもなけんと、阿保氏か物語に聞つ。かくて廣野に休らへば、田代の溫濤に行しといふ人とかたらひつれて皈りて、金守大明神とあかめし處に、いまは藥師佛のおはしぬ。むかしは寺ありし處にや、雨ふり水かさまれるころは、いつも小石に文字のあるか谷川を流れ出る。石經かい埋たるか、くづれ出るにや。うべならん、大樹根の極樂寺といふかありしと行岡の神社の記にもかいのせ聞へしとは、そのところならん。駒籠にやゝ來る。

淤保多藝　大瀧は青森のみなと川、あるはいふ堺川のみなもとに在り、山ふかく巖尖きあら川の水おちて、たきつ流とはなりぬ。こと飛泉もところ〳〵に多し。此山に白獮猴のすめればとて、しら猿の瀧とも狩人のいへり。この白猿をうたんと、いくとせこゝろをつくせども、はやき事鳥の如くいつもねらひはづして、力をよばじと、万多企てふふる獵師の話りに聞たりき。

(甲)缻坂(乙)入道巖壁(丙)肌足箇岩窟(丁)吾妻岳などを見渡したるさま。缻阪は今もはら佛阪と。形はほときに似たる山あり、いにしへ大杵根の神のみやところありしふるあとゝなん。

砥山の斧掛明神

二十日。雨ならんとためらひて、ひるよりたちて、みちはつかばかりくれは砥山てふ村あり、斧掛明神といふ神のおましませり。そのゆへをとへば、斧懸の松とて、みやしろのかたはらにたてり。むかし、杣山賤、材木(みやぎ)こりなんといふとき、まづ斧に、みてぐら取添て拝奉しとなん。

　　花の木をくだすもうしと山賤のとらてやしはし斧懸の松。

こゝに在る磨砺石は、青砥山なる細礪石にもまさりたる龕礪ながら、神のしめたまふところなれば、祟たまふをかしこみ掘とらて、よからぬ砥崎のさかひより掘り得るなど、村長のいへり。ぬかづけば、山祇の神を祀ひまつり奉れり。いにしへ、このあたりはあら磯、入江などにて、そのへた傳ひ往かひしたる處にてやあらん、兵人越(ひやうとこえ)、又いふ、ひやう〳〵越へといふ名も聞へ、あるはこの戸崎につゞきて桑原の村になれば、鯨森といふに稲荷の神籬あり。むかし鯢の寄り來しところに神をいはひまつる、飯形の社これなりといふ。

うしろやち邑

後范邑(うしろやち)（天註——范をヤチとぞよめる、秋田路にて森をガツギとよみ薙をナギとよめり、草薙氏の家古實を傳ふ、その國ぶりの倚あり。ヤチの辭、もと鎌倉詞に谷をヤチといふ、陸奥出羽人、山澤濕池を谷地（ヤチ）といへり。）諏訪の澤に、往南方富の神を齋ひしといふみやごころ、木ふかう、かみさひたり。

蝦夷木館

はた蝦夷木館とて、ゑみしのこゝにすみしといふあとありと人の語る。

槻木館

槻木館といふに至る、往武のむかし、隅田の小太郎なにかしの柵のあとさてあり。

宮田村古寺の俗傳

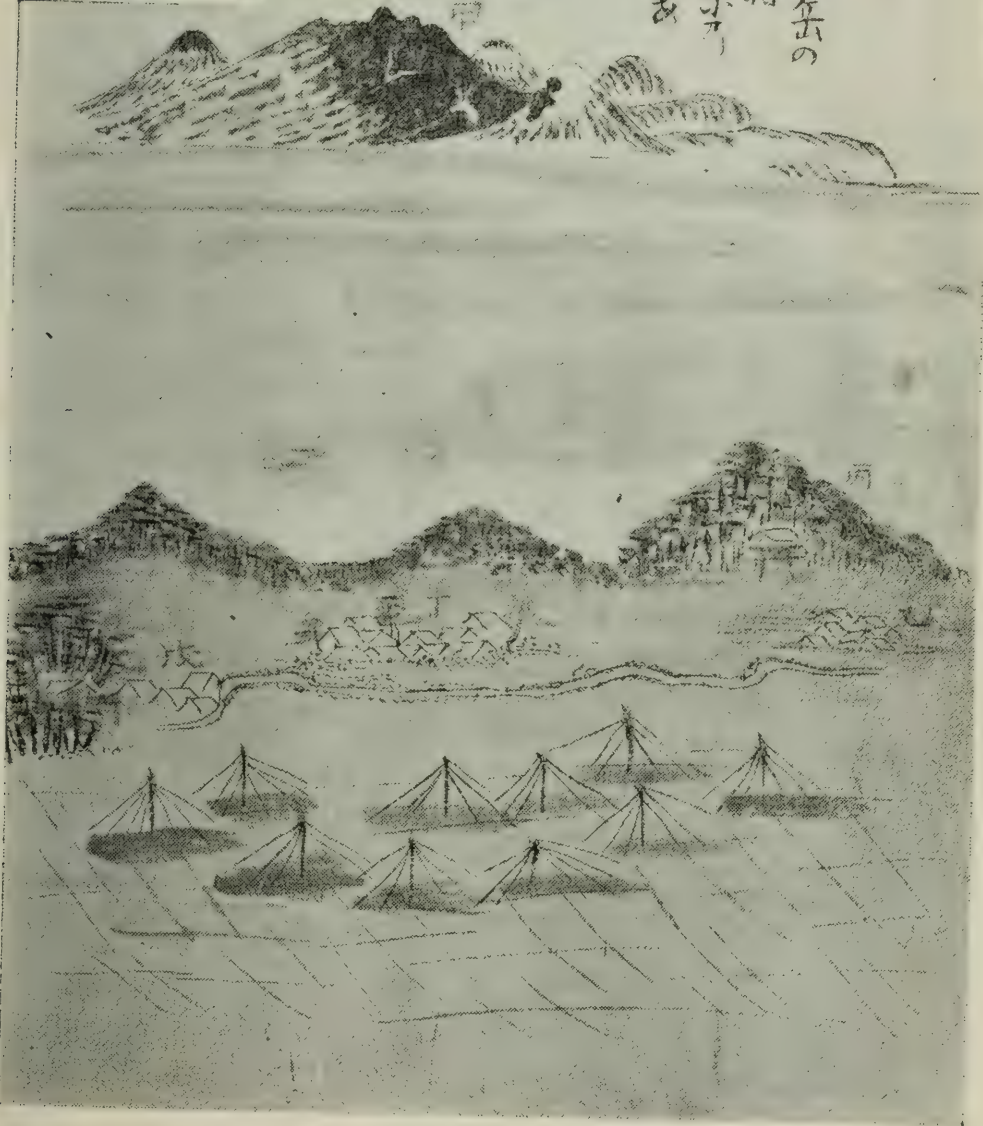
やがて吾妻山の麓なる宮田といふ村に來る、此塚原

のやうなる處に、古る銀杏の木二もとたてり。寺のありしあとゝおほしくて、五百とせより
こなたの石塔婆あまたふしまろび、橋にも渡し、あるはおしたて、あるは埋れたるもありき。
近きころこの畠中より、こゝまでの陶皿あまた掘得しといふ。ふたもゝとせのむかし、此山か
げに大寺のありしが、いつとなううちあばれてけれど、すり、さらにくはふる人もなう、いよ
ゝ、きつね、たぬきのふせどとはなりぬ。そのころ、すきやうしありく法師、此寺をたづね來
て里人にとふ。此あたりに寺やあらんと、いらへていふ、その寺なん木ふかき山本にさふら
へと、あやしきものゝ寺に籠れりとて、ひたふるにおもひきつめたる僧すら、えすみつかず
さふらふ。僧の云、われ、ゆく／＼其寺おこしたてんのこゝろさしあり、はや日もかたふけ
は、まづこよひは、その、あれ寺に一夜をあかしてんといふ。人こそりてとゝむれと、世を捨
てなき身もおなじ、ものにとらるゝともいかてかいとひ侍らんとて、かつ山もとに至れり。
芒、高かや生ひ、しけりとちたる女蘿（つた）、葎のとほそより、煙の細く立のほることのあやし。こ
は相やとりの旅人やあらんと、こはづくりて入れは、小鍋に飯たき板敷にさしおろしたり。
やはら紅の袴着たる童（ちこ）の、右に菜刀をもち左に蔓菁（あをな）を握りて、庭のたか草をふみしたき來て
此法師の前に手をついて、よくこそ入らせて給ひつれとて、青菜をしるくさとして、炊たる
飯調て此僧にすゝむ。僧あやしみながら、ほしさに、たうひをはりてけれは日はくれたり。

巨賀左波

小河澤の堰神に廿八箇村
の源に在り今ハ觀音を
置り元和のむかしならん
千葉左京之亮といふ人大
柞根の神の末社を此處
にうつせりといふ高岨に
登れバ岩木山耕田の嶽
弓手馬手に殘雪まだ
らにぞ見やられたる

巨賀左波　小河澤の堰神に廿八箇村堰の源に在り、今は觀音を置り。元和のむかしならん、千葉左京之亮といふ人大柞根の神の末社を此處にうつせりといふ。高岨に登れば（**甲**）岩木山（**乙**）耕田の嶽、弓手馬手に殘雪まだらにぞ見やられたる。

(甲)耕田山亦云八耕田岳の残雪に種蒔老翁(おんこ)、蟹の鋏、あるはいふ、かにこのはさみ、牛の首のあらはれ、あるは(乙)戸山村(丙)斧掛の社(丁)戸崎村、(戊)桑原村、又(己)鯨森の社のほとりを、苗代もゆるのころ見しさましかく。

さそ、つかれさふらひつらんとて、いときよげに、なこやかなるあつふすまものして、方丈近くふさしむ。法師はいまた、いねもつかず、此兒は、たゞうごにはあらじとおき出てさしのそけば、さうじの中に火をあか〳〵と照らして、もの見たるさまなり。なにならんとおもへば、手箱のうちよりふみあまたとうだして、くり返してはとりすて、又とうだして見る〳〵うちゑみ、あるはえんじ、あるはうちなげき、よゝとぞなきぬ。かくて秋の夜も更行あまり、法師は、ふしたるさましで佛の御前にいたり、しのひやかに、みずきやうしたりけるに、さうし、けはなし、かのちご、花の面影にひきかへて、らくわん、あすらの面のごとく、身のたけはなゝさか斗になりて、お僧やらじと、人なきふすまを、かいいたきて去りぬ。はや、ひまもしら〳〵と夜は明たり。僧侶聲たかう尙みときやうして、立はやとおもふをりしも、ちご、なき出て飯炊ぬ。柴折くべて火の高う燃たる爐のもとに至れば、ちご、この僧に手をつきていふ。よべは、いとはつかしきふるまひを旅のお僧には見せ參らせて、めいほくもあらじとうちわひたるを聞て、法師、なにおほす、旅つかれに、ふしにふして、なに事かありし、露も物おほへさふらはしといへど、いな、さにはあらし、つゝましといひてうちわひ、ものはづるかほなり。僧の云、われ、そこに願ひあり、うけひき給ひなんや。わ僧は、いかなる仰ごとのさふらふとも、などやわそむき侍らん。さらは、そこのひめもたる玉手箱、しばしはわれに見せ

深澤常逢翁邂逅

たまひてよといふ。ちごこれを聞おごろいて、わがいのちにかけてたのしともたる此笛を、しばしとて、いかでかお僧の手に渡しさふらはん、是斗はといふ。たゞしばしと、せちに丐とりひもとき、懸想書なごりなう、もへたつ火の中にぞ、うちくべたる。ちご、はと、うちおごろいて、かいけちてうせぬ。寺のしりなるつかはらに、草の、ふみかたふきたるをしるへとして、そのちごの塚ならんとおほしきに、經よみとふらひて、僧は皈りきとなん語り傳ふ。かくて野内に出て、こよひは柿崎のやごにいねて、つとめて又青森にいたる。

廿八日。善鵆の社のかみぬし柿崎のやごに、會津やまの麓にすめる深澤常逢の翁、きのふこゝに來るとて、ふみもてとへり。この翁は神のをしへをふかくまもり、武藏にいたり吉川の家にまねひ、國めぐりして飼飯の海に渡りて、松前の嶼の福山につきて、ねもころになつさひ、むつひて、別れたるとし月を、こなたに人の渡りくるごとに、ふみとも、人傳にも、津苅路に渡りて、ふる郷にいなんそのをりしも、かならず行めぐり逢て、ふたゝび、ともなひ語りなぐさまん、まちねなごありしが、まことにしかり。こゝに待得たる事のうれしさに、とくとへば、ことし、やそまり五とかいふ。かく、さしたかき人の、さらにぼけ／＼しきふるまひはつゆもあらで、をきなびたるともおもほへねど、たゞ雪をいたゞくこそ、まほのすがたならめ。たまくしげふたゝびのたいめ、あなうれしとちうれしとて、夜のうち更るまでものかた

（甲）宮田村の川のべ桃そのゝほとりより（乙）吾妻か嶽を野内の（丙）浦仄に見へ（丁）山王の山里のあたりは、もはら菜の花まさかりのころ見渡したるさま。

甲麻虫の浦を遠かたに見やり
みやたのほとり乙大盛山
野内の浦回なる丙貴船山
丁笠間山戊冠山の躑躅の花
盛なる見やりたる

（甲）麻虫の浦を遠かたに見やり、みやたのほとり（乙）大盛山、野内の浦回なる（丙）貴船山（丁）笠間山（戊）冠山の躑躅の花盛なる見やりたる。

あらはゞき明神

りして、翁、ともしびかゝげ、ふみでさしぬらして、

　たつね得しかひも有磯の濱衢ともにかたらふ夜牛の樂しさ。

とかい聞へたるに返し。

　まち得てしかひもありそのはま千鳥友にことなみよるの樂しさ。

この夜明なは、つとめてこゝを出たち、うちひさす都にのほりて、大伴のみつもゝとせも命いきて、たのしかるべき世を經め。とく〳〵、とふらひ來りてよとて別れたり。

五月朔日のあした、霍公鳥きかはやと堺川を橋より渡りて、茶亭町をめてに松森のやかたにいと近う、皂莢子のとしふる大木の、ふせるかことき杜のうちに祠あり。むかし源九郎義經のはきまきをかけて、神とは齋ひ奉れりといふ。こは松前の西なる磯邊に小山權現とて、小山判官のかたはゞきを、かく、神といはひまつるのたぐひにひとし。この松杜のほとりなるみやところに、今は松尾の神をうつし奉れど、なへて麁脛膝明神と申といふ。あらはゝきの神は血鹿の浦の神籬の攝社、あるは、吾ふる郷の刀鹿の峯大汝の命の神社の側にも、あらはゞきの神の祠あり、おなし神にや。幣とれば、いまだ散殘る櫻の梢の遠う見へたりしかは、

　廣前に落りてつもれる花あらははきなきよめそ神のみやつこ。

秣刈る雄の近う寄り來て、かゝるちいさき堂ながら判官殿のはゞきををさめて、あらはゞき

いかしまの舊蹟か

の杜とも又は志利弊通の林とも申て、たふとき神にてましますと語る聲のしたに、時鳥のひたふるになきたり。こはおかし、後方羊蹄は岩樹嶺ならんと、すでに人もいひ吾もおもひしかと、こゝの浦輪に、うしろかたといへる名も聞へ、はた肉入籠は今綴子とて、近隣の國斷田路に在るをおもへば、遠嶋渡りして、松前の奥がおくなる海邊たにシリベツの嶽とおなじ名のありとて、いかでか、そこに、まんごころをたててみやおき給はん、今すら人のすまぬおもふべし。しりべし、しりべつ、詞通ひ、シリヘツもと蝦夷の辭にして、志利とは崎をいひ弊通とは河をさしていふとなん。さりければ、河崎はいづこにてまれ、みなシリベツとやいへらんかし、此みやしろにこの名聞へたるこそ、そのいにしへの跡とおもはるれ。このあたりにいやたかけむ山は弓手に耕田、妻手に岩樹根は富士の面影見せて、つとそひへたちていちしろく、もとも丫角のごとく、その形は羊蹄ともいはゞいひてんものか。草に羊蹄のあるも、それかひつめに似たれば、しかいふことなるに、これをしりべし菜といふなどいへる人あり、ひかことにてやあらんかし。青森の湊に近き妙見の林とて、としふる木々ともの、しげり立たるところあり。その堂のほとりに以賀志乃社とてあとばかりあり。神ぬし阿保なにがしの云、さらに何神と、とふ人も知れる人もゆめ侍らねと、この社のふるき圖かいたるを吾家に傳へふみにも記して、田村將軍を齋ひ祭るとも、亦蝦夷の靈を祀りたるともいひ傳へ侍る

と。これすなはち、膽鹿島等が家居せしあとなどを、いがしの社といひつたふたるにや。又平内（ひらない）の小湊より近き田澤の椿山のほとりの畑の名に、ジャグチタエッなど呼ぶ處あり。此あたりに問菟（トヒウ）の蝦夷や住たりけん、菟穗名や居たらん。悉賀志の社は、いがしまかふるつかにやあらんかと、ひとりいにしへを偲ふ。（天註――阿陪臣甫集飽田渟代二郡蝦夷二百四十一人其虜三十一人津輕蝦夷一百十二人其虜四人膽振鉏蝦夷二十人於一所而大饗賜祿即以船一隻與五色綵帛祭彼地神至肉入籠時問菟蝦夷膽鹿嶋菟穗名二人進曰可以後方羊蹄爲政所焉隨膽鹿嶋等語遂置郡領而歸。右見二于齊明紀一。志利幣斯、志利幣智、相かよへり、蝦夷も東西に依て言語大に異り、エゾ人はしりべちといひ、しりべつといふ、舌人はもはらシリベツといへり。）

子規なれもそれぞとしりへしのむかしも遠くおもひこそやれ。

こゝをいさゝか西の方へ分れば太郎次郎が館とて、そのはらからやこゝに栖家したりけん。柵は白髭水（天註――むかし八束の白髭ある翁の幣うちふりて、津浪よりこん、山より水の涌なん、人もあまたほろびうせなんとふれ、いづことなうありきしが、ほどなう洪水して多くの人ほろび山も川となりし處あり。それを、しらひげ水と今もしかいへり。）といふにおしなかされて、そのあたりの人もふる館（たて）といふ所にうつりて、その村のみ今も尙あり。行ほどもあらで松森、古館のやかたもすぎて、降魔籠（こまごめ）（天註――降魔籠或は駒籠などいへりむかしは此村宮崎といひしとなん。）のやかた近き野に、ひきはなちたる馬どもの、いくらともなう、たかくさの中にかくろふを見やりて、

いはへすはあさるもしらしこまこめていやしけりたる野路の夏艸。

阿保安澄の屋戸に至る。ほどもなう雨ふりぬ。

八甲田山の躑躅

小田の黄金山遺跡か

二日。空のくもりたり、雨ならん、けふ斗はと、あるしにとゞめられてかたらひ外に出れは、この宮崎の村の家ごとに、赤白黄色なる筒自の軒にひとしう高く、花は、世にいふこまつゝじと名だゝるものに似て咲に咲たるは、耕田山の峽より、十とせのむかし根こし來て、誰か宿にもかく、しけりあひたりといふ。やの童走り出て、黄躑躅のさを〳〵に眞盛なるを折來て、これ見よといへれはうち見つゝ、

御代に咲つつじの色よやきかねのこかねの花をみちのくの山。

この山をなから斗登りて、ひんかし面ならん、いつの世に佃りたらんか小田のあとあり。麓に溫泉あり、田代の湯といふ。耕田山は小田なる山にて、黄金山の神の御座ならんとかねておもひ、今もしか、こがねやあらん。山はいや高く、さらにのほることのやすからじ。聖武帝の御代天平廿一年の二月のころ、みちのくよりはしめて、くだらの敬福こがねをほりて奉る。みかどこれを叡感ましまして、卯月にとしの名を天平感寶とつけ給ひしかと、後に亦天平勝寶とあらためさせ給ふ。中納言家持のなかめより、みちのく山にこがね花さくてふことろをもて、山を金花山なとはいへと、小田なる嶋とも、みちのく嶋とも聞へね。此事、ことふみに、つばらにのせて話る。黄金九百兩をたてまつりしそのいさおしとて、陸奥國守敬福に銀青光太夫の官を授たまふ。水鏡曰、　てんひやう十四年十一月に、みちのくにあかき雪ふ

黄金鳥、栖家の山由來

り侍りき。おなしき二十年正月、陸奥より、こかね九百兩をたてまつれりき。日本にこがねいでくること、これよりはしまれりき。これによて四月十九日、年號を天平感寶元年とかへられにき。されともこのとしのな、やがて又かはりにしかと、年代記なとにはいり侍らさるなりなと聞へたり。此あたりの近き處に黄金濱、今かねばまといふ山郷あり、こかねざきといふ山里あり。又國産（くにつもの）の鮭の大贄、大口魚（たら）のおほにへに黄金色（こがねはだ）てふ名あり、女郎花をさしてこがねはなといふ里もありき。この小田なる山より、とや鷹や奉りたらん、大納言政賴卿、鈴付の尾羽ふたひらをきり、これに、くゞゐのきみしらすの羽を繼て臂（ただむき）にして來ませり。是を帝あやしげにうち見たまひて、みけしきよからさりけれは、政賴、ひさまついていへらく、鷹は雪のふるさとをのみ戀したふ思ひあれば、越のしら雪見おさろきて、そなたにや、こゝろ翦れ行さふらはむのためしあれば、汝（な）れが身の尾羽なん雪の色と見なしたらましかは、そり行こゝろも、うちなごみさふらはんとおもふこゝろほりして、しかは、かくそ、あらぬためしをさふらひつる。つみゆるしたうはりてと、ぬかついて奉る。古歌「二月の尾上の雪はしらねともこゝろまかせにゆるさしめ君。やはら、たばなしたりけるとき、みくまゝ近う、背をつめて座りしてうかば、古歌「みちのくの栖家の山のこかね鳥かくとしらふの名に殘る雪。御感なのめならず、その鷹をいひて黄金鳥（こがねとり）、山を、すみかの山とのたまひしとか。こは、この

種蒔老翁
蟹子の鋏
牛のくび

八耕田山と

宮崎を出て

山におへる事なれば思ひ出たり。峯に種蒔老翁(をつこ)、蟹子のはさみ、牛(うし)の頭(くび)とて、雪もやゝ嶽にけち行、苗代まくころほひは、たねまきをつこといふが人の立る姿してそ見へたる。かにこの鋏に田をかいならし、うしのくびに早苗採り植る。それ〳〵のころ、それ〳〵の形そあらはるゝ。雪は、みな月のなから斗になごりなうけちぬ、いはきねもしかり。大嶽、小嶽、よこたゝらなどの八の峯あり、さりければ、ところ人は、山をもはら八耕田(やつこうだ)とそいへる。又くさ〳〵の事はあれと、ことふみにゆづりてこゝにのせず。

三日。宮崎を立つるに、遠う藤の盛りなるはいづれの村にやと人にとへば、村は筒井、花は桐にてといらへせり。

　藤の枝の花にまかひて咲桐のかゝるや里の筒井なるらむ。

桑畑の岡越れば、山路ながら長濱といふ廣野あり、むかしは浪(なみ)のうちたらんか。叢に、藤のはひまつはりて多し。

　海遠く潮のみちひはなかはまの野邊によせてをかゝるふちなみ。

大屋澤のやかたを經て四ッ石といふやかたあり、此四ッ石を神とし、村の名もしかり。その石神に鷄栖いやたてり。

　杜のうちにたてる鳥居も二三四以志神になびくおほぬさ。

（乙）桑畠を今いふ幸畑、小田山を今はいふ耕田山、こゝをなかからによぢて田代の温濤に行路あり。（甲）宮崎を駒籠といふ。高からず低からず獨立する山を（丙）毛也といひ、母宇夜などいふ。モヤは靄をさしていふ方言也、この山の名出羽、陸奥にいと多く、母爺、雲谷、母谷など書なせり。谷てふ谷のおやにして、その母谷こそうべならめ、ひとり笑みせられたり。此母谷のなからに牧あり、此ゆかりもて駒籠の名やあらん、亦そこにもむかし、うまきのありし名ともにや。

耕田の岳ハ東北ハ津苅ニ亘リ又
西南ハ南部ニそ西十灣の湖
毛布の郡ニ亘れり

耕田の岳は東北は津苅に亘りぬ、西南は南部にて、西、十灣(こわだ)の湖、毛布の郡に亘れり。山は厚く高し。八のみねの大嶽は不盡の劍か峯にひとしう秀たり。種蒔翁、蟹鋏(かにはさみ)、牛首(うしくび)などいふ黎民の諺は、富士の岳の布雪農夫(をごこ)と雪あらはるゝたとへにひとしう、いづこも高山に、しかいふためしあり。

横内、入内を過ぐ

雄別内の相生松

此あたりはみな見しところなれば、こころいそぎて精しからじ。横内に來れば荒川の橋落たりとて、今掛かふれば渡らんことかたく、入内にかゝり、葵長根より一の亘りを越なんとて合子澤といふ山里をゆけば、弓手に雲谷峠いと近う、牧のあら垣なども見やられたり。やはら野木といふやかたに出たり。こゝをむかしは柴橋といひしなと村長に語る。不如皈のいと多き山路也。

のき近くかゝるしばはししは〱にむかしかたらふ山ほとゝぎす。

杉の澤、瀧の澤などのうまきを遠かたに見やり、又田山のうまきも見やりて、金濱村をへて雄別内につきぬ。この村長がやどに在る一もとの松は、玉くしげふたもとの雌雄の枝さし分れて、葉は二葉なから、去年より三葉と化りつるもあやし。こは近きころ、山に見つけて堀うつし植たり、世にもともまれなる松とて、あるじ、ほこりかに語る。

相生の松をためしにさきくさのみつはよつはに末や榮ん。

と書て家の主にあたへ、こゝより荒川を渡らんに水いと深ければ、すべなう、かねばまに皈り來てこゝに宿つく。

四日。上野といふ處より上牛館邑をへて、赤河の渡りして下の牛館も過て、あら川のきしべつたひに妙見の林木深く、わけ入らんかたもしらず。いや喬き木々のうれより、白紫の色を

膽鹿島の社
北斗寺址
古面七面

雉へて、老たる藤のいたくかゝりたるは、いひしらすおもしろく、田の中に入りてふりあふき、しはし、みたゝすみて、

咲かゝる花のしら雲むらさきの雲もみそらになひく藤か枝。

かつ至りてみまへになれは、堂は艮にむけて、大なる七葉樹の下に作れり、坤に荒川の水流て、いと涼しう。かの膽鹿嶋の社ありつるあとをたどり、正徳四年とかいなしたる石の火ともしにかいつく。

北斗さすみやゐさためてあまつ星のうこきなき世を尙まもるらし。

そのいにしへは、北斗寺といふ天台の流ありしとか。神主阿保なにかしがもとに、世々歷たる獅子頭あり、はた、古き假面の七をもてを藏む。神ぬし安政の云、田村麿いくさ君として軍いたして、あら蝦夷人をおびやかさんと、あまたのつはものらが着ける面なりとも、北斗七星になすらへて神事の舞せし、その七面ともむかしは十二面ありたりしとも、此面を人に見すましとて、上祖より、からうづの內に深くひめ藏して、さらに見しことのなけんと語りぬ。安政を別て、谷川に木のよこたふを橋と渉せたるを踏んで、入內にいかんにはや日のくら／＼になれば、荒川の村に來て宿かりつ。

五日。つとめて、けふは田山の觀音菩薩の杜に、藥かりしていなんとて出たつ。みちのへの

栖家の山

妙見の社の杜紫藤
白藤叢雑りなるは
往復の道あることを
路あり足亘しなる
きぬ志ち

妙見の社の杜、紫藤白藤の發雑りたるを、往復の道ある、こと路より見亙したるさましか〳〵。

井堰のさうぶを手折、笠にとりさして、行〳〵おもひつゞきたり。

　涼しさよ菅の小笠の軒はふく風にあやめの匂ふ朝戸出。

ふたゝび。

　あやめさす眞菅の小笠露涼し生ひ交りたるむかし見るかに。

入内村にて端午の節句

あな、はかなのくちすさひかなと、ひとりうちゑみて入内村長か門を過るを、あるじ、とに出て、けふいつこへか行なん、いさ〳〵とて、河鱒、手菜の肴もとめて杯參らすとて、まつ、しほで、山蘋などいだして、耳かくためしして盞とり、こよひはこゝにとて、あるじ、とゞめられたり。此とし生れたる馬どもあまたひき連れて、宮參りとて、けふなんこの杜の地主の神にまうてて、くびにまもり札掛て皈る。

浪岡の競馬

六日。山路を出て王餘魚澤を經て、行岡に來て比良野なにかしをとへば、きのふはこゝに競馬のありて、くろ、あかのその方こそわが手、村々のあら雄らかあら駒に荷鞍おき、あるは裸背に乘て、命もしらず飛めくる、なか〳〵の見もの也といへり。こゝに賀茂の神籬をうつし祭り、うべも、むかし北畠顯家卿の末葉にて行岡の御所とて、こゝに、門ひろう榮へ給ひたりし世そしのはれたる。

八幡宮緣起

七日。こゝにおましますやはたのみやしろにまうてぬれは、かみぬし、ねもころにものう

ち話りて、神殿(ほくら)の御戸おしあけて、内にひめたるひとまきをとうだして、これなん花少將の
おほん筆の跡とて、ひもといてひらきぬ。

行岡八幡宮緣起　　夫奥州津輕荒磯郷行岳如意山八幡宮者自神武天皇五十代帝桓武天皇御
宇延暦十二年三月上旬坂上田村丸建立也焉風聞於延暦年中東夷　發東北狄起北將邊人幾許
不　王法恣奪取天下公物乎因茲今上憂自古遺諸氏將令罰其自辛　方今田村丸當其任耶誠是
磨智而謀果而慧外示俗風內淳直道文武二道之英雄也是故授斧節於龍顏率數萬軍兵雖趣陸府
八狄雲集七戎霧合不知東西于時奉勸請王城鎮守八幡大菩薩造立社頭致勅命無私旨祈誓然則
毛夷蟻陣一把草羽狄猿營牢掬塵也依之爾於後代爲鎮夷狄猛虎所々建立堂舍佛閣先當社八幡
宮都保石文寺妙見堂北斗寺羽黑權現猿賀山森山滿福寺藤崎奥福寺國分寺柏木郷廣福寺大欄
根極樂寺四所靈驗等其外田村丸建立之寺社都合百八箇所也惣而津輕六郡中在家之數廿四萬
家有之云々復多爲寺社之所領者歟若至後代當社欲破壞之時加修理者體練令則壽堅石者却無
爲垂拱等北辰之天長無事明哉作南嶽之地久君臣調和子孫繁榮八幡大菩薩亦如影隨形於二六
時中可守護信心輩更不可有疑焉　　于時長祿三年八月十五日記之

右一卷依經星霜楮紙逮破壞故依　大守信牧公之競望高野山沙門覺應法印補焉

花山院四位少將忠長書之

こそありける。亦ある人の書そふるふみ云、　花山君正筆無疑といへとも、文章卑劣前後の相違多し。是又高野沙門覺應なるもの不明にして、前後を不考俗説を記するものならん。花山君は、法印覺應か文義の非なるを知りたまふといへとも、太守の御所望に依て筆を執給ふものならん故、跋にその旨を擧て文義を是非し給ふはすと見へたり。

棟札　維時寛永八己巳年　秋七月圓滿珠日

表

聖主天中天　　大行事大梵天王

伽陵頻伽聲　　諸行事觀自在𦬇　大工藤□新九郎

碑文師文珠師利

于時

慶長十九甲寅年

奥州津輕田舍郡波岡郷八幡宮如意山寶明院者

桓武天皇御願勅使坂上宿禰田村丸延暦十二癸酉三月

上旬建立並從爾以來造興雖逮數度朽破時至奉

再興大檀那津輕大守藤原朝臣信枚建立也

鎭納師彌勒菩薩

愈悠衆生者　　刑罰師大勢至𦬇　六月上旬吉日　鍛冶平田道貞吉房

我等今敬禮　　奉茅屋行普賢𦬇

裡　行岳荒磯八幡宮者延暦十二年從建立到慶長十九甲寅年造營凡八百二十年歟

齋夜のふりかへ

玉澤の玉石

水木の便り

この社のかみわざは葉月の十五日なり。月まつ宵は齋夜とて、わきてにぎはゝしう。こゝにまうづるに男たらんものは、みな、ひざふりの太刀を佩び、あるはたづさへて、これ易へませよ、代へ申べしとて、何村の誰れともしらずて、ふりかへといふことをせり。此夜かくなんすれば、かならず名ある、かねよきたちがたなを得ることあれば、こゝらの人の群とよめき、物あらかひのことなりしかど、卯辰のやはしき世より此事絶たりしを、ふたゝびおこして又このごろありきなと語るは、太宰府の宇曾代へてふ事に似たり。暮て平野がもとに至る。

九日。きのふは風のこゝちせしかどけふはよげなれば、玉澤といふ、近き處に石ひろはんとて、あるじにいざなはれて、大釋迦といへる村なる長がやとのしりよりしばしへて、柳淸といふにわけ入て檜木澤、瀧の澤、宮内の村、蓑が澤、水無といふ處をからくして行は、たつよきこなたは鍋倉といふ處に、その母石のなからは埋れて、白玉のごとき小石を生みつるがありといへど、谷ふかう木々おほひふたがりて、十とせのこなたは、山賤すら行かよふみちのあらぬなど草苅り男のかたれば、そこにえいかで、

　　ひろはねは光もかひも夏木立玉てふ澤に玉はあれども

と朽木にかいて、くら〳〵になりて浪岡に皈る。

十日。學長館に人の行とてことつてせしかば、水木のやかたよりふみにこめて、　いく夜し

もまつかひありてほとゝぎす百千返なくこゑをこそきけ、とて、毛内茂肅の翁の聞へしに、

　末しらぬ空にまよひてほとゝきす見し月影をしたひてそなく。

齋藤矩房、やまうをこたりて毛內の屋戶に來けりといふふみあれば、うち見つゝ行おくに、かくぞ聞へたる。　たつぬべきかたも夏野の草のはらそよふく風の便りうれしき。此歌の返し。

　うれしさよみちもなつ野のくさのはらわくれは人のたよりをぞきく。

十一日。夜邊よりの雨いやふるに、つとめて水木のやかたにいかんとためらふをりしも、中野の村をさ長谷川か、つねに心の佛をみてんさ、しかすがにこゝろさせば、たよりに一筆加かいて、

中野の長谷川氏

　五月雨や一圓相も白衣かゞり。

と、うち戲れ句して贈れば、木のしたやみに放つ鐵牛、といふ和句してけるも、おかしかりき。

十二日。人々にいさなはれて、小峠てふ處行とて中野村を通る。いとながき村なかの屋の棟に、陶の獅子頭ひとつを、やつまのかたへ居たり。そのゆへいかにともしらず、むかしよりかくぞしたりけるとなん。みちのく人は獅子かしらを、ごんげんさまと、なへてとなへり。

屋の棟に獅子頭

屋のむねのぐしてふところに、くれとて、つちくれ、芝艸の生ひしを、いづこにてもひし〳〵とふせけるならはしながら、行岡(なみをか)中野の神のきらひ給ふとて、ゆめ、せざりけるなど語りもて、西光庵のほとりを過る。むかし金光上人すきやうのをりしも、まさしき夢のさとしありて、外か濱なる蓬田のやかたの小川のうちより、あみだほとけをぞ得給ひける。そのみかたしろ、うち空しくしてものありて、ふりうごかせば音せり。佛のおりつる流をあみだ河とて尙あり。上人は、この中野村にをはりをとり給へり。寺を遍照山西光寺といひしを正保三年弘前にうつして、行岡山西光寺とぞいへる。そこに金光房の墓あれど、まことにはこの村なる西光庵のしりなる岡邊にぞ在ける。あるはいひ傳ふ、金光房上人のをはりをとり給ひしとし月の、さたかならじといへり。さりけれど仙臺に近き栗原の郡眞似牛村にて、建暦二年九月廿四日に遷化し給ふよしもいひ、その寺は石垣箱根山往生寺とそいふなると、かの寺の僧はいへり。いづらをいづらとは、まさに定めなん。金光房に、法然上人のたまはりたるあみだほとけは、そのむかし行岡の中野村に在りたりしを人々の手に亘りおはして、仲村といふ處より、すきやう者の法師の得て藤崎にもり行て、その里に佛刹を建て金光山源空寺といふ、今尙ありけり。かくて唐土(もろこし)といふ小山の麓を近く行に、一聲二聲時鳥の音信たり。

日のもとに聞もめつらし百千返なけもろこしの山ほとゝぎす。

日持上人の題目岩

懸想の占ひ

日持上人遺蹟

坐頭石　盲巫女石

本郷といふ村の山深く分入て、はる〳〵と長井坂の不動の森を馬手になして、寺跡といふ處の下つかたに霰水晶といふ舍利眞砂のこごきを拾ふ。傳へ聞、蓮華阿闍梨こゝに三とせおはして、かた皿の石の面に七字をかい給ふを、後の世に（日蓮上人弘安のころほひならん、上行付屬の法門を弘めんがために六萬恒河沙のけんぞくになすらへて、まさしき本弟子六人を定めさせたまふ。蓮華阿闍梨日持、伊預公日頂、佐渡公日向、白蓮阿闍梨日興、大國アジャリ日朗、辨アジャリ日照、右六人者本弟子也、仍爲向後所定如件。弘安五年十月八日、富士大石寺日興上人筆をとれりとなん）きたみてしかり。苺の深うむして、さしの名は、さたかにもよみさかれさりき。これにさゝやかの鳥居を立るに、人ぬかづけり。ぬき、笠木ともいはす小石をひし〳〵と投上たるは、けさう人をうらひして、かゝる尊き處とさへいへば石を投て、おもふ念ひをこゝろみる也。このなゝもしの岩の上に、天燈のくたり夜ことに照すなど、あないのふりあふきて語る。此山路、むかしは鎌倉へ通ふ往復のすぢにて、うべも阿闍梨日持上人こゝを經て、外か濱の山崎の浦といふところにて、小石にほくゑ經を書埋め堆したまひたりしを、今ほりあばきてひろふ人、ひめ持て貨とせり。かくて上人嶋渡りして、ひろめ刈る紫苔の浦の白石といふ處に庵むすひて行ひ、後は、もろこし船にしるべもとめて遠う海を渉りて、釜山浦につき給ふとなん。こゝを小峠といひ、大峠やいづこならん。黑石の鄕も近からん、黑森、萱黑杜なといふ、ぬる溫湯のほとりの山なん、いと近となりにならひて見ゆ。尾越、嶺越しつゝ、薦槌山を過て（巨母通地山は十三（とさ）の湊近く龍飛の沼のほとりに在り。タツヒの沼あり、タツヒの浦あり、その處大に隔たり。タツヒもと蝦夷辭にして、腫をなす病の名なり、浪の立上るよりいふ浦の名にや）村あり、坐頭

北畠の三家老

浪岡舘

七平山

源常林

石、盲巫女石とて、この妹背の盲人のふる塚あり。これに山賊らが柴とり、つま木こり歸る山つとに、妻戸の木といふもの、又ことこ木にても杖に折り來て、一ッの葉ともに手向しけるためしとなん。ほい〳〵岩とて鶺鴒石あり、片皿の小松原、田の畔なとに立て、ほいと呼ば、ほいと應ふるによて、しかいふ。相澤といふ山里を經て源常林に至る。北畠中納言信敬卿のおはしませしは、五本松村の加茂のかんやしろのほとりに、北の御所、南の御所とて、わはら榮へ給ひし世のむかし語あり。その君の三家老とて原子、源常、小和淸水。原兒藤兵左衞門は原子村に居り、强淸水刑部は美人川のほとりにすめり。はた强淸水桂林とて、いとよきかなたくみ、そのころありて、鑓をもはらむねと鍛ぬ。それを浪岡舘とて竹の葉の形したるが、今も殘れるを、人の家の貨とそせりける。こゝに蝦夷塚といふあり、七平山近し。明也「なゝひらや、八坂さかなかたつときは、淺葱はかまに白小袖、つまをたつねてほと〳〵と。」かくは、ふる女のむかし聲にうたふ。「[illegible]の侍に色小袖、つまをたつねてたと〳〵と。」とも唄ふ。源常林はその人栖て、紘上字兵衞の堆に植し大銀杏木たてり、力石といふあり。「一行岡の、げんじよはやしのちから石、あげた斗で日がくれた。」「なみ岡の、紘上はやしのいてふの木は、枝は浪岡葉は黒石、花は弘前城とさく。」といふ草刈ぶしあり。又いふ、北畠の三家老を輕井、源常、小和淸水ともいひて、輕井は今いふ王餘魚澤にこそ住つらめと。岡ゝに金光房の古墳とて、あたらしき

碑をたつ。やはら中野に入て行岡に出る。いにしへは行（なみ）岡の文字あり、津浪ありしより書るにや。今浪岡、波岡なとかけり、火を鎮るのためし也。

水木を出て

十四日。水木村にいなんとてひるつかた至りて、二三日こゝに在て、

十七日。水城（みつき）なる郷長館を出たちて、此宿のしりなる路より行に、あるし、とに出て見送れり。德下村、東光寺村なとを經て田の中の小徑を來て河渉り、黑石を左（ひだん）に見なして、行へきかたは弓手にや馬手にやと耕人（たつくり）にとへば、ゆみでをさしてゆかば枝川村に至らんといらへぬ。

茂りあひて木々の枝川かけふかく分こそまよへこなたかなたと。

追子の木といふ、去年雪にふりこめられたる屋形、高樋なといふ處の隣あたりならん、垂レ柳といふ一郷（さと）をさして、あしこに村ぞ見ゆめると人のいふ。

風渡るしたり柳を吹わけて木のまゆむらの見へかくれなる。

田舍館を見やり高木尾上を左に見、荒谷（あらや）町、荒田なと見やり小和森に至る。村かげの木々茂る中を小川の流るならんと、しはしたゝすみて、

むすはねと音きくはかり涼しきやこは森かけを水の行らん。

大光寺村舊柵址

大光寺村のふるき柵のあとを見やりぬ。天正三年正月のころ、瀧本播摩守重行のいくさやふれて、南部にたちしそきてける。その孀（つま）、いまはとてたちわかるともなれ來にし眞木の

日持上人の岩の題目とて、黒石の上近く小峠といふ、むかしは往かひの山中にあり、それに小鳥居のありけるに小石をいたく投上たり。こは照想八をうらひして、いしなごみたゞうち上てのりたるを見て、おもふ思ひの叶ふとて、いづこにも〳〵ありけるもの也。

相澤の舎なる鵜鶏石盲女石盲男石なとゝいふ屋形に近くありそのさま伊勢の國磯邊山あるは三河の國田原山にありしにやゝ似たり

(甲)相澤の舎なる(乙)鵜鶏石は、盲女石盲男石なといふ屋形に近くあり。そのさま伊勢の國磯邊山、あるは三河の國田原山にありしにやゝ似たり。

浪岡中野村のなにがしの
家の棟に陶乃獅子頭
をひとつ置たり そのゆへ
つばらに知れる人さらに
なしたゞあやしの物語
のみつたふ

浪岡中野村のなにがしの家の棟に陶の(甲)獅子頭をひとつ置たり。そのゆへつばらに知れる人さらになし、たゞ、あやしの物語のみつたふ。

遍照山西光寺といひしがありたりしあとに、今(甲)行阿山西光庵を造る。(乙)金光房上人の龕(丙)浪岡村(丁)八幡の神社は(戊)往復のかたはらに在り。源常林の(己)銀杏の古木(庚)唐土山などをしるせり。

五本松とてとし經たるは枯て、こと木を殖ゆ、そこに加茂の神をうつし齋ひし北の御所、南の御所の、遠きむかしの名のみのこれり。

藩主英親を弔ふ

千徳掃部妻の最期

はしらよ我をわするな、といふ歌を館の柱にかいつけてける處も、千町田のなかに木々高くしけりあひたり。いてそのむかしをおもへば、此あたりはもはらいくさのにはにて、大佛か岬（はな）を山口として館々のあるし多くほろび、みかたも忠に死たるもの數しらず。そのなきたままつりをし給はんとて、くにのかみ爲信の仰によて、清水杜埜（しづもりの）といふに三町斗埒をゆはせて、慶長六年辛丑の春三月七日をはしめに、喜三和尙を導師にて、ちゝの僧を集て法の會の行ひありて、たかき賤き、なき人の名ともを紺紙に金泥をもてしるされて、十日斗、あささふらはせ給ふに、女ひとり、みほとけの前に近うひさつきふしをかみ、しはしなみたにかきくれて、ひとまきのふみをおしひらいて、　それ、義に依てかろきものは武士の命、情によて捨やすきは婦人の身なり。吾つま、すてに武名をたゝし、すみやかに戰場の一葉の露と身をなしたまふ。おしいかな、この人世に在しほとは、武士の道いさゝか迷ひ給ふことなし。去によつて、その淺深亦いくはくそや、傳へ聞し、こま、もろこしの勇士にもはちず。いさめるときは、千萬人の中へもわれ先に行むことをかたしとせず、又そのなさけのゆうなる事は、ものゝあはれを、敷嶋ややまとしまねのみちしはの、つゆにやとれる月かけの、はかなき世のありさまを、よくたまひしそかし。われ又そのつまとなりて、その人の坐のかたはらにこの身をおき、とし月を經ることすてに三とせになりぬ。おきふしをともにして、人の情のふ

かき淵に沈みにし身なれども、別れにしその日より、たゝ、うかへるものはなみだのみなり。せめて、なきたまの菩提ともならんかしとおもひ、そのとしより十とせあまり七とせにみちぬるまで、人目かれにし山かげに此身をかくし、朝な夕な、そのなきあとをとふらふといへども、さらにこたふることもなし。

なきたまよあはれとおもへそひねせしみとせの夢のさめもやらぬに。

そのとしのその日にやかてともなひて行しこゝろをしるやしらずや。

おほん身のあだならんとせしものまても、かく、御法の網にもらしたまはらて救ひとらんと誓たまふ御心をは、なきたまにも、いかはかりか、うけ悦びたふとみ奉らんかし。わかしたふ面影は、玉のきはにたなひくなる、紫の雲のほのみゆるこゝちこそすれ。まことにわか君をよすかとして、われも連れ行たまへや。

ともなひてわれもゆかなんまてしはししでの山路のみちしるべせよ。

かゝるつたなき筆のあとは、身のはちをかき殘すに似たれとも、誰にむかひて何ことをいひおかんやうもあらされは、ありがたき御芳情に依て、つまのゆうれいもさそ成佛にいたらんと、いとたうとくありかたきおほんこゝろを、ひなひたるひとまきにのこすのみ。　慶長六年三月十日田舍館掃部妻、積るとし三十四　敬白と、こゝろしづかによみをはり、まきを

さめて、みほとけに手向、みたびいやをがみて、すこし身しろきして、ひのわれのやうなるつるぎを、ふつくろよりとうたして、あかむねにおしあて、二刀まてさし貫てふしたり。したかひ來つる女房うちおとろき、いたきあげて聲をかきりよべとそのかひなう、きのをたへにき。またせたまへ、おほんともに、をくれじとて、すてにかくと見へしかは、人々いろ〳〵となためて、此女の自害をは止めたりけるとなん。此事、しか君の御前にけいし奉れは爲信きい給て、ひんなうしなしたり、似たるをもて友とすと、能こそいひならはせるものなれ。其女の夫の千德掃部は、ならひなき勇士にてありしぞかし。その掃部か妻なれは、貞女の道はあらはしけんとて御袖をぬらさせたまふ。これを見と見、聞ときく人、袖をしほらさるはなかりけるとなん語り傳ふ。尙その夷中館のあたりをかへり見やりて、いまはた袖をぬらしたり。元町といへる村をへて、柏木町といふ里なかに朱の鳥居のたてるにぬさとりて、

花山忠長卿遺芳

槲木の葉もりの神のましませと折らてたゝりの露もかゝらし。

人にとへは、八幡のみやどころと申也。なへてこのあたりに在る村は、柏木、榊、夕顔なとそいふめる、くゑんし物語のまき〳〵の名を呼ことは、花少將忠長卿のつけ給ふともいひ、はた、源氏踊とて盆おとりの唄の唱歌も、かの君の作らせ給ふたるなと人の語れり。かくて吹上といふ村に入ぬ。

乳井、鯖石を經て

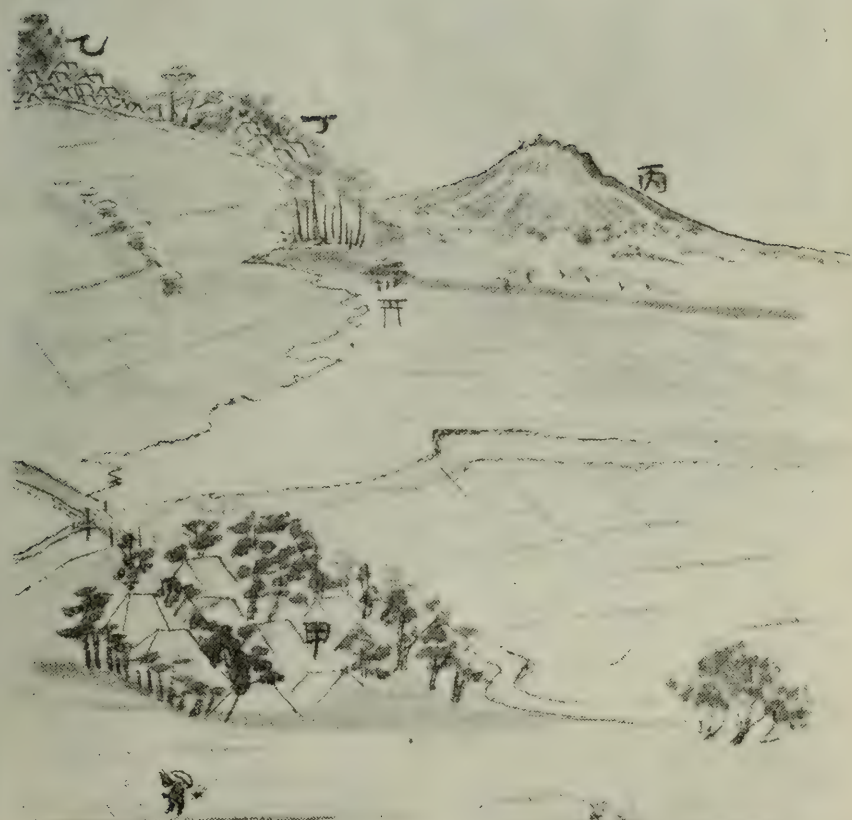
大鰐村の大日如來堂

行袖の涼しかりけりたひ衣すそふきあけの風のまに〳〵。

高畑、枝邑、左に糠塚ありと、むかしは蝦夷の栖家したりし跡にや。路のかたはらに、ふりたる梵形石のそとはあれと、こと文字はさたかにも見へす、誰かしるしにや。藥師堂村、下ダ野町をへて乳井(にほゐ)村に至る。たうとき多門天のおましのあれと、みちいそげば、かへさにとて、やはたさきをへて鯖石の阡、うまやぢに出たり。こは弘前より、いかりがせきぢへ往かひの筋にて、うま人しげし。宿河原(しゆくかはら)相州平塚のあたり虎が石のほとりにも宿河てふ名ありの山のそかひにおほみちあり、はた、つるきがはなとて片淵の高岸を、岩頭(いはつら)をたよりに手をかけ足をそらにふんで、からくして大鰐の村につきて橋うち渡る。袴腰山なと右に見なしたり。このあたりの早乙女は文(あや)にさし繡たる綴てふものに、ひもがねといふものを凡かけたり。倉館近うなりて大日如來にまうてぬ。この堂のはしめをいはゞ、後白河院の御宇ならん、ひんかしのゑみしら、はちのごとに起るをしづめ祈リ給はんかためとて、國にひとつの國分寺を建させたまふの序に、はた、こと寺もところ〳〵に作り、この新岡山高伯寺とて、ひめたるのりを行ふ寺はありきとなん。さりけれと世をへ星かさなりて、しかは寺もあはれ、佛のみかたしろもくちはてしを、又、慶海上人のをさめおけるか此ところにはおましませり。むかし新岡てふ處に在し寺にや。慶安のころ、くにのかみ信義の公ふたゝび建たまひし堂とて、いと大なる木の牛を二ツ、御佛のかた

小田の中路より多連柳など、郷〳〵馬手にみやりたる。

植家の山

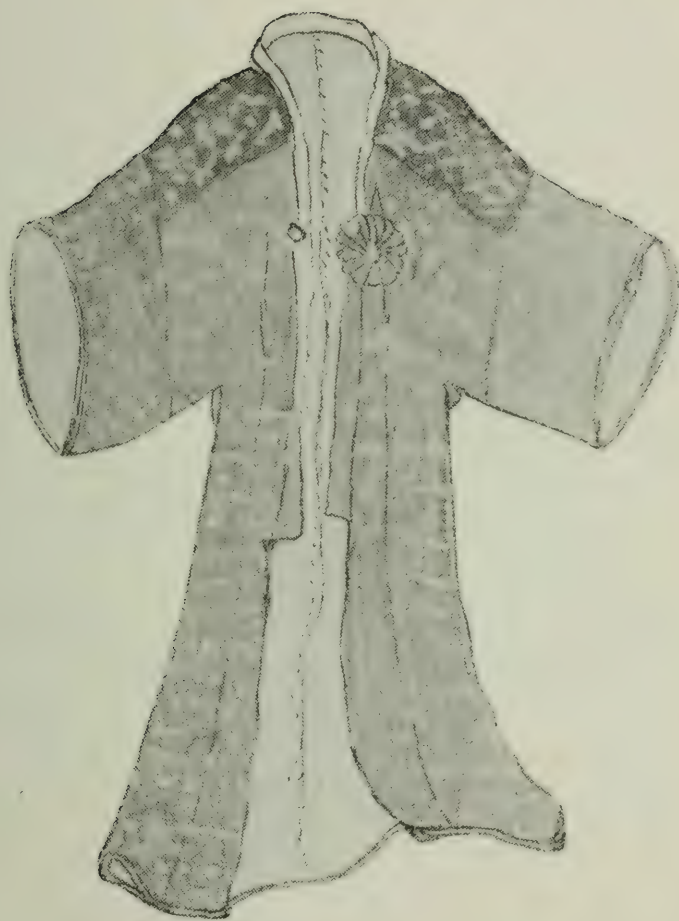
碇森村の坤に大光寺村の
舊柵ありし岩木山乃弓手に
松館となんいへる元町、
殿嵜あとむかしの跡乃
名乃ミ残れり

（甲）强森村の坤に（乙）大光寺村の舊柵あり、（丙）岩木山の弓手に（丁）松舘といふ見へ（戊）元町（己）殿崎など、むかしの跡の名のみ殘れり。

都々連ちふものは津苅女のもはら、男も着けり。比母賀繭さすは田舍館のほとりに多し、紐金の大さ、亘（みき）り三寸より四寸斗に假鍮（しんちゆう）をもて作れり。

萩桂の大樹

倉館の溫泉

鞍男の遺跡

御初川

はらにふさしむ。御堂をおほふ、としふる杉と槻とにたちましりて柱の多かるなかに、河きしに、萩桂とて舊りたる一もとたてり。尙めつらしけれはこれをあふき見るに、ちよふる大槻と根は生ひ雜(まさ)りてあれは、これを槻桂ともいふとか。うべも、世にことなれる木にこそ。

生ひしけるつき(槻)のかつら(桂)のかけふかく秋は木の間ゆ見るにさはらん。

此かつら木のこぬれごとに、萩の花の、いにしへはひしくと咲て、その花のうつろふころは、行かふ人の笠、たもと、ひきとひきかふ駒の荷鞍にも散り積りて、遠近の里まで匂ひこほれかたみち渡し名高き梢も、風のつよかりしもゝとせのさきつとしに吹折られ、もとつ木のみ殘たるをと、里の湯守の、むかし物語にせり。いてとて、くらたての湯泉(いでゆ)に到る。このさころこそ、遠き養老四年正月廿三日とか、渡島津輕津司從七位上諸君鞍男等六人を靺鞨國に遣して、その風俗を見さしめ給ふなと、續日本紀にものせられたれ。その鞍男のふるあとにやあらんか。小川渡りて、大鰐の湯の河原とて出湯のもとに來る。湯は大湯、山岸の湯、冷の湯、眞冷(まひえ)の湯、おがり屋の湯、賀加助の湯、河原の湯とて七ツのゆげたあり。この河原のいてゆのほとりに、苗のいと高うふし立る小田あり。これをおはつ田とて、ことしろよりいとはやうたねまき、とく植て、むろのはやはせにをさらす、水無月のもちはかりには刈をさめて、よねとし、公に奉るとそいへるを聞つゝ、

不二のねの雪のしら米とく〳〵とそのみな月のもちにかるらし。

湯守かもとにとふらひて、旅人に宿かしてといへば、浴してける人にや。いな、三ッ目内の山奥なる、石の塔見に行くらしたるものといへば、一夜斗はとてゆるしぬ。

十八日。夜經よりの雨けふもいやふれは、つゆのひるまのあまはれにとて、袴腰山のこなたよりわけ入て、やはたのかみ社あり。ぬさとらまくたゝすめは小雨ふりぬ。

ぬきかけしこや誰かはかまこし雨にぬれてみとりの木々そ色こき。

虹貝村

山ふかう行て虹貝てふ村あり、みちは片岸高く淵にのぞむ。そのむかし、大なる辛螺貝のこゝにすみつれば、しかいふべきを、かく、にじかひと、ところの癖辭とて、ひた濁りにいへり。虹貝新田といふを雨にぬれてやゝ過(すぐ)れば、袖が澤、足柔の澤なといふ名聞へたり。

旅衣せはきそでがさわれきても雨のあしなのかゝるものうさ。

田植、養蠶

蟾石(ひきいし)といふか山際にたち、雌雄の蛇石とて、河へた、あるは水岬(みくき)のなかにふせり。上ミ新ン田ンといふ山里にあまやとりして出れは、雨のいよゝふりまさり、みちさへいまだ遠ければ、阿遮羅山の西の麓なる早瀬野といふところに宿かる。外(と)は田植るとて、いつこも男女、五月雨の露のいとなう、そほちぬれて門田に唄ひ苗植わたし、老たる刀自は、かひやに蛾かふとて、おほまゆの桑棚(くわだな)を手業にして桑の葉おしきさみ、うちかけて、これはふな、にはとてあるが

（甲）大和仁邑より小橋渉りて（乙）湯の川原に至る、なべて大鰐の温泉といへり。此湯の河原の土毛とて豆嫩生（まめもやし）といふものを四時いだす。軒のめぐりに穴藏のことく坑を掘り、室として是を作る。さりければ温湯（いでゆ）のあたゝかさにて、水無月の早田も苅けるにや。（丙）袴腰山、その形をなし（丁）舊館は柵の跡にして譽田の御神を齋ふ祠あり。

大鰐の郷の浴舎その温泉山の
薬師御神木の早田
阿遮羅山 倉楠の郷
温湯浴舎
大日如来

（甲）萩桂は花桂にして木芽子(こはぎ)のたゞひなりもとも深山にまれ〳〵に在り。其木のもとに、ひとつに槻の生ひ雜り、今は（乙）槻桂の名も聞へたり。（丙）大鰐の郷の（丁）浴舍、その溫泉山(ゆやま)の（戊）藥師、御初米の（己）早田、（庚）阿遮羅山、倉楯の郷（辛）溫湯浴舍、大日如來の堂（壬）並坊舍、（癸）はかまごし山、ふるたてなどのあらましをのす。

早瀬野の山奥に入て窟の澤といふ母谷のうちに、蝦夷が澤、乎路呂の澤といふあり。溪川流たり（甲）宇佐川といふ。此水を引入て田佃てん料に、かねほりの來て、岸の（乙）大巖を切うがちて、その普丁々と伐木の響ならで、山河とよみ開へたり。

のゝこきぬ
のゝもつぺ

窟の澤

ひかりまぶ
遠望

なかに、かねごとりわく。死たるをかねごといふ、紀の熊野詞もしからんか。

十九日。雨はれたれは、いさ出なんといへは、あるし、山路は露のいとふかき木立のなかを、そのいでたちにてはおぼつかなし、みなこれ着てまかなひたちねとて、のゝこきぬとて、いはゆるあをめけるものに、のゝもつぺといふものをかりはきて、あなひをさきによってひたちづるに、ほとゝぎすのなけば、

いづこともかたこそわかね時鳥たきるはやせの音にまきれて。

右に蝦夷か澤、平路呂(をろろ)の澤あり、なへて窟(いはや)の澤といふに分入は宇佐川とて流たり。この水を田の面にひき入んとて、大石に、方なる坑(あな)を切うがちてける石の工かすめるかりやかた、路の側にあり。流いとおかしきに、ひとつ橋をかけらゐて人渉せり。弓手に、鷄居のあるみちよりさして入ぬ。めてなる山路は、あいたちに近きとか。ところ／＼に鳥居ありて、みちふみ迷ふかたこそあらね、草たかうおほひふたぎて、わけわづらひぬ。夏越へとて大杉の多く群立るかたよりのそめは、やま／＼そひへて、遠う比加利萬婦(ひかりまぶ)といふ山なん見ゆ。むかしそこにて黄金(こがね)津刈の奥山に金臼てふものいと多し、人にとへば、誰がいつの世の物といふ事をしらじと。おもふに、かのくたらの敬福か天平のむかし掘てたてまつりしころ、ところ／＼の山にこかねの出て、なへて、みちのく山といふこそ、らへならめ多く掘りたりしよし。うべならん、金臼てふものゝ、ところ／＼の川瀬、あるは山みちにまろばし捨たり。やはら、そのところ近う鳥の聲かすかに聞へて、長床石といふ

二本椙の峠

をよちて、さばかり高き杉のむら立たるうれを越へて、大石のいたゝきそ見へたる。御石といひ、うぶすなといふ。此石の高さ十丈斗もや高からん、めくりも凡しからん。石のすかたは、掌をつと立たらむやうにて、ふりあふげば雲のおこるかと見まかふ。飽田路よりは、こゝをさして二本椙の峠なとぞいふめる。石のもとにさゝやかの堂ありて、藥師ぶちをまつれり。

さゝれ石の八千世を杉のうれ越てそれといわほのすかた高けん。

おしら神

かくてはる〳〵と分出て、申斗ならん早瀨野村に來て、かりつる衣返し休らひ、今しはしとて出て喜助なとを經て、腹切石も見過て、ひき石のくさむらより坂を弓手にはる〳〵とのほれば、さゝやかのいわやどのうちに、おしらかみを祭りたる。比咩斯良といふにや。このあたりの移託巫女の、ものいのりしてける神にこそましませ。遠方に、嶋田邑のをばさつふり

鯖石に出つ

山、北山なとのことくに見やられたり。坂おりはてゝ六把川を渡り白河を涉て、鯖石のうまやにくれば日はくれたり。その石にしりうたげして、

あな涼し宿しあらすはこゝにさはいしの床にも一夜ねなまし。

かくて此あき人のもとにやとつく。

數子塚

二十日。晴たる旦ひらけにやとをたちて、めてに數子塚といふを近う見やる。かとの子を、

岩木山遠望

乳井村多門天王堂

さしのくれに此つかにそなふ、あるは元三日ともいふ。さるためしも、今はたへ〳〵になり行しとなん、いかなるゆへにや。八幡埼、蝦夷楯など見さく。田つらの路をつたひて乳井村につく。岩木山を木のあはひ〳〵に、うみ出る雲のたゝずまひ、なへてならず。たとへてもいはゝ、珠流川の國吉原などのうまやちのあたりより、うち見たらん不二の面影に、つゆことならす。この頃植渡したる千町の苗の、青〳〵と涼し。殘なう一日にしるく、高きにのほりて、

　見る人もふじにたくへていはき山うつして田子のうらめつらしく。

やはら多門天王の堂にまうてぬ。此堂は、むかし阪上田村麿の建給ふとも、承暦の帝の、蝦夷しづめ給はんの御祈に建させ給ふたるとも聞へたり。さはかり大なりしいらかとものゝ、なごりなう、康永二年四月十八日に火のかゝりてうせたる灰をかいあつめて、天狗牛といふ處に、堆をつき塔婆をたてて毗沙門壟といふ。承應三年に、くにのかみ信義の公今の堂は建給ふとなん。洪鐘は正德九年に、三萬六千五百六十九人か孔方のちからもて、くにのかみ重信の鑄させたまふとなん。嘉承山福王寺（毘沙門堂に福王寺とありし。山の號を嘉承としのなのありけるは、堀河院の御代に建し寺にてや）と、こかねの色にかいなしたる堂の額あり。天狗臺にのほりてつちを堀れは、雷斧石、あるは鏑石てふものを拾ふ。鈴石は、委波通保のたくひにしてちいさく、から、至てうすくして、やふれやす

し。村のはしに乳井とて泉あり。此水の、日にふたたび三たび、色の眞白に涌かふる事のあり。そのころは水もうちあふれて、味もいと甜し。乳の病ある女、はた乳汁とほしき女は、こゝろにいのりいやまひて此井の水をむすび飲ぬれば、誰もしるし得さるはなしと、釣瓶提なから女の物語る。

乳井湧く

里の子をはくゝむいろの神やすむいつる乳の井のふかきめくみは。

下の町、薬師堂村に、をたきの神籬ある下つかたに、いにし日見しふるき碑のあたりは、ふる寺のあとにして、その碑も乳井大隅守の塚しるしとぞいへる。枝邑にやくしふちあれは、村の亦の名にしかよぶとか。やはら高畑の村に來て沖館の村に入る、別府太郎左衞門の館の跡沖立邑の名は卒堵か濱のほとりにも聞へたりあり。外堀、馬出なとむかしのまゝに見やり、水も流たり。大なる槻のつかはらに一もと生るその木の根に、なからいはらみ埋れたる寛永のいしふみあり、はた、ことふる碑も多し。この槻のもとなるは、龍田太左衞門とて世にすぐれし男の力士のありて、わかおやのはかしるしに、吾力のほとを末の世まても見すへしとて、山よりおひ來る墓石と人のかたる。新館をへて松江といふ村の、田の中によこほる小山を三たけとよべり。松山の中に堂あり、此堂の内に、雷杵の、ふたさかにあまるを立て、觀世音とあかめまつるもあやし。此弓手の澤に、石腦油のわきつる井のふたつまてありけり、この臭水に火をはなて

古碑多し

石腦油湧く

齒森、箸森、劍森

黑石に著く

ば、たちまちに雨なんふりくとそいふめる。こゝにあぶらの泉ありとは、藏王權現の、夢のみさかにしらせ給ふたるといふ物語するをおもへは、みたけてふ山は、かねのみたけをこゝにうつしたらんとこゝろとは、まさにしられたり。又とへば、松山をさして御嶽家戸（みたけど）、かの、みじか山をみたけとは申といへり。平田森といふ村の田の中に、はもり、はしもり、つるぎもりといへる塚なん三ところにありけり。箸杜（はしもり）、村はしの小田のかたはらに、そのかたばかりあり、そのゆへをしらじと。むかし鬼ありてけるをうちたひらげ、その鬼のかうべをくだき齒をかいおとして、それを埋み塚して、今齒盛りといふと。鬼きりたる太刀は、箭にこめて齒杜（もり）の邊に在り、あしことをしへたるに、田のあせつたひして齒森にいたる。雨いのるに、此つかかいあはき、かの鬼の齒てふものを堀あらはせば、かならず雨ふる。このごろあめのほしさに、あはきたるをさいふ。うち見れば牛の齒にことならずして、いさゝかたがふようにおもはれたり。世にいふ龍の齒なとにてもやあらんか、いくらともなう堀あはきたり。荒田村になりて田の中を行とて、

殖のこす方もあら田のあせつたひ涼しくなびく露のたま苗。

尾の上やかたに出て、くら／＼になりて黑石につく。

（甲）雌（乙）雄の蛇石は、みちのべの澤水になからはかくろひ、なからはあらはれてあり。その姿は大湖石にやゝ似たり。

劔崎岬ハ七宿河原の
とふ所に在り水に臨て
きりしま岩群をなし
とたどる善衛前の
樹の高岸を渉るに適
へたり其のあやうさに
疋かゝり北山下鞍館
戊鯖石の蛭貝ぶくらの屋形
しあら八幡稜勝山は
たなびく八幡の社ある所
あしをもちし

(甲)劔箇岬(つるぎがはな)は(乙)宿河原のこなたに在り。水に臨てさかしき岩群をはる〴〵とたどる事、善衞前の棧の高岸を渉るに逾へたり、そのあやうさ、いふへからじ。(丙)北山(丁)鞍館(戊)鯖石(己)虹貝などの屋形〳〵、あるは(庚)袴腰山、ふるたての(辛)八幡の社あるあらましをしるしぬ。

(以下次頁の分-編者)

弘前より碇か關への往復の(甲)道しかり。南に(乙)小金崎(丙)守山などの村あり、鯖石村より入るの(丁)小徑あり。三ツ目内といふ處より入土内(いつちない)、起野新田(こうやしんでん)を經て(戊)戸潟といふ湖水のもとに至る。戸潟の名黒石の奥山にも聞へたり。こはもと、十和田をよこたはりいひて南藏法師の亡靈をうつし齊るは、みちのおく毛布の郡奥湍山に在る、十曲の潟をはしめなるべし。阡の(己)茶亭は鯖石村にたゞふ。又(庚)鯖石は青色にして其魚の形せり、今は三本柳などいふ名聞へたり。むかし蝦夷の住たりしあたりとて堆あり、(辛)鯨子塚といふ、正月の始めごとに近き村の人、かずの子を手桝、注連曳よしをいひ傳ふ。

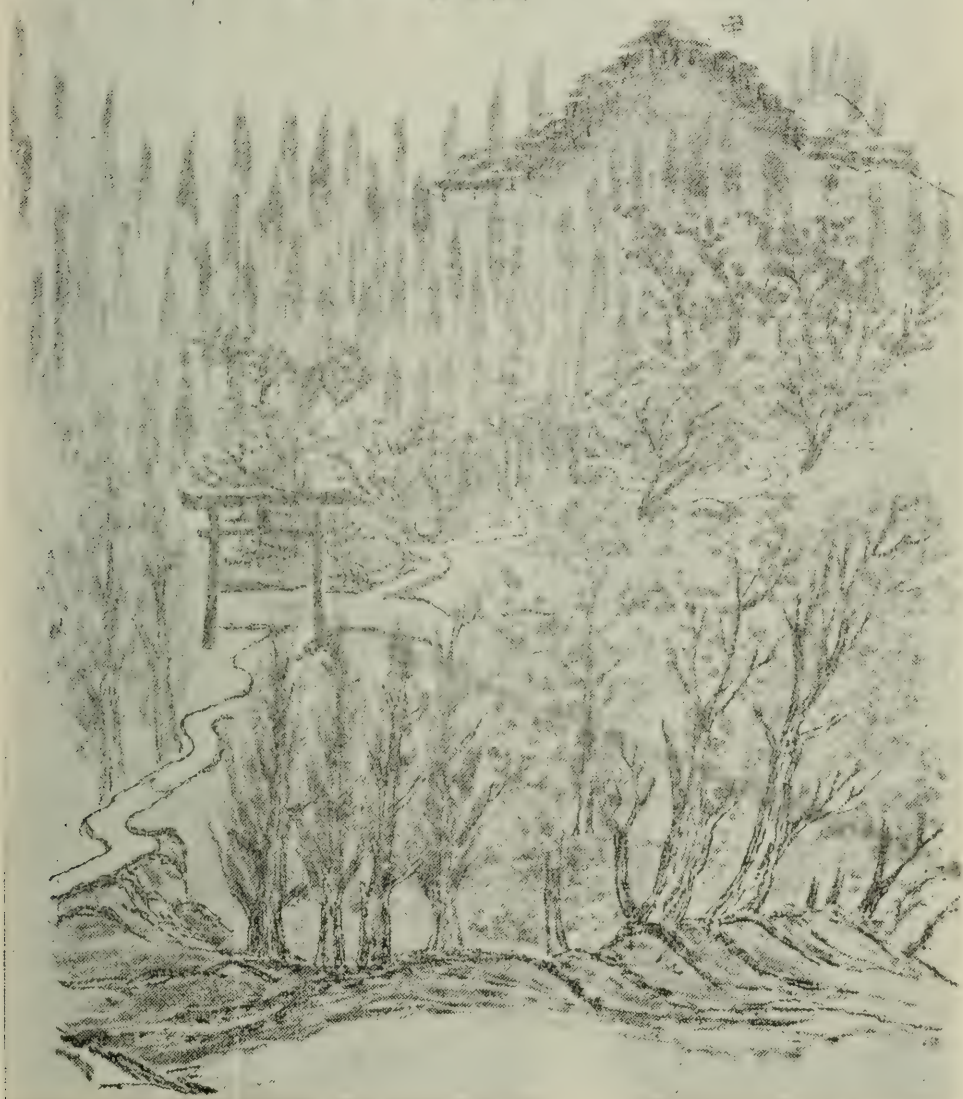
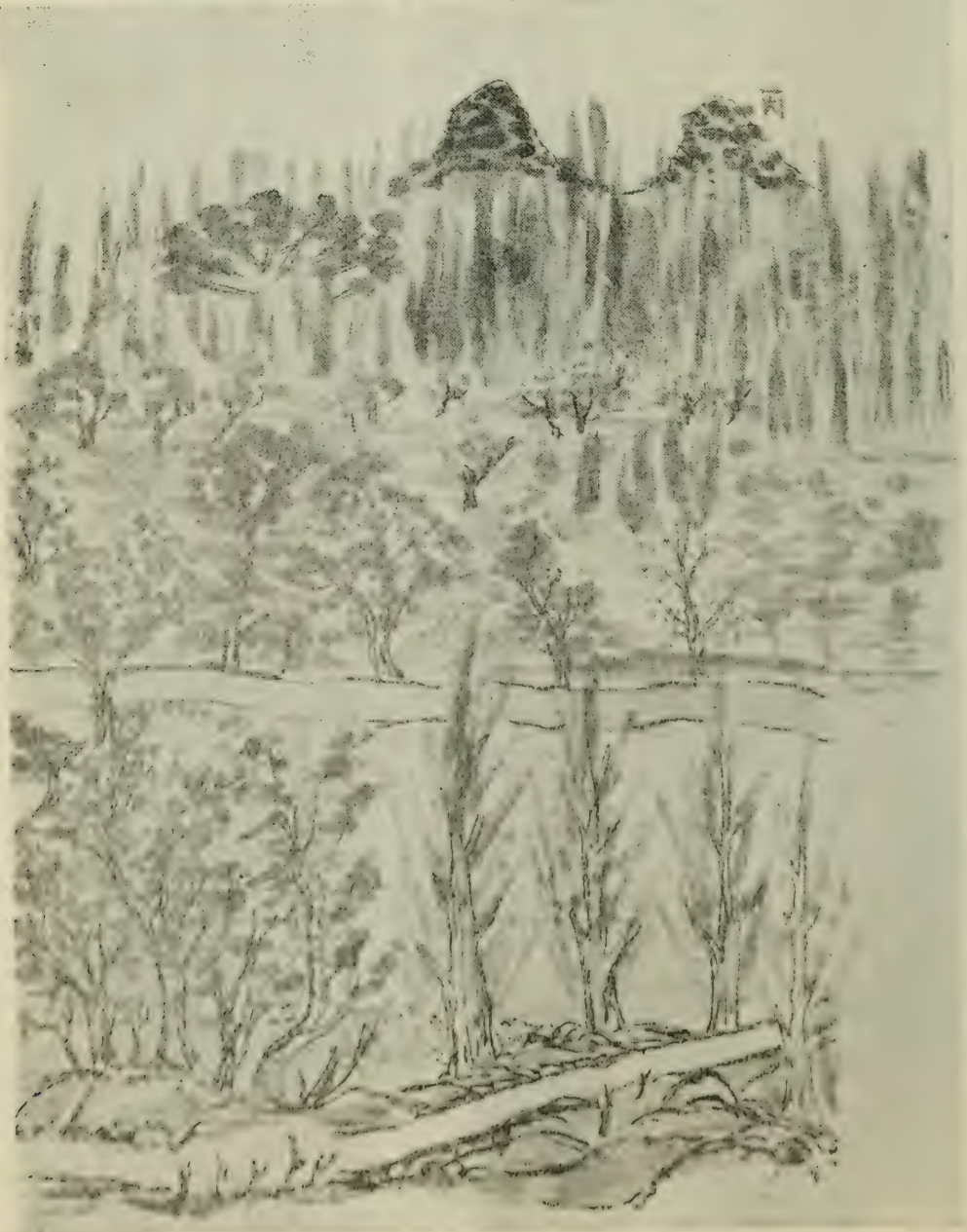
（甲）大鰐組早瀬野村、組とは莊をいふことろ也。（乙）嶋田山のをはさつぶり（丙）おなし山の高根を雲披平（しやうぶたい）といふ。（丁）嶋田峠（戊）をろろの澤（己）兎河、今うさ川といふ。（庚）材木（みやぎ）守りがさもらひの舎（やかた）（辛）あばら山といふ人もあり、まほは阿遮羅山にして、むかし、いかめしき不動明王の堂ありたりしを、なかむかし子懸寺にうつせりともいふ。

甲寒泉の澗

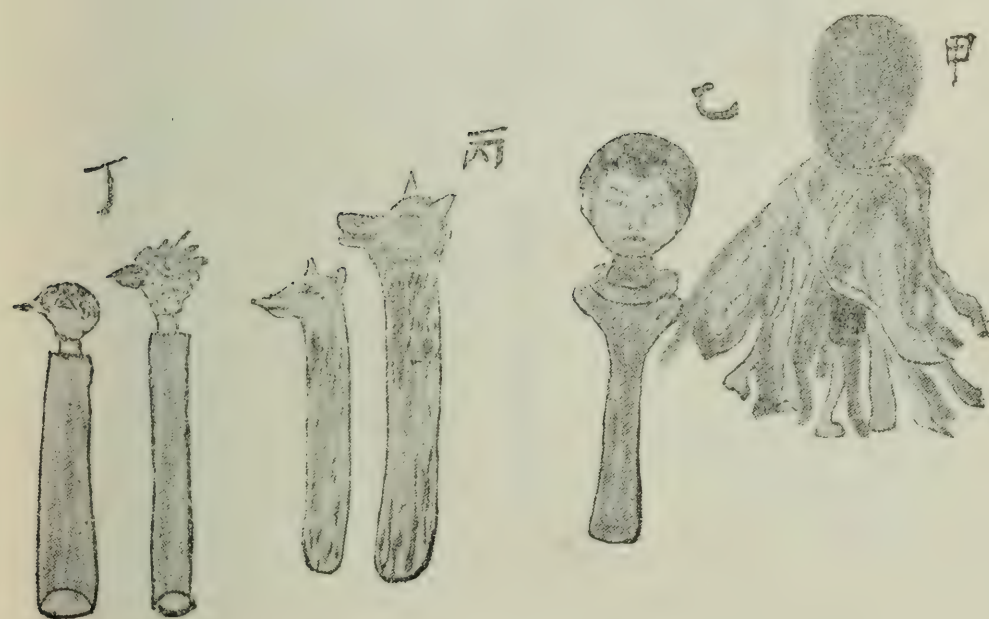
乙晨越乃澤

丙光眼蓋

真部とハ昔むかしよ
り此沢をいふなり
大雪の積りて嶺など
より落かゝる時を二ブ
といふその二ブの如く
天真石タクぐ銑くとて
講太とておくらの黄
金を掘しとありある
山の谷にしく谷な
道奥山といふ処
夏は山の路は遠
まとめ真木の叢
山深く杉檜のみ
ひしーとたゞずめり

（甲）寒泉（ひやみづ）の澗（さわ）（乙）夏越への澤（丙）光眼蓋（ひかりまぶ）

眞部とは、まことによげなるをいふなり。大雪の積りて、嶺なとより落かゝるをマブといふ。そのマブの如く天眞石多く銑くして、許太とてこゝらの黄金を堀しよりおへる山の名にして、うべも道奥山といへり。此夏越の山路はまことに眞木の荒山にて、杉檜のみひし〳〵とたてり。

（甲）刀利爲秀吉とは杉の形神門に似たるにあらず、舊き群杉のもとに雞栖のあるよりいふ。（乙）長床石のこなたに在り、こゝよりはしめて石の塔のいたゝきぞみゆる。（以下次頁の分―編者）石の塔を俚人御石といひ生砂といふ。石の高十丈斗、周圍十五丈餘、石の面巽にむかふ。小祠あり、藥師佛を齋ふ、山祇の神を祭るともいへり。出羽の國鬮田の人は、此石あるのあたりをさして二本榾の峠ともはらいへり。

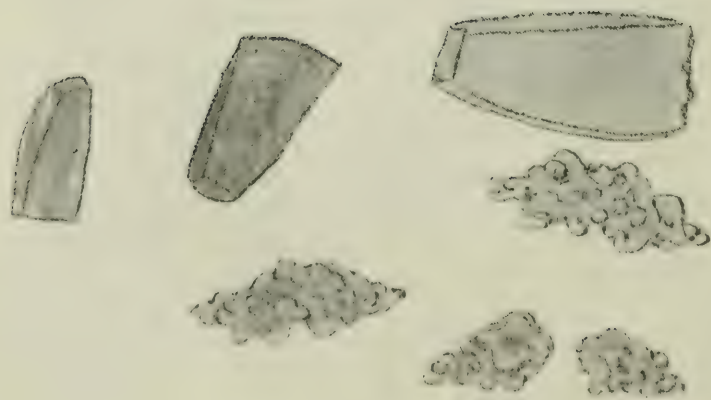
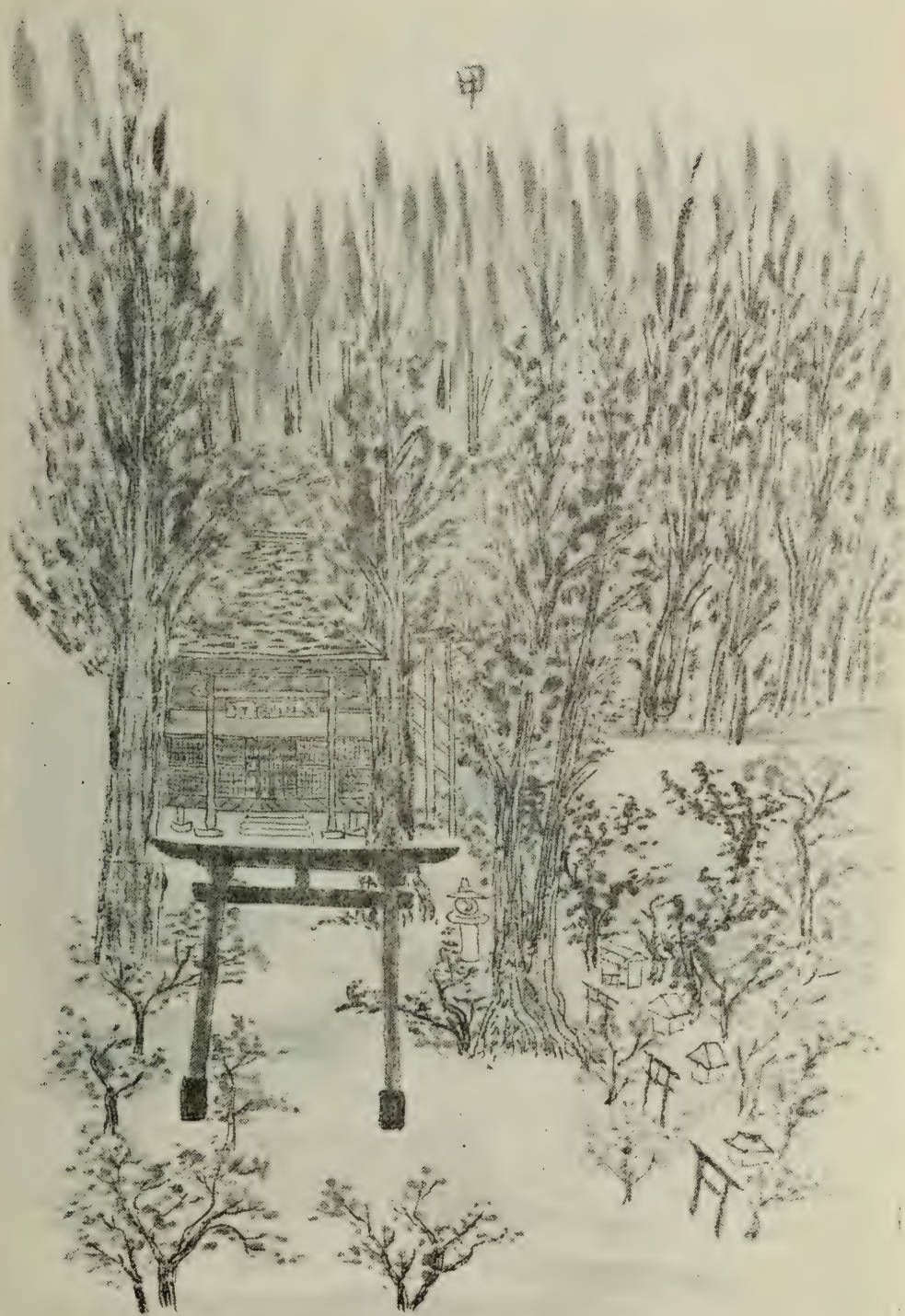
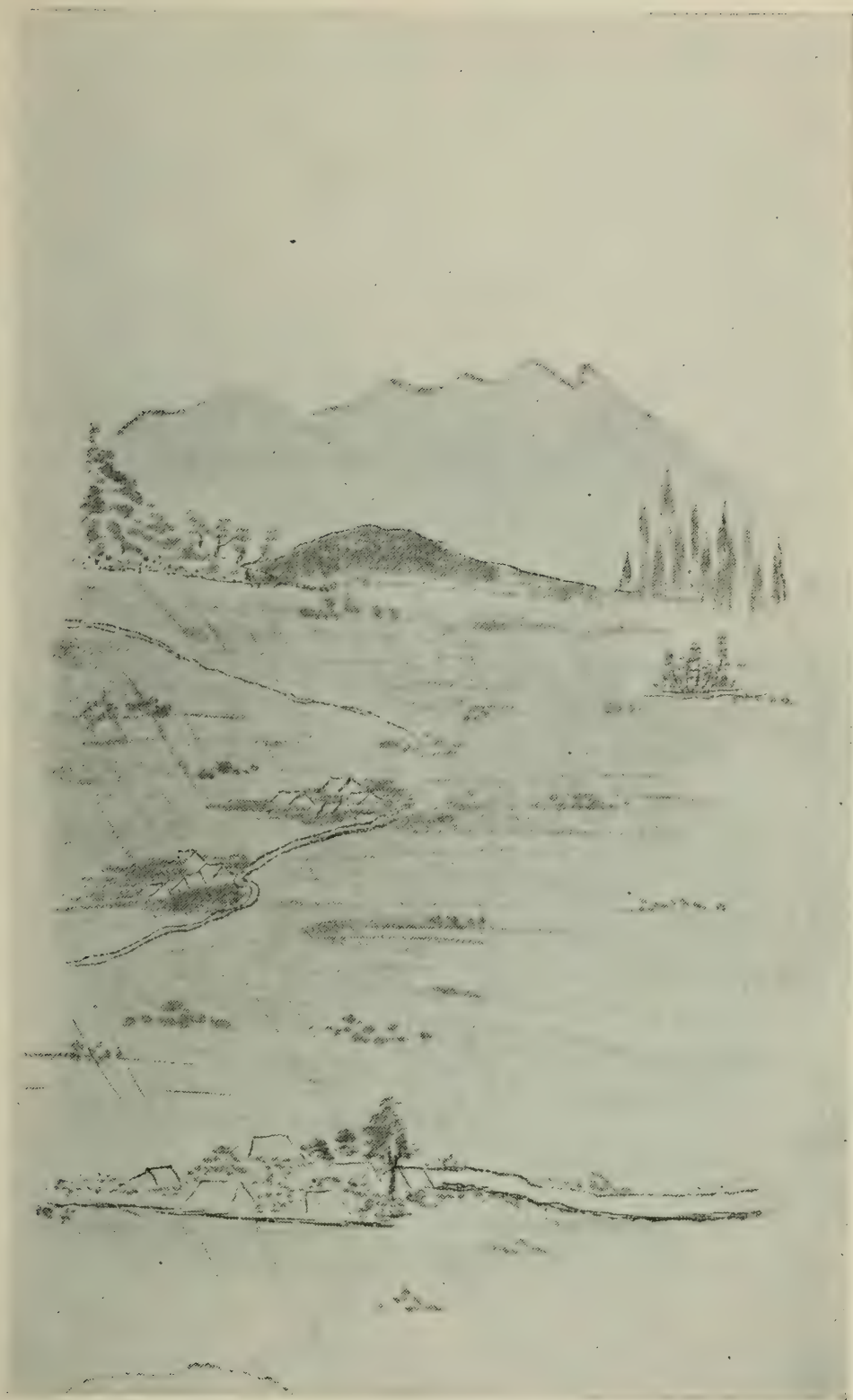
（甲）蟾石のほとりより御窟にのぼる内に（乙）御白神を齋ふ。

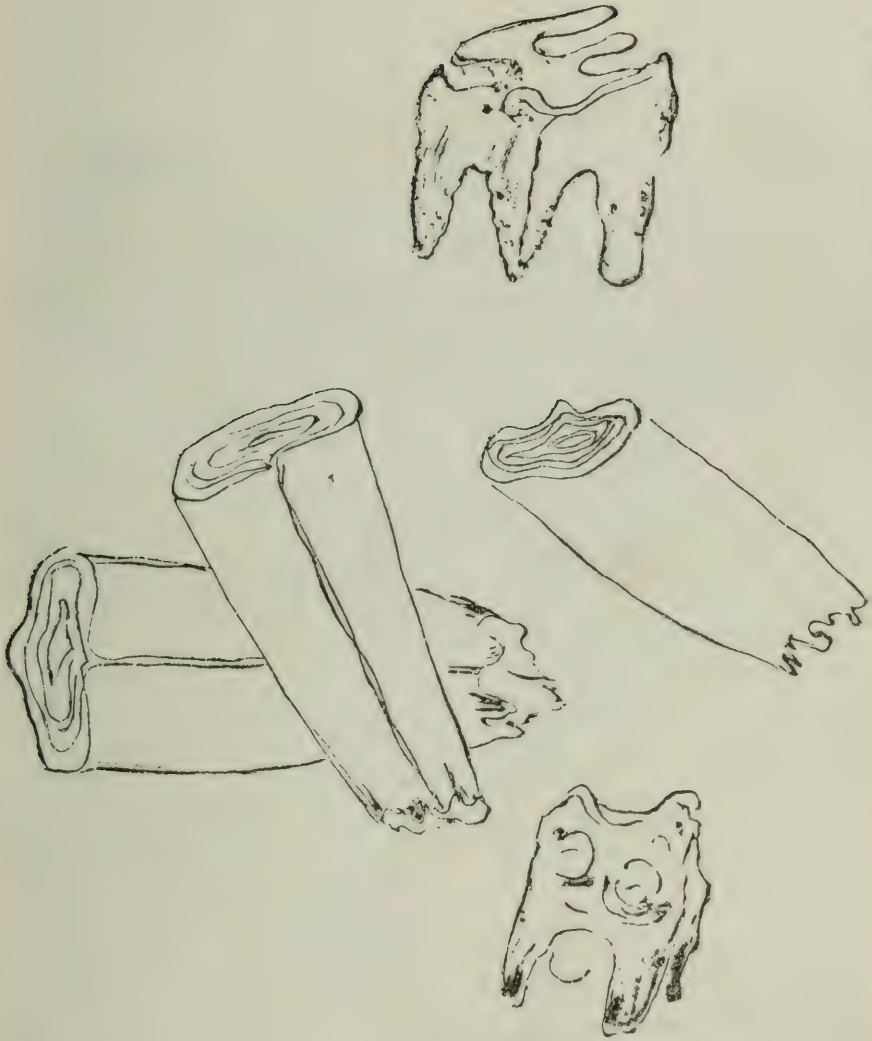
（甲）淤志羅加美のはしめはしらず、天勝やうのものにたぐふにや、そのすがたのやゝ似たり。（乙）比咩斯良（丙）馬斯良（丁）鳥斯良の品あり。谷をへだてゝ生ひむかふ桑の木を伐りて陰陽（めを）ふたはしらを作り、綿もて包み帛にてくゝり、きぬきれ附てひめかくして、物のけなといのり、蠶の神といやまふは桑もて造るがゆへにや。春はやよひ十六日、移託巫とて盲のかんなき、左右の手に握（も）て膝の上にうちおとらし、のりとごとをとなへ、世のなかのなりはひのよしあしをいふ。これを、おしらを保呂久といひ、おしらあそびともいへり。白神といふ山あり、浦あり、處〳〵に此名聞へたり。湯羅乃前鹽朝爾祁良志白神之礒浦箕乎敢而搒動（こきとよむ）といふ歌も聞へたり。

うす雲のまきに明石の歌　末遠き嫩の松にひきわかれはつか木たかきかげを見るべき。えもやらず、いみしうなけば、さりや、あなくるしとおほして源氏　おもひそめしねも深ければ武隈の松に小松の千代をならへん。のどかに、をとなぐさめ給さりけるめのと、少将とて、あてはかなる人はかり御はかし、あまかつやうのものとりて、のる人たまひによろしき、わが人、わらはなどのせて御送りに参らすとぞありける。

仙原抄、尼兒はほうこのやうなるもの也。諸事凶事を是におほするなり、三歳まで用る也。西須が說、三歲になるを御幸の時に車にのせらるゝを、あまかつといふ。又一說に人形也、三歳まで身に添て持もの也といふ。

右　湖月抄

天狗臺の鈴石は、まはにの色にして内のむなしらして、打ふれば、さゝやかにころ〳〵と音せり。凡、太乙餘糧のたぐひにしてちいさく、生駒山、あるは金峯山に出るのたぐひにおなしからさるものか。

雷斧石は世にもてあそぶものにことならし、その色ことにしてつやゝかにてれり。

嘉祥山福王寺は鞍馬寺をうつし、天狗臺は僧正か谷になすらふにや。堂の前より出て村中に往復する小徑あり。毘沙門の杜至て高くして、四方の見やりいとよし。

栖家の山

栖家の山

昭和八年八月二十五日印刷
昭和八年八月三十一日發行

秋田叢書別集　菅江眞澄集第六

不許複製（非賣品）

編纂兼發行人　秋田叢書刊行會
代表者　深澤多市

印刷者　濱野英太郎
東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷所　東京印刷株式會社麴町出張所
東京市麴町區紀尾井町三番地

深澤

發行所　秋田縣横手町
秋田叢書刊行會
代表者　深澤多市
振替仙臺八二五二番